

JP1 Version 9

JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド
(Windows(R) 用)

解説・手引書

3020-3-S79-80

■対象製品

P-2642-1194 JP1/NETM/DM Manager 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP Professional, Windows 2000) *

P-2642-1394 JP1/NETM/DM Client 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98) *

P-2642-2394 JP1/NETM/DM Client - Base 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98) *

P-F2642-23941 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98) *

P-F2642-23942 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98) *

P-F2642-23943 JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature 09-51 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98) *

P-2A42-1194 JP1/NETM/DM Manager 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-2C42-1394 JP1/NETM/DM Client 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-2C42-2394 JP1/NETM/DM Client - Base 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-F2C42-23941 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-F2C42-23942 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-F2C42-23943 JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature 09-51 (適用 OS : Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista) *

P-1B42-2J71 JP1/NETM/DM NNM 連携機能 07-00 (適用 OS : HP-UX)

P-2642-1C74 JP1/NETM/DM Internet Gateway 07-00 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP Professional, Windows 2000, Windows NT Server 4.0)

P-2642-1D74 JP1/NETM/DM HTTP Gateway 07-00 (適用 OS : Windows Server 2003, Windows XP, Windows 2000, Windows NT 4.0, Windows Me, Windows 98)

P-2842-1384 JP1/NETM/DM Client 08-00 (適用 OS : Windows Server 2003 (IPF))

P-9T42-1371 JP1/NETM/DM Client 07-00 (適用 OS : Windows CE .NET 4.1)

*印の製品は、ISO9001 および TickIT の認証を受けた品質マネジメントシステムで開発されました。

■輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

■商標類

Acrobat は、Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の商標です。

Active Directory は、米国 Microsoft Corporation の、米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated(アドビシステムズ社)の米国ならびに他の国における商標または登録商標です。

AIX は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

AMD は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

AMD Opteron は、Advanced Micro Devices, Inc. の商標です。

AntiVir は、米国における Avira GmbH の登録商標です。

BitLocker は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Bluetooth は、Bluetooth SIG, Inc. の登録商標です。

Citrix XenApp は、Citrix Systems, Inc. の米国およびその他の国における商標です。

Compaq は、米国 Compaq Computer Corporation の商標です。

ESET, NOD32 は、ESET, LLC ならびに ESET, spol. s.r.o. の登録商標です。

F-Secure は、F-Secure Corporation の登録商標です。

Firewall-1 は、Check Point Software Technologies Ltd. およびその関連会社の商標または登録商標です。

Gauntlet は、米国法人 Network Associates, Inc. またはその関係会社の米国またはその他の国における登録商標です。

HP-UX は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. のオペレーティングシステムの名称です。

HP Tru64 UNIX は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. の商標です。

Intel Xeon は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

IRIX は、Silicon Graphics, Inc. の登録商標です。

Itanium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Kaspersky は、米国における Kaspersky Lab の登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

McAfee, VirusScan, NetShield は、米国法人 McAfee, Inc. またはその関係会社の米国またはその他の国における登録商標です。

Microsoft, Forefront は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Hyper-V は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Outlook は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft .NET は、お客様、情報、システムおよびデバイスを繋ぐソフトウェアです。

Microsoft Access は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および Excel は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Internet Information Server は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft Internet Information Services は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

Microsoft Office は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft および SQL Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft Word は、米国 Microsoft Corporation の商品名称です。

MMX は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

MS-DOS は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

NetWare は、米国 Novell, Inc. の登録商標です。

NEWS-OS は、ソニー（株）の商品名称です。

Norton AntiVirus は、Symantec Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

OfficeScan and PC-Cillin are trademark of Trend Micro Incorporated.

Oracle と Java は、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

OS/2 は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

PA-RISC は、Hewlett-Packard Development Company, L.P. の商標です。

PC-98 は、日本電気（株）の商品名称です。

Pentium は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

PowerPC は、米国およびその他の国における International Business Machines Corporation の商標です。

PowerPoint は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

SCO は、The Santa Cruz Operation, Inc. がライセンスする米国ならびに他の国における登録商標です。

ServerProtect は、米国におけるトレンドマイクロ株式会社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標がついた製品は、米国 Sun Microsystems, Inc. が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Symantec, Symantec AntiVirus は、Symantec Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

Visio は、米国およびその他の国における米国 Microsoft Corporation の登録商標です。

Visual Basic は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Visual C++ は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Visual Test は、米国 Rational Software Corporation の商品名称です。

Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows Media は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Windows NT は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
インテル、Intel、および Intel Core は、アメリカ合衆国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。
ウイルスバスターは、トレンドマイクロ株式会社の登録商標です。
秘文は、株式会社日立ソリューションズの登録商標です。
その他記載の会社名、製品名は、それぞれの会社の商標もしくは登録商標です。

■マイクロソフト製品のスクリーンショットの使用について

Microsoft Corporation のガイドラインに従って画面写真を使用しています。

■発行

2013 年 2 月 3020-3-S79-80

■著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2009, 2013, Hitachi, Ltd.

Copyright, patent, trademark, and other intellectual property rights related to the "TMEng.dll" file are owned exclusively by Trend Micro Incorporated.

変更内容

変更内容（3020-3-S79-80，3020-3-S80-80，3020-3-S81-80，3020-3-S82-80） JP1/NETM/DM 09-51

追加・変更内容	変更箇所
適用 OS に Windows 8 および Windows Server 2012 を追加した。	導入 ：はじめに，1.3.6， 2.2.1， 2.2.2， 2.5.2， 2.5.3， 2.5.4， 2.5.5， 2.5.6， 2.5.8， 2.7.1， 2.7.2， 2.7.6， 2.13.3， 2.13.7， 2.14.5， 5.1.5， 6.6.1， 付録 A.2， 付録 C.23， 付録 C.61， 付録 C.62， 付録 F 構築 ：はじめに， 1.1.1， 1.1.2， 2.1.4， 2.1.6， 2.1.25， 3.1.4， 3.1.16， 3.2.4， 4.6， 5.4， 6.3， 7.4.1， 7.4.5， 7.5.1， 9.5.2， 10.6.2， 10.10， 10.11， 11.1.1， 11.1.2， 付録 B， 付録 H 運用 1 ：はじめに， 2.2.3， 2.2.5， 2.2.9， 2.2.10， 3.1.2， 3.2.2， 6.2.6， 6.2.10， 6.5.3， 6.6.4， 11.1.2， 11.7， 付録 F 運用 2 ：はじめに， 1.1.1， 4.26.20， 4.28， 6.7.4， 6.7.7， 7.2.1， 付録 A， 付録 A.1， 付 録 A.2， 付録 A.3， 付録 A.4， 付録 A.5， 付録 A.6， 付録 E.1， 付録 E.2， 付録 E.3， 付録 E.4， 付録 I
リレーショナルデータベースのプログラムに， Microsoft SQL Server 2012 を使用できるようにした。	導入 ：2.6.5， 5.2.8， 5.4.2 構築 ：7.1.1， 7.3.2， 7.5.4， 7.6， 11.1.1， 11.1.2， 付録 A.2， 付録 F 運用 2 ：6.3.2
ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。	導入 ：2.2.2(1)

(凡例)

導入：マニュアル「JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)」

構築：マニュアル「JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)」

運用 1：マニュアル「JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」

運用 2：マニュアル「JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)」

単なる誤字・脱字などはお断りなく訂正しました。

はじめに

このマニュアルは、JP1/NETM/DM の概要や導入方法について説明したものです。

このマニュアルでは、JP1/NETM/DM の機能や代表的な使用例を紹介しています。また、JP1/NETM/DM を導入するに当たって検討しておく必要があることについても説明しています。

JP1/NETM/DM を初めてお使いになる場合は、最初にこのマニュアルをお読みください。

なお、このマニュアルを含め、Windows 版 JP1/NETM/DM のマニュアルには次の 7 冊があります。各マニュアルの目的を次に示しますので、必要に応じてお読みください。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)

最初にお読みいただくマニュアルです。

JP1/NETM/DM の概要や機能、代表的な構築例および使用例を紹介しています。また、JP1/NETM/DM を導入するための手順や、あらかじめ検討しておく必要があることについても説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)

JP1/NETM/DM のインストール・セットアップの手順、データベースの構築、およびシステム構成の管理方法について説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)

ソフトウェアの配布、インベントリ情報の取得および管理、ファイルの収集など、配布管理システムの各機能の詳細と操作方法を説明しています。また、クライアントの操作方法についても説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)

他の製品と JP1/NETM/DM との連携、およびトラブルが発生したときの対処方法について説明しています。
また、Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client、64 ビット版 JP1/NETM/DM Client、および Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client の機能についても説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)

他社ソフトウェアをパッケージングするときに使用する AIT ファイルやレコーダファイルの作成方法を説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Administrator Kit

JP1/NETM/DM Client を自動的にインストールするために使用する、JP1/NETM/DM Administrator Kit について説明しています。

JP1 Version 9 JP1/NETM/Remote Control

JP1/NETM/Remote Control および JP1/NETM/DM のリモートコントロール機能について説明しています。

■対象読者

このマニュアルは、次の方にお読みいただくことを前提に説明しています。

- JP1/NETM/DM を利用してソフトウェアの配布や資産情報を収集・管理する管理者の方
- JP1/NETM/DM システムを構築するシステム管理者の方
- Microsoft Windows の操作に関する基本的な知識をお持ちの方
- ネットワークに関する基本的な知識をお持ちの方
- リレーショナルデータベースに関する基本的な知識をお持ちの方
- Microsoft SQL Server または Oracle に関する基本的な知識をお持ちの方（Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合）

■関連マニュアル

このマニュアルの関連マニュアルを次に示します。必要に応じてお読みください。

- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用) (3020-3-S80)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用) (3020-3-S81)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用) (3020-3-S82)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用) (3020-3-S83)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Administrator Kit (3020-3-S84)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Remote Control (3020-3-S87)
- JP1 Version 6 JP1/NETM/DM Manager (3000-3-841)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Client(UNIX(R) 用) (3020-3-S85)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Asset Information Manager 導入ガイド (3020-3-S76)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド (3020-3-S77)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Asset Information Manager 運用ガイド (3020-3-S78)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Client Security Control (3020-3-S71)
- JP1 Version 9 JP1/NETM/Audit 構築・運用ガイド (3020-3-S90)
- JP1 Version 10 JP1/Audit Management - Manager 構築・運用ガイド (3021-3-165)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 解説 (3020-3-K21)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 設計・運用ガイド (3020-3-K22)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 操作ガイド (3020-3-K24)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 コマンドリファレンス (3020-3-K25)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 連携ガイド (3020-3-K27)
- JP1 Version 8 JP1/Automatic Job Management System 2 メッセージ (3020-3-K28)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 入門 (3020-3-S01)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 導入ガイド (3020-3-S02)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 設計ガイド (システム構築編) (3020-3-S03)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 設計ガイド (業務設計編) (3020-3-S04)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 運用ガイド (3020-3-S07)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 トラブルシューティング (3020-3-S08)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 操作ガイド (3020-3-S09)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 コマンドリファレンス 1 (3020-3-S10)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 コマンドリファレンス 2 (3020-3-S11)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 連携ガイド (3020-3-S12)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 メッセージ 1 (3020-3-S13)
- JP1 Version 9 JP1/Automatic Job Management System 3 メッセージ 2 (3020-3-S14)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 入門 (3021-3-101-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 導入ガイド (3021-3-102-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 設計ガイド (システム構築編) (3021-3-103-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 設計ガイド (業務設計編) (3021-3-104-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 運用ガイド (3021-3-107-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 トラブルシューティング (3021-3-108-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 操作ガイド (3021-3-109-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 コマンドリファレンス 1 (3021-3-110-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 コマンドリファレンス 2 (3021-3-111-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 連携ガイド (3021-3-112-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 メッセージ 1 (3021-3-113-01)
- JP1 Version 10 JP1/Automatic Job Management System 3 メッセージ 2 (3021-3-114-01)

- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 構築ガイド (3020-3-R77)
- JP1 Version 9 JP1/Integrated Management - Manager 運用ガイド (3020-3-R78)
- JP1 Version 10 JP1/Integrated Management - Manager 構築ガイド (3021-3-008)
- JP1 Version 10 JP1/Integrated Management - Manager 運用ガイド (3021-3-009)
- JP1 Version 9 JP1/Base 運用ガイド (3020-3-R71)
- JP1 Version 9 JP1/Base メッセージ (3020-3-R72)
- JP1 Version 9 JP1/Base 関数リファレンス (3020-3-R73)
- JP1 Version 10 JP1/Base 運用ガイド (3021-3-001)
- JP1 Version 10 JP1/Base メッセージ (3021-3-002)
- JP1 Version 10 JP1/Base 関数リファレンス (3021-3-003)
- JP1 Version 8 JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド (3020-3-L01)
- JP1 Version 9 JP1/ 秘文 セットアップガイド (管理者用) (3020-3-T32)
- JP1 Version 10 JP1/ 秘文 セットアップガイド (管理者用) (3021-3-192)
- HiRDB Version 8 メッセージ (3020-6-358)
- 帳票作成機能 EUR EUR 帳票設計 (3020-7-481)
- 帳票作成機能 EUR EUR 帳票出力 (3020-7-483)
- 帳票作成機能 EUR EUR Print Service 帳票出力 (3020-7-484)

■このマニュアルでの表記

このマニュアルでは、JP1/NETM/DM 関連製品の名称を次のように表記します。

表記	製品名称	
64 ビット版 JP1/NETM/DM Client	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/DM Client	
	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/DM Client Light Edition	
64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent	Windows Server 2003 (IPF) 対応 JP1/NETM/Remote Control Agent	
HTTP Gateway	JP1/NETM/DM HTTP Gateway	
Internet Gateway	JP1/NETM/DM Internet Gateway	
JP1/NETM/Client Security Control または JP1/NETM/CSC	JP1/NETM/Client Security Control - Agent	
	JP1/NETM/Client Security Control - Manager	
JP1/NETM/DM	JP1/NETM/DM Client	JP1/NETM/DM Client
		JP1/NETM/DM Client - Base
	JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature	
	JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature	
	JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature	
	JP1/NETM/DM Manager	
JP1/NETM/Remote Control	JP1/NETM/Remote Control Agent	
	JP1/NETM/Remote Control Manager	
JP1/Remote Control	JP1/Remote Control Agent	
	JP1/Remote Control Manager	
Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client	Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, および Windows Vista 対応の JP1/NETM/DM Client	

はじめに

表記	製品名称
Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client	Windows CE .NET 4.1 対応の JP1/NETM/DM Client

そのほかの製品名称、および名称について次のように表記します。

表記		製品名称および名称
AMT		Intel Active Management Technology
EUR		EUR：イーユーアール Print Service
		EUR：イーユーアール Professional Edition
		EUR：イーユーアール Viewer
HP NNM		HP Network Node Manager Software バージョン 6 以前
		HP Network Node Manager Starter Edition Software バージョン 7.5 以前
Itanium 2		Intel Itanium(R) 2 プロセッサ
JP1/AJS		JP1/Automatic Job Management System 2
		JP1/Automatic Job Management System 3
JP1/AJS2 - SO	JP1/AJS2 - SO Manager	JP1/Automatic Job Management System 2 - Scenario Operation Manager
	JP1/AJS2 - SO View	JP1/Automatic Job Management System 2 - Scenario Operation View
JP1/NETM/Audit Manager		JP1/NETM/Audit Manager
		JP1/Audit Management - Manager
JP1/Cm2/SSO ※ 1	JP1/Cm2/SSO ※ 1	JP1/Cm2/SNMP System Observer
	JP1/PFM/SSO	JP1/Performance Management/SNMP System Observer
	JP1/SSO	JP1/Server System Observer
JP1/Cm2 または JP1/Cm2/NNM ※ 2	JP1/Cm2/NNM ※ 2	JP1/Cm2/Network Node Manager バージョン 7
	JP1/Cm2/NNM 250	JP1/Cm2/Network Node Manager 250 バージョン 6
		JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition 250 バージョン 8
	JP1/Cm2/NNM Enterprise	JP1/Cm2/Network Node Manager Enterprise バージョン 6
		JP1/Cm2/Network Node Manager Starter Edition Enterprise バージョン 8
JP1/IM	JP1/IM - Manager	JP1/Integrated Management - Manager
	JP1/IM - View	JP1/Integrated Management - View
JP1/ 秘文	JP1/ 秘文 CG Pro	JP1/ 秘文 Advanced Edition CopyGuard Professional
	JP1/ 秘文 IC	JP1/ 秘文 Advanced Edition Information Cypher
	JP1/ 秘文 IF	JP1/ 秘文 Advanced Edition Information Fortress
	JP1/ 秘文 IF Mail Option	JP1/ 秘文 Advanced Edition Information Fortress Mail Option
	JP1/ 秘文 IS	JP1/ 秘文 Advanced Edition Information Share
JP1/ 秘文 LogManager		JP1/ 秘文 Advanced Edition LogManager

表記				製品名称および名称
Linux				Linux(R)
MBSA				Microsoft(R) Baseline Security Analyzer
Microsoft Internet Explorer				Microsoft(R) Internet Explorer
				Windows(R) Internet Explorer(R)
Microsoft Internet Information Services				Microsoft(R) Internet Information Services 6.0
				Microsoft(R) Internet Information Services 7.0
Microsoft SQL Server				Microsoft(R) SQL Server(R) 7.0
				Microsoft(R) SQL Server(R) 2000
				Microsoft(R) SQL Server(R) 2005
				Microsoft(R) SQL Server(R) 2008
				Microsoft(R) SQL Server(R) 2012
NetWare				NetWare(R)
Oracle				Oracle8i
				Oracle9i
Pentium				Intel Pentium(R)
Visual Test				Visual Test 4.0
				Visual Test 6.0
Windows	Windows 98			Microsoft(R) Windows(R) 98 Operating System
	Windows Me			Microsoft(R) Windows(R) Millennium Edition Operating System
	Windows NT	Windows 2000	Windows 2000 Advanced Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Advanced Server Operating System
			Windows 2000 Datacenter Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Datacenter Server Operating System
			Windows 2000 Professional	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Professional Operating System
			Windows 2000 Server	Microsoft(R) Windows(R) 2000 Server Operating System
	Windows 7			Microsoft(R) Windows(R) 7 Enterprise
				Microsoft(R) Windows(R) 7 Professional
				Microsoft(R) Windows(R) 7 Ultimate
	Windows 8			Microsoft(R) Windows(R) 8
				Microsoft(R) Windows(R) 8 Enterprise
				Microsoft(R) Windows(R) 8 Pro
	Windows NT 4.0		Windows NT Server 4.0	Microsoft(R) Windows NT(R) Server Network Operating System Version4.0
			Windows NT Workstation 4.0	Microsoft(R) Windows NT(R) Workstation Operating System Version4.0

表記			製品名称および名称	
		Windows Server 2003 ※ 3	Windows Server 2003 ※ 3	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Datacenter Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard Edition
		Windows Server 2003 (IPF)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter Edition for Itanium-based Systems	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise Edition for Itanium-based Systems	
		Windows Server 2003 (x64)	Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Datacenter x64 Edition	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Enterprise x64 Edition	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003 R2, Standard x64 Edition	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Datacenter x64 Edition	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Enterprise x64 Edition	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2003, Standard x64 Edition	
		Windows Server 2008 ※ 4	Windows Server 2008 ※ 4	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Datacenter without Hyper-V(R)
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Enterprise without Hyper-V(R)
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard			
	Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 Standard without Hyper-V(R)			
	Windows Server 2008 R2		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Datacenter	
			Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Enterprise	
		Microsoft(R) Windows Server(R) 2008 R2 Standard		
	Windows Server 2012	Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Datacenter		

表記				製品名称および名称	
				Microsoft(R) Windows Server(R) 2012 Standard	
		Windows Vista		Microsoft(R) Windows Vista(R) Business	
				Microsoft(R) Windows Vista(R) Enterprise	
				Microsoft(R) Windows Vista(R) Ultimate	
		Windows XP	Windows XP Home Edition	Microsoft(R) Windows(R) XP Home Edition Operating System	
			Windows XP Professional	Microsoft(R) Windows(R) XP Professional Operating System	
Windows 95				Microsoft(R) Windows(R) 95 Operating System	
Windows CE				Microsoft(R) Windows(R) CE Operating System	
WSUS		WSUS 2.0		Microsoft(R) Windows Server(R) Update Services 2.0	
		WSUS 3.0		Microsoft(R) Windows Server(R) Update Services 3.0	
WUA				Windows(R) Update Agent 2.0	
				Windows(R) Update Agent 3.0	
秘文		秘文 FDE		秘文 AE Full Disk Encryption	
		秘文 IC		秘文 AE Information Cypher	
		秘文 IF		秘文 AE Information Fortress	
		秘文 IF Mail Option		秘文 AE IF Mail Option	
		秘文 IS		秘文 AE Information Share	

注※ 1

JP1/PFM/SSO または JP1/SSO を併記している場合は、JP1/Cm2/SSO に JP1/PFM/SSO および JP1/SSO は含みません。

注※ 2

JP1/Cm2/NNM 250 または JP1/Cm2/NNM Enterprise を併記している場合は、JP1/Cm2/NNM に JP1/Cm2/NNM 250 および JP1/Cm2/NNM Enterprise は含みません。

注※ 3

Windows Server 2003 (IPF) または Windows Server 2003 (x64) を併記している場合は、Windows Server 2003 に Windows Server 2003 (IPF) および Windows Server 2003 (x64) は含みません。

注※ 4

Windows Server 2008 R2 を併記している場合は、Windows Server 2008 に Windows Server 2008 R2 は含みません。

■このマニュアルで使用している英略語

このマニュアルで使用している主な英略語を次に示します。

英略語	正式名称
AMD	Advanced Micro Devices
API	Application Programming Interface
BIOS	Basic Input Output System
CCMP	Counter mode with Cipher block chaining Message authentication code Protocol

英略語	正式名称
CD-R	Compact Disc Recordable
CD-ROM	Compact Disc Read Only Memory
CF	Compact Flash
CGI	Common Gateway Interface
CPU	Central Processing Unit
CSV	Comma Separated Value
DB	Database
DBA	Database Administrator
DHCP	Dynamic Host Configuration Protocol
DLL	Dynamic Linking Library
DNS	Domain Name System
DoS	Denial of Service
DVD	Digital Versatile Disk
FD	Floppy Disk
FTP	File Transfer Protocol
GUI	Graphical User Interface
HD	Hard Disk
HTML	Hypertext Markup Language
HTTP	Hypertext Transfer Protocol
HTTPS	Hypertext Transfer Protocol Security
ICMP	Internet Control Message Protocol
ID	Identifier
IEEE 1394	Institute of Electrical and Electronic Engineers 1394
IP	Internet Protocol
IPF	Itanium(R) Processor Family
ISAPI	Internet Server Application Programming Interface
JIS	Japanese Industrial Standards
LAN	Local Area Network
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol
MAC	Media Access Control
MIB	Management Information Base
MO	Magneto-Optical disk
MS-DOS	Microsoft Disk Operating System
NAS	Network Attached Storage
NAT	Network Address Translation
NFS	Network File System
NIC	Network Interface Card
OS	Operating System
OU	Organizational Unit
PC	Personal Computer

英略語	正式名称
PDA	Personal Digital Assistant
PME	Power Management Event
PPP	Point to Point Protocol
RAS	Remote Access Service
RPC	Remote Procedure Call
RSN	Robust Security Network
RWU	Remote-Wake-UP
SD	Secure Digital
SID	System Identifier
SMBIOS	System Management Basic Input Output System
SNMP	Simple Network Management Protocol
SOL	Serial Over LAN
SSID	Service Set Identifier
SSL	Secure Sockets Layer
TCP	Transmission Control Protocol
TCP/IP	Transmission Control Protocol/Internet Protocol
TKIP	Temporal Key Integrity Protocol
UDP	User Datagram Protocol
URI	Uniform Resource Identifier
USB	Universal Serial Bus
UTC	Coordinated Universal Time
UUID	Universally Unique Identifier
VPN	Virtual Private Network
WAN	Wide Area Network
WINS	Windows Internet Name Service
WMI	Windows Management Instrumentation
WPA	Wi-fi Protected Access
WS	Workstation
WWW	World Wide Web
XML	Extensible Markup Language

■マニュアル間の参照指示について

マニュアル「JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)」、「JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)」、「JP1/NETM/DM 運用ガイド 1(Windows(R) 用)」、「JP1/NETM/DM 運用ガイド 2(Windows(R) 用)」または「JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)」間で、相互にマニュアルを参照していただく場合、次の形式で参照指示しています。

『AA については、マニュアル「BBB」の「n.n.n XXXXX」を参照してください。』

AA

参照していただく項目です。

BBB

参照先マニュアルの略称です。マニュアル名称の共通部分（「JP1/NETM/DM」および「(Windows(R) 用)」

はじめに

の部分）を省略しています。省略されている部分を補ってお読みください。

n.n.n

参照先の章・節・項番号です。(1) や (a) などの括弧付き項番が付く場合もあります。

XXXXX

参照先の標題（見出し）です。

■マニュアルで使用している記号

このマニュアルで使用している記号を次のように定義します。

記号	意味
[]	ウィンドウ、ダイアログボックス、タブ、パネル、メニュー、ボタン、アイコン、グループ、フォルダ、およびキーの名称を示す。
「 」	画面上の文字列、記号、およびジョブの名称を示す。
[A] – [B]	メニューを連続して選択することを示す。 (例) [ファイル] – [新規作成] 上記の例では、[ファイル] メニューを選択して、プルダウンメニューから [新規作成] を選択することを示す。
[X] + [Y]	キーを同時に押すことを示す。 (例) [Ctrl] + [C] キー 上記の例では、[Ctrl] キーと [C] キーを同時に押すことを示す。
斜体文字	可変の値を示す。 (例) 日付は YYYYMMDD の形式で指定する。

■文法で使用している記号

文法で使用している記号を次のように定義します。

記号	意味
 (ストローク)	複数の項目に対し、項目間の区切りを示し、「または」の意味を示す。 (例) A B C は、「A、B または C」を示す。
{ } (波括弧)	この記号で囲まれている複数の項目の中から、必ず 1 組の項目を選択する。項目の区切りは で示す。 (例) {A B C} は「A、B または C のどれかを指定する」ことを示す。
[] (角括弧)	この記号で囲まれている項目は任意に指定できる（省略してもよい）。複数の項目が記述されている場合には、すべてを省略するか、どれか一つを選択する。 (例) [A] は「何も指定しない」か「A を指定する」ことを示す。[B C] は「何も指定しない」か「B または C を指定する」ことを示す。
… (点線)	この記号の直前に示された項目を繰り返して複数個、指定できる。項目と項目の間は、一つ以上のスペースで区切る。 (例) A… は「A のあとに A を必要個数指定できる」ことを示す。
— (下線)	括弧内のすべてを省略したときに、システムが採る標準値を示す。標準値がない場合は、指定した項目だけが有効である。 (例) [<u>A</u> B] はこの項目を指定しなかった場合に、A を選択したと見なすことを示す。

■図中で使用している記号

このマニュアルの図中で使用している記号を、次のように定義します。

●PCまたはWS



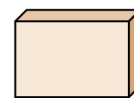
●ノート型PC



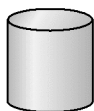
●サーバ



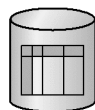
●プログラム



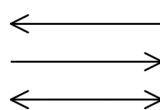
●ファイル



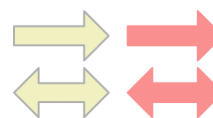
●リレーショナルデータベース



●制御の流れ



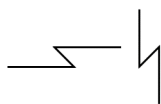
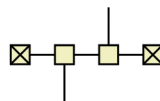
●データの流れ



●入出力の動作



●通信回線

●ネットワーク
LAN●ネットワーク
WAN

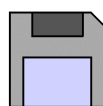
●モデム



●CD-ROM



●FDまたはMO



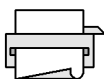
●トラブル



●会社



●プリンタ



●時間



■マニュアルの使用法

- このマニュアルでは、特に記載がない場合、接続先の JP1/NETM/DM 製品のバージョンを、Windows 版は 09-51、UNIX 版 JP1/NETM/DM Manager は 06-75、UNIX 版 JP1/NETM/DM Client は 09-00 と仮定しています。接続先システムが上記より前のバージョンの JP1/NETM/DM 製品を使用している場合、そのバージョンがサポートする機能だけを実現できます。
- UNIX 版 JP1/NETM/DM との用語差異および機能差異については、「付録 D.3 Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の用語差異および機能差異」を参照してください。
- Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 A Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。
- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 B 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。
- Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client との機能差異については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 C Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client の機能」を参照してください。

■ HTML ヘルプについて

JP1/NETM/DM では、次に示す HTML ヘルプを提供しています。

JP1/NETM/DM のヘルプ（JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client（中継システム）、および JP1/NETM/DM Client・Base（中継システム）用）

JP1/NETM/DM のヘルプの内容は、次のマニュアルを統合したものです。

- ・ JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 導入・設計ガイド (Windows(R) 用)
- ・ JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 構築ガイド (Windows(R) 用)
- ・ JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 1 (Windows(R) 用)
- ・ JP1 Version 9 JP1/NETM/DM 運用ガイド 2 (Windows(R) 用)
- ・ JP1 Version 9 JP1/NETM/DM Automatic Installation Tool ガイド (Windows(R) 用)

JP1/NETM/DM Client のヘルプ（JP1/NETM/DM Client（クライアント）および JP1/NETM/DM Client・Base（クライアント）用）

JP1/NETM/DM Client のヘルプの内容は、上記のマニュアルからクライアントの説明を抜粋したものです。

これらの HTML ヘルプでは、検索したい項目を HTML ヘルプの全文から検索できます。

JP1/NETM/DM の各ウィンドウの [ヘルプ] メニューや各ダイアログボックスの [ヘルプ] ボタンから、HTML ヘルプを起動できます。HTML ヘルプは、Microsoft Internet Explorer 5.01 以降がインストールされている PC で参照してください。

■ KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）、1MB（メガバイト）、1GB（ギガバイト）、1TB（テラバイト）はそれぞれ 1,024 バイト、 $1,024^2$ バイト、 $1,024^3$ バイト、 $1,024^4$ バイトです。

目次

1	JP1/NETM/DM とは	1
1.1	JP1/NETM/DM の特長	2
1.2	JP1/NETM/DM の機能の紹介	3
1.2.1	ソフトウェアの配布	3
1.2.2	インベントリ情報の管理	8
1.2.3	ファイルの収集	13
1.2.4	ソフトウェアの稼働状況の監視	14
1.2.5	クライアントの管理	15
1.2.6	クライアントのリモートコントロール	20
1.2.7	他プログラムとの連携	21
1.3	JP1/NETM/DM のシステム構成要素	23
1.3.1	基本的なシステム構成要素	23
1.3.2	プログラムとシステム構成要素の関係	25
1.3.3	ソフトウェアを配布する場合のシステム構成要素	29
1.3.4	インベントリ情報を管理する場合のシステム構成要素	29
1.3.5	ソフトウェアの稼働状況を管理する場合のシステム構成要素	31
1.3.6	リモートコントロール機能を使用する場合のシステム構成要素	32
2	JP1/NETM/DM の機能	35
2.1	ソフトウェアの配布（リモートインストール）	36
2.1.1	リモートインストールの作業の流れ	36
2.1.2	配布できるソフトウェアの種類	37
2.1.3	パッケージング時に設定できるインストール条件	38
2.1.4	Groupmax Integrated Desktop の分割パッケージング機能	40
2.1.5	リモートインストールを実行するジョブ種別	41
2.1.6	クライアントユーザの都合に合わせたインストール	41
2.1.7	スタンドアロン PC へのソフトウェアのインストール	42
2.1.8	キャビネットとパッケージの管理	44
2.1.9	中継システム上のパッケージの削除	44
2.2	インベントリ情報の取得	46
2.2.1	システム情報の取得	46
2.2.2	ソフトウェア情報の取得	65
2.2.3	ユーザインベントリ情報の取得	127
2.2.4	ディレクトリ情報の取得	129
2.2.5	インベントリ情報の取得方法	130
2.2.6	スタンドアロン PC からのインベントリ情報の取得	134
2.2.7	インベントリ情報の利用方法	135
2.2.8	インベントリ情報を管理する場合の注意事項	137
2.3	インベントリ情報の管理	138

2.3.1	インベントリ情報の表示	138
2.3.2	インベントリ情報の集計	138
2.3.3	テンプレートを利用した表示・集計	139
2.3.4	集計結果のグラフ表示	139
2.3.5	集計結果からのホストのグルーピング	140
2.3.6	インベントリ情報の出力	140
2.4	ファイルの収集（リモートコレクト）	142
2.4.1	リモートコレクトの作業の流れ	142
2.4.2	リモートコレクトを実行するジョブ種別	142
2.4.3	収集したファイルの復元	144
2.4.4	クライアント側でのリモートコレクトの実行制限	144
2.5	ソフトウェアの稼働状況の監視	146
2.5.1	ソフトウェアの稼働監視の流れ	146
2.5.2	稼働状況を監視するための前提条件	148
2.5.3	ソフトウェアの起動抑止	150
2.5.4	印刷の抑止	152
2.5.5	外部メディア操作の抑止	155
2.5.6	デバイス操作の抑止	160
2.5.7	不正操作の通知	165
2.5.8	操作履歴および抑止履歴の取得	168
2.5.9	ソフトウェアの稼働時間の取得	184
2.5.10	稼働情報の保存日数の目安	186
2.5.11	大規模システムでの稼働状況の監視	187
2.5.12	スタンドアロン PC の稼働状況の監視	188
2.6	ソフトウェアの稼働情報の管理	190
2.6.1	操作ログを管理するための準備	190
2.6.2	操作ログの参照・追跡調査	192
2.6.3	操作ログの集計	195
2.6.4	ソフトウェアの稼働状況の参照	196
2.6.5	稼働情報管理の運用例	197
2.7	クライアントの管理	200
2.7.1	クライアントに適用するパッチの取得	200
2.7.2	クライアントのパッチ情報の検出	203
2.7.3	WSUS と連携した更新プログラムの管理	205
2.7.4	クライアントのシステム監視	207
2.7.5	クライアントへのメッセージ通知	208
2.7.6	AMT を利用したクライアントの制御	210
2.8	クライアントのリモートコントロール	212
2.8.1	リモートコントロールマネージャの起動方法	212
2.8.2	リモートコントロールマネージャの機能	213
2.9	ジョブの管理	214
2.9.1	ジョブとは	214

2.9.2	作成できるジョブの種類	214
2.9.3	ジョブの詳細設定	216
2.9.4	ジョブの実行と保存	217
2.9.5	グルーピングしたホストへのジョブ実行	217
2.9.6	実行されたジョブの流れ	221
2.9.7	ジョブの実行順序	224
2.9.8	ジョブの実行状況の確認	225
2.9.9	実行結果を確認したあとの対処	225
2.10	システム構成情報の管理	227
2.10.1	システム構成情報の作成	227
2.10.2	クライアントのグルーピング	227
2.10.3	システム構成情報とディレクトリ情報の関係	230
2.10.4	システム構成情報のメンテナンス	232
2.10.5	システム構成情報の削除履歴の管理	236
2.10.6	JP1/NETM/DM がインストールされていないホストの検出	237
2.11	管理情報の出力	239
2.11.1	CSV 形式ファイルへの出力	239
2.11.2	印刷	239
2.12	業務目的に合わせたインベントリ情報の集計	240
2.13	クライアントの機能	242
2.13.1	配布されたソフトウェアのインストール	242
2.13.2	ジョブの実行によるインベントリ情報の通知	244
2.13.3	管理者から通知されたメッセージの表示	245
2.13.4	クライアントからのインベントリ情報の通知	247
2.13.5	クライアントの情報の表示	251
2.13.6	ハードウェアの異常の通知	252
2.13.7	クライアントを使用する場合の注意事項	253
2.14	他プログラムとの連携	256
2.14.1	JP1/Base と連携した JP1/NETM/DM のユーザ管理	256
2.14.2	JP1/NETM/Asset Information Manager からのソフトウェア適用管理	257
2.14.3	JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理	258
2.14.4	JP1/IM からの JP1/NETM/DM の管理	259
2.14.5	JP1/Cm2 または HP NNM からの JP1/NETM/DM 管理	260
2.14.6	JP1/AJS と連携したジョブの自動実行	262
2.14.7	秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理	262
2.14.8	JP1/NETM/Audit - Manager からの監査ログの管理	264

3

導入から運用開始までの流れ	267
3.1 作業の流れ	268
3.2 システム構成を設計する	269
3.3 JP1/NETM/DM をインストールする	271

3.4	JP1/NETM/DM をセットアップする	272
3.5	リレーショナルデータベースを設定する	273
3.6	システム構成情報を作成する	274
3.7	ジョブのあて先をグルーピングする	275
3.8	JP1/NETM/DM の運用を開始する	277

4

代表的な構築例および運用例	279

4.1	構築例および運用例の種類	280
4.2	JP1/NETM/DM システムを導入する	281
4.3	遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作する	283
4.3.1	JP1/NETM/DM のサーバ機能と GUI を別々のコンピュータにインストールする	283
4.3.2	配布管理システムがインストールされているコンピュータをリモートコントロールする	284
4.4	ハードウェア資産を管理する	287
4.5	ソフトウェア資産を管理する	289
4.5.1	特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する	289
4.5.2	ソフトウェアのライセンス数を管理する	291
4.5.3	Microsoft Office 製品とウィルス対策製品を管理する	293
4.6	事業所ごとにソフトウェアを配布する	294
4.7	配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する	296
4.8	最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する	298
4.9	省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する	300
4.10	特定の日にクライアントをシャットダウンさせる	303
4.11	新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する	305
4.12	障害が発生したクライアントを配布管理システムから遠隔操作でメンテナンスする	307
4.12.1	障害の発生をサーバに通知する	307
4.12.2	クライアントをリモートコントロールする	309

5

JP1/NETM/DM システムの設計	311

5.1	システム構成の設計	312
5.1.1	基本的なシステム構成の設計	312
5.1.2	大規模なシステム構成の設計	312
5.1.3	小規模なシステム構成の設計	316
5.1.4	中継するシステムを使用したシステム構成の検討	316
5.1.5	使用できるデータベース	318
5.1.6	バージョン間の互換性	320
5.1.7	システムの日時およびタイムゾーンの設定	320
5.2	運用する環境に応じたシステム構成の設計	322
5.2.1	Asset Information Manager Limited を使用する環境でのシステム構成	322
5.2.2	UNIX システムが混在する環境でのシステム構成	323

5.2.3	英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境でのシステム構成	324
5.2.4	インターネットを介して使用する場合のシステム構成	325
5.2.5	JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理する場合のシステム構成	326
5.2.6	WSUS と連携する場合のシステム構成	327
5.2.7	AMT を利用する場合のシステム構成	328
5.2.8	クラスタシステムへの JP1/NETM/DM の導入	330
5.3	ハードウェアに関する見積もり	336
5.3.1	CPU 性能	336
5.3.2	メモリ所要量	336
5.3.3	ディスク占有量	339
5.4	データベース容量の見積もり	346
5.4.1	Embedded RDB のデータベース容量の見積もり	346
5.4.2	Microsoft SQL Server のデータベース容量の見積もり	354
5.4.3	Oracle のデータベース容量の見積もり	359
5.4.4	Asset Information Manager Limited のデータベース容量の見積もり	364

6

JP1/NETM/DM システムの環境設定	367
6.1 ネットワーク環境の検討	368
6.1.1 JP1/NETM/DM のネットワーク環境	368
6.1.2 ホストを識別する運用キーの決定	368
6.1.3 ホスト識別子を使ったネットワーク管理	369
6.1.4 TCP/IP 環境の設定	370
6.1.5 ファイアウォール環境での JP1/NETM/DM の運用	373
6.1.6 複数 LAN 接続環境での JP1/NETM/DM の運用	378
6.1.7 ネットワークに負荷を掛けない運用方法	381
6.2 マルチキャスト配布をするための設定	392
6.2.1 ユニキャスト配布とマルチキャスト配布	392
6.2.2 マルチキャスト配布に必要なネットワーク環境と JP1/NETM/DM のバージョン	393
6.2.3 マルチキャスト配布をするためのシステム構成	393
6.2.4 マルチキャスト配布の実行方法	397
6.2.5 マルチキャスト配布をする場合の注意事項	398
6.3 クライアント制御を利用するための設定	400
6.3.1 AMT を利用する場合の設定	400
6.3.2 Wake on LAN を利用する場合の設定	403
6.3.3 シャットダウン時の注意事項	406
6.4 中継システムの動作環境について	407
6.4.1 中継システムのマルチポーリング環境	407
6.5 クライアントの動作環境について	408
6.5.1 クライアントでのホスト識別子の保管	408
6.5.2 クライアントのポーリング方法	409
6.5.3 クライアントのマルチポーリング環境	410
6.5.4 クライアントの接続先の自動変更	412

6.5.5	容量の少ない PC でクライアントを使用する場合	416
6.5.6	上位システムを名前解決できない場合の接続設定	416
6.6	ダイヤルアップ接続の設定	419
6.6.1	前提条件	419
6.6.2	ダイヤルアップ接続するためのネットワークの設定	421
6.6.3	JP1/NETM/DM のインストール, セットアップで必要な設定	425
6.6.4	ダイヤルアップ接続の設定確認	425
6.6.5	ダイヤルアップ接続の設定例	426

付録 429

付録 A	プロセス一覧	430
付録 A.1	JP1/NETM/DM Manager のプロセス	430
付録 A.2	JP1/NETM/DM Client のプロセス	430
付録 B	ポート番号一覧	433
付録 B.1	ポート番号	433
付録 B.2	ファイアウォールの通過方向	433
付録 C	リレーショナルデータベースの構造	435
付録 C.1	リレーショナルデータベースのテーブルの関連	435
付録 C.2	リレーショナルデータベースのテーブルの一覧	438
付録 C.3	netmdm_activatedirectory	441
付録 C.4	netmdm_addictionary	442
付録 C.5	netmdm_adgroup	443
付録 C.6	netmdm_adproperty	443
付録 C.7	netmdm_adupdate	444
付録 C.8	netmdm_cabinet	444
付録 C.9	netmdm_clientlist	445
付録 C.10	netmdm_collect	445
付録 C.11	netmdm_discovery_community	446
付録 C.12	netmdm_discovery_info	446
付録 C.13	netmdm_discovery_options	447
付録 C.14	netmdm_discovery_setup	447
付録 C.15	netmdm_execution	450
付録 C.16	netmdm_execution_site	453
付録 C.17	netmdm_execution_summary	454
付録 C.18	netmdm_host_withoutdm	455
付録 C.19	netmdm_id	456
付録 C.20	netmdm_id_policy	456
付録 C.21	netmdm_identry	459
付録 C.22	netmdm_inspackage	459
付録 C.23	netmdm_inventry	461
付録 C.24	netmdm_jobgen	476

付録 C.25	netmdm_jobgen_collect	480
付録 C.26	netmdm_jobgen_id	480
付録 C.27	netmdm_jobgen_monitoring	481
付録 C.28	netmdm_jobgen_msg	481
付録 C.29	netmdm_jobgen_node	482
付録 C.30	netmdm_jobgen_pack	483
付録 C.31	netmdm_jobgen_soft	485
付録 C.32	netmdm_jobgen_system	486
付録 C.33	netmdm_jobgen_userinv	487
付録 C.34	netmdm_jobsch	487
付録 C.35	netmdm_jobsch_site	489
付録 C.36	netmdm_jobscript	490
付録 C.37	netmdm_lastupdate	491
付録 C.38	netmdm_mnglist	491
付録 C.39	netmdm_monitoring_devicectrl	491
付録 C.40	netmdm_monitoring_filter	492
付録 C.41	netmdm_monitoring_permission	493
付録 C.42	netmdm_monitoring_policy	493
付録 C.43	netmdm_monitoring_program	497
付録 C.44	netmdm_monitoring_result	498
付録 C.45	netmdm_monitoring_security	499
付録 C.46	netmdm_monitoring_usbconnect	502
付録 C.47	netmdm_monitoring_webfilter	505
付録 C.48	netmdm_monitoring_work	506
付録 C.49	netmdm_monitoring_workresult	506
付録 C.50	netmdm_nnm_management	507
付録 C.51	netmdm_node	507
付録 C.52	netmdm_node_policy	508
付録 C.53	netmdm_oidlist	509
付録 C.54	netmdm_ospatch_classref	511
付録 C.55	netmdm_ospatch_patchinf	512
付録 C.56	netmdm_ospatch_productref	513
付録 C.57	netmdm_ospatch_script	514
付録 C.58	netmdm_ospatch_xmlinf	514
付録 C.59	netmdm_package	514
付録 C.60	netmdm_package_inf	515
付録 C.61	netmdm_registry	516
付録 C.62	netmdm_reglist	517
付録 C.63	netmdm_schedule	518
付録 C.64	netmdm_softwaredel	519
付録 C.65	netmdm_softwaredic	519
付録 C.66	netmdm_softwarelicence	520
付録 C.67	netmdm_stscnt	521

付録 C.68	netmdm_stscnt_site	522
付録 C.69	netmdm_stscnt_summary	522
付録 C.70	netmdm_suspend	523
付録 C.71	netmdm_system	523
付録 C.72	netmdm_system_delete	526
付録 C.73	netmdm_systeminf	528
付録 C.74	netmdm_systemjob	528
付録 C.75	netmdm_userinventory	529
付録 C.76	netmdm_userinvlist	529
付録 C.77	netmdm_vidlist	531
付録 D	機能差異	534
付録 D.1	JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異	534
付録 D.2	JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異	535
付録 D.3	Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の用語差異および機能差異	537
付録 D.4	Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の設定項目の対応	543
付録 E	各バージョンの変更内容	551
付録 F	用語解説	567

索引

579

1

JP1/NETM/DM とは

JP1/NETM/DM は，ネットワークを利用して，ソフトウェアの配布やクライアントの資産管理を実現するシステムです。JP1/NETM/DM を利用することで，クライアント管理の自動化・省力化を図れます。

この章では，JP1/NETM/DM を使って，どのようなことができるのかを説明します。

また，JP1/NETM/DM のプログラムの構成についても説明します。

1.1 JP1/NETM/DM の特長

1.2 JP1/NETM/DM の機能の紹介

1.3 JP1/NETM/DM のシステム構成要素

1.1 JP1/NETM/DM の特長

近年、ネットワークの複雑化と、ソフトウェア・ハードウェアの多様化に伴って、ソフトウェアの配布やクライアントの管理を自動化・省力化するツールの必要性が高まっています。特に、大規模なネットワークでは、このようなツールを導入し、ネットワーク環境を利用して集中的に管理しないかぎり、システム管理者の負担は増大する一方です。

運用管理業務を従来のままの方法で行うことには、例えば次のような問題があります。

ソフトウェアのインストール作業での問題

- 媒体の現地への運搬や、クライアントごとのインストール・セットアップ作業が必要となり、業務環境の構築に膨大な手間とコストが掛かる。
- ソフトウェアの頻繁なバージョンアップに迅速に対応できない。

クライアントからの情報収集の問題

- 各クライアントのハードウェアの情報、インストールされているソフトウェアの情報などを把握するのが困難である。
- クライアントからの情報収集に時間が掛かり、常に最新の情報を手に入れられるとは限らない。

JP1/NETM/DM では、上記の作業をセンタサーバからの指示で一括して実行でき、システム管理者の負担を大幅に軽減できます。JP1/NETM/DM の特長を次に示します。

● ソフトウェア配布、インベントリ管理の一元化

クライアントに必要な業務プログラムや流通ソフトウェアなどを、センタサーバから一括して配布できます。配布方法は、スケジュール配布やグループ単位での配布など、運用に合わせた方法を選択できます。また、配布時のデータ送信量を削減するために、マルチキャスト配布をサポートしています。

クライアントの資産管理に必要なインベントリ情報は、センタサーバからの指示で一括して取得できます。クライアントから取得するインベントリ情報は、ハードウェア情報やソフトウェア情報だけでなく、クライアントを使用するユーザに関する情報も取得できるため、クライアントを PC 環境と利用者の両方から管理できます。また、インターネットの普及とともに重要な意味を持つようになった、ウィルス対策製品の適用の実態などを詳細に管理できます。

● さまざまな規模のシステム、プラットフォーム、環境に対応

JP1/NETM/DM は、数十台程度のクライアントで構成される小規模なシステムから、数万台のクライアントで構成される大規模なシステムまで、さまざまな規模のシステムに適用できます。Windows システムと UNIX システムが混在するシステムや、クライアントに Windows Server 2003 (IPF) 搭載のコンピュータおよび Windows CE 搭載の PDA が含まれるシステムにも対応しています。

また、システムの可用性を向上させるためのクラスタシステムや、複数 LAN 接続環境への導入も可能です。

● 他プログラムとの連携

JP1/NETM/DM は、JP1/Base、JP1/NETM/Asset Information Manager、JP1/NETM/Client Security Control、JP1/IM などの他プログラムと連携して使用することで、ソフトウェアの配布やクライアントの資産管理をシステム全体の管理と統合して行うことができます。

また、JP1/AJS から JP1/NETM/DM が提供するコマンドインターフェースを利用して、JP1/NETM/DM を利用した業務を自動的に運用できます。

1.2 JP1/NETM/DM の機能の紹介

ここでは、JP1/NETM/DM の機能の概要を紹介します。

JP1/NETM/DM には、大きく分けて次の機能があります。これらの機能を有効に活用することで、ユーザーのさまざまな要求にこたえる、きめ細かな運用ができます。

- **ソフトウェアの配布（リモートインストール）**

ネットワークを介して、ソフトウェアを自動的に配布・インストールできます。日時を指定して一斉に配布したり、インストールできるクライアントの条件を絞り込んだりできます。

- **インベントリ情報の管理**

ネットワーク内で使用されている PC のハードウェア情報や OS の設定情報、ソフトウェア情報などのインベントリ情報をサーバで取得し、管理できます。

- **ファイルの収集（リモートコレクト）**

クライアントのデータをサーバに収集して利用できます。

- **ソフトウェアの稼働状況の監視**

クライアントでのソフトウェアの稼働状況やファイル操作の履歴を取得し、管理できます。また、特定のソフトウェアの起動を抑止したり、指定したソフトウェアだけが起動できるようにしたりできます。

- **クライアントの管理**

クライアントに適用済みまたは未適用のパッチ情報を検出したり、システムの状態を監視したりできます。また、サーバからクライアントへメッセージを通知することもできます。AMT に対応しているコンピュータをクライアントとして使用している場合、AMT の機能を利用してクライアントを制御できます。

- **クライアントのリモートコントロール**

クライアントのトラブルに、サーバからのリモート操作で対応するための機能です。遠隔地にあるクライアントの画面をサーバの画面上に呼び出して操作できます。

- **他プログラムとの連携**

他プログラム上から JP1/NETM/DM の機能を利用することで、資産管理業務やセキュリティ管理業務などを実現できます。

1.2.1 ソフトウェアの配布

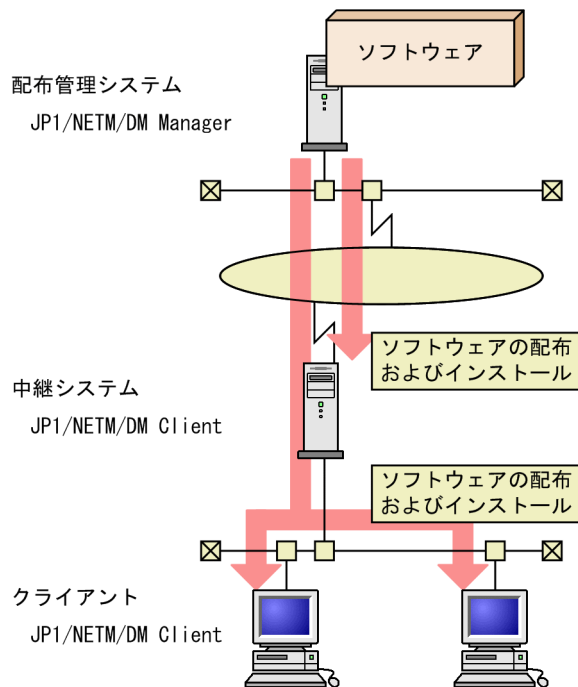
ネットワークを介して、遠隔地にあるクライアントへのソフトウェアの配布・インストールを、センタサーバからの指示で一括して実行できます。各クライアントでのインストール結果は、サーバへ自動的に通知され、一元管理できます。また、ネットワークを介さないで、クライアントへソフトウェアをインストールすることもできます。

ソフトウェアの配布機能の詳細については、「2.1 ソフトウェアの配布（リモートインストール）」を参照してください。

(1) 機能の概要

JP1/NETM/DM Manager をインストールしたセンタサーバ（**配布管理システム**）から、ネットワークを経由して、JP1/NETM/DM Client をインストールした**クライアント**に、ソフトウェアを配布・インストールします。大規模なネットワークや、クライアントの台数が多いシステムでは、中間に JP1/NETM/DM Client をインストールした**中継システム**を置くことで、効率良くソフトウェアを配布できます。ソフトウェアの配布機能の概要を次の図に示します。

図 1-1 ソフトウェアの配布機能

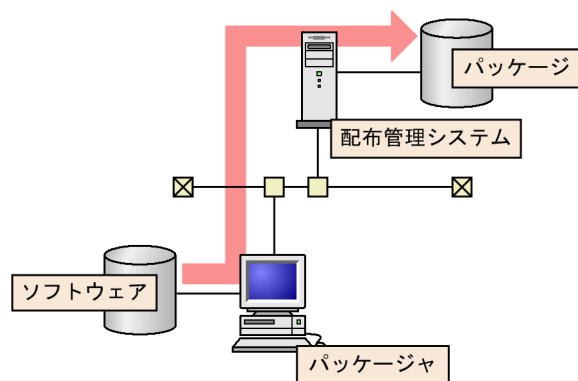


ソフトウェアの配布手順は、次に示すように、準備、実行、および確認の3段階に分けることができます。

1. 配布するソフトウェアを登録する（パッケージング）。

配布するソフトウェアは、事前に、配布管理システムに登録（パッケージング）しておきます。ソフトウェアのパッケージングには、**パッケージャ**を使用します。また、パッケージングされて、配布できる状態になったソフトウェアを**パッケージ**と呼びます。パッケージングするときは、配布するソフトウェアのインストール条件なども指定できます。

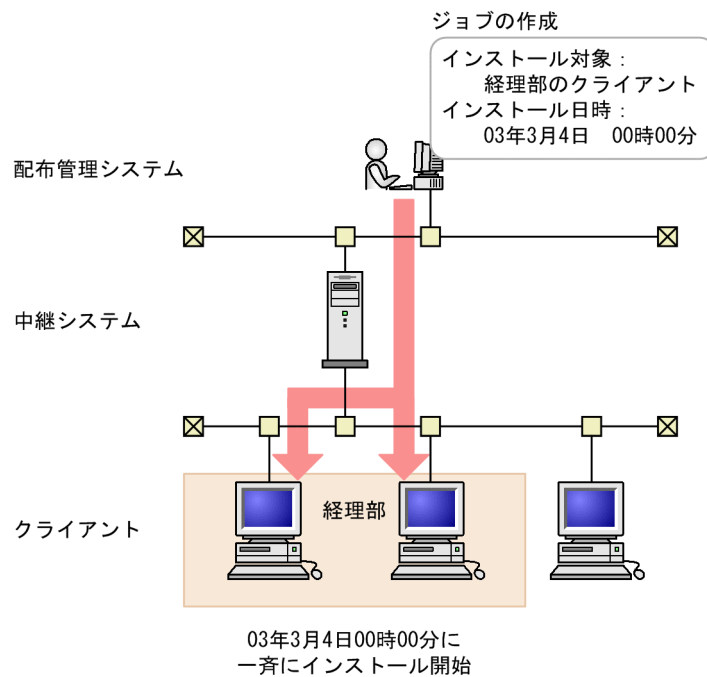
図 1-2 パッケージング



2. ソフトウェアの配布を指示する（リモートインストール）。

配布管理システムで、どのクライアントに対して、ソフトウェアをどのように配布するのかを指示する**ジョブ**を作成、実行します。例えば、特定の部署のクライアントだけに、特定の日時に一斉にソフトウェアを配布するようなジョブを作成できます。ジョブで指示したとおりに、ソフトウェアが配布・インストールされます。

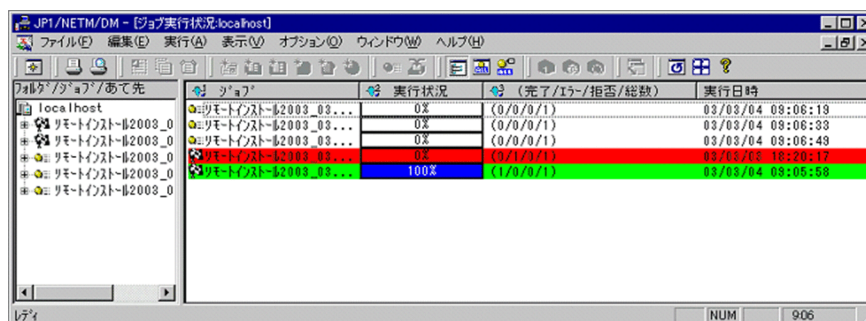
図 1-3 リモートインストール



3. インストールの実行状況、実行結果を確認する。

ジョブの実行状況や実行結果が、配布管理システムの GUI 上で一目で確認できます。

図 1-4 「ジョブ実行状況」 ウィンドウ



このように、配布管理システムからクライアントにパッケージングしたソフトウェアを転送し、インストールする機能を**リモートインストール**と呼びます。

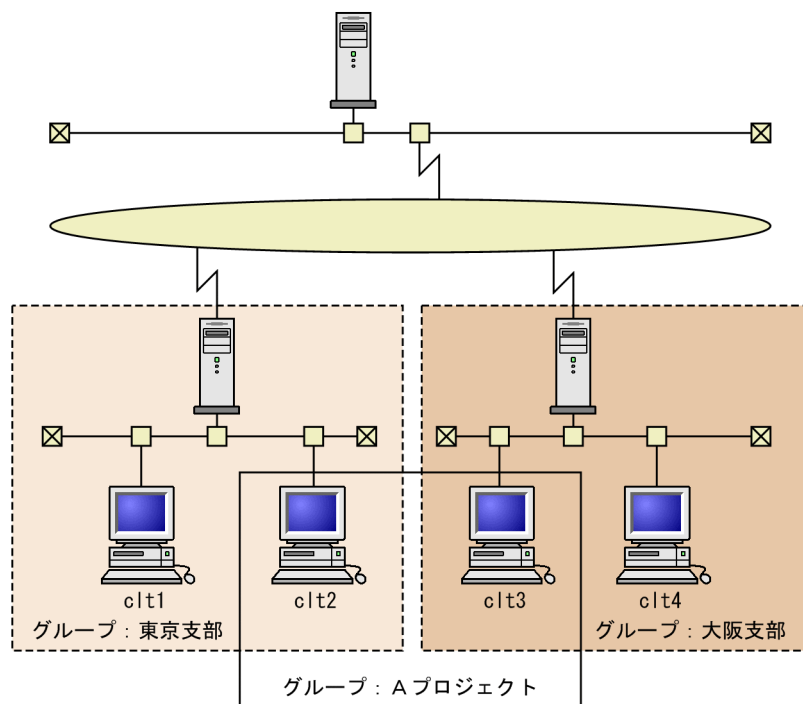
(2) 効率良く配布するための機能

JP1/NETM/DM では、ソフトウェアを効率良く配布するために、さまざまな機能を提供しています。ここでは、その一部を紹介します。

(a) 配布先のグルーピング

ソフトウェアの配布先となるクライアントを、目的に応じてグルーピングできます。クライアントは、複数のグループに所属させることができます。このため、次の図のように、部署ごとのグルーピングとプロジェクトごとのグルーピングを重複して設定できます。

図 1-5 配布先のグルーピングの例



配布先をグルーピングしておけば、配布先として、clt2 と clt3 を 1 台ずつ指定する代わりに、「A プロジェクト」グループを指定できます。

(b) 中継システムの活用

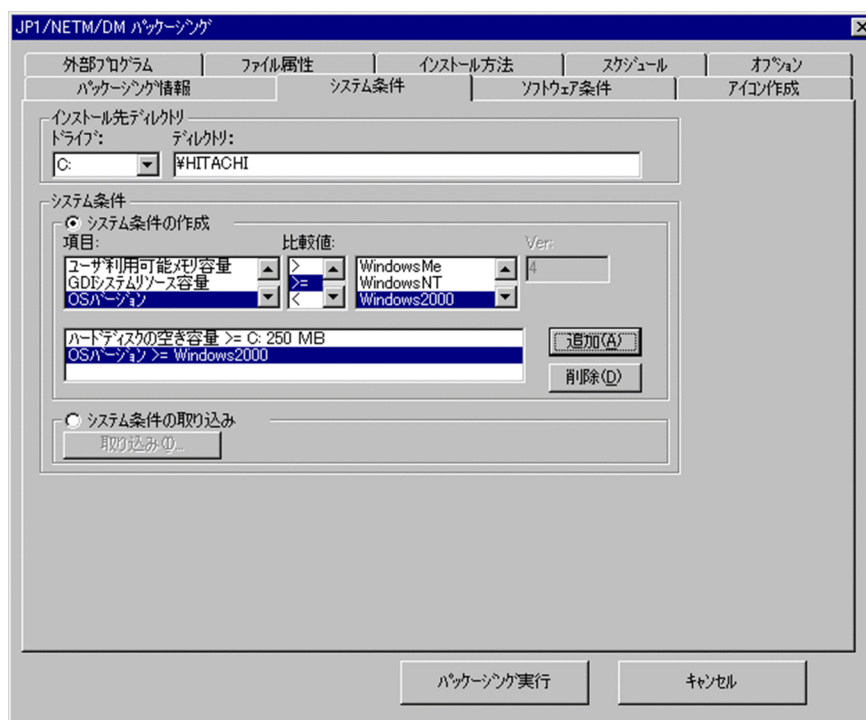
中継システムは、ソフトウェアの配布を中継する機能のほかに、配布管理システムとしての機能も併せ持っています。このため、センタサーバによる一極集中型の運用だけでなく、中継システムを部門サーバとした分散型の運用も可能です。さらに、このような分散型の運用の場合でも、中継システム主導でリモートインストールしたソフトウェアの状況をセンタサーバで把握できます。このため、ネットワーク全体のソフトウェアの情報を、センタサーバで一元管理できます。

なお、中継システムにはクライアントとしての機能もあります。このため、センタサーバから、中継システムに対して、ほかのクライアントと同じ扱いでリモートインストールを実行できます。

(c) インストール条件の設定

ソフトウェアをリモートインストールするとき、配布先のクライアントが、そのソフトウェアのインストールに適しているかどうかをチェックできます。例えば、パッケージング時またはジョブの作成時に、次のような画面で、インストールの前提となるハードウェアの条件を指定できます。

図 1-6 【システム条件】 パネル



このようにハードウェアの条件を設定しておくことで、ハードディスクの容量不足や OS の不適合などで失敗が予想されるクライアントに対して、インストールを抑止できます。

ハードウェア条件のほかにも、特定のソフトウェアがインストールされているかどうかをチェックしたり、インストール前に外部プログラムを起動して、ユーザ独自の条件でチェックしたりできます。

(d) 配布のタイミングとインストールのタイミング

リモートインストールの日時の指定は、ソフトウェアを配布する（データを転送する）日時と、それをクライアントにインストールする日時の 2 段階に分けることができます。

リモートインストールのジョブを作成するとき、ジョブの実行日時を設定できます。これが、ソフトウェアの配布日時（データを転送する日時）となります。ネットワークが比較的空いている夜間などを指定しておくと、効率良く転送できます。

配布したソフトウェアを各クライアントにインストールする日時は、これとは別に、パッケージごとに設定します。各クライアントで、指定した日時の一斉にプログラムをバージョンアップしたい場合などに便利です。

(e) パッケージの分割配布

パッケージを一度に配布しないで、指定した容量に分割して配布できます。分割したパッケージの転送間には休止時間も設定できるので、大容量のパッケージを配布するときに、ネットワークの負荷を軽減できます。

(f) マルチキャスト配布

ソフトウェアの配布時に、マルチキャスト配布を指定すると、クライアントの上位システムから 1 ジョブ分のパケットを送信するだけで、指定した多数のクライアントへソフトウェアを配布できます。大容量のソフトウェアを配布する場合などに、パケットの送信量を削減できます。

(g) ジョブの中断と再開

リモートインストール中のホストに対して、一時的にジョブの実行を中断できます。例えば、業務停止中に実行する予定のジョブが業務開始までに完了しなかった場合、実行中のジョブを中断し、業務終了後に再開できます。

(h) クライアント制御の利用

PC が AMT または Wake on LAN に対応している場合、ほかの PC からネットワーク経由でクライアントを起動できます。また、PC が自動シャットダウンに対応している場合は、ネットワーク経由でクライアントをシャットダウンできます。この機能を使って、JP1/NETM/DM では、ネットワークの負荷の小さい深夜や休日などに、電源が入っていない状態の PC に対してソフトウェアをリモートインストールできます。

(3) スタンドアロン PC へのソフトウェアのインストール

JP1/NETM/DM は、ネットワークを介してソフトウェアの配布やインベントリ情報の管理を実現するシステムですが、ネットワークを介さないで、スタンドアロンで使用している PC にソフトウェアをインストールすることもできます。ソフトウェアをインストールしたい PC がネットワーク外の場合や、ネットワーク内でも回線に負荷を掛けたくない場合に便利です。インストールの対象となるのは、JP1/NETM/DM Client がインストールされているスタンドアロン PC（オフラインマシン）です。

オフラインマシンにソフトウェアをインストールするには、まず、配布管理システムでソフトウェアのインストールに必要なファイルを作成し、CD-R や MO などの媒体に格納します。そして、その媒体をオフラインマシンに搬送し、インストールを実行します。このように、ネットワークを介さないでソフトウェアをインストールする方法を、**オフラインインストール**と呼びます。

1.2.2 インベントリ情報の管理

ネットワーク内で使用されている PC の、ハードウェアやソフトウェア情報などのインベントリ情報を、センタサーバ（配布管理システム）で取得できます。また、インベントリ情報取得用の媒体を作成することで、ネットワーク外の PC からインベントリ情報を取得できます。

インベントリ情報を取得することで、ハードディスクの増設が必要でないか、OS のセキュリティ設定に問題はないか、不足しているソフトウェアはないかなど、各クライアントの状況を的確に把握できます。PC の製造番号や使用者などのユーザ情報も管理できます。

インベントリ情報を取得するには、ソフトウェアの配布と同様に、配布管理システムから、情報の取得を指示するジョブを作成・実行します。間に中継システムを置いて、中継システム主導でのインベントリ情報の取得ができるのも同じです。

なお、一部のインベントリ情報は、クライアントで情報が更新された場合に、上位システムと接続するタイミングで情報を通知させることができます。管理者がジョブを実行することなく、最新のインベントリ情報を取得できるため、効率良くインベントリ情報を管理できます。

取得したインベントリ情報は、ほかのプログラムから次のように利用できます。

- JP1/NETM/Asset Information Manager の資産情報として利用できます。JP1/NETM/Asset Information Manager では、配布管理システムで取得した最新のインベントリ情報を、自動的に資産情報へ反映して管理できます。JP1/NETM/Asset Information Manager の資産情報としてインベントリ情報を利用する方法については、マニュアル「JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド」を参照してください。
- 取得したインベントリ情報を、バージョン 8 以前の JP1/Cm2 またはバージョン 7.5 以前の HP NNM

のネットワーク監視画面などから参照できます。

インベントリ情報の管理機能の詳細については、「2.2 インベントリ情報の取得」および「2.3 インベントリ情報の管理」を参照してください。

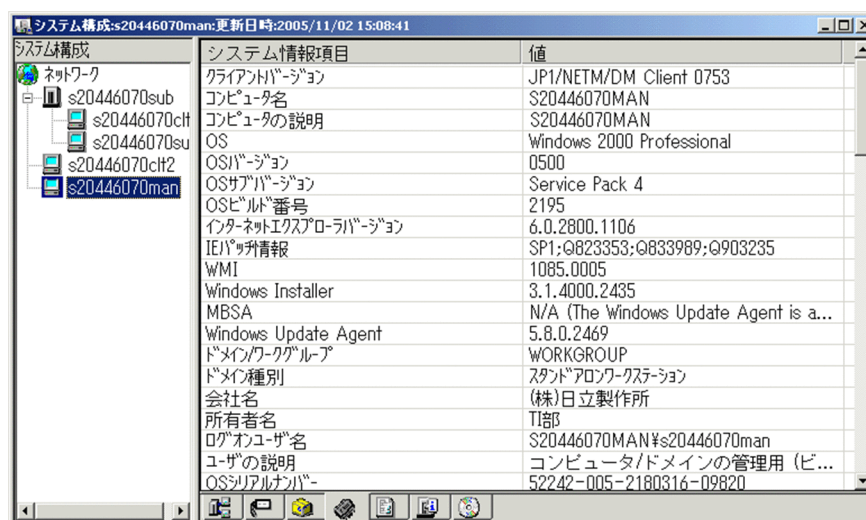
(1) 取得できるインベントリ情報の種類

取得できるインベントリ情報は、次の 4 種類です。

システム情報

空きハードディスク容量、OS、レジストリ情報など、ハードウェアに関する多様な情報を取得できます。

図 1-7 「システム構成」ウィンドウ（システム情報）



取得できるシステム情報の種類については、「2.2.1(1) Windows のクライアントから取得できるシステム情報」および「2.2.1(2) UNIX のクライアントから取得できるシステム情報」を参照してください。

ソフトウェア情報

クライアントにインストールされているソフトウェアの種類やバージョンなどを取得できます。

Windows の [コントロールパネル] の [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されているソフトウェア情報だけを管理したり、クライアントにインストールされているソフトウェアをファイル名で検索したりできます。また、ウィルス対策製品については、常駐／非常駐の設定やウィルス定義ファイルのバージョンなども把握できます。

さらに、クライアントのコンピュータに適用されているパッチや、適用されていないパッチの情報を取得して、ソフトウェアの情報と同様に管理することもできます。パッチ情報は、WUA または MBSA 1.2.1 の機能を利用して取得します。

図 1-8 「システム構成」 ウィンドウ (ソフトウェア情報)

ソフトウェア名	識別ID	インス...	新...	旧...	インストール日時/ソフトウェア検索日時
Adobe Acrobat 4.0	WUA-ADOBEA...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Adobe Acrobat Reader	ACROBAT-REA...	完了	4...	0...	01/03/02 13:38:15
DiskX Zip	WUA-DISKXZIP...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Address Cl...	GMX5-IDS9/A...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Agent Cile...	GMX5-IDS9/G...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Client Ver...	GMX5-IDS9...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Document...	GMX5-IDS9/D...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Integrated...	GMX5-IDS9/ID...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Mail Client...	GMX5-IDS9/M...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Groupmax Workflow...	GMX5-IDS9/W...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Internet Information ...	MS-IIS	完了	5...	0...	01/03/02 13:39:06
JP1/NETM/DM Man...	P-2642-1164	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Microsoft Excel	EXCEL	完了	9...	0...	01/03/02 13:38:19
Microsoft Internet Ex...	WUA-IE4024	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Microsoft Office	MICROSOFT-O...	完了	9...	0...	01/03/02 13:38:18
Microsoft Office 200...	WUA-00020411...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Microsoft Outlook	OUTLOOK	完了	9...	0...	01/03/02 13:38:19
Microsoft Outlook Ex...	WUA-OUTLOO...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Microsoft SQL Server	MS-SQLSERVER	完了	7...	0...	01/03/02 13:38:08
Microsoft SQL Serve...	WUA-MICROSO...	完了	0...	0...	01/03/02 13:38:03
Microsoft Visual C++...	MS-VISUAL-C-4	完了	0...	0...	01/03/02 13:39:11

取得できるソフトウェア情報の種類については、「2.2.2(1) 取得できるソフトウェア情報」を参照してください。

ユーザインベントリ情報

PC の使用者名、資産番号など、システム管理者が独自に設定した項目を管理できます。ユーザ情報はクライアントユーザが入力し、配布管理システムで取得しますが、配布管理システム側で一括して入力することもできます。

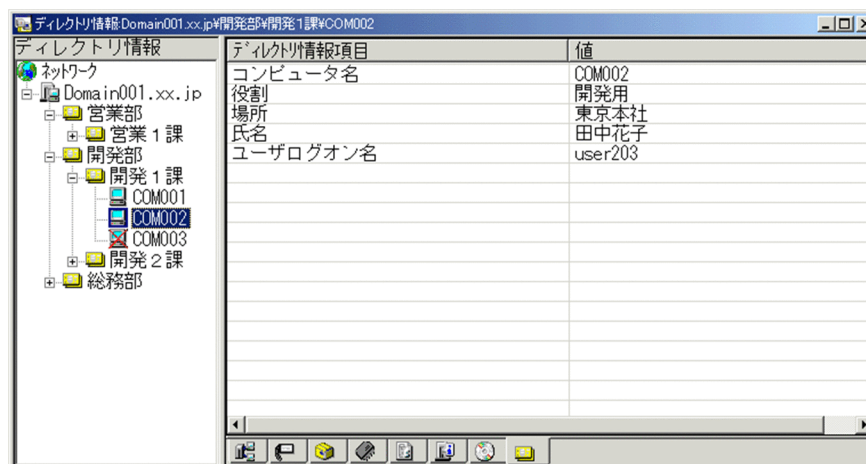
図 1-9 「システム構成」 ウィンドウ (ユーザインベントリ情報)

ユーザインベントリ項目	値
年齢	28
電話番号	012-345-6789
氏名	池田
所属	金融ミドルウェア開発グループ
担当	JP1_NETM_DMの開発
業務年数	5
ユーザインベントリ情報転送日時	2003/03/04 09:08:51
ユーザインベントリ情報最終更新日時	2003/03/04 09:10:34

ディレクトリ情報

Active Directory から取得したユーザやコンピュータの情報を、Active Directory 上での階層構造に従って管理できます。

図 1-10 「ディレクトリ情報」 ウィンドウ (ディレクトリ情報)



(2) インベントリ情報の利用方法

取得したインベントリ情報は、項目別に集計したり、集計結果をグラフ表示したりできます。また、必要な情報だけを CSV 形式ファイルに保存したり、印刷したりできます。次に、具体的な利用方法の例を示します。

ハードウェアやソフトウェアの使用状況を管理する

ハードウェア情報やソフトウェア情報を条件にして、該当するクライアントの台数を集計できます。ハードディスクやメモリの容量ごとに集計すれば、PC の購入計画を立てるときなどに便利です。

図 1-11 「集計」 ウィンドウ (空きハードディスク容量ごとに集計)



ソフトウェアのライセンスを管理する

ソフトウェアの種類ごとに、インストールされているクライアントの台数を集計できます。集計した情報は、ソフトウェアのライセンス管理やバージョンアップ時などに利用できます。

図 1-12 「集計」 ウィンドウ（インストールされているソフトウェアの種類ごとに集計）

ソフトウェア名称	台数	所有ライセンス	警告ライセンス		OS	CPU
Groupmax Form Clie...	29	30	28	1	Windows NT Wor	Intel Penti
Groupmax Scheduler...	29	30	28	2	Windows NT Wor	Intel Penti
JP1/NETM/DM	1	5	4	3	Windows NT Wor	Intel Penti
JP1/NETM/DM Client	51	50	45	4	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft (R) Visual ...	9	10	8	5	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft SQL Server	1	20	18	6	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft SQL Serve...	8	18	15	7	Windows NT Wor	Intel Penti
Rational Visual Test	1	5	4	8	Windows NT Wor	Intel Penti

業務目的に合わせて集計する

ソフトウェアのインストール状況や稼働状況を、クライアントの情報と関連づけて集計できます。業務目的に合わせて検索条件が用意されているので、それぞれの目的に合わせて、的確な集計結果を得ることができます。

図 1-13 ソフトウェア適用状況画面

資産番号	部署	ウィルス対策ソフトウェア名	ウィルス対策ソフトウェアバージョン
1000000001	本社/資産管理部	AntiVirus Corporate Edition 9.0	9.0.3.1000
1000000002	本社/営業部/営業1課	AntiVirus Corporate Edition 9.0	9.0.3.1000
1000000003	本社/資産管理部	AntiVirus Corporate Edition 9.0	9.0.3.1000
1000000004	本社/総務部/庶務課	AntiVirus Corporate Edition 9.0	9.0.3.1000

資産管理台帳として利用する

必要なインベントリ情報だけを表示して印刷できますので、資産管理台帳として利用できます。さらに、「日立エンドユーザ帳票作成機能 EUR」の帳票フォームを利用すると、JP1/NETM/DM が管理するインベントリ情報を容易に帳票に印刷できます。

インベントリ情報のデータを編集して利用する

インベントリ情報は、CSV 形式のファイルに出力できます。CSV 形式のデータは、表計算ソフトウェアなどに入力できるため、情報のソートや演算、レポートの作成などが容易になります。

インベントリ情報でクライアントをグルーピングする

同じインベントリ情報を持つクライアントをグルーピングして、ソフトウェアの配布先に指定できま

す。例えば、Microsoft Word 2000 がインストールされているクライアントをグルーピングして、Microsoft Word 2003 をリモートインストールするときの配布先に指定できます。

(3) スタンドアロン PC からのインベントリ情報の取得

JP1/NETM/DM は、ネットワークを介してソフトウェアの配布やインベントリ情報の管理を実現するシステムですが、ネットワークを介さないで、スタンドアロンで使用している PC からインベントリ情報を取得することもできます。ネットワーク内の PC と同様に、ネットワーク外の PC のインベントリ情報も管理したい場合に便利です。インベントリ情報の取得対象となるのは、JP1/NETM/DM Client（クライアント）がインストールされているスタンドアロン PC（**オフラインマシン**）です。

オフラインマシンからインベントリ情報を取得するには、まず、配布管理システムでインベントリ情報取得プログラムを作成し、FD、CD-R、MO などの媒体に格納します。そして、その媒体をオフラインマシンに搬送し、インベントリ情報を取得します。取得したインベントリ情報は媒体に格納して回収し、配布管理システムに入力して管理します。

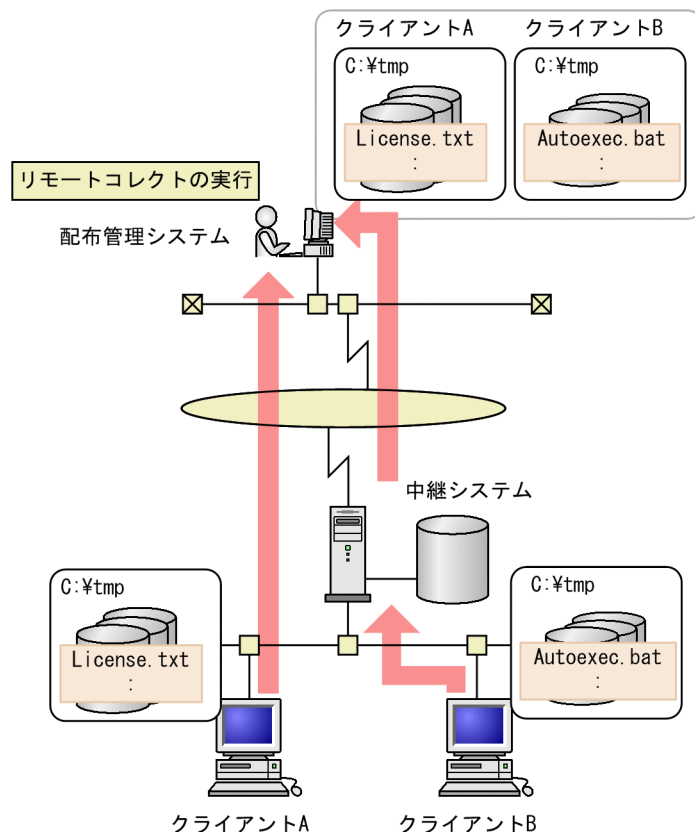
1.2.3 ファイルの収集

クライアントのファイルをセンタサーバに収集（**リモートコレクト**）できます。この機能を利用すると、例えば、次のような運用ができます。

- クライアントの業務データを一括収集して業務に利用できます。
- クライアントのアプリケーションのトラブル情報やログ情報を収集して解析し、トラブルシューティングを支援できます。

ファイルを収集するには、ソフトウェアの配布と同様に、配布管理システムから、収集を指示するジョブを作成・実行します。間に中継システムを置いて、収集の中継や中継システム主導でのファイルの収集ができるのも同じです。ファイルの収集機能の概要を次の図に示します。

図 1-14 ファイルの収集機能



ファイルは、圧縮またはアーカイブして収集されます。圧縮またはアーカイブしてリモートコレクトしたファイルは、そのままでは読み書きできないため、JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client (中継システム) の**アンアーカイバ**と呼ばれる機能を使用して、元の形に復元する必要があります。

ファイルの収集機能の詳細については、「2.4 ファイルの収集 (リモートコレクト)」を参照してください。

1.2.4 ソフトウェアの稼働状況の監視

ソフトウェアの稼働状況を監視するジョブを実行することで、クライアントでソフトウェアの起動を抑止したり、ソフトウェアの操作履歴や稼働時間を取得したりできます。例えば、クライアントでの印刷や USB メモリへのデータのコピーを抑止することで、機密情報の持ち出しを防ぐことができます。また、Web サイトへのアクセスログを取得して、情報漏えいの危険性の高い Web サイトへのアクセスを監視することもできます。

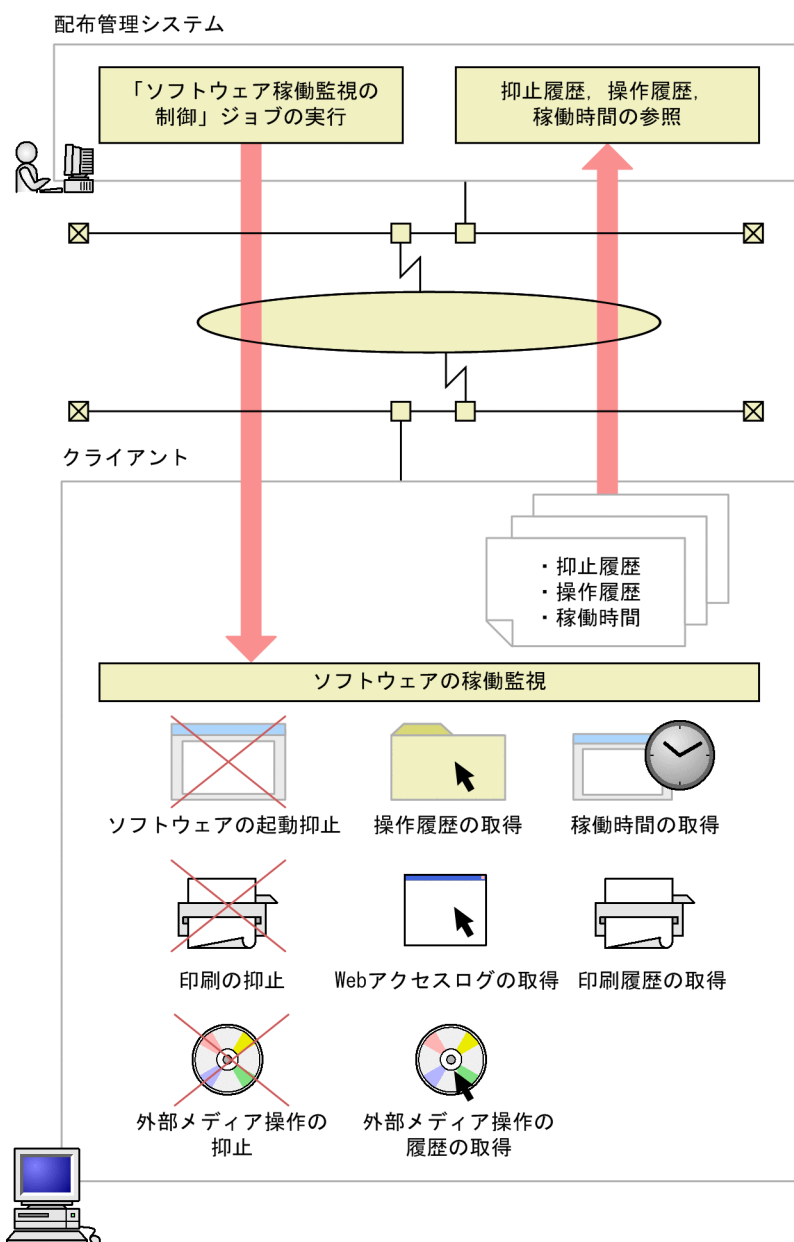
取得した抑止履歴および操作履歴は、一定期間に実施された操作や特定の操作だけを表示して確認できます。また、特定のファイルに対する操作の履歴を追跡することもできます。

取得した稼働時間からは、ソフトウェアごとの利用状況を確認できます。

ソフトウェアの稼働状況を監視することで、ソフトウェアの利用状況の把握や不正利用の追跡調査・特定が容易になります。

ソフトウェアの稼働状況の監視機能の概要を次の図に示します。

図 1-15 ソフトウェアの稼働監視



ソフトウェアの稼働状況を監視する機能の詳細については、「2.5 ソフトウェアの稼働状況の監視」および「2.6 ソフトウェアの稼働情報の管理」を参照してください。

なお、ソフトウェアの稼働状況の監視機能は、オフラインマシンを対象にして、操作履歴や抑止履歴、稼働時間を取得できます。オフラインマシンでのソフトウェアの稼働状況を監視する機能の詳細については、「2.5.12 スタンドアロン PC の稼働状況の監視」を参照してください。

1.2.5 クライアントの管理

JP1/NETM/DM から、Microsoft 社が提供するパッチを取得して、クライアントに配布、適用できます。また、クライアントに適用されているパッチの情報を取得して管理できます。

WSUS と連携して、クライアントの更新プログラムを管理することもできます。また、クライアントのシ

システムの状態を監視したり、配布管理システムからクライアントへメッセージを通知したりできます。

AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合、AMT の機能を利用してクライアントを制御できます。

(1) パッチの適用状況の管理

JP1/NETM/DM では、配布管理システムから Microsoft 社が提供する更新プログラムや Service Pack などの**パッチ**を取得できます。取得したパッチはリモートインストールを利用してクライアントに適用できます。また、クライアントに適用されているパッチの情報（**パッチ情報**）を取得することもできます。このように、JP1/NETM/DM ではパッチの取得から適用状況の管理までの作業を一元管理できます。

JP1/NETM/DM でパッチの適用状況を管理することで、WSUS を導入することなく、パッチの適用によるシステムのセキュリティ管理を実現できます。

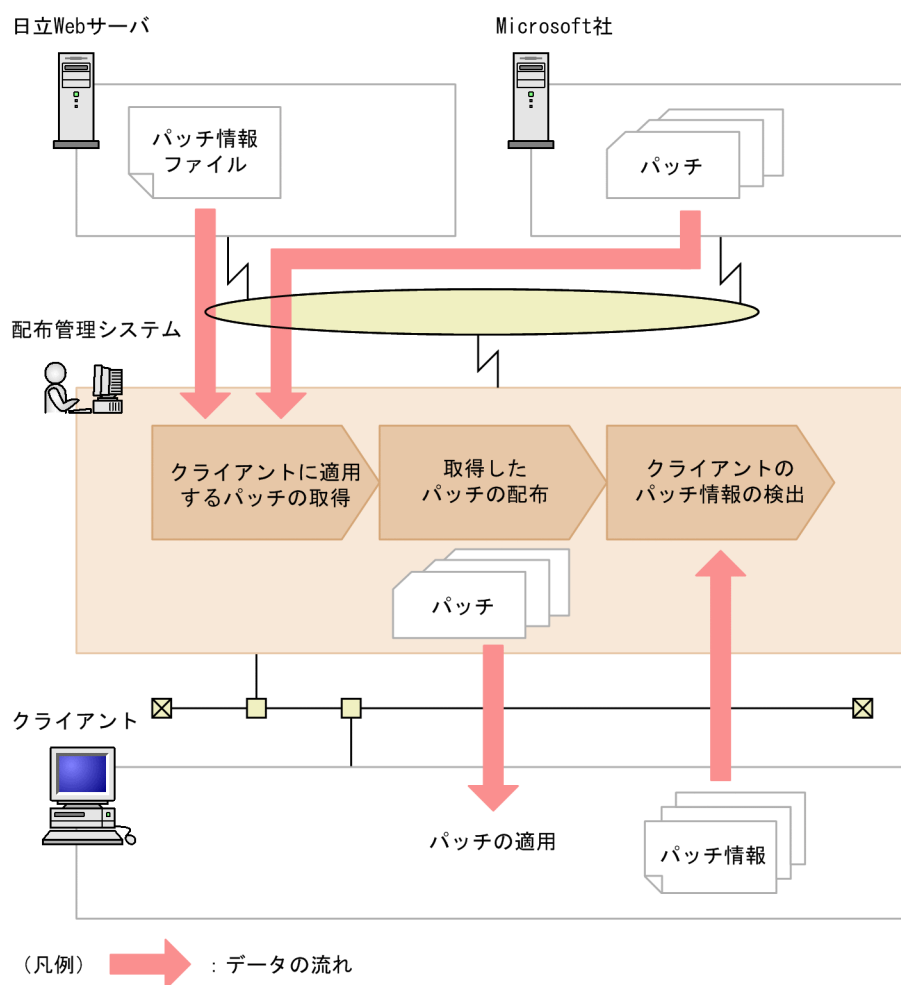
なお、パッチを取得するためには、弊社サポートサービスが提供する日立 Web サーバへ接続して、**パッチ情報ファイル**を取得しておく必要があります。パッチ情報ファイルには、Microsoft 社から提供されているパッチの情報が記述されています。この情報を基に Microsoft 社からパッチのデータを取得します。なお、パッチ情報ファイルは、Microsoft 社からのパッチの提供状況に応じて更新されます。

！ 注意事項

日立 Web サーバからパッチ情報ファイルを取得するには、弊社サポートサービスの契約が必要です。弊社サポートサービスの契約については、弊社担当営業にお問い合わせください。

パッチの適用状況を一元管理する流れを次の図に示します。

図 1-16 パッチの適用状況を一元管理する流れ



パッチの適用状況の管理は、次の三つの作業に分けられます。

- クライアントに適用するパッチの取得
- 取得したパッチの配布
- クライアントのパッチ情報の検出

それぞれについて説明します。

(a) クライアントに適用するパッチの取得

日立 Web サーバから取得したパッチ情報ファイルを基に、必要に応じてパッチを取得します。JP1/NETM/DM では、パッチの取得状況を管理したり、パッチの自動取得を設定したりできます。また、取得したパッチを、自動的にパッケージングすることもできます。

パッチを取得する機能の詳細については、「2.7.1 クライアントに適用するパッチの取得」を参照してください。

(b) 取得したパッチの配布

取得したパッチは、ソフトウェアの配布機能を利用して、クライアントに適用します。なお、パッチ取得時に自動的にパッケージを作成できるため、パッケージングの作業は不要です。

ソフトウェアの配布機能の詳細については、「2.1 ソフトウェアの配布（リモートインストール）」を参照

してください。

(c) クライアントのパッチ情報の検出

クライアントのパッチ情報は、WUA または MBSA 1.2.1 を利用して検出します。クライアントで検出されたパッチ情報は、ソフトウェア情報として取得・管理できます。

パッチ情報を検出する機能の詳細については、「2.7.2 クライアントのパッチ情報の検出」を参照してください。

(2) WSUS と連携した更新プログラムの管理

WSUS での更新プログラムの管理作業の一部を JP1/NETM/DM から実行できます。

WSUS と連携することで、JP1/NETM/DM から WSUS コンピュータグループを作成したり、更新プログラムの承認状態を変更したりできます。これによって、WSUS の更新プログラムを管理する手間を軽減できます。

WSUS と連携する機能の詳細については、「2.7.3 WSUS と連携した更新プログラムの管理」を参照してください。

(3) クライアントのシステムの監視

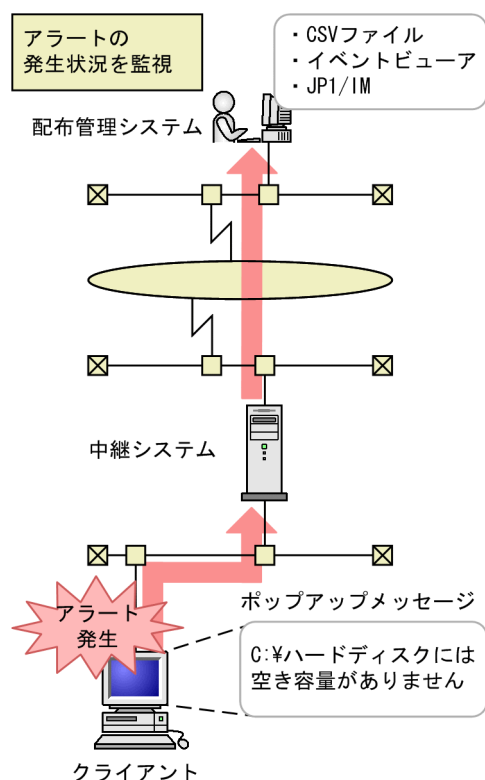
クライアントのハードディスクやメモリの空き容量に異常が発生したとき、アラートをセンタサーバに通知させて、ファイルやビューアで確認できます。そのため、システム管理者がクライアント全体のシステムの状態を監視できます。

また、クライアント側のユーザも、ポップアップメッセージなどでアラートの発生を知ることができ、ローカルなシステム管理に役立ちます。

アラートを通知させるには、クライアント側で**システム監視機能**を起動させ、上位の JP1/NETM/DM システムにアラートを通知するように設定します。アラート情報は、配布管理システムとの間に中継システムがある場合でも中継されます。そのため、配布管理システムおよび中継システムでは、下位のすべてのクライアントに関するアラート発生状況を監視できます。

クライアントのシステム監視の概要を次の図に示します。

図 1-17 クライアントのシステム監視



配布管理システムおよび中継システムでは、アラートの情報を CSV 形式のファイルや Windows NT のイベントビューアから確認できます。また、JP1/IM に通知することもできます。

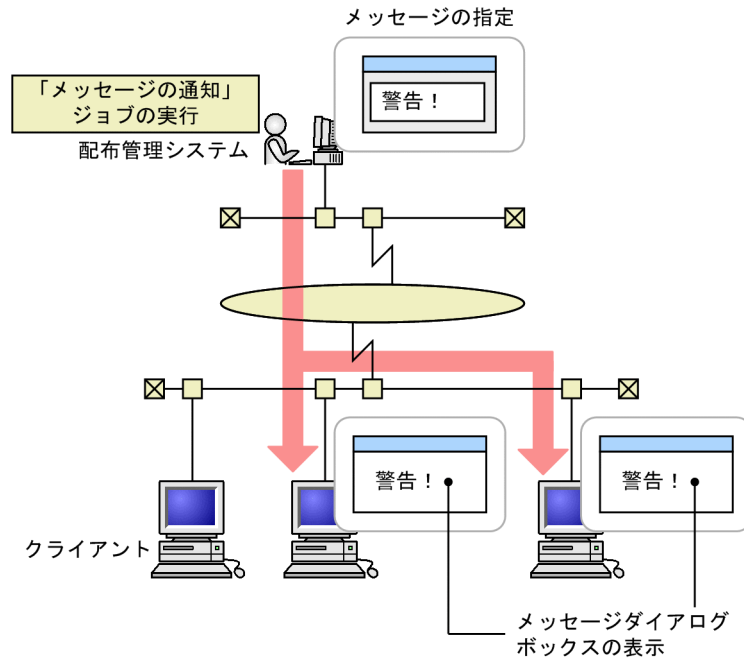
アラート通知を利用してクライアントのシステムを監視する機能の詳細については、「2.7.4 クライアントのシステム監視」を参照してください。

(4) クライアントへのメッセージ通知

管理者がクライアントのユーザに注意や警告などの情報を通知したい場合、「メッセージの通知」ジョブを実行することで、ジョブのあて先のクライアントにメッセージを通知できます。メッセージの内容は任意に指定できます。メッセージの形式は、テキスト形式または HTML 形式のファイルを選択できます。また、パッケージを配布する必要がなく、クライアントで確認されたメッセージは削除されるため、クライアントの PC の容量を圧迫しません。セキュリティ対策が不十分な特定のクライアントに警告メッセージを通知する場合や、システムのメンテナンス情報をクライアントに一括して通知する場合に便利です。

クライアントへのメッセージ通知の概要を次の図に示します。

図 1-18 クライアントへのメッセージ通知



クライアントへメッセージを通知する機能の詳細については、「2.7.5 クライアントへのメッセージ通知」を参照してください。

(5) AMT を利用したクライアントの制御

AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合、JP1/NETM/DM のコンポーネント「AMT 連携機能」を使用すると、AMT の電源制御の機能を利用してクライアントを制御できます。ただし、無線 LAN 環境のクライアントに対しては、電源制御の機能は利用できません。

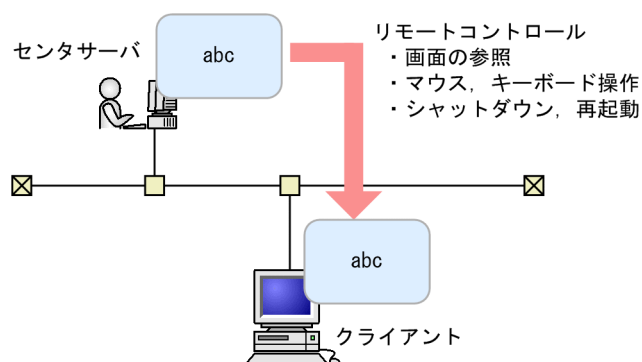
また、クライアントが再インストールされても同じ資産として認識できるように設定できます。電源がオフのクライアントをリモートコントロールして、BIOS を設定したり、マネージャのコンピュータに挿入されている FD から診断プログラムを実行したりできます。

AMT を利用したクライアントの制御の詳細については、「2.7.6 AMT を利用したクライアントの制御」を参照してください。

1.2.6 クライアントのリモートコントロール

クライアントの画面をセンタサーバの画面上に呼び出して遠隔操作（リモートコントロール）できます。呼び出したクライアントの画面に対して、キーボードやマウスでの操作ができるほか、クライアントのシャットダウンや再起動を指示できます。クライアントのリモートコントロール機能の概要を次の図に示します。

図 1-19 リモートコントロール機能



この機能を利用すると、例えば、次のような運用ができます。

- **クライアントのトラブル対策をサーバ上で実行する**

遠隔地のクライアントで動作しているプログラムにトラブルが発生した場合、わざわざ現地に足を運ぶことなく、サーバ側で原因を調査して、トラブルに対応できます。

- **クライアントのリモートメンテナンスを行う**

クライアントにインストールされているプログラムのセットアップやアンインストール、設定情報の変更などをサーバ側から実行できます。

リモートコントロール機能の詳細については、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

1.2.7 他プログラムとの連携

他プログラムと連携することで、次に示す管理業務を実現できます。

- **JP1/Base と連携したユーザ管理**

JP1/Base のユーザ管理機能を利用して、JP1/NETM/DM を使用するユーザを管理できます。ユーザごとに権限を設定したアカウントを作成することで、JP1/NETM/DM を使用する機能を制限できます。JP1/Base と連携する機能の詳細については、「2.14.1 JP1/Base と連携した JP1/NETM/DM のユーザ管理」を参照してください。

- **JP1/NETM/Asset Information Manager からのソフトウェア適用管理**

JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面から、JP1/NETM/Asset Information Manager で管理している機器に対してソフトウェアを配布したり、ソフトウェアの配布状況を参照したりできます。

JP1/NETM/Asset Information Manager と連携する機能の詳細については、「2.14.2 JP1/NETM/Asset Information Manager からのソフトウェア適用管理」を参照してください。

- **JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理**

JP1/NETM/Client Security Control を導入したセキュリティ管理システムでは、JP1/NETM/DM で収集したインベントリ情報を利用して、クライアントのセキュリティ対策状況を監視します。セキュリティ対策に問題があった場合は、JP1/NETM/DM の機能を利用して対策できます。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する機能の詳細については、「2.14.3 JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理」を参照してください。

- **JP1/IM からの JP1/NETM/DM 管理**

JP1/IM の画面から、ソフトウェアを配布したり、ソフトウェアの配布状況を参照したりできます。

JP1/IM と連携する機能の詳細については、「2.14.4 JP1/IM からの JP1/NETM/DM の管理」を参照し

てください。

● **JP1/Cm2 または HP NNM からの JP1/NETM/DM 管理**

バージョン 8 以前の JP1/Cm2 またはバージョン 7.5 以前の HP NNM の監視画面から、ソフトウェアの配布状況やクライアントのインベントリ情報を参照できます。

JP1/Cm2 または HP NNM と連携する機能の詳細については、「2.14.5 JP1/Cm2 または HP NNM からの JP1/NETM/DM 管理」を参照してください。

● **JP1/AJS と連携したジョブの自動実行**

JP1/AJS と連携してソフトウェアの配布を自動化できます。JP1/NETM/DM では、バックグラウンドで実行されるコマンドインターフェースを用意しています。

JP1/AJS と連携する機能の詳細については、「2.14.6 JP1/AJS と連携したジョブの自動実行」を参照してください。

● **JP1/NETM/DM の秘文連携機能を使った、JP1/ 秘文および秘文の管理**

秘文連携機能を使って、クライアントにインストール済みの JP1/ 秘文および秘文の詳細情報を取得したり、JP1/ 秘文および秘文のインストール可否をチェックしたりできます。また、JP1/ 秘文および秘文のログを収集できます。

秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理の詳細については、「2.14.7 秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理」を参照してください。

● **JP1/NETM/Audit - Manager と連携した監査ログの管理**

JP1/NETM/DM Manager を使用して、「だれが」、「いつ」、「どのような操作を実行したか」を示す**監査ログ**を出力できます。JP1/NETM/Audit - Manager から、システム全体の監査ログを取得して内部統制の評価と監査を実施するためには、JP1/NETM/DM Manager で監査ログを出力する必要があります。

JP1/NETM/Audit - Manager と連携した監査ログの管理の詳細については、「2.14.8 JP1/NETM/Audit - Manager からの監査ログの管理」を参照してください。

1.3 JP1/NETM/DM のシステム構成要素

ここでは、JP1/NETM/DM のシステム構成要素について説明します。

また、JP1/NETM/DM のプログラムとシステム構成要素の関係や、運用方法ごとに知っておく必要があるシステム構成要素についても説明します。

1.3.1 基本的なシステム構成要素

JP1/NETM/DM のシステムは、次の要素で構成されています。

配布管理システム

システムの最上位に位置し、配下のシステムにソフトウェアの配布やインベントリ情報の取得を指示するジョブを実行する機能を持つシステムを「**配布管理システム**」と呼びます。

ジョブを実行するだけでなく、ジョブの実行状況を確認したり、取得したインベントリ情報を参照・集計したりして、配下のシステムを管理できます。

中継するシステム

配布管理システムとクライアントの間に位置し、配布管理システムから実行されたジョブを配下のシステムへ中継する機能を持つシステムを「**中継するシステム**」と呼びます。

ジョブを中継する機能に加え、配下のシステムへジョブを実行する配布管理システムの機能と、ジョブを受信するクライアントの機能も持っています。

中継するシステムの配下に、クライアントのほか、中継するシステムをさらに設置することもできます。

クライアント

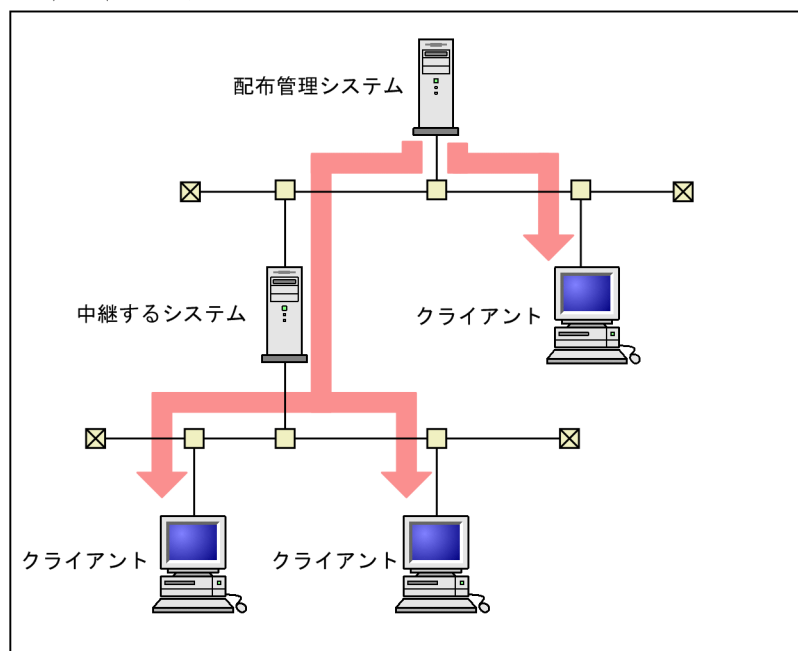
配布管理システムおよび中継するシステムの下位に位置し、配布管理システムから実行されたジョブを受信・実行し、実行結果を通知する機能を持つシステムを「**クライアント**」と呼びます。

配布されたソフトウェアをインストールしたり、インベントリ情報を配布管理システムに通知したりできます。

JP1/NETM/DM システムでの、配布管理システム、中継するシステム、およびクライアントの関係を次の図に示します。

図 1-20 JP1/NETM/DM システムの構成要素の関係

JP1/NETM/DMシステム

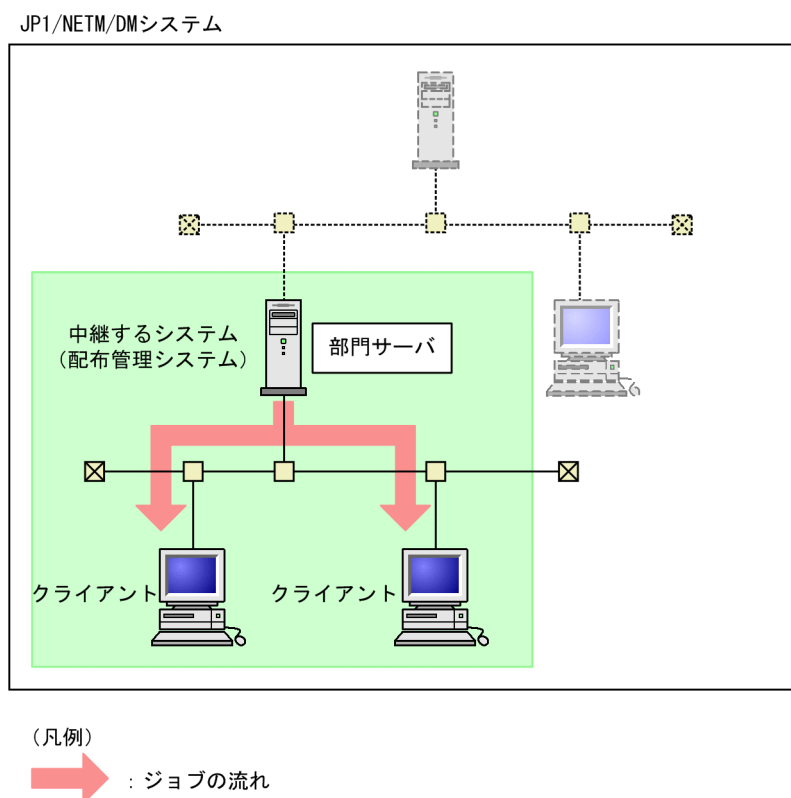


(凡例)

 : ジョブの流れ

なお、JP1/NETM/DM システム全体の中で、一つの部門サーバが管理するシステムを見たとき、中継するシステムが、そのシステム内での配布管理システムとしての役割を持ちます。

図 1-21 JP1/NETM/DM システムの構成要素の関係（部門サーバが管理するシステム）



1.3.2 プログラムとシステム構成要素の関係

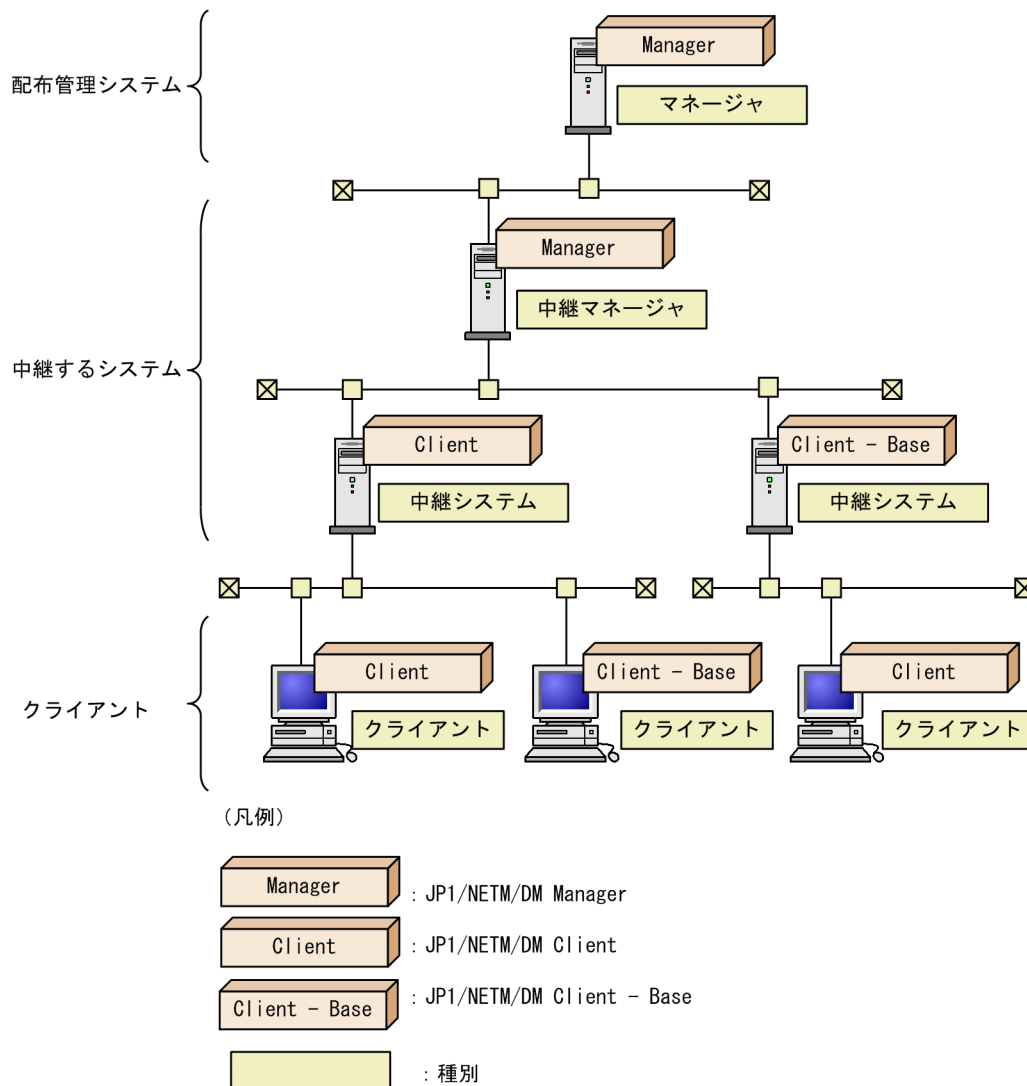
JP1/NETM/DM のシステムを構成するプログラムには、次に示す 3 種類のプログラムがあります。

- JP1/NETM/DM Manager
- JP1/NETM/DM Client
- JP1/NETM/DM Client - Base

JP1/NETM/DM のシステムを構築する際、配布管理システム、中継するシステム、およびクライアントの各システム構成要素へ、用途に応じたプログラムをインストールします。

JP1/NETM/DM の各プログラムとシステム構成要素の関係を次の図に示します。

図 1-22 プログラムとシステム構成要素の関係



次に、プログラムの種類とシステム構成要素で使えるプログラムについて説明します。

(1) プログラムの種類

JP1/NETM/DM のプログラムについて、それぞれ説明します。

(a) JP1/NETM/DM Manager

JP1/NETM/DM が提供するすべての資産・配布管理の機能を使用でき、配下の中継するシステムおよびクライアントを管理するプログラムです。JP1/NETM/DM システムの配布管理システムとして使用します。システムの最上位にある JP1/NETM/DM Manager を、「**マネージャ**」と呼びます。

また、JP1/NETM/DM Manager を中継するシステムとして使用することもできます。JP1/NETM/DM Manager の中継するシステムを「**中継マネージャ**」と呼びます。

(b) JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムの中継するシステム、またはクライアントとして使用するプログラムです。インストール時に、中継するシステムとして使用するか、クライアントとして使用するかを選択できます。

JP1/NETM/DM Client の中継するシステムを「**中継システム**」と呼びます。

(c) JP1/NETM/DM Client - Base

JP1/NETM/DM Client と同様に、JP1/NETM/DM システムの中継するシステム、またはクライアントとして使用するプログラムです。インストール時に、中継するシステムとして使用するか、クライアントとして使用するかを選択できます。JP1/NETM/DM Client - Base の中継するシステムも、JP1/NETM/DM Client の中継するシステムと同様に「**中継システム**」と呼びます。

JP1/NETM/DM Client - Base がインストールされたホストは、JP1/NETM/DM Client がインストールされたホストと比較して、次の機能が制限されます。

- ファイル操作、Web アクセス、印刷および外部メディア操作の履歴の取得機能
- 印刷および外部メディアの操作の抑止機能
- 日立プログラムプロダクト以外のソフトウェア配布、ファイル収集機能
- リモートコントロール機能

JP1/NETM/DM Client - Base がインストールされたホストでこれらの機能を使用する場合は、次に示すプログラムを別にインストールする必要があります。

● JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature

クライアントのファイル操作、Web アクセス、印刷および外部メディア操作の履歴を取得する場合に必要なプログラムです。また、印刷および外部メディアの操作を抑止する場合にも必要なプログラムです。

● JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature

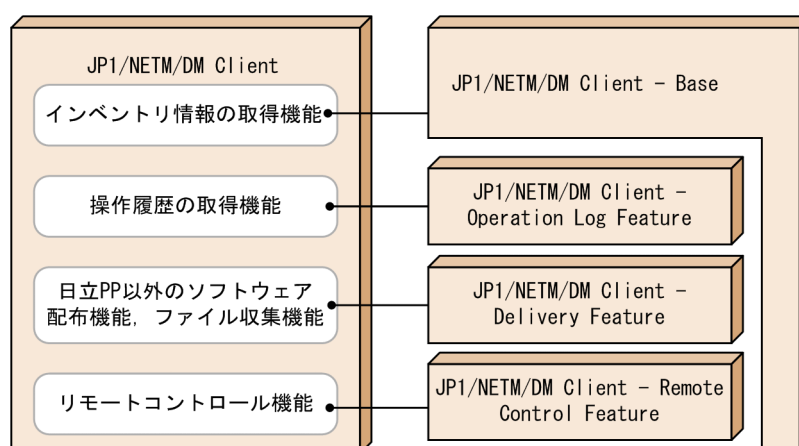
日立プログラムプロダクト以外のソフトウェアを配布したり、クライアントのファイルを収集したりする場合に必要なプログラムです。

● JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature

リモートコントロール機能を使用する場合に必要なプログラムです。

JP1/NETM/DM Client と、JP1/NETM/DM Client - Base の機能とプログラム構成の関係を次の図に示します。

図 1-23 JP1/NETM/DM Client - Base の機能とプログラム構成



JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異の詳細については、「付録 D.2 JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異」を参照してください。

(2) システム構成要素で利用できるプログラム

システム構成要素（配布管理システム、中継するシステム、およびクライアント）で利用できるプログラムと種別を次の表に示します。

表 1-1 システム構成要素で利用できるプログラム

システム構成要素	利用できるプログラム	種別 [※]
配布管理システム	JP1/NETM/DM Manager	- マネージャ - 中継マネージャ
	JP1/NETM/DM Client	中継システム
	JP1/NETM/DM Client - Base	
中継するシステム	JP1/NETM/DM Manager	中継マネージャ
	JP1/NETM/DM Client	中継システム
	JP1/NETM/DM Client - Base	
クライアント	JP1/NETM/DM Client	クライアント
	JP1/NETM/DM Client - Base	

注※ 種別は、プログラムをインストールする際に選択します。プログラムのインストールについては、マニュアル「構築ガイド」の「2. JP1/NETM/DM Manager をインストールする」または「3. JP1/NETM/DM Client をインストールする」を参照してください。

(a) 配布管理システムで利用できるプログラム

基本的に、配布管理システムには、管理者用のプログラムである JP1/NETM/DM Manager を使用します。本社のセンタサーバなど、JP1/NETM/DM のシステム全体を管理するプログラムとして利用できます。

JP1/NETM/DM Client または JP1/NETM/DM Client - Base をシステムの最上位に配置し、配布管理システムとして使用することもできます。ただし、JP1/NETM/DM Manager の配布管理システムに比べ、管理できるクライアントの台数や使用できる機能などに制限があります。このため、管理対象のクライアントが数十台といった小規模なシステムで使用してください。

JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client の配布管理システムの機能差異については、「付録 D.1 JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異」を参照してください。

(b) 中継するシステムで利用できるプログラム

中継するシステムには、JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）、JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM Client - Base（中継システム）を使用できます。

中継するシステムとしてどのプログラムを使用するかは、プログラムのインストール時に選択します。

中継システムは、中継マネージャに比べ、管理できるクライアントの台数や使用できる機能などに制限があります。中継するシステムからも JP1/NETM/DM Manager の配布管理システムと同じようにクライアントを管理したい場合は、中継マネージャを使用します。中継マネージャと中継システムの機能差異については、「付録 D.1 JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異」を参照してください。

(c) クライアントで利用できるプログラム

JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base はどちらもクライアントとして使用できます。

1.3.3 ソフトウェアを配布する場合のシステム構成要素

ソフトウェアを配布する場合のシステム構成は、基本的なシステム構成要素に加え、配布するソフトウェアを配布管理システムに登録する**パッケージャ**から成り立っています。

パッケージャ

パッケージャは、配布するソフトウェアを配布管理システムに登録するためのシステムです。JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client のコンポーネントの一つです。

パッケージャは、配布管理システム、中継するシステム、またはクライアントと同じ PC にインストールできます。また、パッケージャ専用の PC にインストールしても動作します。ソフトウェアを配布する場合は、パッケージャをインストールした PC がシステム構成内に少なくとも 1 台は必要です。

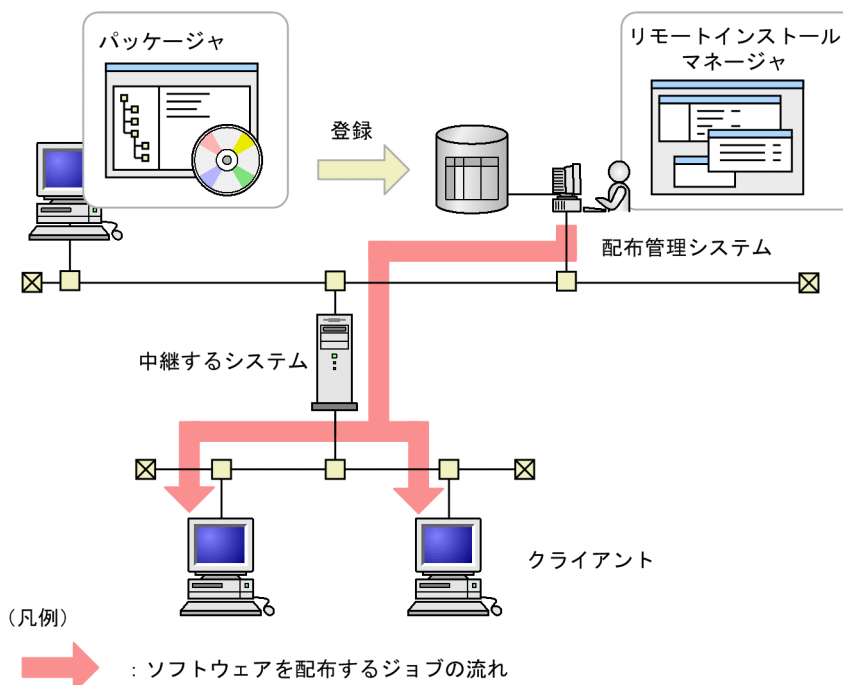
配布管理システムは、パッケージャから登録されたソフトウェアをクライアントにリモートインストールします。

リモートインストールを指示するジョブを、配布管理システムの GUI 上から作成・実行する場合は、**リモートインストールマネージャ**を使用します。リモートインストールマネージャは、ソフトウェアの配布だけでなく、インベントリ情報の管理やソフトウェアの稼働状況の監視などでも使用します。

なお、中継するシステムまたはクライアントに JP1/NETM/DM Client - Base を使用している場合、日立プログラムプロダクト以外のソフトウェアを配布するには、JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature がインストールされている必要があります。

ソフトウェアを配布する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 1-24 ソフトウェアを配布する場合のシステム構成



1.3.4 インベントリ情報を管理する場合のシステム構成要素

インベントリ情報を管理する場合の基本的なシステム構成は、配布管理システム、中継するシステム、お

よびクライアントから成り立っています。

ただし、ネットワーク外の PC からインベントリ情報を取得する場合は、さらに次の二つの要素が加わります。

オフラインマシン

JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない、JP1/NETM/DM Client (クライアント) をインストールしている PC です。例えば次のような PC が挙げられます。

- スタンドアロンで使用していて、JP1/NETM/DM Client (クライアント) をインストールしている PC
- ネットワーク内で JP1/NETM/DM Client (クライアント) をインストールしているが、JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない PC

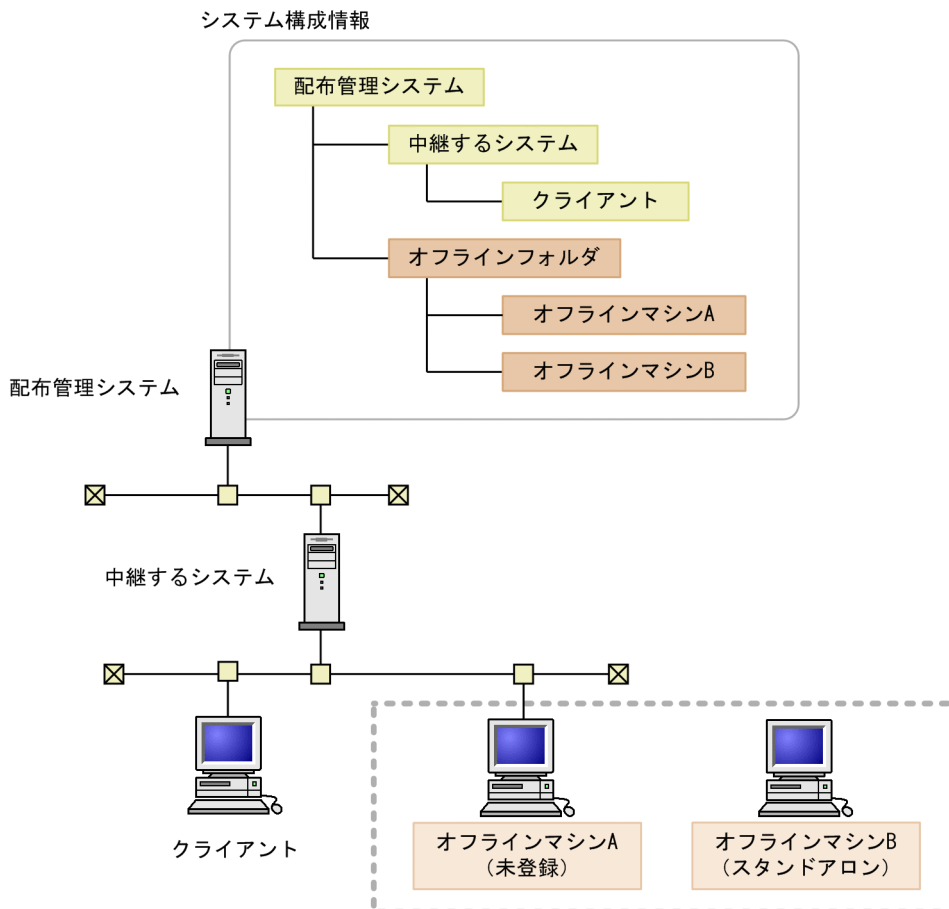
このようなシステム構成情報に登録していない PC から、インベントリ情報を取得できます。また、システム構成情報に登録していない PC に、ソフトウェアをインストールすることもできます。

オフラインフォルダ

オフラインマシンから取得したインベントリ情報を管理するためのフォルダです。システム構成情報には「{OFFLINE}」という名称で表示され、マシンが実在しない仮想の中継システムとして扱われます。このため、名称の変更や階層の移動などはできません。

インベントリ情報を管理する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 1-25 インベントリ情報を管理する場合のシステム構成



この図に示すシステム構成では、クライアントおよびオフラインマシンからインベントリ情報を取得でき

ます。取得したインベントリ情報は配布管理システムで管理します。オフラインマシンから取得したインベントリ情報については、オフラインフォルダの配下にまとめて管理します。

1.3.5 ソフトウェアの稼働状況を管理する場合のシステム構成要素

ソフトウェアの稼働状況を管理する場合の基本的なシステム構成は、配布管理システム、中継するシステム、およびクライアントから成り立っています。

この基本構成に加え、稼働状況の管理機能を拡張する「Asset Information Manager Limited」がシステム構成に加わります。

「Asset Information Manager Limited」

インベントリ情報を集計・参照する GUI を提供する、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントです。

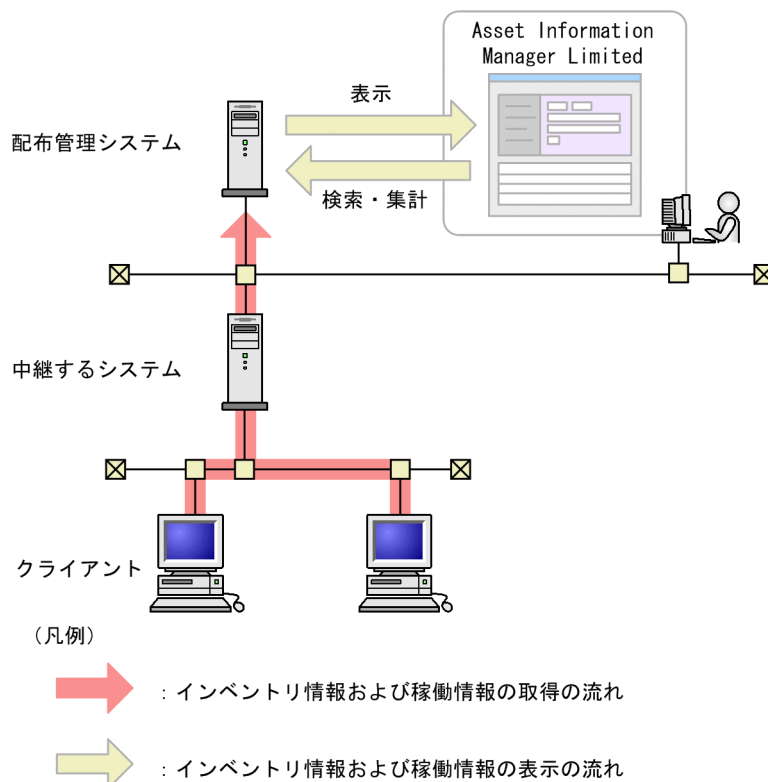
このコンポーネントをインストールすることで、リモートインストールマネージャから、ソフトウェアの稼働情報を表示する**ウィンドウ**を起動できるようになります。このウィンドウから、条件を指定して稼働情報を検索したり、稼働情報の集計結果を表示したりできます。

なお、「Asset Information Manager Limited」をインストールする PC には、リモートインストールマネージャも合わせてインストールする必要があります。

なお、操作履歴を取得するクライアントに JP1/NETM/DM Client - Base が使用されている場合、ファイル操作、Web アクセス、印刷および外部メディア操作の履歴を取得するときは、クライアントに JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature がインストールされている必要があります。

ソフトウェアの稼働状況を管理する場合のシステム構成要素を次の図に示します。

図 1-26 ソフトウェアの稼働状況を管理する場合のシステム構成



1.3.6 リモートコントロール機能を使用する場合のシステム構成要素

リモートコントロール機能を使用する場合のシステム構成は、リモートコントロール（遠隔操作）する側のシステム（リモートコントロールマネージャ）と、される側のシステム（リモートコントロールエージェント）から成り立っています。

リモートコントロールマネージャ

クライアントの画面の情報を呼び出し、リモートコントロールするプログラムです。
JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つです。

リモートコントロールエージェント

自システムの画面の情報をリモートコントロールマネージャに提供し、リモートコントロールされる側のプログラムです。

JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client のコンポーネントの一つです。

リモートコントロールマネージャおよびリモートコントロールエージェントは、クライアントや配布管理システムなど、JP1/NETM/DM のほかの機能がインストールされている PC にインストールできます。また、リモートコントロールマネージャは、配布管理システムや中継するシステムと別のコンピュータにインストールすることもできます。なお、リモートコントロール機能だけを使用する場合は、JP1/NETM/Remote Control を使用できます。

中継するシステム、またはクライアントに JP1/NETM/DM Client - Base を使用している場合、リモートコントロール機能を使用するためには、JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature をインストールする必要があります。

リモートコントロールの動作環境を次の表に示します。

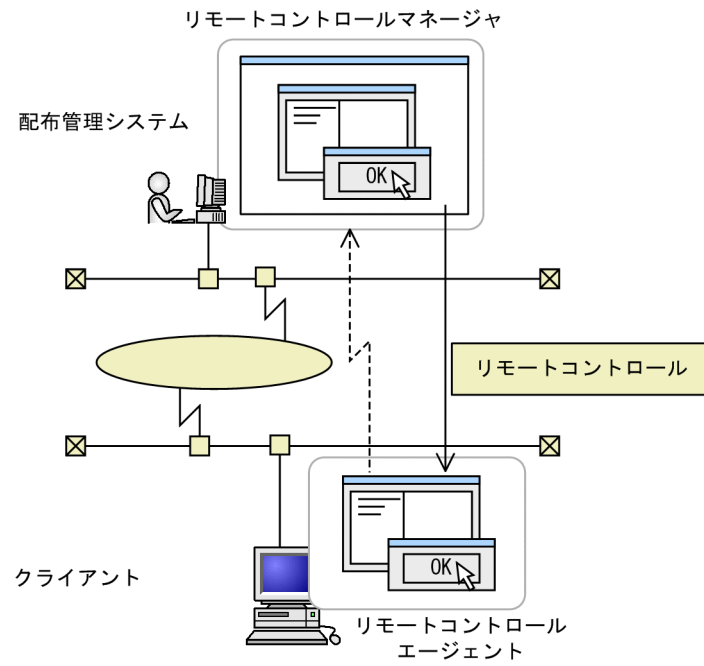
表 1-2 リモートコントロールの動作環境

プログラム	リモートコントロールマネージャ	リモートコントロールエージェント	動作環境
JP1/NETM/DM Manager (マネージャ)	○	—	• Windows 8 • Windows Server 2012 • Windows 7 • Windows Server 2008 • Windows Vista • Windows Server 2003 • Windows XP Professional • Windows 2000
JP1/NETM/DM Manager (中継マネージャ)	○	○	
JP1/NETM/DM Client (中継システム)	—	○	• Windows 8 • Windows Server 2012 • Windows 7 • Windows Server 2008 • Windows Vista • Windows Server 2003 • Windows XP Professional • Windows 2000 • Windows NT 4.0
JP1/NETM/DM Client (クライアント)	—	○	Windows

(凡例) ○：インストールできる —：インストールできない

リモートコントロール機能でのシステム構成を次の図に示します。

図 1-27 リモートコントロール機能でのシステム構成



2

JP1/NETM/DM の機能

この章では、JP1/NETM/DM の機能の詳細を説明します。

2.1 ソフトウェアの配布（リモートインストール）

2.2 インベントリ情報の取得

2.3 インベントリ情報の管理

2.4 ファイルの収集（リモートコレクト）

2.5 ソフトウェアの稼働状況の監視

2.6 ソフトウェアの稼働情報の管理

2.7 クライアントの管理

2.8 クライアントのリモートコントロール

2.9 ジョブの管理

2.10 システム構成情報の管理

2.11 管理情報の出力

2.12 業務目的に合わせたインベントリ情報の集計

2.13 クライアントの機能

2.14 他プログラムとの連携

2.1 ソフトウェアの配布（リモートインストール）

JP1/NETM/DM のリモートインストール機能を使用して、日立プログラムプロダクトや他社ソフトウェアなどをクライアントへ配布できます。

リモートインストール機能では、配布を実行する日時を指定したり、条件と一致したクライアントだけに配布したりできます。また、配布されるソフトウェアをクライアント側から指定してインストールしたり、JP1/NETM/DM がインストールされているスタンドアロン PC にソフトウェアをインストールしたりもできます。

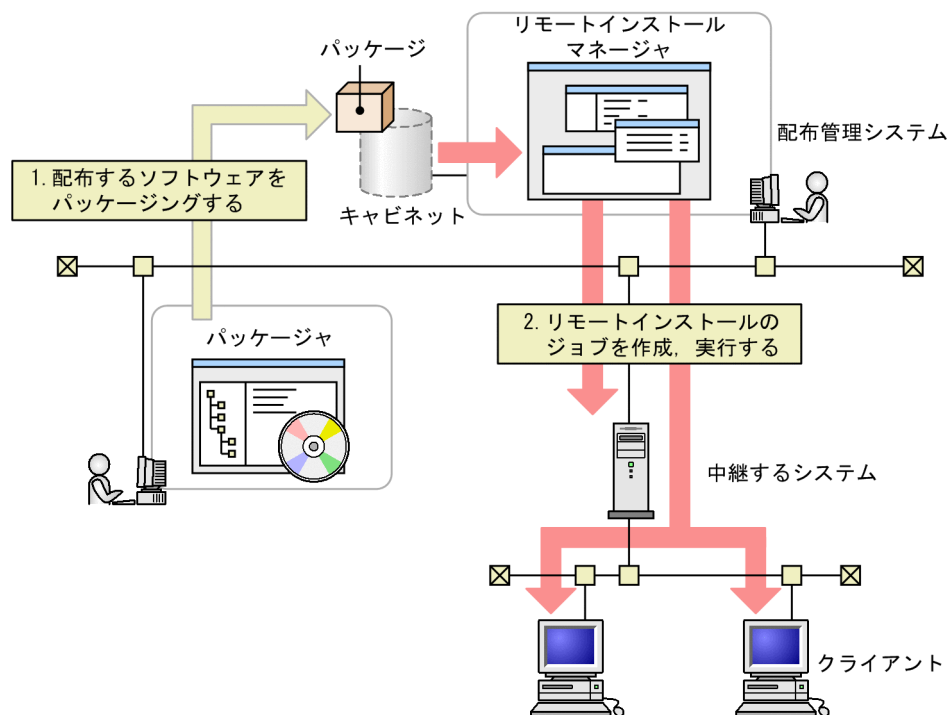
ここでは、リモートインストール機能の概要について説明します。

2.1.1 リモートインストールの作業の流れ

リモートインストールは、インストールするソフトウェアを登録する作業（**パッケージング**）と、登録されたパッケージを配布してインストールする作業（**リモートインストール**）との2段階に分けられます。

リモートインストールの作業の流れを次の図に示します。

図 2-1 リモートインストールの作業の流れ



(1) 配布するソフトウェアをパッケージングする

ソフトウェアをリモートインストールするには、まず対象となるソフトウェアを、配布管理システムにパッケージングしておく必要があります。ソフトウェアをパッケージングするには、**パッケージャ**を使用します。

パッケージャは、リモートインストールするソフトウェアを、インストールに必要な情報と一緒に、配布管理システムの**キャビネット**と呼ばれる場所に保管します。こうして保管されたソフトウェアを**パッケージ**と呼びます。

一度キャビネットに保管されたパッケージは、パッケージと配布管理システムの両方から、参照したり削除したりできます。ただし、名称を変更したり、ほかのキャビネットに移したりはできないので、パッケージング実行前にキャビネットの構成をよく検討しておいてください。キャビネットは、事前に配布管理システム側で作成しておいてもかまいませんし、パッケージング時にパッケージが新しく作成してもかまいません。

パッケージングの操作については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.1 パッケージングの方法」を参照してください。

(2) リモートインストールのジョブを作成、実行する

ソフトウェアをパッケージングしたら、配布管理システムでリモートインストールを指示する**ジョブ**を作成し、実行します。リモートインストールの操作は、**リモートインストールマネージャ**から行います。リモートインストールの操作については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.3 リモートインストールの実行」を参照してください。

また、リモートインストールに関する作業には、ジョブの作成・実行以外に、キャビネットとパッケージの管理や中継システム上のパッケージの削除といった作業があります。キャビネットとパッケージの管理については「2.1.8 キャビネットとパッケージの管理」を、中継システム上のパッケージの削除については「2.1.9 中継システム上のパッケージの削除」を参照してください。

なお、リモートインストール時のクライアントは、基本的には、自動的にソフトウェアがインストールされるのを待つだけです。しかし、クライアント側でも、幾つかの準備作業や、インストールの操作をする必要があります。特に、ユーザのニーズに合った細かな運用をしたい場合は、クライアントでの操作が重要なポイントとなります。例えば、必要なソフトウェアだけを選択してインストールしたり、クライアントの都合の良い時間に任意のタイミングでソフトウェアを受け取ったりする場合です。クライアントでの操作の詳細については、「2.13 クライアントの機能」を参照してください。

2.1.2 配布できるソフトウェアの種類

JP1/NETM/DM では、リモートインストールの対象となるソフトウェアを、次の 3 種類に分類して認識しています。この区分を**パッケージ種別**と呼びます。

- 日立プログラムプロダクト
- 他社ソフトウェア
- ユーザプログラム、データ

「日立プログラムプロダクト」、または「他社ソフトウェア」であるかどうかは、ソフトウェアのパッケージング時に、パッケージが自動的に判断します。どちらにも認識されないソフトウェアは、すべて「ユーザプログラム、データ」として扱われます。

なお、パッケージ種別によっては、リモートインストール時に**AIT ファイル**（Automatic Installation Tool で作成するファイル）または**レコーダファイル**（Visual Test で作成するファイル）が必要です。AIT ファイルまたはレコーダファイルを使ったリモートインストール方法については、マニュアル「Automatic Installation Tool ガイド」を参照してください。

(1) 日立プログラムプロダクト

複数ライセンスパック製品のプログラムプロダクトのリモートインストールができます。また、複数ライセンスパック製品ではないプログラムプロダクトでは、すでに導入しているものをリビジョンアップする場合に限って、リモートインストールできます。ただし、一部のプログラムプロダクト（通信ソフトウェアなど）のリモートインストールはできません。リモートインストールができるプログラムプロダクトは、それぞれのマニュアルまたはリリースノートでご確認ください。

JP1/NETM/DM のリモートインストール

● JP1/NETM/DM Manager

リモートインストールできません。

● JP1/NETM/DM Client（中継システム）

リモートインストールできます。ただし、「Automatic Installation Tool」がインストールされている PC に対しては、「Automatic Installation Tool」は上書きインストールされません。そのため、「Automatic Installation Tool」は、手動でインストールしてください。

● JP1/NETM/DM Client（クライアント）

リモートインストールできます。ただし、「スタートアップキット機能支援ツール」がインストールされている PC に対しては、リモートインストールできません。また、「Automatic Installation Tool」がインストールされている PC に対しては、「Automatic Installation Tool」は上書きインストールされません。

そのため、「スタートアップキット機能支援ツール」、および「Automatic Installation Tool」は、手動でインストールしてください。

(2) 他社ソフトウェア

日立以外の流通ソフトウェアを他社ソフトウェアと呼びます。リモートインストールできる他社ソフトウェアは、基本的に複数ライセンスパック製品です。ソフトウェアの種類、購入契約の内容によって、リモートインストールができない場合があります。契約書などで判断できない場合、ソフトウェア会社の了解をユーザの責任で得る必要がありますので注意してください。

なお、他社ソフトウェアの対話形式のインストーラに自動応答してリモートインストールする場合には、AIT ファイルまたはレコーダファイルが必要です。

(3) ユーザプログラム、データ

単一のファイルまたはディレクトリ下の全ファイルをリモートインストールできます。表計算ソフトウェアなどのアプリケーションプログラムで作成したデータも、ユーザデータとして扱います。

2.1.3 パッケージング時に設定できるインストール条件

ソフトウェアをリモートインストールするには、パッケージング時に、インストールに必要な情報を細かく設定しておく必要があります。例えば、インストールの日時やタイミング、インストールの前提となるプログラム、インストール時に使用するレコーダファイルの指定などです。これらを**インストール条件**と呼びます。

インストール条件は、パッケージング時に [JP1/NETM/DM パッケージング] ダイアログボックスで設定します。また、リモートインストール実行時（ジョブ作成時）に、[インストール条件の変更] ダイアログボックスで変更できます。

ここでは、インストール条件としてどのようなものがあるかを、[JP1/NETM/DM パッケージング] ダイアログボックスのパネル単位に説明します。設定内容の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.2 パッケージの詳細設定」を参照してください。

(1) システム条件

インストール時に最低限必要なハードディスクの空き容量や、実装メモリの状態など、ハードウェア上の条件を設定できます。必要に応じて、インストール処理後に 10 ～ 20 メガバイト以上の空き容量が必要であるなどの条件を設定してください。また、実装メモリの条件を設定すれば、インストールしても動作させられないといった失敗を防ぐことができます。

(2) ソフトウェア条件

インストールするソフトウェアが、特定のソフトウェアの、特定のバージョンを前提として動作するような場合に、そのソフトウェアがインストールされているかどうかを、バージョンを指定してチェックできます。また、特定のソフトウェアがクライアントにない場合だけリモートインストールする、といった条件も設定できます。

(3) ファイル属性

リモートインストール後のファイルのアクセス権および所有者を指定できます。

(4) スケジュール

インストール日時、およびインストールタイミングを指定できます。インストールタイミングには次の 2 種類があります。

● 通常インストール

ジョブ実行時、またはインストール日時として指定された時間にパッケージがインストールされます。

● システム起動時インストール

クライアントのシステム起動時にパッケージがインストールされます。

(5) インストール方法

クライアントの OS が Windows の場合に、インストールモード（ソフトウェアのインストーラの種類に合致したインストール方法）を指定します。インストールモードには、次の 2 種類があります。

● GUI インストールモード

特別なインストーラ（対話形式のインストーラなど）を使用するインストールモードです。パッケージ種別が「日立プログラムプロダクト」、または「他社ソフトウェア」の場合は、常に「GUI インストールモード」となります。

● バックグラウンドインストールモード

特別なインストーラを使用しないインストールモードです。ファイルのコピーだけでインストールが完了する場合に適用します。

(6) オプション

リモートインストールに対して次のオプションを設定できます。

● パッケージデータを暗号化する

ソフトウェアを暗号化してパッケージングできます。ただし、このオプションを使用するには JP1/NETM/DM Encryption Option が必要です。

● パッケージデータを圧縮する

ソフトウェアを圧縮してパッケージングできます。パッケージを圧縮するとファイル転送は速くなり、キャビネット上でパッケージを保管するための容量を節約できます。ただし、パッケージング時やリモートインストール時に、圧縮・伸長処理の時間が掛かります。

● バージョンアップ時リストア対象とする

リモートインストールの失敗による旧バージョンの破壊を防ぐための、「バックアップ・リストア機能」を使用できます。この機能を使用すると、リモートインストールでプログラムのバージョンアップをする場合に、クライアントが旧バージョンのバックアップを取得します。そして、リモートインストールに失敗した場合に、このバックアップから旧バージョンを回復します。

● インストール後コンピュータを再起動する

パッケージのインストール後に、クライアントのコンピュータが自動的に再起動するように設定できま

す。

● 処理中ダイアログの表示

パッケージのインストール時に、クライアントで処理中ダイアログを表示させるかを指定します。対象となるのは、ダウンロード中ダイアログとインストール中ダイアログです。

(7) アイコン作成

パッケージ種別が「ユーザプログラム、データ」の場合に、ユーザプログラムのアイコンまたはショートカットを設定できます。

(8) 外部プログラム

インストールの直前・直後、およびインストールエラー時に、クライアントで外部プログラムを起動させることができます。これによって、例えば次のような運用ができるようになります。

- ・ インストール前に、クライアントがユーザ固有の条件に合っているかどうかを調べる外部プログラムを起動させる。
- ・ インストールしたプログラムプロダクトを外部プログラムで起動させる。

(9) セットアップ情報設定

パッケージ種別が「他社ソフトウェア」の場合に、セットアップ方法、会社名、所有者名などのセットアップ情報を設定できます。

(10) AIT ファイルの設定

リモートインストール時に AIT ファイルを使用する場合、インストール処理の応答を監視できます。

(11) レコーダファイル設定

リモートインストール時にレコーダファイルを使用する場合に、レコーダファイルのディレクトリを設定します。

(12) コンポーネントの選択

JP1/NETM/DM Client（クライアント）をパッケージングする場合、不要なコンポーネントをパッケージングの対象から外すことができます。

2.1.4 Groupmax Integrated Desktop の分割パッケージング機能

Groupmax Integrated Desktop は複数のセットおよび機能から成り立つプログラムプロダクトですが、通常の方法でこれをパッケージングすると、Groupmax Integrated Desktop に含まれる機能すべてをリモートインストールすることになります。このため、クライアントのハードディスクに約 60 メガバイトの空き容量が必要です。クライアントのハードディスクの空き容量が十分でないときは、通常の方法でパッケージングした Groupmax Integrated Desktop をリモートインストールすることができません。

このような場合に、**パッケージャユティリティ**を使用すると、パッケージを分割してパッケージングできます。パッケージャユティリティは、分割してパッケージングできるように、あらかじめハードディスクに Groupmax Integrated Desktop を分割コピーする機能です。分割した各機能は、その他の日立プログラムプロダクトと同じようにパッケージングできます。

パッケージャユティリティの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.1.3 パッケージャユティリティの使用法」を参照してください。

なお、この機能は、バージョンが 02-20 以降の Groupmax Integrated Desktop に適用できます。パー

ジョンが 02-20 より前の Groupmax Integrated Desktop を分割してパッケージングしても、リモートインストールできませんので注意してください。

2.1.5 リモートインストールを実行するジョブ種別

配布するパッケージを作成したあと、配布管理システムでリモートインストールを指示するジョブを作成・実行します。リモートインストールに関連のあるジョブは 3 種類あります。このようなジョブの種類を**ジョブ種別**と呼びます。

ここでは、リモートインストールを実行するジョブ種別について説明します。

(1) 「パッケージのインストール」ジョブ

配布管理システム（または中継システム）からクライアントへ、パッケージを配布し、インストールする、という最も基本的なジョブです。パッケージの配布とインストールを配布管理システム側の主導で実行します。

(2) 「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブ

配布管理システムから中継システムまで、パッケージの転送だけを行うジョブです。中継システムから先の配布・インストールについては、中継システムの管理者に任せてもかまいませんし、もう一度、配布管理システムから指示してもかまいません。「パッケージのインストール」ジョブを実行して、クライアントまで配布してください。

配布管理システムから、「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブと「パッケージのインストール」ジョブを組み合わせてリモートインストールする場合、それぞれのジョブの実行日時が、配布管理システムー中継システム間、中継システムークライアント間の、パッケージの配布日時となります。

「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブで転送されたパッケージは、中継システムに保管されます。したがって、パッケージの保管期限内は配布管理システムから同一のパッケージが再配布されることはありません。パッケージの保管期限はパッケージング時に指定できます。一度転送したパッケージの保管期限を変更したい場合は、変更後のパッケージを再度中継システムまで転送する必要があります。

なお、中継システムからは、「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブは指定できません。

(3) 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ

クライアントに対してインストールの許可だけを与えておき、実際のインストールはクライアントに実行させるジョブです。「いつ」「何を」インストールするかを、クライアントユーザの判断に任せるというものです。

どのクライアントにも必ずインストールしなければならないソフトウェアであれば、通常のリモートインストールでかまいませんが、そうでない場合、クライアントが必要としていないソフトウェアまで勝手にインストールされてしまいます。このような場合に、この「クライアントユーザによるインストール」ジョブが有効です。

このジョブで配布されたソフトウェアを、クライアント側で確認し、インストールする運用については、「2.1.6 クライアントユーザの都合に合わせたインストール」を参照してください。

2.1.6 クライアントユーザの都合に合わせたインストール

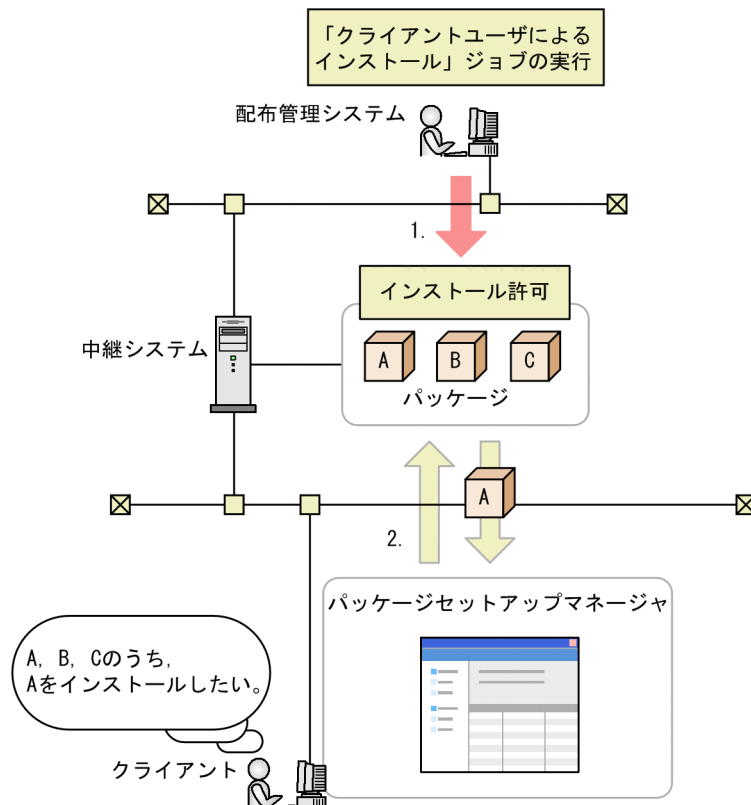
配布管理システム主導のリモートインストールは、クライアントにとって便利である一方、場合によっては、クライアントが必要としていないソフトウェアが勝手にインストールされたり、クライアントの都合の悪い時間帯にインストールが始まったりするおそれもあります。このようなことを防ぐには、「クライアントユーザによるインストール」ジョブを使用します。

配布管理システムが「クライアントユーザによるインストール」ジョブを実行すると、クライアントに対してソフトウェアのインストールの許可だけが与えられます。クライアントは、**パッケージセットアップマネージャ**を使用して、ウィンドウ上でインストールが許可されているソフトウェアを確認し、必要なソフトウェアだけをインストールできます。

この方法は、インストール時に、クライアントユーザがインストーラに手動で答えながらインストールしていきたい場合などにも有効です。

クライアントユーザの都合に合わせてリモートインストールの流れを次の図に示します。

図 2-2 クライアントユーザの都合に合わせてリモートインストールの流れ



1. 配布管理システムで「クライアントユーザによるインストール」ジョブを実行する。

ジョブのあて先に指定したクライアントに対して、パッケージのインストール許可が与えられます。この時点では、パッケージはクライアントに配布されないで、配布管理システムまたは中継システム上にあります。

2. クライアントのパッケージセットアップマネージャでソフトウェアを選択し、インストールを実行する。

選択したソフトウェアがクライアントにダウンロードされ、インストールが開始されます。

パッケージセットアップマネージャの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.4 パッケージセットアップマネージャを操作する」を参照してください。

2.1.7 スタンドアロン PC へのソフトウェアのインストール

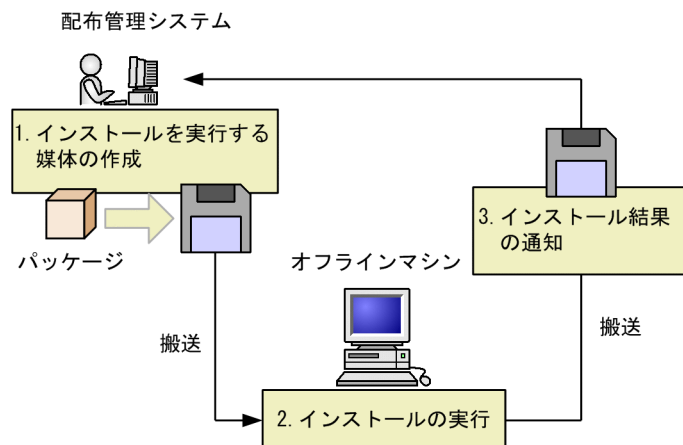
CD-R や MO などの媒体を使用することで、JP1/NETM/DM Client（クライアント）がインストールされたスタンドアロン PC（オフラインマシン）に、ネットワークを介さないでソフトウェアをインストール（オフラインインストール）できます。オフラインインストールは、上位システムからの指示でジョブが中

断されているクライアントでも実行できます。

オフラインインストールの方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.7.1 オフラインインストール」を参照してください。

オフラインインストールの概念を次の図に示します。

図 2-3 オフラインインストールの概念



オフラインインストールは、次の場合に便利です。

- ネットワーク外の PC にパッケージをインストールしたい場合
- 接続しているネットワークの回線速度が遅いときや、パッケージ容量が大きいときなど、パッケージ転送に時間が掛かる場合

配布管理システムおよびオフラインマシンでオフラインインストールを利用するには、次の条件を満たす必要があります。

配布管理システム

- Windows 版 JP1/NETM/DM Manager 07-11 以降（リレーショナルデータベース版）がインストールされている。
- 上記の JP1/NETM/DM Manager と同じ PC でリモートインストールマネージャを使用している。

オフラインマシン

Windows 版 JP1/NETM/DM Client 07-11 以降がインストールされている

なお、オフラインインストールでは、次に示す機能を使用できません。

- JP1/NETM/DM Client のインストール※
- インストールのスケジュール指定
- インストール後のコンピュータの再起動
- パッケージセットアップマネージャからのインストール
- 分割配布およびマルチキャスト配布

注※

ネットワークを介さずに JP1/NETM/DM Client を上書きインストールしたい場合は、JP1/NETM/DM Administrator Kit を利用できます。

2.1.8 キャビネットとパッケージの管理

キャビネットおよびパッケージを管理するのは、基本的には、配布管理システム（または中継するシステム）の役割です。リモートインストールマネージャの「[パッケージ]」ウィンドウから、パッケージを確認し、必要に応じて編集します。このとき、キャビネットを、ソフトウェアの種類や目的別に（流通ソフトウェア用、ユーザデータ用、ウィルス対策製品用など）作成しておくとう便利です。

「[パッケージ]」ウィンドウを次に示します。

図 2-4 「[パッケージ]」ウィンドウ



「[パッケージ]」ウィンドウでは、左側の枠に、キャビネットおよびパッケージが次のアイコンで表示されます。

- : キャビネット（Windows クライアント用）
- : キャビネット（UNIX クライアント用）
- : パッケージ（正常にパッケージングされたもの）
- : パッケージ（エラーまたはパッケージング中）
- : パッケージ（差分パッケージ※）

注※

JP1 Version 7i より前の JP1/NETM/DM で差分パッケージを作成した場合は表示されます。ただし、JP1 Version 8 以降では、差分パッケージはリモートインストールできません。

「[パッケージ]」ウィンドウでは、キャビネットとパッケージに対して次に示す操作ができます。

- キャビネットおよびパッケージの確認
- キャビネットの作成
- キャビネットの名称の変更
- キャビネットおよびパッケージの削除

キャビネットおよびパッケージを管理する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.4 キャビネットとパッケージの管理」を参照してください。

2.1.9 中継システム上のパッケージの削除

中継システムでは、各クライアントシステムへ転送するパッケージのファイルをいったん保管します。このパッケージは、パッケージャで指定した「中継システムでのパッケージ保管期限」が来るまで削除されないため、中継システムのハードディスク容量を圧迫するおそれがあります。中継システムでハードディスク容量不足が発生すると、ジョブ実行中にジョブの中継がエラーとなってしまいます。このような場合は、次のどれかの方法で中継システム上の不要なパッケージを削除してください。

● 中継システムのリモートインストールマネージャから、不要なパッケージを削除する

中継システムのリモートインストールマネージャで、不要なパッケージを選択して削除します。

- **配布管理システムから「中継システムのパッケージ一括削除」ジョブを実行する**

「中継システムのパッケージ一括削除」ジョブを実行すると、ジョブの実行先の中継システムに保管されているパッケージがすべて削除されます。

- **配布管理システムから中継システム上のパッケージを選択して削除する**

配布管理システムのリモートインストールマネージャから、中継システムに保管されている不要なパッケージを削除できます。この機能の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.4.5 中継システム上のパッケージの削除」を参照してください。

2.2 インベントリ情報の取得

配布管理システムでは、ジョブまたはコマンドを実行して、クライアントの情報（インベントリ情報）を取得できます。取得できるインベントリ情報を次に示します。

- システム情報
- ソフトウェア情報
- ユーザインベントリ情報
- ディレクトリ情報

ここでは、取得できるインベントリ情報の詳細と、取得方法の概要を説明します。

また、取得したインベントリ情報の利用方法、JP1/NETM/DM がインストールされているスタンドアロン PC からインベントリ情報を取得する機能、およびインベントリ情報を管理する場合の注意事項についても説明します。

2.2.1 システム情報の取得

クライアントのシステムの使用状況を管理するシステム情報と、クライアントのレジストリ情報を取得できます。システム情報およびレジストリ情報の取得方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.1 システム情報を取得する」を参照してください。

取得できるシステム情報とレジストリ情報の詳細について次に説明します。

(1) Windows のクライアントから取得できるシステム情報

Windows のクライアントから取得できるシステム情報を、JP1/NETM/DM のバージョンごとに次に示します。

(a) 取得できるシステム情報 1（JP1/NETM/DM 06-53 以前から取得可能）

JP1/NETM/DM 06-53 以前から取得できるようになったシステム情報を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-1 取得できるシステム情報 1（JP1/NETM/DM 06-53 以前から取得可能）

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
クライアントバージョン	○	○	○	○	○	○	○
コンピュータ名	○	○	○	○	○	○	○
マシン種別	×	×	×	×	×	×	×
OS	○	○	○	○	○	○	○
OS ファミリー名※1	○	○	○	○	○	○	○
OS バージョン	○	○	○	○	○	○	○
OS サブバージョン	○	○	○	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
OS ビルド番号 /OS パッチ情報※ 2	○	○	○	○	○	○	○
WMI ※ 3	○	○	○	○	○	○	○
ドメイン種別	○	○	○	○	○	○	○
会社名	○	○	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4
所有者名	○	○	○	○	○	○	○
CPU タイプ※ 5	○	○	○	○	○	○	○
コプロセッサ	○	○	○	○	○	○	○
CPU クロック数※ 5 ※ 6	○	○	○	○	○	○	○
プロセッサ数	○	○	○	○	○	○	○
実メモリ容量	○	○	○	○	○	○	○
利用可能ユーザメモリ容量	○	○	○	○	○	○	○
利用可能システムリソース容量	○	○	○	○	○	○	○
製造元	○	○	○	○	○	○	○
モデル	○	○	○	○	○	○	○
ドライブの種類※ 7 ※ 8	○	○	○	○	○	○	○
空きハードディスク容量※ 9	○※ 7	○※ 7	○	○	○	○	○
全ディスク容量※ 8	○※ 7	○※ 7	○	○	○	○	○
ビデオドライバ	○	○	○	○	○	○	○
ビデオチップ	○	○	○	○	○	○	○
VRAM 容量	○	○	○	○	○	○	○
画面情報	○	○	○※ 10	○※ 10	○※ 10	○※ 10	○※ 10
ネットワークアダプタ	○	○	○	○	○	○	○
サブネットマスク	○	○	○	○	○	○	○
デフォルトルータアドレス	○	○	○	○	○	○	○
MAC アドレス	○	○	○	○	○	○	○

表 2-2 取得できるシステム情報 2 (JP1/NETM/DM 06-53 以前から取得可能)

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
クライアントバージョン	○	○	○	○	○
コンピュータ名	○	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
マシン種別	×	×	×	×	×
OS	○	○	○	○	○
OS ファミリー名※ ¹	W	○	×	×	×
OS バージョン	○	○	○	○	○
OS サブバージョン	○	○	○	○	○
OS ビルド番号 / OS パッチ 情報※ ²	○	○	×	×	×
WMI ※ ³	○	○	○	○	○
ドメイン種別	W	○	—	—	—
会社名	○	○	○	○	○
所有者名	○	○	○	○	○
CPU タイプ※ ⁵	○	○	○	○	○
コプロセッサ	○	○	○	○	○
CPU クロック数※ ⁵ ※ ⁶	○	○	○	○	○
プロセッサ数	○	○	○	○	○
実メモリ容量	○	○	○	○	○
利用可能ユーザメモリ容量	○	○	○	○	○
利用可能システムリソース 容量	○	○	○	○	○
製造元	W	○	W	W	○
モデル	W	○	W	W	○
ドライブの種類※ ⁷ ※ ⁸	○	○	○	○	○
空きハードディスク容量※ ⁹	○※ ⁷	○※ ⁷	○	○	○
全ディスク容量※ ⁸	○※ ⁷	○※ ⁷	○	○	○
ビデオドライバ	○	○	○	○	○
ビデオチップ	○	○	○	○	○
VRAM 容量	○	○	W	W	○
画面情報	○	○	○	○	○
ネットワークアダプタ	○	○	W	○	○
サブネットマスク	○	○	W	○	○
デフォルトルータアドレス	○	○	W	○	○
MAC アドレス	○	○	○※ ⁹	○	○

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

—：OS に該当する項目がない

W：クライアントに、次の前提プログラムがインストールされている場合に取得できる

Windows 95 の場合

- DCOM95 for Windows 95 または Microsoft Internet Explorer 5.01 以降
- Windows Management Instrumentation (WMI) CORE

Windows 98 および Windows NT 4.0 の場合

- Windows Management Instrumentation (WMI) CORE

なお、これらの前提プログラムは、Microsoft 社のホームページからダウンロードしてください。

注※ 1

OS の欄に表示されます。

注※ 2

クライアントの OS が Windows の場合は OS ビルド番号が取得されます。

注※ 3

WMI の欄には、クライアントの WMI バージョンが表示されます。この値は WMI サービスのバージョンであり、WMI コアコンポーネントのバージョンではありません。WMI コアコンポーネント 1.5 がインストールされている場合、WMI バージョンは "1085.0005" になります。

また、WMI が利用できない場合、WMI の欄には「N/A」(Not Available) と表示されます。

管理者権限のないユーザでログオンしている場合、情報を取得できないことがあります。詳細については、「(4) 管理者権限がないと取得できないシステム情報」を参照してください。

注※ 4

対応する情報がない場合は、会社名が取得されないことがあります。

注※ 5

1 台のホストに複数の CPU がある場合は、一つだけ取得されます。Pentium II Xeon, Pentium III Xeon の一部プロセッサでは、Pentium II, Pentium III と表示されることがあります。

注※ 6

CPU クロック数はプロセッサが Pentium の場合に取得されます。表示される値は、現在までに取得してきた CPU クロック数の最大値です。

ノート PC に搭載されているモバイルプロセッサでは、カタログに掲載されているスペックどおりの CPU クロック数が表示されない場合があります。また、プロセッサの種類によっては CPU クロック数が正しく取得されない場合があります。

なお、取得された CPU クロック数は値をカスタマイズできます。詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.1.6 通知される CPU クロック数のカスタマイズ」を参照してください。

注※ 7

ネットワークドライブまたはアクセス権のないドライブの場合、取得されません。

注※ 8

ドライブごとの情報が取得されます。これらの項目は各ドライブの情報としてまとめて表示されます。

注※ 9

RAS クライアントなどがインストールされている PC の場合、ネットワークアダプタの MAC アドレスのほかにダミーアドレスが表示される場合があります。なお、NetBIOS を使用していない環境では、MAC アドレスは取得されません。

注※ 10

最後にログオンしたユーザの設定が取得されます。

また、新規インストールおよびセットアップの「接続先」に「*」を指定して初期化したあとは、再ログオンしないと情報が取得できません。

(b) 取得できるシステム情報 1 (JP1/NETM/DM 06-71 から 08-10 までの追加分)

JP1/NETM/DM 06-71 から 08-10 までで取得できるようになったシステム情報を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-3 取得できるシステム情報 1 (JP1/NETM/DM 06-71 から 08-10 までの追加分)

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
コンピュータの説明	○	○	○	○	○	○	○
インターネットエクスプローラバージョン	○	○	○	○	○	○	○
Windows Installer ※ 1	○	○	○	○	○	○	○
MBSA ※ 2	○	○	—	—	—	—	—
Windows Update Agent ※ 3	○	○	○	○	○	○	○
IE パッチ情報	○	○	○	○	○	○	○
ドメイン/ワークグループ	○	○	○	○	○	○	○
ログオンユーザ名 ※ 4	○	○	○	○	○	○	○
ユーザフルネーム ※ 4 ※ 5	○	○	○	○	○	○	○
ユーザの説明 ※ 4 ※ 5	○	○	○	○	○	○	○
OS シリアルナンバー	○	○	○	○	○	○	○
ロケール	○	○	○	○	○	○	○
OS の言語	○	○	○	○	○	○	○
現在のタイムゾーン	○	○	○	○	○	○	○
OS インストール日時	○	○	○	○	○	○	○
最終起動日時	○	○	○	○	○	○	○
ブートデバイス	○	○	○	○	○	○	○
Windows ディレクトリ	○	○	○	○	○	○	○
システムディレクトリ	○	○	○	○	○	○	○
CPU 外部クロック数	○	○	○	○	○	○	○
メモリスロットの容量	○	○	○	○	○	○	○
物理メモリの空き容量	○	○	○	○	○	○	○
仮想メモリの全容量	○	○	○	○	○	○	○
仮想メモリの空き容量	○	○	○	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
ページファイルの容量	○	○	○	○	○	○	○
マシン UUID ※ 6	○	○	○	○	○	○	○
マシンシリアルナンバー ※ 7	○	○	○	○	○	○	○
BIOS 製造元	○	○	○	○	○	○	○
BIOS リリース日時	○	○	○	○	○	○	○
BIOS バージョン	○	○	○	○	○	○	○
BIOS バージョン (SMBIOS)	○	○	○	○	○	○	○
AMT ファームウェア バージョン※ 8	○	○	○	○	○	×	○
プライマリバス種別	○	○	○	○	○	○	○
セカンダリバス種別	○	○	○	○	○	○	○
キーボード	○	○	○	○	○	○	○
マウス	○	○	○	○	○	○	○
マウスのボタン数	○	○	○※ 4 ※ 9	○※ 4 ※ 9	○※ 4 ※ 9	○※ 4 ※ 9	○※ 4 ※ 9
ファイルシステム ※ 10	○	○	○	○	○	○	○
ハードディスクのモデル	○	○	○	○	○	○※ 14	○
ハードディスクの容量	○	○	○	○	○	○※ 14	○
ハードディスクのインターフェース	○	○	○	○	○	○※ 14	○
ハードディスクのパーティション数	○	○	○	○	○	○※ 14	○
CD-ROM ドライブ	○	○	○	○	○	○	○
モニタ種別	○	○	○	○	○	○	○
サウンドカード製造元	○	○	○	○	○	○	○
サウンドカード製品名	○	○	○	○	○	○	○
IP アドレス	○	○	○	○	○	○	○
プライマリ DNS サーバ アドレス	○	○	○	○	○	○	○
セカンダリ DNS サーバ アドレス	○	○	○	○	○	○	○
DHCP	○	○	○	○	○	○	○
DHCP サーバアドレス	○	○	○	○	○	○	○
DHCP リース期限日時	○	○	○	○	○	○	○
DHCP リース取得日時	○	○	○	○	○	○	○
WINS サーバアドレス ※ 11	○	○	○	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
プリンタ名※ ⁴	○	○	○	○	○	○	○
プリンタドライバ※ ⁴	○	○	○	○	○	○	○
プリンタ用紙サイズ※ ⁴	○	○	○	○	○	○	○
プリンタ種別※ ⁴ ※ ¹²	○	○	○	○	○	○	○
プリンタ共有名※ ⁴	○	○	○	○	○	○	○
プリンタサーバ名※ ⁴	○	○	○	○	○	○	○
プリンタポート※ ⁴ ※ ¹³	○	○	○	○	○	○	○

表 2-4 取得できるシステム情報 2 (JP1/NETM/DM 06-71 から 08-10 までの追加分)

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
コンピュータの説明	—	—	W	W	○
インターネットエクスプローラバージョン	○	○	○	○	○
Windows Installer※ ¹	○	○	×	○	○
MBSA※ ²	○	○	—	—	—
Windows Update Agent※ ³	—	○	—	—	—
IE パッチ情報	○	○	○	○	○
ドメイン/ワークグループ	W	○	W	W	○
ログオンユーザ名※ ⁴	W	○	W	W	○
ユーザフルネーム※ ⁴ ※ ⁵	W	○	—	—	—
ユーザの説明※ ⁴ ※ ⁵	W	○	—	—	—
OS シリアルナンバー	W	○	W	W	○
ロケール	W	○	W	W	○
OS の言語	W	○	W	W	○
現在のタイムゾーン	W	○	W	W	○
OS インストール日時	W	○	W	W	○
最終起動日時	×	×	×	×	×
ブートデバイス	W	○	W	W	○
Windows ディレクトリ	○	○	○	○	○
システムディレクトリ	○	○	○	○	○
CPU 外部クロック数	W	○	W	W	○
メモリスロットの容量	W	○	W	W	○

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
物理メモリの空き容量	W	○	W	W	○
仮想メモリの全容量	W	○	W	W	○
仮想メモリの空き容量	W	○	W	W	○
ページファイルの容量	W	○	W	W	○
マシン UUID ※ 6	W	○	W	W	○
マシンシリアルナンバー ※ 7	W	○	W	W	○
BIOS 製造元	W	○	W	W	○
BIOS リリース日時	W	○	W	W	○
BIOS バージョン	W	○	W	W	○
BIOS バージョン (SMBIOS)	W	○	W	W	○
AMT ファームウェア バージョン ※ 8	×	×	×	×	×
プライマリバス種別	W	○	W	W	○
セカンダリバス種別	W	○	W	W	○
キーボード	W	○	W	W	○
マウス	W	○	W	W	○
マウスのボタン数	W	○	W	W	○
ファイルシステム ※ 10	W	○	W	W	○
ハードディスクのモデル	W	○	W	W	○
ハードディスクの容量	W	○	W	W	○
ハードディスクのインターフェース	W	○	W	W	○
ハードディスクのパーティション数	W	○	W	W	○
CD-ROM ドライブ	W	○	W	W	○
モニタ種別	W	○	W	W	○
サウンドカード製造元	W	○	W	W	○
サウンドカード製品名	W	○	W	W	○
IP アドレス	○	○	W	○	○
プライマリ DNS サーバ アドレス	W	○	W	W	○
セカンダリ DNS サーバ アドレス	W	○	W	W	○
DHCP	W	○	W	W	○
DHCP サーバアドレス	W	○	W	W	○
DHCP リース期限日時	W	○	W	W	○
DHCP リース取得日時	W	○	W	W	○

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
WINS サーバアドレス※ 11	W	○	×	×	○
プリンタ名※ ⁴	○	○	○	○	○
プリンタドライバ※ ⁴	○	○	○	○	○
プリンタ用紙サイズ※ ⁴	○	○	○	○	○
プリンタ種別※ ⁴ ※ ¹²	○	○	○	○	○
プリンタ共有名※ ⁴	○	○	○	○	○
プリンタサーバ名※ ⁴	○	○	○	○	○
プリンタポート※ ⁴ ※ ¹³	○	○	○	○	○

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

－：OS に該当する項目がない

W：クライアントに、次の前提プログラムがインストールされている場合に取得できる

Windows 95 の場合

- DCOM95 for Windows 95 または Microsoft Internet Explorer 5.01 以降
- Windows Management Instrumentation (WMI) CORE

Windows 98 および Windows NT 4.0 の場合

- Windows Management Instrumentation (WMI) CORE

なお、これらの前提プログラムは、Microsoft 社のホームページからダウンロードしてください。

注※ 1

クライアントにインストールされている Windows Installer のバージョンが取得されます。インストールされていない場合は、「N/A」(Not Available) と表示されます。

注※ 2

クライアントのインストール先ディレクトリ ¥CLIENT¥MBSA に格納されている、MBSA のコマンドラインインターフェース (mbsacli.exe ファイル) の製品バージョンが取得されます。格納されていない場合、WUA がインストールされているときは「N/A (The Windows Update is available)」, WUA がインストールされていないときは「N/A」(Not Available) と表示されます。

注※ 3

WUA の製品バージョンが取得されます。取得した値が「5.4.3790.1000」以上の場合、WUA2.0 がインストールされています。WUA がインストールされていない場合は、「N/A」(Not Available) と表示されます。

注※ 4

最後にログオンしたユーザの設定が取得されます。

また、「ログオンユーザ名」「ユーザフルネーム」「ユーザの説明」については、新規インストールおよびセットアップの「接続先」に「*」を指定して初期化したあとは、再ログオンしないと情報が取得で

きません。

注※ 5

コンピュータがワークグループに参加している場合だけ取得できます。ドメインに参加している場合は取得できません。

注※ 6

WMI によって取得されるマシン UUID が表示されます。UUID を取得できない場合、すべて 0 の UUID が表示されます。

注※ 7

WMI によって取得されるマシンシリアルナンバーが表示されます。マシンシリアルナンバーの情報は、ハードウェアのベンダごとに任意に設定されています。そのため、PC の製造番号とは異なる場合があります。情報が存在しない場合は「N/A」(Not Available) と表示されます。

注※ 8

「AMT 連携機能」がインストールされていないクライアントの場合、項目は表示されません。また、次の場合は「AMT 連携機能」がインストールされていても値を取得できないため「N/A」(Not Available) と表示されます。

- AMT に対応していない PC を使用している
- AMT 管理ユーザの認証に失敗した
- Microsoft .NET Framework 1.1 以降がインストールされていない

注※ 9

複数のマウスが接続されている場合、「0」と表示されます。

注※ 10

ドライブごとの情報が取得されます。各ドライブの情報として、「全ディスク容量」などの項目とまとめて表示されます。

注※ 11

プライマリ WINS サーバ、セカンダリ WINS サーバの情報だけ取得できます。

注※ 12

ログオン時に取得されます。

注※ 13

ローカルプリンタの場合にだけ取得できます。

注※ 14

記憶域サービスで仮想ディスクを構成している場合、物理ディスクとして仮想ディスクの情報が表示されます。

(c) 取得できるシステム情報 1 (JP1/NETM/DM 08-11 以降での追加分)

JP1/NETM/DM 08-11 以降で取得できるようになったシステム情報を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-5 取得できるシステム情報 1 (JP1/NETM/DM 08-11 以降での追加分)

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
Guest アカウント	○	○	○	○	○	○	○
脆弱なパスワード※ 1 ※ 2	○	○	○	○	○	○	○
パスワードを更新してからの経過日数※ 3	○	○	○	○	○	○	○
無期限のパスワード	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4	○※ 4
自動ログオンの設定※ 5	○	○	○	○	○	○	○
共有フォルダ※ 2	○	○	○	○	○	○	○
匿名接続の制限※ 5	○	○	○	○	○	○	○
スクリーンセーバー※ 5 ※ 6 ※ 7	○	○	○	○	○	○	○
スクリーンセーバー パ スワードの保護機能※ 5 ※ 6 ※ 7 ※ 8	○	○	○	○	○	○	○
パワーオンパスワード	○	○	○	○	○	○	○
Windows ファイア ウォールの設定※ 5 ※ 9	○※ 10	○※ 10	○	○	○	○	○
Windows 自動更新※ 5	○	○	○	○	○	○	○
不要なサービス※ 11	○	○	○	○	○	○	○
モニタの電源を切る (AC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
モニタの電源を切る (DC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
プロセッサ調整 (AC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
プロセッサ調整 (DC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
ハードディスクの電源を 切る (AC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
ハードディスクの電源を 切る (DC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
システムスタンバイ / ス リープ (AC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
システムスタンバイ / ス リープ (DC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
システム休止状態 (AC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○
システム休止状態 (DC) ※ 12	○	○	○	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS						
	Windows						
	XP	Server 2003	Vista	Server 2008	7	Server 2012	8
BitLocker による暗号化情報※ 2 ※ 13 ※ 14	—	—	○※ 15	○	○※ 15	○	○※ 15
JP1/ 秘文 IC および秘文 IC による暗号化情報※ 13 ※ 16	○※ 17	×	○※ 17	×	○※ 17	×	○※ 17
秘文 FDE による暗号化情報※ 13 ※ 18	○※ 19	×	○※ 19	×	○※ 19	×	○※ 19

表 2-6 取得できるシステム情報 2 (JP1/NETM/DM 08-11 以降での追加分)

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
Guest アカウント	○	○	—	—	—
脆弱なパスワード※ 1 ※ 2	○	○	—	—	—
パスワードを更新してから の経過日数※ 3	○	○	—	—	—
無期限のパスワード	○	○※ 4	—	—	—
自動ログオンの設定※ 5	○	○	—	—	—
共有フォルダ※ 2	○	○	×	○	○
匿名接続の制限※ 5	○	○	—	○	○
スクリーンセーバー※ 5 ※ 6 ※ 7	○	○	×	○	○
スクリーンセーバー パス ワードの保護機能※ 5 ※ 6 ※ 7 ※ 8	○	○	×	○	○
パワーオンパスワード	W	○	—	W	○
Windows ファイアウォー ルの設定※ 5 ※ 9	—	—	—	—	—
Windows 自動更新※ 5	—	○	—	—	—
不要なサービス※ 11	○	○	—	—	—
モニタの電源を切る (AC) ※ 12	—	○	—	○	○
モニタの電源を切る (DC) ※ 12	—	○	—	○	○
プロセッサ調整 (AC) ※ 12	—	—	—	—	—
プロセッサ調整 (DC) ※ 12	—	—	—	—	—

取得できるシステム情報	取得先の OS				
	Windows				
	NT 4.0	2000	95	98	Me
ハードディスクの電源を切る (AC) ※ 12	—	○	—	○	○
ハードディスクの電源を切る (DC) ※ 12	—	○	—	○	○
システムスタンバイ / スリープ (AC) ※ 12	—	○	—	○	○
システムスタンバイ / スリープ (DC) ※ 12	—	○	—	○	○
システム休止状態 (AC) ※ 12	—	○	—	○	○
システム休止状態 (DC) ※ 12	—	○	—	○	○
BitLocker による暗号化情報 ※ 2 ※ 13 ※ 14	—	—	—	—	—
JP1/ 秘文 IC および秘文 IC による暗号化情報 ※ 13 ※ 16	×	○ ※ 17	×	×	×
秘文 FDE による暗号化情報 ※ 13 ※ 18	×	×	×	×	×

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

—：OS に該当する項目がない

W：クライアントに、Windows Management Instrumentation (WMI) CORE がインストールされている場合に取得できる

なお、Windows Management Instrumentation (WMI) CORE は、Microsoft 社のホームページからダウンロードしてください。

注※ 1

- 初期設定では、情報を取得できない設定になっています。情報を取得するには、security.ini ファイルを編集する必要があります。security.ini ファイルの編集方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.1.7 通知されるセキュリティ関連のインベントリ情報のカスタマイズ」を参照してください。
- チェックできるアカウントの数は 30,000 までです。
- 無効、期限切れ、およびすでにロック状態のアカウントについてはチェックされません。
- Windows の管理ツールの、ローカルセキュリティポリシー（ローカル環境、ドメイン環境）の設定で、[ローカルポリシー] — [監査ポリシー] の「アカウント管理の監査」を有効にしている場合、「脆弱なパスワードの有無」をチェックするときにイベントログが出力されます。

注※ 2

管理者権限のないユーザでログオンしている場合、情報を取得できないことがあります。詳細については、「(4) 管理者権限がないと取得できないシステム情報」を参照してください。

注※ 3

- 無効および期限切れのアカウントについてはチェックされません。それ以外の全アカウントに対して経過日数が取得されます。
- 脆弱かどうかの判断基準となるしきい値を定義しておきます。しきい値は security.ini ファイルに定義します。security.ini ファイルの定義方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.1.7 通知されるセキュリティ関連のインベントリ情報のカスタマイズ」を参照してください。

注※ 4

Windows の管理ツールの、グループポリシーの設定で、[アカウントポリシー] — [パスワードのポリシー] の「パスワードの有効期間」を「0 日」に設定している場合、無期限のパスワードの情報を正確に取得できないことがあります。

注※ 5

取得対象のレジストリが存在しない、壊れているなどの原因で正確なデータを読み込むことができない場合は、「無効」と表示されます。

注※ 6

最後にログオンした時点での設定が表示されます。情報を取得した時点で、複数のユーザがログオンしている場合は、最後にログオンしたユーザのログオンした時点での設定が表示されます。

注※ 7

ログオン時に情報が取得されます。

注※ 8

Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 R2 の場合、[コントロールパネル] の「スクリーンセーバーの設定」の「再開時のログオン画面に戻る」に該当する情報です。

注※ 9

Service Pack が適用されていない場合は、「無効」と表示されます。

注※ 10

Windows ファイアウォールに対応する Windows XP Service Pack 2 または Windows Server 2003 Service Pack 1 以降から取得できます。

注※ 11

不要なサービスの稼働状態をチェックするには、どのサービスを不要なサービスとして監視するかを security.ini ファイルに定義する必要があります。security.ini ファイルの定義方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.1.7 通知されるセキュリティ関連のインベントリ情報のカスタマイズ」を参照してください。

注※ 12

- エラーなどの原因によって情報を取得できなかった場合は、「不明」が表示されます。
- クライアントの OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、最後にログオンしたユーザの設定が取得されます。その他の OS の場合は、最後にログインした Administrator 権限を持つユーザの設定が取得されます。
- クライアント側で表示されている設定と取得した値が異なることがあります。この場合、クライアントの設定には取得した値が適用されています。
- 電源オプション機能を利用できない場合は、正しい情報を取得できないことがあります。

注※ 13

これらの項目は、まとめて「ドライブ暗号化」と表示されます。

注※ 14

Windows の [コントロールパネル] の [システムのセキュリティ] の [BitLocker ドライブ暗号化] パネルに表示されるドライブが対象です。

注※ 15

クライアントが次に示す OS の場合に取得できます。

- Microsoft Windows 7 Enterprise
- Microsoft Windows 7 Ultimate
- Microsoft Windows Vista Enterprise
- Microsoft Windows Vista Ultimate

注※ 16

クライアントに、次のバージョンの JP1/ 秘文 IC または秘文 IC がインストールされている場合に取得できます。

- 09-00
- 09-10
- 09-50
- 10-00

注※ 17

クライアントが次に示す OS の場合に取得できます。

- Microsoft Windows 7 Enterprise
- Microsoft Windows 7 Professional
- Microsoft Windows 7 Ultimate
- Microsoft Windows Vista Business
- Microsoft Windows Vista Enterprise
- Microsoft Windows Vista Ultimate
- Microsoft Windows XP Home Edition Operating System
- Microsoft Windows XP Professional Operating System
- Microsoft Windows 2000 Professional Operating System

注※ 18

クライアントに、次のバージョンの秘文 FDE がインストールされている場合に取得できます。

- 09-00
- 09-10
- 09-50
- 10-00

注※ 19

クライアントが次に示す OS の場合に取得できます。

- Microsoft Windows 7 Enterprise
- Microsoft Windows 7 Professional
- Microsoft Windows 7 Ultimate
- Microsoft Windows Vista Business
- Microsoft Windows Vista Enterprise
- Microsoft Windows XP Professional Operating System

(2) UNIX のクライアントから取得できるシステム情報

UNIX のクライアントから取得できるシステム情報を次の表に示します。

表 2-7 取得できるシステム情報 (UNIX のクライアント)

取得できるシステム情報	取得先の OS			
	UNIX			
	HP-UX	Linux	Solaris	AIX
クライアントバージョン	○	○	○	○
コンピュータ名※ ¹	○	○	○	○
マシン種別	○	○	○	○
OS	○	○	○	○
OS ファミリー名	—	—	—	—
ディストリビューション	—	○	—	—
OS バージョン	○	○	○	○
OS サブバージョン	—	—	—	—
OS ビルド番号 / OS パッチ情報※ ²	○	×	○	○
OS ライセンス情報※ ³	×	×	×	×
WMI	—	—	—	—
ドメイン種別	—	—	—	—
会社名	—	—	—	—
所有者名	—	—	—	—
CPU タイプ※ ⁴	○	○	○	○
コプロセッサ	—	—	—	—
CPU クロック数※ ⁴	○	○	○	○
プロセッサ数	○	○	○	○
実メモリ容量	○	○	○	○
利用可能ユーザメモリ容量	○	○	○	○
利用可能システムリソース容量	×	×	×	×
製造元	×	○	○	×
モデル	○	○	—	○
ドライブの種類	—	—	—	—
空きハードディスク容量※ ⁵	○	○	○	○
全ディスク容量※ ⁵	○	○	○	○
ビデオドライバ	×	×	×	×
ビデオチップ	×	×	×	×
VRAM 容量	×	×	×	×
画面情報	×	×	×	○
ネットワークアダプタ	○	○	×	○
サブネットマスク	○	○	○	○
デフォルトルータアドレス	○	○	○	○

取得できるシステム情報	取得先の OS			
	UNIX			
	HP-UX	Linux	Solaris	AIX
MAC アドレス	○	○	○	○
コンピュータの説明	—	—	—	—
インターネットエクスプローラバージョン	—	—	—	—
Windows Installer	—	—	—	—
MBSA	—	—	—	—
Windows Update Agent	—	—	—	—
IE パッチ情報	—	—	—	—
ドメイン/ワークグループ	—	—	—	—
ログオンユーザ名	—	—	—	—
ユーザフルネーム	—	—	—	—
ユーザの説明	—	—	—	—
OS シリアルナンバー	×	×	×	×
ロケール	×	×	×	×
OS の言語	×	×	×	×
現在のタイムゾーン	○	○	○	○
OS インストール日時	×	×	×	×
最終起動日時	○	○	○	○
ブートデバイス	×	○※ 6	×	○
Windows ディレクトリ	—	—	—	—
システムディレクトリ	×	×	×	×
CPU 外部クロック数	×	×	×	×
メモリスロットの容量	×	○	×	×
物理メモリの空き容量	○	×	×	○※ 7
仮想メモリの全容量	×	×	×	×
仮想メモリの空き容量	×	×	×	×
ページファイルの容量	○	○	×	○
マシン UUID	×	○	×	×
マシンシリアルナンバー	○※ 8	○	×	○
BIOS 製造元	×	○	×	×
BIOS リリース日時	×	○	×	×
BIOS バージョン	×	○	×	×
BIOS バージョン (SMBIOS)	×	○	×	×
AMT ファームウェアバージョン	×	×	×	×
プライマリバス種別	×	×	×	×
セカンダリバス種別	×	×	×	×
キーボード	×	×	×	○

取得できるシステム情報	取得先の OS			
	UNIX			
	HP-UX	Linux	Solaris	AIX
マウス	×	×	×	○
マウスのボタン数	×	×	×	○
ファイルシステム※ ⁹	○	○	○	○
ハードディスクのモデル	×	○	×	○
ハードディスクの容量	×	○	×	○
ハードディスクのインターフェース	×	○	×	○
ハードディスクのパーティション数	×	○※ ⁶	×	×
CD-ROM ドライブ	×	○	○	○
モニタ種別	×	×	×	○
サウンドカード製造元	×	×	×	○
サウンドカード製品名	×	×	×	○
IP アドレス	○	○	○	○
プライマリ DNS サーバアドレス	○	○	○	○
セカンダリ DNS サーバアドレス	○	○	○	○
DHCP	×	×	×	×
DHCP サーバアドレス	×	×	×	×
DHCP リース期限日時	×	×	×	×
DHCP リース取得日時	×	×	×	×
WINS サーバアドレス	—	—	—	—
プリンタ名	×	×	×	×
プリンタドライバ	×	×	×	×
プリンタ用紙サイズ	×	×	×	×
プリンタ種別	×	×	×	×
プリンタ共有名	×	×	×	×
プリンタサーバ名	×	×	×	×
プリンタポート	×	×	×	×
Guest アカウント	—	—	—	—
脆弱なパスワード	—	—	—	—
パスワードを更新してからの経過日数※ ¹⁰	○	○	○	○
無期限のパスワード	—	—	—	—
自動ログオンの設定	—	—	—	—
共有フォルダ※ ¹¹	○	○	○	○
匿名接続の制限	—	—	—	—
スクリーンセーバー	—	—	—	—
スクリーンセーバー パスワードの保護機能	—	—	—	—
パワーオンパスワード	—	○	—	—
Windows ファイアウォールの設定	—	—	—	—

取得できるシステム情報	取得先の OS			
	UNIX			
	HP-UX	Linux	Solaris	AIX
Windows 自動更新	—	—	—	—
不要なサービス	—	—	—	—

(凡例)

- ：取得できる
- ×：取得できない
- ：OS に該当する項目がない

注※ 1

システム構成情報のホスト名と同じです。

注※ 2

Solaris の場合は OS パッチ情報が取得されます。なお、クライアントの OS が HP-UX, AIX, および HP Tru64 UNIX の場合は、コマンド「uname -v」で求められる値が取得されます。

注※ 3

クライアントの OS が HI-UX/WE2 の場合だけ取得されます。

注※ 4

1 台のホストに複数の CPU がある場合は、一つだけ取得されます。

注※ 5

パーティションごとの情報が取得されます。これらの項目は各パーティションの情報としてまとめて表示されます。

注※ 6

IPF 版の場合は取得できません。

注※ 7

ワークロード・マネージャがインストールされている場合だけ取得できます。

注※ 8

HP-UX11i の場合、取得できないことがあります。

注※ 9

パーティションごとの情報が取得されます。各パーティションの情報として、「全ディスク容量」などの項目とまとめて表示されます。

注※ 10

初期設定では、root アカウントの情報だけ取得されます。shadow パスワードファイルを利用していない場合、または利用していてもパスワード最終変更日時が設定されていない場合は、取得されません。

注※ 11

NFS でマウントしているディレクトリの有無を取得します。ただし、オートマウントなどを利用している場合、システム情報取得時にマウントされていないディレクトリは取得されません。

(3) 取得できるレジストリ情報

クライアントごとに、レジストリ情報を取得できます。レジストリ情報は、障害が発生したとき、PC を復元するために使用できます。

取得できるレジストリパスを次に示します。

- HKEY_CLASSES_ROOT
- HKEY_LOCAL_MACHINE

なお、バージョンが 05-20 以前のクライアントのレジストリ情報は取得できません。

また、OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista のクライアントからレジストリ情報を取得する場合、バージョンが 08-02 以前の中継マネージャを経由するときは、次の制限があります。

- レジストリ取得項目の転送ジョブを実行するときに、[項目設定] ダイアログボックスの「OS 種別」で「すべての OS」を選択してください。
- 「項目名+レジストリパス」が 315 文字を超えるとレジストリ情報を取得できません。

(4) 管理者権限がないと取得できないシステム情報

管理者権限がないユーザでログオンしている場合、次に示すシステム情報の取得方法では、一部の項目を取得できないことがあります。

システム情報の取得方法

- ローカルシステムビューアでシステム情報を取得した場合
- オフラインマシン情報取得媒体を利用してシステム情報を取得した場合
- [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからユーザインベントリ情報を上位システムへ通知することによって、システム情報を取得した場合
- [クライアントセットアップ] ダイアログボックスの [権限] パネルで、「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスをオフにしている場合に、次の操作によって「システム情報の取得」ジョブが実行された場合
 - 「ジョブ実行」アイコンを起動
 - パッケージセットアップマネージャの起動

情報を取得できない項目

- WMI
- 脆弱なパスワード
- 共有フォルダ
- BitLocker による暗号化情報

2.2.2 ソフトウェア情報の取得

クライアントごとにインストールされているソフトウェアの種類やバージョン情報などを把握できます。JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェア、Windows の [コントロールパネル] の [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されているソフトウェア、JP1/NETM/DM で提供されている検索リストにあるソフトウェアなどの情報を取得できます。また、どのようなソフトウェアがインストールされているか、ファイル名で検索することもできます。ウィルス対策製品については、常駐／非常駐の設定やウィルス定義ファイルのバージョンなども把握できます。

さらに、クライアントのコンピュータに適用されているパッチの情報や、適用されていないパッチの情報を取得して、ソフトウェアの情報と同様に管理することもできます。

ソフトウェア情報の取得方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.2 ソフトウェア情報を取得する」を参照してください。

(1) 取得できるソフトウェア情報

中継するシステムおよびクライアントが動作するホストごとに、ソフトウェア情報を取得できます。

ソフトウェア情報を取得するときは、次に示す 6 種類の検索方法を利用できます。

- JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアを検索
- すべてのソフトウェアを検索
- アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索
- ファイルを検索
- Microsoft Office 製品を検索
- ウィルス対策製品を検索

次に、検索方法ごとに取得できるソフトウェア情報を説明します。

「Microsoft Office 製品を検索」および「ウィルス対策製品を検索」は、配布管理システムに登録されている「Microsoft Office 製品検索情報ファイル」と「ウィルス対策製品検索情報ファイル」に基づいて検索を実行します。

また、JP1/NETM/DM をバージョンアップした場合は、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.2.3 ソフトウェア情報を取得するときの注意事項」のバージョンアップしたときの注意事項を参照してください。

(a) JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアを検索

JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアの情報を取得します。

(b) すべてのソフトウェアを検索

次に示すソフトウェア情報を取得します。

- **ソフトウェア検索リスト**に登録されているソフトウェア
- Windows の [コントロールパネル] の [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されているソフトウェア
- コンピュータに適用されているパッチ
- コンピュータに適用されていないパッチ
- レジストリにある日立プログラムプロダクトの情報 (JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェア以外)

ソフトウェア検索リストを使用すると、JP1/NETM/DM が標準で検索対象としているソフトウェアや、検索対象に設定した任意のソフトウェアを検索できます。ソフトウェア検索リストを使用したソフトウェア情報の取得については、「(2) ソフトウェア検索リストを利用したソフトウェア情報の取得」を参照してください。

(c) アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索

Windows の [コントロールパネル] の [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されているソフトウェアの情報と、クライアントに適用済みまたは未適用のパッチ情報を取得します。

ただし、[アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] の表示名に次の文字列が含まれる日立プログラムプロダクトの情報は、「すべてのソフトウェアを検索」で取得される情報との重複を避けるためにデフォルトでは取得されません。

- JP1
- NETM/DM
- GROUPMAX
- Remote Control Manager
- Remote Control Agent
- Software Distribution

これらの文字列が含まれる日立プログラムプロダクトの情報を「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」で取得するには、クライアントのセットアップでの設定が必要です。クライアントでのセットアップの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「6.2.10(6) 日立プログラムプロダクトを [アプリケーションの追加と削除] ソフトウェアとしても扱う」を参照してください。

なお、バージョンが 06-01 以前のクライアントからは、「すべてのソフトウェアを検索」と同じ情報が取得されます。

(d) ファイルを検索

クライアントにインストールされているソフトウェアをファイル名で検索します。ほかの検索方法で目的のソフトウェア情報を取得できない場合は、この方法で検索してください。

なお、クライアントのバージョンが 05-20 以前のときは、JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアの情報だけを取得します。

検索したソフトウェアの情報は、**ソフトウェアインベントリ辞書**で管理対象に設定することで、JP1/NETM/DM で管理できるようになります。また、検索したソフトウェアにライセンス数を設定することで、インベントリビューアの集計結果の画面でライセンス数を超えるソフトウェアやライセンス数に近づいたソフトウェアを把握できます。ソフトウェアインベントリ辞書については、「(3) ソフトウェアインベントリ辞書によるソフトウェア情報の管理」を参照してください。

(e) Microsoft Office 製品を検索

表 2-8 ～表 2-9 に示す Microsoft Office 製品の情報を取得します。

英語版のクライアントが混在する場合、英語版の Microsoft Office 製品の情報も同時に取得できます。英語版の Microsoft Office 製品は、バージョンが 2003 および 2007 のボリュームライセンス版だけ情報を取得できます。

英語版の Microsoft Office 製品の情報を取得した場合、バージョンが 2003 の英語版の Microsoft Office 製品の情報を JP1/NETM/DM で表示すると、表示名の最後に英語版であることを示す「(ENG)」が付きます。バージョンが 2007 の英語版の Microsoft Office 製品は、日本語版と同じ表示名になります。

クライアントのバージョンが 07-00 より前の場合、および Microsoft Office の DISK1 がインストールされていない場合は情報を取得できません。

また、クライアントの OS が 64 ビット版の Windows 8, 64 ビット版の Windows 7, Windows Server 2012, 64 ビット版の Windows Server 2008, 64 ビット版の Windows Vista または Windows Server 2003 (x64) の場合、バージョンが 2003, 2007 および 2010 の Microsoft Office 製品の情報だけを取得できます。

なお、Microsoft Office 製品の情報は、製品の言語が JP1/NETM/DM の言語と一致している場合に取得できます。例えば、日本語版 JP1/NETM/DM に、英語版の Microsoft Office 製品がインストールされている場合、Microsoft Office 製品の情報が取得できない場合があります。

● 日本語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報

日本語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-8 日本語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報 1

製品名	VR	エディション	ソフト ウェア名 称	ソフト ウェア バージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ
Microsoft Office	2000	Premium	○	○	○	○	○	○
		Personal	○	○	○	○	○	○
		Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
		Developer	○	×	○	×	×	×
	XP	Personal	○	○	○	○	○	○
		Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
		Professional with FrontPage	○	○	○	○	○	○
		Developer	○	○	○	○	○	○
	2003	Personal Edition	○	○	○	○	○	○
		Standard Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Enterprise Edition	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※1	○	○
		Small Business	○	○	○	○※1	○	○
		Professional	○	○	○	○※1	○	○
		Professional Plus	○	○	○	○※1	○	○
		Enterprise	○	○	○	○※1	○	○
		Ultimate	○	○	○	○※1	○	○
	2010 ※4	Home and Business (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Professional Plus (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
Microsoft Word	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○

製品名	VR	エディション	ソフト ウェア名 称	ソフト ウェア バージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Excel	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Outlook	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft PowerPoint	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Access	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft FrontPage	2000		○	○	○	○	○	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
Microsoft Publisher	2000		○	○	○	○	×	○
	2002		○	○	○	○	○	○
	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Visio	2000	Standard	○	○	○	○※ 1	×	○
		Professional	○	○	○	○※ 1	×	○
		Technical	○	○	○	○※ 1	×	○

2. JP1/NETM/DM の機能

製品名	VR	エディション	ソフト ウェア名 称	ソフト ウェア バージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ
	2002	Enterprise	○	○	○	○※1	×	○
		Standard	○	○	○	○※1	○	○
		Professional	○	○	○	○※1	○	○
	2003	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※1	○	○
		Professional	○	○	○	○※1	○	○
	2010 ※4 ※5 ※6	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Premium (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
Microsoft Project	2000		○	○	○	○	×	○
	2002	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2003	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※1	○	○
		Professional	○	○	○	○※1	○	○
	2010 ※4	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※1	○	○
Microsoft InfoPath	2007		○	○	○	○※1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○※1	○	○
Microsoft InterConnect	2007		○	○	○	○※1	○	○
Microsoft Groove	2007		○	○	○	○※1	○	○
Microsoft SharePoint	2010 Workspace (32bit/ 64bit) ※4		○	○	○	○※1	○	○
Microsoft OneNote	2007		○	○	○	○※1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○※1	○	○
Microsoft Lync	2010 (32bit/64bit) ※7		○	○	○	○	○	○

表 2-9 日本語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報 2

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日付	プロダクト ID	登録会社名	登録所有者名	コンポーネントプロダクト
Microsoft Office	2000	Premium	○	○	○	○	○	○
		Personal	○	○	○	○	○	○
		Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
		Developer	○	×	×	×	×	×
	XP	Personal	○	○	○	○	○	○
		Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
		Professional with FrontPage	○	○	○	○	○	○
		Developer	○	○	○	○	○	×
	2003	Personal Edition	○	○	○	○	○	○
		Standard Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Enterprise Edition	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○※2	○※3	○※3	○
		Small Business	○	○	○※2	○※3	○※3	○
		Professional	○	○	○※2	○※3	○※3	○
		Professional Plus	○	○	○※2	○※3	○※3	○
		Enterprise	○	○	○※2	○※3	○※3	○
		Ultimate	○	○	○※2	○※3	○※3	○
	2010 ※4	Home and Business (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Professional Plus (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
Microsoft Word	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×

2. JP1/NETM/DM の機能

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日付	プロダクト ID	登録会社名	登録所有者名	コンポーネントプロダクト
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Excel	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Outlook	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft PowerPoint	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Access	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft FrontPage	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
Microsoft Publisher	2000		○	○	○	○	○	×
	2002		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Visio	2000	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
		Technical	○	○	○	○	○	×
		Enterprise	○	○	○	○	○	×
	2002	Standard	○	○	○	○	○	×

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日付	プロダクト ID	登録会社名	登録所有者名	コンポーネントプロダクト
	2003	Professional	○	○	○	○	○	×
		Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2007	Standard	○	○	○※2	○※3	○※3	×
		Professional	○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 ※4 ※5 ※6	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Premium (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
Microsoft Project	2000		○	○	○	○	○	×
	2002	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2003	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2007	Standard	○	○	○※2	○※3	○※3	×
		Professional	○	○	○	○※3	○※3	×
	2010 ※4	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
Microsoft InfoPath	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft InterConnect	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
Microsoft Groove	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
Microsoft SharePoint	2010 Workspace (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft OneNote	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Lync	2010 (32bit/64bit) ※7		○	○	○	×	×	×

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

注※1

ニュートラル言語（ロケール :0x000）として取得されます。

注※2

プロダクトキーを入力するまではプロダクト ID は生成されないため、取得できません。

注※ 3

インストール時にプロダクトキーを入力せず、あとでプロダクトキーを入力した場合には、登録会社名および登録所有者名の情報は登録されないため、取得できません。

注※ 4

次の方法でインストールを実行した場合、情報取得先が異なります。

- ・媒体直下または「x86」フォルダにある setup.exe、および自動起動によりインストールした場合。
- ・「x64」フォルダにある setup.exe によりインストールした場合。

注※ 5

プロダクトキーに基づいて、Standard/Professional/Premium としてインストールでき、変更も可能。

注※ 6

GUID が統一されエディションの判定ができないため、エディション名は非表示となります（インストール時のエディション名がレジストリに設定されますが、※ 5 の変更で名称が変更されないため）。

注※ 7

32bit/64bit OS 専用で、32bit 版を 64bit OS にインストールすることはできません。

● 情報を取得できる日本語版 Microsoft Office 製品

表 2-10 情報を取得できる Microsoft Office 製品（日本語版）

製品名	提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
	ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
Microsoft Office 2000 Premium	○	○	×	Office 2000 Premium
Microsoft Office 2000 Personal	×	○	×	Office 2000 Personal
Microsoft Office 2000 Standard	○	○	×	Office 2000 Standard
Microsoft Office 2000 Professional	○	○	×	Office 2000 Professional
Microsoft Office 2000 Developer	○	×	×	Office 2000 Developer
Microsoft Office XP Personal	○	×	×	Office XP Personal
Microsoft Office XP Standard	○	×	×	Office XP Standard
	×	○	×	Office XP Standard (パッケージ版)
Microsoft Office XP Professional	○	×	×	Office XP Professional
	×	○	×	Office XP Professional (パッケージ版)
Microsoft Office XP Professional with FrontPage	○	×	×	Office XP Professional with FrontPage
Microsoft Office XP Developer	○	×	×	Office XP Developer
Microsoft Office Personal Edition 2003	×	○	×	Office Personal 2003
	×	×	○	Office Personal 2003 (プレインストール版)

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
Microsoft Office Standard Edition 2003		○	×	×	Office Standard 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Office Standard 2003 (パッケージ版)
Microsoft Office Professional Enterprise Edition 2003		○	×	×	Office Professional 2003 (ボリュームライセンス版)
Microsoft Office Professional Edition 2003		×	○	×	Office Professional 2003 (パッケージ版)
Microsoft Office Standard 2007		○	×	×	Office Standard 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Office Standard 2007 (パッケージ版)
Microsoft Office Small Business 2007		○	×	×	Office Small Business 2007 (ボリュームライセンス版)
Microsoft Office Professional 2007		○	×	×	Office Professional 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Office Professional 2007
Microsoft Office Professional Plus 2007		○	×	×	Office Professional Plus 2007
Microsoft Office Enterprise 2007		○	×	×	Office Enterprise 2007
Microsoft Office Ultimate 2007		○	×	×	Office Ultimate 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Office Ultimate 2007
Microsoft Office Home and Business 2010	32bit	○	×	×	Office Home and Business 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Office Home and Business 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Office Home and Business 2010
	64bit	×	○	×	Office Home and Business 2010 64bit
Microsoft Office Standard 2010	32bit	○	×	×	Office Standard 2010
	64bit	○	×	×	Office Standard 2010 64bit
Microsoft Office Professional 2010	32bit	○	×	×	Office Professional 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Office Professional 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Office Professional 2010
	64bit	×	○	×	Office Professional 2010 64bit

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	ブレインストール版	
Microsoft Office Professional Plus 2010	32bit	○	×	×	Office Professional Plus 2010
	64bit	○	×	×	Office Professional Plus 2010 64bit
Microsoft Word 2000		○	×	×	Word 2000
Microsoft Word 2002		○	×	×	Word 2002
Microsoft Word 2003		○	○	×	Word 2003
Microsoft Word 2007		○	×	×	Word 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Word 2007 (パッケージ版)
Microsoft Word 2010	32bit	○	×	×	Word 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Word 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Word 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Word 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Excel 2000		○	×	×	Excel 2000
Microsoft Excel 2002		○	×	×	Excel 2002
Microsoft Excel 2003		○	○	×	Excel 2003
Microsoft Excel 2007		○	×	×	Excel 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Excel 2007 (パッケージ版)
Microsoft Excel 2010	32bit	○	×	×	Excel 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Excel 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Excel 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Excel 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Outlook 2000		○	×	×	Outlook 2000
Microsoft Outlook 2002		○	×	×	Outlook 2002
Microsoft Outlook 2003		○	○	×	Outlook 2003
Microsoft Outlook 2007		○	×	×	Outlook 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Outlook 2007 (パッケージ版)
Microsoft Outlook 2010	32bit	○	×	×	Outlook 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Outlook 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Outlook 2010 (パッケージ版)

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
	64bit	×	○	×	Outlook 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft PowerPoint 2000		○	×	×	PowerPoint 2000
Microsoft PowerPoint 2002		○	×	×	PowerPoint 2002
Microsoft PowerPoint 2003		○	○	×	PowerPoint 2003
Microsoft PowerPoint 2007		○	×	×	PowerPoint 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	PowerPoint 2007 (パッケージ版)
Microsoft PowerPoint 2010	32bit	○	×	×	PowerPoint 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	PowerPoint 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	PowerPoint 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	PowerPoint 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Access 2000		○	×	×	Access 2000
Microsoft Access 2002		○	×	×	Access 2002
Microsoft Access 2003		○	○	×	Access 2003
Microsoft Access 2007		○	×	×	Access 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Access 2007 (パッケージ版)
Microsoft Access 2010	32bit	○	×	×	Access 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Access 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Access 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Access 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft FrontPage 2000		○	×	×	FrontPage 2000
Microsoft FrontPage 2002		○	×	×	FrontPage 2002
Microsoft FrontPage 2003		○	×	×	FrontPage 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	FrontPage 2003 (パッケージ版)
Microsoft Publisher 2000		○	×	×	Publisher 2000
Microsoft Publisher 2002		○	×	×	Publisher 2002

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	ブレインストール版	
Microsoft Publisher 2003		○	×	×	Publisher 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Publisher 2003 (パッケージ版)
Microsoft Publisher 2007		○	×	×	Publisher 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Publisher 2007 (パッケージ版)
Microsoft Publisher 2010	32bit	○	×	×	Publisher 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Publisher 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Publisher 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Publisher 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Visio 2000 Standard/Professional/Technical/Enterprise		○	×	×	Visio 2000
Microsoft Visio 2002 Standard		○	×	×	Visio 2002 Standard
Microsoft Visio 2002 Professional		○	×	×	Visio 2002 Professional
		×	○	×	Visio 2002 Professional (パッケージ版)
Microsoft Visio Standard 2003		○	×	×	Visio Standard 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Visio Standard 2003 (パッケージ版)
Microsoft Visio Professional 2003		○	×	×	Visio Professional 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Visio Professional 2003 (パッケージ版)
Microsoft Visio Standard 2007		○	×	×	Visio Standard 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Visio Standard 2007 (パッケージ版)
Microsoft Visio Professional 2007		○	×	×	Visio Professional 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Visio Professional 2007 (パッケージ版)
Microsoft Visio 2010 Standard/Professional/Premium	32bit	○	×	×	Visio 2010 (ボリュームライセンス版)

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
	64bit	○	×	×	Visio 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Visio 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Visio 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Project 2000		○	×	×	Project 2000
Microsoft Project 2002 Standard		○	×	×	Project 2002 Standard
		×	○	×	Project 2002 Standard (パッケージ版)
Microsoft Project 2002 Professional		○	×	×	Project 2002 Professional
Microsoft Project Standard 2003		○	×	×	Project Standard 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Project Standard 2003 (パッケージ版)
Microsoft Project Professional 2003		○	×	×	Project Professional 2003 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Project Professional 2003 (パッケージ版)
Microsoft Project Standard 2007		○	×	×	Project Standard 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Project Standard 2007 (パッケージ版)
Microsoft Project Professional 2007		○	×	×	Project Professional 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Project Professional 2007 (パッケージ版)
Microsoft Project Standard 2010	32bit	○	×	×	Project Standard 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Project Standard 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Project Standard 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	Project Standard 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Project Professional 2010	32bit	○	×	×	Project Professional 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	Project Professional 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	Project Professional 2010 (パッケージ版)

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	ブレインストール版	
	64bit	×	○	×	Project Professional 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft InfoPath 2007		○	×	×	InfoPath 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	InfoPath 2007 (パッケージ版)
Microsoft InfoPath 2010	32bit	○	×	×	InfoPath 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	InfoPath 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	InfoPath 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	InfoPath 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft InterConnect 2007		○	×	×	InterConnect 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	InterConnect 2007 (パッケージ版)
Microsoft Groove 2007		○	×	×	Groove 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	Groove 2007 (パッケージ版)
Microsoft SharePoint Workspace 2010	32bit	○	×	×	SharePoint Workspace 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	SharePoint Workspace 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	SharePoint Workspace 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	SharePoint Workspace 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft OneNote 2007		○	×	×	OneNote 2007 (ボリュームライセンス版)
		×	○	×	OneNote 2007 (パッケージ版)
Microsoft OneNote 2010	32bit	○	×	×	OneNote 2010 (ボリュームライセンス版)
	64bit	○	×	×	OneNote 2010 64bit (ボリュームライセンス版)
	32bit	×	○	×	OneNote 2010 (パッケージ版)
	64bit	×	○	×	OneNote 2010 64bit (パッケージ版)
Microsoft Lync 2010	32bit	○	×	×	Lync 2010 (ボリュームライセンス版)

製品名		提供形態			JP1/NETM/DM での表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
	64bit	○	×	×	Lync 2010 64bit (ボリュームライセンス版)

(凡例)

- ：取得できる
×：取得できない

● 英語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報

英語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-11 英語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報 1

製品名	VR	エディション	ソフトウェア名称	ソフトウェア VR	会社名	言語	パス	サイズ
Microsoft Office	2003	Standard Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Enterprise Edition	○	○	○	○	○	○
		Small Business Edition	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※ 1	○	○
		Small Business	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional	○	○	○	○※ 1	○	○
		Ultimate	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional Plus	○	○	○	○※ 1	○	○
		Enterprise	○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 ※ 4	Home and Business (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
		Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional Plus (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Word	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○

2. JP1/NETM/DM の機能

製品名	VR	エディション	ソフトウェア名称	ソフトウェア VR	会社名	言語	パス	サイズ
Microsoft Excel	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Outlook	2003	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft PowerPoint	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Access	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft FrontPage	2003		○	○	○	○	○	○
Microsoft Publisher	2003		○	○	○	○	○	○
	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Visio	2003	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional	○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 ※ 4 ※ 5 ※ 6	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
		Premium1 (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Project	2003	Standard	○	○	○	○	○	○
		Professional	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○	○※ 1	○	○
		Professional	○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 ※ 4	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○

製品名	VR	エディション	ソフトウェア名称	ソフトウェア VR	会社名	言語	パス	サイズ
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft InfoPath	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Groove	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft SharePoint	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft OneNote	2007		○	○	○	○※ 1	○	○
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○※ 1	○	○
Microsoft Lync	2010 (32bit/64bit) ※ 7		○	○	○	○	○	○

表 2-12 英語版 Microsoft Office 製品の取得可能情報 2

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日 付	プロダク ト ID	登録会社 名	登録所有 者名	コンポー ネントプ ロダクト
Microsoft Office	2003	Standard Edition	○	○	○	○	○	○
		Professional Enterprise Edition	○	○	○	○	○	○
		Small Business Edition	○	○	○	○	○	○
	2007	Standard	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
		Small Business	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
		Professional	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
		Ultimate	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
		Professional Plus	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
		Enterprise	○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	○
	2010 ※ 4	Home and Business (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	○
		Professional Plus (32bit/ 64bit)	○	○	○	○	○	○
Microsoft Word	2003		○	○	○	○	○	×

2. JP1/NETM/DM の機能

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日付	プロダクトID	登録会社名	登録所有者名	コンポーネントプロダクト
Microsoft Excel	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Outlook	2003	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft PowerPoint	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Access	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft FrontPage	2003		○	○	○	○	○	×
Microsoft Publisher	2003		○	○	○	○	○	×
	2007		○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 (32bit/64bit) ※4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Visio	2003	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2007	Standard	○	○	○※2	○※3	○※3	×
		Professional	○	○	○※2	○※3	○※3	×
	2010 ※4 ※5 ※6	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Premium1 (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
Microsoft Project	2003	Standard	○	○	○	○	○	×
		Professional	○	○	○	○	○	×
	2007	Standard	○	○	○※2	○※3	○※3	×
		Professional	○	○	○※2	○※3	○※3	×

製品名	VR	エディション	検索日時	インストール日付	プロダクト ID	登録会社名	登録所有者名	コンポーネントプロダクト
	2010 ※ 4	Standard (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
		Professional (32bit/64bit)	○	○	○	○	○	×
Microsoft InfoPath	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Groove	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
Microsoft SharePoint	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft OneNote	2007		○	○	○※ 2	○※ 3	○※ 3	×
	2010 (32bit/64bit) ※ 4		○	○	○	○	○	×
Microsoft Lync	2010 (32bit/64bit) ※ 7		○	○	○	×	×	×

(凡例)

- ：取得できる
×：取得できない

注※ 1

ニュートラル言語（ロケール :0x000）として取得されます。

注※ 2

プロダクトキーを入力するまではプロダクト ID は生成されないため、取得できません。

注※ 3

インストール時にプロダクトキーを入力せず、あとでプロダクトキーを入力した場合には、登録会社名および登録所有者名の情報は登録されないため、取得できません。

注※ 4

次の方法でインストールを実行した場合、情報取得先が異なります。
・媒体直下または「x86」フォルダにある setup.exe、および自動起動によりインストールした場合。
・「x64」フォルダにある setup.exe によりインストールした場合。

注※ 5

プロダクトキーに基づいて、Standard/Professional/Premium としてインストールでき、変更も可能。

注※ 6

GUID が統一されエディションの判定ができないため、エディション名は非表示となります（インストール時のエディション名がレジストリに設定されますが、※ 5 の変更で名称が変更されないため）。

注※ 7

32bit/64bit OS 専用で、32bit 版を 64bit OS にインストールすることはできません。

● 情報を取得できる英語版 Microsoft Office 製品

表 2-13 情報を取得できる Microsoft Office 製品（英語版）

製品名		提供形式			表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	ブレインストール版	
Microsoft Office Standard Edition 2003		○	×	×	Office Standard 2003 (ENG)
Microsoft Office Professional Enterprise Edition 2003		○	×	×	Office Professional 2003 (ENG)
Microsoft Office Small Business Edition 2003		○	×	×	Office Small Business 2003 (ENG)
Microsoft Office Standard 2007		○	×	×	Office Standard 2007 (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Small Business 2007		○	×	×	Office Small Business 2007 (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Professional 2007		○	×	×	Office Professional 2007 (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Ultimate 2007		○	×	×	Office Ultimate 2007 (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Professional Plus 2007		○	×	×	Office Professional Plus 2007 ※
Microsoft Office Enterprise 2007		○	×	×	Office Enterprise 2007 ※
Microsoft Office Home and Business 2010	32bit	○	×	×	Office Home and Business 2010 (ボリュームライセンス版) ※
	64bit	○	×	×	Office Home and Business 2010 64bit (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Standard 2010	32bit	○	×	×	Office Standard 2010 ※
	64bit	○	×	×	Office Standard 2010 64bit ※
Microsoft Office Professional 2010	32bit	○	×	×	Office Professional 2010 (ボリュームライセンス版) ※
	64bit	○	×	×	Office Professional 2010 64bit (ボリュームライセンス版) ※
Microsoft Office Professional Plus 2010	32bit	○	×	×	Office Professional Plus 2010 ※
	64bit	○	×	×	Office Professional Plus 2010 64bit ※
Microsoft Word 2003		○	×	×	Word 2003 (ENG)
Microsoft Word 2007		○	×	×	Word 2007 (ボリュームライセンス版) ※

製品名		提供形式			表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
Microsoft Word 2010	32bit	○	×	×	Word 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Word 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Excel 2003		○	×	×	Excel 2003 (ENG)
Microsoft Excel 2007		○	×	×	Excel 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Excel 2010	32bit	○	×	×	Excel 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Excel 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Outlook Standard 2003		○	×	×	Outlook Standard 2003 (ENG)
Microsoft Outlook Professional 2003		○	×	×	Outlook Professional 2003 (ENG)
Microsoft Outlook 2007		○	×	×	Outlook 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Outlook 2010	32bit	○	×	×	Outlook 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Outlook 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft PowerPoint 2003		○	×	×	PowerPoint 2003 (ENG)
Microsoft PowerPoint 2007		○	×	×	PowerPoint 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft PowerPoint 2010	32bit	○	×	×	PowerPoint 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	PowerPoint 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Access 2003		○	×	×	Access 2003 (ENG)
Microsoft Access 2007		○	×	×	Access 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Access 2010	32bit	○	×	×	Access 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Access 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft FrontPage 2003		○	×	×	FrontPage 2003 (ENG)
Microsoft Publisher 2003		○	×	×	Publisher 2003 (ENG)
Microsoft Publisher 2007		○	×	×	Publisher 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Publisher 2010	32bit	○	×	×	Publisher 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Publisher 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※

2. JP1/NETM/DM の機能

製品名		提供形式			表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	ブレインストール版	
	64bit	○	×	×	Publisher 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Visio Standard 2003		○	×	×	Visio Standard 2003 (ENG)
Microsoft Visio Professional 2003		○	×	×	Visio Professional 2003 (ENG)
Microsoft Visio Standard 2007		○	×	×	Visio Standard 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Visio Professional 2007		○	×	×	Visio Professional 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Visio 2010 Standard/Professional/Premium	32bit	○	×	×	Visio 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Visio 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Project Standard 2003		○	×	×	Project Standard 2003 (ENG)
Microsoft Project Professional 2003		○	×	×	Project Professional 2003 (ENG)
Microsoft Project Standard 2007		○	×	×	Project Standard 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Project Professional 2007		○	×	×	Project Professional 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Project Standard 2010	32bit	○	×	×	Project Standard 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Project Standard 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Project Professional 2010	32bit	○	×	×	Project Professional 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	Project Professional 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft InfoPath 2007		○	×	×	InfoPath 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft InfoPath 2010	32bit	○	×	×	InfoPath 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	InfoPath 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Groove 2007		○	×	×	Groove 2007 (ボリュームライセンス版)※

製品名		提供形式			表示名
		ボリュームライセンス版	パッケージ版	プレインストール版	
Microsoft SharePoint Workspace 2010	32bit	○	×	×	SharePoint Workspace 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	SharePoint Workspace 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft OneNote 2007		○	×	×	OneNote 2007 (ボリュームライセンス版)※
Microsoft OneNote 2010	32bit	○	×	×	OneNote 2010 (ボリュームライセンス版)※
	64bit	○	×	×	OneNote 2010 64bit (ボリュームライセンス版)※
Microsoft Lync 2010	32bit	○	×	×	Lync 2010 (ENG)
	64bit	○	×	×	Lync 2010 64bit (ENG)

(凡例)

- ：取得できる
- ×：取得できない

注※

英語版であることを示す「(ENG)」は表示されません。

(f) ウィルス対策製品を検索

表 2-14 ～表 2-15 に示すウィルス対策製品の情報を取得します。

英語版のクライアントが混在する場合、英語版のウィルス対策製品の情報も同時に取得できます。取得した英語版のウィルス対策製品の情報を JP1/NETM/DM で表示すると、表示名の最後に英語版であることを示す「(ENG)」が付きます。

ウィルス対策製品の情報は、バージョンが 07-00 以降の Windows 版クライアント、またはバージョンが 07-50 以降で OS が Linux の UNIX 版クライアントから取得できます。バージョンが 07-00 より前の Windows 版クライアントは、ジョブがエラーとなり、情報を取得できません。

なお、JP1/NETM/DM で表示されるウィルス対策製品の名称は、実際の製品名と異なる場合がありますのでご注意ください。

● 情報を取得できるウィルス対策製品（日本語版）

Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品（日本語版）を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-14 Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品 1 (日本語版)

会社名	製品名	ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
シマン テック	Norton AntiVirus 2002	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2002 Professional Edition	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2003	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2003 Professional Edition	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2004	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2004 Professional	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2005	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2006	○	○	○	○	○	○	○
	Norton AntiVirus 2007	○	○	○	○※ 1	○	○	○
	Norton AntiVirus 2008	32bit	○	○	○※ 1	○	○	○
		64bit						
	Norton AntiVirus 2009	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	Norton AntiVirus 2010	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	Norton AntiVirus 2011	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	Norton AntiVirus 2012	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	Norton AntiVirus (20.1.0.24)	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	Norton AntiVirus Corporate Edition 7.6	Client	○	○	○	○	○	○
		Server						
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 8.0	Client	○	○	○	○	○	○
		Server						

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 8.1	Client	○	○	○	○	○	○	○
		Server							
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 9.0		○	○	○	○	○	○	○
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.2 ※ 2	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Client Security 2.0	Client	○	○	○	○	○	○	○
		Server							
	Symantec Client Security 3.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Client Security 3.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
マカフィー	Symantec Endpoint Protection 11.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Endpoint Protection 12.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	McAfee VirusScan 4.5.1		○	○	○	○	○	○	○
	McAfee VirusScan ASaP 2.8		○	○	○	×	×	×	○
	McAfee Managed VirusScan 3.0		○	○	○	×	○	×	○

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名	ソフト ウェア名 称	ソフトウェ アバージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日 時
	McAfee Managed VirusScan plus AntiSpyware 3.5	○	○	○	×	○	×	○
	McAfee Managed Total Protection 4.0	○	○	○	×	○	×	○
	McAfee Managed Total Protection 4.5.1	○	○	○	×	○	×	○
	McAfee Managed Total Protection 4.7	○	○	○	×	○	×	○
	64bit							
	McAfee Managed Total Protection 5.0	○	○	○	×	○	×	○
	64bit							
	McAfee SaaS Endpoint Protection 5.2	○	○	○	×	○	×	○
	64bit							
	McAfee VirusScan Enterprise 7.0	○	○	○	○※3	○	○	○
	McAfee VirusScan Enterprise 7.1	○	○	○	○※3	○	○	○
	McAfee VirusScan Enterprise 8.0i	○	○	○	○※3	○	○	○
	McAfee VirusScan Enterprise 8.5i	○	○	○	○※3	○	○	○
	64bit							
	McAfee VirusScan Enterprise 8.7i	○	○	○	○※3	○	○	○
	64bit							
	McAfee VirusScan Enterprise 8.8	○	○	○	○※3	○	○	○
	64bit							
	McAfee VirusScan Thin Client 6.1.0	○	○	○	○	○	○	○
	McAfee NetShield 4.5a	○	○	○	○	○	○	○
トレ ンド マイ クロ	ウイルスバスター 2002	○	○	○	○※3	○	○	○
	ウイルスバスター 2003	○	○	○	○※3	○	○	○
	ウイルスバスター 2004	○	○	○	○※3	○	○	○
	ウイルスバスター 2005	○	○	○	○※3	○	○	○

会社名	製品名	ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	ウイルスバスター 2006	○	○	○	○※3	○	○	○
	ウイルスバスター 2007	○	○	○	○※3	○	○	○
	ウイルスバスター 2008	○	○	○	○	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスター 2009	○	○	○	○※1	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスター 2010	○	○	○	○※1	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスター 2011	○	○	○	○	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスター 2012	○	○	○	○	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスター クラウド (6.0)	○	○	○	○	○	○	○
		32bit						
		64bit						
	ウイルスバスターコーポレートエディション 5.02	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系						
		9x 系						
	ウイルスバスターコーポレートエディション 5.06	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系						
		9x 系						
	ウイルスバスターコーポレートエディション 5.5	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系						
		9x 系						
	ウイルスバスターコーポレートエディション 5.58	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系						
		9x 系						
	ウイルスバスターコーポレートエディション 6.5	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系						
		9x 系						

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		ソフト ウェア名 称	ソフトウェ アバージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日 時
	ウイルスバスターコーポレートエディション アドバンス 6.5	NT 系	○	○	×	×	○	×	○
		9x 系							
	ウイルスバスターコーポレートエディション 7.0	NT 系	○	○	×	×	○	×	○
		9x 系							
	ウイルスバスターコーポレートエディション アドバンス 7.0	NT 系	○	○	×	×	○	×	○
		9x 系							
	ウイルスバスターコーポレートエディション サー バ版 7.0		○	○	×	×	○	×	○
	ウイルスバスターコーポレートエディション サー バ版 アドバンス 7.0		○	○	×	×	○	×	○
	ウイルスバスターコーポレートエディション 7.3	NT 系 32bit	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系 64bit							
		9x 系							
	ウイルスバスターコーポレートエディション アドバンス 7.3	NT 系 32bit	○	○	×	×	○	×	○
		NT 系 64bit							
		9x 系							
	ウイルスバスターコーポレートエディション サーバ版 7.3	32bit	○	○	×	×	○	×	○
		64bit							
	ウイルスバスターコーポレートエディション サーバ版 アド バンス 7.3	32bit	○	○	×	×	○	×	○
		64bit							

会社名	製品名		ソフト ウェア名 称	ソフトウェ アバージョ ン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日 時
	ウイルスバ スターコーポレ ートエディション 8.0 (アドバンス, サーバ版, サー バ版 アドバン ス含む)	32bit	○	○	×	×	○	×	○
		64bit							
	ウイルスバ スターコーポレ ートエディション 10.0 (アドバンス, サーバ版, サー バ版 アドバン ス含む)	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit				○※ 4			
	ウイルスバ スターコーポレ ートエディション 10.5	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit				○※ 4		○※ 4	
	ウイルスバ スターコーポレ ートエディション 10.6	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit				○※ 4		○※ 4	
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.31		○	○	○	×	○	×	○
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.5		○	○	○	×	○	×	○
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.56		○	○	○	×	○	×	○
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.58		○	○	○	×	○	×	○
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.7	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.8	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
マイクロソフト	Forefront Client Security 1.5	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
ESET	ESET NOD32 Antivirus 4.0.474.9	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.52.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.67.3	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.71.2	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.95.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 5.2.11.3	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
F-Secure	F-Secure Client Security 8.00	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 8.01	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 8.02	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.00	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.01	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	F-Secure Client Security 9.10	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.11	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.20	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.31	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.32	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
Kaspersky	Kaspersky Open Spece Security 6.0.4.1424	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows (8.1.0.646)	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows (8.1.0.831)	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							

表 2-15 Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品 2 (日本語版)

会社名	製品名	インストール日付	登録会社名	登録所有者名	ウィルス検出エンジンバージョン	ウィルス定義ファイルバージョン	ウィルス検出の常駐 / 非常駐設定	JP1/NETM/DM での表示
シマンテック	Norton AntiVirus 2002	○	○	○	○	○	×	Norton AntiVirus 2002
	Norton AntiVirus 2002 Professional Edition	○	○	○	○	○	×	Norton AntiVirus 2002 Professional

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Norton AntiVirus 2003	○	○	○	○	○	×	Norton AntiVirus 2003
	Norton AntiVirus 2003 Professional Edition	○	○	○	○	○	×	Norton AntiVirus 2003 Professional
	Norton AntiVirus 2004	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2004
	Norton AntiVirus 2004 Professional	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2004 Professional
	Norton AntiVirus 2005	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2005
	Norton AntiVirus 2006	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2006
	Norton AntiVirus 2007	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2007
	Norton AntiVirus 2008	○	○	○	×	○	×	Norton AntiVirus 2008
	64bit							Norton AntiVirus 2008 64bit
	Norton AntiVirus 2009	×	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2009
	64bit							Norton AntiVirus 2009 64bit
	Norton AntiVirus 2010	○	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2010
	64bit							Norton AntiVirus 2010 64bit
	Norton AntiVirus 2011	○	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2011
	64bit							Norton AntiVirus 2011 64bit

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Norton AntiVirus 2012	32bit	○	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2012
		64bit							Norton AntiVirus 2012 64bit
	Norton AntiVirus (20.1.0.24)	32bit	○	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus
		64bit							Norton AntiVirus 64bit
	Norton AntiVirus Corporate Edition 7.6	Client	○	○	○	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 7.6 for Client
		Server							AntiVirus Corporate Edition 7.6 for Server
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 8.0	Client	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 8.0 for Client
		Server							AntiVirus Corporate Edition 8.0 for Server
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 8.1	Client	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 8.0 for Client
		Server							AntiVirus Corporate Edition 8.0 for Server
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 9.0		○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 9.0
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.0	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.0
		64bit							Symantec AntiVirus Win64
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.1	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.1
		64bit							Symantec AntiVirus Win64

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.2 ※ 2	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.2
		64bit							Symantec AntiVirus Win64
	Symantec Client Security 2.0	Client	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security
		Server							AntiVirus Corporate Edition 9.0
	Symantec Client Security 3.0	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security
		64bit							Symantec AntiVirus Win64
	Symantec Client Security 3.1	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security
		64bit							Symantec AntiVirus Win64
	Symantec Endpoint Protection 11.0	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Endpoint Protection 11.0
		64bit							Symantec Endpoint Protection 11.0 64bit
	Symantec Endpoint Protection 12.1	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Endpoint Protection 12.1
		64bit							Symantec Endpoint Protection 12.1 64bit
マカ フィー	McAfee VirusScan 4.5.1		○	○	○	○	○	○	VirusScan 4.5.1
	McAfee VirusScan ASaP 2.8		×	×	×	○	○	×	VirusScan ASaP
	McAfee Managed VirusScan 3.0		×	×	×	○	○	×	Managed VirusScan
	McAfee Managed VirusScan plus AntiSpyware 3.5		×	×	×	○	○	×	Managed VirusScan

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 所有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	McAfee Managed Total Protection 4.0	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection
	McAfee Managed Total Protection 4.5.1	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection
	McAfee Managed Total Protection 4.7	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection
	64bit							Managed Total Protection 64bit
	McAfee Managed Total Protection 5.0	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection
	64bit							Managed Total Protection 64bit
	McAfee SaaS Endpoint Protection 5.2	×	×	×	○	○	○	SaaS Endpoint Protection
	64bit							SaaS Endpoint Protection 64bit
	McAfee VirusScan Enterprise 7.0	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 7.0
	McAfee VirusScan Enterprise 7.1	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 7.1
	McAfee VirusScan Enterprise 8.0i	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.0i
	McAfee VirusScan Enterprise 8.5i	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.5i
	64bit							VirusScan Enterprise 8.5i 64bit
	McAfee VirusScan Enterprise 8.7i	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.7i
	64bit							VirusScan Enterprise 8.7i 64bit

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウイルス 検出エン ジンバー ジョン	ウイルス 定義ファ イルバー ジョン	ウイルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
トレンド マイ クロ	McAfee VirusScan Enterprise 8.8	32bit	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.8
		64bit							VirusScan Enterprise 8.8 64bit
	McAfee VirusScan Thin Client 6.1.0		○	○	○	○	○	×	VirusScan TC 6.1.0
	McAfee NetShield 4.5a		○	○	○	○	○	○	NetShield 4.5
	ウイルスバスター 2002		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2002
	ウイルスバスター 2003		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2003
	ウイルスバスター 2004		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2004
	ウイルスバスター 2005		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2005
	ウイルスバスター 2006		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2006
	ウイルスバスター 2007		○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2007
	ウイルスバス ター 2008	32bit	○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2008
		64bit							ウイルスバス ター 2008 64bit
	ウイルスバス ター 2009	32bit	○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2009
		64bit							ウイルスバス ター 2009 64bit
	ウイルスバス ター 2010	32bit	○	○	○	○	○	○	ウイルスバス ター 2010
		64bit							ウイルスバス ター 2010 64bit
	ウイルスバス ター 2011	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター 2011
		64bit							ウイルスバス ター 2011 64bit
	ウイルスバス ター 2012	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター 2012
		64bit							ウイルスバス ター 2012 64bit

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ウイルスバ スター クラウド (6.0)	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバ スター クラウド
		64bit							ウイルスバ スター クラウド 64bit
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 5.02	NT 系	○	○	○	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 5.06	NT 系	○	×	×	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 5.5	NT 系	○	○	○	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 5.58	NT 系	○	×	×	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 6.5	NT 系	○	×	×	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション ア ドバンス 6.5	NT 系	○	×	×	○	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系							ウイルスバ スター Corp. Win9x

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 7.0	NT 系	○	×	×	○	○	ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系						ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション アドバンス 7.0	NT 系						ウイルスバ スター Corp. WinNT
		9x 系						ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション サー バ版 7.0							ウイルスバ スター Corp. WinNT
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション サー バ版 アドバ ンス 7.0							ウイルスバ スター Corp. WinNT
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション 7.3	NT 系 32bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT
		NT 系 64bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT 64bit
		9x 系						ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション アドバンス 7.3	NT 系 32bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT
		NT 系 64bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT 64bit
		9x 系						ウイルスバ スター Corp. Win9x
	ウイルスバ スターコーポ レートエディ ション サーバ版 7.3	32bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT
		64bit						ウイルスバ スター Corp. WinNT 64bit

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウイルス 検出エン ジンバー ジョン	ウイルス 定義ファ イルバー ジョン	ウイルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ウイルスバス ターコーポレ ートエディシ ョンサーバ版 アドバンス 7.3	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター Corp. WinNT
		64bit							ウイルスバス ター Corp. WinNT 64bit
	ウイルスバス ターコーポレ ートエディシ ョン8.0 (アドバンス, サーバ版, サー バ版 アドバ ンス含む)	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター Corp. WinNT
		64bit							ウイルスバス ター Corp. WinNT 64bit
	ウイルスバス ターコーポレ ートエディシ ョン10.0 (アドバンス, サーバ版, サー バ版 アドバ ンス含む)	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.0
		64bit							ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.0 64bit
	ウイルスバス ターコーポレ ートエディシ ョン10.5	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.5
		64bit							ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.5 64bit
	ウイルスバス ターコーポレ ートエディシ ョン10.6	32bit	○	×	×	○	○	○	ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.6
		64bit							ウイルスバス ター Corp. WinNT 10.6 64bit
ServerProtect for Windows NT/Netware 5.31			×	○	○	○	○	○	ServerProtect Normal Server
ServerProtect for Windows NT/Netware 5.5			×	○	○	○	○	○	ServerProtect Normal Server

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウイルス 検出エン ジンバー ジョン	ウイルス 定義ファ イルバー ジョン	ウイルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.56	×	○	○	○	○	○	ServerProtect Normal Server
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.58	×	○	○	○	○	○	ServerProtect Normal Server
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.7	32bit	×	○	○	○	○※ 5	ServerProtect Normal Server
		64bit						ServerProtect Normal Server 64bit
	ServerProtect for Windows NT/Netware 5.8	32bit	×	○	○	○	○※ 5	ServerProtect Normal Server
		64bit						ServerProtect Normal Server 64bit
	Forefront Client Security 1.5	32bit	○	×	×	○	○	Forefront Client Security
		64bit						Forefront Client Security 64bit
ESET	ESET NOD32 Antivirus 4.0.474.9	32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.52.0	32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.67.3	32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit
	ESET NOD32 Antivirus 4.2.71.2	32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit
		32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit
		32bit	○	×	×	×	○	ESET NOD32 Antivirus
		64bit						ESET NOD32 Antivirus 64bit

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.95.1	32bit	○	×	×	×	○	×	ESET NOD32 Antivirus
		64bit							ESET NOD32 Antivirus 64bit
	ESET NOD32 Antivirus 5.2.11.3	32bit	○	×	×	×	○	×	ESET NOD32 Antivirus
		64bit							ESET NOD32 Antivirus 64bit
	F-Secure Client Security 8.00	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 8.00
		64bit							F-Secure Client Security 8.00 64bit
F-Sec ure	F-Secure Client Security 8.01	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 8.01
		64bit							F-Secure Client Security 8.01 64bit
	F-Secure Client Security 8.02	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 8.02
		64bit							F-Secure Client Security 8.02 64bit
	F-Secure Client Security 9.00	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.00
		64bit							F-Secure Client Security 9.00 64bit
	F-Secure Client Security 9.01	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.01
		64bit							F-Secure Client Security 9.01 64bit

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	F-Secure Client Security 9.10	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.10
		64bit							F-Secure Client Security 9.10 64bit
	F-Secure Client Security 9.11	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.11
		64bit							F-Secure Client Security 9.11 64bit
	F-Secure Client Security 9.20	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.20
		64bit							F-Secure Client Security 9.20 64bit
	F-Secure Client Security 9.31	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.31
		64bit							F-Secure Client Security 9.31 64bit
	F-Secure Client Security 9.32	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.32
		64bit							F-Secure Client Security 9.32 64bit

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示						
Kaspe rsky	Kaspersky Open Spece Security 6.0.4.1424	32bit	○	×	×	×	×	○	• Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Servers						
		64bit							• Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Workstatio ns						
	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows (8.1.0.646)	32bit							○	×	×	×	×	○	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows
		64bit													Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows 64bit
	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows (8.1.0.831)	32bit							○	×	×	×	×	○	Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows
		64bit													Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows 64bit

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

9x 系：Windows Me または Windows 98 の場合

NT 系：Windows NT の場合

注※ 1

英語 (U.S) (ロケール :0x409) として取得されます。

注※ 2

Windows Vista 以外の OS にインストールした場合には、VR10.1 と同じ表示名となります。

注※ 3

2. JP1/NETM/DM の機能

ニュートラル言語（ロケール :0x000）として取得されます。

注※ 4

「Client Packager によるインストール」で「MSI 形式パッケージ」を使用してインストールした場合、情報取得可能です。

注※ 5

OS が 64bit の場合、常駐 / 非常駐を判断することができません。

表 2-16 UNIX 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品

製品名	バージョン	JP1/NETM/DM での表示
ServerProtect for Linux	Linux 版 JP1/NETM/DM Client のバージョンによって、取得できるバージョンが異なる。※	SProtectLinux
Linux Shield		LinuxShield
Linux Security		f-secure-linux-security
Symantec AntiVirus for Linux		sav
VirusScan Enterprise for Linux		McAfeeVSEForLinux

注※ 取得できる製品のバージョンについては、UNIX 版 JP1/NETM/DM のマニュアル「JP1/NETM/DM Client(UNIX(R) 用)」を参照してください。

● 情報を取得できる英語版ウィルス対策製品

Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品を次の二つの表に示します。

なお、表中の凡例および注釈については、二つの表で共通です。

表 2-17 Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品 1（英語版）

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
シマンテック	Symantec AntiVirus Corporate Edition 9.0		○	○	○	○	○	○	○
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.2 ※ 1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Client Security 2.0	Client	○	○	○	○	○	○	○
		Server							

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	Symantec Client Security 3.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Client Security 3.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Endpoint Protection 11.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Symantec Endpoint Protection 12.1	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	Norton AntiVirus 2009	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	Norton AntiVirus 2010	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	Norton AntiVirus 2011	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	Norton AntiVirus 2012	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
マカフィー	McAfee VirusScan Enterprise 8.0i		○	○	○	○※3	○	○	○
	McAfee VirusScan Enterprise 8.5i	32bit	○	○	○	○※3	○	○	○
		64bit							
	McAfee VirusScan Enterprise 8.7i	32bit	○	○	○	○※3	○	○	○
		64bit							
	McAfee VirusScan Enterprise 8.8	32bit	○	○	○	○※3	○	○	○
		64bit							
	McAfee Managed Total Protection 4.7	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名	ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	McAfee Managed Total Protection 5.0	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
	McAfee SaaS Endpoint Protection 5.2	32bit	○	○	×	○	×	○
		64bit						
トレンドマイクロ	PC-cillin 2009	32bit	○	○	○	○	○	○
		64bit						
	PC-cillin 2010	32bit	○	○	○	○	○	○
		64bit						
	Trend Micro Titanium Internet Security	32bit	○	○	○	○	○	○
		64bit						
	OfficeScan Corporate Edition 7.0	NT 系	○	○	×	×	○	×
		9x 系						
	OfficeScan Corporate Edition 7.3	NT 系 32bit	○	○	×	×	○	×
		NT 系 64bit						
		9x 系						
	OfficeScan Corporate Edition 8.0	32bit	○	○	×	×	○	×
		64bit						
	OfficeScan Corporate Edition 10.0	32bit	○	○	○	×	○	×
		64bit			○※ 4			
	OfficeScan Corporate Edition 10.5	32bit	○	○	○	×	○	×
		64bit			○※ 4		○※ 4	
	ServerProtect for Microsoft Windows/ Novell NetWare 5.7	32bit	○	○	○	×	○	×
		64bit						

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
	ServerProtect for Microsoft Windows/Novell NetWare 5.8	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
F-Secure	F-Secure Anti-Virus Client Security 5.7		○	○	○	×	○	×	○
	F-Secure Anti-Virus Client Security 6.01		○	○	○	×	○	×	○
	F-Secure Client Security 7.0 ※ 6		○	○	○	×	○	×	○
	F-Secure Client Security 7.1 ※ 7		○	○	○	×	○	×	○
	F-Secure Client Security 8.01 ※ 8	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.00 ※ 9	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.01	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.10	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.11	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
	F-Secure Client Security 9.20	32bit	○	○	○	×	○	×	○
		64bit							
マイクロソフト	Forefront Client Security 1.5	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							

会社名	製品名		ソフトウェア名称	ソフトウェアバージョン	会社名	言語	パス	サイズ	検索日時
Kaspersky	- Kaspersky Open Spece Security 6.0.3.837 - Kaspersky Open Spece Security 6.0.4.1424	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
Avira	Avira AntiVir Professional 9	32bit	○	○	○	○※3	○	×	○
		64bit							
	Avira AntiVir Professional 10	32bit	○	○	○	○※3	○	○	○
		64bit							
	Avira AntiVir Server 10.0.0.1824	32bit	○	○	○	○※10	○	×	○
		64bit							
ESET	ESET NOD32 Antivirus 4.2.71.2	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.93.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.94.0	32bit	○	○	○	○	○	○	○
		64bit							

表 2-18 Windows 版クライアントから情報を取得できるウィルス対策製品 2 (英語版)

会社名	製品名		インストール日付	登録会社名	登録所有者名	ウィルス検出エンジンバージョン	ウィルス定義ファイルバージョン	ウィルス検出の常駐 / 非常駐設定	JP1/NETM/DM での表示
シマンテック	Symantec AntiVirus Corporate Edition 9.0		○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 9.0 (ENG)
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.0	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.0 (ENG)
		64bit							Symantec AntiVirus Win64 (ENG)

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.1	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.1 (ENG)
		64bit							Symantec AntiVirus Win64 (ENG)
	Symantec AntiVirus Corporate Edition 10.2 ※ 1	32bit	○	×	×	○	○	○	AntiVirus Corporate Edition 10.2 (ENG)
		64bit							Symantec AntiVirus Win64 (ENG)
	Symantec Client Security 2.0	Client	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security (ENG)
		Server							AntiVirus Corporate Edition 9.0 (ENG)
	Symantec Client Security 3.0	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security (ENG)
		64bit							Symantec AntiVirus Win64 (ENG)
	Symantec Client Security 3.1	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Client Security (ENG)
		64bit							Symantec AntiVirus Win64 (ENG)
	Symantec Endpoint Protection 11.0	32bit	○	×	×	○	○	○	Symantec Endpoint Protection 11.0 (ENG)
		64bit							Symantec Endpoint Protection 11.0 64bit (ENG)

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Symantec Endpoint Protection 12.1	32bit	○	×	×	○	○	Symantec Endpoint Protection 12.1 (ENG)
		64bit						Symantec Endpoint Protection 12.1 64bit (ENG)
	Norton AntiVirus 2009	32bit	×	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2009 ※ 2
		64bit						Norton AntiVirus 2009 64bit ※ 2
	Norton AntiVirus 2010	32bit	○	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2010 ※ 2
		64bit						Norton AntiVirus 2010 64bit ※ 2
	Norton AntiVirus 2011	32bit	○	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2011 ※ 2
		64bit						Norton AntiVirus 2011 64bit ※ 2
	Norton AntiVirus 2012	32bit	○	×	×	○	×	Norton AntiVirus 2012 ※ 2
		64bit						Norton AntiVirus 2012 64bit ※ 2
マカ フィー	McAfee VirusScan Enterprise 8.0i		○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.0i (ENG)
	McAfee VirusScan Enterprise 8.5i	32bit	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.5i ※ 2
		64bit						VirusScan Enterprise 8.5i 64bit ※ 2

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	McAfee VirusScan Enterprise 8.7i	32bit	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.7i ※ 2
		64bit							VirusScan Enterprise 8.7i 64bit ※ 2
	McAfee VirusScan Enterprise 8.8	32bit	○	○	○	○	○	○	VirusScan Enterprise 8.8 ※ 2
		64bit							VirusScan Enterprise 8.8 64bit ※ 2
	McAfee Managed Total Protection 4.7	32bit	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection ※ 2
		64bit							Managed Total Protection 64bit ※ 2
	McAfee Managed Total Protection 5.0	32bit	×	×	×	○	○	×	Managed Total Protection ※ 2
		64bit							Managed Total Protection 64bit ※ 2
	McAfee SaaS Endpoint Protection 5.2	32bit	×	×	×	○	○	○	SaaS Endpoint Protection ※ 2
		64bit							SaaS Endpoint Protection 64bit ※ 2
トレ ンド マイ クロ	PC-cillin 2009	32bit	○	○	○	○	○	○	PC-cillin 2009
		64bit							PC-cillin 2009 64bit
	PC-cillin 2010	32bit	○	○	○	○	○	○	PC-cillin 2010
		64bit							PC-cillin 2010 64bit

会社名	製品名	インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	Trend Micro Titanium Internet Security	32bit	○	×	×	○	○	Trend Micro Titanium Internet Security
		64bit						Trend Micro Titanium Internet Security 64bit
	OfficeScan Corporate Edition 7.0	NT 系	○	×	×	○	○	OfficeScan Corp. WinNT (ENG)
		9x 系						OfficeScan Corp. Win9x (ENG)
	OfficeScan Corporate Edition 7.3	NT 系 32bit	○	×	×	○	○	OfficeScan Corp. WinNT (ENG)
		NT 系 64bit						OfficeScan Corp. WinNT 64bit (ENG)
		9x 系						OfficeScan Corp. Win9x (ENG)
	OfficeScan Corporate Edition 8.0	32bit	○	×	×	○	○	OfficeScan Corp. WinNT (ENG)
		64bit						OfficeScan Corp. WinNT 64bit (ENG)
	OfficeScan Corporate Edition 10.0	32bit	○	×	×	○	○	OfficeScan Corp. WinNT 10.0 (ENG)
		64bit						OfficeScan Corp. WinNT 10.0 64bit (ENG)
	OfficeScan Corporate Edition 10.5	32bit	○	×	×	○	○	OfficeScan Corp. WinNT 10.5 (ENG)
		64bit						OfficeScan Corp. WinNT 10.5 64bit (ENG)
	ServerProtect for Microsoft Windows/ Novell NetWare 5.7	32bit	×	○	○	○	○※ 5	ServerProtect Normal Server ※ 2
		64bit						ServerProtect Normal Server 64bit ※ 2

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ServerProtect for Microsoft Windows/ Novell NetWare 5.8	32bit	×	○	○	○	○	○※ 5	ServerProtect Normal Server ※ 2
		64bit							ServerProtect Normal Server 64bit ※ 2
F-Sec ure	F-Secure Anti-Virus Client Security 5.7		×	×	×	×	○	×	F-Secure Anti-Virus Client Security (ENG)
	F-Secure Anti-Virus Client Security 6.01		×	×	×	×	○	×	F-Secure Anti-Virus Client Security (ENG)
	F-Secure Client Security 7.0 ※ 6		×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security (ENG)
	F-Secure Client Security 7.1 ※ 7		×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security (ENG)
	F-Secure Client Security 8.01 ※ 8	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 8.01 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 8.01 64bit (ENG)
	F-Secure Client Security 9.00 ※ 9	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.00 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 9.00 64bit (ENG)
	F-Secure Client Security 9.01	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.01 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 9.01 64bit (ENG)

2. JP1/NETM/DM の機能

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	F-Secure Client Security 9.10	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.10 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 9.10 64bit (ENG)
	F-Secure Client Security 9.11	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.11 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 9.11 64bit (ENG)
	F-Secure Client Security 9.20	32bit	×	×	×	×	○	×	F-Secure Client Security 9.20 (ENG)
		64bit							F-Secure Client Security 9.20 64bit (ENG)
マイク ロソフ ト	Forefront Client Security 1.5	32bit	○	×	×	○	○	○	Forefront Client Security (ENG)
		64bit							Forefront Client Security 64bit (ENG)

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
Kaspe rsky	• Kaspersky Open Spece Security 6.0.3.837 • Kaspersky Open Spece Security 6.0.4.1424	32bit	○	×	×	×	×	○	• Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Servers (ENG) • Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Workstatio ns (ENG)
		64bit							• Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Servers 64bit (ENG) • Kaspersky Anti-Virus 6.0 for Windows Workstatio ns 64bit (ENG)
Avira	Avira AntiVir Professional 9	32bit	×	×	×	○	○	×	Avira AntiVir Professional (ENG)
		64bit							Avira AntiVir Professional 64bit (ENG)
	Avira AntiVir Professional 10	32bit	×	×	×	○	○	×	Avira AntiVir Professional (ENG)
		64bit							Avira AntiVir Professional 64bit (ENG)
	Avira AntiVir Server 10.0.0.1824	32bit	○	×	×	○	○	×	Avira AntiVir Server (ENG)
		64bit							Avira AntiVir Server 64bit (ENG)
ESET	ESET NOD32 Antivirus 4.2.71.2	32bit	○	×	×	×	○	×	ESET NOD32 Antivirus ※ 2
		64bit							ESET NOD32 Antivirus 64bit ※ 2

会社名	製品名		インストール 日付	登録会 社名	登録所 有者名	ウィルス 検出エン ジンバー ジョン	ウィルス 定義ファ イルバー ジョン	ウィルス 検出の常 駐 / 非常 駐設定	JP1/NETM/ DM での表示
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.93.0	32bit	○	×	×	×	○	×	ESET NOD32 Antivirus ※ 2
		64bit							ESET NOD32 Antivirus 64bit ※ 2
	ESET NOD32 Antivirus 5.0.94.0	32bit	○	×	×	×	○	×	ESET NOD32 Antivirus ※ 2
		64bit							ESET NOD32 Antivirus 64bit ※ 2

(凡例)

○：取得できる

×：取得できない

9x 系：Windows Me または Windows 98 の場合

NT 系：Windows NT の場合

注※ 1

Windows Vista 以外の OS にインストールした場合には、VR10.1 と同じ表示名となります。

注※ 2

英語版であることを示す「(ENG)」は表示されません。

注※ 3

ニュートラル言語（ロケール :0x000）として取得されます。

注※ 4

「Client Packager によるインストール」で「MSI 形式パッケージ」を使用してインストールした場合、情報取得可能です。

注※ 5

OS が 64bit のとき、常駐 / 非常駐を判断することができません。

注※ 6

ソフトウェアバージョンは「7.10」として通知されます。

注※ 7

ソフトウェアバージョンは「7.42」として通知されます。

注※ 8

ソフトウェアバージョンは「8.30」として通知されます。

注※ 9

ソフトウェアバージョンは「9.20」として通知されます。

注※ 10

ニュートラル言語（ロケール :0x00000009）として取得されます。

● 常駐 / 非常駐の状態が判定される設定

ウィルス対策製品のソフトウェア情報では、一部の製品を除いて常駐 / 非常駐の状態を取得できます。

ウィルス対策製品の常駐 / 非常駐の状態は、インベントリ情報の取得時に、ウィルス対策製品の特定の設定が有効になっているかどうかで判定されます。

各ウィルス対策製品で、常駐 / 非常駐の状態の判定に利用される設定を、表 2-19 ～表 2-21 に示します。

表 2-19 Windows 版のウィルス対策製品（日本語版）で常駐 / 非常駐の状態が取得される設定

製品名	常駐 / 非常駐が判定される機能
Norton AntiVirus	—
Norton AntiVirus Corporate Edition	「ファイルシステムリアルタイム保護を有効にする」がオンの場合に常駐となる。
Symantec AntiVirus Corporate Edition (8.0, 8.1)	
Symantec AntiVirus Corporate Edition (9.0 以降)	
Symantec Client Security	「Auto-Protect を有効にする」がオンの場合に常駐となる。
Symantec Endpoint Protection	
McAfee VirusScan	「ファイルシステム Auto-Protect を有効にする」がオンの場合に常駐となる。
McAfee VirusScan ASaP	
McAfee Managed Total Protection	—
McAfee SaaS Endpoint Protection	「オンアクセス スキャン」がオンの場合に常駐となる。
McAfee Managed VirusScan	
McAfee Managed VirusScan plus AntiSpyware	—
McAfee VirusScan Enterprise (7.0, 7.1, 8.0i, 8.5i, 8.7i)	「システム起動時にオンアクセス スキャンを有効にする」がオンの場合に常駐となる。
McAfee VirusScan Enterprise 8.8	
McAfee VirusScan Thin Client	—
McAfee NetShield	「オンアクセススキャンを起動時に使用可能にする」がオンの場合に常駐となる。
ウイルスバスター (2002 ～ 2010)	
ウイルスバスター (2011 ～)	「リアルタイム検索」がオンの場合に常駐となる。
ウイルスバスター クラウド (6.0)	
ウイルスバスターコーポレートエディション (5.02, 5.06)	「リアルタイムモニタ ON」を設定して、リアルタイム検索が起動している場合に常駐となる。「リアルタイムモニタ OFF」に設定して、リアルタイム検索が停止している場合は、非常駐となる。 また、管理サーバの設定による常駐 / 非常駐の判定は、ウイルスバスターコーポレートエディション (5.5 以降) と同様となる。
ウイルスバスターコーポレートエディション (5.5 以降)	
ウイルスバスターコーポレートエディション アドバンス	管理サーバの「リアルタイム検索の設定」— 「リアルタイム検索を有効にする」(バージョン 8.0 の場合は「ウイルス検索を有効にする」) をオフにして、クライアントに設定を適用した場合、クライアントのリアルタイム検索が停止する。このとき、非常駐となる。
ウイルスバスターコーポレートエディション サーバ版	
ウイルスバスターコーポレートエディション サーバ版 アドバンス	

製品名	常駐 / 非常駐が判定される機能
ServerProtect for Windows NT/Netware	インフォメーションサーバの「リアルタイム検索」－「リアルタイム検索を有効にする」をオフにして一般サーバに設定すると、一般サーバのリアルタイム検索が停止する。このとき、非常駐となる。また、クライアントのOSが64ビット版の場合、常駐 / 非常駐の設定は取得できない。
Forefront Client Security	「リアルタイム保護を使用する」がオンの場合に常駐となる。
ESET NOD32 Antivirus	－
F-Secure Client Security	－
Kaspersky Open Space Security	「プロテクションの一時停止」の「一時停止」がオフの場合に常駐となる。
Kaspersky Endpoint Security 8 for Windows	「プロテクションとコントロールの一時停止」の「一時停止」がオフの場合に常駐となる。

(凡例) ー：常駐 / 非常駐の設定は取得できません。

表 2-20 UNIX 版のウィルス対策製品で常駐 / 非常駐の状態が取得される設定

製品名	常駐 / 非常駐が判定される機能
ServerProtect for Linux	リアルタイム検索が有効の場合に常駐となる。
Linux Shield	オンアクセススキャンが有効の場合に常駐となる。
Linux Security	オンアクセススキャナーデーモンが起動している場合に常駐となる。
Symantec AntiVirus for Linux	Auto-Protect が有効の場合に常駐となる。
VirusScan Enterprise for Linux	オンアクセススキャンが有効の場合に常駐となる。

表 2-21 Windows 版のウィルス対策製品（英語版）で常駐 / 非常駐の状態が取得される設定

製品名	常駐 / 非常駐が判定される機能
Symantec AntiVirus Corporate Edition	「Enable Auto-Protect」がオンの場合に常駐となる。
Symantec Client Security	
Symantec Endpoint Protection	
Norton AntiVirus	－
McAfee VirusScan Enterprise (8.0i, 8.5i, 8.7i)	「Enable on-access scanning at system startup」がオンの場合に常駐となる。
McAfee VirusScan Enterprise (8.8)	「Open Console」で「On-access scanning」に「Enabled」を設定した場合に常駐となる。
McAfee Managed Total Protection	－
McAfee SaaS Endpoint Protection	「Open Console」で「On-access scanning」に「Enabled」を設定した場合に常駐となる。
PC-cillin (2009, 2010)	「Infected files and suspected spyware」がオンの場合に常駐となる。

製品名	常駐 / 非常駐が判定される機能
Trend Micro Titanium Internet Security	「Protection Against Viruses & Spyware」がオンの場合に常駐となる。
OfficeScan Corporate Edition (7.0, 7.3)	管理サーバの「Real-time Scan Settings」－「Enable Real-time Scan」をオフにして、クライアントに設定を適用すると、クライアントのリアルタイム検索が停止する。このとき、非常駐となる。
OfficeScan Corporate Edition (8.0, 10.0, 10.5)	管理サーバの「Real-time Scan Settings」－「Enable virus/malware scan」をオフにして、クライアントに設定を適用すると、クライアントのリアルタイム検索が停止する。このとき、非常駐となる。
ServerProtect for Microsoft Windows/Novell NetWare (5.7, 5.8)	インフォメーションサーバ (Information Server) の「Real-time Scan」－「Enable Real-time Scan」をオフにして一般サーバに設定すると、一般サーバのリアルタイム検索が停止する。このとき、非常駐となる。また、クライアントの OS が 64 ビット版の場合、常駐 / 非常駐の設定は取得できない。
F-Secure Anti-Virus Client Security	－
F-Secure Client Security	－
Forefront Client Security	「Use real-time protection (recommended)」がオンの場合に常駐となる。
Avira AntiVir Professional	－
Avira AntiVir Server	－
Kaspersky Open Space Security	「Enable protection」がオンの場合に常駐となる。
ESET NOD32 Antivirus	－

(凡例) ー：常駐 / 非常駐の設定は取得できません。

(2) ソフトウェア検索リストを利用したソフトウェア情報の取得

ジョブ作成時に「すべてのソフトウェアを検索」を指定した「ソフトウェア情報の取得」ジョブでは、**ソフトウェア検索リスト**を利用してクライアントにインストールされているソフトウェアを検索できます。ソフトウェア検索リストには次の 2 種類があります。

● 標準検索リスト

JP1/NETM/DM が提供する検索リストです。JP1/NETM/DM が標準で検索対象とするソフトウェアが登録されています。検索リストの内容は編集できません。

標準検索リストは、すべての JP1/NETM/DM システムにデフォルトでインストールされています。

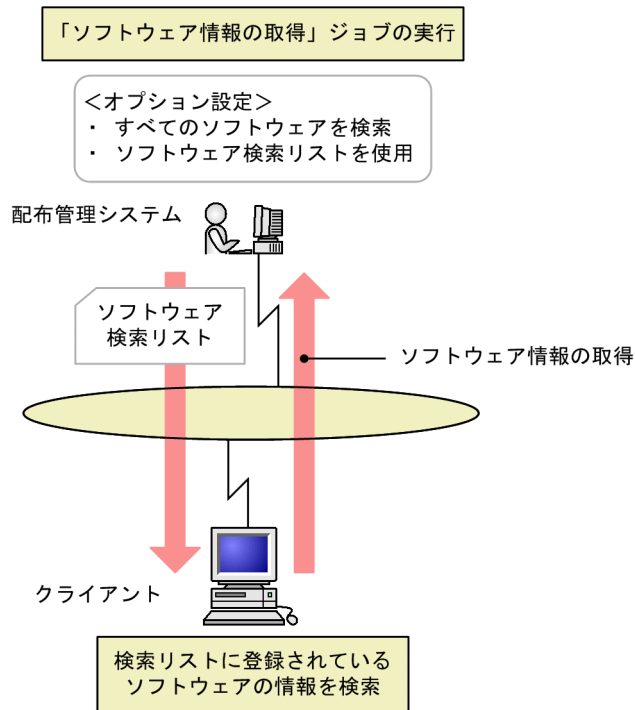
● ユーザ指定検索リスト

検索対象にするソフトウェアを任意に登録できる検索リストです。

ユーザ指定検索リストは、検索するクライアントの範囲ごとに作成したり、クライアントの OS ごとに作成したり、複数作成できます。

ソフトウェア検索リストを使用したソフトウェア情報の取得の概念を次の図に示します。

図 2-5 ソフトウェア検索リストを使用したソフトウェア情報の取得



ソフトウェア検索リストの作成方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.2.4 ソフトウェア検索リストの作成方法」を参照してください。

(3) ソフトウェアインベントリ辞書によるソフトウェア情報の管理

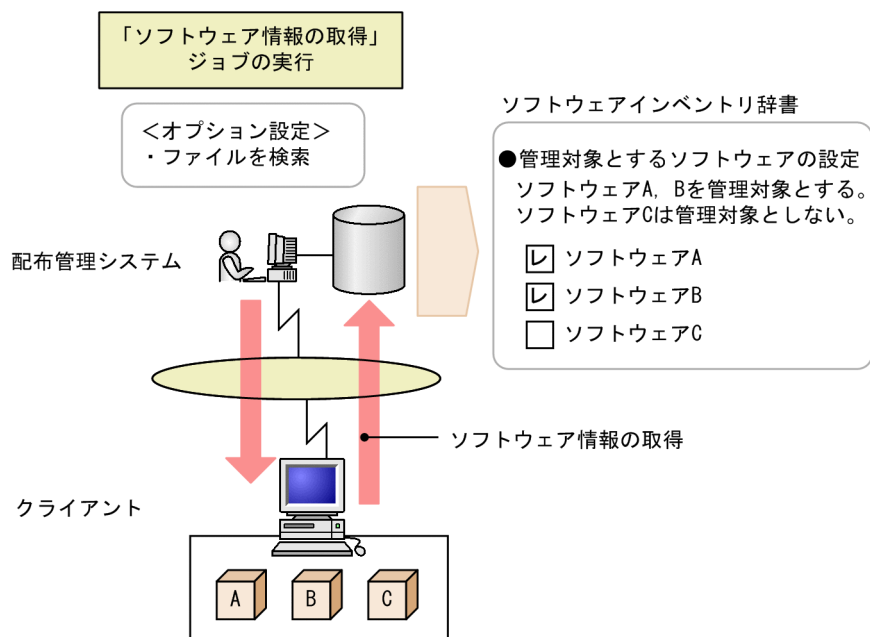
「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ファイルを検索」でソフトウェア情報を取得すると、**ソフトウェアインベントリ辞書**が生成されます。このソフトウェアインベントリ辞書で、各ソフトウェアを管理対象にするかどうか、また、どのような名称で管理するのかを設定する必要があります。

[システム構成]、[あて先] および [ディレクトリ情報] ウィンドウで、各ホストのソフトウェアインベントリ情報を表示するとき、ソフトウェアインベントリ辞書で管理対象に設定されているソフトウェアだけが表示されます。また、ソフトウェアインベントリ辞書で、ソフトウェアごとに、ライセンス数を登録しておくと、インベントリビューアの集計機能を利用して、ライセンス数を超えるソフトウェアやライセンス数に近づいたソフトウェアを確認できます。

ソフトウェアインベントリ辞書の編集方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.2.5 ソフトウェアインベントリ辞書の編集」を参照してください。

ソフトウェアインベントリ辞書によってソフトウェア情報を管理する概念を次の図に示します。

図 2-6 ソフトウェアインベントリ辞書によるソフトウェア情報の管理



2.2.3 ユーザインベントリ情報の取得

クライアントのユーザー名や PC 資産番号など、クライアントの管理に必要な情報を、ハードウェア情報、システム情報と同様に JP1/NETM/DM で管理できます。管理する情報は、ユーザが任意に設定できます。ユーザが任意に管理する情報を**ユーザインベントリ情報**と呼びます。

ユーザインベントリ情報を管理すれば、ユーザが任意に設定した情報を管理できるほか、各クライアントを管理しやすい名称で管理できます。例えば、ユーザインベントリ情報でホストのユーザー名を管理すれば、配布管理システムでは各ホストをユーザーの名称で確認できます。

ユーザインベントリ情報は、クライアントに表示される次の「JP1/NETM/DM ユーザ情報設定」ダイアログボックスにクライアントユーザが入力した情報を、配布管理システムから「システム情報の取得」または「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブを実行して取得します。

なお、JP1/NETM/DM Client（中継システム）からは、「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブを実行できません。

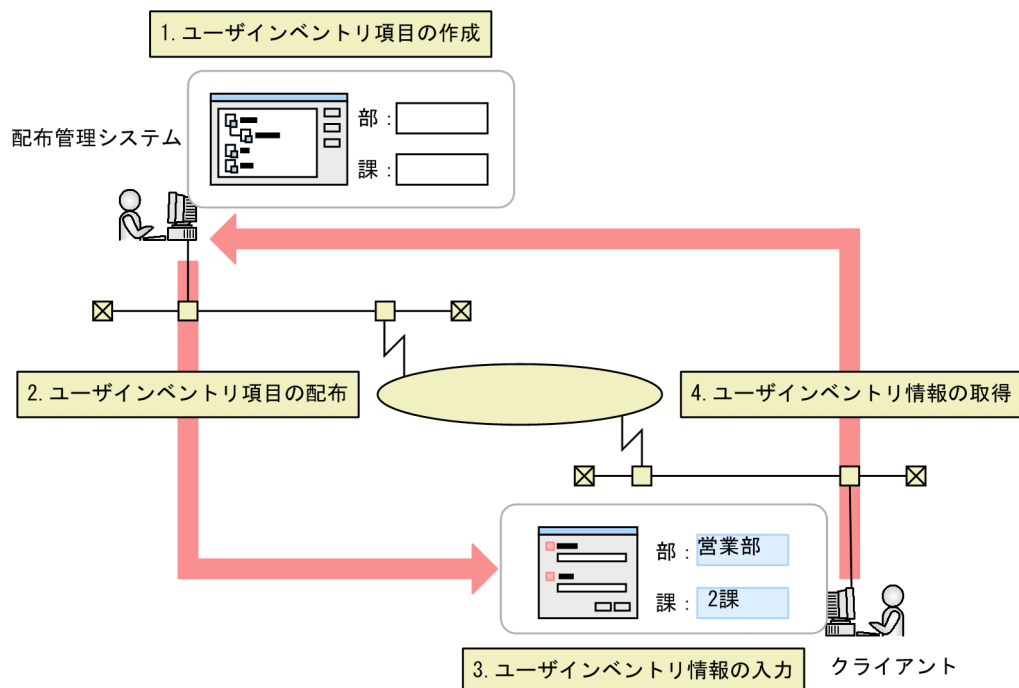
図 2-7 [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックス

[JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスの項目（**ユーザインベントリ項目**）は、ユーザが独自に設定できます。ユーザインベントリ項目は配布管理システムで作成し、「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブを実行してクライアントに配布しておきます。

クライアントにユーザインベントリ情報を必ず設定させたい場合は、クライアントがユーザインベントリ情報を設定するまで、パッケージセットアップマネージャの起動を抑止することができます。

ユーザインベントリ情報を取得する流れを次の図に示します。

図 2-8 ユーザインベントリ情報の取得



ユーザインベントリ情報の取得方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.3 ユーザインベントリ情報を取得する」を参照してください。

2.2.4 ディレクトリ情報の取得

クライアントのユーザ情報やコンピュータ情報など、クライアントの管理に必要な情報を Active Directory から取得して、配布管理システムで利用できます。Active Directory から取得するユーザ情報やコンピュータ情報を**ディレクトリ情報**と呼びます。

Active Directory からディレクトリ情報を取得するには、ディレクトリ情報の取得コマンド（dcmadsync.exe）を実行します。

ディレクトリ情報を取得することで、Active Directory で管理しているユーザやコンピュータの情報をそのまま利用できるため、ユーザインベントリ情報を取得しなくてもユーザやコンピュータの情報を取り込みます。取得したディレクトリ情報は、ジョブのあて先に指定したり、インベントリビューアでクライアントの情報として参照したりできます。また、定期的にディレクトリ情報の取得コマンドを実行することで、Active Directory での変更に合わせて最新の状態に保つことができます。

なお、Active Directory と連携するかどうかは、JP1/NETM/DM Manager のセットアップで設定します。デフォルトでは連携しない設定になっているので、Active Directory からディレクトリ情報を取得する場合は、必ず Active Directory と連携する設定をしてください。

(1) 取得できるディレクトリ情報

Active Directory からディレクトリ情報として取得できる情報を次に示します。各情報に設定されているプロパティの情報も取得できます。

- ドメイン
- 組織単位 (OU)
- グループ
- コンピュータ
- ユーザ
- InetOrgPerson

Windows 2000 を使用している環境でこの情報を取得するには、Windows 2000 inetOrgPerson Kit が必要です。

Active Directory からどの情報を取得するかは、ディレクトリ情報の取得コマンド（dcmadsync.exe）実行時に使用するパラメタファイルに指定します。パラメタファイルの作成方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.4.4 パラメタファイルの作成」を参照してください。

(2) ディレクトリ情報の利用方法

ディレクトリ情報からあて先を指定して、次のジョブを実行できます。

- パッケージのインストール
- リモートコレクト
- クライアントユーザによるインストール
- システム情報の取得
- ソフトウェア情報の取得
- ユーザインベントリ情報の取得
- レジストリ取得項目の転送
- ユーザインベントリ情報の転送
- メッセージの通知

- ソフトウェア稼働監視の制御
- ソフトウェア稼働情報の取得

また、システム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報と同じように、集計および印刷もできます。集計および印刷の詳細については、「2.2.7 インベントリ情報の利用方法」を参照してください。

2.2.5 インベントリ情報の取得方法

システム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報は、次のどちらかの方法でクライアントから取得します。

- ジョブを実行してインベントリ情報を取得する
- 自動的にインベントリ情報を取得する

ディレクトリ情報は、コマンドを実行して Active Directory の情報を管理しているコンピュータから取得します。

それぞれの方法について説明します。

(1) ジョブを実行してインベントリ情報を取得する

配布管理システムから次に示すジョブを実行して、システム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報を取得できます。

- 「システム情報の取得」ジョブ
システム情報（システム情報およびレジストリ情報）、およびユーザインベントリ情報を取得します。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブ
ソフトウェア情報を取得します。
- 「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブ
ユーザインベントリ情報を取得します。

次に、効果的なインベントリ情報の取得例について説明します。

(a) 定期的にインベントリ情報を取得する

システム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報を取得するジョブは、定期的にクライアントで実行させることができます。クライアントでジョブを定期的に実行させる間隔は、ジョブ作成時に「スケジュール」パネルの「詳細設定」ボタンをクリックすると表示される「実行日時の詳細設定」ダイアログボックスで設定します。実行間隔には、「毎日実行」、「毎週実行」または「毎月実行」があります。

図 2-9 【実行日時の詳細設定】ダイアログボックス

実行日時の詳細設定

実行日時の設定

☒ 実行間隔を設定する(W)

毎日実行

日 月 曜日 時 分以降に実行する

☐ 実行日時を設定する(E)

下の項目を設定するとその時間に実行します。
時間を指定しなければ即時に実行されます。

年 月 日 時 分以降に実行する

実行タイミングの設定(I)

双み稼働中実行

OK

キャンセル

この機能を使用すると、システム管理者が一度ジョブを設定しておくだけで自動的に配布管理システムで管理しているインベントリ情報が最新の状態に更新されます。

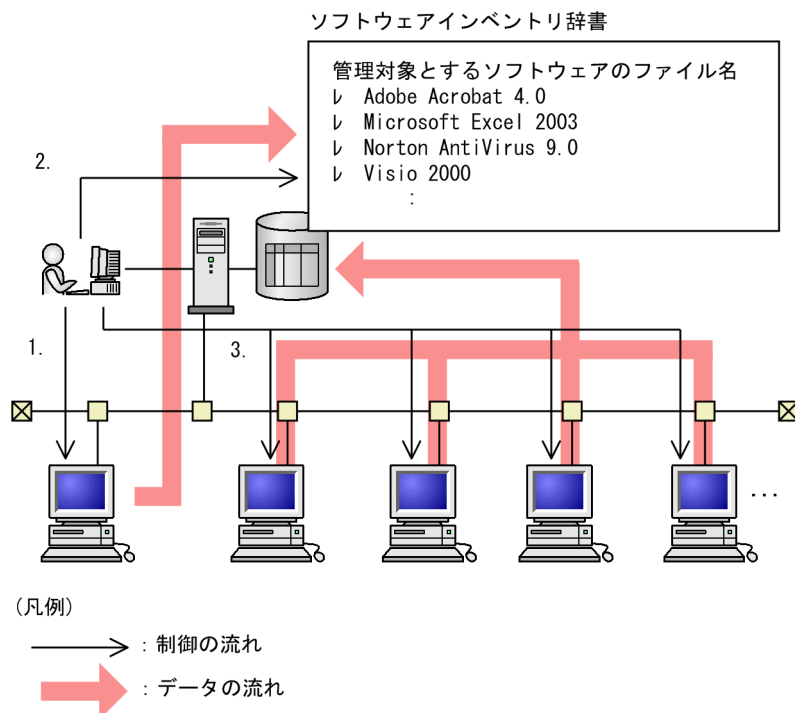
また、「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブを実行してユーザインベントリ情報を取得する場合、ジョブを定期的に行うだけでなく、クライアントユーザがユーザインベントリ情報を更新した時点で、変更した情報を配布管理システムに通知させることができます。この機能を使用すれば、配布管理システムでは常に最新のユーザインベントリ情報を取得できます。

(b) ネットワークおよびリレーショナルデータベースの負荷を軽減してインベントリ情報を取得する

ワイルドカード「*」を使った検索を多数のクライアントに対して実行すると、不要な情報を取得して、ネットワークに大きな負担が掛かり、リレーショナルデータベースを大量に消費することがあります。このような場合に、ソフトウェアインベントリ辞書を使うことで、検索するソフトウェアを絞り込み、ネットワークおよびリレーショナルデータベースの負荷を軽減できます。

ソフトウェアインベントリ辞書を使ってファイルを検索する方法を次に示します。

図 2-10 ソフトウェアインベントリ辞書を使ったファイル検索方法



1. 管理したいソフトウェアがすでにインストールされているマシン（1台～数台）に対して、「*」を使ったファイル検索を実行し、ソフトウェアインベントリ辞書を生成する。

ファイル検索で取得したソフトウェア情報が、ソフトウェアインベントリ辞書に登録されます。

2. ソフトウェアインベントリ辞書を編集する。

登録されているソフトウェアの中から、管理対象にしたいソフトウェアを選択します。

3. インベントリ情報を管理したいすべてのクライアントに対して、手順2.で編集したインベントリ辞書を指定したファイル検索を実行する。

管理対象としたソフトウェアだけを検索するため、ネットワークの負荷が軽くなります。また、不要な情報がリレーショナルデータベースに入るのを防止できます。

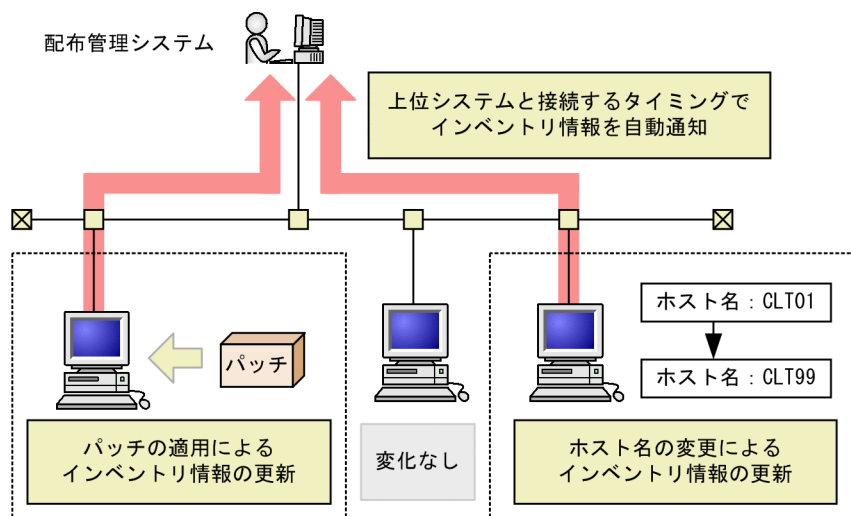
「*」を使ったファイル検索の方法については、マニュアル「運用ガイド1」の「3.2.2 [オプション] パネルの設定」を参照してください。また、ソフトウェアインベントリ辞書の編集方法については、マニュアル「運用ガイド1」の「3.2.5 ソフトウェアインベントリ辞書の編集」を参照してください。

(2) 自動的にインベントリ情報を取得する

クライアントの特定のインベントリ情報が更新されたときに、配布管理システムと接続するタイミングでインベントリ情報を通知させて、最新のインベントリ情報を管理できます。ジョブを実行することなくインベントリ情報を取得できるため、効率良くインベントリ情報を管理できます。

更新されたインベントリ情報を自動的に取得する機能について次に示します。

図 2-11 更新されたインベントリ情報を自動的に取得する機能



この機能では、システム情報およびソフトウェア情報の一部を取得できます。すべてのシステム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報を取得したい場合は、ジョブを実行して取得する必要があります。

インベントリ情報を自動的に上位システムへ通知させる機能、および取得できるインベントリ情報の詳細については、「2.13.4 クライアントからのインベントリ情報の通知」を参照してください。

(3) コマンドを実行してインベントリ情報を取得する

ディレクトリ情報は、ジョブではなくコマンドを実行して取得します。Active Directory からディレクトリ情報を取得する作業の流れは、次のようになります。

1. Active Directory との接続に必要な情報、および Active Directory から取得する情報を抽出する。

ディレクトリ情報を取得する Active Directory のホスト名、ポート番号などの Active Directory と接続するための情報および Active Directory から取得する項目を抽出します。

2. 画面に表示する名称をマップファイルに定義する。

Active Directory から取得した項目を、配布管理システムの画面に表示するときの表示名を、マップファイルに定義します。ここで表示名を定義することで、取得した項目が画面に表示されるようになります。マップファイルには管理しやすい名称を定義するようにしてください。

3. Active Directory との接続に必要な情報、および Active Directory から取得する情報をパラメタファイルに定義する。

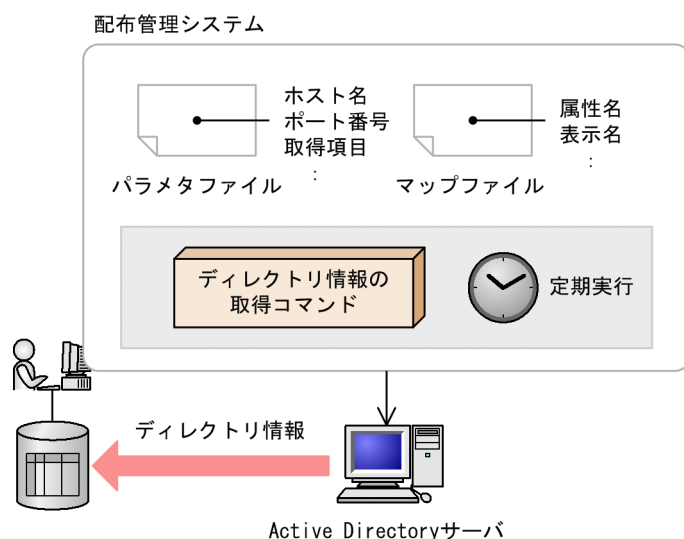
ディレクトリ情報を取得する Active Directory のホスト名、ポート番号などの Active Directory と接続するための情報、および Active Directory から取得する項目をパラメタファイルに定義します。

4. ディレクトリ情報の取得コマンド (dcmadsync.exe) を実行する。

このコマンドは、Windows のタスクスケジューラにタスクとして登録したり、JP1/AJS と連携したりすることで、定期的に行うことができます。Active Directory の更新のタイミングに合わせて、ディレクトリ情報も更新してください。

ディレクトリ情報を取得する作業の流れを次の図に示します。

図 2-12 ディレクトリ情報を取得する作業の流れ



ディレクトリ情報取得時の注意事項

- Active Directory で管理しているパスワードの情報は、取得の対象外です。
- 取得項目を途中で追加したり削除したりした場合、コンピュータやユーザの情報は、Active Directory 上の該当するエントリが更新されるまで、ディレクトリ情報には反映されません。
- ディレクトリ情報を取得するには、運用キーにホスト名を使用するか、または運用キーに IP アドレスを使用する場合でもホスト名の入力を必須としてください。
- Active Directory から取得できる LDAP 識別名 (Distinguished Name) や属性値の最大サイズは 2,000 バイトまでです。LDAP 識別名が 2,000 バイト以上の OU をあて先として指定した場合、ジョブが正しく実行されないことがあります。

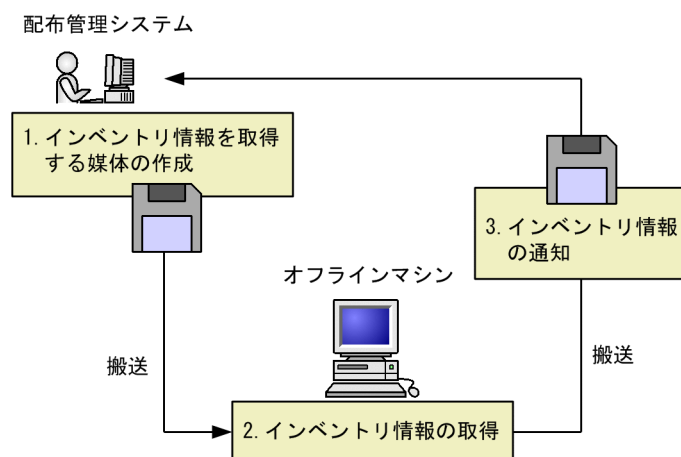
なお、取得したディレクトリ情報と配布管理システム上のシステム構成情報の関係については、「2.10.3 システム構成情報とディレクトリ情報の関係」を、ディレクトリ情報の取得手順の詳細については、「運用ガイド 1」の「3.4 ディレクトリ情報を取得する」を参照してください。

2.2.6 スタンドアロン PC からのインベントリ情報の取得

インベントリ情報は、ネットワーク内のクライアントからだけではなく、ネットワーク外のクライアントからも取得できます。ネットワークに接続していないクライアントなど、JP1/NETM/DM のシステム構成に登録していないクライアントを**オフラインマシン**と呼びます。オフラインマシンからは、FD、CD-R、MO などの媒体やメールを使用してインベントリ情報を取得します。

オフラインマシンからインベントリ情報を取得する概念を次の図に示します。

図 2-13 オフラインマシンからのインベントリ情報の取得



オフラインマシンからインベントリ情報を取得する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.7.2 オフラインマシンからのインベントリ情報と稼働情報の取得」を参照してください。

オフラインマシンからインベントリ情報を取得するには、JP1/NETM/DM システムに次の前提条件が必要です。

- リレーショナルデータベースの使用
- ホスト識別子の使用
- マネージャと同一 PC でのリモートインストールマネージャの使用

なお、オフラインマシンからは、変更のあったインベントリ情報だけを取得することはできません。また、オフラインマシンとしてインベントリ情報を管理したい PC は、クライアントのインストール時に、接続先のホスト名または IP アドレスに「?」を設定しておく必要があります。

オフラインマシンから取得したインベントリ情報は、**オフラインフォルダ**で管理します。オフラインフォルダは、マシンが実在しない仮想の中継システムとして扱われ、[システム構成] ウィンドウおよび [あて先] ウィンドウに「{OFFLINE}」という名称で表示されます。

なお、インベントリ情報を管理していたオフラインマシンをシステム構成に登録した場合、そのクライアントからマネージャへシステム構成情報が通知された時点で、オフラインフォルダの配下からクライアントが移動します。また、オフラインマシンからのインベントリ情報取得機能を使用して、システム構成に登録されているクライアントからインベントリ情報を取得した場合、そのクライアントはオフラインフォルダの配下に移動しません。インベントリ情報だけが更新されます。

2.2.7 インベントリ情報の利用方法

取得したインベントリ情報は、JP1/NETM/DM Manager が提供する**インベントリビューア**で管理し、さまざまな用途に利用できます。ここでは、インベントリ情報の利用方法について概要だけを説明しますので、詳細は「2.3 インベントリ情報の管理」を参照してください。

(1) インベントリ情報の集計

インベントリ情報ごとに該当するホストの数を集計できます。インベントリ情報を集計すれば、ソフトウェアのライセンス管理や、ネットワーク内のハードウェア使用状況の管理などに役立ちます。また、集計結果はグラフ表示することもできます。

(a) ソフトウェアごとに集計する

ソフトウェアごとに、インストールされているホストの数を集計できます。ソフトウェアごとにホストの数を集計すれば、契約しているライセンス数を超えたソフトウェアがあるかどうかを確認できます。

(b) システム情報ごとに集計する

システム情報ごとに、該当するホストの数を集計できます。

システム情報ごとにホストを集計すれば、ハードウェアの資産管理やハードウェアの使用状況の管理に役立ちます。

システム情報の集計の使用例を次に示します。

● ハードディスクの容量を調査する

ハードディスクの空き容量ごとに、ホストを分類して集計できます。例えば、インストール時に空き容量が 80 メガバイト以上必要なソフトウェアを導入する場合、空き容量が 80 メガバイト未満のホストを集計すると、リモートインストール時の容量不足を回避できます。

● メモリの容量を調査する

メモリの容量ごとにホストを分類して集計できます。クライアントシステムのメモリの容量を確認しておくことで、メモリを多く必要とするソフトウェアのリモートインストール時などに、容量不足を回避できます。

● OS の種別を調査する

OS の種別ごとにホストを分類して集計できます。例えば、クライアントの OS を Windows 98 から Windows 2000 に移行する場合などに、OS の種別ごとにホストを集計することで、OS の移行状況を確認できます。

● クライアントにインストールされている JP1/NETM/DM Client のバージョン情報を調査する

クライアントシステムで稼働している JP1/NETM/DM Client や UNIX 版 JP1/NETM/DM Client のバージョンごとにホストを分類して集計できます。製品のバージョンによって使用できる機能が異なるため、使用したい機能の対象となるホストを確認できます。

(c) 中継システム、クライアントの台数を集計する

中継システムおよびクライアントの数を集計できます。JP1/NETM/DM で管理しているネットワークの規模を把握できます。

(d) ユーザインベントリごとに集計する

クライアントの使用者の所属部署やプロジェクトごとなど、ユーザ独自に管理しているユーザインベントリごとに、該当するホストの数を把握できます。

(2) CSV 形式ファイルへの出力

取得したインベントリ情報は、CSV 形式ファイルに出力して利用できます。CSV 形式ファイルに出力したインベントリ情報は、表計算ソフトウェアなどに入力して使用できますので、インベントリ情報のソートや管理帳票の作成が容易になります。

インベントリ情報を CSV 形式ファイルへ出力するには、インベントリビューアを使用する方法と、CSV 出力ユーティリティを使用する方法があります。詳細は、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.5.2 CSV 形式ファイルへの出力」および「9.1 CSV 出力ユーティリティでファイルを出力する」を参照してください。

(3) インベントリ情報の印刷

取得したインベントリ情報は、一覧表の形式で印刷できます。ヘッダやフッタを付けて、わかりやすい資

料や報告書を作成できます。

インベントリ情報の印刷方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.5.3 印刷」を参照してください。

(4) JP1/Cm2 または HP NNM からインベントリ情報を管理する

JP1/Cm2 連携機能を使用すれば、JP1/NETM/DM を管理する配布管理システム以外からもインベントリ情報を管理できます。

JP1/Cm2 連携機能を使用して、JP1/NETM/DM のインベントリ情報を管理する方法については、マニュアル「運用ガイド 2」の「3. JP1/Cm2 または HP NNM から JP1/NETM/DM を管理する」を、それぞれ参照してください。

2.2.8 インベントリ情報を管理する場合の注意事項

(1) インベントリ情報を管理するマネージャ

JP1/NETM/DM システム内でインベントリ情報を管理するマネージャは、原則として 1 台にしてください。複数台のマネージャで管理すると、インベントリ情報に不整合が生じることがあります。障害の発生などで、他マネージャがインベントリ情報を代替して管理した場合は、障害の回復後に元のマネージャから管理しているインベントリ情報をすべて取得し直してください。

(2) システム構成にないホストのインベントリ情報について

システム構成からホストを削除した場合などに、削除されたホストのインベントリ情報がデータベース中に残ることがあります。削除されたホストのインベントリ情報は、データベースマネージャを使って削除できます。インベントリ情報の削除方法、およびデータベースマネージャで削除できるインベントリ情報の種類については、マニュアル「構築ガイド」の「7.5.6 データベース上の不要なインベントリ情報を削除する」を参照してください。

2.3 インベントリ情報の管理

クライアントから取得したインベントリ情報は、JP1/NETM/DM Manager のインベントリビューアで表示したり、集計したりできます。また、集計結果をグラフ表示したり、CSV 形式ファイルに出力したりできます。

ここでは、インベントリビューアを使用した、インベントリ情報の管理の概要について説明します。

2.3.1 インベントリ情報の表示

表形式のウィンドウで、すべてのクライアントのインベントリ情報を一括して参照できます。インベントリ情報をソートやフィルタリングし、見やすく表示できます。

図 2-14 インベントリ情報の表示例

	ホスト名	CPUタイプ	全ディスク容	所属	電話
1	dmp300	Intel Pentium	3004MB	設計	3223
2	dmp310	Intel Pentium	6008MB	設計	3223
3	dmp320	Intel Pentium	6008MB	設計	3223
4	dmp330	Intel Pentium	6008MB	検査	3224
5	dmp340	Intel Pentium	6008MB	経理	3225
6	dmp350	Intel Pentium	3004MB	経理	3225
7	dmp360	Intel Pentium	3004MB	総務	3226
8	dmp370	Intel Pentium	3004MB	総務	3226

すべてのクライアントのシステム情報、ソフトウェア情報、およびユーザインベントリ情報を表形式で表示できます。また、特定のインベントリ項目だけを表示することも、特定の情報を持つクライアントだけを表示することもできます。

インベントリ情報の表示方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.3 インベントリ情報を表示する」を参照してください。

2.3.2 インベントリ情報の集計

インベントリ情報ごとにクライアントの台数を集計できます。中継システムやクライアントの台数、インストールされているソフトウェアの数、システム情報などのインベントリ情報を集計できます。さらに、任意の集計区分に対応するクライアントの詳細を同時に表示できます。例えば、CPU タイプごとにホストの台数を集計し、Intel Pentium II のホストの詳細を表示できます。

図 2-15 CPU タイプごとにホストの台数を集計した例

CPUタイプ	台数	ホスト名	CPUタイプ	実メモリ容量	OS
Intel Pentium	1	1 dmp321.s	Intel Pentium II	256MB	Windows NT Worksta
Intel Pentium II	2	2 w2k-srv	Intel Pentium II	256MB	Windows 2000 Advan
Intel Pentium III	1				
Intel Pentium 4	0				

集計結果 CPUタイプ

集計条件は、複数のインベントリ項目を組み合わせたり、細かな集計条件を設定したりできますので、必要な情報を効率良く管理できます。例えば、「CPU タイプ」と「OS」を組み合わせると、CPU タイプが Intel Pentium 4 で、OS が Windows XP のホストの台数を集計することもできます。

また、あらかじめソフトウェアのライセンス数を設定しておくことで、集計結果からソフトウェアのライセンスの使用状況を確認できます。

図 2-16 ソフトウェアのライセンスの使用状況を表示した例

ソフトウェア名称	台数	所有ライセン...	警告ライセン...		OS	CPU
Groupmax Form Clie...	29	30	28	1	Windows NT Wor	Intel Penti
Groupmax Scheduler...	29	30	28	2	Windows NT Wor	Intel Penti
JP1/NETM/DM	1	5	4	3	Windows NT Wor	Intel Penti
JP1/NETM/DM Client	51	50	45	4	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft (R) Visual ...	9	10	8	5	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft SQL Server	1	20	18	6	Windows NT Wor	Intel Penti
Microsoft SQL Serve...	8	18	15	7	Windows NT Wor	Intel Penti
Rational Visual Test	1	5	4	8	Windows NT Wor	Intel Penti

インベントリ情報を集計する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.2 インベントリ情報を集計する」を参照してください。

2.3.3 テンプレートを利用した表示・集計

表示ウィザードまたは集計ウィザードで設定した、インベントリ情報の表示条件や集計条件をテンプレートに保存することによって、同じ条件での表示・集計が簡単に実行できます。同じ条件で、繰り返し表示・集計を実行する場合に便利です。

テンプレートに保存される情報は、表示ウィザードまたは集計ウィザードで設定した次の情報です。

- 表示ウィザードの場合

表示条件、表示するインベントリ項目

- 集計ウィザードの場合

集計条件、詳細画面に表示するインベントリ項目

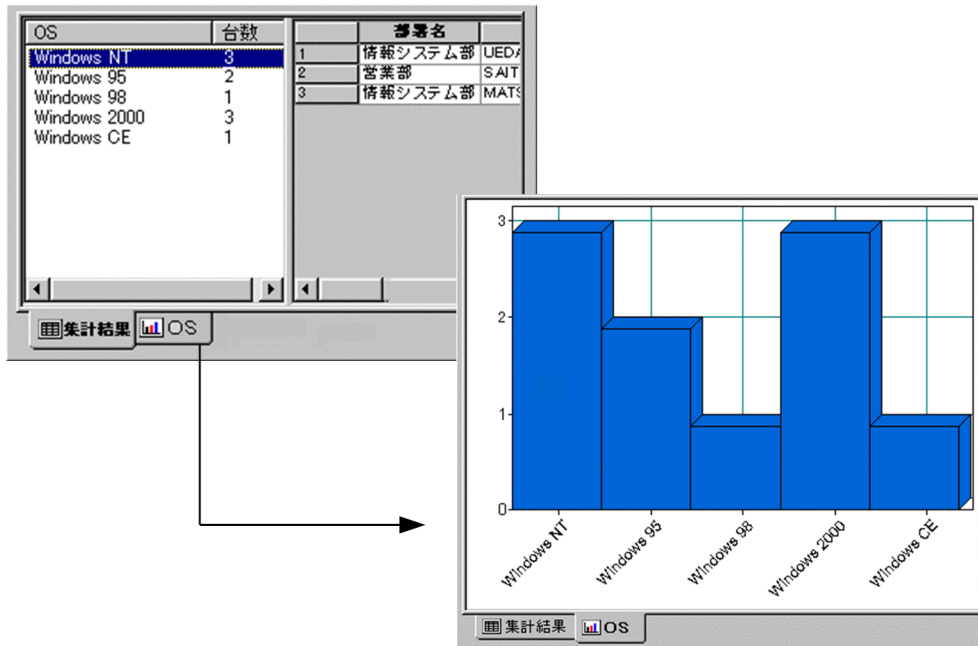
なお、保存したテンプレートを編集して別条件のテンプレートを作成することもできます。

テンプレートを利用した表示・集計方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.4 テンプレートを利用して表示および集計する」を参照してください。

2.3.4 集計結果のグラフ表示

簡単な操作で、集計結果をグラフ表示できます。作成したグラフは、ほかのアプリケーションにコピーして利用することもできます。

図 2-17 集計結果のグラフ表示



グラフは、3次元の縦棒グラフまたは3次元の円グラフのどちらかを選択できます。デフォルトでは3次元の縦棒グラフが表示されます。また、グラフに表示されるラベルのフォントを変更できます。

集計結果をグラフ表示したり、ラベルのフォントを変更したりする方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.2.6 集計結果をグラフ表示する」を参照してください。

2.3.5 集計結果からのホストのグルーピング

一つの集計区分に属するホストを集計した結果から、あて先グループを作成できます。例えば、インストールパッケージで集計し、Microsoft Word 2000 がインストールされているホストであて先グループを作成し、そのあて先グループへ Microsoft Word 2003 をリモートインストールするような運用ができます。

あて先グループを新規に作成することも、既存のあて先グループにホストを追加することもできます。また、既存のあて先グループ配下のホストをすべてクリアしたあと、ホストを追加することもできます。

集計結果からホストをグルーピングする方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.2.7 集計結果からあて先グループを作成する」を参照してください。

2.3.6 インベントリ情報の出力

インベントリ情報をソートや集計した結果を、CSV 形式ファイルへ出力したり、印刷したりできます。

インベントリ情報を出力する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.5 インベントリ情報を出力する」を参照してください。

(1) CSV 形式ファイルへの出力

[テーブル] ウィンドウまたは [集計] ウィンドウで表示しているすべての情報と列名を、CSV 形式ファイルに保存できます。[集計] ウィンドウの場合は、集計画面の情報を保存するのか、詳細画面の情報を保存するのかを選択できます。

また、コピーを実行すると、選択した情報が CSV 形式でクリップボードに貼り付けられるので、ファイ

ルを介することなく、一部の情報をほかの表計算ソフトなどで利用するときに便利です。

(2) 印刷

[テーブル] ウィンドウまたは [集計] ウィンドウの集計画面で表示しているすべての情報と列名を印刷できます。その際、ヘッダおよびフッタを付けて印刷できます。ヘッダおよびフッタは、[テーブル] ウィンドウでの印刷および [集計] ウィンドウでの印刷それぞれに設定できます。

2.4 ファイルの収集（リモートコレクト）

リモートコレクトの機能を使ってクライアントのファイルを配布管理システムに収集できます。例えば、表計算ソフトウェアなどのアプリケーションプログラムで作成したユーザデータや、アプリケーションプログラムで発生した障害ログなどを収集できます。

なお、リモートコレクトできるのは、ユーザプログラム、データだけです。日立プログラムプロダクトや他社ソフトウェアはリモートコレクトできません。

ここでは、リモートコレクトの概要について説明します。

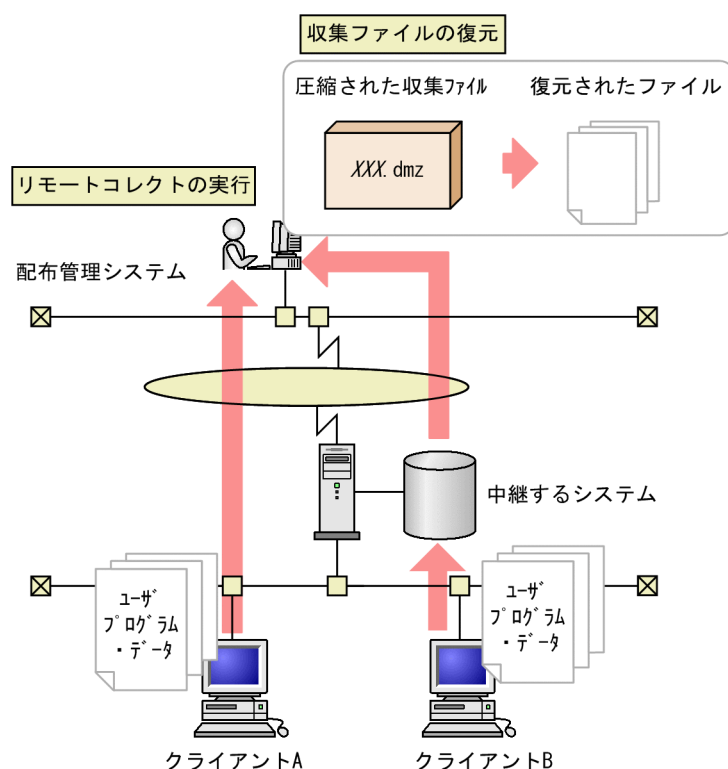
2.4.1 リモートコレクトの作業の流れ

クライアントからファイル（ユーザプログラム、データ）を収集するには、配布管理システムで、リモートコレクトを指示するジョブを作成し、実行します。

収集したファイル（**収集ファイル**）は、アーカイブまたは圧縮された形式で配布管理システムに格納されるため、配布管理システムで扱えるようにするには、収集ファイルを元の形式に復元する必要があります。

リモートコレクトの作業の流れを次の図に示します。

図 2-18 リモートコレクトの作業の流れ

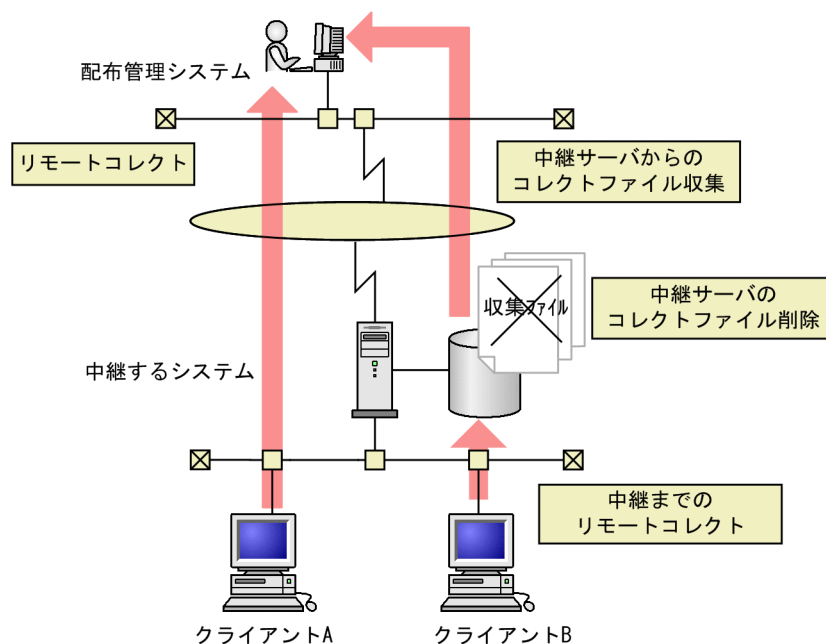


リモートコレクトの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「5.1 リモートコレクトの操作」を参照してください。

2.4.2 リモートコレクトを実行するジョブ種別

リモートコレクトを実行するジョブには、次の図に示す種類（**ジョブ種別**）があります。ネットワークの状態や目的に合わせて、使い分けてください。

図 2-19 リモートコレクトのジョブ種別



なお、「リモートコレクト」ジョブまたは「中継までのリモートコレクト」ジョブを作成するときは、リモートコレクトのオプションとして、クライアントでの収集のタイミング、圧縮の有無、外部プログラムの起動などを設定できます。

これらのオプションの設定方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「5.1.1 リモートコレクトの実行」を参照してください。

次に、各ジョブ種別について説明します。

(1) 「リモートコレクト」ジョブ

クライアントから、中継するシステム（中継マネージャまたは中継システム）を経由して配布管理システムまでファイルを収集します。中継するシステムを経由しない場合や、クライアントー中継するシステム間、中継するシステムー配布管理システム間のファイルの収集にもこのジョブを使用します。

(2) 「中継までのリモートコレクト」ジョブ

配布管理システムからの指示でファイルを収集し、ジョブを実行した配布管理システムの中継するシステムに収集ファイルを保管します。中継するシステムが階層化されている場合、ジョブを実行した配布管理システムの直下にある中継するシステムに収集ファイルを保管します。

そのまま、中継するシステム上でデータを加工または利用してもかまいませんし、「中継サーバからのコレクトファイル収集」ジョブと組み合わせて、2段階に分けてファイルを収集してもかまいません。

(3) 「中継サーバからのコレクトファイル収集」ジョブ

「中継までのリモートコレクト」ジョブで中継するシステムまで収集したファイルを、配布管理システムに転送します。

リモートコレクトでは、中継するシステムー配布管理システム間のネットワークの負荷が高くなります。したがって、「中継までのリモートコレクト」ジョブでいったん中継するシステムにファイルを保管し、ネットワークのトラフィックが低くなる夜中などに配布管理システムへこのジョブを実行することで、効率良くファイルを収集できます。ただし、中継するシステムが階層化されている場合、配布管理システム

の直下でない中継するシステムをジョブのあて先に指定しても、配布管理システムの直下にある中継するシステム上のファイルが収集されます。

(4) 「中継サーバのコレクトファイル削除」ジョブ

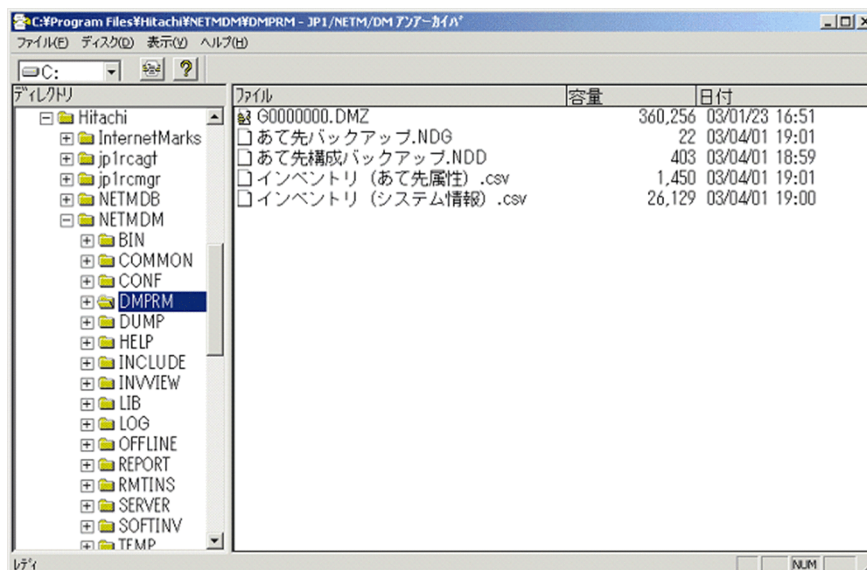
「中継までのリモートコレクト」ジョブで中継するシステムまで収集したファイルを、削除します。ただし、中継するシステムが階層化されている場合、配布管理システムの直下でない中継するシステムをジョブのあて先に指定しても、配布管理システムの直下にある中継するシステム上のファイルが削除されます。

2.4.3 収集したファイルの復元

リモートコレクトしたファイルは、アーカイブまたは圧縮された形式で配布管理システムに格納されるため、そのままでは読み書きができません。配布管理システムで扱えるようにするには、ファイルを元の形式に復元する必要があります。

ファイルを復元するには、**アンアーカイバ**と呼ばれるプログラムを使用します。アンアーカイバは、リモートコレクト時にアーカイブや圧縮されたファイル（アーカイブファイル）を元の形式に復元するためのプログラムです。

図 2-20 [JP1/NETM/DM アンアーカイバ] ウィンドウ



収集したファイルを復元する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「5.1.2 収集ファイルの復元」を参照してください。

2.4.4 クライアント側でのリモートコレクトの実行制限

リモートコレクトのジョブを実行すると、JP1/NETM/DM Client がインストールされた PC であれば、どのクライアントのファイルでも収集できてしまいます。したがって、クライアントが意図しない上位システムからの不要なリモートコレクトが実行されるおそれがあります。この不要なリモートコレクトを回避したい場合は、クライアントセットアップでリモートコレクトのジョブに対する実行制限を設定してください。

実行制限にはリモートコレクトのジョブをまったく実行しないか、または指定した上位システムからのリモートコレクトのジョブだけ実行するなどの種類があります。

リモートコレクトの実行制限の設定方法については、マニュアル「構築ガイド」の「6.2.12 [リモートコ

レクトオプション] パネル」を参照してください。

2.5 ソフトウェアの稼働状況の監視

配布管理システムでは、クライアントに対してジョブを実行することで、特定のソフトウェアの起動や印刷、USB メモリなどのデバイスを使用した操作を抑止したり、ファイルに対する操作や Web へのアクセスを監視して、履歴を取得したりできます。ファイルに対する操作としては、ファイルのコピーやリネームに加えて、印刷操作の履歴を取得できます。また、指定したソフトウェアの稼働時間を取得することもできます。

これらの機能を利用して、ライセンスを取得していないソフトウェアの使用を禁止し、コンピュータやソフトウェアの不正利用を防止できます。また、ファイルの操作履歴を取得し、機密情報の持ち出しや業務と関係ないデータの持ち込みがないことを監視できます。取得した操作履歴は、[操作ログ一覧] ウィンドウから条件を絞り込んで検索することで、問題発生時の原因を追跡調査・特定するのに役立てられます。

ここでは、クライアントのソフトウェアの稼働状況を監視する機能の概要について説明します。

2.5.1 ソフトウェアの稼働監視の流れ

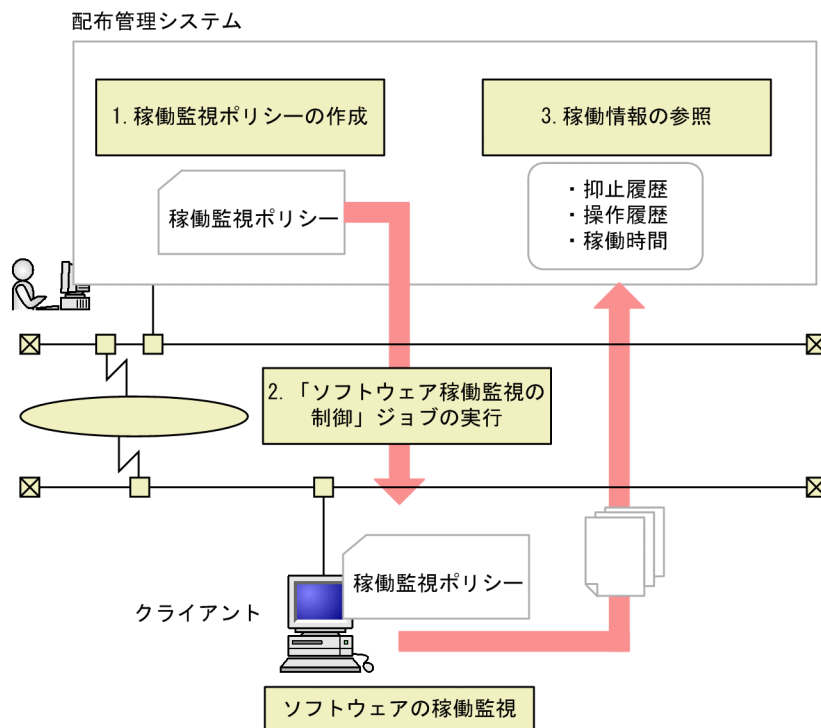
ソフトウェアの稼働状況を監視するためには、次に示す項目について設定した**稼働監視ポリシー**を配布管理システムで作成します。

- 履歴を取得する操作
- 監視対象のソフトウェア
- 起動を抑止するソフトウェア
- 稼働時間を取得するソフトウェア
- Web アクセスの履歴を取得するかどうか
- 印刷操作の履歴を取得するかどうか
- 印刷を抑止するかどうか
- 外部メディア操作の履歴を取得するかどうか
- 操作を抑止する外部メディア
- デバイス操作の履歴を取得するかどうか
- 操作を抑止するデバイス

作成した稼働監視ポリシーをクライアントに適用することで、クライアントの稼働状況を監視できます。また、仮想化環境に稼働監視ポリシーを適用することで、その仮想化環境の稼働状況を監視できます。仮想化環境については、「2.5.2 稼働状況を監視するための前提条件」を参照してください。

ソフトウェアの稼働状況を監視する流れを次の図に示します。各手順での操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6. ソフトウェアの稼働状況を監視する」を参照してください。

図 2-21 ソフトウェアの稼働状況を監視する流れ



1. ソフトウェアの稼働監視ポリシーを作成する。

どのソフトウェアの起動を抑止するか、およびどの操作を履歴として取得するかを設定した条件（稼働監視ポリシー）を配布管理システムで作成します。

2. 稼働状況を監視したいクライアントをあて先に指定し、「ソフトウェア稼働監視の制御」ジョブを実行する。

ジョブを実行して稼働監視ポリシーをクライアントに適用させることで、その稼働監視ポリシーに従ってソフトウェアの稼働状況を監視します。

稼働監視の履歴はクライアントから定期的に通知されますが、配布管理システムからジョブを実行して取得することもできます。

3. ソフトウェアの稼働情報を参照する。

ソフトウェアの起動抑止の履歴および操作履歴は、[ソフトウェア稼働情報] ウィンドウで参照します。ソフトウェアの稼働時間は、「Asset Information Manager Limited」の[ソフトウェア稼働状況] ウィンドウから参照します。

「Asset Information Manager Limited」をインストールしている場合は、[操作ログ一覧] ウィンドウおよび[操作ログ集計] ウィンドウを利用して、抑止履歴および操作履歴を参照できます。Web アクセスログ、印刷操作、外部メディア操作、およびデバイス操作の履歴は、[ソフトウェア稼働状況] ウィンドウからは参照できません。[操作ログ一覧] ウィンドウおよび[操作ログ集計] ウィンドウを利用してください。

なお、中継マネージャを使用している環境では、マネージャで作成したポリシーをエクスポートして中継マネージャで利用したり、中継マネージャで取得した稼働監視の履歴をマネージャに通知するように設定したりできます。中継マネージャを使用している環境での稼働状況の監視方法については、「2.5.11 大規模システムでの稼働状況の監視」を参照してください。

2.5.2 稼働状況を監視するための前提条件

稼働状況の監視対象は、JP1/NETM/DM のバージョンによって異なります。

稼働状況の監視対象ごとに、監視できる Windows 版の JP1/NETM/DM のバージョンを次の表に示します。

表 2-22 稼働状況の監視対象ごとに必要な JP1/NETM/DM のバージョン

稼働状況の監視対象		必要な JP1/NETM/DM のバージョン
ソフトウェアの起動抑止		- JP1/NETM/DM Manager (08-00 以降) - JP1/NETM/DM Client (07-50 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-00 以降)
印刷の抑止		- JP1/NETM/DM Manager (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-50 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-50 以降)
外部メディア操作の抑止		- JP1/NETM/DM Manager (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-50 ～ 09-10) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-50 ～ 09-10) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-50 ～ 09-10)
デバイス操作の抑止		- JP1/NETM/DM Manager (09-12 以降) - JP1/NETM/DM Client (09-12 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (09-12 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (09-12 以降)
操作履歴	- プロセスの起動 - プロセスの停止 - キャプションの変更 - アクティブウィンドウの変更 - マシンの起動 / 停止 - ログオン / ログオフ	- JP1/NETM/DM Manager (08-00 以降) - JP1/NETM/DM Client (07-50 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-00 以降)
	ファイル操作※¹	- JP1/NETM/DM Manager (08-00 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-00 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-00 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-00 以降)
	- Web アクセス※² - 印刷操作※³	- JP1/NETM/DM Manager (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-50 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-50 以降)
	外部メディア操作※⁴	- JP1/NETM/DM Manager (08-50 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-50 ～ 09-10) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-50 ～ 09-10) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-50 ～ 09-10)
	デバイス操作※⁵	- JP1/NETM/DM Manager (09-12 以降) - JP1/NETM/DM Client (09-12 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (09-12 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (09-12 以降)
ソフトウェアの稼働時間		- JP1/NETM/DM Manager (08-10 以降) - JP1/NETM/DM Client (08-10 以降) - JP1/NETM/DM Client - Base (08-10 以降) および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature (08-10 以降)

注※ 1

クライアントの OS が Windows Vista の場合、ファイル操作の履歴を取得するためには、バージョンが 08-11 以降のクライアントを使用する必要があります。

注※ 2

クライアントの Microsoft Internet Explorer のバージョンを、5.01、5.5、6.0、7.0、8.0、9.0 または 10.0 にする必要があります。

また、Microsoft Internet Explorer 6.0 以降の場合、Microsoft Internet Explorer の [ツール] - [インターネット オプション] メニューから表示されるダイアログボックスの [詳細設定] タブで、「サードパーティー製のブラウザ拡張を有効にする」チェックボックスをオンにする必要があります。

注※ 3

クライアントの OS が Windows 98 および Windows Me の場合、印刷操作の履歴は取得されません。

また、JP1/ 秘文または秘文で印刷抑止を実施している場合は、JP1/NETM/DM での印刷操作の履歴は取得されません。

注※ 4

クライアントの OS が Windows NT 4.0 の場合、外部メディア操作の履歴は取得されません。

また、クライアントの OS が Windows 7、Windows Server 2008 および Windows Vista の場合、USB 接続の CD/DVD ドライブおよび内蔵 CD/DVD ドライブの操作の履歴は取得されません。

注※ 5

OS が Windows 8 エディションなしの場合、「書き込みを抑止する」機能は動作しません。

稼働状況の監視対象を限定する場合、表 2-23 に稼働状況の監視対象ごとに示している JP1/NETM/DM があれば実行できます。例えば、ソフトウェアの稼働時間だけを監視したい場合、08-10 以降の JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（または JP1/NETM/DM Client - Base および JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature）があれば、ほかのプログラムは必要ありません。

なお、ジョブを中継するシステムは、すべての監視対象に共通して、次のプログラムのうちどれか一つが必要です。

- Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-50 以降
- Windows 版および UNIX 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降
- Windows 版の JP1/NETM/DM Client 08-00 以降
- UNIX 版の JP1/NETM/DM Client 09-00 以降
- Windows 版の JP1/NETM/DM Client - Base 08-00 以降

仮想化環境で稼働監視するための前提条件

次に示すバージョンの場合、仮想化環境の稼働状況を監視できます。

- JP1/NETM/DM Manager 09-10 以降（中継マネージャ）
- JP1/NETM/DM Client 09-10 以降（中継システムおよびクライアント）
- JP1/NETM/DM Client - Base 09-10 以降（中継システムおよびクライアント）

稼働監視機能でサポートする仮想化環境と OS を次の表に示します。

表 2-23 稼働監視機能でサポートする仮想化環境と OS

仮想化環境	OS	推奨 OS
ユーザの簡易切り替え機能※ ¹	• Windows Server 2008 • Windows Server 2012	• 64 ビット版の Windows Server 2008 • Windows Server 2008 R2 • Windows Server 2012

仮想化環境	OS	推奨 OS
ターミナルサーバ※ ¹	- Windows Server 2003 ※² - Windows Server 2008 - Windows Server 2012	- Windows Server 2003 (x64) 64 ビット版の Windows Server 2008 - Windows Server 2008 R2 - Windows Server 2012
Citrix XenApp ※ ¹ ※ ³	- Windows Server 2003 ※² - Windows Server 2008	- Windows Server 2003 (x64) 64 ビット版の Windows Server 2008 - Windows Server 2008 R2
Windows XP Mode ※ ⁴	Windows 7	

注※ 1

仮想化環境に同時にログオンするユーザ数のサポート上限は、60 ユーザです。また、同時にログオンしているユーザ数が 60 ユーザを超えた場合、稼働監視の情報を取得できるのは先にログオンしている 60 ユーザだけです。

なお、61 番目以降にログオンしたユーザは、一部の機能が動作しなくなります。このユーザは、別のユーザがログオフして同時にログオンしているユーザ数が 60 ユーザ以下になっても、一部の機能が動作しない状態のままです。このユーザが、再ログオンしたときのログオンユーザ数が 60 ユーザ以下の場合、すべての稼働監視機能が有効になります。

注※ 2

Windows Server 2003 (IPF) は含みません。

注※ 3

「公開デスクトップ」だけをサポートします。

注※ 4

Windows XP Mode 環境については、稼働状況を監視できるバージョンが異なります。Windows XP Mode 環境での JP1/NETM/DM Client (クライアント) の運用については、マニュアル「構築ガイド」の「付録 C Windows XP Mode 環境での JP1/NETM/DM Client (クライアント) の運用」を参照してください。

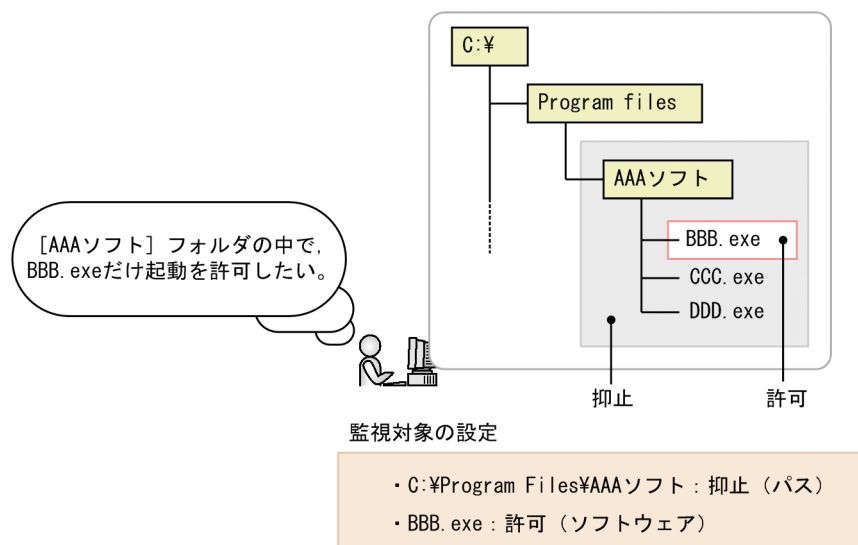
2.5.3 ソフトウェアの起動抑止

クライアントで起動されるソフトウェアを監視し、指定した条件に従ってソフトウェアの起動を許可したり、抑止したりできます。

例えば、業務に不要だと考えられるソフトウェアを指定して起動を抑止したり、JP1/NETM/DM 以外のソフトウェアの起動をすべて抑止して、指定したソフトウェアだけ起動を許可したりするといった運用もできます。

ソフトウェアの起動抑止の概要を次の図に示します。

図 2-22 ソフトウェアの起動抑止の概要



起動を監視するソフトウェアおよびパスを**監視対象プログラム**と呼びます。監視対象プログラムに指定できるソフトウェアは、次に示す拡張子のアプリケーションです。

- exe
- com
- scr

ソフトウェアの起動を監視するには、ファイル名または正式ファイル名を指定する必要があります。

起動の抑止を設定した監視対象プログラムには、起動を許可する条件（**許可条件**）を設定して、条件を満たす場合は起動を許可することもできます。許可条件にはユーザー種別と時間を設定できるため、例えば、昼休みの間だけはゲームの起動を許可する、といった運用ができます。許可条件に時間を設定した場合、許可時間が終了するとプログラムが停止されますが、停止時間になる前に、停止予告ダイアログボックスを表示させることもできます。

クライアントの OS が Windows 8、Windows Server 2012、Windows 7、または Windows Server 2008 R2 の場合、APPLocker と JP1/NETM/DM で同じソフトウェアの起動を抑止したときは、先に APPLocker で起動が抑止されるため、起動抑止の履歴を取得できません。また、起動抑止ダイアログボックスおよび停止予告ダイアログボックスも表示されません。

なお、この項では、起動抑止ダイアログボックスおよび停止予告ダイアログボックスを区別しない場合は、警告ダイアログボックスと呼びます。

ソフトウェアの起動抑止の注意事項

OS が Windows 8 および Windows Server 2012 の場合、ソフトウェア起動抑止関連のダイアログは常にデスクトップに表示されます。

仮想化環境の場合の注意事項

仮想化環境でソフトウェアの起動を抑止する場合の注意事項を、次に示します。

- 警告ダイアログボックスの表示先が、ソフトウェアの起動方法および OS によって次のように異なります。
 - ・ ユーザーがソフトウェアを直接起動した場合
ソフトウェアを起動したユーザーにダイアログボックスが表示されます。

- サービスからソフトウェアが起動された場合

Windows Server 2003 の場合、コンソールセッションでログオンしているユーザが存在するときは、そのユーザにダイアログボックスが表示されます。コンソールセッションでログオンしているユーザが存在しない場合、ダイアログボックスは、どこにも表示されません。

Windows Server 2012、または Windows Server 2008 の場合、ダイアログボックスは表示されません。

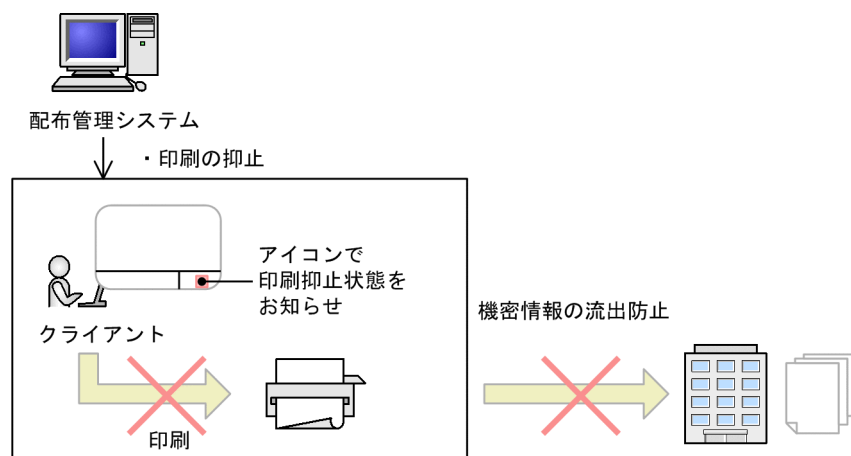
2.5.4 印刷の抑止

クライアントでの印刷を抑止して、機密情報の流出を防止できます。

印刷を抑止されているクライアント PC では、印刷しようとしても、印刷が禁止されていることを示すメッセージが表示されて、印刷できなくなります。したがって、印刷を抑止する場合は、あらかじめクライアントに対して印刷できなくなることを知らせることをお勧めします。なお、ポリシーが適用されて印刷が抑止されると、クライアントの PC のタスクトレイにアイコンが表示されて、印刷できない状態であることを知らせます。

印刷抑止の概要を次の図に示します。

図 2-23 印刷抑止の概要



(1) クライアントの OS の前提条件

印刷を抑止できる、クライアントの OS を次に示します。

- Windows NT 4.0
- Windows 2000
- Windows Server 2003
- Windows XP
- Windows Vista
- Windows Server 2008
- Windows 7
- Windows Server 2012
- Windows 8

クライアントの OS が Windows 98 および Windows Me の場合は、サポート対象外です。

(2) 印刷を抑止できるプリンタ種別

印刷を抑止できるプリンタ種別を次の表に示します。

表 2-24 印刷を抑止できるプリンタ種別

プリンタ種別	使用するポート	印刷抑止
ローカルプリンタ	LPT ポート	○
	ローカルポート	○
	USB ポート	○
	File ポート	×
	TCP/IP ポート	○
	LAN Manager ポート	×
ネットワーク共有プリンタ, またはほかの PC に接続されているプリンタ	—	○
インターネットプリンタ	—	×
仮想プリンタ	—	○※

(凡例)

- ：使用できる
- ×：使用できない
- ：該当なし

注※

一部の仮想プリンタでは、印刷抑止ができない場合があります。

ネットワーク共有プリンタの場合の前提条件

- 印刷を抑止する場合、プリンタサーバとなる PC で、プリンタのアクセス権を確認してください。プリンタの [プロパティ] ダイアログボックスの [セキュリティ] タブで「ドキュメントの管理」が許可になっていることを確認します。この設定はデフォルトで許可になっています。
- JP1/ 秘文または秘文で印刷を抑止している場合は、JP1/NETM/DM の印刷抑止は使用しないでください。
- Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在する場合
 - ・稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定が必要です。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
 - ・ネットワーク共有プリンタのプリンタ名を半角文字で設定する場合、199 文字以下で設定する必要があります。全角文字を含む場合は、200 文字以上でも設定できます。
- Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在しない場合
 - ・稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定を確認してください。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
 - ・印刷を抑止する場合、プリンタサーバおよびクライアント PC 間で RPC で通信します。RPC で通信できないとき、次に示す原因が考えられます。
 - ・プリンタサーバの OS が Windows 95, Windows 98, Windows Me である
 - ・プリンタサーバの OS が Windows 以外である

- ・プリンタサーバが Inetrnet Printing Protocol (IPP) サーバである
- ・プリンタサーバとクライアント PC の間にファイアウォールまたはプロキシがある
- ・クライアント PC が NAT の配下にある
- ・プリンタサーバで、クライアント PC の名前を解決できない
- ・クライアント PC の Windows ファイアウォールが有効で、かつ「ファイルとプリンタの共有」が「例外」に設定されていない

(3) 印刷を抑止する場合の注意事項

- ネットワーク共有プリンタを使用している環境で、プリンタサーバで印刷が抑止されている場合、クライアント PC で印刷抑止を解除しても印刷できません。
- ネットワーク共有プリンタを使用している環境で、プリンタサーバで印刷が抑止されてる場合、クライアント PC で印刷抑止を解除しても印刷できません。
- 次の場合、印刷を抑止できないことがあります。
 - ・ Windows が印刷ジョブとして認識していない場合
 - ・ プリンタのインストール過程でテスト印刷する場合
 - ・ ソフトウェアの稼働状況の監視機能が起動する前に印刷が実行された場合
- プリンタによっては、印刷が抑止されたときに、印刷ジョブの削除を示すダイアログボックスが表示されることがあります。このメッセージは、アプリケーションによって表示内容が異なります。
- 一つの印刷操作が複数の印刷ジョブとして処理される場合、これらに対して印刷が抑止されます。
- ネットワーク共有プリンタを使用していて、Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在する場合、次の注意事項があります。
 - ・ 稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定が必要です。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
 - ・ 印刷ジョブが WMI 経由で通知されなかった場合、印刷を抑止できません。
 - ・ 印刷ジョブがネットワーク共有プリンタのプリントキューに存在している場合、印刷操作を抑止する稼働監視ポリシーを適用すると、その印刷ジョブは抑止されます。また、印刷が抑止されたことを示すダイアログボックスが表示されることがあります。
- ネットワーク共有プリンタを使用している場合で、Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在しないときは、稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定を確認してください。
印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
- OS が Windows 8 または Windows Server 2012 の場合、印刷抑止および印刷抑止解除に関するダイアログ・アイコンは常にデスクトップに表示されます。

仮想化環境の場合の注意事項

仮想化環境で印刷を抑止する場合の注意事項を次に示します。

- ログオンユーザ数によって、警告ダイアログボックスの表示先が異なります。
 - ・ 1 ユーザの場合
ログオンユーザに対して警告ダイアログボックスが表示されます。
 - ・ 2 ユーザ以上の場合

警告ダイアログボックスは表示されません。

- 仮想化環境にログオンした任意のユーザが、印刷抑止解除のパスワードを入力し、印刷の抑止を解除した場合、その仮想化環境にログオンしているすべてのユーザの印刷の抑止が解除されます。
- リモートデスクトップ接続を実行している PC に接続されたプリンタを、ターミナルサーバで使用する設定にしている場合、ローカルプリンタと同じ動作になります。

2.5.5 外部メディア操作の抑止

クライアントでの外部メディアの操作を抑止して、機密情報の流出や外部のシステムからの情報の侵入を防止できます。この機能は、クライアントのバージョンが 08-50 から 09-10 までの場合に使用できます。

外部メディア操作の抑止では、次に示す外部メディアを介した書き込みまたは読み出しを抑止します。

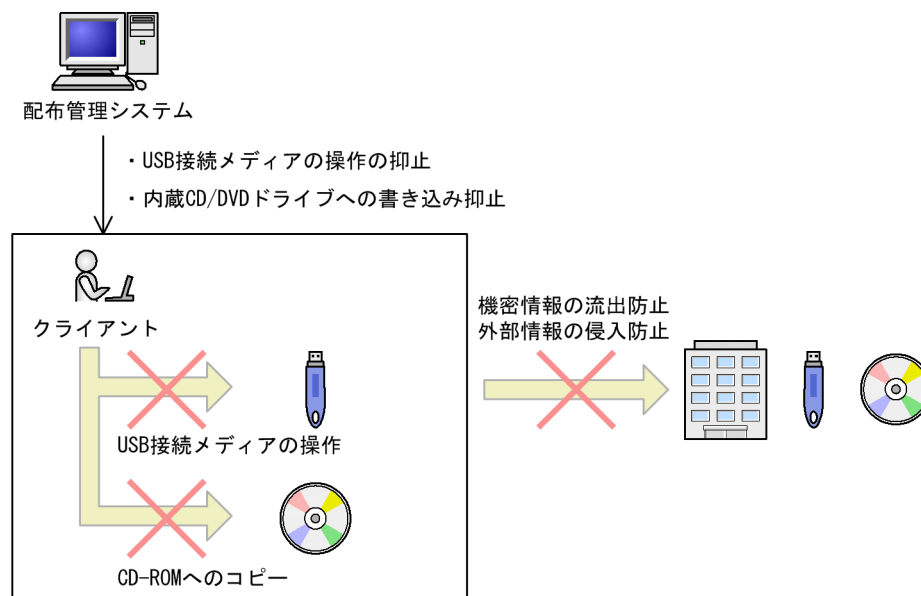
- USB 接続メディア
- 内蔵 CD/DVD ドライブ
- 内蔵 FD ドライブ
- IEEE 1394 接続メディア
- 内蔵 SD カードスロット

どのメディアの操作を抑止するかは、業務で使用する頻度や情報漏えいの危険度などを基に選択してください。

なお、クライアントのバージョンが 09-12 以降の場合は、デバイス操作の抑止でこれらの外部メディア操作を抑止できます。デバイス操作の抑止については「2.5.6 デバイス操作の抑止」を参照してください。

外部メディア操作抑止の概要を次の図に示します。

図 2-24 外部メディア操作抑止の概要



(1) クライアントの OS の前提条件

外部メディア操作を抑止するには、クライアントの OS を前提条件に合わせてください。なお、クライアントの OS が Windows NT 4.0、Windows 98 および Windows Me の場合は、サポート対象外です。

機能	Windows					
	2000	Server 2003	XP	Vista	Server 2008	7
USB 接続メディア操作の抑止（書き込みと読み出しを禁止）※ 1, 2	○	○	○	○	○※ 3	○
特定の USB 接続メディアを抑止対象から除外※ 4, 5	○	○	○	○	○	○
USB 接続メディア操作の抑止（書き込みだけを禁止）※ 1, 2	×	×	○	×	×	×
内蔵 CD/DVD ドライブへの書き込みの抑止	×	○	○	○	×	○
内蔵 FD ドライブ操作の抑止	○	○	○	○	×	○
IEEE 1394 接続メディア操作の抑止※ 1	○	○	○	○	×	○
内蔵 SD カードスロット操作の抑止※ 1	×	×	○	○	×	○

（凡例）

- ：サポート対象
- ×

注※ 1

抑止対象となる USB 接続メディア、IEEE 1394 接続メディア、および SD カードは、[ハードウェアの安全な取り外し] ダイアログボックスから、デバイスコンポーネントを表示したときに、次のように表示されるメディアです。

- 「USB 大容量記憶装置デバイス」
- 「IEEE 1394 SBP2 Drive」
- 「Secure Digital Storage Device」

注※ 2

[ハードウェアの安全な取り外し] ダイアログボックスで、「USB 大容量記憶装置デバイス」と表示されない USB 接続メディアが抑止されることがあります。その場合は、クライアント PC を抑止対象外とするか、抑止された USB 接続メディアを抑止対象から除外するように設定してください。なお、USB 接続メディア操作の抑止（書き込みだけを禁止）は、特定の USB 接続メディアを抑止対象から除外することはできません。

注※ 3

クライアント PC の OS が Windows Server 2008 の場合、抑止対象は USB ストレージデバイスです。

注※ 4

「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスがオンの場合、USB 接続メディア操作の抑止（書き込みと読み出しを禁止）の対象は、USB ストレージデバイスになります。

注※ 5

バージョンが 08-52 以前の JP1/NETM/DM Client に対しては、指定したメディアを抑止対象から除外することはできません。

クライアント PC の OS の種類による、抑止できる操作の違いを次に示します。

- 次に示す条件をすべて満たす場合、USB 接続の HD ドライブまたは USB 接続の FD ドライブへのファ

イルコピーを実行しているときは、ファイルコピーが完了するまで USB 接続メディアの操作は抑止できません。

- クライアントの OS が Windows 7, または Windows Server 2008 R2 である
- ファイルコピーの実行中に、USB 接続メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーが適用される

- 特定の USB 接続メディアを抑止対象から「接続名」で除外する設定の稼働監視ポリシーを適用した場合、「接続名」で除外した USB 接続メディアをクライアント PC に初めて接続したときは、抑止されません。この場合、再度 USB 接続メディアを接続してください。2 回目以降は抑止されません。

- クライアント PC の OS が Windows 7 または Windows Vista の場合、次に示す抑止は個別に設定できません。
 - USB 接続メディア操作の抑止（「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスをオフのとき）
 - IEEE 1394 接続メディア操作の抑止
 - 内蔵 SD カードスロット操作の抑止

どれか一つ以上を設定すると、USB 接続メディア、IEEE 1394 接続メディア、内蔵 SD カードおよびクライアント上のリムーバブルディスクに対して、書き込みと読み出しが抑止されます。

- クライアント PC の OS が Windows 7, Windows Server 2008, または Windows Vista で、JP1/NETM/DM Client のバージョンが 09-00 以降の場合、USB 接続メディア操作の抑止で、指定したメディアを抑止対象から除外するときは、IEEE 1394 接続メディア操作の抑止および内蔵 SD カードスロット操作の抑止は設定しないでください。各操作を抑止する設定をすると、「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスの設定が無効になり、すべての USB 接続メディアに対して、書き込みと読み出しが抑止されます。
- クライアント PC の OS が Windows 7 または Windows Vista の場合、内蔵 CD/DVD ドライブへの書き込みを抑止すると、内蔵 CD/DVD ドライブだけでなく、USB 接続の CD/DVD ドライブへの書き込みも抑止されます。また、USB 接続の CD/DVD ドライブへの書き込みは、USB 接続メディア操作の抑止対象外となります。
- クライアント PC の OS が Windows 7 または Windows Vista の場合、内蔵 FD ドライブへの書き込みと読み出しを抑止すると、内蔵 FD ドライブだけでなく、USB 接続の FD ドライブへの書き込みと読み出しも抑止されます。また、USB 接続の FD ドライブへの書き込みは、USB 接続メディア操作の抑止対象外となります。
- USB 接続メディアの書き込みだけを禁止する設定は、クライアント PC の OS が次の場合は、有効になりません。そのため、USB 接続メディアの操作の書き込みだけを禁止する設定を適用した場合、クライアント PC には、代わりに書き込みと読み出しを禁止する設定が適用されます。
Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista, Windows Server 2003, Windows XP (Service Pack なし, または Service Pack 1) および Windows 2000
- クライアント PC の OS が Windows XP の場合、USB 接続メディア操作の書き込みだけを禁止する設定は、Service Pack 2 以降のバージョンがサポート対象となります。
- クライアント PC の OS が Windows 2000 の場合、「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスをオンにしていると、システムにログインする前から接続されている USB 接続の FD ドライブおよび USB 接続の HD ドライブの操作が抑止できません。これらの USB 接続メディアの操作を抑止したい場合は、このチェックボックスをオフにしてください。

(2) 外部メディア操作を抑止する場合の注意事項

- Windows の設定で、CD/DVD の自動再生機能が無効に設定されていると、USB 接続メディアの書き込

みだけを抑止する場合に、USB 接続の CD/DVD ドライブへの書き込みが抑止されないことがあります。

- 外部メディア操作の抑止をする前から接続されていた外部メディアに対しては、抑止が有効になりません。一度切断（取り外し）したあとから有効になります。
- 内蔵 SD カードスロットを介した書き込みと読み出しの抑止は、クライアント PC が一度リブートしたあとから有効になります。
- 外部メディア操作の抑止は、稼働監視用のサービスを停止しても解除されません。外部メディア操作の抑止を解除するには、次のどちらかの作業を実行してください。
 - ・ 外部メディア操作を抑止しない設定の稼働監視ポリシーを作成して適用する。
 - ・ JP1/NETM/DM Client をアンインストールする。
- Windows Server 2003, Windows XP, または Windows 2000 の場合、内蔵 FD ドライブの操作を抑止すると、内蔵 FD ドライブ自体が存在しない状態になります。そのため、内蔵 FD ドライブ操作を抑止しているクライアントからインベントリ情報を取得した場合は、内蔵 FD ドライブの情報は取得されません。
- JP1/NETM/DM 以外の、外部メディアに対して使用を制限する製品（Windows のグループポリシー、Active Directory のポリシー適用など）とは、同時に使用できません。同じクライアントに対して他製品と同時に使用を制限した場合、JP1/NETM/DM の外部メディア操作抑止の設定内容が、他製品によって変更されるおそれがあります。また、他製品の設定内容も、JP1/NETM/DM によって変更されることがあります。
- 外部メディア操作の抑止設定は、Active Directory やオペレータの操作によって、変更されてしまうおそれがあります。そのため、外部メディア操作の抑止設定は、稼働監視用のサービスの再起動時に、稼働監視ポリシーに従って再設定されます。ただし、一度も外部メディア操作を抑止する設定にしていなかった場合は、稼働監視用のサービスの再起動時に再設定されません。また、外部メディア操作を抑止しない設定の稼働監視ポリシー適用時も、外部メディア操作に関する設定はされません。
- クライアント PC の OS が Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、外部メディア操作の抑止設定は、OS をリブートしたあとから有効になります。なお、クライアント PC の OS の種類に関係なく、特定の USB 接続メディアを抑止対象から除外する設定をした場合、USB 接続メディア操作の抑止設定および特定の USB 接続メディアを抑止対象から除外する設定は、OS を再起動したあとから有効になります。
- 外部メディア操作を抑止したあとで抑止を解除する場合は、再インストールなどによって、デバイスドライバが正常に動作する状態にしてください。
- USB 接続リンクケーブルの使用を抑止する場合、OS に認識される USB 機器に応じて、操作の抑止を設定してください。ただし、機器によっては USB 接続リンクケーブルの使用を抑止できない場合があります。
- クライアント PC で [ハードウェアの安全な取り外し] アイコンを実行した、または [コントロールパネル] の [管理ツール] - [コンピュータの管理] の [デバイス マネージャ] で各 USB 接続メディアを右クリックして「削除」を選択した場合、USB 接続メディア操作の抑止が正常に動作しないおそれがあります。
- 抑止対象の USB 接続メディアをクライアント PC に接続した場合、USB 接続メディアの自動再生機能が有効に設定されていても、自動再生が失敗しエラーメッセージが表示されることがあります。
- クライアント PC の OS が Windows 2000 の場合、「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスをオンにしていると、USB 接続の FD ドライブの操作が抑止できません。この USB 接続メディアの操作を抑止する場合は、このチェックボックスをオフにしてください。

- クライアント PC の OS が Windows 7, Windows Server 2008, または Windows Vista の場合, 「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスがオンで, かつ Windows の設定で自動再生機能を有効にしていると, USB 接続の FD ドライブおよび USB 接続の HD ドライブの操作が抑止できません。これらの USB 接続メディアの操作を抑止する場合は, このチェックボックスをオフにするか, または自動再生機能を無効にしてください。
- 次の場合, OS のエラーメッセージが表示されることがあります。
 - クライアント PC の OS が Windows 2000 でデバイスドライバがインストールされていない状態で, 抑止対象の USB 接続メディアが接続された場合
 - USB 接続メディアの操作中に, その USB 接続メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーが適用された場合
- ソフトウェアの稼働状況の監視機能が起動する前に接続された USB 接続メディアの操作は抑止できないことがあります。
- クライアント PC の OS が Windows Server 2003 または Windows XP の場合, CD/DVD ドライブの「プロパティ」の「書き込み」タブにある「このドライブで CD 書き込みを有効にする」チェックボックスをオフにすると, 内蔵 CD/DVD への書き込みは抑止できません。なお, DVD-RAM に書き込む場合は, 「このドライブで CD 書き込みを有効にする」チェックボックスをオフにする必要があるため, 書き込みを抑止できません。

オフラインマシンに対して外部メディア操作を抑止する場合の注意事項

稼働監視ポリシーを適用する場合や, 稼働情報を取得する場合に使用する外部メディアに対して, 操作を抑止しないでください。該当の外部メディアの操作を抑止すると稼働監視ポリシーの適用および稼働情報の取得ができなくなります。

仮想化環境の場合の注意事項

仮想化環境に外部メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーを適用している場合の注意事項を, 次に示します。

- USB 接続メディアの接続が抑止されたことを示す警告ダイアログボックスは, コンソールセッションに接続しているユーザだけに表示されます。
- 次に示す条件をすべて満たす場合, ターミナルサーバに外部メディアを抑止するセキュリティポリシーを適用していても, リダイレクトされたドライブの操作を抑止できません。
 1. ターミナルサーバにリモートで接続している PC に, 外部メディア接続を抑止するセキュリティポリシーが適用されていない。
 2. 1. の PC に接続されたドライブを, ターミナルサーバで使用する設定にしている。

このようなドライブを抑止するには, ターミナルサーバ側でリダイレクトを無効にしてください。ただし, この設定をするとすべてのドライブでリダイレクトが無効になります。Windows Server 2008 でターミナルサーバでリダイレクトを無効にする手順を次に示します。

• Windows Server 2008 の場合

1. Windows の「ターミナルサービス構成」で, 「RDP-Tcp」のプロパティを開く。
2. 「クライアント設定」タブの「リダイレクト」の「ドライブ」をチェックする。

• Windows Server 2008 R2 の場合

1. Windows の「RD セッションホストの構成」で, 「RDP-Tcp」のプロパティを開く。
2. 「クライアント設定」タブの「リダイレクト」の「ドライブ」をチェックする。

2.5.6 デバイス操作の抑止

クライアントでのデバイスの操作を抑止して、機密情報の流出や外部のシステムからの情報の侵入を防止できます。この機能は、クライアントのバージョンが 09-12 以降の場合に使用できます。

操作の抑止対象となるデバイスを次に示します。

- USB ストレージデバイス
- 内蔵 CD/DVD ドライブ
- 内蔵 FD ドライブ
- IEEE1394 接続デバイス
- 内蔵 SD カード
- Bluetooth デバイス
- イメージングデバイス

各種デバイスに対して、デバイスの使用（書き込みと読み出し）を抑止したり、特定のデバイスを抑止対象から除外したりできます。また、デバイスへの書き込みだけを抑止することもできます。デバイスごとに抑止できる操作を次の表に示します。

表 2-25 デバイスごとに抑止できる操作

デバイス種別	デバイスの使用を抑止	特定のデバイスを抑止対象から除外	デバイスへの書き込みだけを抑止※1※6
USB ストレージデバイス	○	○	○※2
内蔵 CD/DVD ドライブ	○	×	○※3
内蔵 FD ドライブ	○	×	○※4
IEEE1394 接続デバイス	○	×	○※4
内蔵 SD カード※5	○	×	○※4
Bluetooth デバイス	○	○	×
イメージングデバイス	○	○	×

(凡例)

- ：サポート対象
- ×：サポート対象外

注※1

デバイス種別ごとに書き込みだけを抑止することはできません。
また、書き込みだけを抑止できるデバイスは、使用が抑止されていないデバイス、または抑止対象から除外されているデバイスです。

注※2

クライアントの OS が Windows XP Service Pack 2, Windows XP Service Pack 3, Windows Vista, Windows Server 2008, Windows 7, Windows Server 2012 および Windows 8 の場合だけ抑止できます。

注※3

クライアントの OS が Windows XP, Windows Server 2003, Windows Vista, Windows Server 2008, Windows 7, Windows Server 2012 および Windows 8 の場合だけ抑止できます。

注※4

クライアントの OS が Windows Vista, Windows Server 2008, Windows 7, Windows Server 2012 および Windows 8 の場合だけ抑止できます。

注※5

SD カードを接続した状態で、Windows の [デバイス マネージャ] から、各 SD カードのプロパティのダイアログ

ボックスを表示して、[詳細] タブの「列挙子」に、「SD」または「RIMMPTSK」と表示されるものがサポート対象です。PC に内蔵されている SD カードスロットと PC 本体との接続方法によって、「列挙子」に「SD」または「RIMMPTSK」以外が表示されることがあります。このように、「列挙子」に「SD」または「RIMMPTSK」以外が表示される SD カードはサポート対象外です。

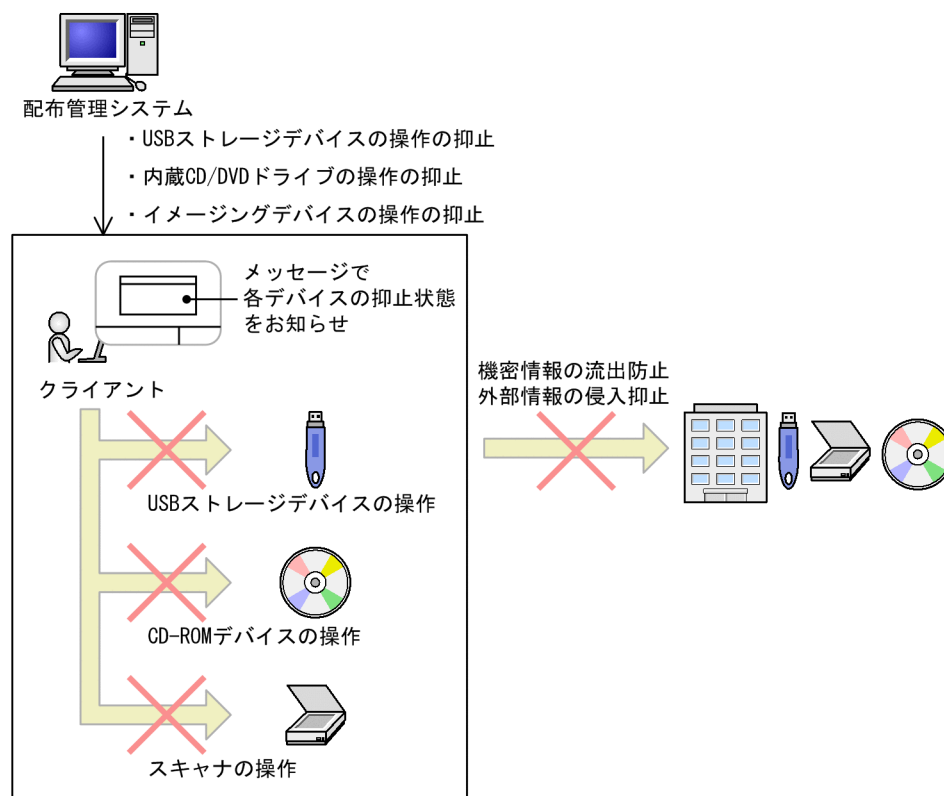
注※ 6

OS が Windows 8 エディションなしの場合は、動作しません。

どのデバイスの操作を抑止するかは、業務で使用する頻度や情報漏えいの危険度などを基に選択してください。

デバイス操作抑止の概要を次の図に示します。

図 2-25 デバイス操作抑止の概要



(1) クライアントの OS の前提条件

デバイス操作を抑止できる、クライアントの OS を次に示します。

- Windows 2000
- Windows Server 2003
- Windows XP
- Windows Vista
- Windows Server 2008
- Windows 7
- Windows Server 2012
- Windows 8

クライアントの OS が Windows NT 4.0, Windows 98 および Windows Me の場合は、サポート対象外で

す。

(2) デバイス操作を抑止する場合の注意事項

- クライアント PC の起動直後など、稼働監視が開始される前に接続されたデバイスについては、操作を抑止できないことがあります。
- JP1/NETM/DM 以外の、デバイスに対して使用を制限する製品（Windows のグループポリシー、Active Directory のポリシー適用など）とは、同時に使用できません。同じクライアントに対して他製品と同時に使用を制限した場合、JP1/NETM/DM のデバイス操作抑止の設定内容が、他製品によって変更されるおそれがあります。また、他製品の設定内容も、JP1/NETM/DM によって変更されることがあります。
- 稼働監視ポリシーを適用する前から接続されているデバイスに対しては、操作の抑止が有効になりません。デバイス操作の抑止を有効にするには、クライアント PC を再起動してください。
- 稼働監視ポリシーを次のとおり変更した場合、クライアント PC を再起動してください。
 - ・ 操作を抑止している設定から操作可能な設定に変更した場合
 - ・ すでに接続されているデバイスに対して、操作を抑止する設定に変更した場合
 - ・ 書き込みだけを抑止する設定を有効または無効にした場合
- クライアント PC の OS が Windows 2000 の場合、ユーザがログインする前に接続された USB 接続のハードディスクドライブおよび USB 接続のフロッピーディスクドライブは操作を抑止できません。
- 自動再生機能が有効に設定されているデバイスを抑止した場合、自動再生が失敗を示すエラーメッセージが表示されることがあります。
- デバイスの操作中に、そのデバイスの操作を抑止する稼働監視ポリシーが適用された場合、OS のエラーメッセージが表示されることがあります。
- 抑止対象のデバイスをクライアント PC に初めて接続する場合、デバイスドライバのインストール失敗を示す OS のエラーメッセージが表示されることがあります。
- USB スキャナなどは USB 接続の場合でも、イメージングデバイスと認識される場合があります。
- USB 接続の場合でも、USB ストレージデバイス、Bluetooth デバイス、またはイメージングデバイスとして認識されないデバイスは、抑止できません。また、抑止対象から除外することもできません。
- Bluetooth デバイスの抑止を設定すると、Bluetooth で接続しているマウスやキーボードなどの使用も抑止されます。
- Bluetooth デバイスを PC に接続すると、
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Enum¥USB¥（Bluetooth デバイスのハードウェア ID）のレジストリが作成されます。
デバイス制御機能では、このレジストリの Class の値が「Bluetooth」「BTW」「BTM」の場合を Bluetooth デバイスとして扱います。ハードウェア ID は OS のデバイスマネージャから確認できます。
次の Bluetooth デバイスは、抑止できることを確認しています。

メーカー	型番
PLANEX COMMUNICATIONS	BT-Micro3E1X
	BT-MicroEDR2X
Logitech	LBT-UAN03C2BK
	LBT-UAN01C1
corega	CG-BT2USB01CB

メーカー	型番
	CG-BT2USB02CB
サンワサプライ	MM-BTUD26
	MM-BTUD23
BUFFALO	BSHSBD04BK
	BSHSBD02BK
I-O DATA	USB-BT21

- DVD RAM に対して、書き込みだけを抑止することはできません。
- 暗号機能付きの USB ストレージデバイスに対して、書き込みだけを抑止する場合、読み込みもできなくなることがあります。
- クライアント PC の OS が Windows Vista 以降で書き込みだけを抑止する場合は、[コントロールパネル] の [管理ツール] - [サービス] で「Portable Device Enumerator service」を開始する必要があります。
- 複数のデバイスインスタンス ID を持つデバイスが接続された場合、一つのデバイスに対して抑止状態を示すダイアログが複数回表示されることがあります。
- クライアント PC に抑止対象のデバイスを初めて接続したときに、ドライバのインストールが実施されると、デバイスの接続が抑止されたことを示すダイアログボックスが複数回表示されることがあります。
- USB 接続の CD/DVD ドライブを抑止した際に、抑止された CD/DVD ドライブのトレイが開く場合があります。
- 抑止対象のデバイスをクライアントに初めて接続する場合、デバイスドライバのインストールができないことがあります。
この場合、デバイスの接続、切断、および接続抑止の履歴が取得されません。また、デバイスの接続が抑止されたことを示す警告ダイアログボックスも表示されません。
- 次に示す条件をすべて満たす場合、USB 接続の HD ドライブまたは USB 接続の FD ドライブへのファイルコピーを実行しているときは、ファイルのコピーが完了するまで USB ストレージデバイスの操作を抑止できません。
 - クライアント PC の OS が Windows 7, Windows Server 2008 R2, Windows 8, または Windows Server 2012 の場合
 - ファイルコピーの実行中に、USB ストレージデバイスの操作を抑止する稼働監視ポリシーが適用された場合
- 特定の USB ストレージデバイスを抑止対象から「接続名」で除外する設定の稼働監視ポリシーを適用した場合、「接続名」で除外した USB ストレージデバイスをクライアント PC に初めて接続したときに、「接続名」が取得できないでデバイスが抑止されることがあります。この場合、再度 USB ストレージデバイスを接続してください。
- デバイス操作を抑止すると、抑止対象のデバイスはドライブとして認識されなくなるため、そのデバイスのシステム情報が取得できなくなります。
- Windows の設定で自動再生機能が有効の場合、USB 接続の HD ドライブおよび USB 接続の FD ドライブの操作を抑止できません。これらの操作を抑止するには、自動再生機能を無効にしてください。
- 内蔵 SD カードを抑止する場合、次に示すデバイスの操作も抑止されます。
 - [コントロールパネル] の [管理ツール] - [コンピュータの管理] の [デバイス マネージャ] から

デバイスのプロパティのダイアログボックスを表示して、[詳細] タブの「列挙子」に「RIMMPTSK」が表示されるデバイス

- すでに接続されているデバイスに対して操作を抑止する稼働監視ポリシーを設定した場合、それとは別のデバイスをクライアント PC に接続するときに、抑止対象のデバイスに対する抑止ダイアログが表示されることがあります。
- 操作を抑止する稼働監視ポリシーを有効にするために、クライアント PC を再起動する必要がある場合でも、稼働監視ポリシーを設定した時点で抑止ダイアログが表示されます。
- クライアント PC の OS が Windows Vista 以降の場合、一つ以上のデバイスを抑止する稼働監視ポリシーを適用したとき、エラーレベルのイベントログが出力されることがあります。
内蔵 CD/DVD を抑止した場合に出力されるイベントログの例を、次に示します。

```
ソース: Service Control Manager Eventlog Provider
イベントID: 7026
次のブート開始ドライバまたはシステム開始ドライバを読み込めませんでした: cdrom
```

なお、Windows 7 および Windows Server 2008 R2 の場合、ソースは「Service Control Manager」となります。

- OS が Windows 8 または Windows Server 2012 の場合、デバイスの抑止ダイアログは常にデスクトップに表示されます。
- OS が Windows 8 または Windows Server 2012 の場合、記憶域プールに割り当てられている USB ストレージ デバイスを抑止することはできません。

オフラインマシンに対してデバイス操作を抑止する場合の注意事項

稼働監視ポリシーを適用する場合や、稼働情報を取得する場合に使用するデバイスに対して、操作を抑止しないでください。該当のデバイスの操作を抑止すると稼働監視ポリシーの適用および稼働情報の取得ができなくなります。

仮想化環境の場合の注意事項

- 仮想化環境にデバイスの操作を抑止する稼働監視ポリシーを適用している場合、デバイスの接続が抑止されたことを示す警告ダイアログボックスは、コンソールセッションに接続しているユーザだけに表示されます。コンソールセッションに接続しているユーザがいない場合、警告ダイアログは表示されません。
- 次に示す条件をすべて満たす場合、ターミナルサーバにデバイスを抑止するセキュリティポリシーを適用していても、リダイレクトされたドライブの操作を抑止できません。
 1. ターミナルサーバにリモートで接続している PC に、デバイスの操作を抑止するセキュリティポリシーが適用されていない。
 2. 1. の PC に接続されたドライブを、ターミナルサーバで使用する設定にしている。

このようなドライブを抑止するには、ターミナルサーバ側でリダイレクトを無効にしてください。ただし、この設定をするとすべてのドライブでリダイレクトが無効になります。Windows Server 2008 および Windows Server 2012 でターミナルサーバでリダイレクトを無効にする手順を次に示します。

• Windows Server 2008 の場合

1. Windows の [ターミナルサービス構成] で、「RDP-Tcp」のプロパティを開く。
2. [クライアント設定] タブの「リダイレクト」の [ドライブ] をチェックする。

• Windows Server 2008 R2 の場合

1. Windows の [RD セッション ホストの構成] で、「RDP-Tcp」のプロパティを開く。

2. [クライアント設定] タブの「リダイレクト」の [ドライブ] をチェックする。

• Windows Server 2012 の場合

1. 「ローカルグループポリシーエディタ」で「コンピュータの構成→管理用テンプレート→Windows コンポーネント→リモートデスクトップサービス→リモートデスクトップセッションホスト→デバイスとリソースのリダイレクト」を開く。
2. 「ドライブのリダイレクトを許可しない」を有効にする。

バージョンが 08-50 から 09-10 までの JP1/NETM/DM をバージョン 09-12 以降にアップグレードする場合の注意事項

バージョンが 09-12 以降のクライアントに対しては、外部メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーは適用されません。デバイス操作を抑止する稼働監視ポリシーを設定してください。

ただし、次に示す二つの条件に該当する場合、外部メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーが適用されます。

- アップグレード後に編集した稼働監視ポリシーが一度も適用されていない場合
- アップグレード前の外部メディアの操作を抑止する稼働監視ポリシーを編集しないで適用した場合

2.5.7 不正操作の通知

クライアント PC での不正操作を検知した場合、管理者にアラートして JP1 イベントを通知できます。

(1) 操作が抑止されているデバイスが接続されたことをアラートイベントで通知する

操作が抑止されているデバイスがクライアント PC に接続された場合、アラートとして JP1 イベントの稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを通知できます。また、クライアントのバージョンが 09-10 の場合は、操作が抑止されている USB 接続メディアがクライアント PC に接続されたときだけ JP1 イベントを通知できます。ただし、クライアントのバージョンが 09-01 以前の場合は、アラートイベントは通知されません。

稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを通知する場合は、次のとおり設定してください。中継マネージャおよび中継システムでの設定については、「(4) 不正操作を通知する場合の注意事項」を参照してください。

また、この JP1 イベントで出力される情報については、マニュアル「運用ガイド 2」の「2.2.2 JP1 イベントの属性」を参照してください。

配布管理システムまたは中継マネージャ

- サーバセットアップで [イベントサービス] パネルの「イベントサービス機能を使用する」チェックボックスおよび「稼働監視不正操作イベント」チェックボックスをオン
[イベントサービス] パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.11 [イベントサービス] パネル」を参照してください。
- [ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の「抑止イベントを即時通知する」チェックボックスをオン
[ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.4 稼働監視結果のアップロードの設定」を参照してください。

クライアントのバージョンが 09-10 の場合

- [ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（外部メディア操作のログ取得および抑止の設定）の「指定したメディアを抑止対象から除外する」チェックボックスをオン

[ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（外部メディア操作のログ取得および抑止の設定）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.10 外部メディア操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。

クライアントのバージョンが 09-12 以降の場合

- [制御設定] ダイアログボックスの「使用を抑止する」チェックボックスおよび「アラートする」チェックボックスをオン
- [制御設定] ダイアログボックスの詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.11 デバイス操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。

(a) 稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを通知する場合の注意事項

クライアントのバージョンが 09-10 の場合の注意事項

- 複数のデバイスインスタンス ID が設定された USB 接続メディアがクライアント PC に接続された場合、複数の稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されることがあります。
- クライアント PC に、初めて USB 接続メディアが接続された場合、デバイスドライバがインストールされることがあります。このとき、複数の稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されることがあります。
- ソフトウェアの稼働状況の監視機能が起動する前に接続された USB 接続メディアについては、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されません。
- クライアント PC の OS が Windows 2000 の場合、USB 接続の FD ドライブについては、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを通知できません。
- USB 接続リンクケーブルの種類によっては、稼働監視不正操作アラートイベントを通知できないことがあります。
- 稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されても、操作履歴および抑止履歴が配布管理システムに通知されていないことがあります。操作履歴および抑止履歴を確認したい場合は、「ソフトウェア稼働監視履歴の取得」ジョブを実行するか、下位システムから操作履歴および抑止履歴が通知されるのを待ってください。
- 稼働監視ポリシー適用時に、USB 接続メディアがクライアント PC に接続されていた場合、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントで出力する情報を正しく取得できないことがあります。
- 外部メディア操作を抑止する場合の注意事項に該当し、外部メディア操作を抑止することができなかった場合、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントは通知されません。
外部メディア操作を抑止する場合の注意事項については、「2.5.5(2) 外部メディア操作を抑止する場合の注意事項」を参照してください。

クライアントのバージョンが 09-12 以降の場合の注意事項

- 複数のデバイスインスタンス ID が設定されたデバイスがクライアント PC に接続された場合、複数の稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されることがあります。
- クライアント PC に、初めてデバイスが接続された場合、デバイスドライバがインストールされることがあります。このとき、複数の稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されることがあります。
- ソフトウェアの稼働状況の監視機能が起動する前に接続されたデバイスについては、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されません。
- 操作を抑止する稼働監視ポリシーを有効にするためにクライアント PC を再起動する必要がある場合でも、稼働監視ポリシーを設定した時点で稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されます。

- JP1/NEM/DM 以外の製品によってデバイスの設定が変更されて、デバイスの接続や切断が検知された場合でも、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントが通知されます。
- デバイス操作を抑止する場合の注意事項に該当し、デバイス操作を抑止できなかった場合、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントは通知されません。
デバイス操作を抑止する場合の注意事項については、「2.5.6(2) デバイス操作を抑止する場合の注意事項」を参照してください。
- デバイス操作を抑止（デバイスを切断）したあとに、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを通知するため、次に示す項目（稼働監視不正デバイス接続アラートイベントの拡張属性）が取得できないことがあります。
 - 「デバイス種別」
 - 「接続名」
 - 「種別のデバイスインスタンス ID」
 - 「コントローラのデバイスインスタンス ID」

(2) ソフトウェアの起動を抑止されたことをアラートイベントで通知する

クライアントによるソフトウェアの起動を抑止された場合、アラートとして JP1 イベントの稼働監視ソフトウェア起動抑止アラートイベントとして通知できます。ただし、クライアントのバージョンが 09-12 以前の場合は、アラートイベントは通知されません。

稼働監視ソフトウェア起動抑止アラートイベントを通知する場合は、次のとおり設定してください。中継マネージャおよび中継システムでの設定については、「(4) 不正操作を通知する場合の注意事項」を参照してください。

また、この JP1 イベントで出力される情報については、マニュアル「運用ガイド 2」の「2.2.2 JP1 イベントの属性」を参照してください。

ソフトウェアの起動を抑止できなかった場合、稼働監視ソフトウェア起動抑止アラートイベントは通知されません。ソフトウェアの起動を抑止できない場合の詳細については、「2.5.3 ソフトウェアの起動抑止」を参照してください。

配布管理システムまたは中継マネージャ

- サーバセットアップで [イベントサービス] パネルの「イベントサービス機能を使用する」チェックボックスおよび「稼働監視不正操作イベント」チェックボックスをオン
[イベントサービス] パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.11 [イベントサービス] パネル」を参照してください。
- [ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の「抑止イベントを即時通知する」チェックボックスをオン
[ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.4 稼働監視結果のアップロードの設定」を参照してください。
- [ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（監視対象プログラムの設定）の「監視対象プログラム一覧」で起動を抑止したいソフトウェアの「動作」を「抑止」に設定
[ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集] ダイアログボックス（監視対象プログラムの設定）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.6 監視対象プログラムの設定」を参照してください。

(3) 印刷が抑止されたことをアラートイベントで通知する

クライアントによる印刷操作が抑止された場合、アラートとして JP1 イベントの稼働監視印刷抑止アラートイベントとして通知できます。ただし、クライアントのバージョンが 09-12 以前の場合は、アラートイ

メントは通知されません。

稼働監視印刷抑止アラートイベントを通知する場合は、次のとおり設定してください。中継マネージャおよび中継システムでの設定については、「(4) 不正操作を通知する場合の注意事項」を参照してください。

また、この JP1 イベントで出力される情報については、マニュアル「運用ガイド 2」の「2.2.2 JP1 イベントの属性」を参照してください。

印刷を抑止できなかった場合、稼働監視印刷抑止アラートイベントは通知されません。印刷を抑止できない場合の詳細については、「2.5.4(3) 印刷を抑止する場合の注意事項」を参照してください。

配布管理システムまたは中継マネージャ

- サーバセットアップで「イベントサービス」パネルの「イベントサービス機能を使用する」チェックボックスおよび「稼働監視不正操作イベント」チェックボックスをオン
「イベントサービス」パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.11 「イベントサービス」パネル」を参照してください。
- 「ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集」ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の「抑止イベントを即時通知する」チェックボックスをオン
「ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集」ダイアログボックス（稼働監視結果のアップロード）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.4 稼働監視結果のアップロードの設定」を参照してください。
- 「ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集」ダイアログボックス（印刷操作のログ取得および抑止の設定）の「印刷を抑止する」チェックボックスをオン
「ソフトウェア稼働監視ポリシーの編集」ダイアログボックス（印刷操作のログ取得および抑止の設定）の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。

(4) 不正操作を通知する場合の注意事項

- 不正操作を通知する場合、中継マネージャで次のとおり設定する必要があります。ただし、JP1 イベントを中継マネージャから通知する場合、次の設定は不要です。
 - 中継マネージャの基本設定で「上位通知」パネルの「即時送信」ラジオボタンをオン
 - 中継マネージャの基本設定で「上位通知」パネルの「上位システムへ稼働監視履歴を中継する動作を指定する」チェックボックスおよび「中継する」ラジオボタンをオンにしている場合、「起動抑止情報」チェックボックスをオン
「上位通知」パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.3.2 「上位通知」パネル」を参照してください。
- 不正操作を通知する場合、中継システムで次のとおり設定する必要があります。
 - 中継システムの基本設定で「上位通知」パネルの「即時送信」ラジオボタンをオン
「上位通知」パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「5.2.5 「上位通知」パネル」を参照してください。
- 中継マネージャで稼働監視履歴を保存する設定をしている場合は、下位システムと同じまたは新しいバージョンの中継マネージャを使用してください。
08-10 以前のバージョンの中継マネージャで、稼働監視不正デバイス接続アラートイベントを受信した場合、日付だけの抑止履歴が稼働監視履歴データベースに格納されてしまいます。

2.5.8 操作履歴および抑止履歴の取得

クライアントで操作したソフトウェアなどの操作履歴、および抑止履歴を取得します。

操作履歴および抑止履歴を取得したい場合は、取得するイベントを稼働監視ポリシーに設定する必要があります。

ります。操作履歴および抑止履歴として取得できるイベントの種類を次の表に示します。

表 2-26 操作履歴および抑止履歴を取得できるイベントの種類

イベント	操作対象	説明
プロセスの起動	ソフトウェア	プログラムの起動時のイベント
プロセスの停止		プログラムの停止時のイベント
キャプションの変更※1※2※3		ウィンドウタイトルの変更時のイベント
アクティブウィンドウの変更※1※3		アクティブウィンドウの切り替え時のイベント
マシンの起動 / 停止		PC の起動または停止時のイベント
ログオン / ログオフ※4		ログオンまたはログオフ時のイベント
Web アクセス※3		Microsoft Internet Explorer での Web ページのダウンロード終了時のイベント
ソフトウェアの起動抑止		ソフトウェアの起動抑止時のイベント
印刷操作※3※5		ソフトウェアからの印刷実行時のイベント
印刷抑止※3		ソフトウェアからの印刷抑止時のイベント
外部メディア操作	外部メディア	外部メディアの接続および切断時のイベント（バージョンが 08-50 から 09-10 までクライアントから取得できる）
デバイス操作		各種デバイスの接続および切断時のイベント（バージョンが 09-12 以降のクライアントから取得できる）
USB 接続メディアの接続許可		USB 接続メディアの接続許可時のイベント（バージョンが 08-50 から 09-10 までクライアントから取得できる）
USB 接続メディアの接続抑止		USB 接続メディアの接続抑止時のイベント（バージョンが 08-50 から 09-10 までクライアントから取得できる）
デバイスの接続許可		各種デバイスの接続許可時のイベント（バージョンが 09-12 以降のクライアントから取得できる）
デバイスの接続抑止		各種デバイスの接続抑止時のイベント（バージョンが 09-12 以降のクライアントから取得できる）
ファイル操作※3	ファイル	Windows のエクスプローラ上でのファイル操作のイベント

注※1

クライアントの OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、ユーザ権限が昇格されたプロセスのキャプションおよびアクティブウィンドウの変更イベントを取得できません。

注※2

Java や Visual Basic で作成されたソフトウェアは、キャプションの変更イベントを取得できない場合があります。

注※3

ログオン時のタイミングによって、ログオンユーザ名が「SYSTEM」になる場合があります。

注※4

クライアントの OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、ログオフの操作履歴を取得するためには、「Terminal Services」サービスを停止しないでください。

注※5

仮想プリンタの場合、印刷抑止ログが出力されていても、印刷を抑止できていないことがあります。

次から、取得する情報の詳細について説明します。

(1) ソフトウェアの操作履歴および抑止履歴として取得する情報

ソフトウェアの操作履歴および抑止履歴として取得する情報について説明します。

(a) ソフトウェアの操作履歴として取得する情報

ソフトウェアの操作履歴は、発生したイベントによって取得する情報が異なります。取得する情報を次の表に示します。なお、取得する情報の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.5.3 操作履歴として表示される項目」を参照してください。

表 2-27 ソフトウェアの操作履歴として取得する情報

イベント	日時	種別	ログオンユーザ	ウィンドウタイトル	プログラム名	ファイルバージョン	アカウント
プロセスの起動	○	○	○	×	○	○	○
プロセスの停止	○	○	○	×	○	○	○
キャプションの変更	○	○	○	○	○	○	○
アクティブウィンドウの変更	○	○	○	○	○	○	○
マシンの起動 / 停止	○	○	×	×	×	×	×
ログオン / ログオフ	○	○	○	×	×	×	×

(凡例) ○：取得する ×：取得しない

(b) ソフトウェアの起動抑止履歴として取得する情報

ソフトウェアの起動抑止履歴として取得する情報を次に示します。なお、取得する情報の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.5.1 ソフトウェア起動抑止の抑止履歴の参照」を参照してください。

- 日時
- プログラム名
- ファイルバージョン
- ファイルの言語
- ソフトウェア名称
- 製品のバージョン
- アカウント
- ログオンユーザ

(2) Web アクセスの履歴として取得する情報

Web アクセスの履歴として取得する情報を次に示します。

- **実行日時**
Web アクセスを実行した日時です。
- **種別**
「Web アクセス」です。
- **タイトル**
アクセス先の Web ページのタイトルです。
- **URL**
アクセス先の Web ページの URL です。
- **ログオンユーザ**

Windows へのログオンユーザです。

Web アクセスの履歴を取得する場合の注意事項

- Web アクセスの履歴は、データが大量になるおそれがあります。そのため、頻繁に業務で使用する Web ページの履歴が取得されないように、フィルタリング条件を設定してください。
- Web ページ上の画像の情報は取得できません。
- インラインフレームからの Web アクセスの場合、アクセス先の情報が取得できない場合があります。
- 1 秒以内に複数回の Web アクセスが実行された場合、Web アクセスの履歴が取得できないことがあります。
- Microsoft Internet Explorer が複数同時に起動した場合、Web アクセスの履歴が取得できないことがあります。
- Windows へのログオン直後、または稼働監視ポリシーの適用直後に Microsoft Internet Explorer を起動した場合、Web アクセスの履歴が取得できないことがあります。
- フレーム分割されている Web ページまたはファイルにアクセスした場合、フレームの数（ページを構成するために生じた Web アクセス数）だけ履歴が取得されます。この場合の履歴のタイトルおよび URL は、メインウィンドウのタイトルおよび URL となります。
- ファイルやフォルダを Microsoft Internet Explorer で開いた場合も、Web アクセスの履歴が取得されます。
- Web アクセスで、通信エラー、アクセスした URL が存在しないなどの要因で接続エラーとなった場合でも、Web アクセスの履歴が取得されることがあります。

(3) 印刷操作および印刷抑止の履歴として取得する情報

印刷操作および印刷抑止の履歴は、発生したイベントによって取得する情報が異なります。印刷操作および印刷抑止の履歴として取得する情報を次の表に示します。

表 2-28 印刷操作および印刷抑止の履歴として取得する情報

イベント	実行日時	種別	ドキュメント名	ログオンユーザ	使用プリンタ名	結果
印刷	○	○	○	○	○	×
印刷抑止	○	○	○	○	○	×
印刷抑止解除	○	○	×	○	×	○

(凡例) ○：取得する ×：取得しない

● 実行日時

印刷、印刷の抑止、または印刷抑止の解除の実行日時です。

● 種別

「印刷」、「印刷抑止」または「印刷抑止解除」です。

● ドキュメント名

印刷、または印刷抑止の対象ドキュメントの名称です。

● ログオンユーザ

Windows へのログオンユーザです。

仮想化環境の場合は、イベントやログオンユーザ数によって異なります。

● 「印刷」および「印刷抑止」イベントの場合

ログオンユーザ数が 1 ユーザの場合は、印刷したユーザのユーザ名を取得します。

2 ユーザ以上の場合でローカルプリンタを使用したときは、印刷したユーザのユーザ名を取得します。

また、ログオンユーザとは別のユーザアカウントでソフトウェアを起動して印刷を実行すると、印刷を実行したユーザのユーザ名を取得します。

ネットワークプリンタを使用したときは、「[Network Printer]」となります。

- 「印刷抑止解除」イベントの場合

印刷抑止を解除したユーザを取得します。

- **使用プリンタ名**

印刷操作で使用したプリンタの名称です。この名称は、印刷を実行する PC で設定したプリンタの名称です。そのため、ユーザが変更している場合、プリンタの製品名とは異なる場合があります。

- **結果**

「成功」または「失敗」です。

なお、印刷抑止の履歴は、印刷操作が抑止された場合に取得されます。印刷操作を抑止できるプリンタ種別については、「2.5.4(2) 印刷を抑止できるプリンタ種別」を参照してください。印刷操作の履歴が取得できるプリンタ種別を次の表に示します。

表 2-29 印刷操作の履歴が取得できるプリンタ種別

プリンタ種別	使用するポート	印刷操作の履歴の取得
ローカルプリンタ	LPT ポート	○
	ローカルポート	○
	USB ポート	○
	File ポート	○
	TCP/IP ポート	○
	LAN Manager ポート	×
ネットワーク共有プリンタ、またはほかの PC に接続されているプリンタ	—	○
インターネットプリンタ	—	×
仮想プリンタ	—	○

(凡例)

- ：使用できる
- ×：使用できない
- ：該当しない

ネットワーク共有プリンタの場合の前提条件

- Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在する場合
 - 稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定が必要です。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
 - 印刷操作の履歴を取得する場合、クライアント PC で WMI が起動している必要があります。
 - ネットワーク共有プリンタのプリンタ名を半角文字で設定する場合、199 文字以下で設定する必要があります。全角文字を含む場合は、200 文字以上でも設定できます。
- Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在しない場合

稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定を確認してください。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。

- 印刷操作の履歴を取得する場合、プリンタサーバおよびクライアント PC 間で RPC で通信します。RPC で通信できないとき、次に示す原因が考えられます。
 - プリンタサーバの OS が Windows 95, Windows 98, Windows Me である
 - プリンタサーバの OS が Windows 以外である
 - プリンタサーバが Ineternet Printing Protocol (IPP) サーバである
 - プリンタサーバとクライアント PC の間にファイアウォールまたはプロキシがある
 - クライアント PC が NAT の配下にある
 - プリンタサーバで、クライアント PC の名前を解決できない
 - クライアント PC の Windows ファイアウォールが有効で、かつ「ファイルとプリンタの共有」が「例外」に設定されていない

印刷操作および印刷抑止の履歴を取得する場合の注意事項

- 次の場合、印刷は実行されませんが、印刷操作および印刷抑止の履歴が取得されることがあります。
 - Windows が印刷ジョブとして認識していない場合
 - プリンタのインストール過程でテスト印刷する場合
 - ソフトウェアの稼働状況の監視機能が起動する前に印刷が実行された場合
 - 印刷を実行した直後に印刷をキャンセルした場合
- 印刷ジョブがネットワーク共有プリンタのプリントキューに存在している場合
印刷操作を抑止する稼働監視ポリシーを適用すると、その印刷ジョブは抑止され、印刷操作の抑止履歴が取得されることがあります。
- 印刷操作が配布管理システムに通知される前に印刷ジョブが完了した場合
印刷操作の履歴は取得できません。
- 印刷操作が配布管理システムに通知される前に印刷ジョブをキャンセルした場合
印刷操作の履歴は取得できません。
- Windows のフォルダオプションで、「登録されている拡張子は表示しない」が有効の場合
ドキュメント名に拡張子は表示されません。これは、Windows で印刷キューが表示されるウィンドウの表示内容と同じです。
- 一つの印刷操作が複数の印刷ジョブとして処理される場合
複数の印刷操作の履歴が取得されます。
- 特定のアプリケーションで印刷した場合
文書名ではなくアプリケーション名が表示されることがあります。これは、Windows で印刷キューが表示されるウィンドウの表示内容と同じです。
- ネットワーク共有プリンタを使用している環境で、プリンタサーバで印刷を抑止している場合
クライアント PC で印刷抑止を解除しても印刷できませんが、クライアント PC で印刷操作の履歴が取得されます。
- ネットワーク共有プリンタを使用していて、Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在する場合
 - 稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定が必要です。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
 - 印刷ジョブがネットワーク共有プリンタの印刷キューに存在している場合、稼働監視ポリシーを適用すると、印刷ジョブが通知され、印刷操作の履歴が取得されることがあります。
- Windows Vista 以降の OS のクライアント、または「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共

有」をインストールしていないクライアントが存在しない場合

- ・稼働監視ポリシーを作成する際に、印刷操作のログ取得および抑止の設定を確認してください。印刷操作のログ取得および抑止の設定の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.9 印刷操作のログ取得および抑止の設定」を参照してください。
- 仮想化環境にログオンしている複数のユーザが、同一ファイル名のファイルを同一プリンタから同時に印刷した場合
印刷操作の履歴が一つしか取得されないことがあります。
- 仮想化環境にログオンしているユーザが印刷操作した場合
操作のタイミングによっては、同じ履歴が複数取得されることがあります。

(4) 外部メディア操作の履歴として取得する情報

外部メディア操作の履歴として取得する情報を次に示します。

- ・ **操作日時**
外部メディアを接続または切断した日時です。
- ・ **種別**
「接続」または「切断」です。
- ・ **ログオンユーザ**
Windows へのログオンユーザです。
仮想化環境の場合は、コンソールセッションでログオンしているユーザの有無によって異なります。
 - ・ コンソールセッションでログオンしているユーザが存在する場合
コンソールセッションでログオンしているユーザです。
 - ・ コンソールセッションでログオンしているユーザが存在しない場合
ログオンユーザは取得されません。
- ・ **外部メディア種別**
外部メディアの種別（「Local disk」、「Removable」、「CDROM」または「その他（取得失敗）」）です。
- ・ **外部メディア ドライブ名**
外部メディアを接続または切断したドライブ名です。

外部メディア操作の履歴を取得する場合の注意事項

- クライアント PC の OS が Windows 7、Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、USB 接続の CD/DVD ドライブの操作および内蔵 CD/DVD ドライブの操作の履歴は取得できません。
- Windows の設定で、CD/DVD の自動再生機能が無効に設定されている場合、USB 接続の CD/DVD ドライブの操作および内蔵 CD/DVD ドライブの操作の履歴が取得できません。
- 外部メディアをクライアント PC から取り外したときに、該当するドライブが存在しない状態になるため、外部メディア種別に「その他（取得失敗）」と出力されることがあります。
- 外部メディア操作の履歴は、Windows から通知される情報を基に操作ログが出力されます。そのため、次のような通知情報が Windows から通知された場合、通知された情報が外部メディア操作の履歴として出力されます。
 - ・ シリアルナンバーがサポートされている USB 接続メディアをクライアント PC に接続した場合、前回接続時のドライブ名（ドライブレター）が USB 接続メディアに割り当てられます。この場合、ドライブ名の重複によって接続が失敗すると、前回接続時のドライブ名でログ情報が通知されます。
 - ・ マルチスロットのメモリーカードなど、接続することによって複数のドライブが割り当てられる機器を接続した場合は、ドライブごとに複数の接続ログ情報が Windows から通知されます。しかし、同じ機器を切断（取り外し）した場合には、1 ドライブの切断ログ情報だけが Windows から通知されることがあります。

- 接続する外部メディアがクライアント PC に初めて接続されるメディアの場合、1 回の接続で、複数の接続および切断（取り外し）のログ情報が Windows から通知されることがあります。
 - クライアント PC の OS が Windows Me の場合、USB 接続 CD/DVD ドライブを切断（取り外し）した場合は、Windows から複数の切断ログ情報が通知されることがあります。
 - クライアント PC の OS が Windows XP の場合、CD/DVD がセットされた状態で USB 接続の CD/DVD ドライブを接続すると、Windows から複数の履歴が通知されることがあります。
 - クライアント PC の OS が Windows NT 4.0 の場合は、外部メディア操作の履歴取得の対象外ですが、CD/DVD ドライブの操作の履歴が通知されることがあります。
- USB 接続メディアの操作を抑止した場合、操作履歴を取得する設定にしているにもかかわらず、USB 接続メディア内のファイルの操作については履歴が取得されないことがあります。

(5) USB 接続メディアの接続許可履歴および接続抑止履歴として取得される情報

USB 接続メディアの接続許可および接続抑止の履歴は、発生したイベントによって取得する情報が異なります。取得する情報を次の表に示します。

表 2-30 USB 接続メディアの接続許可および接続抑止の履歴として取得する情報

イベント	種別	操作日時	接続名	デバイスインスタンス ID-DD	デバイスインスタンス ID-USB	許可条件	ログオンユーザ
USB 接続メディアの接続許可	○	○	○	○	○	○	○
USB 接続メディアの接続抑止	○	○	○	○	○	×	○

(凡例) ○：取得する ×：取得しない

- **種別**

「接続許可」または「接続抑止」です。

- **操作日時**

接続を許可した USB 接続メディア、または接続を抑止した USB 接続メディアを操作した日時が、次に示す形式で取得されます。

YYYYMMDDhhmmss

- **接続名**

USB 接続メディアの接続名です。

- **デバイスインスタンス ID-DD**

USB 接続メディアのディスクドライブでのデバイスインスタンス ID です。このデバイスインスタンス ID は、デバイスマネージャのディスクドライブの配下に存在します。

- **デバイスインスタンス ID-USB**

USB 接続メディアの USB コントローラでのデバイスインスタンス ID です。このデバイスインスタンス ID は、デバイスマネージャの USB コントローラの配下に存在します。

- **許可条件**

稼働監視ポリシーに設定した USB 接続メディアの許可条件が、次に示す形式で取得されます。

許可条件：種別_一致条件_条件文字列

取得される各項目について説明します。

- 「種別」として取得される情報を次の表に示します。

表 2-31 「種別」として取得される情報

種別	説明
DevID-DD	ディスクドライブのデバイスインスタンス ID
DevID-USB	USB コントローラのデバイスインスタンス ID
FriendlyName	接続名

- 「一致条件」として取得される情報を次の表に示します。

表 2-32 「一致条件」として取得される情報

一致条件	説明
Full	完全一致
Pre	前方一致
Post	後方一致
Middle	中間一致
PreAndPost	前方一致かつ後方一致

- 「条件文字列」は、稼働監視ポリシーに設定した条件の文字列です。

ディスクドライブでのデバイスインスタンス ID が条件文字列「ABC」と前方一致する場合の取得例を次に示します。

許可条件：DevID-DD_Pre_ABC

• ログオンユーザ

対象の USB 接続メディアを操作したユーザのログオンユーザ名です。ただし、仮想化環境で、コンソールセッションでログオンしていない場合、ログオンユーザ名は取得されません。仮想化環境の場合は、ログオン先によって取得するログオンユーザが異なります。

- コンソールセッションでログオンしている場合
コンソールセッションのユーザ名です。
- コンソールセッションでログオンしていない場合
ログオンユーザ名は取得されません。

USB 接続メディアの接続許可および接続抑止の履歴を取得する場合の注意事項

次に示す場合、USB 接続メディアの接続許可や接続抑止の履歴が取得できないことがあります。

- 「種別」および「操作日時」が取得できなかった場合
USB 接続メディアの接続許可および接続抑止の履歴は取得されません。
- 「接続名」、「デバイスインスタンス ID-DD」、「デバイスインスタンス ID-USB」、または「許可条件」のうち、一つも取得できなかった場合
USB 接続メディアの接続許可の履歴は取得されません。
- 「接続名」、「デバイスインスタンス ID-DD」、または「デバイスインスタンス ID-USB」のうち、一つも取得できなかった場合
USB 接続メディアの接続抑止の履歴は取得されません。

(6) デバイスの接続、切断、接続許可、および接続抑止の履歴として取得する情報

各種デバイスの接続、切断、接続許可、および接続抑止の履歴は、発生したイベントによって取得する情報が異なります。取得する情報を次の表に示します。

表 2-33 デバイスの接続、切断、接続許可、および接続抑止の履歴として取得する情報

取得項目	デバイスの接続	デバイスの切断	デバイスの接続許可	デバイスの接続抑止
種別	○	○	○	○
実行日時	○	○	○	○
デバイス種別	○	○	○	○
ドライブ種別	○	○	○	×
ドライブレター	○	○	○	×
接続名	○	○	○	○
種別のデバイスインスタンス ID	○	○	○	○
コントローラのデバイスインスタンス ID	○	○	○	○
許可条件	×	×	○	×
ユーザ名	○	○	○	○

(凡例) ○：取得する ×：取得しない

- **種別**

「接続」、「切断」、「接続許可」、「接続抑止」です。

- **実行日時**

デバイスを接続、切断、接続許可、または接続抑止した日時です。

- **デバイス種別**

デバイス種別として取得される情報を次の表に示します。

表 2-34 「デバイス種別」として取得される情報

デバイス種別	説明
USB ストレージデバイス	USB 接続のストレージデバイス
内蔵 CD/DVD	内蔵 CD/DVD ドライブ
内蔵 FD	内蔵 FD ドライブ
IEEE1394	IEEE1394 接続デバイス
内蔵 SD カード	内蔵 SD カードドライブ
Bluetooth	内蔵または USB 接続 Bluetooth デバイス
イメージングデバイス	内蔵または USB 接続イメージングデバイス
不明	デバイスの種別が不明

- **ドライブ種別**

デバイスのドライブ種別（「Local disk」、「Removable」、「CDROM」または「その他」）です。

- **ドライブレター**

デバイスのドライブ名です。

- **接続名**

デバイスの接続名です。

- **種別のデバイスインスタンス ID**

デバイスの種別（ディスクドライブや DVD/CD-ROM ドライブなど）配下のデバイスインスタンス ID です。

- **コントローラのデバイスインスタンス ID**

デバイスコントローラ配下のデバイスインスタンス ID です。

- **許可条件**

稼働監視ポリシーに設定したデバイスの許可条件が、次に示す形式で取得されます。

許可条件：条件種別_一致条件_条件文字列

取得される各項目について説明します。

- 「条件種別」として取得される情報を次の表に示します。

表 2-35 「条件種別」として取得される情報

条件種別	説明
DevID-Class	各種デバイスインスタンス ID
DevID-Ctrl	コントローラのデバイスインスタンス ID
FriendlyName	接続名

- 「一致条件」として取得される情報を次の表に示します。

表 2-36 「一致条件」として取得される情報

一致条件	説明
Full	完全一致
Pre	前方一致
Post	後方一致
Middle	中間一致
PreAndPost	前方一致かつ後方一致

注 「条件種別」が「FriendlyName」の場合は「Full」が取得されます。

- 「条件文字列」は、稼働監視ポリシーに設定した条件の文字列です。

ディスクドライブでのデバイスインスタンス ID が条件文字列「ABC」と前方一致する場合の取得例を次に示します。

許可条件：DevID-Class_Pre_ABC

- **ユーザ名**

Windows へのログオンユーザです。

仮想化環境の場合は、コンソールセッションに接続しているかどうかで取得するユーザ名が異なります。

- コンソールセッションに接続している場合
コンソールセッションのユーザ名です。
- コンソールセッションに接続していない場合
ユーザ名は取得されません。

デバイス操作の履歴を取得する場合の注意事項

- 「デバイス種別」が「内蔵 CD/DVD」、「内蔵 FD」、「IEEE1394」、および「内蔵 SD」の場合、デバイスの接続許可の履歴は取得されません。
- 「種別」および「実行日時」が取得できなかった場合、デバイスの接続許可、接続抑止、接続、および切断の履歴は取得されません。
- 「接続名」、「種別のデバイスインスタンス ID」、「コントローラのデバイスインスタンス ID」、または「許可条件」のうち、一つも取得できなかった場合、デバイスの接続許可の履歴は取得されません。
- 「接続名」、「種別のデバイスインスタンス ID」、または「コントローラのデバイスインスタンス ID」のうち、一つも取得できなかった場合、デバイスの接続抑止の履歴は取得されません。

- 切断の履歴は、タイミングによって次に示す項目が取得できないことがあります。
 - 「デバイス種別」
 - 「ドライブ種別」
 - 「ドライブレター」
 - 「接続名」
 - 「種別のデバイスインスタンス ID」
 - 「コントローラのデバイスインスタンス ID」
- 切断およびデバイスが抑止されている状態で取得した接続の履歴は、デバイスが切断されているため履歴情報が取得できないことがあります。その場合、「ドライブ種別」は「その他」になります。
- クライアント PC の起動直後など、稼働監視が開始される前に接続されたデバイスの履歴（デバイスの接続、デバイスの切断）は取得されません。
また、稼働監視開始後の監視履歴は正常に取得されます。
- 「デバイス種別」が「内蔵 FD」の場合、「ドライブ種別」は「その他」になります。また、「ドライブレター」は取得されません。
- 内蔵 CD/DVD ドライブまたは USB 接続の CD/DVD ドライブで次の操作をした場合は、接続または切断の履歴が取得されないことがあります。
 - CD または DVD メディアの挿入
 - CD または DVD メディアの取り出し
- クライアント PC の OS が Windows Vista, Windows Server 2008, Windows 7, Windows Server 2012, および Windows 8 の場合、内蔵 CD/DVD ドライブおよび USB 接続の CD/DVD ドライブの操作履歴は取得できません。
- FD や SD カードを挿入した場合は、接続または切断の履歴は取得されません。
- 複数のデバイスインスタンス ID が設定されたデバイスが接続された場合、一つのデバイスに対して複数の操作履歴が取得されます。ただし、切断の履歴は一つだけ取得されます。
- クライアント PC に、初めてデバイスが接続された場合、デバイスドライバがインストールされることがあります。このとき、複数の操作履歴が取得されることがあります。
- 操作を抑止する稼働監視ポリシーを有効にするためにクライアント PC を再起動する必要がある場合でも、稼働監視ポリシーを設定した時点で接続抑止の履歴が取得されます。
- JP1/NETM/DM 以外の製品によってデバイスの設定が変更されて、デバイスの接続や切断が検知された場合でも、デバイスの操作履歴が取得されます。
- USB 接続の場合でも、USB ストレージデバイス、Bluetooth デバイス、またはイメージングデバイスとして認識されないデバイスの操作履歴は取得できません。
- CD または DVD が挿入された状態の CD/DVD ドライブをクライアント PC に接続した場合、接続の履歴が複数取得されることがあります。
- 操作を抑止する稼働監視ポリシーを有効にするためにクライアント PC を再起動した場合、デバイスの切断の履歴が取得されないことがあります。
- すでに接続されているデバイスに対して操作を抑止する稼働監視ポリシーを設定した場合、それとは別のデバイスをクライアント PC に接続ときに、抑止対象のデバイスの操作履歴が取得されることがあります。

(7) ファイルの操作履歴として取得する情報

「ファイル操作」のイベントは、ファイルまたはフォルダに対して次に示す操作を実行したときに発生しま

す。なお、取得する情報の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.5.3 操作履歴として表示される項目」を参照してください。

- コピー
- 移動
- 名前の変更
- 削除
- 作成
- ファイルを開く

これらの操作は、それぞれで操作履歴として取得する情報が異なります。取得する情報を次の表に示します。

表 2-37 ファイルの操作履歴として取得する情報

操作	日時	種別	ログオンユーザ	ドライブ種別	ファイル名	変更後ドライブ種別	変更後ファイル名	プログラム名	アカウント
コピー	○	○	○	○	○	○	○	○	○
移動	○	○	○	○	○	○	○	○	○
名前の変更	○	○	○	○	○	×	○	○	○
削除	○	○	○	○	○	×	×	○	○
作成	○	○	○	○	○	×	×	○	○
ファイルを開く※	○	○	○	○	○	×	×	○	○

(凡例) ○：取得する ×：取得しない

注※ クライアント PC の OS が次に示すどれかの場合、「ファイルを開く」の操作履歴は取得できません。

- Windows 8
- Windows Server 2012
- Windows 7
- Windows Server 2008
- Windows Vista

(a) ファイルの操作履歴を取得する場合の注意事項

ファイルの操作履歴を取得するときは、次の点に注意してください。

- フォルダをコピー、移動、または削除した場合、そのフォルダ以下のすべてのファイルおよびサブフォルダについても履歴が取得されます。
また、フォルダ名を変更した場合は、そのフォルダ以下のファイルおよびフォルダのパスが変更されますが、履歴は取得されません。
- ファイルまたはフォルダの操作後に [元に戻す] メニューまたは [Ctrl] + [Z] キーで Undo 操作を行った場合は、次に示す操作履歴が取得されます。

Undo 前の操作	Undo 操作時に取得される操作履歴
コピー	コピーしたファイルまたはフォルダの削除
移動	移動したファイルまたはフォルダの、元の位置への移動
名前の変更	元のファイル名またはフォルダ名への名前の変更
削除	削除したファイルまたはフォルダの、元の位置への移動

- コピー操作時に、上書きを確認するダイアログでコピーをキャンセルした場合、コピー元のファイルの更新日付とコピー先フォルダにある同名のファイルの更新日付が同じときは、コピーとして履歴が取得されます。
- 同じファイルまたはフォルダを連続してコピーすると、コピー操作ではなく作成操作として履歴が取得されることがあります。
- Windows の「ごみ箱」への移動操作は、ファイルまたはフォルダの移動ではなく、ファイルまたはフォルダの削除として履歴が取得されます。
- Windows の「ごみ箱」からファイルまたはフォルダを削除した場合、取得されるファイル名またはフォルダ名が、削除前の名称と異なることがあります。
- ファイルを複数選択して削除した場合、ファイルの削除の履歴が取得できないことがあります。
- 「圧縮（zip 形式）フォルダ」に対しての操作履歴の取得には対応していません。ただし、一部の操作の履歴が取得されることがあります。
- ファイル移動時に移動先のファイルを上書きした場合、またはファイル移動の Undo 操作をした場合に、ファイル移動の履歴に加えて、移動元のファイルを削除した履歴が余分に取得されることがあります。
- 多数のファイルまたはフォルダを上書きコピーまたは移動した場合、履歴が取得されないことがあります。
- USB 接続メディア操作の抑止を設定した稼働監視ポリシーを適用している場合、USB 接続メディア内のファイルの操作については履歴が取得されないことがあります。
- 稼働監視を開始した直後は、一部のファイル操作が取得できない、または出力が不正となる場合があります。この場合、クライアントで再起動またはログオフを実施してください。稼働監視を開始する操作については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6. ソフトウェアの稼働状況を監視する」を参照してください。
- 仮想化環境でファイル进行操作しているユーザが複数存在する場合、あるユーザがファイル进行操作すると、そのファイルをエクスプローラーで表示しているすべてのユーザについても同じファイルに同じ操作をしたとみなされて、履歴が取得されることがあります。

(b) OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista のクライアントからファイルの操作履歴を取得する場合の注意事項

OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista のクライアントからファイルの操作履歴を取得する場合、(a) で説明した注意事項に加えて、次の注意事項があります。

- OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista のクライアントでは、アプリケーションやコマンドプロンプトからファイルまたはフォルダが操作された場合、一部の操作が履歴として取得されることがあります。
- ファイルのシャドウコピーおよびバックアップからの復元に対しての操作履歴の取得には対応していません。ただし、一部の操作の履歴が取得されることがあります。
- OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista のクライアントから取得したファイルの操作履歴を、リモートインストールマネージャまたは「Asset Information Manager Limited」から参照する場合、バージョンが 08-11 以降の JP1/NETM/DM Manager を使用してください。08-10 以前の JP1/NETM/DM Manager では、履歴が正しく表示されないことがあります。
- ファイル操作履歴の取得機能を使用している場合に、smcusapp.exe のメモリ使用量が増加した状態が

続くことがあります。動作には影響ありません。

また、履歴を取得できる操作ごとの注意事項を次に示します。

- Windows 8 のファイル履歴機能で復元を実行した場合、復元されたファイル・フォルダに対するファイル操作履歴が取得される場合があります。

「コピー」の操作履歴を取得する場合の注意事項

- コピー操作によってファイルが上書きされる場合、[ファイルの上書き確認] ダイアログボックスで「コピーするが両方のファイルを保持する」を選択したときは、次の点に注意してください。
 - ・ コピー後のファイル名が「コピー前のファイル名(n)」(nは任意の数字)となる履歴が取得されます。
 - ・ コピー操作後に、コピー元のファイルを削除すると、ファイルの移動の履歴が余分に出力されることがあります。
 - ・ コピー元のファイルの更新日時と、上書きされるファイルの更新日時が同じ場合は、コピー前とコピー後のファイル名が同じとなるコピーの履歴が余分に出力されます。
- 1回のコピー操作で、フォルダの上書きを確認するダイアログが複数回表示される場合、フォルダおよびファイルのコピーの履歴が余分に取得されることがあります。
- 名前に「0」が含まれるファイルまたはフォルダをコピーした場合、正しく履歴が取得できないことがあります。
- 名前に「(n)」(nは任意の数字)が含まれるファイルまたはフォルダを複数選択して上書きコピーした場合、[ファイルの上書き確認] ダイアログボックスで「コピーするが両方のファイルを保持する」を選択すると、正しく履歴が取得できないことがあります。
- 名前に「(n)」(nは任意の数字)が含まれるファイルまたはフォルダを連続してコピーした場合、2回目以降のコピー操作はファイルまたはフォルダの作成として履歴が取得されます。
- Undo 操作後に[コピーのやり直し]メニューまたは[Ctrl] + [Y] キーで Redo 操作を行った場合、ファイルの操作の履歴は出力されません。フォルダに対する Redo 操作は、フォルダのコピーとして履歴が取得されます。
- 複数のファイルまたはフォルダ、または複数のファイルやフォルダが含まれるフォルダを選択してコピーした場合、履歴が取得できないことがあります。

「移動」の操作履歴を取得する場合の注意事項

- 移動操作によってファイルが上書きされる場合、[ファイルの移動] ダイアログボックスで「移動するが両方のファイルを保持する」を選択したときは、移動後のファイル名が「移動前のファイル名(n)」(nは任意の数字)となる履歴が取得されます。また、移動前と移動後のファイル名が同じとなる移動の履歴が余分に出力されます。
- 名前に「(n)」(nは任意の数字)が含まれるファイルまたはフォルダを複数選択して移動した場合、[ファイルの上書き確認] ダイアログボックスで「移動するが両方のファイルを保持する」を選択すると、正しく履歴が取得できないことがあります。
- 移動操作によってフォルダが上書きされる場合、[フォルダの上書きの確認] ダイアログボックスで「はい」ボタンをクリックしてフォルダを統合するときは、次の点に注意してください。
 - ・ 移動元と移動先のフォルダに同名のファイルがある場合、フォルダの統合時にはファイルだけが移動し、移動元のフォルダは削除されません。このとき、移動元のフォルダはコピーの履歴が取得されます。
 - ・ ファイルの上書き確認時に「移動して置換」を選択した場合、移動元のファイルの更新日時と、上書きされるファイルの更新日時が同じときは、ファイルの移動の履歴ではなく、ファイルのコピーおよび削除として履歴が取得されます。

- ファイルの上書き確認時に「移動するが両方のファイルを保持する」を選択した場合、移動後のファイル名が「*移動前のファイル名(n)*」(*n*は任意の数字)となる履歴が取得されます。移動前のファイルと上書きされるファイルの更新日時が同じ場合は、ファイルの移動の履歴に加えて、ファイルのコピーおよび削除の履歴も余分に取得されます。また、移動前のファイルと上書きされるファイルの更新日時が異なる場合は、移動前と移動後のファイル名が同じとなる移動の履歴が余分に出力されます。
- 1回の移動操作で、フォルダの上書きを確認するダイアログが複数回表示される場合、フォルダおよびファイルの移動の履歴が余分に取得されることがあります。
- 名前に「0」が含まれるファイルを移動した場合、正しく履歴が取得できないことがあります。
- ファイルの移動後に Undo 操作を行った場合、ファイルの元の位置への移動および削除の履歴として取得されます。フォルダの移動に対して Undo 操作を行った場合は、フォルダの移動の履歴だけが取得されます。ファイルまたはフォルダを移動時に上書きした場合、そのあとに Undo 操作を行ったときは、上書きされたファイルの削除の履歴だけが出力されます。また、Undo 操作後に「移動のやり直し」メニューまたは [Ctrl] + [Y] キーで Redo 操作を行った場合は、ファイルの削除として履歴が取得されます。フォルダに対する Redo 操作は、フォルダの移動として履歴が取得されます。
- Windows の「ごみ箱」への移動操作後に Undo 操作を行った場合、「ごみ箱」からのファイル削除と復元先へのファイル作成の履歴が取得されます。このとき、「ごみ箱」からのファイル削除の履歴では、ファイル名が正しく取得されません。
- 複数のファイルまたはフォルダ、または複数のファイルやフォルダが含まれるフォルダを選択して移動した場合、履歴が取得できないことがあります。

「名前の変更」の操作履歴を取得する場合の注意事項

- 名前の変更操作によってフォルダが上書きされる場合、[フォルダの上書きの確認] ダイアログボックスで「はい」ボタンをクリックしてフォルダを統合するときは、次の点に注意してください。
 - 名前の変更前のフォルダに幾つかのファイルが含まれる場合、統合先のフォルダへのファイル作成と、名前の変更前のファイルの削除の履歴が出力されます。ただし、名前の変更前のフォルダの削除の履歴は取得されません。なお、名前の変更前のフォルダにファイルが含まれない場合、名前の変更後のフォルダのサブフォルダの作成の履歴だけが出力されます。
 - 名前の変更前のフォルダと統合先のフォルダに、同名のサブフォルダが存在する場合、サブフォルダの作成の履歴が取得されます。このとき、名前の変更前のフォルダの削除については、履歴が取得されません。
 - 名前の変更前のフォルダに複数のファイルまたはサブフォルダが含まれる場合、一部の履歴が取得できないことがあります。
 - 名前の変更前のフォルダの、サブフォルダ内に存在するファイルの履歴が取得できないことがあります。
- 複数のファイルまたはフォルダ、または複数のファイルやフォルダが含まれるフォルダを選択して、一括して名前を変更した場合、履歴が取得できないことがあります。

「削除」の操作履歴を取得する場合の注意事項

- ファイルの削除後に、Undo 操作、[元に戻す] メニューを選択した場合には、削除したファイルの元の位置へのファイル作成の履歴と Windows の「ごみ箱」からのファイル削除の履歴が取得されます。ただし、Windows の「ごみ箱」からのファイル削除の履歴では、ファイル名が正しく取得されません。
- ファイルの削除後に Windows の「ごみ箱」からファイルを移動したときは、削除したファイルの元の位置への移動として履歴が取得されます。
- 複数のファイルまたはフォルダ、または複数のファイルやフォルダが含まれるフォルダを選択して削除

した場合、そのあとに Undo 操作、[元に戻す] メニューを選択、または Windows の「ごみ箱」からフォルダを移動したときは、履歴が取得できないことがあります。

- ファイルのコピーまたは移動後に、一定時間以内にそのファイルを削除し、その後 Undo 操作を実行した場合、Windows の「ごみ箱」からの削除の履歴だけが取得されることがあります。

多数のファイルまたはフォルダの移動時に、ファイルの上書き確認で「移動して置換」、または「移動するが両方のファイルを保持する」を選択した場合、ファイルの移動の履歴ではなく、ファイルのコピーおよび削除、もしくはファイルのコピーとして履歴が取得されることがあります。

(8) 操作履歴格納ディレクトリの指定方法

取得するイベントの選択にも左右されますが、操作履歴はサイズが大きくなります。そのため、JP1/NETM/DM Manager のインストール時には、容量に余裕のあるドライブを、操作履歴を格納するディレクトリ（操作履歴格納ディレクトリ）に指定する必要があります。

また、操作履歴は、操作履歴格納ディレクトリに格納している操作履歴のサイズが指定した値を超えたら、ほかのディレクトリ（操作履歴退避ディレクトリ）に退避できます。

これらの、操作履歴格納ディレクトリおよび操作履歴退避ディレクトリには、ローカルドライブ（クラスタ環境での共有ディスクを含む）だけでなく Windows Powered NAS などのネットワークドライブを指定することもできます。アクセスする頻度の高い操作履歴格納ディレクトリには容量に余裕のあるローカルドライブを、アクセスする頻度の低い操作履歴退避ディレクトリには容量に余裕のあるネットワークドライブを指定することをお勧めします。

ただし、ネットワークドライブを指定する場合は、一つの認証情報でネットワークドライブに接続できる環境が必要です。次に示すすべての権限を持つ認証情報（ユーザ ID およびパスワード）を用意してください。

- JP1/NETM/DM サーバやドメイングループにログインでき、バックアップファイル格納先ディレクトリに対して読み書き権限がある。
- 操作履歴格納ディレクトリに対して読み書き権限がある。
- 操作履歴退避ディレクトリに対して読み書き権限がある。
- ネットワークドライブに対して読み書き権限がある。

また、ネットワークドライブについては、JP1/NETM/DM Manager がインストールされているマシンと同じドメインまたはワークグループのドライブを指定することをお勧めします。それ以外の場合では、認証に時間が掛かるおそれがあります。

2.5.9 ソフトウェアの稼働時間の取得

クライアントで実行されたソフトウェアの 1 日当たりの稼働時間を取得し、監視結果として配布管理システムに通知します。

稼働時間を取得すると、「Asset Information Manager Limited」の「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウから、ソフトウェアごとの稼働率を確認できます。これにより、使用頻度の低いソフトウェアを調査して撤去したり、ソフトウェアの利用を促したりするといった運用に利用できます。

稼働時間を取得したい場合は、取得対象となるソフトウェアを稼働監視ポリシーに設定する必要があります。

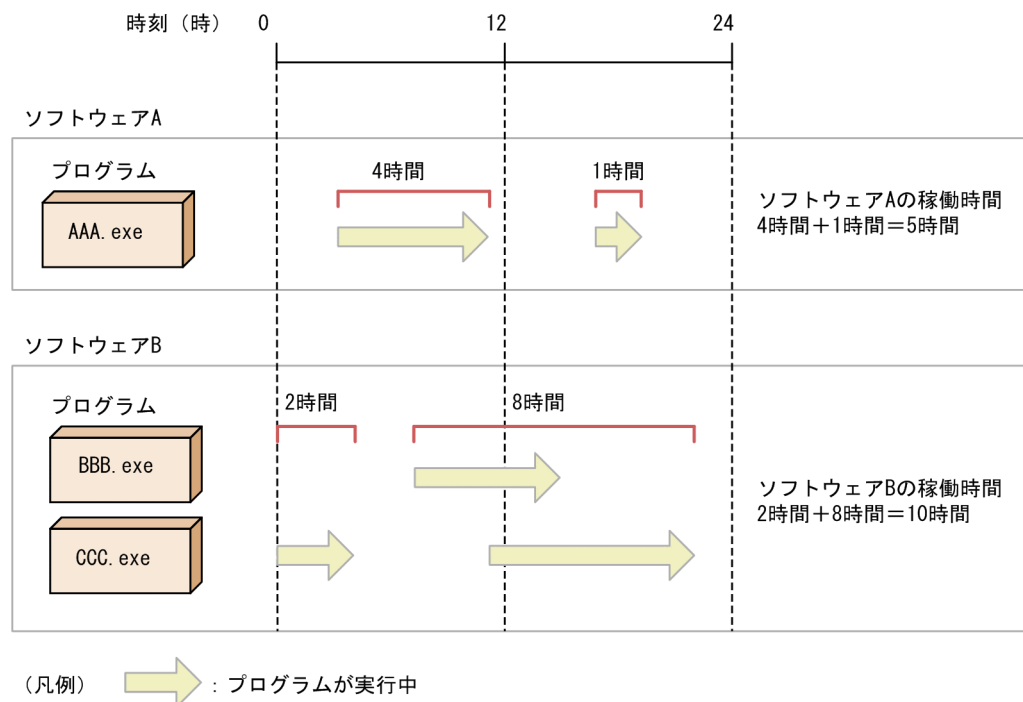
ソフトウェアの稼働時間を取得するためには、稼働時間が監視されるプログラムを指定します。稼働時間を取得するソフトウェアに指定できるのは、次に示す拡張子のアプリケーションです。

- exe

- com
- scr

一つのソフトウェアに対して、複数のプログラムを設定することもできます。複数のプログラムを設定した場合、どれか一つでもプログラムが実行されていればそのソフトウェアの稼働時間として取得されます。プログラムの実行時間と、取得されるソフトウェアの稼働時間の関係を次に示します。

図 2-26 プログラムの実行時間と取得されるソフトウェアの稼働時間の関係



ソフトウェアの稼働時間は、当日の0時00分から翌日の0時00分までが1日分の稼働時間として集計されます。また、翌日分は0時00分から集計が開始されます。0時00分の稼働時間は、当日と翌日の両方に含まれます。

日にちが変更されてもプログラムが継続して実行されている場合、0時00分までの稼働時間が当日分として取得され、0時00分から翌日分の稼働時間として取得されます。配布管理システムには、前日分の稼働時間が通知されます。

ソフトウェアの稼働時間を取得する場合の注意事項を次に示します。

- 稼働監視ポリシーでソフトウェアの起動抑止を設定している場合、起動抑止対象のソフトウェアの稼働時間は取得できません。
- 稼働時間は、システムの時刻を基に算出されます。そのため、稼働時間の取得開始後にシステムの時刻を変更した場合、稼働時間が正確に取得できないおそれがあります。稼働時間がマイナスになった場合、稼働時間は0時間として取得されます。
- コンピュータのトラブルなどにより稼働状況を監視するプロセスが停止してしまった場合など、プロセスがプログラムの終了時刻を取得できなかったときは、そのプログラムの稼働時間は取得できません。
- 仮想化環境の場合も、ソフトウェア単位で稼働時間が取得されます。仮想化環境にログオンしたユーザーごとには取得できません。
複数ユーザーが同時に同じソフトウェアを操作した場合に取得される稼働時間は、同一ユーザーが同じソフトウェアに設定している複数のプログラムを操作したときと同じです。

稼働時間を取得するソフトウェアを稼働監視ポリシーに設定するときの注意事項については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.2.7 稼働時間の取得の設定」を参照してください。

2.5.10 稼働情報の保存日数の目安

クライアント 1 台につき、1 ユーザが使用すると想定した場合、1 日当たりに発生する稼働情報は約 1,800 件です。ソフトウェアの稼働監視では、取得する稼働情報が大量になると、システムに負荷が掛かるおそれがあります。取得する稼働情報の項目を限定したり、情報を取得するクライアントの台数を調整したりして、システムに負荷を掛けないように運用することをお勧めします。

システムに負荷を掛けずに運用する目安として、次に示す計算式の範囲内で稼働監視機能を使用してください。

$$n \times 1,800 \times m \times x < 5,000,000$$

n : クライアントの台数

m : 操作履歴の保存日数

x : 取得する操作履歴の係数

取得する項目の合計値を指定します。

- プロセス起動 : 0.14
- プロセス停止 : 0.14
- キャプション変更 : 0.25
- アクティブウィンドウの変更 : 0.25
- ファイル操作 : 0.08
- Web アクセスログ : 0.14

なお、次に示す操作は取得する履歴の量が少ないため、計算は不要です。

- マシン起動 / 停止
- ログオン / ログオフ
- ソフトウェアの起動抑止
- 印刷操作
- 印刷抑止
- 印刷抑止解除
- 外部メディア操作
- デバイス操作
- USB 接続メディアの接続許可
- USB 接続メディアの接続抑止
- デバイスの接続許可
- デバイスの接続抑止

次に、すべての操作履歴項目を取得する場合の稼働情報の計算例を示します。

クライアントが 2,500 台の中規模システムで運用する場合の、稼働情報の保存日数の算出

$$2,500 \text{ 台} \times 1,800 \times m \times 1 < 5,000,000$$

$$m = \text{約 } 1 \text{ 日}$$

稼働情報の保存日数を五日間とする場合の、クライアント台数の算出

$$n \times 1,800 \times 5 \times 1 < 5,000,000$$

$$n = \text{約 } 500 \text{ 台}$$

この計算例の 5,000,000 件は、JP1/NETM/DM Manager のデータベースに格納できる情報量（ログ件数）が 5,000,000 件となるケースを想定しています。Web アクセスログの情報量（ログ件数）は、Web アクセスログのフィルタリング機能を使用することによって、1 日あたりに発生する Web アクセスログ件数が 200 件となるケースを想定しています。

2.5.11 大規模システムでの稼働状況の監視

中継マネージャを使用した大規模なシステムでクライアントの稼働状況を監視する場合、中継マネージャごとに配下のクライアントの稼働情報を管理する方法や、マネージャで複数の中継マネージャ配下のクライアントの稼働情報を管理する方法など、稼働情報の管理方法を詳細に設定できます。

大規模システムで稼働状況を監視する場合の、稼働情報の管理方法の例を次に示します。

● システム全体の稼働情報をマネージャで一元管理する

中継マネージャからクライアントに稼働監視ポリシーを適用した場合、下位システムから中継マネージャに通知された稼働情報は、デフォルトではマネージャには通知されません。部署ごとに中継マネージャを設置して、各中継マネージャから配下のクライアントに稼働監視ポリシーを適用しているような場合、各部署での稼働情報をマネージャでは管理できなくなってしまう。

システム全体の稼働状況をマネージャで一元管理したいときは、中継マネージャのセットアップで、通知された稼働情報をマネージャにも通知されるように設定します。このように設定することで、マネージャですべての稼働情報を管理できるようになります。

マネージャおよび中継マネージャの設定項目については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.14 [稼働監視] パネル」と「4.3.2 [上位通知] パネル」を参照してください。

● 中継マネージャごとに稼働情報を管理する

マネージャからすべてのクライアントに稼働監視ポリシーを適用している場合、デフォルトでは、クライアントの稼働情報はすべてマネージャに通知されます。このような環境では、クライアントの稼働情報が大量に増えると、マネージャのディスク容量が圧迫され、システムに影響するおそれがあります。稼働情報を中継マネージャごとに分散して管理したいときは、中継マネージャのセットアップで、経由する稼働情報を上位システムに通知しないように設定します。また、中継マネージャに通知された稼働情報を保存するように設定します。

このように設定することで、中継マネージャごとに配下のクライアントの稼働情報を管理できるようになり、マネージャのディスク容量を抑えられます。

● マネージャと中継マネージャで稼働監視ポリシーを共有する

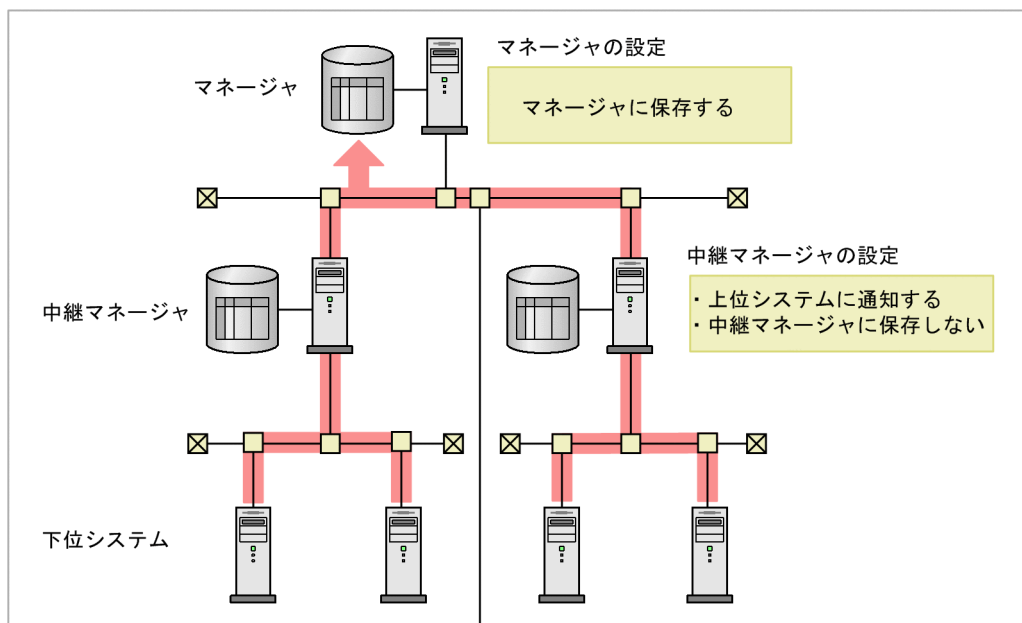
マネージャと中継マネージャでは、作成した稼働監視ポリシーをファイルに出力できます。出力したファイルを読み込むことで、ファイルから稼働監視ポリシーを作成できます。複数の中継マネージャでポリシーを共有したい場合や、作成済みの稼働監視ポリシーを別のコンピュータでカスタマイズして利用したい場合に便利です。

稼働監視ポリシーを共有する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.9 稼働監視ポリシーを共有する」を参照してください。

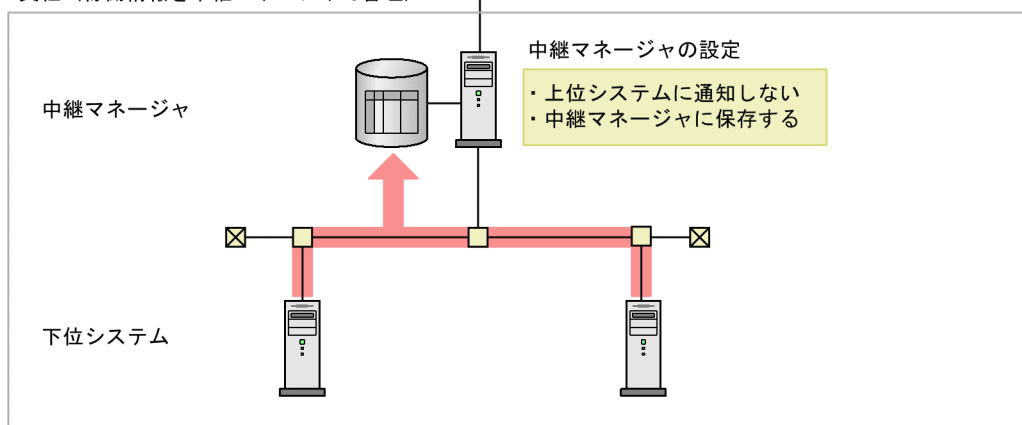
本社の下位システムの稼働状況はマネージャで管理し、支社の下位システムの稼働状況は中継マネージャで管理する場合を例に、大規模システムで稼働状況を監視するときの、稼働情報の管理方法を次の図に示します。

図 2-27 大規模システムでの稼働情報の管理方法

本社（稼働情報をマネージャだけで管理）



支社（稼働情報を中継マネージャで管理）



（凡例）  : 稼働情報を通知する流れ

2.5.12 スタンドアロン PC の稼働状況の監視

稼働情報は、ネットワーク内のクライアントからだけではなく、ネットワーク外のクライアント（オフラインマシン）からも取得できます。オフラインマシンからは、FD、CD-R、MOなどの媒体やメールを使用して稼働情報を取得します。

オフラインマシンから稼働情報を取得するには、JP1/NETM/DM システムが次の条件を満たしている必要があります。

配布管理システム

- ・ Windows 版 JP1/NETM/DM Manager 08-52 以降（リレーショナルデータベース版）がインストールされている。
- ・ 上記の JP1/NETM/DM Manager と同じ PC でリモートインストールマネージャを使用している。

2.6 ソフトウェアの稼働情報の管理

クライアントから取得したソフトウェアの稼働情報は、[操作ログ一覧] ウィンドウ、[操作ログ集計] ウィンドウおよび [ソフトウェア稼働状況] ウィンドウを利用して管理できます。各ウィンドウで利用できる機能の概要を次に示します。

[操作ログ一覧] ウィンドウ

抑止履歴および操作履歴を検索したり、特定のファイルに対する操作の履歴を追跡調査したりできます。

[操作ログ集計] ウィンドウ

[操作ログ一覧] ウィンドウで指定する検索パターンごとに、抑止履歴および操作履歴の集計結果を確認できます。なお、集計はあらかじめコマンドを利用して実行しておきます。

[ソフトウェア稼働状況] ウィンドウ

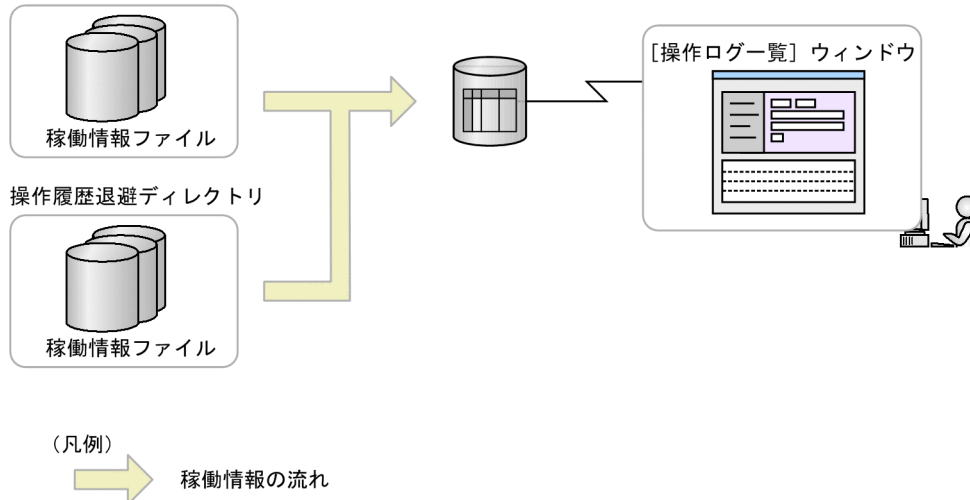
クライアントの稼働時間に対するソフトウェアの利用時間や利用台数などをソフトウェアごとに確認できます。

これらのウィンドウで稼働情報を管理するには、専用のデータベースに稼働情報を格納する必要があります。データベースへの稼働情報の格納は、セットアップ時に設定して自動的に実施するか、必要なときにコマンドを実行して実施します。

[操作ログ一覧] ウィンドウの場合を例に、稼働情報を管理する仕組みを次の図に示します。

図 2-29 稼働情報を管理する仕組み（[操作ログ一覧] ウィンドウ）

操作履歴格納ディレクトリ



ここでは、[操作ログ一覧] ウィンドウ、[操作ログ集計] ウィンドウおよび [ソフトウェア稼働状況] ウィンドウを利用した稼働情報の管理の概要について説明します。

2.6.1 操作ログを管理するための準備

ここでは、JP1/NETM/DM で取得した操作ログを、[操作ログ一覧] ウィンドウ、[操作ログ集計] ウィンドウおよび [ソフトウェア稼働状況] ウィンドウで管理するための準備について説明します。

(1) システム構成

各ウィンドウを利用するには、「Asset Information Manager Limited」コンポーネントがインストールさ

れている必要があります。「Asset Information Manager Limited」コンポーネントおよび稼働情報を管理するウィンドウを利用するために必要なプログラムを次の表に示します。

表 2-38 稼働情報を管理するために必要なプログラム

システム構成要素	必要なプログラム
「Asset Information Manager Limited」をインストールする PC	Microsoft Internet Information Services 5.0, 5.1, 6.0, または 7.0
[操作ログ一覧] ウィンドウ, [操作ログ集計] ウィンドウおよび [ソフトウェア稼働状況] ウィンドウを起動する PC	Microsoft Internet Explorer 6.0 Service Pack 2 以降

「Asset Information Manager Limited」を使用したシステム構成については、「5.2.1 Asset Information Manager Limited を使用する環境でのシステム構成」を参照してください。

(2) セットアップ

稼働情報を各ウィンドウで管理するには、配布管理システムのセットアップで、次の設定をしておく必要があります。

● データベーステーブルに稼働情報を格納するタイミングの設定

稼働情報を JP1/NETM/DM のリレーショナルデータベースに自動で格納する場合は、セットアップの [稼働監視] パネルの「稼働監視履歴を保存する」チェックボックス、および「自動格納する」チェックボックスをオンにしてください。なお、コマンドを実行する場合は、この設定に関係なく、稼働情報をデータベースに格納できます。

また、仮想化環境を使用する場合は、「自動格納する」チェックボックスをオフにしてください。dcmmonrst コマンドを実行して、稼働情報を操作履歴退避ディレクトリに退避してください。

● 「Asset Information Manager Limited」の URL の設定

リモートインストールマネージャから各ウィンドウを起動するための URL を設定します。

セットアップの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.14 [稼働監視] パネル」および「4.2.19 [AIM 関連] パネル」を参照してください。dcmmonrst コマンドの詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「4.13 dcmmonrst.exe (稼働情報のデータベースへの格納)」を参照してください。

また、JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに格納されているユーザ操作ログを取得する場合には、「Asset Information Manager Limited」のセットアップで、次の設定をしておく必要があります。

● JP1/ 秘文 LogManager のデータベースと連携するための設定

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに格納されているユーザ操作ログを取得するためには、「Asset Information Manager Limited」の [サーバセットアップ] ダイアログボックスで「JP1/ 秘文との連携設定」を「連携する」に設定する必要があります。なお、JP1/ 秘文と連携しない場合は、「連携しない」に設定してください。

「JP1/ 秘文との連携設定」の設定手順については、マニュアル「構築ガイド」の「10.2.6 JP1/ 秘文連携の設定」を参照してください。

● 秘文データベースへ接続するためのデータソースの作成

JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに格納されているユーザ操作ログを取得するためには、「Asset Information Manager Limited」の [データソース/ネット・サービスの作成] ダイアログボックスで、JP1/ 秘文 LogManager のデータベースへ接続するためのデータソースを作成する必要があります。データソースの作成手順については、マニュアル「構築ガイド」の「10.3.8 データソースまたはネット・サービスを作成する」を参照してください。

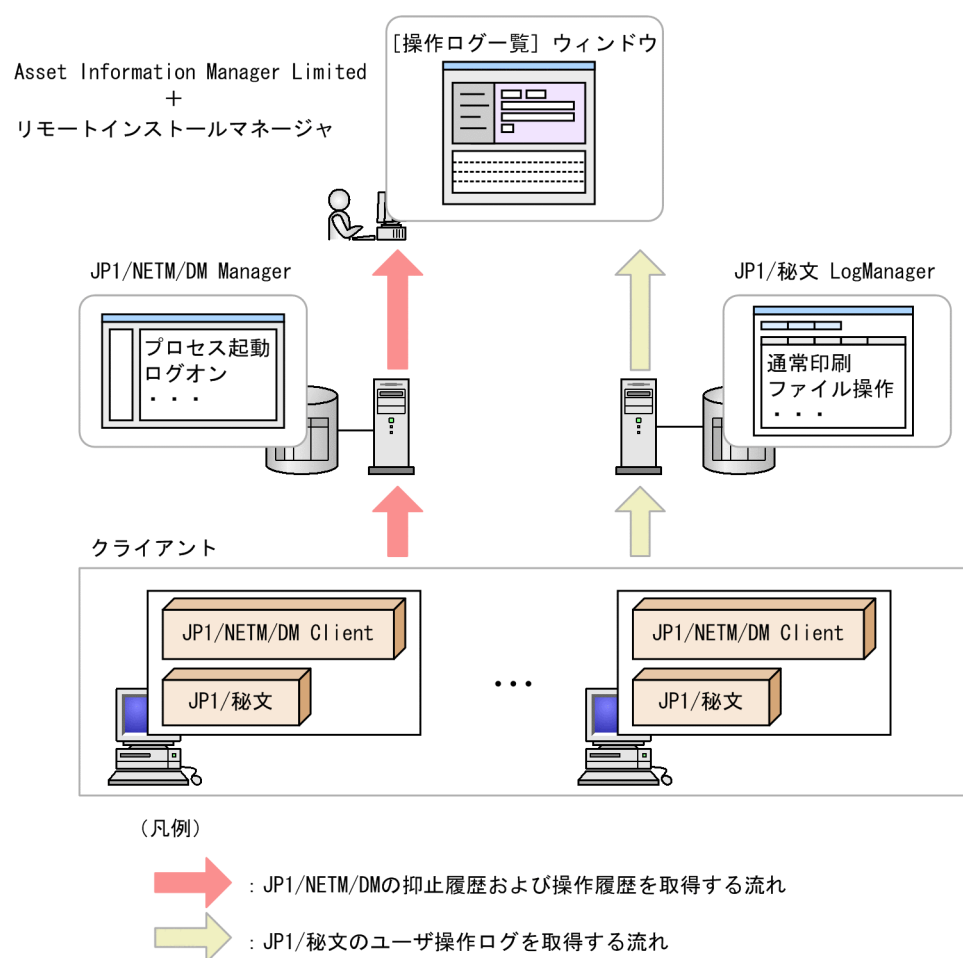
2.6.2 操作ログの参照・追跡調査

「操作ログ一覧」ウィンドウでは、JP1/NETM/DM で取得した抑止履歴および操作履歴を検索したり、特定の情報だけを表示して確認したりできます。また、JP1/NETM/DM と同じシステム内で、JP1/ 秘文 LogManager でユーザ操作ログを取得している場合、JP1/NETM/DM で取得した抑止履歴および操作履歴とあわせて確認できます。これらの、「操作ログ一覧」ウィンドウで管理できる情報を**操作ログ**と呼びます。「操作ログ一覧」ウィンドウを使用することで、システム全体の操作ログを統合的に管理できます。

「操作ログ一覧」ウィンドウは、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネント「Asset Information Manager Limited」および「リモートインストールマネージャ」がインストールされている場合、またはバージョン 08-00 以降の JP1/NETM/Asset Information Manager と連携する場合に起動できます。

「操作ログ一覧」ウィンドウで操作ログを管理する概念を次の図に示します。

図 2-30 「操作ログ一覧」ウィンドウでの操作ログの管理



「操作ログ一覧」ウィンドウは、リモートインストールマネージャから起動します。「操作ログ一覧」ウィンドウを次に示します。

図 2-31 「操作ログ一覧」ウィンドウ



「操作ログ一覧」ウィンドウの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.6 「操作ログ一覧」ウィンドウを操作する」を参照してください。

(1) 「操作ログ一覧」ウィンドウの機能

「操作ログ一覧」ウィンドウでは、次の二つの機能を利用できます。

- 操作ログの検索
- ユーザの操作の追跡

それぞれについて説明します。

(a) 操作ログの検索

「操作ログ一覧」ウィンドウでは、次の検索機能を使用できます。

- ・ 特定の期間に取得された操作ログの検索
- ・ ホスト名または IP アドレスごとの操作ログの検索
- ・ 操作ログの種類による検索

また、JP1/NETM/DM が提供する検索パターンを選択して、操作ログの検索条件を一括して設定することもできます。

上記の検索機能を使用して、「操作ログ一覧」ウィンドウから次に示す操作ログを管理できます。

● JP1/NETM/DM で取得した抑止履歴および操作履歴

- ・ プログラム起動
使用したプログラムの起動、停止および抑止
- ・ ウィンドウタイトル変更
閲覧したサイトなどのタイトル
- ・ ファイル操作
フォルダおよびファイルの作成、開く、削除、コピー、名称変更、移動、および印刷

- PC 起動
PC を起動, 終了, ログオンおよびログオフした操作
- Web アクセス
Microsoft Internet Explorer を使用したアクセス
- 外部メディア操作
USB ストレージデバイス, 内蔵 CD/DVD ドライブなどを接続または切断した操作
USB ストレージデバイス, 内蔵 CD/DVD ドライブなどへの接続が許可または抑止された操作

● JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログ

JP1/ 秘文 IC, JP1/ 秘文 IF, JP1/ 秘文 IS, および JP1/ 秘文 CG Pro で取得できるユーザ操作ログのうち, 次の情報を管理できます。

- ファイル操作 (作成, 開く, 削除, コピー, 名称変更・移動)
- CD ライティング
- 組織外持ち出し
- 平文持ち出し
- 機密ファイル作成
- 通常印刷
- 透かし印刷
- JP1/ 秘文 CG Pro の操作 (復号, 暗号化, パスワード認証など)
- 秘文イベントログ

(b) ユーザの操作の追跡

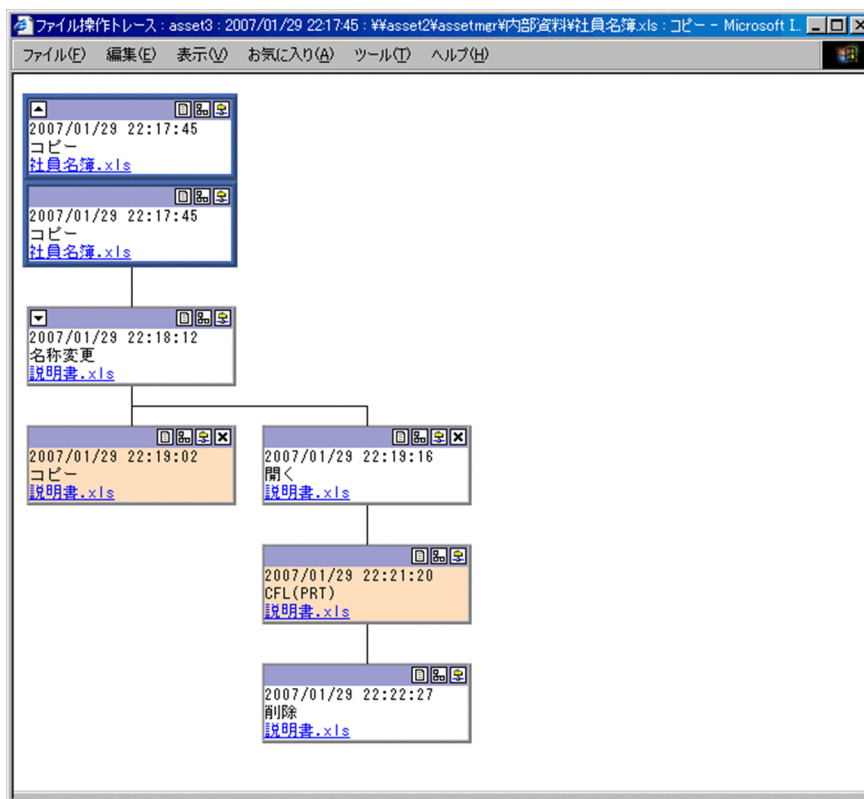
[操作ログ一覧] ウィンドウで, 操作ログに表示されているファイル名をクリックすると, [ファイル操作トレース] ウィンドウが起動します。

[ファイル操作トレース] ウィンドウでは, 操作ログを基に, 選択したファイルに対するユーザの操作を追跡できます。ファイルを選択した操作ログよりも日時が新しい操作ログが存在する場合, ファイルに対するその後の操作を追跡することもできます。

操作ログから参照禁止のファイルが別の場所にコピーされていることを発見した場合に, 過去にコピーしたユーザやファイルがコピーされた経路を調査するなど, 不正操作の原因を特定できます。

[ファイル操作トレース] ウィンドウを次に示します。

図 2-32 「ファイル操作トレース」 ウィンドウ



「ファイル操作トレース」ウィンドウの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.6.4 操作ログの追跡調査」を参照してください。

2.6.3 操作ログの集計

操作ログを集計することで、特定の操作が 1 日当たりどのくらい実行されたか、操作ログの検出結果の推移などを確認できます。例えば、リムーバブルディスクへのコピー操作を集計することで、頻繁に外部へ情報を持ち出しているクライアントを調査できます。

操作ログの集計は、`jamOperationLogAddUp.exe` コマンドで実行します。また、操作ログの集計結果は「操作ログ集計」ウィンドウから確認します。集計結果を確認する前に、コマンドを実行して集計を完了させておく必要があります。

「操作ログ集計」ウィンドウは、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネント「Asset Information Manager Limited」および「リモートインストールマネージャ」がインストールされている場合、またはバージョン 08-10 以降の JP1/NETM/Asset Information Manager と連携する場合に起動できます。

「Asset Information Manager Limited」ではクライアントごとに所属する部署を設定できます。クライアントごとに部署を設定しておくことで、集計結果を部署単位で確認することもできます。

操作ログの集計方法および「操作ログ集計」ウィンドウの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「6.7 「操作ログ集計」ウィンドウを操作する」を参照してください。

(1) 操作ログを集計する前提条件

「操作ログ一覧」ウィンドウで表示される操作ログが集計対象となります。

そのため、操作ログを集計する前には、専用のデータベースに稼働情報が格納されている必要があります。

(2) 部署の設定

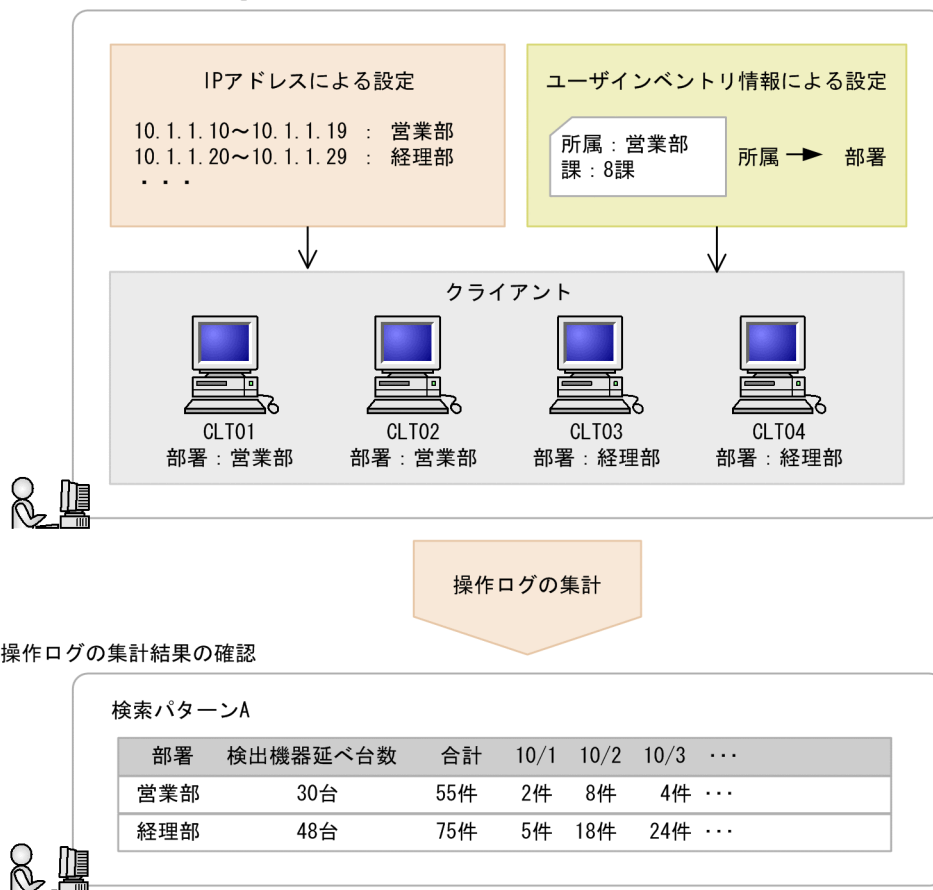
操作ログを集計する前にクライアントに部署を設定しておく、部署単位で操作ログの集計結果を確認できます。

部署は「Asset Information Manager Limited」から設定します。クライアントの IP アドレスまたはユーザインベントリ情報を基に、クライアントが所属する部署を自動的に設定できます。

部署を設定して操作ログを集計する概念を次の図に示します。

図 2-33 部署を設定した場合の操作ログの集計

「Asset Information Manager Limited」での部署設定



部署の設定方法については、マニュアル「構築ガイド」の「10.8 部署単位で操作ログを集計するための設定」を参照してください。

2.6.4 ソフトウェアの稼働状況の参照

〔ソフトウェア稼働状況〕ウィンドウでは、クライアントから取得した稼働時間を基に、ソフトウェアの稼働時間および稼働率を月ごとに集計できます。ソフトウェアをどのくらいの時間利用しているか、稼働率は毎月どのくらい変化しているか、といった状況を把握できます。

〔ソフトウェア稼働状況〕ウィンドウを次の図に示します。

図 2-34 「ソフトウェア稼働状況」 ウィンドウ

ソフトウェア名	ソフトウェア稼働時間	PC稼働時間	稼働台数
Common Client,	244.2	247.1	4
Himot Advanced Edition,	244.2	247.1	4
JP1/NETM/DM Client,	244.2	251.4	4
JP1/NETM/Remote Control,	244.2	247.1	4
LiveUpdate,	0.3	247.1	4
Sec Tool AntiVirus,	244.2	247.1	4
Sec Tool SAVRoam,	244.2	247.1	4
VAware Tools Service,	244.2	247.1	4
VAware Tools Tray,	244.2	247.1	4
VAware User Process,	244.2	247.1	4

「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウを利用するためには、「Asset Information Manager Limited」がインストールされている必要があります。また、「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウでソフトウェアの稼働時間を参照するには、クライアントからソフトウェアの稼働時間を取得しておく必要があります。

「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウの操作方法については、マニュアル「運用ガイド1」の「6.8 「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウを操作する」を参照してください。

2.6.5 稼働情報管理の運用例

ここでは、稼働情報を、JP1/NETM/DM のリレーショナルデータベースに自動で格納する場合と、必要ときにコマンドを実行して格納する場合の運用例を紹介します。

(1) 稼働情報を自動で格納する

自動で格納する設定にしておけば、トラブル発生時に最新の稼働情報を確認できます。また、最新の稼働情報を定期的に監査する場合にも便利です。なお、自動で格納する場合、保存日数を経過すると稼働情報がデータベースから自動的に削除されますが、コマンドを実行して格納すれば再び参照できます。

この場合の、設定と運用時の操作について説明します。

設定

セットアップの「稼働監視」パネルで、次に示す設定にします。

- 「稼働監視履歴を保存する」チェックボックスをオン
- 「稼働監視履歴を JP1/NETM/DM のデータベースに格納する」チェックボックスをオン
- 「自動格納する」チェックボックスをオン

セットアップの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.14 「稼働監視」パネル」を参照してください。

運用

稼働情報の格納および削除は自動で行うので、運用時の操作は不要です。なお、必要であれば、`dcmmonrst` コマンドでも稼働情報をデータベースに格納または削除できます。

`dcmmonrst` コマンドの詳細については、マニュアル「運用ガイド2」の「4.13 `dcmmonrst.exe` (稼働監視)

働情報のデータベースへの格納)」を参照してください。

(2) 稼働情報を手動で格納する

あらかじめ監査するタイミングおよび期間を決めていなくても、コマンドを実行することで、必要なときに任意の期間の稼働情報を監査できます。

この場合の、設定と運用時の操作について説明します。

設定

セットアップの「稼働監視」パネルで、次に示す設定にします。

- 「稼働監視履歴を保存する」チェックボックスをオン
- 「稼働監視履歴を JP1/NETM/DM のデータベースに格納する」チェックボックスをオン
- 「操作履歴を格納ディレクトリから圧縮して退避する」ラジオボタンを選択
- 「自動格納する」チェックボックスをオフ

セットアップの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.14 「稼働監視」パネル」を参照してください。

運用

dcmmonrst コマンドを実行することで、稼働情報をデータベースに格納または削除します。

Embedded RDB 環境では、稼働情報を削除したあとに、netmdb_reclaim.bat コマンドで領域を解放する必要があります。

dcmmonrst コマンドの詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「4.13 dcmmonrst.exe (稼働情報のデータベースへの格納)」を参照してください。

(3) データパーティションを使用して稼働監視履歴を格納する

稼働情報を手動で格納する運用の場合、Microsoft SQL Server 2012, Microsoft SQL Server 2008, または Microsoft SQL Server 2005 の機能であるデータパーティションを使用して稼働監視履歴を格納できます。

大規模ユーザ

1 日に発生する稼働情報件数が、1,000 万件を超える場合は、日単位にデータパーティションを作成して格納することをお勧めします。

中規模ユーザ

ひとつきに発生する稼働情報件数が、1,000 万件を超える場合は、月単位にデータパーティションを作成して格納することをお勧めします。

小規模ユーザ

次のような場合は、データパーティションは不要です。

- 取得する操作ログの種類が限定されていて、管理対象となる操作ログ件数が、ひとつき当たり数百万件程度のユーザ
- 管理ユーザが少なく、管理対象となる操作ログ件数が、ひとつき当たり数百万件程度のユーザ
- 操作ログを管理しないユーザ

パーティションを複数のディスクに分割して構成すると、次のような効果があります。

- ファイル I/O を分散できる
- インデックスのメンテナンス、データベースのバックアップ、およびデータベースのリストアをパーティション単位で実行できる

なお、定期的にシステムを停止して、新たなデータを格納できるようにパーティションを再構成する運用手順が必要です。

稼働監視履歴を検索する場合

パーティションを分割すると、検索の性能が低下するおそれがあります。[操作ログ一覧] ウィンドウからの検索を例に、検索の性能が向上する場合と、低下するおそれがある場合を次に示します。

検索の性能が向上する場合

[操作ログ一覧] ウィンドウの検索期間に、パーティションを分割した範囲内（日単位では当日の範囲内、月単位では当月の範囲内）を指定する場合

検索の性能が低下するおそれがある場合

- 検索期間を指定しない場合
- jamTakeOperationLog.bat コマンドを実行して検索結果を全件出力する場合

不要な稼働監視履歴を削除する場合

dcmmonrst コマンドでの削除では、時間が掛かることがあります。その場合は、不要になった稼働監視履歴を一括して削除用テーブルに切り替えて、テーブルを削除すると、時間を掛けずにデータを削除できます。

2.7 クライアントの管理

JP1/NETM/DM では、クライアントを管理するために次に示す機能を提供しています。

- クライアントに適用するパッチの取得
- クライアントのパッチ情報の検出
- WSUS と連携した更新プログラムの管理
- クライアントのシステム監視
- クライアントへのメッセージを通知
- AMT を利用したクライアントの制御

ここでは、クライアントを管理する機能の概要について説明します。

2.7.1 クライアントに適用するパッチの取得

JP1/NETM/DM では、Microsoft 社が提供する更新プログラムや Service Pack などのパッチを取得できます。取得したパッチをクライアントに配布することで、クライアント側でセキュリティ対策を実施することなく、パッチを適用できます。

パッチの取得は、[更新プログラムの管理] ダイアログボックスから実行します。[更新プログラムの管理] ダイアログボックスでは、条件に従ってパッチを自動的に取得する設定や、取得したパッチを自動的にパッケージングする設定もできます。

パッチを取得する前には、日立 Web サーバからパッチ情報ファイルを取得しておきます。日立 Web サーバから最新のパッチ情報ファイルを取得することで、取得できるパッチの一覧を更新できます。なお、日立 Web サーバに接続するためには、認証情報や URL の設定が必要です。

! 注意事項

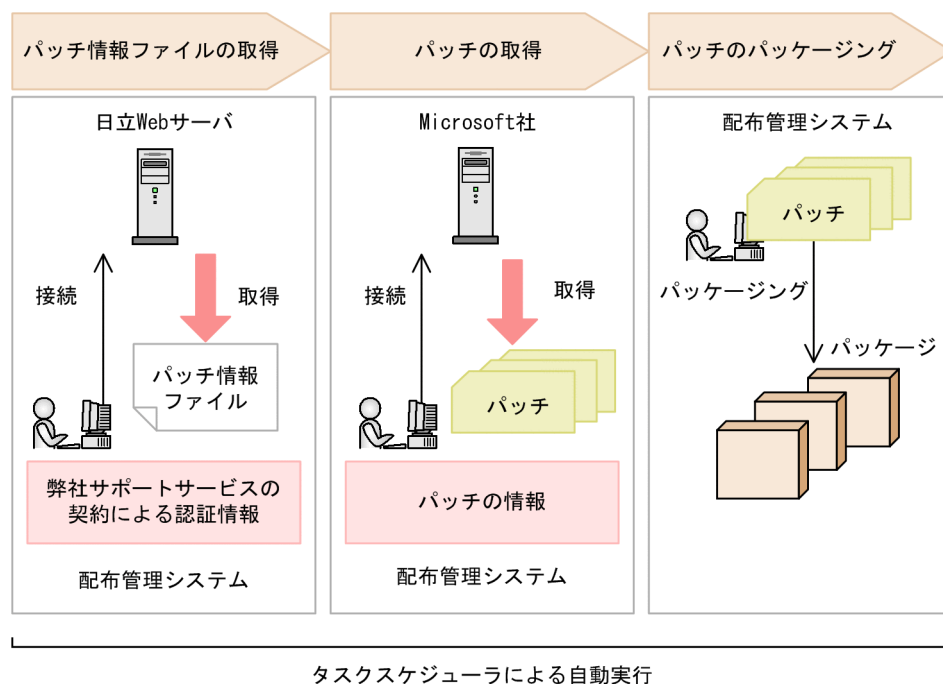
日立 Web サーバからパッチ情報ファイルを取得するには、弊社サポートサービスの契約が必要です。弊社サポートサービスの契約については、弊社担当営業にお問い合わせください。

取得したパッチはデータベースに格納されます。取得したパッチのパッケージングは、[更新プログラムの管理] ダイアログボックスからだけ実行できます。

パッチの取得は、タスクスケジューラを利用して自動的に実行することもできます。タスクスケジューラを利用することで、パッチ情報ファイルの取得およびパッチの取得、取得したパッチのパッケージングを自動的に実行できます。

JP1/NETM/DM でパッチを取得する概念を次の図に示します。

図 2-35 JP1/NETM/DM でのパッチの取得



〔更新プログラムの管理〕ダイアログボックスでの操作およびタスクスケジューラを利用したパッチの取得方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.1 クライアントに適用するパッチを取得する」を参照してください。

なお、作成されたパッケージは、リモートインストール機能を利用して、クライアントに適用します。リモートインストールの実行方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.3 リモートインストールの実行」を参照してください。

ここでは、取得できるパッチの種類、パッチを取得するための前提条件や準備などについて説明します。

(1) 取得できるパッチの種類

JP1/NETM/DM では、次の表に示すプログラムのパッチを取得できます。OS のパッチは、JP1/NETM/DM Client の対応 OS のパッチを取得できます。

表 2-39 パッチを取得できるプログラム

プログラム	種類またはバージョン
Windows	Windows 8
	Windows Server 2012
	Windows 7
	Windows Server 2008
	Windows Vista
	Windows Server 2003
	Windows XP
	Windows 2000
Windows Mail	6.0 以降※
Windows Media Player	7.1, 8.0, 9.0, 10.0, 11.0 以降※

プログラム	種類またはバージョン
Microsoft .NET Framework	1.0, 1.1, 2.0, 3.0 以降※
Microsoft Data Access Components	2.5, 2.7, 2.8 以降※
Microsoft Internet Explorer	6.0, 7.0 以降※
Microsoft Outlook Express	5.5, 6.0 以降※

注※ 最新のバージョンのパッチは、Microsoft 社からリリースされると取得できます。

これらのプログラムに対応したパッチのうち、JP1/NETM/DM で取得できる種別（クラス）は次の 4 種類です。

- 重要な更新
- セキュリティ問題の修正プログラム
- Service Pack
- 修正プログラム集

(2) パッチを取得するための前提条件

JP1/NETM/DM でパッチを取得するための前提条件を次に示します。

- ・ 弊社サポートサービスを契約している。
- ・ JP1/NETM/DM Manager 08-11 以降を使用している。
- ・ MSXML 4.0 Service Pack 2 または MSXML 6.0 がインストールされている。
- ・ パッチを取得する配布管理システムが、インターネットに接続できる。

また、取得したパッチをパッケージングする場合は、パッチを取得するコンピュータに、JP1/NETM/DM Client 08-10 以降の「パッケージャ」コンポーネントがインストールされている必要があります。

(3) パッチを取得するための準備

JP1/NETM/DM でパッチを取得する前に、日立 Web サーバに接続するための設定が必要です。日立 Web サーバに接続するためには、パッチ情報ファイルを取得する日立 Web サーバの接続情報を設定します。

この設定は「更新プログラムの管理」ダイアログボックスから行います。接続先の日立 Web サーバの設定については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.1.1(1) パッチ取得時のネットワークの設定」を参照してください。

この準備が完了したあとで、パッチを取得してください。

(4) パッチを取得する場合の注意事項

- JP1/NETM/DM で取得したパッチを配布する場合は、クライアントに正しく配布および適用できるかを十分に確認してから、パッチをクライアントに配布してください。クライアントの環境によっては、パッチの配布または適用が失敗するおそれがあります。
- 次に示すパッチは取得できません。
 - ・ 2006 年 1 月 1 日より前に Microsoft 社から提供されたパッチ
 - ・ マイクロソフト セキュリティ アドバイザリから提供されるパッチ
 - ・ PC-98 シリーズのコンピュータに対応したパッチ
- パッチ情報ファイルは、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥OSPATCH¥XML に格納され

ます。また、パッチをインストールするときに実行されるスクリプトファイルは、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥OSPATCH¥Script に格納されます。これらのファイルは変更しないでください。変更した場合、JP1/NETM/DM の動作は保証されません。

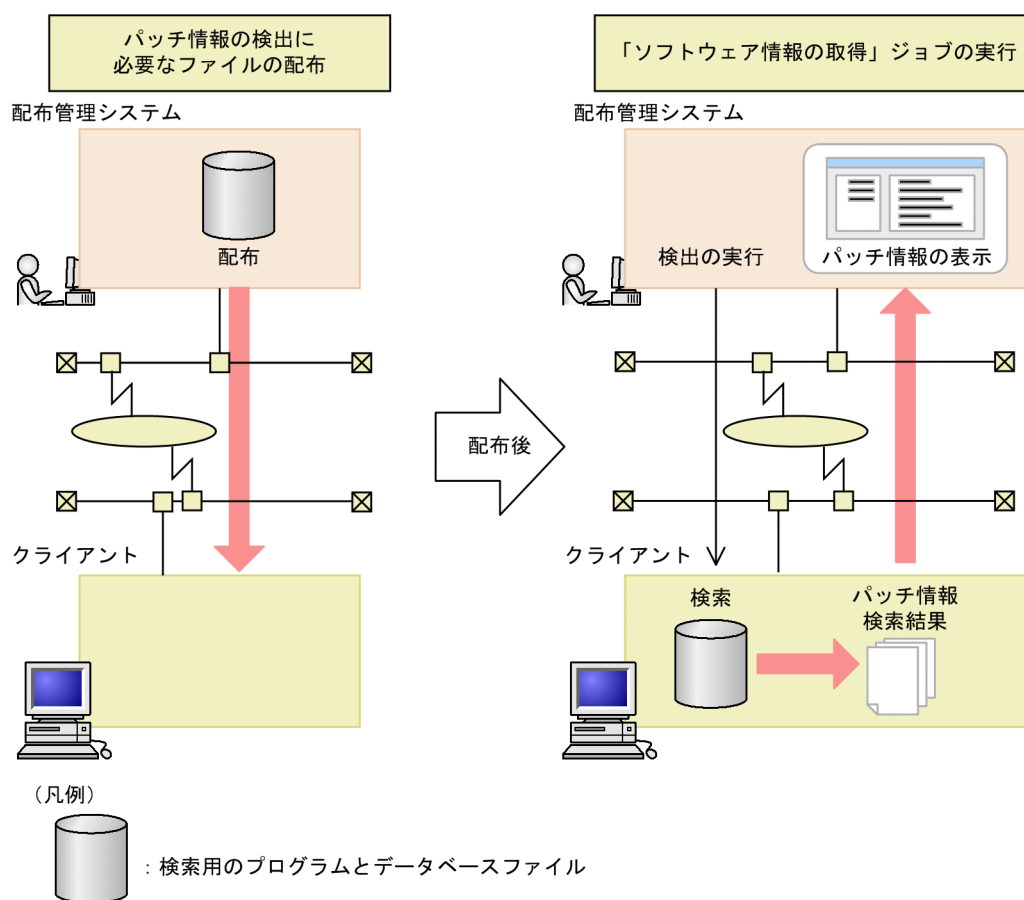
2.7.2 クライアントのパッチ情報の検出

JP1/NETM/DM では、クライアントに適用済みまたは未適用のパッチ情報を検出し、ソフトウェア情報として取得できます。

クライアントのパッチ情報を検出するには、パッチを検出するプログラムと、検出用のデータベースファイルをクライアントに配布してから「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行します。

パッチ情報を検出する流れを次の図に示します。

図 2-36 パッチ情報を検出する流れ



JP1/NETM/DM でパッチ情報を検出するには、次の 2 とおりの方法があります。

● WUA を使用して検出する

クライアントに適用済みのパッチ情報と未適用のパッチ情報の両方を検出できます。

● MBSA 1.2.1 を使用して検出する

クライアントに適用されていないパッチ情報だけを検出します。

どちらの検出方法を使用するかは、パッチ情報を検出する環境に合わせて選択してください。お勧めは、OS だけでなく Microsoft Office などのソフトウェアのパッチ情報も検出できる、WUA を使用した検出です。

WUA と MBSA 1.2.1 のどちらの検出方法も使用できる場合、WUA を使用してパッチ情報が取得されます。この場合、MBSA 1.2.1 を使用した検出は実行されません。

パッチ情報を検出する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.2 クライアントのパッチ情報を検出する」を参照してください。

次に、検出方法ごとに、取得できるパッチ情報と検出に必要な環境について説明します。

(1) WUA を使用した検出

WUA をクライアントにインストールし、WUA 用のデータベースファイルをクライアントに配布してから、「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行することで、パッチ情報を検出します。

(a) 検出できるパッチ情報

Microsoft Update によって提供される、セキュリティに関する更新プログラムのパッチ情報を検出します。OS のパッチ情報だけでなく、Microsoft Office などのソフトウェアのパッチ情報も検出できます。

(b) 検出に必要な JP1/NETM/DM Manager のバージョンと検出先の環境

WUA を使用してパッチ情報を検出するには、Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-53 以降が必要です。

また、検出先のクライアントが次の条件をすべて満たしている必要があります。

- OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, Windows Vista, Windows Server 2003, Windows Server 2003 (x64), Windows XP または Windows 2000 (Service Pack 3 以降) である。
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降がインストールされている。
- 次の JP1/NETM/DM Client 製品のどちらかがインストールされている。
 - ・ JP1/NETM/DM Client (クライアント) 08-00 以降
 - ・ JP1/NETM/DM Client - Base (クライアント) 08-00 以降および JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature 08-00 以降
- Windows Installer 3.0 以降がインストールされている。
- WUA がインストールされている。
- WUA 用のデータベースファイルが格納されている。

なお、「ソフトウェア情報の取得」ジョブを中継するシステムには、OS やバージョンの制限はありません。

(2) MBSA 1.2.1 を使用した検出

MBSA 1.2.1 のコマンドラインインターフェース (mbsacli.exe ファイル) および MBSA 1.2.1 用のデータベースファイルをクライアントに配布してから「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行することで、未適用パッチ情報を検出します。

(a) 検出できる未適用パッチ情報

mbsacli.exe で実行できる「セキュリティの更新」のスキャン結果のうち、最新のパッチが見つからなかった情報 (スキャン結果で「NOT Found」と表示される情報) を未適用パッチ情報として検出します。ただし、Microsoft Office のセキュリティの更新は mbsacli.exe のスキャン対象外であるため、未適用パッチ情報を検出できません。

(b) 検出に必要な JP1/NETM/DM Manager のバージョンと検出先の環境

MBSA 1.2.1 を使用して未適用パッチ情報を検出するには、Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-50 以降が必要です。

また、検出先のコンピュータが次の条件をすべて満たしている必要があります。

- OS が Windows Server 2008, Windows Server 2003 (Windows Server 2003 (x64) は除く), Windows XP, Windows 2000 または Windows NT 4.0 である。
- JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降, または JP1/NETM/DM Client 07-50 以降がインストールされている。
- Microsoft Internet Explorer 6.0 以降がインストールされている。
- MBSA 1.2.1 の mbsacli.exe ファイル, および MBSA 1.2.1 用のデータベースファイルが格納されている。
- Server サービスおよび Workstation サービスが開始されている。

なお、「ソフトウェア情報の取得」ジョブを中継するシステムには、OS やバージョンの制限はありません。

(3) MBSA 1.2.1 から WUA への検出方法の移行

MBSA 1.2.1 を使用して未適用パッチ情報を検出している環境では、Windows 2000 や Windows XP といった OS の未適用パッチ情報しか検出できません。OS だけでなく、Microsoft Office 製品や Microsoft SQL Server などの未適用パッチ情報を検出したい場合、MBSA 1.2.1 を使用した検出から WUA を使用した検出へと、検出方法を移行する必要があります。

MBSA 1.2.1 から WUA へ検出方法を移行するには、検出を実行する JP1/NETM/DM Manager と検出先のクライアントで、WUA を使用した検出に必要な条件を満たしてください。

WUA を使用した検出に必要な環境については、「(1)(b) 検出に必要な JP1/NETM/DM Manager のバージョンと検出先の環境」を参照してください。

なお、MBSA 1.2.1 の mbsacli.exe ファイルおよびデータベースファイルは、検出先に格納されたままでもかまいません。WUA を使用して未適用パッチ情報を検出する環境では、MBSA 1.2.1 は使用されません。

2.7.3 WSUS と連携した更新プログラムの管理

WSUS と連携することで、次に示す WSUS の管理作業を JP1/NETM/DM から実行できます。

● WSUS コンピュータグループの作成

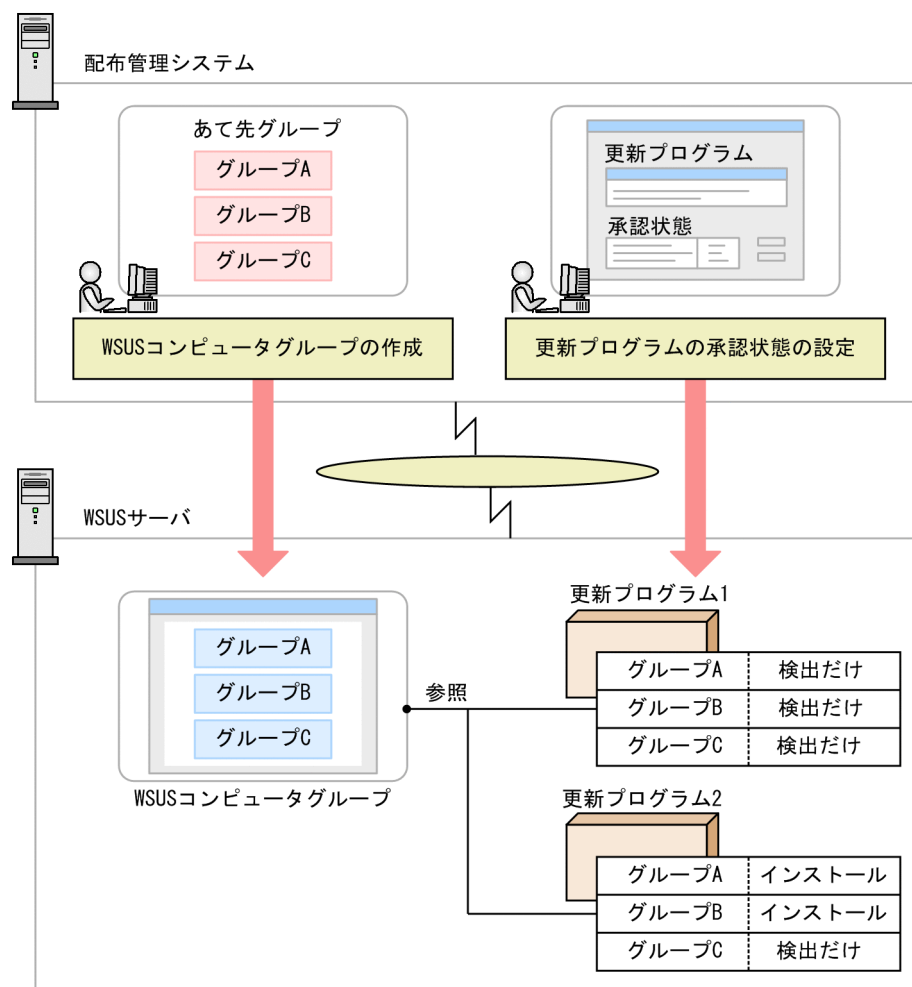
JP1/NETM/DM のあて先グループを基にして WSUS コンピュータグループを作成したり、作成した WSUS コンピュータグループをメンテナンスしたりできます。

● 更新プログラムの承認状態の設定

更新プログラムの承認状態を、WSUS コンピュータグループ単位で変更できます。

WSUS と連携した更新プログラムの管理作業の概念を次の図に示します。

図 2-37 WSUS と連携した更新プログラムの管理作業の概念



JP1/NETM/DM は、複数の WSUS サーバが階層化された環境にも対応しています。WSUS と連携するためのシステム構成については、「5.2.6 WSUS と連携する場合のシステム構成」を参照してください。

WSUS と連携して更新プログラムを管理する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.3 WSUS と連携して更新プログラムを管理する」を参照してください。

(1) WSUS と連携するための前提条件

WSUS と連携する環境では、JP1/NETM/DM と WSUS が次に示す前提条件を満たす必要があります。

JP1/NETM/DM の前提条件

- マネージャに、バージョンが 08-50 以降の JP1/NETM/DM Manager を使用している。
- 中継システムに、バージョンが 07-53 以降の JP1/NETM/DM SubManager、または 08-00 以降の JP1/NETM/DM Client（中継システム）を使用している。
- クライアントに、バージョンが 07-53 以降の JP1/NETM/DM Client、または 08-00 以降の JP1/NETM/DM Client - Base を使用している。

WSUS の前提条件

- WSUS 2.0 または WSUS 3.0 を使用している。
- 32 ビット版の OS にインストールした WSUS を使用している。

- WSUS の [コンピュータのオプション] ページで、「Windows Server Update Services のコンピュータの移動タスクを使用する」を設定している。
- バージョンが 07-53 以降の JP1/NETM/DM のコンポーネント「WSUS 連携機能」がインストールされている。

(2) WSUS と連携するための準備

WSUS と連携するには、WSUS と連携できる環境を構築したあとで、JP1/NETM/DM と WSUS で次の準備が必要です。

WSUS と連携できるシステム構成については、「5.2.6 WSUS と連携する場合のシステム構成」を参照してください。

JP1/NETM/DM での準備

- サーバセットアップの [WSUS 連携] パネルで、「WSUS 連携機能の URL」を指定します。「WSUS 連携機能の URL」の指定方法については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.17 [WSUS 連携] パネル」を参照してください。
- 「システム情報の取得」ジョブを実行して、クライアントから WSUS コンピュータ ID を取得しておく必要があります。WSUS コンピュータ ID を取得するためには、ジョブ作成時に [オプション] パネルで「すべての情報を取得」を選択してください。
なお、WSUS コンピュータ ID はシステム情報の一覧に表示されません。

WSUS での準備

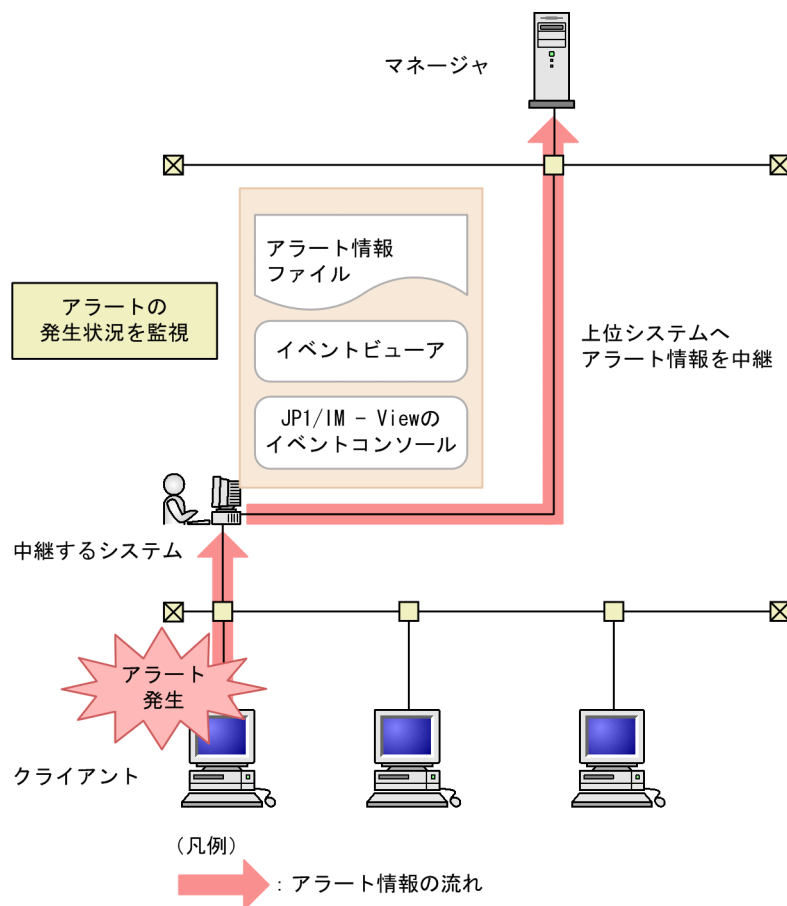
WSUS の [コンピュータのオプション] ページで、「Windows Server Update Services のコンピュータの移動タスクを使用する」を設定します。

2.7.4 クライアントのシステム監視

クライアントは、自 PC のハードディスクおよびメモリを監視し、空き容量が一定以下に減少するなどの異常を検知すると、アラートを通知する機能を持っています。これを、**システム監視機能**と呼びます。クライアント側でアラート情報を上位システムに通知するように設定しておくと、上位の JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client (中継システム) から下位のクライアントのアラート発生状況を監視できます。

JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client (中継システム) では、各クライアントからのアラート情報を、CSV 形式のアラート情報ファイル、Windows NT のイベントビューア、および JP1/IM - View の [イベントコンソール] 画面で確認できます。アラート情報とともにクライアントのシステム情報も通知されるため、アラートの発生原因を直ちに調査できます。また、アラート情報をさらに上位のシステムへ中継することもできます。クライアントから通知されたアラート情報の流れを、次の図に示します。

図 2-38 クライアントから通知されたアラート情報の流れ



クライアントでのシステム監視の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.8 システム監視によるアラート通知」を参照してください。また、クライアントから上位システムへアラート情報を通知させる方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.8.4(4) 上位システムへアラートを通知する」を参照してください。

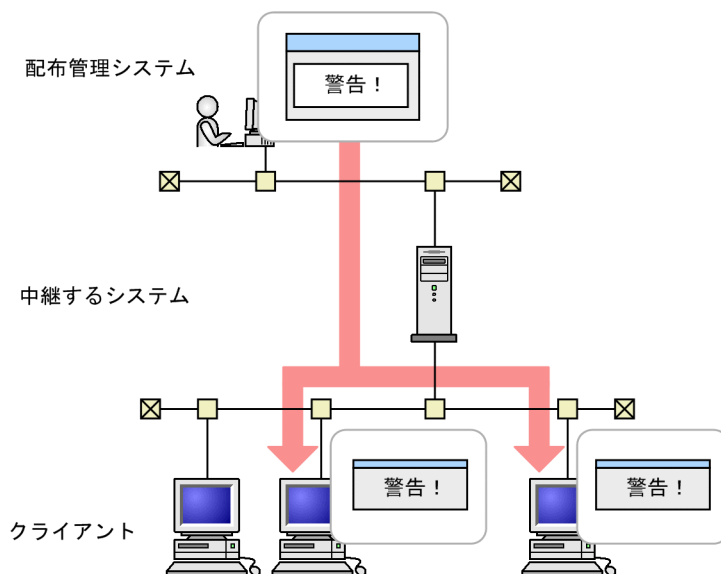
JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）でのアラート情報の出力先は、各セットアップで設定します。アラート情報の出力先の設定と、確認の方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.4 クライアントから通知されたアラートを確認する」を参照してください。

2.7.5 クライアントへのメッセージ通知

「メッセージの通知」ジョブを実行することで、ジョブのあて先のクライアントにメッセージを通知できます。メッセージの内容は任意に指定できます。セキュリティ対策が不十分な特定のクライアントに警告メッセージを通知する場合や、システムのメンテナンス情報をクライアントに一括して通知する場合に便利です。

クライアントへのメッセージ通知の概念を次の図に示します。

図 2-39 クライアントへのメッセージ通知の概念



クライアントにメッセージを通知する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.5 クライアントへメッセージを通知する」を参照してください。

また、クライアントへメッセージを通知するために、JP1/NETM/DM のシステム構成要素に必要なプログラムについて説明します。

● クライアントヘテキスト形式のメッセージを通知する場合

クライアントヘテキスト形式のメッセージを通知するために必要なプログラムを次の表に示します。

表 2-40 クライアントヘテキスト形式のメッセージを通知するために必要なプログラム

システム構成要素	必要なプログラム
ジョブを実行するマネージャ	Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-50 以降（リレーショナルデータベース版）
ジョブを中継するシステム	Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-50 以降， Windows 版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）08-00 以降， Windows 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降，UNIX 版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）09-00 以降，または UNIX 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降
メッセージの通知先のクライアント	Windows 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降， Windows 版の JP1/NETM/DM Client 07-50 以降，または UNIX 版の JP1/NETM/DM Client 09-00 以降

● クライアントヘ HTML 形式のメッセージを通知する場合

クライアントヘ HTML 形式のメッセージを通知するために必要なプログラムを次の表に示します。

表 2-41 クライアントヘ HTML 形式のメッセージを通知するために必要なプログラム

システム構成要素	必要なプログラム
ジョブを実行するマネージャ	Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 08-10 以降

システム構成要素	必要なプログラム
ジョブを中継するシステム	Windows 版の JP1/NETM/DM Manager 07-50 以降, Windows 版の JP1/NETM/DM Client (中継システム) 08-00 以降, Windows 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-50 以降, UNIX 版の JP1/ NETM/DM Client (中継システム) 09-00 以降, または UNIX 版の JP1/ NETM/DM SubManager 07-50 以降
メッセージの通知先のクライアント	Windows 版の JP1/NETM/DM Manager (中継マネージャ) 08-10 以降, または Windows 版の JP1/NETM/DM Client 08-10 以降

なお、バージョンが 08-02 以前のクライアントへ HTML 形式のメッセージを通知した場合は、HTML のタグがテキスト形式の文字列で表示されます。そのため、HTML 形式のメッセージは通知できません。

また、JP1/NETM/Client Security Control を導入したセキュリティ管理システムでは、JP1/NETM/DM の「メッセージの通知」ジョブを利用して、JP1/NETM/Client Security Control をインストールした管理サーバからクライアントへメッセージを通知できます。

2.7.6 AMT を利用したクライアントの制御

クライアントが AMT に対応したコンピュータを使用している場合、クライアントおよび上位システムにコンポーネント「AMT 連携機能」をインストールすることで、AMT の機能を利用してクライアントを制御できます。

AMT を利用してクライアントを制御するための前提条件を次に示します。

配布管理システム

- Microsoft .NET Framework 1.1, 2.0, 3.0 または 3.5 がインストールされている。
- システムフォルダ内に「telnet.exe」が存在する (AMT のリモートコントロール機能を使う場合)。
- imrSdk.dll がコマンドを実行するホストに格納されている (AMT のリモートコントロール機能を使う場合)。
- バージョンが 08-02 以降の JP1/NETM/DM を使用している。
- 「AMT 連携機能」がインストールされている。

中継するシステム

AMT を利用して、中継するシステム配下のクライアントを制御する場合は、配布管理システムと同じ前提条件になります。ただし、Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client の中継システムの場合、08-50 以降のバージョンを使用してください。

クライアントの機能を使用する場合は、クライアントと同じ前提条件になります。

クライアント

- AMT に対応したコンピュータを使用している。
- Microsoft .NET Framework 1.1, 2.0, 3.0 または 3.5 がインストールされている。
- SOL ドライバがインストールされている (AMT のリモートコントロール機能を使う場合)。
- DHCP を使用している。
- OS が Windows 7, Windows Vista, Windows Server 2003 (Service Pack なし, または Service Pack 1) または Windows XP Professional (Service Pack 1 以降) である。
- 次に示すどれかのバージョンに該当する JP1/NETM/DM Client を使用している。
 - 08-02 以降
 - 08-50 以降で適用 OS が Windows Server 2008 または Windows Vista

- ・ 09-01 以降で適用 OS が Windows 7
- ・ 「AMT 連携機能」がインストールされている。
- ・ 運用キーにホスト名を使用している。

「AMT 連携機能」を使用する場合のシステム構成については、「5.2.7 AMT を利用する場合のシステム構成」を参照してください。

(1) クライアント制御の利用

Wake on LAN に対応していないクライアントや、スタンバイ状態または休止状態のクライアントに対して、クライアント制御を利用してジョブを実行できます。

配布管理システムおよびクライアントが「AMT 連携機能」を使用できる環境であれば、ジョブ実行時にクライアント制御機能の利用を設定するだけで、AMT によるクライアント制御を利用できます。Wake on LAN も使用できる環境の場合、AMT によるクライアント制御に失敗したときに、Wake on LAN によるクライアント制御が実行されます。

クライアントが「AMT 連携機能」を使用できるかどうかは、システム情報項目「AMT ファームウェアバージョン」の値が取得されていることで判断します。項目がない、または値が「N/A」の場合は、「AMT 連携機能」は使用できません。

この機能を使用するための設定については、「6.3 クライアント制御を利用するための設定」を参照してください。

(2) クライアントのホスト識別子の保管

通常、クライアントを再インストールすると新規にホスト識別子が生成されるため、上位システムではインストール前とは別の資産として認識されます。

「AMT 連携機能」を使用するクライアントでは、初回インストール時にホスト識別子を AMT の不揮発性メモリ内に保管しておき、クライアントを再インストールしたときに、保管されたホスト識別子を再インストールしたクライアントのホスト識別子として利用することができます。

これによって、ディスク障害などによりクライアントを再インストールした場合でも、上位システムで同一の資産として認識できます。

この機能を使用するための設定については、「6.5.1 クライアントでのホスト識別子の保管」を参照してください。

(3) 障害が発生したクライアントのリモートコントロール

AMT のリモートコントロール機能を利用して、電源がオフのクライアントに接続して、クライアントの BIOS を設定できます。また、配布管理システム側に診断プログラムが格納された FD がある場合は、配布管理システムからクライアントに対して診断プログラムをリモートで実行できます。

クライアントに障害が発生した場合に、配布管理システムから BIOS の設定を確認したり、診断プログラムによって原因を調査したりして、クライアントの障害回復を図れます。

この機能を利用するには、配布管理システムとクライアントのバージョンが 08-50 以上である必要があります。

この機能を使用する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.6 AMT のリモートコントロール機能を利用する」を参照してください。

2.8 クライアントのリモートコントロール

配布管理システムの**リモートコントロールマネージャ**を使用することで、クライアントを遠隔操作（リモートコントロール）できます。

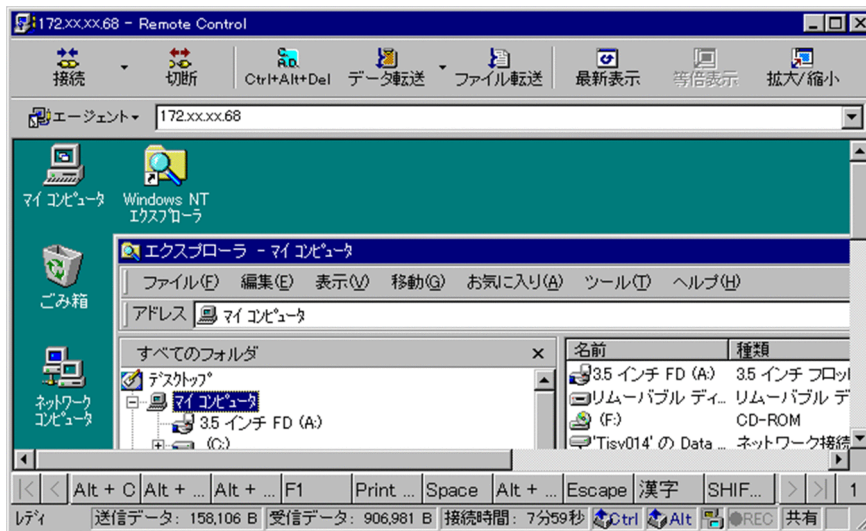
なお、クライアントをリモートコントロールするには、クライアント側で**リモートコントロールエージェント**が起動している必要があります。

ここでは、リモートコントロールの概要について説明します。

2.8.1 リモートコントロールマネージャの起動方法

クライアントをリモートコントロールするには、リモートコントロールマネージャを起動する必要があります。

図 2-40 [Remote Control] ウィンドウ



リモートコントロールマネージャを起動するには、[スタート] メニューから [リモートコントロールマネージャ] を選択する以外に次の方法があります。

- リモートインストールマネージャから起動する
- インベントリ情報の集計結果から起動する

(1) リモートインストールマネージャから起動する

リモートインストールマネージャの [システム構成] ウィンドウ, [あて先] ウィンドウ, または [ディレクトリ情報] ウィンドウに表示されているクライアントを選択して, [オプション] - [リモートコントロールマネージャの起動] からリモートコントロールマネージャを起動できます。

リモートコントロールマネージャが起動すると, 選択したクライアントへ自動的に接続します。

(2) インベントリ情報の集計結果から起動する

インベントリビューアでの集計結果に表示されているクライアントを選択して, [ツール] - [リモートコントロールマネージャの起動] からリモートコントロールマネージャを起動できます。

複数のクライアントを選択した場合は, 接続するクライアントを選択してリモートコントロールマネージャを起動できます。

インベントリビューアからリモートコントロールマネージャを起動する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「4.6 リモートコントロール機能を利用する」を参照してください。

2.8.2 リモートコントロールマネージャの機能

リモートコントロールマネージャの機能について説明します。

なお、各機能の詳細については、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

(1) クライアントの画面の操作

クライアントに接続して、クライアントの画面を呼び出し、その画面を操作できます。キーボードやマウスの操作に加え、クリップボードのデータを転送することもできます。

(2) ファイルの転送

リモートコントロールマネージャの「ファイル転送」ウィンドウでは、ドラッグ & ドロップの簡単な操作で、マネージャとクライアントまたはクライアント同士の、ファイルの転送ができます。また、転送データを圧縮して、より効率的にファイルのやり取りを実現できます。

(3) クライアントの画面情報の記録・再生

接続中のクライアントの画面情報を記録してファイルに保存できます。保存したファイルは、リモートコントロールマネージャが提供するリモートコントロールプレーヤーを利用して再生できます。また、保存したファイルは、コントローラのない環境で記録を再生するために、AVI ファイルに変換することもできます。

(4) チャットの利用

リモートコントロール中の対話手段として、チャット機能を利用できます。マネージャ同士やクライアント同士でチャットを利用することもできます。

(5) クライアントからの接続要求

クライアントからマネージャに接続要求を出す（接続する）ことができます。接続要求を受信したマネージャは、接続要求を出したクライアントを確認・接続できるので、クライアントで発生した問題に迅速に対応できます。

2.9 ジョブの管理

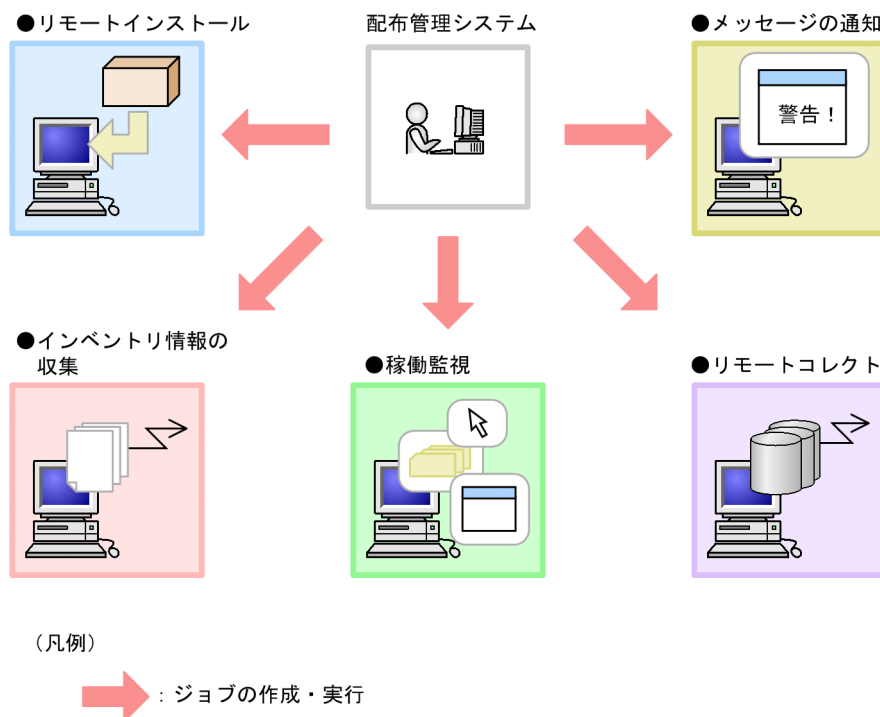
リモートインストールやインベントリ情報の取得といった JP1/NETM/DM の機能の多くは、配布管理システムからクライアントへ**ジョブ**を実行して実現します。

ここでは、ジョブの概念やジョブの種類、ジョブの実行に関する作業など、ジョブの概要について説明します。

2.9.1 ジョブとは

JP1/NETM/DM システムでは、配布管理システムから**ジョブ**と呼ばれる作業の命令を作成、実行することで、ソフトウェアをリモートインストールしたり、クライアントの情報を取得したりして、さまざまな配布・資産管理の業務を実現します。ジョブの実行による配布・資産管理業務の概念を次の図に示します。

図 2-41 ジョブの実行による配布・資産管理業務



ジョブの作成、実行、保存など、ジョブに関する基本的な作業は、JP1/NETM/DM の多くの機能で共通しています。配布・資産管理の業務に JP1/NETM/DM を十分に活用するためには、ジョブについて十分に理解しておいてください。

なお、ジョブを作成、実行する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.1 ジョブの作成、実行手順」を参照してください。

2.9.2 作成できるジョブの種類

作成できるジョブの種類（ジョブ種別）は、マネージャおよび中継マネージャの配布管理システムと、中継システムの配布管理システムで異なります。作成できるジョブの種類とジョブの内容、および作成できる配布管理システムの種別を次の表に示します。

表 2-42 配布管理システムで作成できるジョブ種別

項番	ジョブ種別	ジョブの内容	作成できる配布管理システム	
			JP1/NETM/DM Manager	JP1/NETM/DM Client (中継システム)
1	パッケージのインストール	パッケージをリモートインストールします。	○	○
2	中継システムまでのパッケージ転送	中継システムまでパッケージを転送します。	○	—
3	中継システムのパッケージ一括削除	中継システム上のパッケージをすべて削除します。	○	—
4	リモートコレクト	クライアントシステム上のファイルを配布管理システムに収集します。	○	○
5	中継までのリモートコレクト	クライアント上のファイルを配布管理システム直下の中継するシステム（中継マネージャまたは中継システム）に収集します。	○	—
6	中継サーバからのコレクトファイル収集	中継するシステムに収集したファイルを、配布管理システムに転送します。	○	—
7	中継サーバのコレクトファイル削除	中継するシステムに収集したファイルをすべて削除します。	○	—
8	クライアントユーザによるインストール	クライアントに、ソフトウェアをインストールする許可を与えます。許可を与えたソフトウェアは、クライアントでパッケージセットアップマネージャからインストールできます。	○	○
9	システム情報の取得	クライアントのシステム情報（システム情報およびレジストリ情報）、およびユーザインベントリを取得します。	○	○
10	ソフトウェア情報の取得	クライアントにインストールされているソフトウェアの情報を取得します。	○	○
11	ユーザインベントリ情報の取得	クライアントのユーザインベントリ情報を取得します。	○	—
12	レジストリ取得項目の転送	レジストリ情報を取得するための設定項目をクライアントに転送します。	○	—
13	ユーザインベントリ情報の転送	配布管理システムで設定したユーザインベントリ情報の取得項目をクライアントに転送します。	○	—
14	システム構成情報の取得	中継マネージャまたは中継システム配下のシステム構成情報を取得します。取得できるシステム構成情報を次に示します。 • あて先に指定した中継マネージャ配下の中継システムとクライアント、および直下の中継マネージャ • あて先に指定した中継システム配下の中継システムとクライアント	○	—

項番	ジョブ種別	ジョブの内容	作成できる配布管理システム	
			JP1/NETM/DM Manager	JP1/NETM/DM Client (中継システム)
15	中継サーバからの結果通知保留	中継システムに対し、ジョブ結果の通知を一時停止するよう指示します。	○	—
16	中継サーバの結果通知の保留解除	中継システムに停止させていた、ジョブ結果の通知を再開させます。	○	—
17	ファイル転送の中断	中継システムに対し、その直下のシステム（中継システムおよびクライアント）とのファイル転送を中断するよう指示します。	○	—
18	ファイル転送の再開	中継システムとその直下のシステムで中断させていたファイル転送を再開させます。	○	—
19	メッセージの通知	ジョブ作成時に指定したメッセージをクライアントに通知します。	○	—
20	ソフトウェア稼働監視の制御	ソフトウェアの稼働監視の開始と停止をクライアントに指示します。	○	—
21	ソフトウェア稼働情報の取得	ソフトウェアの抑止履歴および操作履歴をクライアントから取得します。	○	—

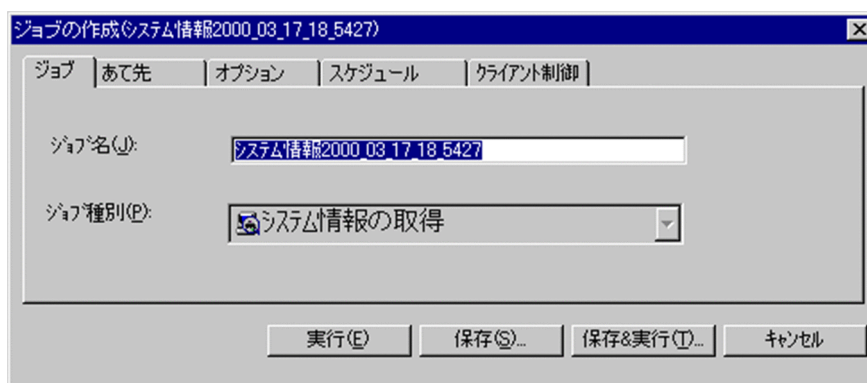
(凡例)

- ：作成できる
- ：作成できない

2.9.3 ジョブの詳細設定

ジョブは、リモートインストールマネージャの「ジョブの作成」ダイアログボックスで作成します。

図 2-42 「ジョブの作成」ダイアログボックス



「ジョブの作成」ダイアログボックスには、指定したジョブ種別に応じて、必要なパネルが表示され、ジョブの名称、あて先、実行条件など、ジョブの詳細を設定できます。「ジョブの作成」ダイアログボックスに表示されるパネルの詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.2.2 「ジョブの作成」ダイアログボックスに表示されるパネル」を参照してください。

「ジョブの作成」ダイアログボックスに表示されるパネルと、各パネルで設定する内容の概要について次の表に示します。

表 2-43 [ジョブの作成] ダイアログボックスに表示されるパネル

パネル名	設定する内容
[ジョブ] パネル	ジョブ名を設定します。
[あて先] パネル	ジョブの実行対象となるホストを設定します。
[パッケージ] パネル	リモートインストールするパッケージの属性、インストール環境などを設定します。
[ジョブの配布属性] パネル	ジョブをマルチキャスト配布したい場合、またはパッケージを分割して配布したい場合に設定します。大容量のパッケージの場合に便利です。ただし、マルチキャスト配布の設定ができるのは、「パッケージのインストール」ジョブの場合だけです。
[コレクトファイル] パネル	リモートコレクトの対象となるファイルを設定します。
[オプション] パネル	インベントリ情報を取得するジョブ実行時のオプションを指定します。指定したジョブ種別によって [オプション] パネルの内容が異なります。
[スケジュール] パネル	ジョブの登録日時、実行日時および実行期限を設定します。
[クライアント制御] パネル	ジョブのあて先の PC が起動されていない場合、起動してジョブを実行させる設定ができます。また、起動したあとにシャットダウンさせる設定もできます。
[通知するメッセージ] パネル	ジョブのあて先で表示されるメッセージのアイコン、タイトル、およびメッセージ本文を設定します。
[稼働監視ポリシー] パネル	ジョブのあて先に、稼働監視の開始、変更、または停止を指示します。開始または変更する場合は、適用する稼働監視ポリシーを選択します。

2.9.4 ジョブの実行と保存

[ジョブの作成] ダイアログボックスで作成したジョブは、そのまま実行することもできますが、[ジョブ定義] ウィンドウに保存してから実行することもできます。ジョブを保存しておくと、保存したジョブをテンプレートとして使用することで、同じようなジョブを何度でも簡単に実行できます。

なお、ジョブを保存するには、作成したジョブを管理する**フォルダ**をあらかじめ [ジョブ定義] ウィンドウに作成しておく必要があります。

保存したジョブの編集方法やフォルダの作成方法などについては、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.3.2 保存したジョブおよびフォルダの管理」を参照してください。

2.9.5 グループ化されたホストへのジョブ実行

規模の大きいシステムでは、ジョブの実行対象として個々のシステムを指定するよりも、何らかのグループを指定する方が便利です。あて先をグループ化したものには、「あて先グループ」、「ID」および「ディレクトリ情報」があります。また、配布管理システムを階層化している場合、マネージャからは、あて先として「全あて先」を指定できます。それぞれの特長を次に示します。

あて先グループ

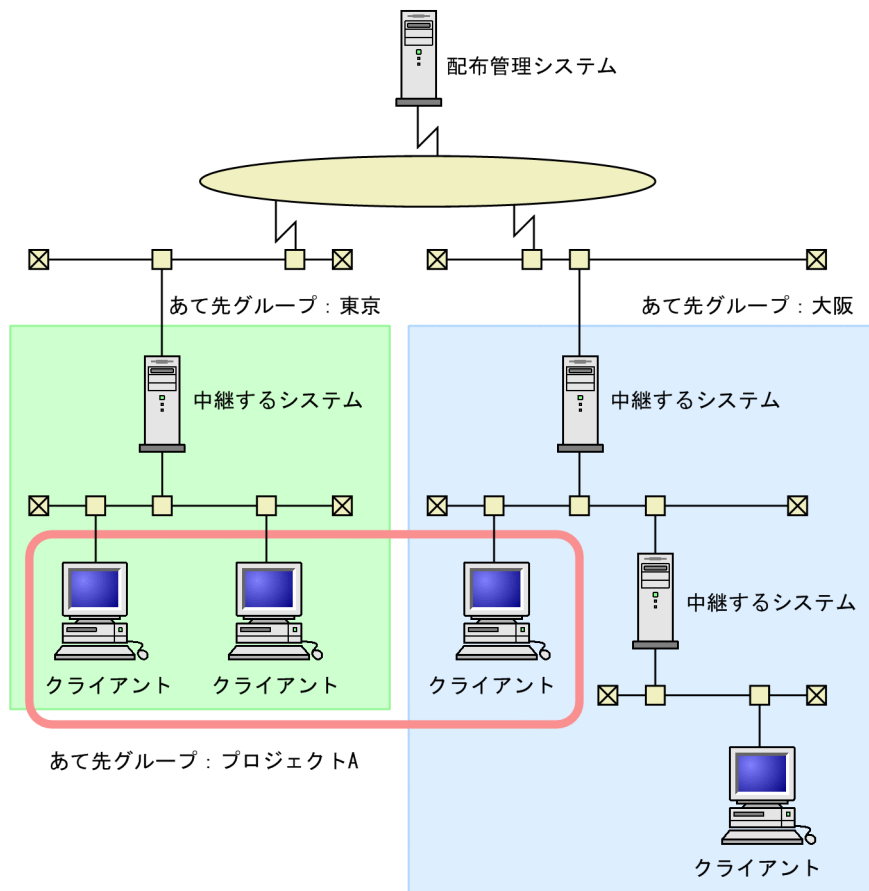
部署や担当業務など任意の条件で、配布先を階層的にグループ化されたものです。グループの作成だけでなく、各グループにどのクライアントが所属するかということも、配布管理システムで指定して管理します。ウィンドウ上で、あて先の論理的な階層構造を簡単に把握できるので、あて先を管理しやすくするためにも、何らかのあて先グループを作成しておくことをお勧めします。

ジョブのあて先として、あて先グループを指定すると、そのグループに属するすべてのクライアントに対してジョブが実行されます。

部署ごとにグループ化して管理する一方で、各部署のクライアントをプロジェクト別にグループ化することもできます。このため、次の図のように、部署ごとのグループ化とプロジェクトごとのグループ化を重複して設定できます。

あて先グループの概念を次の図に示します。

図 2-43 あて先グループの概念

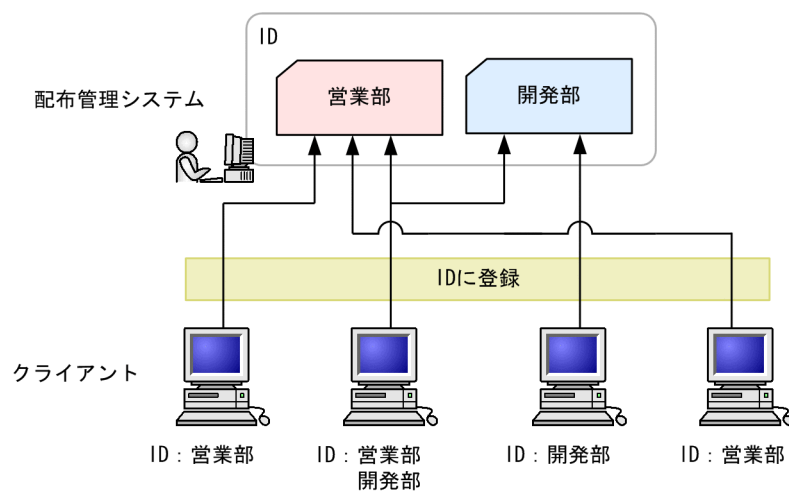


ID

ID では、所属するクライアントをシステム管理者側から登録するだけでなく、クライアント側からも ID を選択して登録できます。また、ID に対して実行したジョブは、その後、その ID に新しくクライアントが登録されるたびに自動的に実行されるため、配布管理システムがソフトウェアを再度配布する必要はありません。OS やマシンの用途など変動しやすい項目で分類しても、クライアント側から所属する ID を変更するだけで済むので、システム管理者の負担を軽減できます。

ID の概念を次の図に示します。

図 2-44 ID の概念



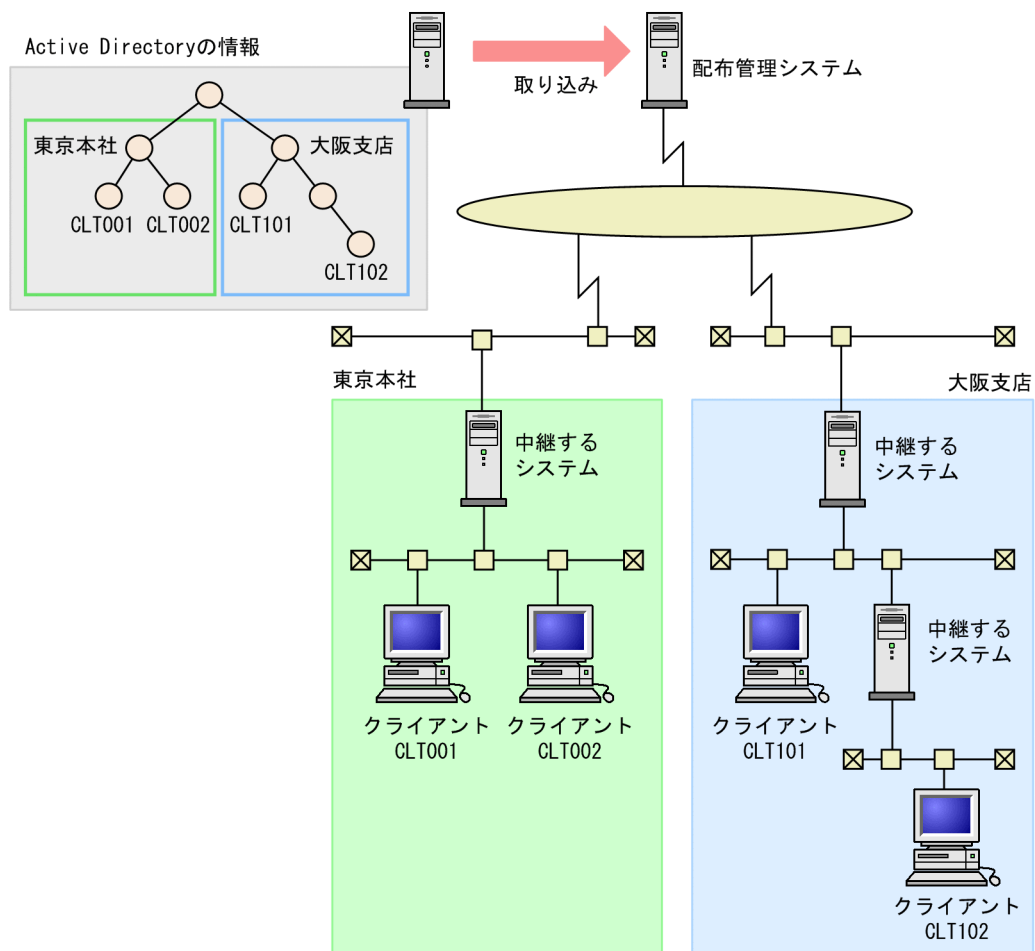
ディレクトリ情報

ディレクトリ情報は、Active Directory で管理している情報を配布管理システムに取り込んだものです。Active Directory で管理している情報をそのまま利用できるため、新たにグルーピングする必要はありません。部署をあて先にしてジョブを実行するような場合は、ディレクトリ情報を使用すると便利です。

また、新しくコンピュータが追加された場合なども、Active Directory から最新情報を取得するだけでディレクトリ情報を更新できるため、メンテナンスの作業も軽減できます。

ディレクトリ情報の概念を次の図に示します。

図 2-45 ディレクトリ情報の概念

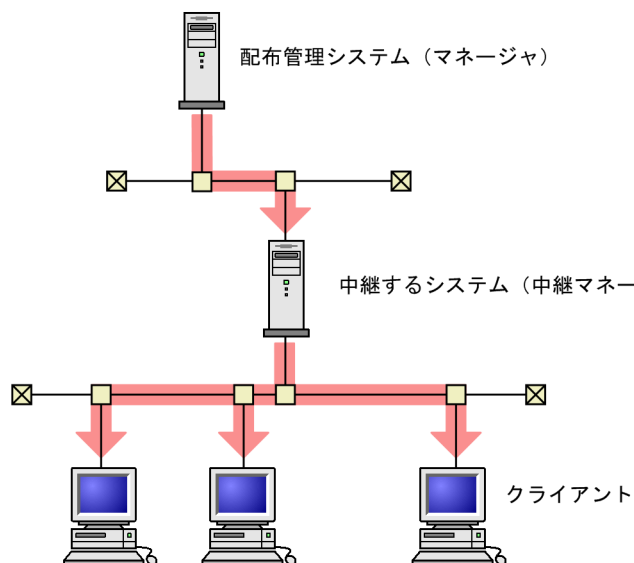
**全あて先**

中継マネージャ配下のすべてのクライアントをあて先としたい場合に指定するもので、グルーピングのための事前作業は必要ありません。配布管理システムを階層化している場合に、マネージャから指定できます。

マネージャから中継マネージャに対して全あて先を指定してジョブを実行すると、ジョブを受け取った中継マネージャが、配下のすべてのクライアントに対してそのジョブを実行します。

全あて先の概念を次の図に示します。

図 2-46 全あて先の概念



2.9.6 実行されたジョブの流れ

ジョブを実行した場合の流れを説明します。

「同時に接続できる下位システム数」および「下位システムの同時実行要求数」は、JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client (中継システム) のセットアップで設定する項目です。

1. リモートインストールマネージャからジョブを実行する。

配布管理システムからジョブ実行時に指定されたあて先に対して、実行要求 (下位システムへジョブが実行されたことを知らせるための通知) が送信されます。

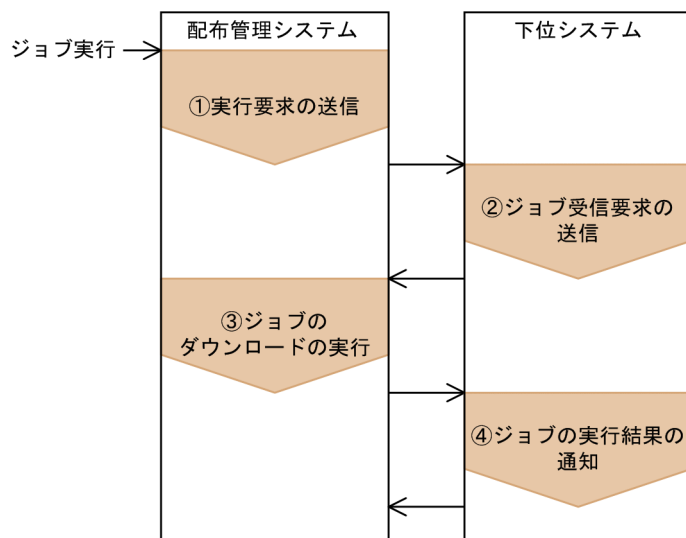
2. 実行要求を受信した下位システムは、上位システムにジョブを要求する。

3. 要求のあった下位システムあてにジョブがダウンロードされる。

4. 下位システムから実行結果が配布管理システムへ通知される。

ジョブ実行の流れを次の図に示します。

図 2-47 ジョブ実行の流れ



配布管理システムでは1分間隔でジョブを監視し、接続する必要がある下位システムがある場合、実行要求を送信します。一度に実行要求を送信する下位システムの最大数は「下位システムの同時実行要求数」になります。ただし、現在接続している下位システム数が、「すでに接続している下位システム数 < 同時に接続できる下位システム数」の場合、新たに接続できる下位システム数分の実行要求だけを送信します。

なお、ジョブに指定されたあて先に対応する下位システムの数とは、ジョブを実行した配布管理システムに直接接続された下位システムの範囲です。したがって、配布経路に中継するシステム（中継マネージャまたは中継システム）が含まれている場合は、直接接続している中継するシステムだけが数に含まれ、中継するシステムに接続している下位システムについては数に含まれません。

● ジョブの実行例

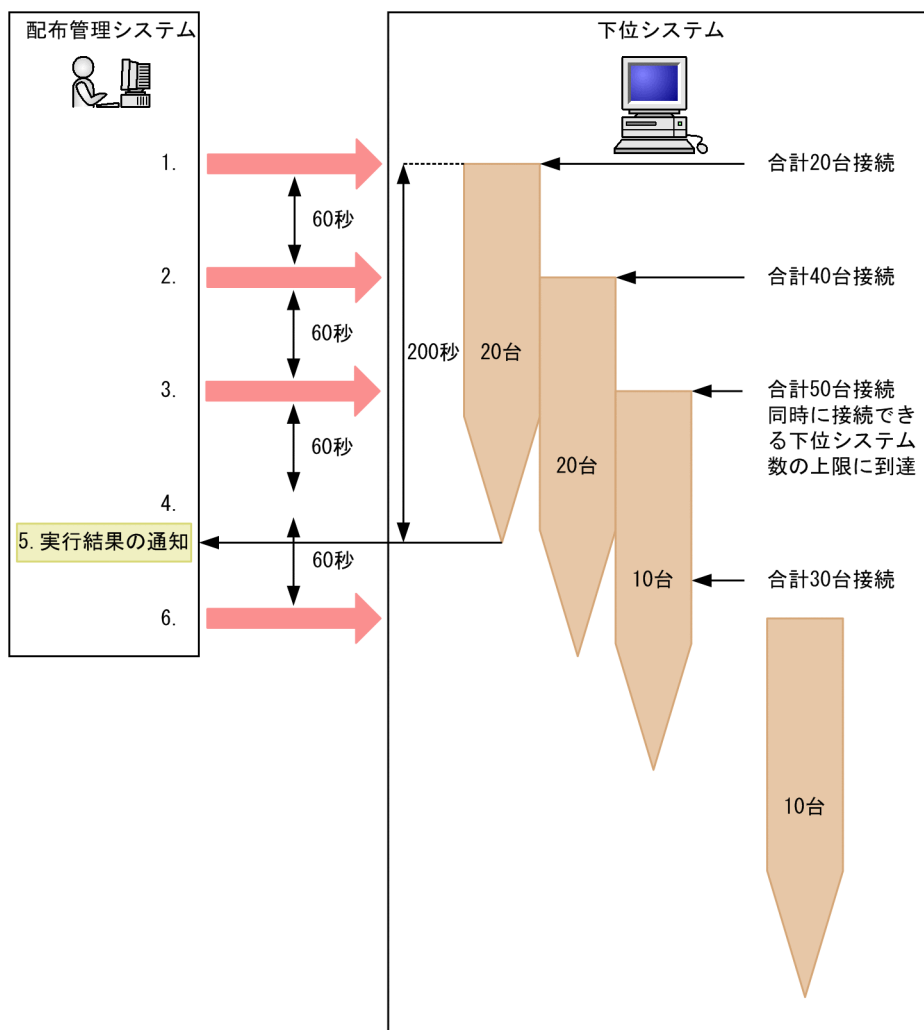
ジョブの実行例を次に示します。

条件

- ジョブに指定されたあて先の数：60 台
- 「下位システムの同時実行要求数」：20
- 「同時に接続できる下位システム数」：50
- ジョブのダウンロードに掛かる時間：200 秒

この条件でのジョブ実行の流れを次の図に示します。

図 2-48 ジョブ実行の流れの例



(凡例)

: 実行要求

1. 「下位システムの同時実行要求数」分のあて先 20 台に実行要求が送信される。
接続中の下位システム数：20 < 「同時に接続できる下位システム数」：50
2. 「下位システムの同時実行要求数」分のあて先 20 台に実行要求が送信される。
接続中の下位システム数：40 < 「同時に接続できる下位システム数」：50
3. 同時に接続できる下位システム数の残り 10 台に対して実行要求が送信される。
接続中の下位システム数：50 = 「同時に接続できる下位システム数」：50
4. 接続中の下位システムが「同時に接続できる下位システム数」と同じ数になっているため、実行要求が送信されない。
5. 操作 1. で接続した下位システムから実行結果が通知される。
接続中の下位システム数：30 < 「同時に接続できる下位システム数」：50
6. ジョブに指定されたあて先の数 60 のうち、残りの 10 台に対して実行要求が送信される。

2.9.7 ジョブの実行順序

クライアントで同時に複数のジョブが実行される場合、次に示す規則で実行されます。ここでは、実行時間（インストール日時）が指定されているジョブを**日時指定のジョブ**、実行時間（インストール日時）が指定されていないジョブを**即時実行のジョブ**と表現します。

- 日時指定のジョブは指定された日時順に実行されます。
- 即時実行のジョブは、リモートインストールマネージャでジョブが実行された順に実行されます。
- 日時指定のジョブと即時実行のジョブが混在した場合、リモートインストールマネージャで日時指定のジョブより前に実行された即時実行のジョブはクライアントでも先に実行されます。

(1) 複数パッケージを計画的に実行する方法

複数のパッケージを順番にインストールしたいなど、ジョブに順序性を持たせたい場合は前述の規則を考慮し、さらに次に示す指定方法に従ってジョブを実行してください。

- 同じ経路（中継マネージャまたは中継システム経由）で実行してください。
- パッケージのインストールモード（GUI インストールモードまたはバックグラウンドインストールモード）の指定は同じにしてください。
- パッケージのインストールタイミングに「システム起動時インストール」を指定した場合、クライアントのシステムが再起動されないとインストールされません。したがって「通常インストール」を指定したパッケージと順序性を持たせる場合は、クライアントの再起動のタイミングに注意してください。
- マネージャ-中継システム-クライアント構成で、クライアントと接続する中継システムに、マネージャで作成されたジョブと中継システムで作成されたジョブが混在する場合、マネージャで作成されたジョブが優先的に実行されます。
- 1 ジョブ内に複数のパッケージが選択されている場合、パッケージのインストールタイミングやインストールモードが同じ指定の場合、クライアントでは次の順序でインストールされる順番が決まります。

インストール順序の決定方法

インストール順序は、リモートインストールマネージャの「[ジョブの作成] ダイアログボックスで指定するパッケージのキャビネット識別 ID（2 けた）、パッケージ識別 ID（4 けた）、バージョン（6 けた）、世代番号（4 けた）を連結した文字列の昇順になります。複数パッケージを一度に配布する場合は、インストール順序に従って、キャビネット識別 ID、パッケージ識別 ID などを設定してください。例えば、パッケージ A、パッケージ B が以下の識別子でパッケージ登録されているとします。

識別子	パッケージ A の値	パッケージ B の値
キャビネット識別 ID	'DD'	'AA'
パッケージ識別 ID	'AAA'	'CCCCC'
バージョン	'0100 '	'0100/A'
世代番号	'0000'	'0001'
連結した文字列	'DDAAA0100 0000'	'AACCCCC0100/A0001'

インストール順序は連結した文字列の昇順となるため、パッケージ B の方がパッケージ A より先にインストールされます。

「[ジョブの作成] ダイアログボックスの「[パッケージ] パネルでは、パッケージ名をパッケージの各識別 ID を連結した文字列の昇順に表示しています。したがって、インストール順序を一覧表示で確認できます。

ユーザプログラム、データや他社ソフトウェアの場合

先にインストールするパッケージのパッケージ ID に JIS コードの英数字順で若い ID を指定するようにしてください。

日立プログラムプロダクトの場合

パッケージ識別 ID は固定になっていますが、パッケージング時にキャビネット識別 ID を変更することによって、インストール順序を特定できます。先にインストールしたいソフトウェアのキャビネット識別 ID に JIS コードの英数字順で若い ID を指定するようにしてください。この場合、インストール順序によってキャビネットを分けてパッケージする必要があります。

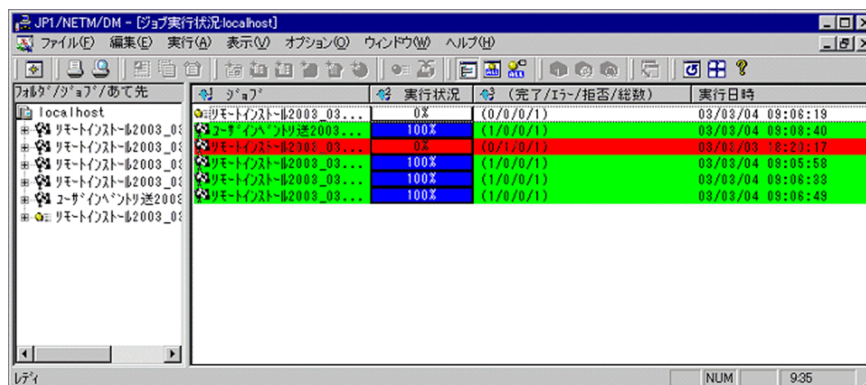
なお、次の注意事項があります。

- パッケージのスケジュール属性にインストール日時を指定した場合、およびジョブ作成時にジョブの実行日時を指定した場合、リモートインストールマネージャで実行したジョブの順番ではインストールされません。このため、インストール日時およびジョブの実行日時は指定しないようにしてください。
- バックグラウンドインストールモードのパッケージは、GUI インストールモードのパッケージより優先してインストールされます。したがって、インストールモードの異なるパッケージが混在するときは、別のジョブに分けて実行し、先に実行したパッケージの完了を待って、後続のパッケージを実行してください。
- 分割配布が指定されたジョブは、リモートインストールマネージャであとから実行されたジョブがクライアントで先に実行されることがあります。
- 中断中でも配布する指定のジョブは、中断中のジョブより先に実行されます。

2.9.8 ジョブの実行状況の確認

ジョブの実行状況は、リモートインストールマネージャの「ジョブ実行状況」ウィンドウで確認できます。このウィンドウには、実行したジョブの状況が、フォルダやジョブごとに階層的に表示されます。左枠にはフォルダやジョブなどの階層構造が、右枠には左枠で選択した階層内の情報が表示されます。

図 2-49 「ジョブ実行状況」ウィンドウ



ジョブに表示される色は、ジョブの対象となるホストの状態のうち、最も悪い状態の色が表示されます。例えば、ジョブが赤色（障害の発生していることを示す）になっている場合、ジョブから赤色の階層を一つずつ下ることによって、障害の発生しているホストに到達できます。

ジョブの実行状況を確認する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.4 ジョブの実行状況を確認する」を参照してください。

2.9.9 実行結果を確認したあとの対処

実行結果を確認したあと、正常に終了したジョブは「ジョブ実行状況」ウィンドウから削除してください。

実行済みのジョブを削除しないで残しておく、実行中のジョブの処理が遅くなったり、リモートインストールマネージャの動作が遅くなったりすることがあります。実行待ちおよび再実行できるエラーの状態となっているジョブがある場合は、そのジョブを指定して再実行できます。このような、ジョブの実行結果を確認したあとの対処については、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.5 ジョブの実行結果を確認したあとの対処」を参照してください。

また、リレーショナルデータベースを使用しているときは、対処が必要なジョブを効率的に確認するために、正常終了したジョブだけ、またはエラーのジョブだけを表示することもできます。対処が必要なジョブを表示する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「8.4.7 特定の実行状況のジョブの表示方法」を参照してください。

2.10 システム構成情報の管理

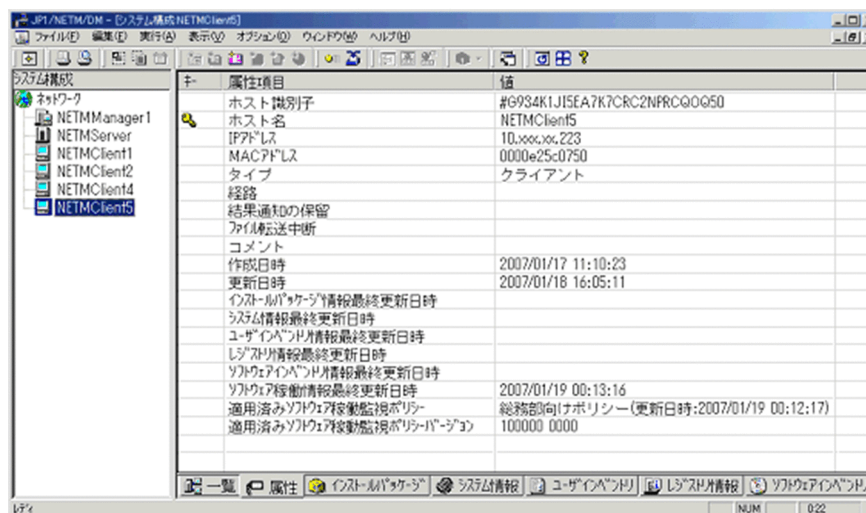
JP1/NETM/DM を使用するには、プログラムをインストールするだけでなく、配布管理システムで、中継するシステムおよびクライアントの構成とアドレス（ホスト名または IP アドレス）を定義しておく必要があります。この情報を**システム構成情報**と呼びます。システム構成情報を設定することで、配布管理システムから、各中継するシステムやクライアントをジョブの実行先として認識できるようになります。

ここでは、システム構成情報の管理の概要について説明します。

2.10.1 システム構成情報の作成

システム構成情報は、リモートインストールマネージャの「システム構成」ウィンドウで登録・設定します。このウィンドウに表示されたネットワークの階層が、ジョブ実行時の実際の経路になります。「システム構成」ウィンドウを次に示します。

図 2-50 「システム構成」ウィンドウ



「システム構成」ウィンドウでは、左枠にシステムの階層構造が表示されます。階層の最上位には、配布管理システムのアイコン（)が表示されます。中継システムのアイコン（)をダブルクリックすると、選択した中継システムの下位の階層やクライアントのアイコン（)が表示されます。配布管理システムを階層化したシステムでは、配布管理システムの配下に中継マネージャのアイコン（)が表示されます。

中継マネージャ、中継システム、およびクライアントのアイコンの隣には、それぞれのホスト名または IP アドレスが表示されます。

左枠でクライアント以外を選択した場合、右枠には左枠で選択した階層内の構成が表示されます。

システム構成情報の作成方法については、マニュアル「構築ガイド」の「8. システム構成情報とあて先のグループを作成する」を参照してください。

2.10.2 クライアントのグルーピング

配布管理システムでリモートインストールなどのジョブを実行するとき、ジョブの実行対象となるホスト（あて先）を指定します。このとき、システム構成情報を利用して、あて先を 1 台 1 台指定することもで

きますが、多数のクライアントがある場合は効率的ではありません。JP1/NETM/DM では、物理的なネットワーク構成とは関係なく、目的に応じてクライアントを幾つかのグループに分類し、グループ単位でジョブを実行することができます。

(1) 作成できるグループの種類

作成できるグループには、**あて先グループ**と ID の 2 種類があります。どちらも、部署や担当業務といった任意の条件でグルーピングできます。さらに、一つのホストを複数のあて先グループまたは複数の ID に登録して、1 台の PC を、部署ごと、業務ごとといった複数のグループに所属させる運用もできます。このため、配布先のホストを効率良く管理できます。

また、Active Directory で管理しているグループを、そのまま配布管理システムで利用することもできます。この場合、新たにグループを作成する必要はありません。Active Directory からディレクトリ情報を取得するだけで、グループが作成されます。

(a) あて先グループ

あて先グループは、配布管理システム側でホストをグルーピングする方法です。システム構成とは関係なくホストをグルーピングできますので、部署やプロジェクトなど、任意の条件で、ホストを階層的なグループに分類して管理できます。あて先グループ名はユーザが任意に設定できます。部署やプロジェクトなどでホストをグルーピングし、管理しやすい名称を付けておくと、ジョブの実行が容易になります。

ジョブのあて先として、あて先グループを指定すると、そのグループに属するすべてのクライアントに対してジョブが実行されます。

(b) ID

ID は、配布管理システムで、グループの名称と、その ID を管理する中継するシステム (ID 管理中継) だけを決めておく方法です。どのグループに所属するかは、クライアント側で決めます。複数の ID に所属することもできます。

また、配布管理システムから、ファイルを使って複数のクライアントを ID に登録することもできます。ただし、ID は階層的に管理できません。

あて先に ID を指定したジョブ (**ID ジョブ**) が ID 管理中継に転送されると、その ID に属するクライアントに ID 管理中継からジョブが実行されます。

ID でグループを作成すると、クライアント側で ID に登録するため、管理者がジョブのあて先のクライアントを個々にメンテナンスする必要がないため便利です。また、クライアントが増設されても、クライアント側で ID に登録すれば、登録した ID のジョブが自動的に実行されるため、クライアントの構成変更に対応できます。

クライアントから ID に登録するとき、ID に登録を許可するパスワードを設定できます。パスワードを設定することで、クライアントから間違った ID に登録してしまうことを避けられます。

(c) ディレクトリ情報

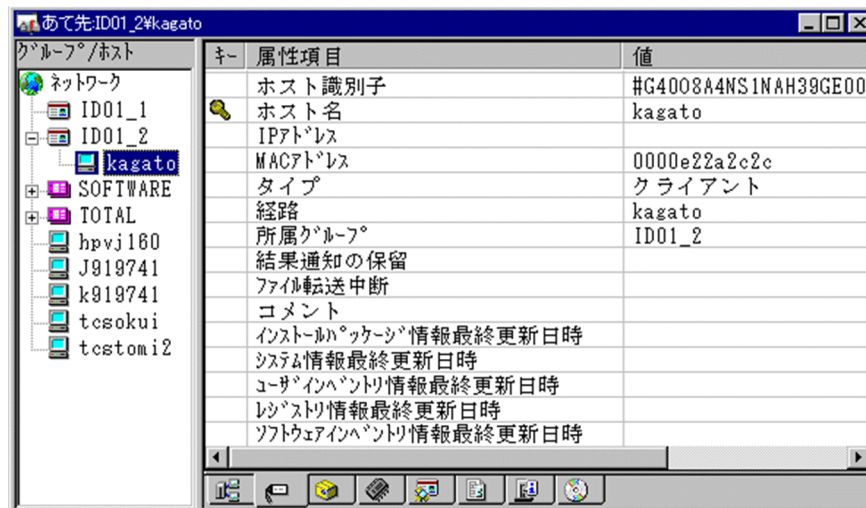
ディレクトリ情報は、Active Directory で管理しているグループを、そのまま配布管理システムで利用する方法です。そのため、あて先グループや ID のような、目的に応じたグルーピングはできませんが、Active Directory で管理しているグループに対してジョブを実行する場合、新たにグループを作成する必要がないので便利です。

ディレクトリ情報と配布管理システム上のシステム構成情報との関係については、「2.10.3 システム構成情報とディレクトリ情報の関係」を参照してください。

(2) あて先のグルーピング方法

あて先グループと ID は、リモートインストールマネージャの「あて先」ウィンドウで設定します。

図 2-51 「あて先」ウィンドウ



あて先グループの作成方法については、マニュアル「構築ガイド」の「8.2 あて先グループを作成する」を参照してください。

ID の作成方法については、マニュアル「構築ガイド」の「8.3 ID を作成する」を参照してください。

参考

ディレクトリ情報は、Active Directory の設定をそのまま引き継ぐため、設定は必要ありません。ディレクトリ情報は、リモートインストールマネージャの「ディレクトリ情報」ウィンドウで参照できます。ディレクトリ情報の取得方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「3.4 ディレクトリ情報を取得する」を参照してください。

「あて先」ウィンドウの左枠には、グループの階層構造が表示されます。左枠の階層をダブルクリックすると、ダブルクリックした階層の下位の階層が表示されます。右枠には左枠で選択したグループに属するホストの情報が表示されます。

「あて先」ウィンドウでは、次に示すアイコンでグループが表示されます。

-  : あて先グループ
-  : ID

ジョブを実行する対象のクライアントは、主に「あて先」ウィンドウで指定します。「システム構成」ウィンドウでも指定できますが、ホストの名称が IP アドレスまたはホスト名で表示されているため、各ホストを認識しにくい場合があります。「あて先」ウィンドウでは、ジョブを実行するホストをグループ単位に指定できます。

システム構成情報が、クライアントのネットワーク構成を管理するための情報であるのに対して、あて先グループや ID は、クライアントをグループに分けて管理するための情報と言えます。効率良くジョブを実行できるよう、グルーピングの基準を検討しておいてください。

2.10.3 システム構成情報とディレクトリ情報の関係

Active Directory から取得したコンピュータやユーザの情報は、配布管理システムのシステム構成情報と引き当てられ、[ディレクトリ情報] ウィンドウに表示されます。[ディレクトリ情報] ウィンドウの表示内容については、「運用ガイド 1」の「1.4.7 [ディレクトリ情報] ウィンドウ」を参照してください。

各情報の引き当て方式について次に示します。

● コンピュータ情報

Active Directory 上のコンピュータ情報の DNS 名（DNS 名がない場合はコンピュータ名）と配布管理システムのシステム構成情報のホスト名が引き当てに使用されます。

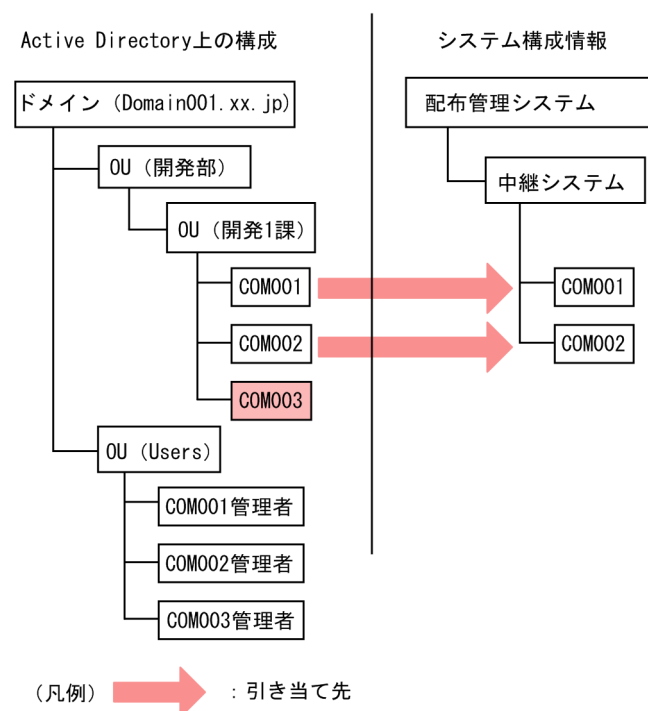
なお、コンピュータ情報は Active Directory 上で DNS 名が設定されていても、配布管理システムのシステム構成情報に該当する情報がない場合は、引き当てられません。引き当てられなかったコンピュータ情報は、次回ディレクトリ情報を配布管理システムに取り込んだ際、Active Directory 上のコンピュータ情報または、配布管理システムのシステム構成情報に変更があった場合に、再度引き当てられます。

● ユーザ情報

引き当てには Active Directory 上のユーザの LDAP 識別名と、Active Directory 上のコンピュータの管理者名が使用されます。ただし、この引き当てに使用するキー情報は、パラメタファイルの作成時に変更できます。

Active Directory とシステム構成情報の関係を次の図に示します。

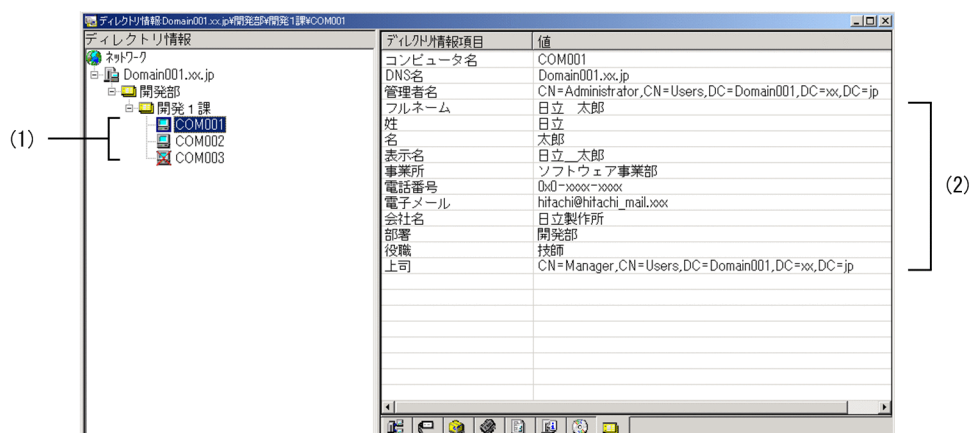
図 2-52 Active Directory で管理している情報とシステム構成情報の関係



この例では、Active Directory から取得したコンピュータ情報の COM001 および COM002 の DNS 名は、システム構成情報のホスト名と一致し、COM003 に該当する情報はありません。したがって、COM001 および COM002 は引き当てられますが、COM003 については引き当てられません。このとき、[ディレクトリ情報] ウィンドウでは、システム構成情報との引き当ての有無がアイコンで表示されます（図 2-53 の (1)）。なお、ユーザ情報は [ディレクトリ情報] ウィンドウでコンピュータ情報の一部として表示され

(図 2-53 の (2))、左枠の階層情報には表示されません。図 2-52 の場合の「ディレクトリ情報」ウィンドウを次に示します。

図 2-53 「ディレクトリ情報」ウィンドウの表示例



(1) : システム構成情報との引き当ての有無

(2) : コンピュータ情報の一部として扱われるユーザ情報

なお、Active Directory 上のコンピュータ情報の DNS 名（DNS 名がない場合はコンピュータ名）に対して、配布管理システムのシステム構成情報に同一名称のクライアントが複数存在する場合、最初に検索されたクライアントが引き当てられます。意図しないクライアントが引き当てられた場合は、「ディレクトリ情報」ウィンドウから変更してください。[ディレクトリ情報] ウィンドウから引き当てを変更する手順については、マニュアル「運用ガイド 1」の「1.4.7 [ディレクトリ情報] ウィンドウ」を参照してください。

引き当て時の注意事項

- ディレクトリ情報の引き当て対象はクライアントだけです。中継マネージャおよび中継システムは、ディレクトリ情報とは引き当てられません。
- 一度ディレクトリ情報を取り込んだあとで、取得項目やコンピュータとユーザの引き当てキーを変更した場合は、全情報を再度取り込んでください。引き当てキーが変更された場合、全情報を再度取り込むまで、ディレクトリ情報は取り込まれません。
- オフラインマシンおよび未導入ホストは、ディレクトリ情報とは引き当てられません。
- Active Directory から取得したディレクトリ情報に、UNIX のクライアントと同一名称のコンピュータ情報が含まれていた場合、次のように引き当てられます。
 - JP1/NETM/DM のシステム全体で、運用キーにホスト識別子を使用する場合、UNIX かどうかで区別されるため、同一名称のコンピュータ情報がディレクトリ情報から取得されても、UNIX のクライアントとは引き当てられません。
 - JP1/NETM/DM のシステム全体で、運用キーに IP アドレスを使用する場合、引き当て時に UNIX かどうかは区別されません。したがって、同一名称のコンピュータ情報がディレクトリ情報から取得されたときは引き当てられます。
- 複数のユーザが引き当たった場合は、最初に引き当たったユーザが引き当てられます。ユーザ情報が更新されて、新しい引き当て先のコンピュータ情報に別のユーザが引き当てられていた場合は、更新されたユーザ情報で上書きされます。

2.10.4 システム構成情報のメンテナンス

システム構成を運用していく上で、システム構成情報のメンテナンスが必要になります。ここでは、新しく追加されたホストを検索してあて先グループに登録したり、重複して登録されているホストを検索して不要なものを削除したりする方法について説明します。また、一定期間インベントリ情報またはソフトウェア稼働情報に更新が見られないホストや、重複して登録されているホストを自動的に削除する方法についても説明します。さらに、あらかじめ作成しておいた条件によって、新しくシステム構成に追加されたホストを、あて先グループや ID に自動的に振り分けて追加する方法についても説明します。

(1) システム構成情報の手動メンテナンス

JP1/NETM/DM Manager の「システム構成」または「あて先」ウィンドウから、一定の条件を満たすあて先を検索できます。検索には次の 3 種類があります。

- あて先名、あて先グループ名、ID 名などの名称をキーにした検索
- ホストの登録日やインベントリ情報の最終更新日などの日付をキーにした検索
- ホスト識別子は異なるが、MAC アドレス、IP アドレス、またはホスト名が一致するホスト（**重複ホスト**）の検索

これらの検索機能を利用して、検索結果のホストを「あて先」ウィンドウにコピーしたり、システム構成情報から削除したりして、システム構成情報をメンテナンスできます。

なお、日付をキーにした検索および重複ホストの検索を実行できるのは、「システム構成」ウィンドウからです。

検索機能を利用してシステム構成情報を手動でメンテナンスする方法については、マニュアル「構築ガイド」の「9.1 システム構成情報の手動メンテナンス」を参照してください。

(2) システム構成情報の自動メンテナンス

不要なホストを検知して、システム構成情報、あて先グループ、および ID から自動的に削除することで、システム構成情報をメンテナンスできます。この機能を**システム構成情報の自動メンテナンス**と呼びます。システム構成情報の自動メンテナンスには、次の 2 種類があります。

- 定期的にインベントリ情報を取得している JP1/NETM/DM システムの場合、一定期間インベントリ情報に更新がなかったホストを自動的に削除する。
- ホスト識別子は異なるが、MAC アドレス、IP アドレス、ホスト名が一致する重複ホストのうち、更新日時が古いホストを自動的に削除する（更新日時が最新のホストだけを残す）。

削除の処理は毎日 1 回、指定した時間から開始されます。ただし、次に示すホストは、システム構成情報の自動メンテナンスの対象外となるため、削除されません。

- 中継マネージャ
- 中継システム
- 中継マネージャおよび中継システムと同じ PC 上のクライアント

システム構成情報からクライアントが自動的に削除された際に同時に削除される情報は、システム構成情報の手動メンテナンスと同じです。詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「9.1.5 検索したホストをシステム構成情報から削除する」を参照してください。

なお、システム構成情報の自動メンテナンスを運用するには、JP1/NETM/DM システムに次の前提条件が必要です。

- JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップで「システム

構成の変更を連携させる」のチェックボックスをオンにしている。

- ホスト識別子を使用している。

(3) あて先グループの自動メンテナンス

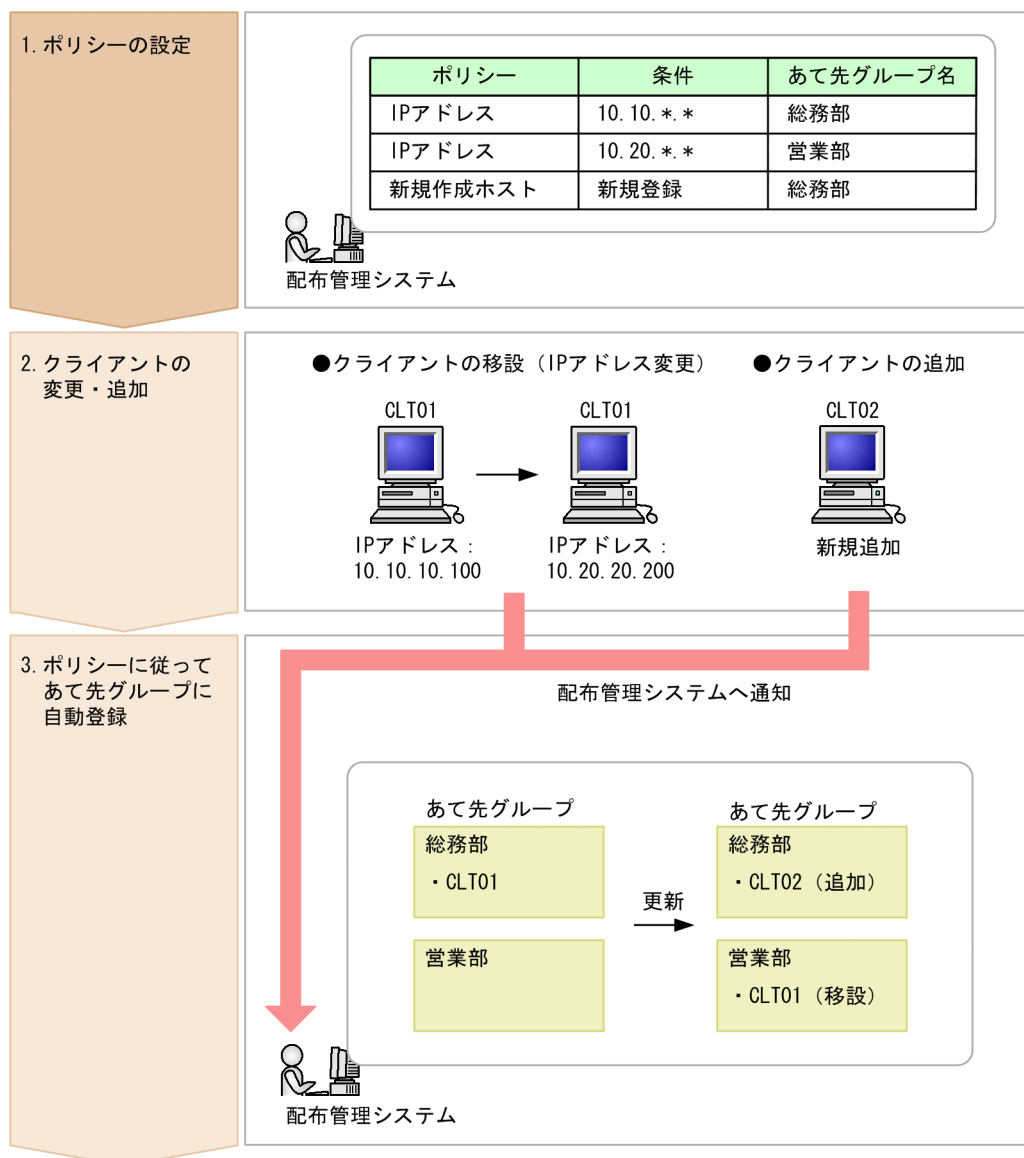
一度作成したあて先グループをメンテナンスする方法としては、[あて先] ウィンドウからの編集や、ファイルからのインポートなどがあります。しかし、数千台規模のホストを管理するシステムの場合などは、システム管理者が定期的にあて先グループを追加・削除するのは負荷が掛かり過ぎます。

JP1/NETM/DM では、リレーショナルデータベースを使用している場合に、システム構成情報を監視することで新たに追加されたホストや移設されたホストを自動的に検知し、あらかじめ作成しておいたグルーピング条件（ポリシー）に従ったあて先グループに自動的に振り分けることができます。このような運用を**あて先グループの自動メンテナンス**と呼びます。あて先グループの自動メンテナンスは、次に示すタイミングで実行されます。

- クライアントからシステム構成情報が通知されたとき
- クライアントからシステム情報が通知されたとき
- クライアントからユーザインベントリ情報が通知されたとき

あて先グループの自動メンテナンスの概要を次の図に示します。

図 2-54 あて先グループの自動メンテナンスの概要



また、クライアントから情報が通知されたタイミング以外に、任意のタイミングであて先グループをメンテナンスすることもできます。これによって、作成したポリシーに従って、システム構成情報に登録されているホストを任意の時点で一括してあて先グループに振り分けられます（**ポリシーの一括反映**）。

あて先グループにポリシーを一括反映する方法については、マニュアル「構築ガイド」の「9.3.2 あて先グループにポリシーを一括反映する」を参照してください。

なお、ポリシーはファイルから作成できます。また、ファイルを入出力することで、既存のポリシーをバックアップしたり、ポリシーを切り替えたりできます。ポリシーをファイルから作成する場合は、マニュアル「構築ガイド」の「9.5 ポリシーをファイルから作成する」を参照してください。

(4) ID の自動メンテナンス

作成した ID に対してどの ID に所属するかは、基本的にはクライアントが決めます。配布管理システムで所属するクライアントを決めたい場合、一定の条件に一致したクライアントを自動的に ID に登録させることができます。[あて先] ウィンドウやファイルのインポートでメンテナンスする方法より効率良く、確

実際にクライアントを ID に登録できます。

このように、ID に一定の条件（ポリシー）を設定して、クライアントを自動的に ID に登録する運用を、**ID の自動メンテナンス**と呼びます。

ID の自動メンテナンスのポリシーには次の 2 種類があります。

● 新規作成クライアントによる ID 登録

JP1/NETM/DM システムへ追加されたクライアントを自動的に検知して、ID に登録させることができます。

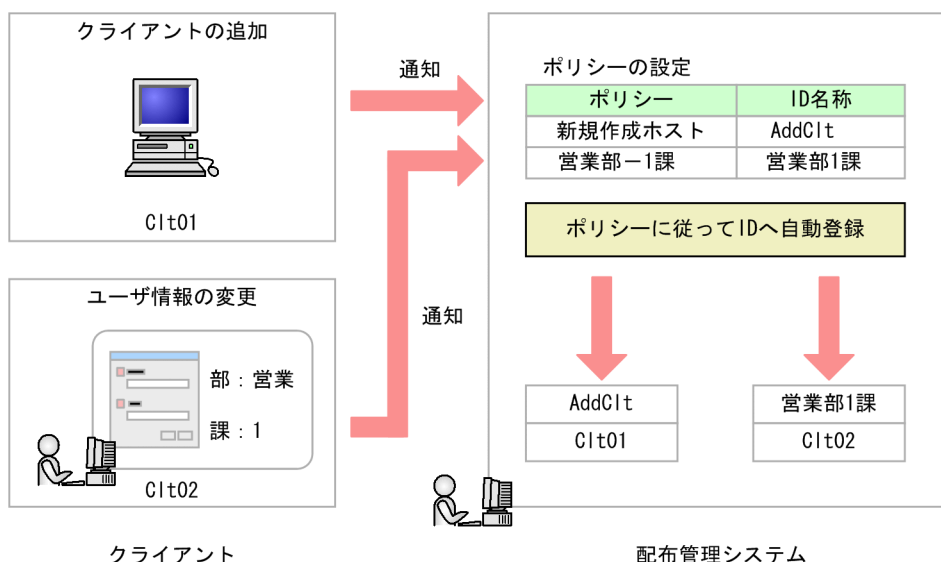
なお、新規に追加されたクライアントを自動的に ID に登録するには、サーバセットアップの「システム構成関連」パネルで、「システム構成情報を自動反映する」チェックボックスをオンにしておく必要があります。

● ユーザインベントリ情報による ID 登録

ユーザインベントリ情報の取得時に、ポリシーに一致するユーザインベントリ情報を持つクライアントを自動的に ID に登録させることができます。

ID の自動メンテナンスの概要を次の図に示します。

図 2-55 ID の自動メンテナンスの概要



ID の自動メンテナンスを利用する方法については、マニュアル「構築ガイド」の「9.4 ID の自動メンテナンス」を参照してください。

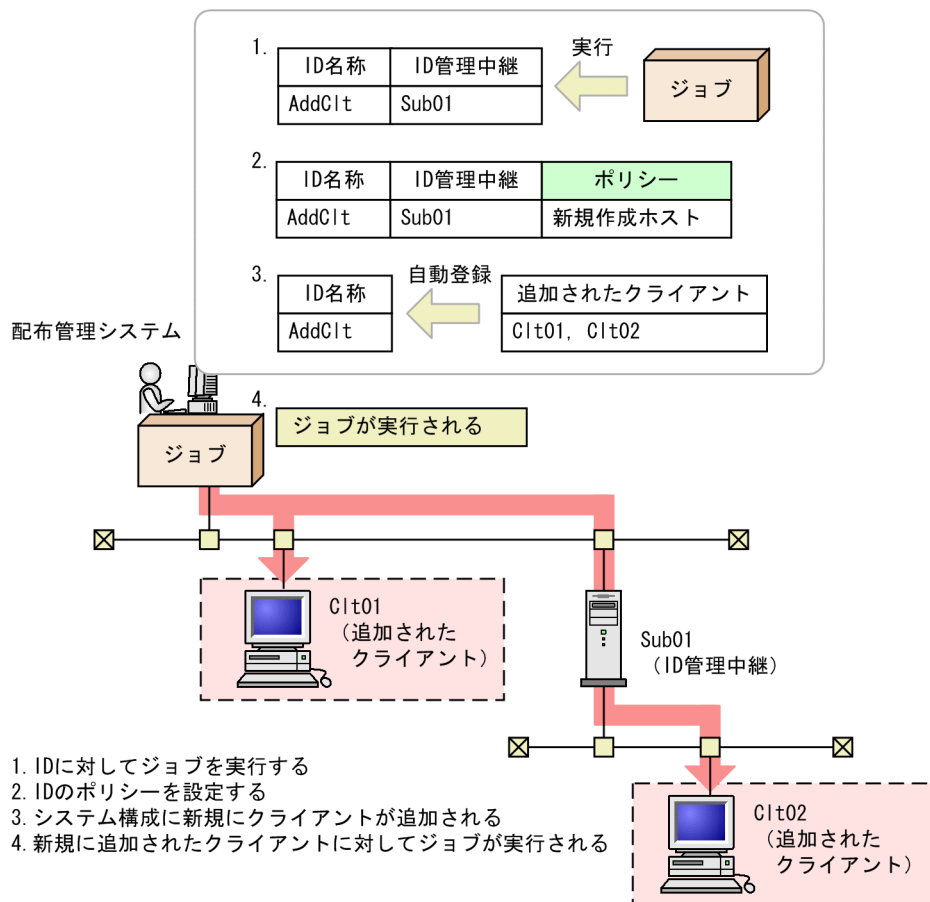
なお、あて先グループの自動メンテナンスと同様に、ファイルからポリシーを作成できます。ポリシーをファイルから作成する場合は、マニュアル「構築ガイド」の「9.5 ポリシーをファイルから作成する」を参照してください。

また、ID の自動メンテナンスを利用してジョブを実行するには、あらかじめ ID に対してジョブを実行しておく必要があります。

例えば、PC 初期導入時に必ず実行したいジョブがある場合、あらかじめ ID に対してジョブを実行しておき、その ID に新規に追加されたクライアントをポリシーとして設定することで、新規に追加されたクライアントへ自動的にジョブを実行できます。

ID 自動メンテナンスを利用したジョブの流れを次の図に示します。

図 2-56 ID 自動メンテナンスを利用したジョブの流れ



(5) ディレクトリ情報の自動メンテナンス

ディレクトリ情報をメンテナンスするには、Active Directory から最新情報を取得します。Active Directory の情報を更新するタイミングで、ディレクトリ情報を取り込むように運用してください。

ディレクトリ情報は、ディレクトリ情報の取得コマンド（dcmadsync.exe）を実行して取得します。このディレクトリ情報の取得コマンドを、Windows のタスクスケジューラにタスクとして登録することで、定期的に Active Directory から最新情報を取り込むことができます。また、JP1/AJS と連携して、定期的にディレクトリ情報の取得コマンドを実行することもできます。

2.10.5 システム構成情報の削除履歴の管理

JP1/NETM/DM Manager では、クライアント、中継システム、および中継マネージャが、いつ、どのような契機で、システム構成情報から削除されたのかがわかるように、削除履歴を管理できます。削除履歴には、削除されたホストのシステム構成情報が保管されるので、削除履歴を基に、ホストをシステム構成情報に復元することもできます。

システム構成情報の削除履歴を管理するには、JP1/NETM/DM Manager のセットアップで、「削除履歴を保管する」をオンにしておく必要があります。

なお、削除したホストのあて先グループ、ID、およびインベントリ情報は、履歴として保管されません。また、システム構成情報をシステム構成情報ファイルから作成したときに一括削除されたホスト、およびオフラインフォルダは、履歴の保管対象にはなりません。

システム構成情報の削除履歴を管理する方法については、マニュアル「構築ガイド」の「9.6 システム構成情報の削除履歴を管理する」を参照してください。

2.10.6 JP1/NETM/DM がインストールされていないホストの検出

配布管理システムから、ネットワーク上に存在するホストを探索（**ホスト探索**）し、JP1/NETM/DM がインストールされていないホスト（**JP1/NETM/DM 未導入ホスト**）を検出することで、JP1/NETM/DM のインストール状況を確認できます。

この機能を利用して、自部門のネットワーク内の JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できます。検出結果を基に、JP1/NETM/DM 未導入ホストに JP1/NETM/DM をインストールすることで、自部門のネットワークに存在するコンピュータ全体を漏れなく JP1/NETM/DM の管理対象にできます。

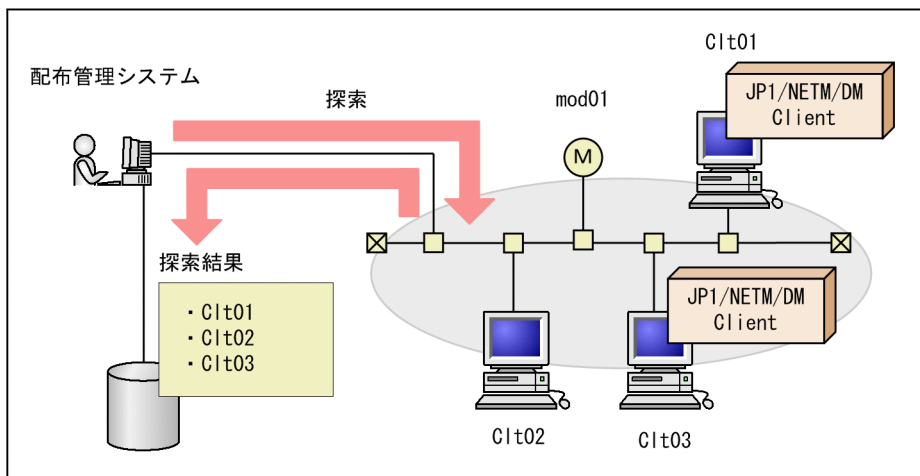
また、検出結果は次のような運用にも活用できます。

- JP1/NETM/DM で管理されていないホストを検出し、ネットワークから切り離してセキュリティを確保する。
- 検出されてから一定期間、JP1/NETM/DM がインストールされなかったホストを確認し、警告メールを送信する。

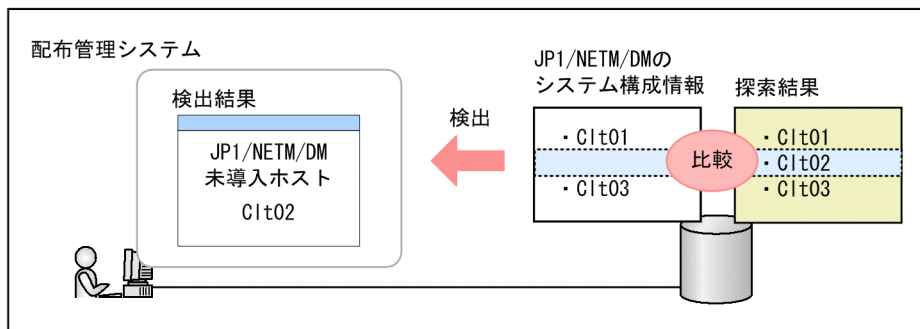
JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能の概要を次の図に示します。

図 2-57 JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能の概要

1. ネットワーク上のホストを探索する



2. JP1/NETM/DM のシステム構成情報と探索結果を比較して、JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する



なお、ホスト探索には SNMP を使用します。そのため、ホスト探索を実行して JP1/NETM/DM 未導入ホ

2. JP1/NETM/DM の機能

ストを検出する場合は、ネットワーク上のルータが SNMP をサポートしている必要があります。

また、ホスト探索を実行する代わりに、ネットワーク内に存在するホストの情報が記述されている CSV 形式ファイル（**ネットワーク構成情報ファイル**）を読み込んで、JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出することもできます。

JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する方法については、マニュアル「構築ガイド」の「9.7 JP1/NETM/DM がインストールされていないホストを検出する」を参照してください。

2.11 管理情報の出力

インベントリ情報、あて先属性、パッケージ属性、ジョブ実行状況など、配布管理システムで管理している情報を、CSV 形式ファイルに出力したり、印刷したりできます。

ここでは、配布管理システムで管理している情報を出力する方法の概要について説明します。

2.11.1 CSV 形式ファイルへの出力

配布管理システムで管理している情報（管理情報）を、CSV 形式のファイルへ出力できます。CSV 形式のファイルに出力した管理情報は、表計算ソフトなどに読み込ませて利用できます。リレーショナルデータベースを使用している場合は、出力範囲を指定して出力できます。

(1) CSV 形式ファイルを出力する方法

管理情報を CSV 形式のファイルへ出力するには、次の二つの方法があります。

● CSV 出力ユーティリティ

管理情報を CSV 形式でファイルに出力するユーティリティです。[CSV 出力ユーティリティ] ダイアログボックスで、出力項目やファイルの出力先を設定して実行します。

CSV 出力ユーティリティを使って管理情報を CSV 形式ファイルへ出力する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「9.1 CSV 出力ユーティリティでファイルを出力する」を参照してください。

● dcmcsvu コマンド

インベントリ情報を CSV 形式ファイルまたはパラメタファイル形式で出力するコマンドです。このコマンドは、リレーショナルデータベース環境を設定した配布管理システムで実行できます。

dcmcsvu コマンドについては、マニュアル「運用ガイド 2」の「4.5 dcmcsvu.exe (CSV 出力)」を参照してください。

(2) EUR と連携したインベントリ管理帳票の作成

出力した CSV 形式ファイルを「日立エンドユーザ帳票作成機能 EUR」と連携させることで、インベントリ管理帳票を作成して印刷できます。

EUR と JP1/NETM/DM の連携については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 F EUR を使ったインベントリ管理帳票の作成」を参照してください。

2.11.2 印刷

配布管理システムで管理している情報を印刷できます。[印刷情報の設定] ダイアログボックスで印刷したい項目を選択し、必要な情報を設定して印刷します。

管理情報を印刷する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「9.2 管理情報を印刷する」を参照してください。

2.12 業務目的に合わせたインベントリ情報の集計

JP1/NETM/DM で取得したインベントリ情報を実際の業務に役立てるには、業務内容に応じて集計したり、目的の情報を絞り込んでリストアップしたりといった作業が必要です。「Asset Information Manager Limited」を利用することで、取得したインベントリ情報を業務目的に合わせて集計したり、リストアップしたりできるようになります。

「Asset Information Manager Limited」のデータベースに JP1/NETM/DM で取得したインベントリ情報を取り込むことで、システム情報、ソフトウェア情報、操作ログなどを関連づけて集計できます。また、インベントリ情報とは別に、部署や設置場所といった情報をクライアントごとに設定して管理することもできます。さらに、分掌を割り当てられたユーザは、他部署のシステム情報やソフトウェア情報を管理できます。

「Asset Information Manager Limited」では、業務目的に合わせたメニューが提供されています。「Asset Information Manager Limited」の集計機能を利用することで、JP1/NETM/DM で管理する情報を次に示す業務に活用できます。

● 機器の管理業務

クライアントを機器として登録して管理できます。

システム情報やソフトウェア情報を条件に機器を集計したり、一定期間インベントリ情報が更新されなかった機器を不稼働の機器として集計したりできます。

このような集計結果を、保有機器の調査やネットワーク構成の調査などに利用できます。

● ソフトウェアの管理業務

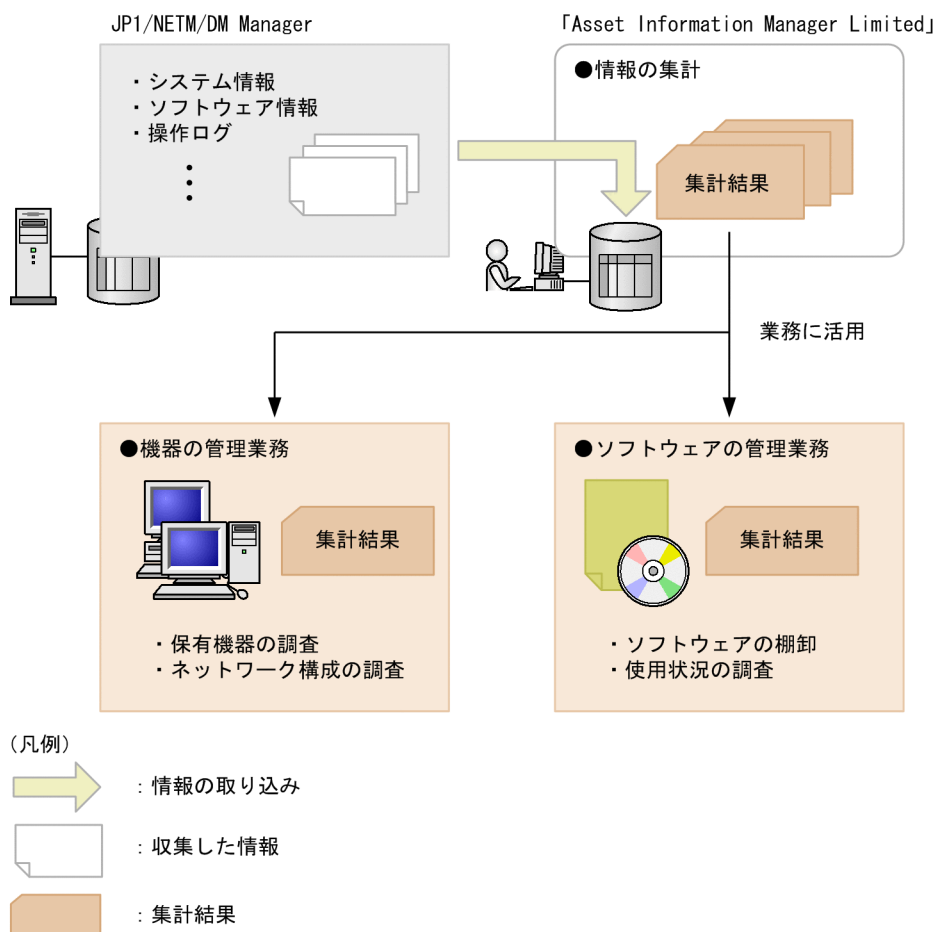
特定のソフトウェアがインストールされている機器を検索したり、インストールを禁止しているソフトウェアがインストールされていないかどうかを調査したりできます。また、ソフトウェアごとの稼働状況を調査することもできます。

このような検索結果を、ソフトウェアの棚卸や使用状況の調査などに利用できます。

なお、「Asset Information Manager Limited」の各操作画面から実行する集計および検索は、部署や設置場所ごとに実行することもできます。

「Asset Information Manager Limited」からの、業務目的に合わせた集計の概要を次の図に示します。

図 2-58 業務目的に合わせた集計の概要



「Asset Information Manager Limited」を使用した操作の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「10. Asset Information Manager Limited を操作する」を参照してください。

2.13 クライアントの機能

配布管理システムで実行されたジョブを受信したり、配布管理システムへインベントリ情報を通知したりする機能を持つシステムを**クライアント**と呼びます。クライアントには、システム構成の最下位にあるクライアント PC だけでなく、ジョブを受信して送信する中継マネージャや中継システムも含まれます。

クライアントの機能を持つシステムを次の表に示します。

表 2-44 クライアントの機能を持つシステム

システム	プログラム
中継マネージャ※	JP1/NETM/DM Manager
中継システム	JP1/NETM/DM Client
クライアント	

注※ サーバコンポーネントをインストールします。サーバコンポーネントについては、マニュアル「構築ガイド」の「1.1.2 コンポーネントの構成」を参照してください。

ここでは、次に示すクライアントの機能について説明します。

- 配布されたソフトウェアのインストール
- ジョブの実行によるインベントリ情報の通知
- 管理者から通知されたメッセージの表示
- クライアントからのインベントリ情報の通知
- クライアントの情報の表示
- ハードウェアの異常の通知

2.13.1 配布されたソフトウェアのインストール

配布管理システムで「パッケージのインストール」ジョブが実行されると、クライアントは、指示されたソフトウェアを自動的にダウンロードし、自システムにインストールします。ソフトウェアのダウンロードとインストールがすべて自動的に実行されるため、各クライアントで「いつ」「何を」インストールするかを意識する必要はありません。

なお、すべてを自動的に実行させる運用が、クライアントのユーザにとって不都合な場合には、(1)、(2)に示すような回避策があります。また、クライアントユーザが手動でソフトウェアを選択してインストールする(3)のような運用方法もあります。

(1) クライアントを停止する

クライアントは、Windows 起動時に自動的に起動しますが、**クライアントマネージャ**を使用すると、手動で停止させることができます。また JP1/NETM/DM Client のセットアップでは、クライアントの非常駐を設定できます。

クライアントが未起動または非常駐の状態では、配布管理システムからのジョブを受けられないため、インストールは実行されません。クライアントユーザの都合の良い時間に、[ジョブ実行]アイコンを起動してジョブを実行できます。クライアントを停止する場合の運用については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.1.2 クライアントの起動状態とジョブの実行」を参照してください。

(2) ジョブの実行タイミングのコントロール

通常、パッケージのダウンロード、インストールなどのジョブのタイミングは、上位のサーバ（配布管理システム）によって決定されていて、クライアント側で意識する必要はありません。クライアントは、配布管理システムからパッケージが転送されたり、ソフトウェアが自動的にインストールされたりするのを待つだけです。

しかし、このような運用では、クライアントでの業務の最中に突然インストールが始まるなどの不都合が起こることも考えられます。クライアントのユーザは、クライアントの都合を無視して一方的にジョブが実行されるのを防いだり、クライアントの都合に合わせてジョブの実行を指示したりできます。

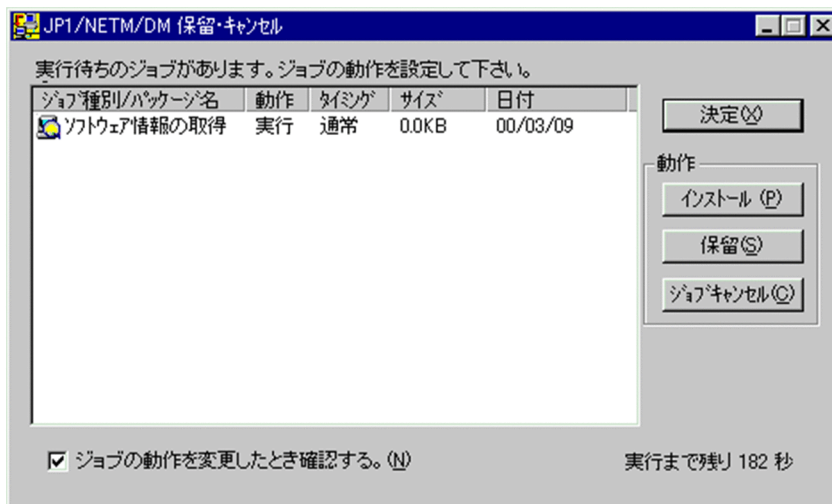
クライアント側で、ジョブの実行タイミングをコントロールするには、次の二つの方法があります。

- ジョブの保留とキャンセル機能を使用する。
- 任意のタイミングでジョブを実行する。

(a) ジョブの保留とキャンセル機能を使用する

上位サーバからの一方的なジョブの実行を防ぐ方法として、**ジョブの保留・キャンセル機能**があります。この機能を使用すると、サーバからジョブが転送されたときに、[JP1/NETM/DM 保留・キャンセル] ダイアログボックスが表示され、ユーザが、そのジョブを実行するかどうかを選択できます。ジョブを即時に実行したくない場合にジョブの実行を一時的に保留したり、ジョブそのものをキャンセルしたりできます。

図 2-59 [JP1/NETM/DM 保留・キャンセル] ダイアログボックス



ジョブの保留・キャンセル機能の使用は、クライアントのセットアップで設定します。[ジョブオプション] パネルで、「ジョブを保留する」チェックボックスをオンにしてください。

なお、保留・キャンセルの対象となるのは、次の 2 種類のジョブだけです。ただし、実行日時（パッケージのインストール日時またはジョブの実行日時）が指定されている場合は保留・キャンセルはできません。

- ・ GUI インストールモードの「パッケージのインストール」ジョブ
- ・ 「システム稼働中実行」が指定された「ソフトウェア情報の取得」ジョブ

ジョブを保留したり、キャンセルしたりする方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.3.1 ジョブの保留・キャンセルの方法」を参照してください。

(b) 任意のタイミングでジョブを実行する

JP1/NETM/DM Client (クライアント) では、[ジョブ実行] アイコンを起動することで、任意のタイミングでジョブを実行することができます。

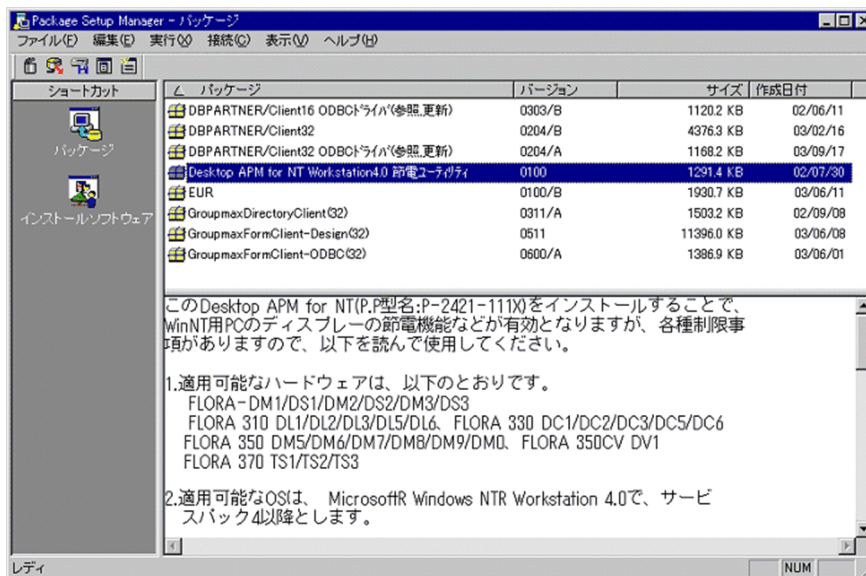
[ジョブ実行] アイコンを使用すると、クライアント側から上位システムと接続して未処理のジョブがないかどうかを確認 (ポーリング) し、あればそのジョブを実行します。ジョブ実行の保留・キャンセル機能を使用して一時的に保留したジョブを実行する場合も、[ジョブ実行] アイコンを使用します。

また、セットアップ時に、クライアントを常駐させない設定にしておくと、[ジョブ実行] アイコン起動時だけジョブを実行することになり、クライアントユーザの都合に合わせてジョブを実行できます。

(3) ソフトウェアを選択してインストールする

配布管理システムから「クライアントユーザによるインストール」ジョブを使用して配布されたソフトウェアは、自動的にインストールされないで、インストールの許可だけが与えられた状態になっています。このようなソフトウェアについては、クライアントユーザが、必要なソフトウェアを選択してインストールします。インストールできるソフトウェアの一覧を表示し、ソフトウェアを選択してインストールするには、クライアントのサブコンポーネントである **パッケージセットアップマネージャ** を使用します。

図 2-60 [Package Setup Manager] ウィンドウ



ユーザ情報を設定していないクライアントは、サーバの設定によって、パッケージセットアップマネージャを使用できないことがあります。また、複数の一般ユーザがパッケージセットアップマネージャを共用することはできません。

パッケージセットアップマネージャの使用方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.4 パッケージセットアップマネージャを操作する」を参照してください。

2.13.2 ジョブの実行によるインベントリ情報の通知

配布管理システムは、各クライアントの状態を把握するため、必要に応じて、クライアントの情報を収集するためのジョブを実行します。情報の取得のために実行されるジョブの種類と、それらのジョブに対するクライアントの動作を次に示します。

「システム情報の取得」ジョブ

このジョブを受け取ったクライアントは、ハードウェアに関する情報（OS の種類や空きハードディスク容量など）を、自動的に上位システムに通知します。

「ソフトウェア情報の取得」ジョブ

このジョブを受け取ったクライアントは、自システムにインストールされているソフトウェアを検索し、その情報を上位システムに通知します。

ソフトウェアの検索は自動的に実行されますが、このとき、クライアントの画面に、処理が開始されたことを示すメッセージダイアログボックスを表示させることができます。また、ジョブを受け取ったときに、[JP1/NETM/DM 保留・キャンセル] ダイアログボックスで、すぐに実行するかどうかを選択することもできます。

「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブ

このジョブが実行されると、配布管理システムが独自に設定した入力項目のダイアログボックスが、クライアントの画面に表示されます。クライアントのユーザはそれらの項目に情報（**ユーザインベントリ情報**）を入力する必要があります。情報を入力するためのダイアログボックスは、セットアップ時の指定によって一定のタイミングで自動的に表示されますが、入力値を変更したい場合など、クライアントのユーザからの指示で表示させることもできます。ユーザインベントリ情報の入力方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.5 ユーザインベントリ情報を入力する」を参照してください。

2.13.3 管理者から通知されたメッセージの表示

配布管理システムからの「メッセージの通知」ジョブが実行されると、管理者が指定したメッセージがクライアントの画面に表示されます。

ここでは、表示されるメッセージの確認方法と、メッセージの表示に関する注意事項について説明します。

(1) 表示されるメッセージの確認

管理者からのメッセージは、メッセージダイアログボックスに表示されます。メッセージダイアログボックスは、クライアントが受信した順に、同時に 10 件まで表示されます。

管理者から通知されるメッセージは、テキスト形式のメッセージと HTML 形式のメッセージの 2 種類があります。テキスト形式のメッセージの場合を図 2-61 に、HTML 形式のメッセージの場合を図 2-62 に示します。

図 2-61 テキスト形式のメッセージ

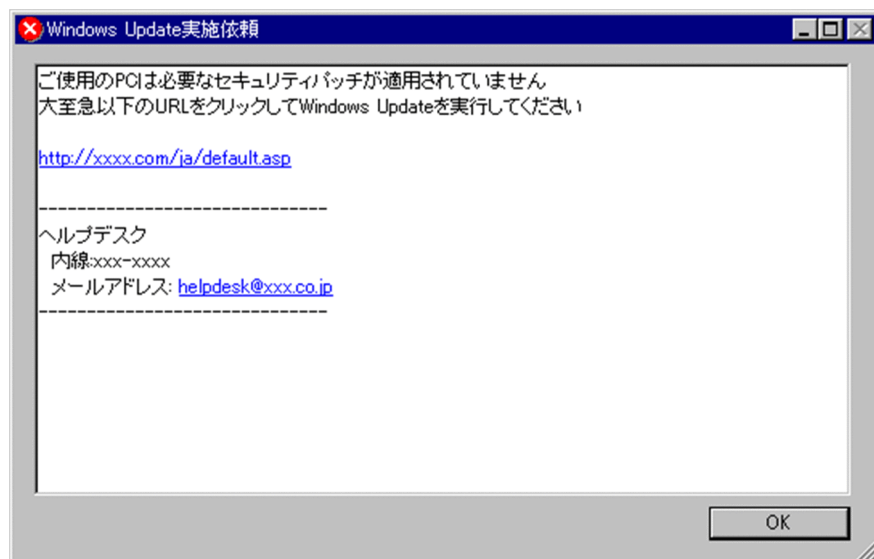
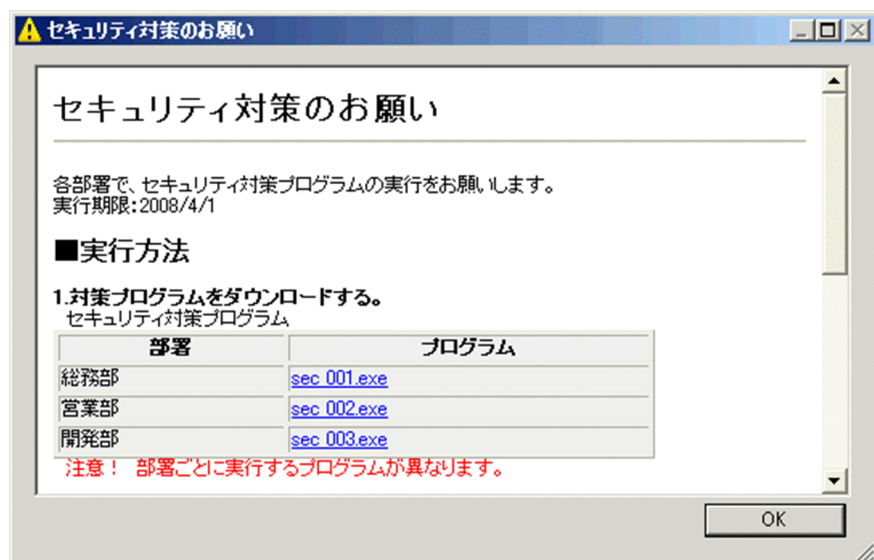


図 2-62 HTML 形式のメッセージ



メッセージダイアログボックスのタイトルバーには、アイコンと、メッセージのタイトルが表示されます。アイコンの意味を次に示します。

- ：情報
- ：注意（危険度の低い情報）
- ：警告（危険度の高い情報）

メッセージの本文に URL が記述されている場合は、リンクが設定されている部分をクリックすると既定のブラウザが起動され、記述されている URL の Web ページを参照できます。メールアドレスが記述されている場合は、リンクが設定されている部分をクリックすると既定のメーラーが起動され、記述されているメールアドレスあてのメールを作成できます。

また、メッセージ本文の表示部分で右クリックして表示されるメニューから、選択した文字列をコピーしたり、メッセージ本文の文字列をすべて選択したりできます。

メッセージを確認したら、[OK] ボタンをクリックして、メッセージダイアログボックスを閉じてください。

なお、バージョンが 08-02 以前のクライアントは、HTML 形式のメッセージを表示できません。バージョンが 08-02 以前のクライアントに HTML 形式のメッセージが通知された場合は、HTML のタグがテキスト形式で表示されます。

また、クライアントで HTML 形式のメッセージを表示する場合は、Microsoft Internet Explorer 4.0 以降がインストールされている必要があります。

(2) メッセージの表示に関する注意事項

メッセージの表示に関する注意事項を次に示します。

- クライアントをインストールまたはアップデートした直後は、PC を再起動しないとメッセージが表示されないことがあります。
- メッセージダイアログボックスを表示したままログオフまたはシャットダウンすると、次にログオンしたときに、前回表示されていたメッセージダイアログボックスが再度表示されます。
- クライアントセットアップの [権限] パネルで「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスをオフにしている場合は、クライアントをインストールしたユーザがログオンしているときにだけ、メッセージが表示されます。
- クライアントの OS が Windows NT の場合で、クライアントセットアップの [クライアント常駐・ポーリング] パネルの「クライアントを常駐する」チェックボックスがオフのとき、メッセージダイアログボックスはログオン直後にだけ表示されます。
- クライアントの OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 または Windows Vista の場合、ユーザ簡易切り替え機能を使用して、複数のユーザにメッセージが表示されているときの注意事項を次に示します。
 - ・メッセージが表示されているユーザが [OK] ボタンをクリックした場合、それ以降にログインしたユーザには、メッセージが表示されません。
 - ・メッセージが表示されているユーザが [OK] ボタンをクリックした場合、それ以前にログインしたユーザがメッセージ内のリンクをクリックすると、エラーが表示されます。
- クライアントの OS が Windows Server 2003 または Windows XP の場合、タスクバーのプロパティで同様のタスクバーボタンをグループ化しているとき、メッセージダイアログに対して、グループを閉じる操作をしてもメッセージダイアログは閉じません。
- HTML 形式のメッセージでは MHTML や DHTML, または HTML と別ファイルになる画像 (JPEG, GIF など) やフレームの使用はサポートしておりません。

2.13.4 クライアントからのインベントリ情報の通知

インベントリ情報を取得するには、配布管理システムからインベントリ情報を取得するためのジョブを実行する必要があります。しかし、大規模システムでは、ジョブの実行によってネットワークに負荷が掛かり過ぎてしまうデメリットがあります。

このような配布管理システム主導のインベントリ情報の取得に代わって、クライアントのインベントリ情報が増えたり減ったりなどのタイミングで配布管理システムへ通知できる機能があります。このクライアント主導のインベントリ情報の通知では、必要なタイミングで必要なクライアントからだけ情報を取得できるため、ネットワークの負荷を軽減できます。

クライアント主導のインベントリ情報の通知方法には、次の 4 種類があります。

表 2-45 クライアント主導のインベントリ情報の通知方法

クライアントでの変更の種別	対応する通知方法	通知のタイミング
ユーザインベントリ情報に変更があった場合	[JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスから通知する	ユーザによる任意の通知
インストールソフトウェアに変更があった場合	パッケージセットアップマネージャから通知する	ユーザによる任意の通知
インベントリ情報が更新された場合	配布管理システムとの接続時に通知する	バックグラウンドでの自動通知
JP1/NETM/DM システムへ新しいクライアントを追加した場合	システム構成の自動登録時に通知する	バックグラウンドでの自動通知

なお、インベントリ情報が通知されるのは、クライアントの上位接続先の配布管理システムです。複数の上位接続先が設定されている場合でも、接続先の配布管理システムだけに通知されます。

また、クライアントとマネージャ（JP1/NETM/DM Manager）の間に中継するシステムとしてバージョン 06-01 以前の Windows 版の中継マネージャ（JP1/NETM/DM Manager）または中継システム（JP1/NETM/DM SubManager）が存在する場合、インベントリ情報をクライアントからマネージャへ通知できません。したがって、クライアント主導のインベントリ情報の通知を使用する場合は、Windows 版の中継するシステムのバージョンを 06-51 以降にしてください。なお、更新されたインベントリ情報を自動的に通知する場合は、中継するシステムのバージョンは 07-00 以降にしてください。

(1) [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからの通知

クライアントのユーザインベントリ情報に変更があった場合、ユーザが任意に [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスから配布管理システムへ通知できます。

配布管理システムへは、ユーザインベントリと同時に、システム情報（システム情報およびレジストリ情報）も通知されます。これらの [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからの通知内容は、「システム情報の取得」ジョブを実行した場合と同じです。

なお、バージョンが 03-00 より前の NETM/DM/W（中継システム）ではユーザインベントリを管理していません。このため、通知された不要なファイルがディスクに蓄積され、ディスクを圧迫するおそれがあります。したがって、[JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスから NETM/DM/W へインベントリ情報を通知する場合は、NETM/DM/W のバージョンを 03-00 以降にしてください。

[JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからインベントリ情報を通知する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.6.1 [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからの通知」を参照してください。

(2) パッケージセットアップマネージャからの通知

ユーザのソフトウェア情報に変更があった場合は、パッケージセットアップマネージャの [インストールソフトウェア] ウィンドウから通知できます。

パッケージセットアップマネージャから通知されるソフトウェア情報は、[インストールソフトウェア] ウィンドウに表示されているソフトウェアに関係なく、クライアントで収集したすべてのソフトウェアが通知されます。

パッケージセットアップマネージャからソフトウェア情報を通知する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.6.2 パッケージセットアップマネージャからの通知」を参照してください。

(3) 更新されたインベントリ情報の自動通知

ソフトウェアの新規インストールやパッチの適用など、特定のインベントリ情報を更新した場合に、ジョ

ブの実行やポーリングによって配布管理システムと接続するタイミングで、インベントリ情報を自動的に配布管理システムへ通知できます。

この機能は、配布管理システムおよびクライアントのバージョンが 07-50 以降の場合に使用できます。中継するシステムを使用する場合は、バージョンが 07-00 以降の中継するシステムを使用してください。

インベントリ情報が更新されたときに配布管理システムへ通知するための設定については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.6.3 更新されたインベントリ情報の自動通知」を参照してください。

(a) 通知されるインベントリ情報

この機能では、OS 情報やパッチ情報、ウィルス対策製品など、セキュリティ管理に利用できるインベントリ情報を監視します。

監視しているインベントリ情報が更新された場合、更新されたインベントリ情報を含むシステム情報やソフトウェア情報などが通知されます。

更新を監視するインベントリ情報と、通知されるインベントリ情報の対応を次の表に示します。

表 2-46 更新を監視するインベントリ情報と通知されるインベントリ情報の対応

更新を監視するインベントリ情報	通知されるインベントリ情報
ホスト名	- システム情報 - レジストリ情報 - ソフトウェア情報 [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されたソフトウェア - 日立プログラムプロダクト - 適用済みパッチ※² - 未適用パッチ※² - Microsoft Office 製品の情報 - ウィルス対策製品の情報 - 標準検索リスト - ユーザインベントリ情報
MAC アドレス	
次に示す OS 情報 - OS バージョン - OS サブバージョン - OS ビルド番号	
次に示す IE 情報 - インターネットエクスプローラバージョン - IE パッチ情報	
次に示すセキュリティ関連の情報 - Guest アカウント - パスワードを更新してからの経過日数 - 無期限のパスワード - 自動ログオンの設定 - 共有フォルダ - 匿名接続の制限 - スクリーンセーバー - スクリーンセーバー パスワードの保護 - パワーオンパスワード - Windows ファイアウォールの設定 - Windows 自動更新 - 不要なサービス - BitLocker による暗号化情報 - JP1/ 秘文 IC および秘文 IC による暗号化情報 - 秘文 FDE による暗号化情報	- システム情報 - レジストリ情報

更新を監視するインベントリ情報	通知されるインベントリ情報
[アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されたソフトウェア 日立プログラムプロダクト※ ¹ 適用済みパッチ WUA 用のデータベースファイル MBSA 1.2.1 用のデータベースファイル	• [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されたソフトウェア • 日立プログラムプロダクト • 適用済みパッチ※ ² • 未適用パッチ※ ²
Microsoft Office 製品の情報※ ³	
ウィルス対策製品の情報※ ³	
	Microsoft Office 製品の情報
	ウィルス対策製品の情報

注※ 1

日立プログラムプロダクトがアンインストールされた場合、インベントリ情報は自動的に通知されません。配布管理システムで日立プログラムプロダクトのアンインストールを確認するには、ジョブを実行してソフトウェア情報を取得する必要があります。

注※ 2

適用済みパッチおよび未適用パッチの情報が自動的に通知されるためには、クライアントでパッチ情報を検出できるよう設定しておく必要があります。パッチ情報を検出する設定については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.2.2 WUA を使用した検出に必要なファイルの配布」または「7.2.3 MBSA 1.2.1 を使用した検出に必要なファイルの配布」を参照してください。

注※ 3

クライアントの OS が Windows NT 4.0 または Windows 98 のときは、クライアント側に「Windows スクリプティングホスト」をインストールしておく必要があります。インストールされていない場合は、Microsoft 社のホームページから Windows Script 5.6 をダウンロードし、インストールしてください。

また、次に示すタイミングでも、配布管理システムへインベントリ情報を通知します。このとき、表 2-46 で示したすべての通知されるインベントリ情報に、JP1/NETM/DM で配布したソフトウェアの情報を加えたインベントリ情報が通知されます。

- クライアントの新規インストール時
- クライアントセットアップでの接続先の変更時
- 上位システムがホスト識別子を使用しない運用から使用する運用に変更した場合

(b) 注意事項

インベントリ情報を自動的に通知する場合の注意事項を次に示します。

- インベントリ情報を自動的に通知する場合、クライアントのインベントリ情報が更新されるたびに情報を通知するので、不定期にサーバやネットワーク環境に負荷が掛かることがあります。サーバやネットワーク環境に負荷を掛けずに運用する必要がある環境では、自動的にインベントリ情報を通知する設定をオフにして、ジョブを実行してインベントリ情報を取得してください。
- 自動的にインベントリ情報を通知する場合に、バージョンが 07-00 より前の UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager が中継されたときは、UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager に不要なファイルが蓄積され、ディスクを圧迫するおそれがあります。
- ソフトウェア検索リストを使用して取得・管理された日立プログラムプロダクトのソフトウェア情報は、自動的に通知されるソフトウェア情報と異なる場合があります。そのため、日立プログラムプロダクトのソフトウェア情報は、ソフトウェア検索リストを使用するか、自動的にインベントリ情報を通知させるかの、どちらかで取得・管理する必要があります。
- 上位システムのバージョンを変更した場合は、インベントリ情報を自動的に通知しているクライアント

に、「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「Microsoft Office 製品を検索」および「ウィルス対策製品を検索」を実行してください。ジョブを実行しない場合、情報が正しく通知されないおそれがあります。

- クライアントの接続先を、いったんほかの上位システムに切り替えてから元の接続先に戻した場合、ほかの上位システムに接続している間にアンインストールされたソフトウェア情報は、元の接続先に戻したときに通知されないことがあります。
- WUA を使用してパッチ情報を検出する場合、配布管理システムと接続するタイミングでパッチ情報に変更があったかどうかを WUA がチェックします。WUA によるパッチ情報の検出には時間が掛かる場合があるので、次の点に注意してください。
 - クライアントのセットアップでポーリングを有効にし、ポーリングの間隔を短く設定していると、クライアントに負荷が掛かることがあります。これを防ぐため、クライアントのセットアップの「クライアント常駐・ポーリング」パネルに指定するポーリングの間隔は、できるだけ大きな値を指定してください。
 - クライアントのセットアップでポーリングを有効にし、起動時ポーリングのタイミングを「システム起動前」に設定している場合、「NETM_DM_P スタートアップ」フォルダに登録されているプログラムの起動に時間が掛かる場合があります。
 - WUA を使用してパッチ情報を検出する場合は、クロック数 2.0 ギガヘルツ以上のプロセッサを搭載した PC、または複数のプロセッサを搭載した PC など、CPU 性能の高い PC の使用をお勧めします。

(4) システム構成の自動登録時の通知

ネットワークへの PC の追加、クライアントのインストール、クライアントの接続先の変更によって、JP1/NETM/DM システムへ新しいクライアントが追加されたタイミングで、配布管理システムへインベントリ情報を自動的に通知できます。

クライアントが追加されたときに、配布管理システムへインベントリ情報を通知するための設定については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.6.4 システム構成の自動登録時の通知」を参照してください。

(a) 通知されるタイミング

配布管理システムへインベントリ情報が通知されるタイミングを次に示します。

- クライアントの新規インストール時
- クライアントセットアップでの接続先の変更時
- 上位システムがホスト識別子を使用しない運用から使用する運用に変更した場合

(b) 通知されるインベントリ情報

通知されるインベントリ情報を次に示します。

- システム情報（システム情報およびレジストリ情報）
- [アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に記録されたソフトウェア情報

なお、バージョンが 05-21 より前の NETM/DM/W（中継システム）ではレジストリ情報を管理していません。このため、レジストリ情報の通知によって不要なファイルがディスクに蓄積され、ディスクを圧迫するおそれがあります。したがって、システム構成登録時に NETM/DM/W へインベントリ情報を通知する場合は、NETM/DM/W のバージョンを 05-21 以降にしてください。

2.13.5 クライアントの情報の表示

クライアントユーザが自 PC の状態を把握するには、ローカルシステムビューアを使用します。

ローカルシステムビューアには、自 PC のハードウェアやソフトウェアに関する情報が表示されます。ハードディスクとメモリについては、全体のサイズと現在の使用状況がグラフィカルに表示されるので、正常な状態かどうかを容易に把握できます。クライアントユーザは、自席からいつでもこれらの情報を閲覧できます。ローカルシステムビューアの操作方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.7 ローカルシステムビューアを操作する」を参照してください。

2.13.6 ハードウェアの異常の通知

クライアントには、あらかじめ設定した条件に従ってハードディスクおよびメモリを監視し、異常を検知するとアラートを通知する機能があります。これを**システム監視**と呼びます。ここで設定した内容で、ローカルシステムビューアに表示されます。

例えば、ハードディスクまたはメモリの空き容量が一定以下に減少すると、クライアントはポップアップメッセージを表示したり、ローカルシステムビューアの画面上に異常を示すマークを表示したりして、ユーザに危険な状態であることを通知します。また、システム監視用のアイコンをタスクバーの通知領域に表示しておくことで、システム監視機能の起動状態やアラートの発生状況を常時確認できます。さらに、クライアントが上位システムに接続している場合は、上位システムへアラートを通知することもできます。

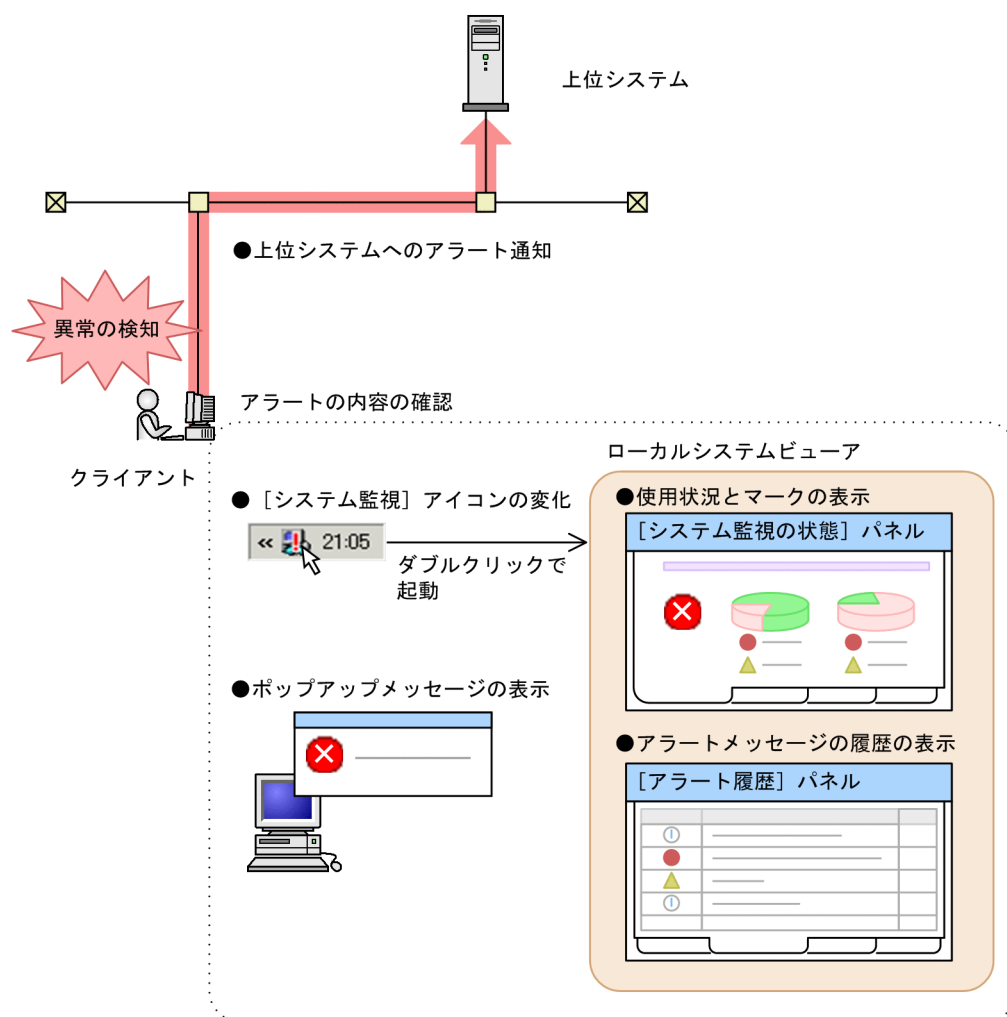
アラートの出力方法には、次の 5 種類があります。

1. ローカルシステムビューアの「システム監視の状態」パネルに使用状況を表示する（デフォルト）。
2. ローカルシステムビューアの「アラート履歴」パネルにアラートメッセージを表示する（デフォルト）。
3. ポップアップメッセージでアラートを通知する。
4. 上位システムへアラートを通知する。
5. 「システム監視」アイコンの変化でアラートを通知する。

1 および 2 だけでは、ローカルシステムビューアを起動しないと、アラートの発生に気付くことができません。そこで、アラートの発生を即時に確認できるように、クライアントは**「システム監視」アイコン**（)を使用します。「システム監視」アイコンは、タスクバーの通知領域に表示して、システム監視機能をスムーズに利用するためのインターフェースです。このアイコンを表示すると、アイコンの変化によってアラートの発生を知ったり、アイコンのダブルクリックによってローカルシステムビューアを起動し、アラートの内容を確認したりできます。

アラート通知の概要を、次の図に示します。

図 2-63 アラート通知の概要



アラートの通知方法やシステム監視の対象は、あらかじめ詳細に設定できます。例えば、ポップアップメッセージを表示しないで上位システムへだけ通知したり、ハードディスクだけ監視してメモリに関するアラートは通知させないようにしたりできます。

これらの機能を利用するには、クライアントセットアップでデフォルトの設定を変更します。システム監視の仕組みや設定方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11.8 システム監視によるアラート通知」を参照してください。

また、上位システム側で、通知されたアラートを確認する方法については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.4 クライアントから通知されたアラートを確認する」を参照してください。

2.13.7 クライアントを使用する場合の注意事項

クライアントを使用する場合の注意事項を示します。

クライアントの OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008, または Windows Vista の場合は、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 A.6 8・2012・7・2008・Vista 版 JP1/NETM/DM Client を使用するときの注意事項」もあわせて参照してください。

● 他社ソフトウェアインストール時の注意事項

他社ソフトウェアのリモートインストール中に、動作中のインストーラに対し画面操作をしないでください。インストールがハングアップする場合があります。

● パスワードロック時の注意事項

クライアントの PC がパスワードでロックされている（[Ctrl] + [Alt] + [Delete] キーの入力を要求するダイアログボックスが表示されている）と、GUI インストールモードで画面応答が必要なソフトウェアは、画面応答ができないためリモートインストールされません。なお、リモートインストールに対応した日立プログラムプロダクトは、リモートインストール時に画面応答が不要なため、ロックされていてもインストールされます。

● クライアントが起動できないまたは起動に時間が掛かる

次に示す場合、クライアント（または中継システム）が起動できない、または起動に時間が掛かることがあります。

1. 接続先の上位システムが起動していない。
2. 前回の起動中に処理できなかったジョブ結果を送信している。
3. セットアップの「クライアント常駐・ポーリング」パネルで、「システム起動時からのポーリング」を選択し、システム起動時のポーリングのタイミングを「システム起動前」に設定している。

1. の場合は、接続先の上位システムが起動すれば、クライアントは起動されます。
2. または 3. の場合は、ジョブ結果の送信や上位システムのポーリングが終了すれば、クライアントは起動されます。

● インストールプロセスがハングアップした場合の対処

リモートインストール時に起動させたユーザプログラムがハングアップしたり、GUI インストールモードでのユーザプログラム終了コード通知インターフェースが不正だったりした場合、リモートインストールのプロセスもハングアップします。プロセスがハングアップしたら、クライアントの PC を再起動してください。

● 分割配布の場合の注意事項

クライアントが非常駐およびポーリングしない環境での分割配布

クライアントが非常駐の場合は、「ジョブ実行」を起動したときに分割配布待ちのジョブが実行されます。分割配布のジョブを実行後、転送休止時間を過ぎた時刻に「ジョブ実行」を起動すると次の分割配布のジョブが実行されます。

クライアントがポーリングしない場合、サーバからの起動だけで分割配布が実行されます。起動に失敗した場合は、非常駐の場合と同様に「ジョブ実行」で分割配布待ちのジョブを実行する必要があります。

したがってクライアントが非常駐およびポーリングしない環境では分割配布が「ジョブ実行」のタイミングとなるため、分割配布の運用を避けることをお勧めします。

保留キャンセルと分割配布

分割配布では分割されたジョブがすべて転送完了したあと、インストールするかしないかを問い合わせる「保留キャンセル」画面が表示されます。このとき、インストールを選択すると、インストールが開始されます。保留を選択すると、インストールは保留され、ユーザからの指示があるまでインストールされません。キャンセルを選択すると、ジョブは削除されインストールされません。キャンセルしたジョブを再実行すると、分割配布から再度実行されます。

分割配布のインストール日時指定

インストール日時指定の分割配布のとき、分割配布の途中でインストール日時を過ぎた場合でも、分割配布で分割されたジョブがすべて転送完了したあとにインストールが開始されます。

分割配布の起動時組み込み

システム起動時組み込み指定の分割配布の場合、分割されたジョブがすべて転送完了した時点以降の次の起動時にインストールが開始されます。

● 仮想化環境で使用する場合の制限事項

仮想化環境で JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールまたは操作する場合の制限について説明します。なお、OS の種類によっては、JP1/NETM/DM Client（クライアント）が仮想化環境に対応していない場合があります。OS の注意事項については、マニュアル「構築ガイド」の「1.1.1 適用 OS」を参照してください。

リモートデスクトップに関する制限事項

- リモートデスクトップで接続して JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする場合、インストールセットは使用できません。
- リモートデスクトップで接続してパッケージをインストールする場合、オフラインインストールはできません。
- OS が Windows Server 2003 の場合、リモートデスクトップで接続して JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールまたは操作するときは、コンソールセッションに接続してください。コンソールセッションに接続するには、次のように「/console」パラメタまたは「/admin」パラメタを指定してリモートデスクトップ接続クライアントを実行します。
 - /console パラメタの場合

```
mstsc.exe /console
```

- /admin パラメタの場合

```
mstsc.exe /admin
```

なお、コンソールセッションに接続するためのパラメタは、リモートデスクトップ接続クライアントのバージョンによって異なります。

- OS が Windows Server 2012、または Windows Server 2008 の場合、リモートデスクトップで接続して JP1/NETM/DM Client（クライアント）を操作するときは、複数のユーザで同時に JP1/NETM/DM のアプリケーションを実行できません。

ユーザの簡易切り替え機能に関する制限事項

- OS が Windows 8、Windows Server 2012、Windows 7、Windows Server 2008、Windows Vista の場合、ユーザの簡易切り替え機能を使用して JP1/NETM/DM Client（クライアント）を操作するときは、複数のユーザで同時に JP1/NETM/DM のアプリケーションを実行できません。

ターミナルサーバに関する制限事項

- ターミナルサーバで JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限事項については、マニュアル「構築ガイド」の「付録 B ターミナルサーバでの JP1/NETM/DM Client（クライアント）の運用」を参照してください。付録 B では、Citrix XenApp に関する制限事項についても説明しています。

Windows XP Mode に関する制限事項

- Windows XP Mode 環境で JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合の制限事項については、マニュアル「構築ガイド」の「付録 C Windows XP Mode 環境での JP1/NETM/DM Client（クライアント）の運用」を参照してください。

Modern UI アプリに関する制限事項

- Modern UI アプリをソフトウェア情報として管理することはできません。
- ソフトウェア稼働監視機能の全機能は Modern UI アプリをサポートしません。

2.14 他プログラムとの連携

JP1/NETM/DM は他の JP1 製品と連携して使用することで、ソフトウェアの配布やクライアントの資産管理をシステム全体の管理と統合して行うことができます。

ここでは、JP1/NETM/DM と他プログラムを連携した運用の概要について説明します。

2.14.1 JP1/Base と連携した JP1/NETM/DM のユーザ管理

JP1/Base と連携することで、JP1/Base のユーザ管理機能で管理する **JP1 ユーザ**を JP1/NETM/DM のユーザとして使用できます。このとき、JP1/NETM/DM を使用する際のユーザ認証は、データベースではなく JP1/Base の認証サーバに対して実行されるようになります。

JP1 ユーザは、ユーザごとに権限を設定できます。管理者ごとに権限を設定した JP1 ユーザを作成することで、特定の管理者だけが設定を変更できるようにしたり、管理者の業務を分担したりできます。JP1/NETM/DM では、管理者の業務ごとに 6 種類の権限を設定できます。JP1/NETM/DM が提供する権限の種類を次の表に示します。

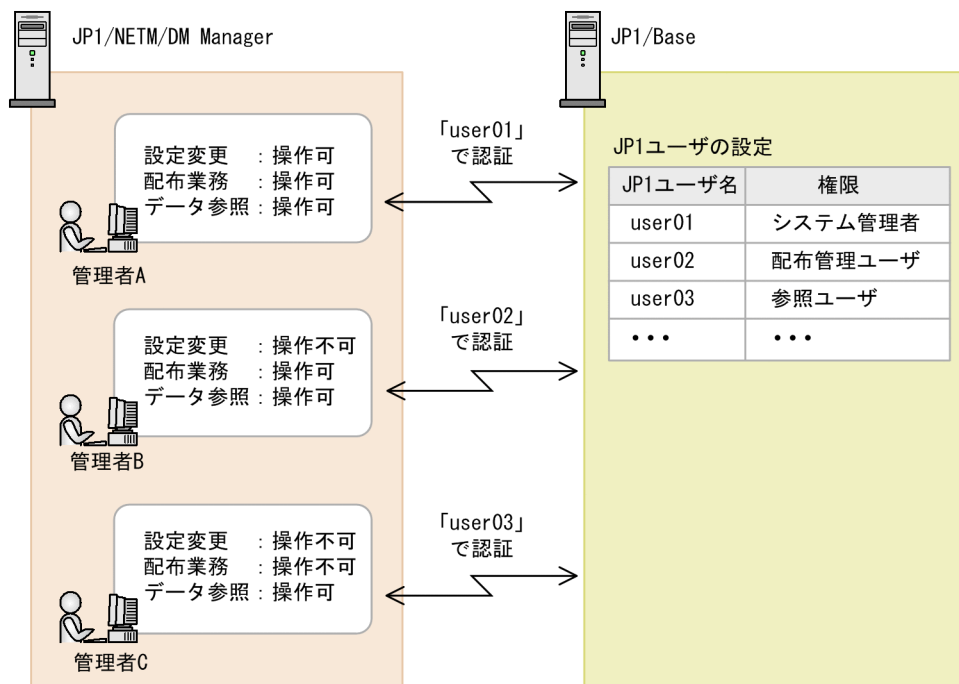
表 2-47 JP1/NETM/DM が提供する権限の種類

項番	権限	概要
1	システム管理者	JP1/NETM/DM のすべての機能を使用できる権限です。JP1/NETM/DM システム全体を管理する管理者に設定します。
2	配布管理ユーザ	ソフトウェアの配布やパッケージングなどができる権限です。配布管理業務を行う管理者に設定します。
3	資産管理ユーザ	インベントリ情報の収集、集計、印刷などができる権限です。資産管理業務を行う管理者に設定します。
4	収集管理ユーザ	クライアントのファイルをリモートコレクトできる権限です。収集管理業務を行う管理者に設定します。
5	システム監視ユーザ	クライアントの稼働状況を監視できる権限です。クライアントでの不正操作を監視する管理者に設定します。
6	参照ユーザ	データの参照だけが許可された権限です。ジョブの実行やインベントリ情報の集計はできません。

ユーザ管理機能を使用すると、アンアーカイバを起動するときにもユーザ認証が必要になります。また、権限によって使用できる操作や実行できるジョブが異なります。不正なユーザによる操作を防止し、配布管理システムのセキュリティを高めることができます。

JP1/Base と連携したユーザ管理の概要を次の図に示します。

図 2-64 JP1/Base と連携したユーザ管理の概要



ユーザ管理機能を使用するかどうかは、JP1/NETM/DM Manager のインストール時に選択します。ユーザ管理機能を使用する場合、JP1/NETM/DM の運用を開始する前に JP1 ユーザを設定しておく必要があります。

なお、ユーザ管理機能を使用する場合、JP1/Cm2 連携機能は使用できません。

JP1/Base と連携したユーザ管理の詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「1. JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理する」を参照してください。

2.14.2 JP1/NETM/Asset Information Manager からのソフトウェア適用管理

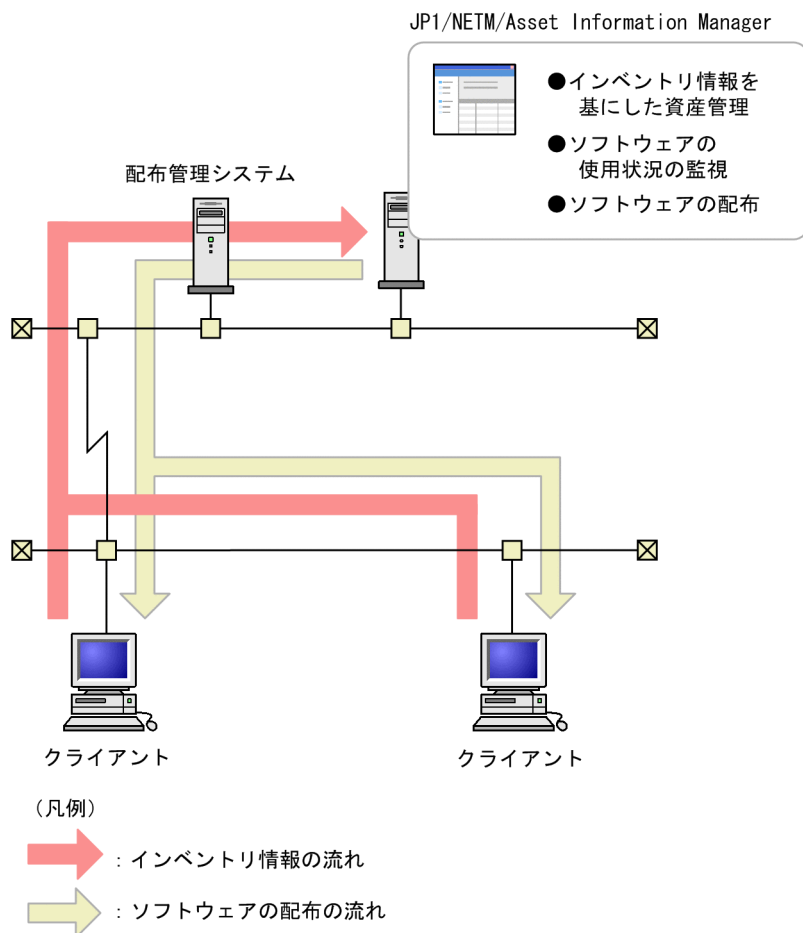
JP1/NETM/Asset Information Manager は、ソフトウェアやハードウェア、ネットワークなどの企業内の資産を統合的に管理するプログラムです。

JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面から、ソフトウェアの適用管理ができます。

JP1/NETM/Asset Information Manager で管理している情報を利用して木目細かな条件で機器を検索し、検索結果として得られた機器に対してソフトウェアを配布できます。また、ソフトウェアの配布状況を確認することもできます。なお、配布するソフトウェアは、事前に JP1/NETM/DM でパッケージングしておく必要があります。

JP1/NETM/Asset Information Manager と連携した、ソフトウェア適用管理の概要について次の図に示します。

図 2-65 JP1/NETM/Asset Information Manager と連携したソフトウェア適用管理の概要



また、JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面から、JP1/NETM/DM で取得した操作履歴やソフトウェアの稼働状況を参照することもできます。JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面では、JP1/NETM/DM の「操作ログ一覧」ウィンドウや「ソフトウェア稼働状況」ウィンドウと同等の機能を使用できます。

JP1/NETM/Asset Information Manager からソフトウェアの適用管理をする機能の詳細、および連携に必要な設定については、マニュアル「JP1/NETM/Asset Information Manager 設計・構築ガイド」を参照してください。

2.14.3 JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理

JP1/NETM/Client Security Control は、クライアントの資産情報の管理から、クライアントの監視、セキュリティリスクへの対処までの一連の運用管理（**クライアントセキュリティ管理**）を実現するプログラムです。JP1/NETM/Client Security Control を導入することで、システムのセキュリティ対策を強化できます。

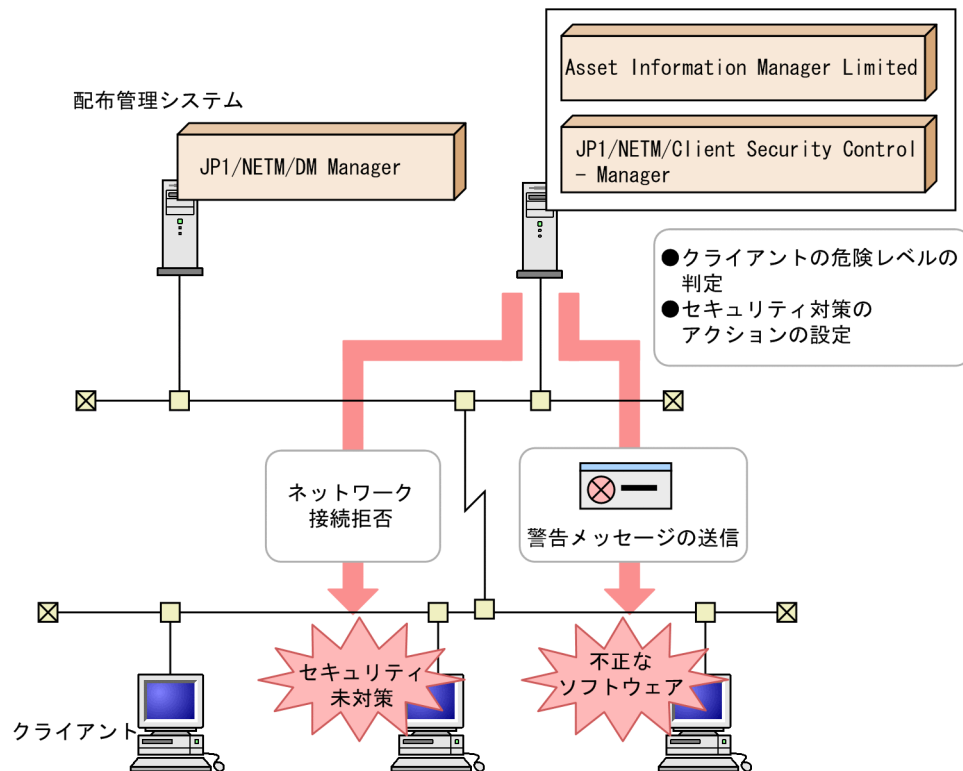
JP1/NETM/Client Security Control を導入したクライアントセキュリティ管理システムでは、JP1/NETM/DM で収集したインベントリ情報を利用して、クライアントのセキュリティ対策状況を監視します。セキュリティ対策に問題があった場合は、危険レベルに応じて、警告メッセージの通知やネットワーク接続拒否などのアクション（対策）を実施できます。

なお、JP1/NETM/Client Security Control と連携するためには、JP1/NETM/DM のコンポーネント

「Asset Information Manager Limited」をインストールする必要があります。

JP1/NETM/Client Security Control と連携した、セキュリティ管理の概要を次の図に示します。

図 2-66 JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理の概要



JP1/NETM/Client Security Control を導入したセキュリティ管理の詳細、および連携に必要な設定については、マニュアル「JP1/NETM/Client Security Control」を参照してください。

2.14.4 JP1/IM からの JP1/NETM/DM の管理

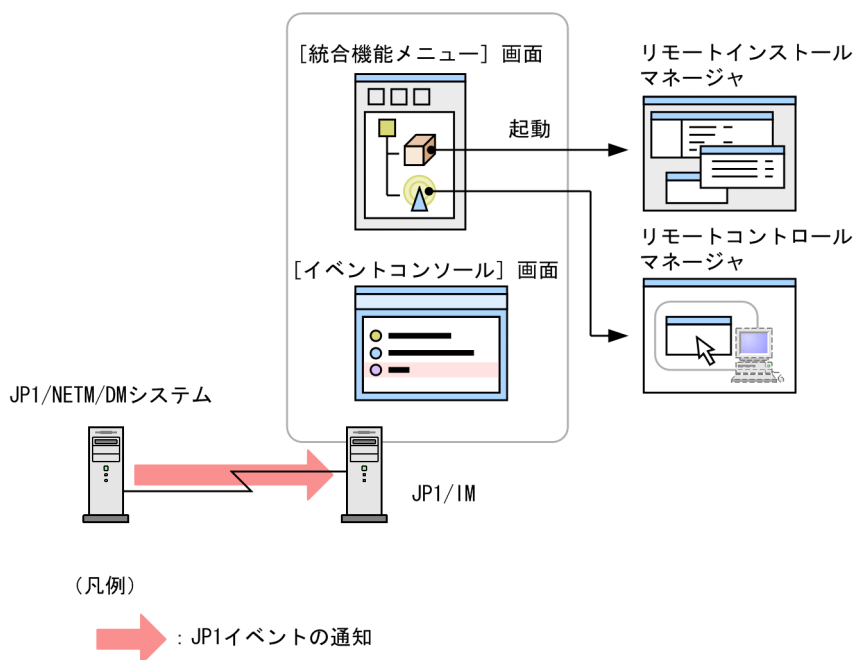
JP1/IM は、ほかの JP1 シリーズと連携し、システム全体を統合管理するプログラムです。

JP1/IM の JP1/IM - View には、JP1/IM から起動できるプログラムを選択する画面（**〔統合機能メニュー〕画面**）があります。この〔統合機能メニュー〕画面から JP1/NETM/DM のリモートインストールマネージャおよびリモートコントロールマネージャを起動できます。

また、JP1/NETM/DM は、ジョブの実行結果などを JP1/IM に通知できます。JP1/IM の JP1/IM - View では、通知された情報を、システムの稼働状況を監視する〔イベントコンソール〕画面から確認できます。

JP1/IM と連携した、JP1/NETM/DM の管理の概要を次の図に示します。

図 2-67 JP1/IM と連携した JP1/NETM/DM の管理の概要



JP1/IM から JP1/NETM/DM を管理する機能の詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「2. JP1/IM から JP1/NETM/DM を管理する」を参照してください。

JP1/IM の機能および操作方法の詳細については、マニュアル「JP1/Integrated Management - Manager 運用ガイド」を参照してください。

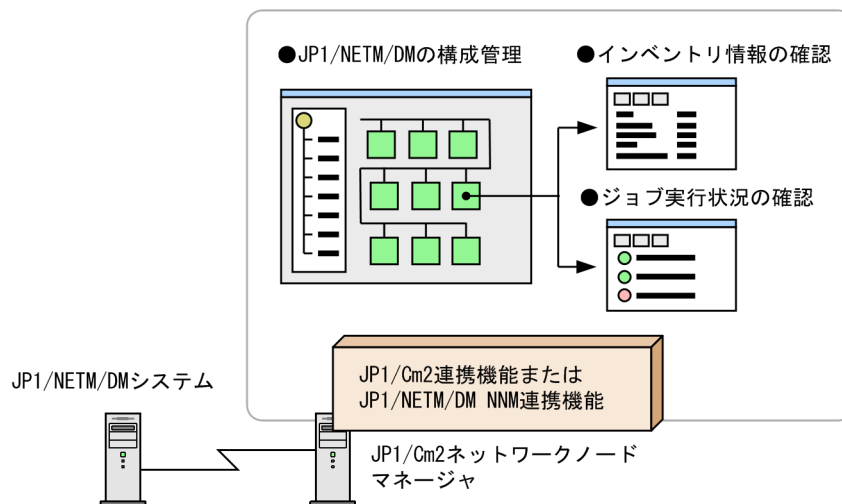
2.14.5 JP1/Cm2 または HP NNM からの JP1/NETM/DM 管理

JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャに、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つである「JP1/Cm2 連携機能」をインストールすると、バージョン 8 以前の JP1/Cm2 またはバージョン 7.5 以前の HP NNM の監視画面から、JP1/NETM/DM のインベントリ情報やジョブの実行状況を管理できます。これにより、JP1/Cm2/NNM または HP NNM でのネットワーク管理と JP1/NETM/DM の管理を一元化できます。

JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャは、JP1/Cm2/NNM または HP NNM がインストールされた、ネットワーク構成を管理するマシンです。

JP1/Cm2 または HP NNM と連携した、JP1/NETM/DM の管理の概要を次の図に示します。

図 2-68 JP1/Cm2 または HP NNM と連携した JP1/NETM/DM の管理の概要



JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャに「JP1/Cm2 連携機能」をインストールする方法については、マニュアル「構築ガイド」の「2.5 JP1/Cm2 ネットワークノードマネージャへ JP1/NETM/DM をインストールする」を、JP1/Cm2 または HP NNM から JP1/NETM/DM を管理する機能の詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「3. JP1/Cm2 または HP NNM から JP1/NETM/DM を管理する」を参照してください。

JP1/Cm2/NNM または HP NNM の機能および操作方法の詳細については、マニュアル「JP1/Cm2/Network Node Manager ネットワーク管理ガイド」を参照してください。

なお、OS が Windows Server 2012, Windows Server 2008 R2, Windows Server 2008 または Windows Server 2003 (x64) の場合、JP1/Cm2/NNM または HP NNM からの JP1/NETM/DM の管理はできません。

(1) JP1/NETM/DM の構成管理

JP1/Cm2/NNM または HP NNM は、TCP/IP ネットワークの構成や障害などを管理するプログラムです。ネットワークの構成を自動的に検出し、**ノードマップ**と呼ばれる階層図で表現します。管理対象となるシステムは**シンボル**と呼ばれるアイコンでグラフィック表示されます。JP1/NETM/DM の構成もノードマップ上でシンボルとして管理されます。

(2) インベントリ情報の確認

ノードマップ上のシンボルから、次に示す JP1/NETM/DM のインベントリ情報を確認できます。

- システム情報
- ソフトウェア情報
- ユーザインベントリ情報
- レジストリ情報

(3) ジョブの実行状況の監視

JP1/NETM/DM のジョブがエラーになると JP1/Cm2/NNM または HP NNM に通知されるため、ノードマップ上のシンボルから JP1/NETM/DM のジョブを監視できます。また、JP1/NETM/DM のジョブの実行状況も確認できます。

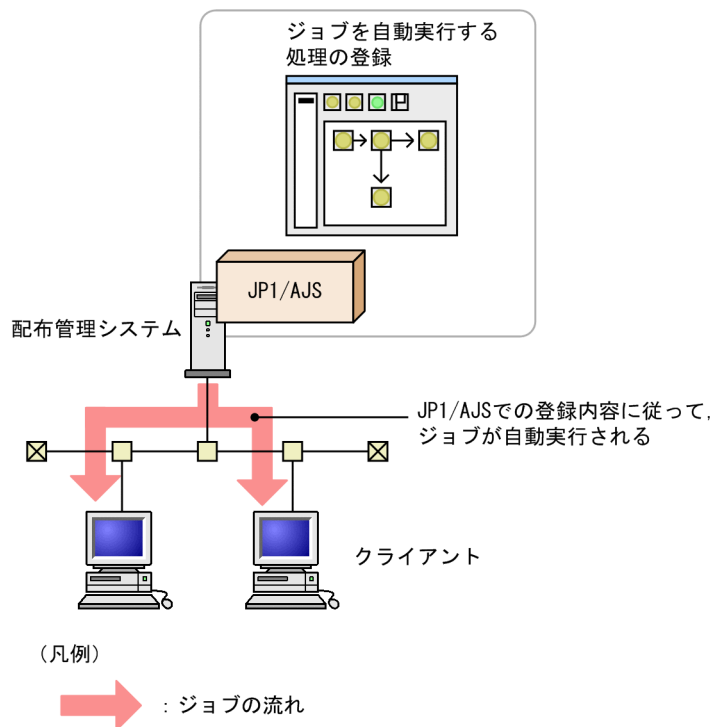
2.14.6 JP1/AJS と連携したジョブの自動実行

JP1/AJS は、業務を自動的に運用するためのプログラムです。処理を順序付けて定期的に行ったり、特定の事象が発生したときに処理を開始したりできます。

JP1/NETM/DM が提供するジョブの作成・実行などの運用操作のコマンドインターフェースを利用することで、コマンドの実行順序を JP1/AJS に登録して自動的に実行させたり、ファイルの更新などの事象をきっかけに JP1/NETM/DM のコマンドを実行させたりできます。

JP1/AJS と連携した、ジョブの自動実行の概要を次の図に示します。

図 2-69 JP1/AJS と連携したジョブの自動実行の概要



JP1/AJS の機能および操作の詳細については、JP1/AJS のマニュアルを参照してください。

JP1/NETM/DM が提供するコマンドについては、マニュアル「運用ガイド 2」の「4. コマンド」を参照してください。

2.14.7 秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理

秘文連携機能では、クライアントにインストール済みの JP1/ 秘文または秘文の種類やバージョンの情報を取得したり、新規に導入する場合は JP1/ 秘文および秘文のインストール可否をチェックし、リモートインストールしたりできます。また、JP1/ 秘文または秘文を使用中にクライアントでエラーが発生した場合、リモートでログを収集できます。

JP1/ 秘文および秘文の運用管理に JP1/NETM/DM を使用することで、管理者の作業負担を軽減し、漏れなくクライアントの環境を把握できます。

秘文連携機能を使用すると、JP1/ 秘文および秘文について次のような運用ができます。

● インストール済み JP1/ 秘文または秘文の詳細情報の取得

クライアントにインストールされている JP1/ 秘文または秘文の詳細な名称とバージョン情報を取得できます。これによって、クライアントにインストールされている JP1/ 秘文または秘文の種類を把握できます。取得した内容は、[システム構成] ウィンドウで確認したり、インベントリビューアで集計したりできます。

● JP1/ 秘文または秘文のインストールチェック

JP1/ 秘文または秘文をインストールする環境が、クライアントに整っているかどうかをインストール前にチェックできます。これによって、JP1/ 秘文または秘文をインストールできない原因を事前に調査できます。また、JP1/ 秘文または秘文をインストールする環境が整っているクライアントだけを対象にインストールする、といった運用ができます。

● JP1/ 秘文または秘文のインストール

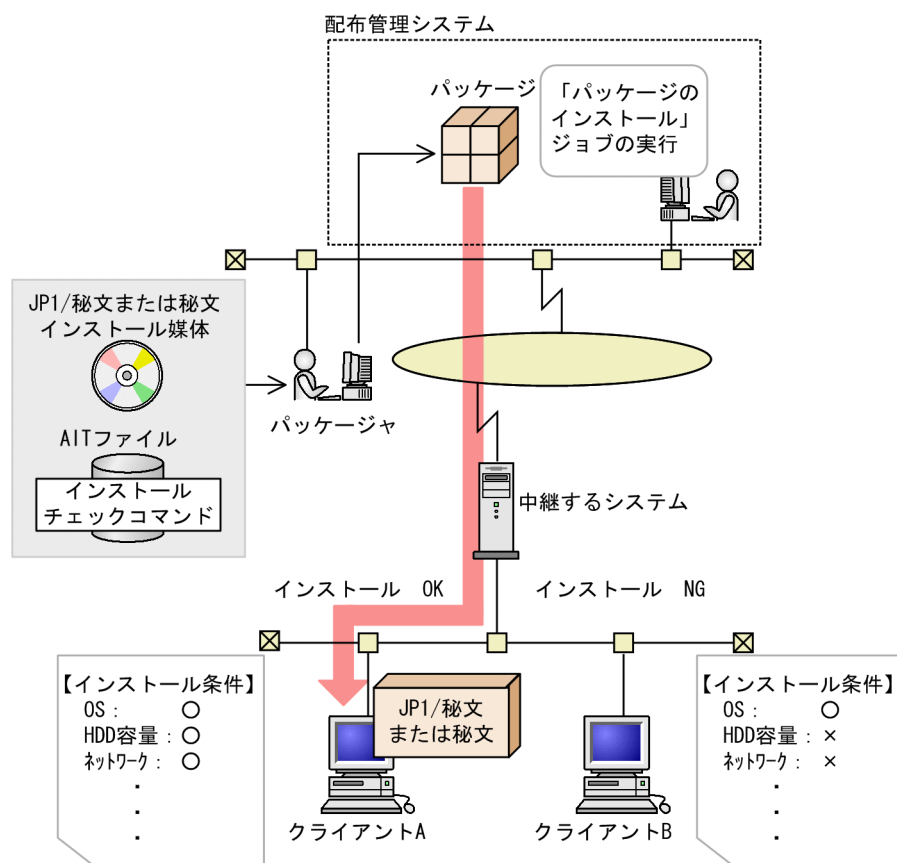
JP1/ 秘文または秘文をインストールする環境が、クライアントに整っているかどうかをインストール前にチェックし、問題がなければ続けてインストールを実行します。

● JP1/ 秘文または秘文の内部ログの収集

クライアントで JP1/ 秘文または秘文を実行中にエラーが発生した場合、JP1/ 秘文または秘文のログを収集し、調査できます。ログは、リモートコレクトまたはリモートコントロールマネージャのファイル転送機能を使って収集します。

秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文または秘文のインストールの概要を、次の図に示します。

図 2-70 秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文または秘文のインストールの概要



秘文連携機能を使った JP1/ 秘文または秘文のインストールでは、JP1/ 秘文または秘文のインストール媒体と JP1/NETM/DM の AIT ファイルをパッケージングしてジョブを実行します。その結果、クライアントのインストール条件がチェックされ、インストールする環境が整ったクライアント A だけ、JP1/ 秘文ま

たは秘文がインストールされます。

秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理の詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 E 秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理」を参照してください。

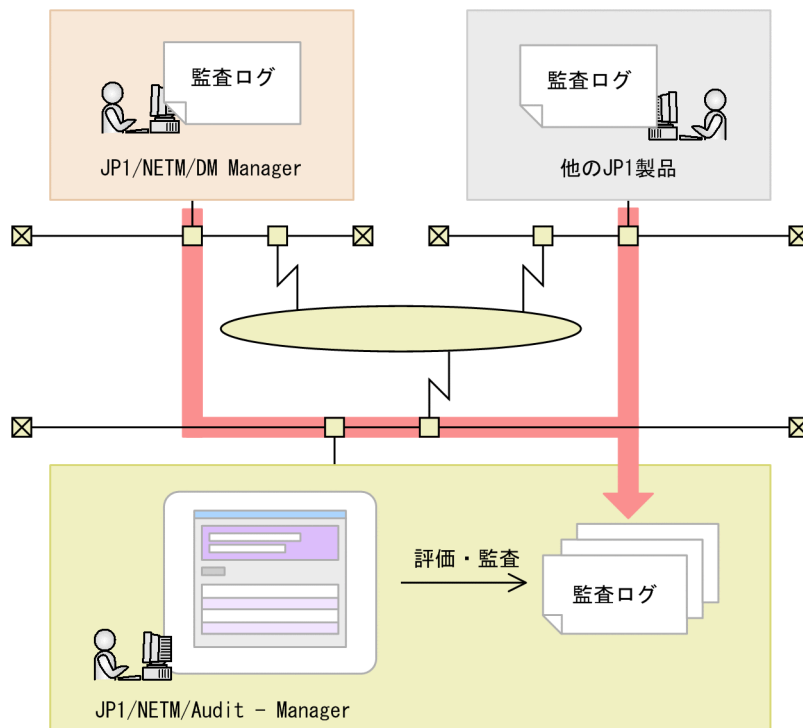
2.14.8 JP1/NETM/Audit - Manager からの監査ログの管理

JP1/NETM/Audit - Manager は、「だれが」、「いつ」、「どのような操作を実行したか」を示した**監査ログ**を収集・管理することで、システム全体の内部統制の評価と監査を支援するプログラムです。

監査ログは JP1/NETM/DM Manager をはじめ、各 JP1 製品からも出力されます。JP1/NETM/DM の監査ログを JP1/NETM/Audit - Manager から収集・管理することで、内部統制の評価と監査に利用できます。

JP1/NETM/Audit - Manager による監査ログの管理の概要を次の図に示します。

図 2-71 JP1/NETM/Audit - Manager による監査ログの管理の概要



(凡例)

 : 監査ログの収集

監査ログに出力される情報については、マニュアル「運用ガイド 2」の「付録 G 監査ログの出力」を参照してください。

これ以降で、JP1/NETM/Audit - Manager と連携する場合のシステム構成と監査ログを出力するための設定について説明します。

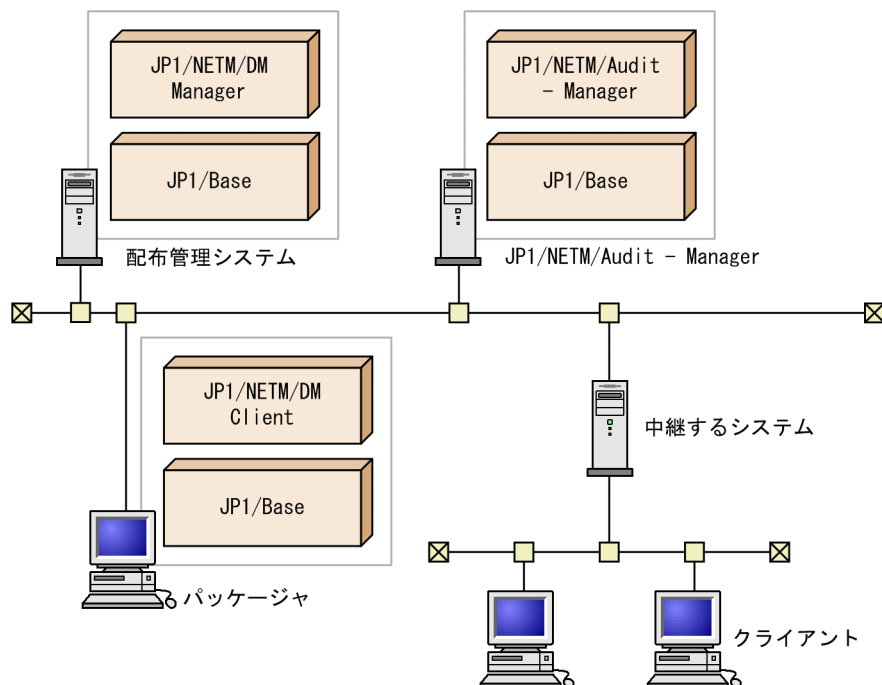
(1) JP1/NETM/Audit - Manager と連携する場合のシステム構成

JP1/NETM/Audit - Manager と連携して監査ログを管理する場合は、JP1/NETM/DM Manager がインストールされたコンピュータに JP1/Base がインストールされている必要があります。

また、パッケージを JP1/NETM/DM Manager とは別のコンピュータにインストールしている場合は、パッケージと同じコンピュータにも JP1/Base をインストールする必要があります。

JP1/NETM/Audit - Manager と連携する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 2-72 JP1/NETM/Audit - Manager と連携する場合のシステム構成



JP1/NETM/Audit - Manager と連携するための設定方法については、マニュアル「JP1/NETM/Audit」を参照してください。

なお、パッケージまたはパッケージングのコマンドを使用するコンピュータの OS が Windows Me, Windows 98, および Windows NT 4.0 の場合、監査ログは出力できません。

(2) 監査ログを出力するための設定

監査ログを出力するには、セットアップの「監査ログ」パネルで監査ログを出力するように設定します。また、パッケージを JP1/NETM/DM Manager とは別のコンピュータにインストールしている場合は、パッケージ側でも監査ログの出力を設定する必要があります。

セットアップの「監査ログ」パネルの設定については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.21 「監査ログ」パネル」を参照してください。

パッケージの設定については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.2.16 パッケージング環境のカスタマイズ」を参照してください。

3

導入から運用開始までの流れ

この章では、JP1/NETM/DM の導入から運用を開始するまでの作業の概要について説明します。

-
3.1	作業の流れ
3.2	システム構成を設計する
3.3	JP1/NETM/DM をインストールする
3.4	JP1/NETM/DM をセットアップする
3.5	リレーショナルデータベースを設定する
3.6	システム構成情報を作成する
3.7	ジョブのあて先をグルーピングする
3.8	JP1/NETM/DM の運用を開始する
-

3.1 作業の流れ

JP1/NETM/DM を新規に導入する場合、運用を開始する前にシステム構成の設計、プログラムのインストールや環境設定などの作業を実施します。

JP1/NETM/DM の導入から運用を開始するまでの作業の流れを次の図に示します。

図 3-1 作業の流れ

作業の流れ	参照先
1 システム構成を設計する JP1/NETM/DMを導入する前に、システム全体の構成を設計します。	1章, 5章
2 JP1/NETM/DMをインストールする JP1/NETM/DMの各プログラムをマシンにインストールします。	「構築ガイド」 1章～3章
3 JP1/NETM/DMをセットアップする JP1/NETM/DMの各プログラムをセットアップします。	「構築ガイド」 4章～6章
4 リレーショナルデータベースを設定する データベースマネージャを使ってリレーショナルデータベースを設定します。	「構築ガイド」 7章
5 システム構成情報を作成する 中継システムやクライアントを管理するためのシステム構成情報を作成します。ジョブのあて先を認識できるようになります。	「構築ガイド」 8章, 9章
6 ジョブのあて先をグルーピングする ジョブのあて先であるクライアントをグルーピングします。ジョブのあて先としてグループを指定できるようになります。	「構築ガイド」 8章, 9章
7 JP1/NETM/DMの運用を開始する ソフトウェアのリモートインストールやインベントリ情報の取得、ほかのJP1製品との連携など実際の運用を開始します。	「運用ガイド1」 「運用ガイド2」

次から、各作業の概要について説明します。

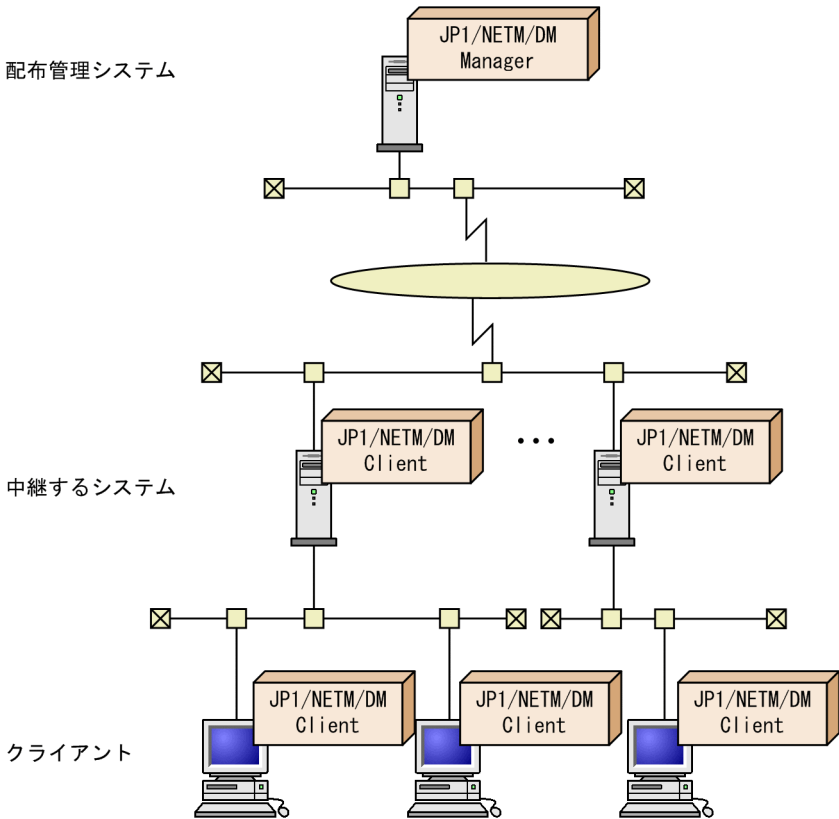
なお、各作業の詳細については、図 3-1 で示した章およびマニュアルを参照してください。

3.2 システム構成を設計する

JP1/NETM/DM の導入時には、組織構成、システムの規模やネットワーク環境を考慮し、システム構成を設計します。

JP1/NETM/DM の基本的なシステム構成は、配布管理システム、中継するシステム、クライアントから成る 3 階層の構成です。基本的なシステム構成を次の図に示します。

図 3-2 JP1/NETM/DM の基本的なシステム構成



各システム構成要素で使用するプログラムと役割を、次の表に示します。

表 3-1 JP1/NETM/DM の各システム構成要素

システム構成要素	使用するプログラム	役割
配布管理システム	JP1/NETM/DM Manager	ジョブを実行してソフトウェアを配布したり、取得したインベントリ情報を管理したりします。
中継するシステム	JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client ※	配布管理システムとクライアントの間で、ジョブを中継します。
クライアント	JP1/NETM/DM Client	配布管理システムから実行されたジョブを受信・実行し、実行結果を配布管理システムへ通知します。

注※ JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client の機能差異については、「付録 D.1 JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client (中継システム) の機能差異」を参照してください。

3. 導入から運用開始までの流れ

ハードウェア導入のコストやネットワーク性能なども考慮して、ご使用の環境に適したシステム構成を検討してください。

JP1/NETM/DM のシステム構成要素の詳細については、「1.3 JP1/NETM/DM のシステム構成要素」を参照してください。システム構成の設計については、「5. JP1/NETM/DM システムの設計」を参照してください。

3.3 JP1/NETM/DM をインストールする

システム構成の設計が終わったら、JP1/NETM/DM の各プログラムをインストールします。

各プログラムには、機能ごとに選択できるコンポーネントが含まれています。各プログラムをインストールするとき、使用するコンポーネントを選択します。

JP1/NETM/DM の各プログラムをインストールするには、上位システムのプログラムから順にインストールします。

新規に JP1/NETM/DM をインストールする場合の手順を次に示します。

1. JP1/NETM/DM Manager を配布管理システムのコンピュータにインストールする。
2. JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client を中継するシステムのコンピュータにインストールする。
3. JP1/NETM/DM Client をコンピュータにインストールする。

なお、マシン台数が多くなる JP1/NETM/DM Client のインストールには、管理者の作業負荷を軽減する自動インストール機能を使用できます。

JP1/NETM/DM をバージョンアップする場合は、JP1/NETM/DM を使用して、JP1/NETM/DM Client 自身を、リモートインストールでバージョンアップできます。

各プログラムのインストールの詳細については、次の表に示す説明箇所を参照してください。

作業	参照先 マニュアル	説明箇所	タイトル
JP1/NETM/DM のコンポーネントやインストール概要について理解する	構築ガイド	1 章	JP1/NETM/DM のインストールの概要
JP1/NETM/DM Manager のインストール	構築ガイド	2 章	JP1/NETM/DM Manager をインストールする
JP1/NETM/DM Client のインストール	構築ガイド	3 章	JP1/NETM/DM Client をインストールする
JP1/NETM/DM Client の自動インストール	構築ガイド	1.2.4	インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client (クライアント) のインストール方法
JP1/NETM/DM の上書きインストール	構築ガイド	1.2.2	JP1/NETM/DM の上書きインストールについて

3.4 JP1/NETM/DM をセットアップする

JP1/NETM/DM の各プログラムをインストールしたあと、セットアップします。

セットアップは、セットアップダイアログボックスを使用し、管理者は各パネルのセットアップ項目を必要に応じて設定します。

なお、JP1/NETM/DM Client の自動インストール機能を使用する場合は、JP1/NETM/DM Client のセットアップも自動的に実行されます。

各プログラムのセットアップの詳細については、次の表に示す説明箇所を参照してください。

作業	参照先 マニュアル	説明 箇所	タイトル
JP1/NETM/DM Manager のセットアップ	構築ガイド	4 章	JP1/NETM/DM Manager をセットアップする
JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップ	構築ガイド	5 章	JP1/NETM/DM Client（中継システム）をセットアップする
JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップ	構築ガイド	6 章	JP1/NETM/DM Client（クライアント）をセットアップする

3.5 リレーショナルデータベースを設定する

JP1/NETM/DM では、システム情報やソフトウェア情報、ユーザインベントリ情報など、さまざまな情報をデータベースで管理しています。

JP1/NETM/DM では、次に示すリレーショナルデータベースを使用できます。

- Embedded RDB

JP1/NETM/DM Manager に組み込まれたリレーショナルデータベースです。JP1/NETM/DM Manager のインストール時に、同時にインストールできます。したがって、リレーショナルデータベースを別に用意する必要がありません。

- Microsoft SQL Server または Oracle

リレーショナルデータベースとして、Microsoft SQL Server または Oracle を使用できます。

どのリレーショナルデータベースを使用するかを、JP1/NETM/DM Manager のインストール時に選択します。

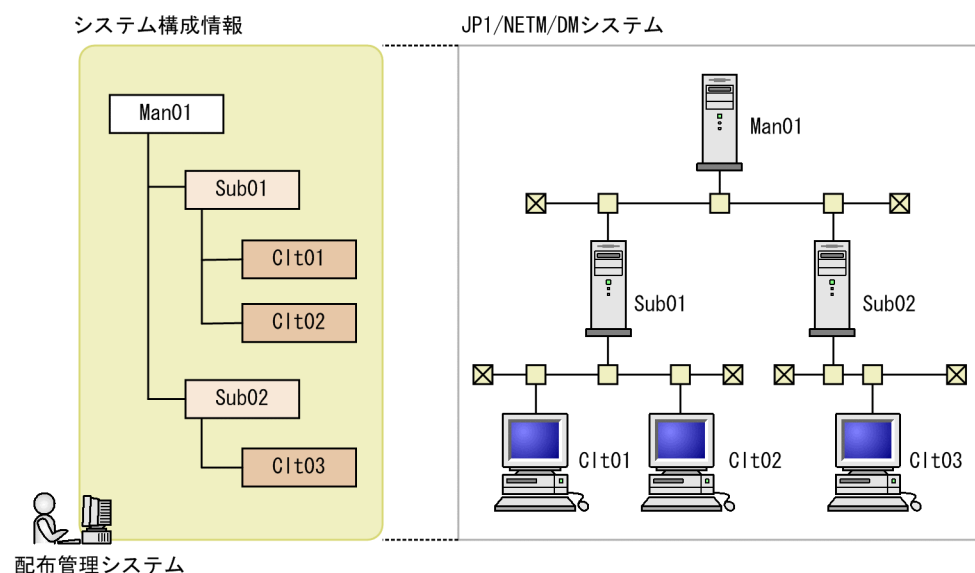
リレーショナルデータベースを作成したり、メンテナンスしたりするには、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つである**データベースマネージャ**を使用します。

リレーショナルデータベースの設定については、マニュアル「構築ガイド」の「7. リレーショナルデータベースを設定する」を参照してください。

3.6 システム構成情報を作成する

JP1/NETM/DM の運用を開始する前に、中継システムやクライアントを管理するための**システム構成情報**を作成します。システム構成情報には、システム構成と各ホストのアドレスを設定します。配布管理システムでは、システム構成情報を基に、ソフトウェアの配布やインベントリ情報の取得を指示します。システム構成情報の概念を次の図に示します。

図 3-3 システム構成情報の概念



システム構成情報の作成方法には、次の 4 種類があります。

- システム構成の自動登録機能を使用する。
- システム構成情報を設定したファイルから作成する。
- [システム構成] ウィンドウで作成する。
- 中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する。

システム構成情報の作成とメンテナンスの詳細については、次の表に示す説明箇所を参照してください。

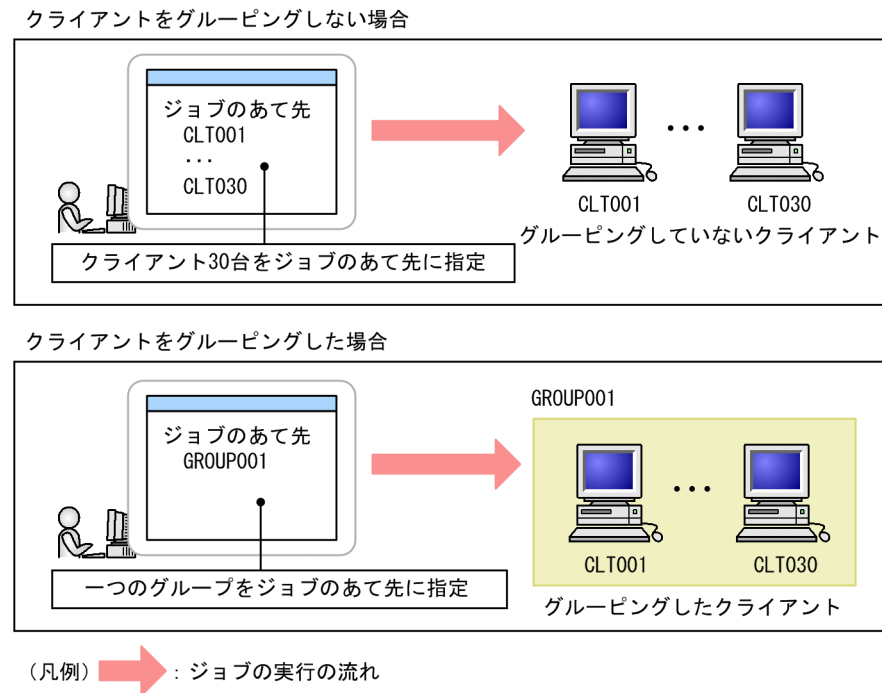
作業	参照先 マニュアル	説明 箇所	タイトル
システム構成情報の作成	構築ガイド	8 章	システム構成情報とあて先のグループを作成する
システム構成情報のメンテナンス	構築ガイド	9 章	システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする

3.7 ジョブのあて先をグルーピングする

JP1/NETM/DM では物理的なネットワーク構成とは関係なく、目的に応じてクライアントを幾つかのグループに分類し、グループ単位でジョブを実行できます。

例として、30 台のクライアントに対してジョブを実行する場合に、クライアントをグルーピングしないと、クライアントをグルーピングしたときの、ジョブの実行方法の違いを次の図に示します。

図 3-4 クライアントのグルーピングによるジョブの実行方法の違い



クライアントをグルーピングしない場合では、ジョブのあて先に 30 台のクライアントを一台一台指定してジョブを実行する必要があります。しかし、クライアントをグルーピングした場合は、ジョブのあて先に一つのグループを指定するだけで、30 台のクライアントすべてに対してジョブを実行できます。

このように、クライアントをグルーピングすることで、効率良くジョブを実行することができます。

ジョブのあて先のグルーピング方法には、**あて先グループ**、ID および**ディレクトリ情報**の 3 種類があります。

● あて先グループ

配布管理システムでクライアントをグルーピングする方法です。部署、担当業務、OS などの条件でクライアントを階層的なグループに分類し、管理します。

● ID

クライアント側で、属するグループを決める方法です。あらかじめ、配布管理システムで ID を作成しておきます。クライアントは、どの ID に所属するかを決めて、クライアントからその ID に登録します。

● ディレクトリ情報

Active Directory で管理している組織の単位でグルーピングする方法です。Active Directory でコンピュータやユーザを管理している場合、Active Directory での組織階層に合わせてジョブを実行できます。

3. 導入から運用開始までの流れ

あて先グループ、ID またはディレクトリ情報の作成とメンテナンスの詳細については、次の表に示す説明個所を参照してください。

作業	参照先 マニュアル	説明 個所	タイトル
あて先グループまたは ID の作成	構築ガイド	8 章	システム構成情報とあて先のグループを作成する
あて先グループまたは ID のメンテナンス	構築ガイド	9 章	システム構成情報とあて先のグループをメンテナンスする
ディレクトリ情報の取得およびメンテナンス	運用ガイド 1	3.4	ディレクトリ情報を取得する

3.8 JP1/NETM/DM の運用を開始する

ソフトウェアのリモートインストールや、インベントリ情報の管理、クライアントの管理など、実際の運用を開始します。

JP1/NETM/DM の代表的な運用例については、「4. 代表的な構築例および運用例」を参照してください。

また、各運用の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」およびマニュアル「運用ガイド 2」を参照してください。

4

代表的な構築例および運用例

この章では、基本的な JP1/NETM/DM システムの構築例や、資産・配布管理機能を使用した運用例を示して、構築・運用のポイントを紹介します。

4.1	構築例および運用例の種類
4.2	JP1/NETM/DM システムを導入する
4.3	遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作する
4.4	ハードウェア資産を管理する
4.5	ソフトウェア資産を管理する
4.6	事業所ごとにソフトウェアを配布する
4.7	配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する
4.8	最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する
4.9	省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する
4.10	特定の日にクライアントをシャットダウンさせる
4.11	新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する
4.12	障害が発生したクライアントを配布管理システムから遠隔操作でメンテナンスする

4.1 構築例および運用例の種類

JP1/NETM/DM を使用した代表的な構築例と運用例を次の表に示します。

種類	構築例・運用例	参照先
構築	JP1/NETM/DM システムを導入する	4.2
	遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作する	4.3
運用	ハードウェア資産を管理する	4.4
	ソフトウェア資産を管理する	4.5
	事業所ごとにソフトウェアを配布する	4.6
	配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する	4.7
	最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する	4.8
	省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する	4.9
	特定の日にクライアントをシャットダウンさせる	4.10
	新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する	4.11
	障害が発生したクライアントを配布管理システムから遠隔操作でメンテナンスする	4.12

各構築・運用例は、次の構成で説明します。

タイトル

JP1/NETM/DM を使用した代表的な構築・運用例を簡単に示します。

概要, 前提条件, 操作手順, 注意事項

構築・運用例の内容に応じて必要な項目を説明します。各項目では、構築・運用時にポイントとなる機能や操作方法を示しています。各機能や操作方法の詳細については、参照先に示したマニュアルの説明箇所を参照してください。

なお、参照先がマニュアル「構築ガイド」の場合はマニュアル名を「構築」と、「運用ガイド 1」の場合はマニュアル名を「運用 1」と表記しています。

4.2 JP1/NETM/DM システムを導入する

新規に JP1/NETM/DM を導入するには、JP1/NETM/DM のシステム構成や、導入するネットワーク環境など、さまざまな内容を検討した上で、JP1/NETM/DM をインストールする必要があります。ここでは、基本的な JP1/NETM/DM システムを構築するために必要な手順を説明します。

JP1/NETM/DM システムは、次の手順で導入します。

1. 導入する JP1/NETM/DM システムを検討する。
2. データベースサーバを構築する。
3. 管理サーバに JP1/NETM/DM Manager をインストールする。
4. 中継するサーバに JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールする。
5. クライアントに JP1/NETM/DM Client（クライアント）をインストールする。

(1) 導入する JP1/NETM/DM システムを検討する

導入する JP1/NETM/DM システムのシステム構成やネットワーク環境について、あらかじめ検討しておきます。

- JP1/NETM/DM システムの構成 → 「5.1.1 基本的なシステム構成の設計」
- ネットワーク環境の検討 → 「6.1 ネットワーク環境の検討」
- ハードウェアに関する見積もり → 「5.3 ハードウェアに関する見積もり」

(2) データベースサーバを構築する

配布管理システムのリレーショナルデータベースに、Microsoft SQL Server または Oracle を使用する場合、JP1/NETM/DM をインストールする前に、データベースのサーバを構築しておく必要があります。ただし、リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合は、データベースサーバを構築する必要はありません。

- 使用できるデータベース → 「5.1.5 使用できるデータベース」
- リレーショナルデータベースのシステム構成と設定 → 構築「7. リレーショナルデータベースを設定する」

(3) 管理サーバに JP1/NETM/DM Manager をインストールする

JP1/NETM/DM システムを統括する管理サーバに、配布管理システム（JP1/NETM/DM Manager）をインストールします。

- インストールできるプログラム → 構築「1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成」
- インストール方法 → 構築「2. JP1/NETM/DM Manager をインストールする」

(4) 中継するサーバに JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールする

部門ごとの管理サーバなどに、中継システム（JP1/NETM/DM Client）をインストールします。

- インストールできるプログラム → 構築「1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成」
- インストール方法 → 構築「3. JP1/NETM/DM Client をインストールする」

なお、JP1/NETM/DM Manager を中継するシステム（中継マネージャ）として JP1/NETM/DM システムを構築することもできます。

4. 代表的な構築例および運用例

- 中継マネージャを使用した構築例 → 「5.1.2 大規模なシステム構成の設計」
- インストール方法 → 構築「2. JP1/NETM/DM Manager をインストールする」
- JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異 → 「付録 D.1 JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異」

(5) クライアントに JP1/NETM/DM Client をインストールする

JP1/NETM/DM システムの管理対象となるクライアントに、JP1/NETM/DM Client をインストールします。

- インストールできるプログラム → 構築「1.1 プログラムの適用 OS とコンポーネントの構成」
- インストール方法 → 構築「3. JP1/NETM/DM Client をインストールする」

クライアントに JP1/NETM/DM Client をインストールする場合、一台一台に媒体からインストールすると、膨大な手間と時間が掛かってしまいます。JP1/NETM/DM では、JP1/NETM/DM Client のインストールセットを作成して、インストール作業を自動化できます。なお、インストールセットを作成するには、「JP1/NETM/DM Administrator Kit」が必要です。

- 自動インストールの概要 → 構築「1.2.4 インストールセットを使用した JP1/NETM/DM Client（クライアント）のインストール方法」
- インストールセットの作成方法およびインストールセットからのインストール方法 → マニュアル「JP1/NETM/DM Administrator Kit」

(6) 注意事項

- リレーショナルデータベースを使用時の注意事項 → 構築「7.2 リレーショナルデータベース使用時の注意事項」

4.3 遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作する

遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作するシステムを構築できます。

例えば、社内の管理サーバに JP1/NETM/DM をインストールして、JP1/NETM/DM の操作は管理者の手もとの PC から実施するといった運用ができます。

遠隔地にある JP1/NETM/DM を操作するには次の 2 とおりの方法があります。

- JP1/NETM/DM のサーバ機能と、サーバ機能を操作する GUI を別々のコンピュータにインストールする
- 配布管理システムがインストールされているコンピュータをリモートコントロールする

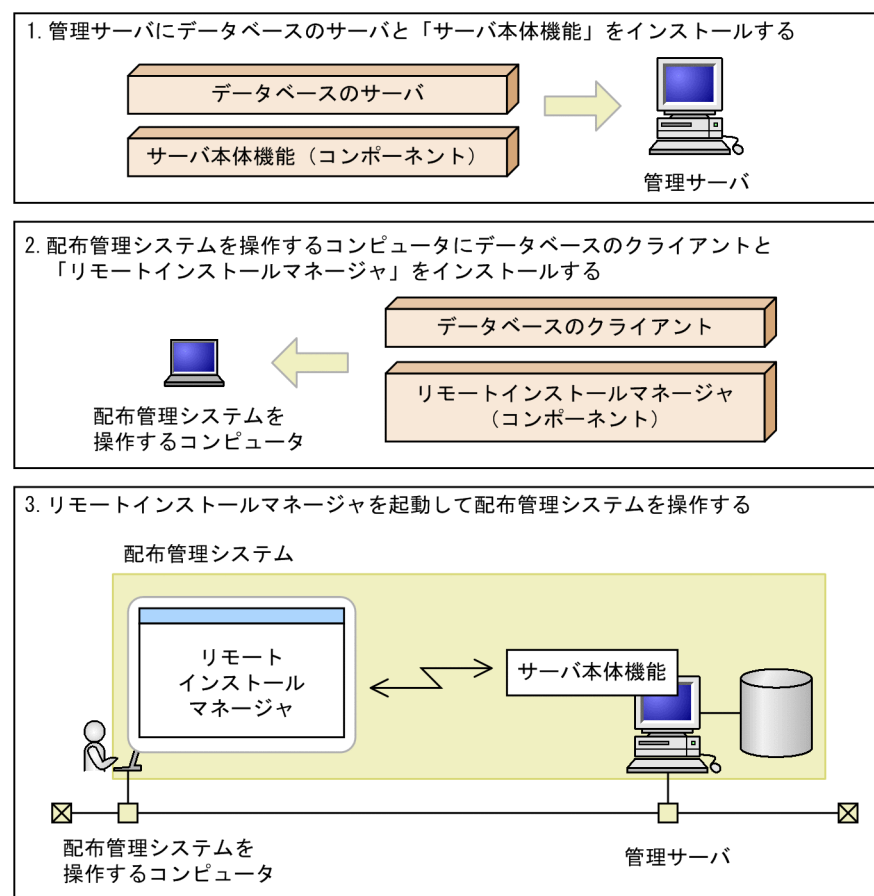
4.3.1 JP1/NETM/DM のサーバ機能と GUI を別々のコンピュータにインストールする

● 概要

JP1/NETM/DM Manager のインストールコンポーネント「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」を別々のコンピュータにインストールして、配布管理システムを運用します。

JP1/NETM/DM のサーバ機能と GUI を別々のコンピュータにインストールする流れを次の図に示します。

図 4-1 JP1/NETM/DM のサーバ機能と GUI を別々のコンピュータにインストールする流れ



● 操作手順

1. 管理サーバにデータベースのサーバをインストールする。

データベースに Embedded RDB を使用する場合、データベースのサーバはインストールする必要はありません。

- リレーショナルデータベースのサーバの配置 → 構築「7.1.2 システム構成」
- リレーショナルデータベースの設定 → 構築「7.3 リレーショナルデータベースの環境設定」

2. 管理サーバに JP1/NETM/DM の「サーバ本体機能」をインストールする。

- インストール手順 → 構築「2. JP1/NETM/DM Manager をインストールする」

3. 配布管理システムを操作するコンピュータにデータベースのクライアントをインストールする。

データベースに Embedded RDB を使用する場合、データベースのクライアントはインストールする必要はありません。

- リレーショナルデータベースのクライアントの配置 → 構築「7.1.2 システム構成」

4. 配布管理システムを操作するコンピュータにリモートインストールマネージャをインストールする。

- インストール手順 → 構築「2.2 リモートインストールマネージャをインストールする」
- サーバへの接続設定（インストール時） → 構築「2.1.18 接続先の設定（リモートインストールマネージャ）」

5. リモートインストールマネージャを起動して配布管理システムを操作する。

- リモートインストールマネージャの起動方法 → 運用 1「1.3 リモートインストールマネージャの起動と終了」

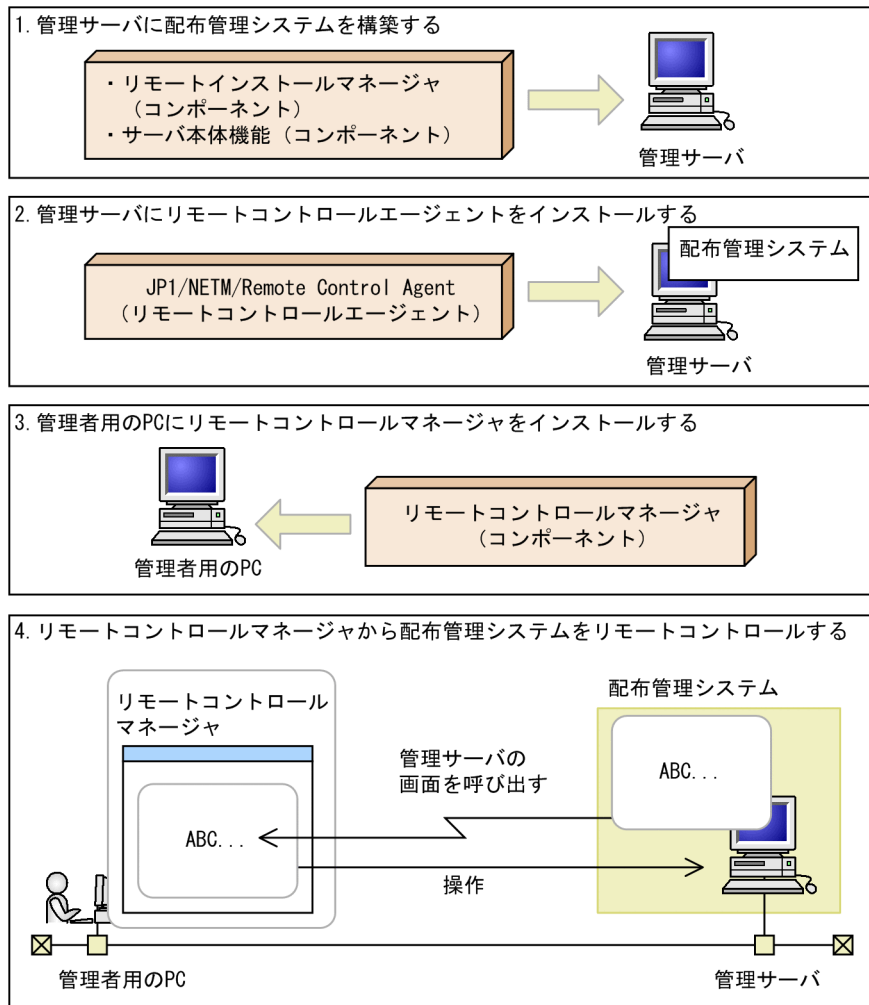
4.3.2 配布管理システムがインストールされているコンピュータをリモートコントロールする

● 概要

配布管理システムを構築した管理サーバに「リモートコントロールエージェント」を、管理者用の PC に「リモートコントロールマネージャ」をインストールして、配布管理システムをリモートコントロールします。

配布管理システムをリモートコントロールする流れを次の図に示します。

図 4-2 配布管理システムをリモートコントロールする流れ



● 前提条件

JP1/NETM/DM Manager のインストールコンポーネントには「リモートコントロールエージェント」がありません。そのため、JP1/NETM/DM Manager とは別に JP1/NETM/Remote Control Agent を用意してください。

● 操作手順

1. 管理サーバに配布管理システムを構築する。

- ・ JP1/NETM/DM Manager のインストール → 構築「2.1 JP1/NETM/DM Manager のインストール手順」

2. 管理サーバにリモートコントロールエージェントをインストールする。

- ・ JP1/NETM/Remote Control Agent のインストール → マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」

なお、中継マネージャには、インストールコンポーネント「リモートコントロールエージェント」をインストールできます。

3. 管理者用の PC にリモートコントロールマネージャをインストールする。

- ・ リモートコントロールマネージャのインストール → 構築「2. JP1/NETM/DM Manager をインストールする」
- インストールするコンポーネントに、「リモートコントロールマネージャ」を選択してください。

4. 代表的な構築例および運用例

4. リモートコントロールマネージャから配布管理システムをリモートコントロールする。

- リモートコントロールマネージャの操作方法 → マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」

4.4 ハードウェア資産を管理する

● 概要

JP1/NETM/DM のインベントリ管理機能を利用して、配布管理システムに登録されているクライアントのハードウェア資産情報（システム情報）を管理できます。

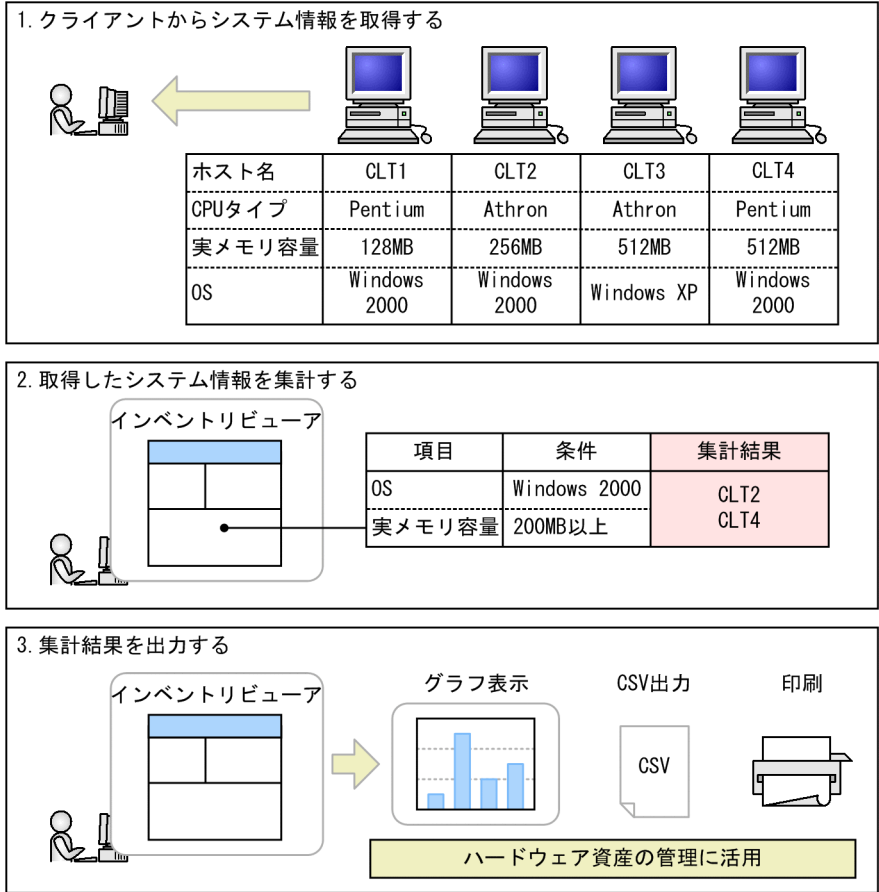
- JP1/NETM/DM で管理できるシステム情報 → 「2.2.1 システム情報の取得」

クライアントから取得したシステム情報は、配布管理システムの「インベントリビューア」を使用することで、特定のハードウェア条件に一致するクライアントを集計したり、集計結果をグラフで表示したりできます。

また、集計結果を CSV 形式ファイルや紙に出力することで、ハードウェア資産を管理する台帳として利用できます。

クライアントのハードウェア資産を管理する流れを次の図に示します。

図 4-3 クライアントのハードウェア資産を管理する流れ



● 操作手順

1. クライアントからシステム情報を取得する。
 - システム情報の取得手順 → 運用 1 「3.1.1 システム情報の取得手順」
2. 取得したシステム情報を集計する。
 - インベントリビューアの起動手順 → 運用 1 「4.1.1 インベントリビューアの起動」

4. 代表的な構築例および運用例

- インベントリ情報の集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」
- 集計結果の表示 → 運用 1「4.2.3(6) システム情報の集計」

3. 集計結果を出力する。

集計結果をグラフで表示する

- 集計結果のグラフ表示 → 運用 1「4.2.6 集計結果をグラフ表示する」

集計結果を CSV 出力する

- 集計結果の CSV 出力 → 運用 1「4.5.2 CSV 形式ファイルへの出力」

集計結果を印刷する

- 集計結果の印刷 → 運用 1「4.5.3 印刷」

● 注意事項

- システム情報取得時の注意事項 → 運用 1「3.1.4 システム情報を取得するときの注意事項」

4.5 ソフトウェア資産を管理する

ここでは、特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する方法と、クライアントにインストールされているソフトウェアのライセンス数を管理する方法について説明します。

4.5.1 特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する

● 概要

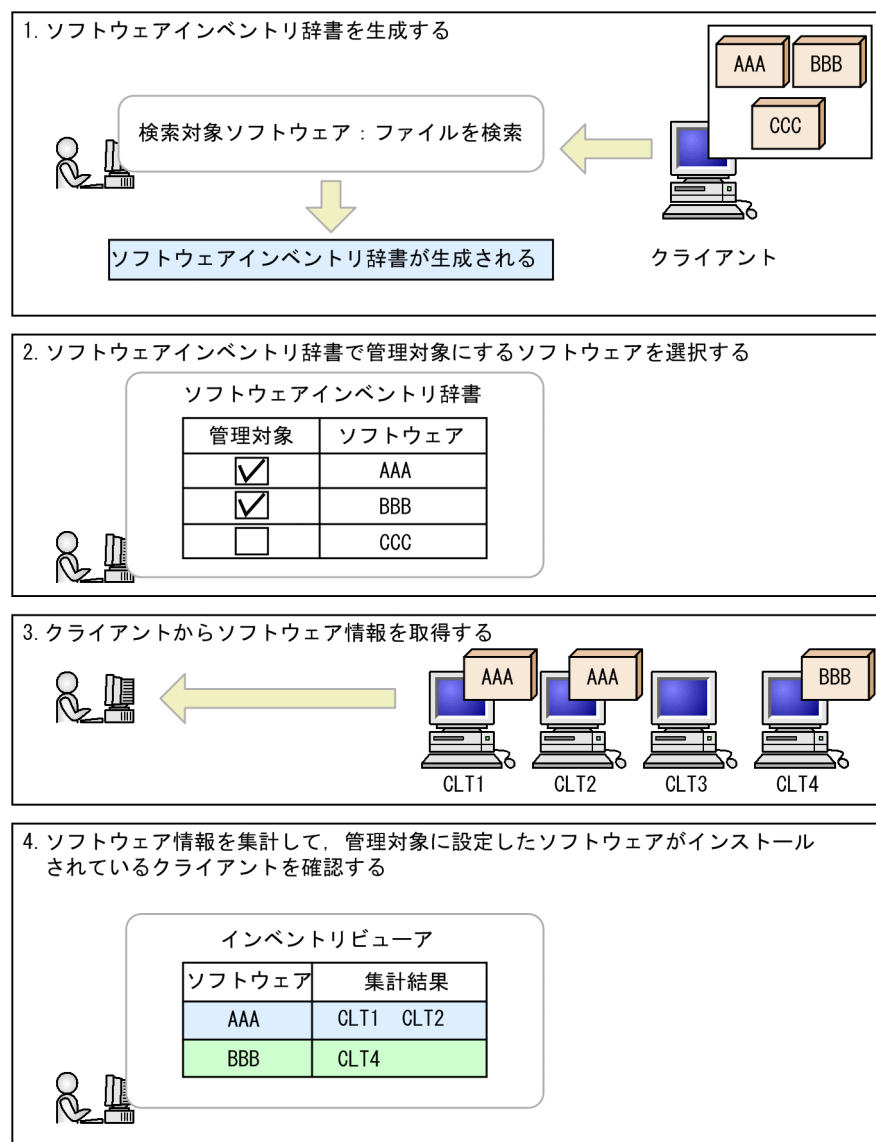
クライアントから取得したソフトウェア情報を集計し、特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認できます。

ユーザ独自のプログラムなど、JP1/NETM/DM がデフォルトでは管理対象としていないソフトウェアの情報を管理するには、ソフトウェア情報の取得時に生成される「ソフトウェアインベントリ辞書」で、ソフトウェアを管理対象に設定します。

管理対象に設定後、取得したソフトウェア情報を集計することで、特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを集計できます。

特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する流れを次の図に示します。

図 4-4 特定のソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する流れ



● 操作手順

1. ソフトウェアインベントリ辞書を生成する。

ソフトウェアインベントリ辞書を生成するために、管理対象にしたいソフトウェアがインストールされている、少数（1台～数台）のクライアントからソフトウェア情報を取得します。

- ソフトウェア情報の取得手順 → 運用1「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」

「ソフトウェア情報の取得」ジョブ作成時の「オプション」パネルで、「検索対象ソフトウェア」に「ファイルを検索」を指定してジョブを実行します。「ファイルを検索」を指定したジョブはネットワークおよびデータベースに負荷が掛かるので、少数（1台～数台）のクライアントに実行します。取得したソフトウェア情報を基にソフトウェアインベントリ辞書が生成されます。

2. ソフトウェアインベントリ辞書で管理対象にするソフトウェアを選択する。

- 管理するソフトウェアの設定 → 運用1「3.2.5(1) 管理するソフトウェアを設定する」

3. クライアントからソフトウェア情報を取得する。

- ソフトウェア情報の取得手順 → 運用1「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」

4. ソフトウェア情報を集計して、管理対象に設定したソフトウェアがインストールされているクライアントを確認する。

- インベントリビューアの起動手順 → 運用 1「4.1.1 インベントリビューアの起動」
- インベントリ情報の集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」

● 注意事項

- ソフトウェア情報取得時の注意事項 → 運用 1「3.2.3 ソフトウェア情報を取得するときの注意事項」

4.5.2 ソフトウェアのライセンス数を管理する

● 概要

クライアントにインストールされているソフトウェアの情報を取得して、所有しているライセンス数に近づいたソフトウェアや、ライセンス数を超えたソフトウェアを確認できます。

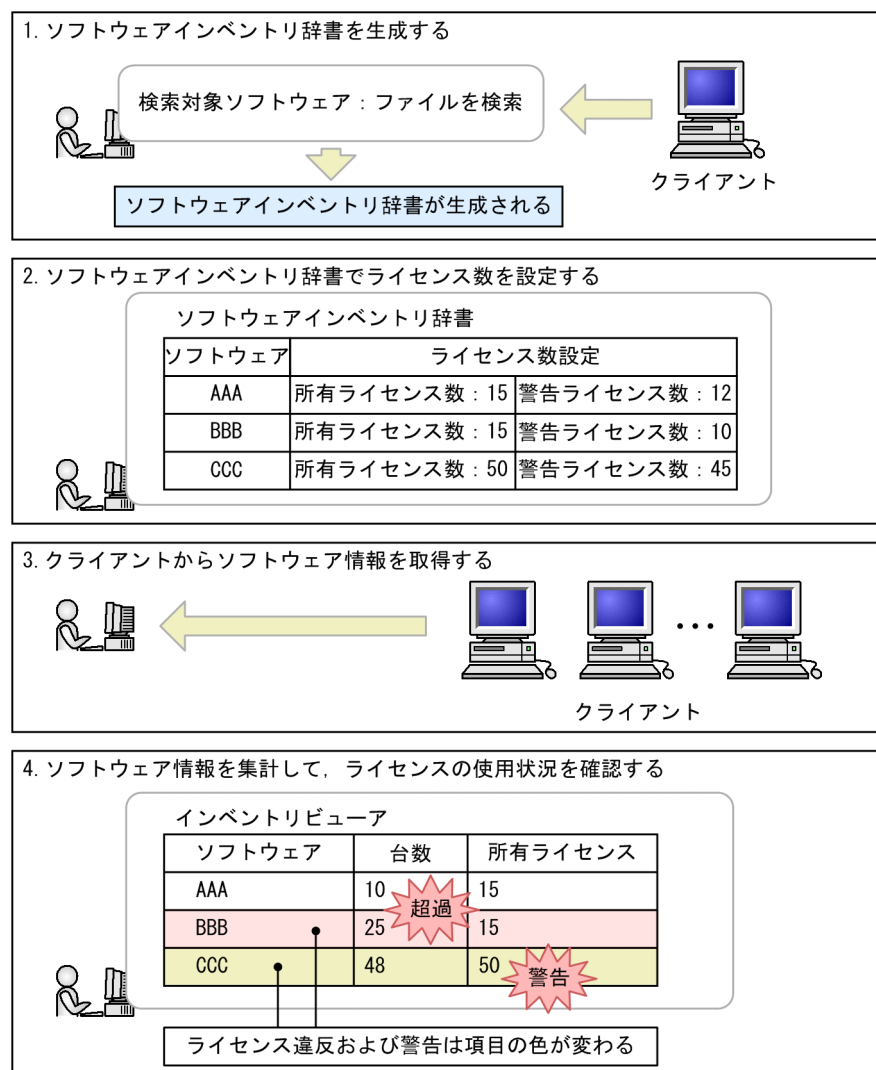
- JP1/NETM/DM で取得できるソフトウェア情報 → 「2.2.2 ソフトウェア情報の取得」

ソフトウェアのライセンス数を管理するには、ソフトウェア情報の取得時に生成される「ソフトウェアインベントリ辞書」で、JP1/NETM/DM で管理するソフトウェアのライセンス数を設定します。

ライセンス数を設定してからソフトウェア情報を集計することで、ライセンス数に近づいたソフトウェアや、ライセンス数を超えたソフトウェアを確認できます。

ソフトウェアのライセンス数を管理する流れを次の図に示します。

図 4-5 ソフトウェアのライセンス数を管理する流れ



● 操作手順

1. ソフトウェアインベントリ辞書を生成する。

ソフトウェアインベントリ辞書を生成するために、一度、少数（1台～数台）のクライアントからソフトウェア情報を取得します。

- ソフトウェア情報の取得手順 → 運用1「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」

「ソフトウェア情報の取得」ジョブ作成時の［オプション］パネルで、「検索対象ソフトウェア」に「ファイルを検索」を指定してジョブを実行します。「ファイルを検索」を指定したジョブはネットワークおよびデータベースに負荷が掛かるので、少数（1台～数台）のクライアントに実行します。

取得したソフトウェア情報を基にソフトウェアインベントリ辞書が生成されます。

2. ソフトウェアインベントリ辞書でライセンス数を設定する。

- 管理するソフトウェアの設定 → 運用1「3.2.5(1) 管理するソフトウェアを設定する」
- ライセンス数の設定 → 運用1「3.2.5(3) ライセンス数を設定する」

3. クライアントからソフトウェア情報を取得する。

- ソフトウェア情報の取得手順 → 運用1「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」

4. ソフトウェア情報を集計して、ライセンスの使用状況を確認する。

- インベントリビューアの起動手順 → 運用 1「4.1.1 インベントリビューアの起動」
- インベントリ情報の集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」
- ライセンス情報の表示方法 → 運用 1「4.2.3(2) ソフトウェアインベントリの集計」

● 注意事項

- ソフトウェア情報取得時の注意事項 → 運用 1「3.2.3 ソフトウェア情報を取得するときの注意事項」

4.5.3 Microsoft Office 製品とウィルス対策製品を管理する

● 概要

クライアントから取得した Microsoft Office 製品とウィルス対策製品を集計し、特定の製品がインストールされているクライアントを確認できます。

Microsoft Office 製品とウィルス対策製品がインストールされているクライアントを確認する流れを次に示します。

1. 次のオプションを指定した「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行して、クライアントから最新の情報を取得する。
 - "ウィルス対策製品を検索" オプション
 - "Microsoft Office 製品を検索" オプション

クライアントから Microsoft Office 製品とウィルス対策製品情報を取得するプロセス

- (1) 配布管理システムから「ウィルス対策製品検索情報ファイル」と「Microsoft Office 製品検索情報ファイル」を「ソフトウェア情報の取得」ジョブでクライアントに送る。
 - (2) 配布管理システムから受け取った「ウィルス対策製品検索情報ファイル」と「Microsoft Office 製品検索情報ファイル」を基にクライアント側で検索を実行する。
 - (3) クライアント側の検索結果を配布管理システムに返す。
2. クライアントから取得した Microsoft Office 製品とウィルス対策製品情報を集計して、特定の製品がインストールされているクライアントを確認する。

● 操作手順

1. クライアントからソフトウェア情報を取得する。
 - ソフトウェア情報の取得手順 → 運用 1「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」
2. ソフトウェア情報を集計して、Microsoft Office 製品とウィルス対策製品がインストールされているクライアントを確認する。
 - インベントリビューアの起動手順 → 運用 1「4.1.1 インベントリビューアの起動」
 - インベントリ情報の集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」

● 注意事項

- ソフトウェア情報取得時の注意事項 → 運用 1「3.2.3 ソフトウェア情報を取得するときの注意事項」

4.6 事業所ごとにソフトウェアを配布する

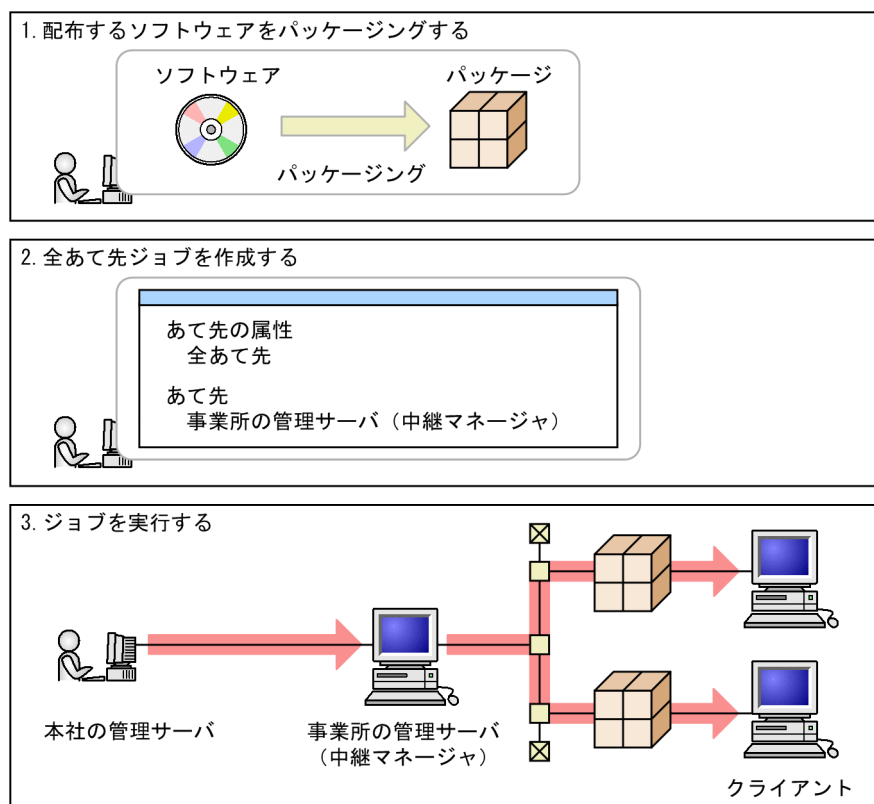
● 概要

事業所ごとに設置した管理サーバを、本社の管理サーバが統括して管理するといった JP1/NETM/DM システムでは、「全あて先ジョブ」を利用すると、事業所の管理サーバへジョブを実行するだけで、事業所の管理サーバ配下のすべてのクライアントへ一括してソフトウェアを配布できます。

- 全あて先ジョブの概要 → 「5.1.2(3) マネージャからのジョブの実行」

全あて先ジョブを利用して、事業所の管理サーバ配下のクライアントにソフトウェアを配布する流れを次の図に示します。

図 4-6 事業所の管理サーバ配下のクライアントにソフトウェアを配布する流れ



(凡例)

➡ : ジョブの実行の流れ

● 操作手順

1. 配布するソフトウェアをパッケージングする。

- パッケージングの手順 → 運用 1 「2.1 パッケージングの方法」

2. 全あて先ジョブを作成する。

- ジョブの作成手順 → 運用 1 「2.3.1 リモートインストールの実行手順」

[あて先] パネルで、あて先の属性に「全あて先」を指定します。

- [あて先] パネルの設定 → 運用 1 「8.2.4 [あて先] パネルの設定」

あて先に、配布先の中継マネージャを選択します。

3. ジョブを実行する。

- ジョブの実行方法 → 運用 1「8.3 ジョブを実行, 保存する」

ジョブの実行状況を確認する

- 実行状況の表示 → 運用 1「8.4.3 [ジョブ実行状況] ウィンドウで表示される項目」
- 実行状況の確認方法 → 運用 1「8.4.6 全あて先ジョブの実行状況の表示方法」

失敗したジョブを再実行する

- ジョブの再実行方法 → 運用 1「8.5.2 エラージョブの再実行」

● **注意事項**

- パッケージング時の注意事項 → 運用 1「2.1.5 パッケージング時の注意事項」
- ジョブのあて先設定時の注意事項 → 運用 1「8.2.4(4) あて先を設定するときの注意事項」
- ジョブの実行状況確認時の注意事項 → 運用 1「8.4.2 ジョブの実行状況を確認するときの注意事項」

4.7 配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する

● 概要

スケジュールを設定してソフトウェアを配布できます。さらに、配布先でソフトウェアをインストールする日時や、システム起動時や終了時にインストールするといった、インストールのタイミングも指定できます。

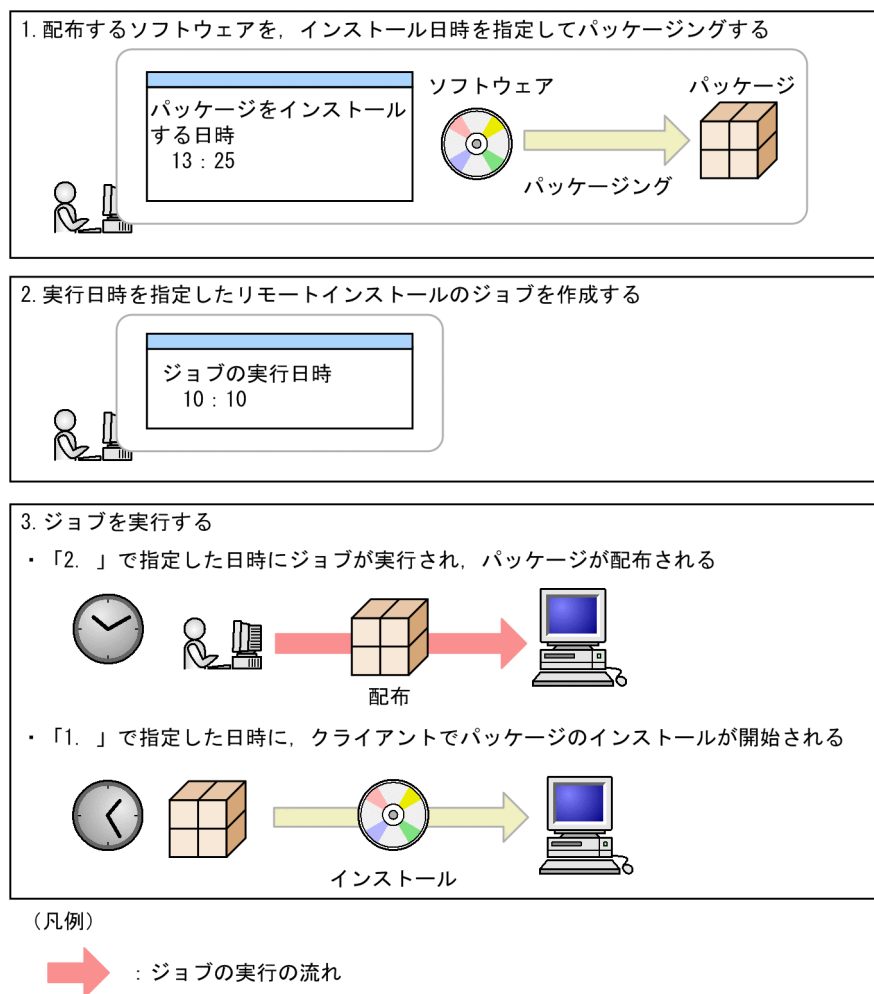
例えば、同じインストール日時を指定したパッケージをあらかじめ複数のクライアントに配布しておくことで、複数のクライアントに同じタイミングでソフトウェアを導入するといった運用ができます。

クライアントでのインストール日時およびインストールのタイミングはソフトウェアのパッケージング時に指定できます。ジョブを実行する日時は、ジョブの作成時に指定できます。

- ・ 日時を指定してジョブを実行する運用例 → 運用 1「2.5.5 決められた時刻にインストールする」

配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する流れを次の図に示します。

図 4-7 配布日時およびインストール日時を指定してソフトウェアを配布する流れ



● 操作手順

1. 配布するソフトウェアを、インストール日時を指定してパッケージングする。

- パッケージングの手順 → 運用 1 「2.1 パッケージングの方法」
- パッケージのインストール日時の指定 → 運用 1 「2.2.6 [スケジュール] パネル」

2. 実行日時を指定したリモートインストールのジョブを作成する。

- ジョブの作成手順 → 運用 1 「2.3.1 リモートインストールの実行手順」
- ジョブの実行日時の指定 → 運用 1 「8.2.5 [スケジュール] パネルの設定」

3. ジョブを実行する。

- ジョブの実行方法 → 運用 1 「8.3 ジョブを実行, 保存する」
- 実行されたジョブの実行順序 → 「2.9.7 ジョブの実行順序」

ジョブの作成時に設定したスケジュールに従って、ジョブが実行されます。クライアントに配布されたパッケージは、パッケージング時に指定したスケジュールに従ってインストールされます。

ジョブの実行状況を確認する

- 実行状況の確認方法 → 運用 1 「8.4.3 [ジョブ実行状況] ウィンドウで表示される項目」

失敗したジョブを再実行する

- ジョブの再実行方法 → 運用 1 「8.5.2 エラージョブの再実行」

● 注意事項

- パッケージング時の注意事項 → 運用 1 「2.1.5 パッケージング時の注意事項」
- ジョブの実行状況確認時の注意事項 → 運用 1 「8.4.2 ジョブの実行状況を確認するときの注意事項」

4.8 最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する

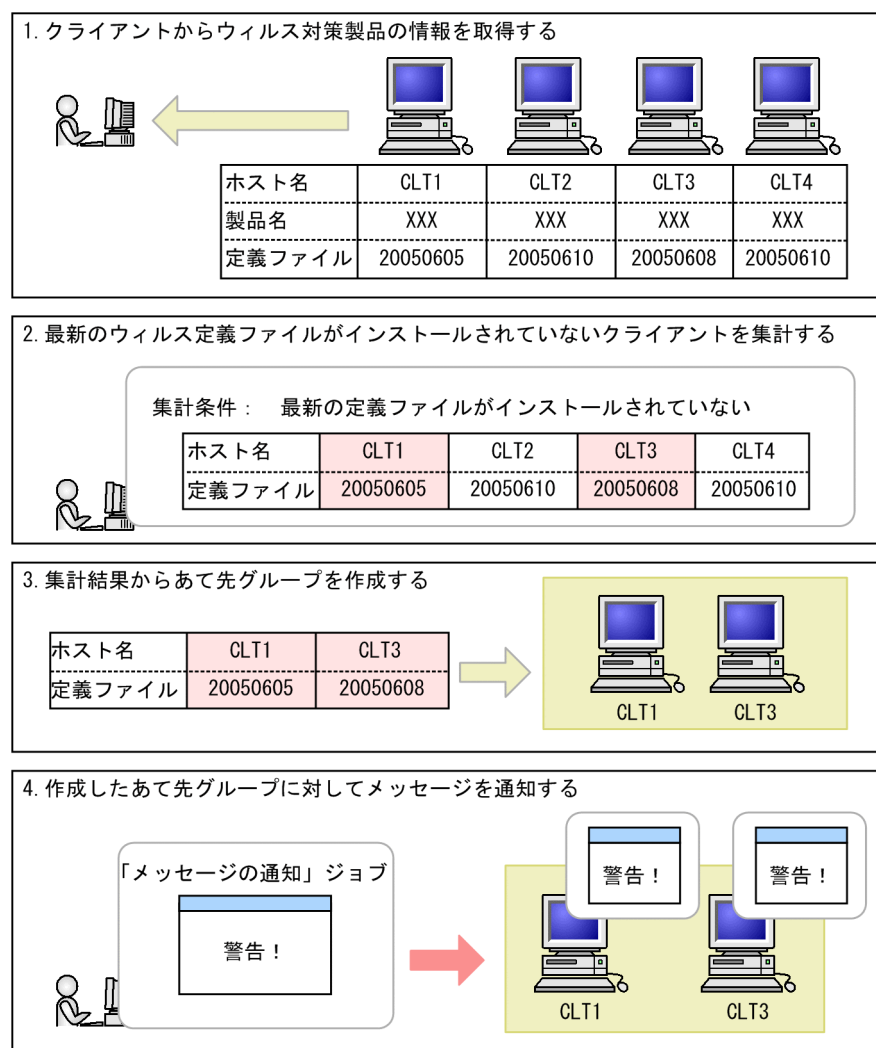
● 概要

クライアントから取得したインベントリ情報を集計して、最新のウィルス定義ファイルがインストールされているかどうかを確認できます。さらに、集計結果を基にクライアントをグルーピングして、インストールされていないクライアントへ一括して警告メッセージを通知できます。

- JP1/NETM/DM で情報を取得できるウィルス対策製品 → 「2.2.2(1) 取得できるソフトウェア情報」

最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する流れを次の図に示します。

図 4-8 最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントへ警告メッセージを通知する流れ



(凡例)

→ : ジョブの実行の流れ

● 操作手順**1. クライアントからウィルス対策製品の情報を取得する。**

- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブの実行 → 運用 1 「3.2.1 ソフトウェア情報の取得手順」

2. 最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないクライアントを集計する。

- インベントリビューアの起動 → 運用 1 「4.1.1 インベントリビューアの起動」
- インベントリ情報の集計手順 → 運用 1 「4.2.1 集計手順」
- ウィルス定義ファイルの表示 → 運用 1 「4.2.3(3)(a) ウィルス定義ファイルの集計」

最新のウィルス定義ファイルがインストールされていないことを条件に、クライアントを集計します。

3. 集計結果からあて先グループを作成する。

- 集計結果からのあて先グループの作成方法 → 運用 1 「4.2.7 集計結果からあて先グループを作成する」

4. 作成したあて先グループに対してメッセージを通知する。

- メッセージの通知 → 運用 1 「7.5 クライアントへメッセージを通知する」

● 注意事項

- ソフトウェア情報取得時の注意事項 → 運用 1 「3.2.3 ソフトウェア情報を取得するときの注意事項」
- 「メッセージの通知」ジョブ実行時の注意事項 → 運用 1 「7.5.2 クライアントへのメッセージ通知時の注意事項」

4.9 省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する

● 概要

クライアントのシステム情報として、PCの電源設定の情報を取得できます。クライアントから取得した電源設定の情報を集計することで、電源設定の状況を把握できます。

- JP1/NETM/DMで管理できるシステム情報 → 「2.2.1 システム情報の取得」

システム内のPCに対して省電力設定を規定している環境では、省電力設定が適用されていないクライアントに対して電源設定を変更するバッチファイルをリモートインストールすることで、省電力設定の徹底を図れます。

省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する流れを次の図に示します。

図 4-9 省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する流れ (1/2)

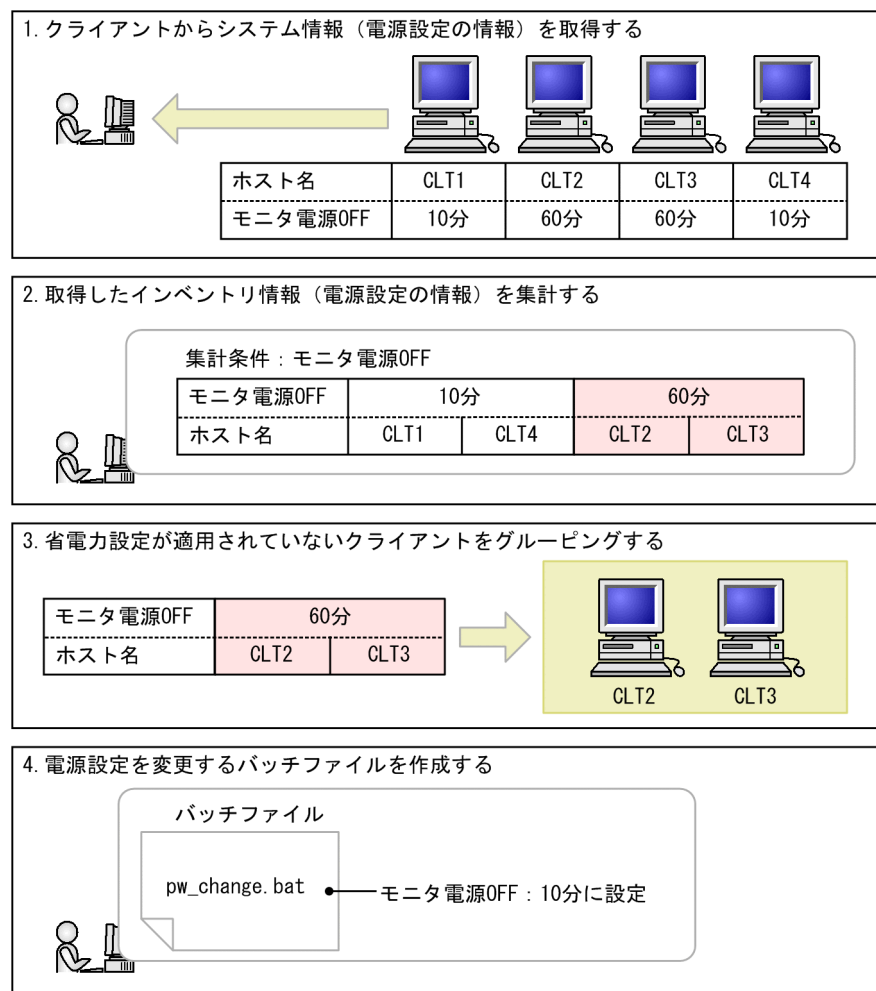
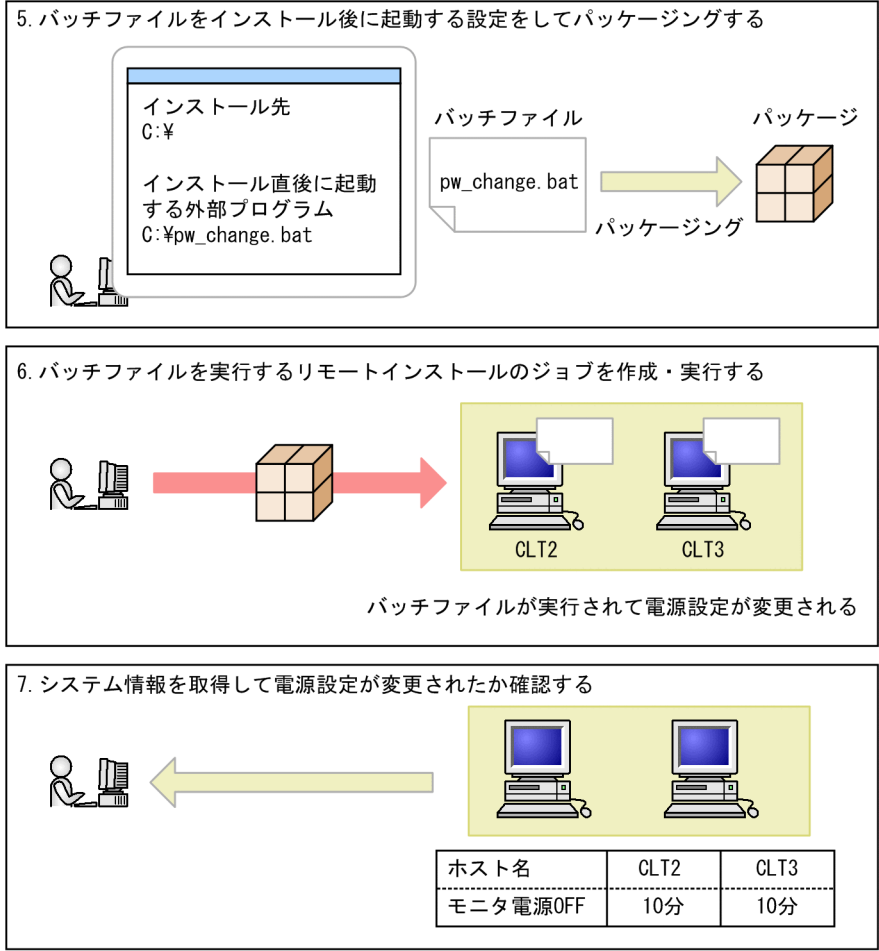


図 4-10 省電力設定が適用されていないクライアントの電源設定を変更する流れ (2/2)



(凡例)

 : ジョブの実行の流れ

● 操作手順

1. クライアントからシステム情報（電源設定の情報）を取得する。

- ・ システム情報の取得手順 → 運用 1「3.1.1 システム情報の取得手順」

2. 取得したインベントリ情報（電源設定の情報）を集計する。

- ・ インベントリビューアの起動手順 → 運用 1「4.1.1 インベントリビューアの起動」
- ・ インベントリ情報の集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」

「モニタの電源を切る（AC）」などの電源設定を条件に、クライアントを集計します。

3. 省電力設定が適用されていないクライアントをグルーピングする。

- ・ 集計結果からのあて先グループの作成方法 → 運用 1「4.2.7 集計結果からあて先グループを作成する」

4. 電源設定を変更するバッチファイルを作成する。

Windows の powercfg コマンドを利用すると、電源設定を変更できます。例えば、OS が Windows XP のクライアントに対して、AC 電源で動作しているモニタの電源を切るまでの時間を 10 分、システムスタンバイまでの時間を 20 分に設定したい場合は、次のようにバッチファイルを作成します。

```
powercfg /change 自宅または会社のデスク /monitor-timeout-ac 10  
powercfg /change 自宅または会社のデスク /standby-timeout-ac 20
```

5. バッチファイルをインストール後に起動する設定をしてパッケージングする。

作成したバッチファイルをパッケージングします。また、リモートインストール後に起動させる外部ファイルに、作成したバッチファイルを指定します。

- パッケージングの手順 → 運用1「2.1 パッケージングの方法」
- バッチファイルの起動の設定 → 運用1「2.2.10 [外部プログラム] パネル」

6. バッチファイルを実行するリモートインストールのジョブを作成・実行する。

- ジョブの作成手順 → 運用1「2.3.1 リモートインストールの実行手順」
- ジョブの実行方法 → 運用1「8.3 ジョブを実行、保存する」

7. システム情報を取得して電源設定が変更されたか確認する。

- システム情報の取得手順 → 運用1「3.1.1 システム情報の取得手順」

● 注意事項

取得できるインベントリ情報の注意事項については、「2.2.1(1) Windows のクライアントから取得できるシステム情報」を参照してください。

4.10 特定の日にクライアントをシャットダウンさせる

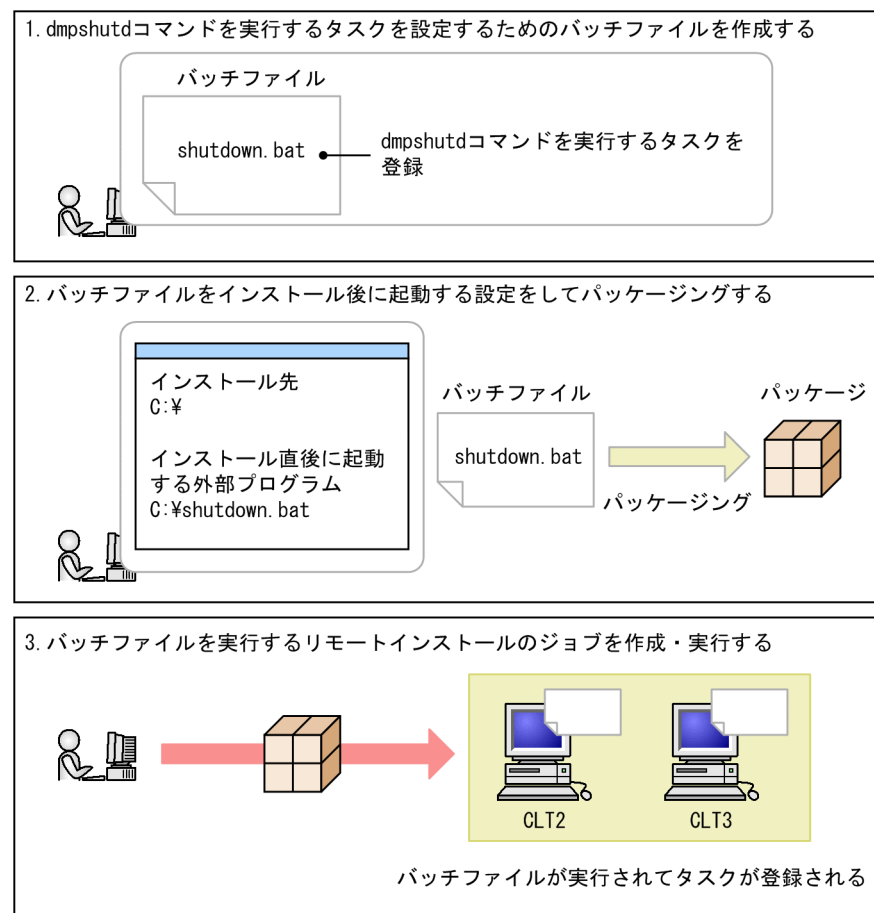
● 概要

クライアントの dmpshutd コマンドを実行すると、コンピュータをシャットダウンさせることができます。dmpshutd コマンドと Windows のタスクを利用して、特定の曜日および時間にクライアントをシャットダウンさせるように設定することで、電源の消し忘れを対策でき、消費電力の削減を図れます。

ここでは、月曜日～金曜日の 20:00 にクライアントをシャットダウンさせる方法を説明します。

特定の曜日および時間にクライアントをシャットダウンさせる流れを次の図に示します。

図 4-11 特定の曜日および時間にクライアントをシャットダウンさせる流れ



(凡例)

➡ : ジョブの実行の流れ

● 操作手順

1. dmpshutd コマンドを実行するタスクを設定するためのバッチファイルを作成する。

月曜日～金曜日の 20:00 にクライアントの dmpshutd コマンドを実行するタスクを設定するバッチファイルを作成します。作成するバッチファイルの内容を次に示します。

4. 代表的な構築例および運用例

```
AT 20:00 /interactive /every:M,T,W,Th,F
"C:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDMP¥BIN¥dmpshutd.exe" /USER,8 > C:¥at.txt
```

バッチファイルの実行結果は C:¥at.txt に出力されます。

なお、dmpshutd コマンドを実行するときは、オプションに「/USER,8」を必ず指定してください。

2. バッチファイルをインストール後に起動する設定をしてパッケージングする。

作成したバッチファイルをパッケージングします。また、リモートインストール後に起動させる外部ファイルに、作成したバッチファイルを指定します。

- パッケージングの手順 → 運用 1 「2.1 パッケージングの方法」
- バッチファイルの起動の設定 → 運用 1 「2.2.10 [外部プログラム] パネル」

3. バッチファイルを実行するリモートインストールのジョブを作成・実行する。

- ジョブの作成手順 → 運用 1 「2.3.1 リモートインストールの実行手順」
- ジョブの実行方法 → 運用 1 「8.3 ジョブを実行、保存する」

なお、シャットダウンの設定を解除するには、次の内容のバッチファイルを同じ手順でクライアントにリモートインストールしてください。

```
@echo off
FOR /F "tokens=4" %%i in (C:¥at.txt) do set atdel=%%i
at %atdel% /DELETE
exit
```

● 注意事項

シャットダウンの設定を解除する場合、バッチファイルの実行結果（上の手順では C:¥at.txt）が削除されているときは、リモートインストールは利用できません。クライアントに登録されているタスクを手動で解除してください。

4.11 新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する

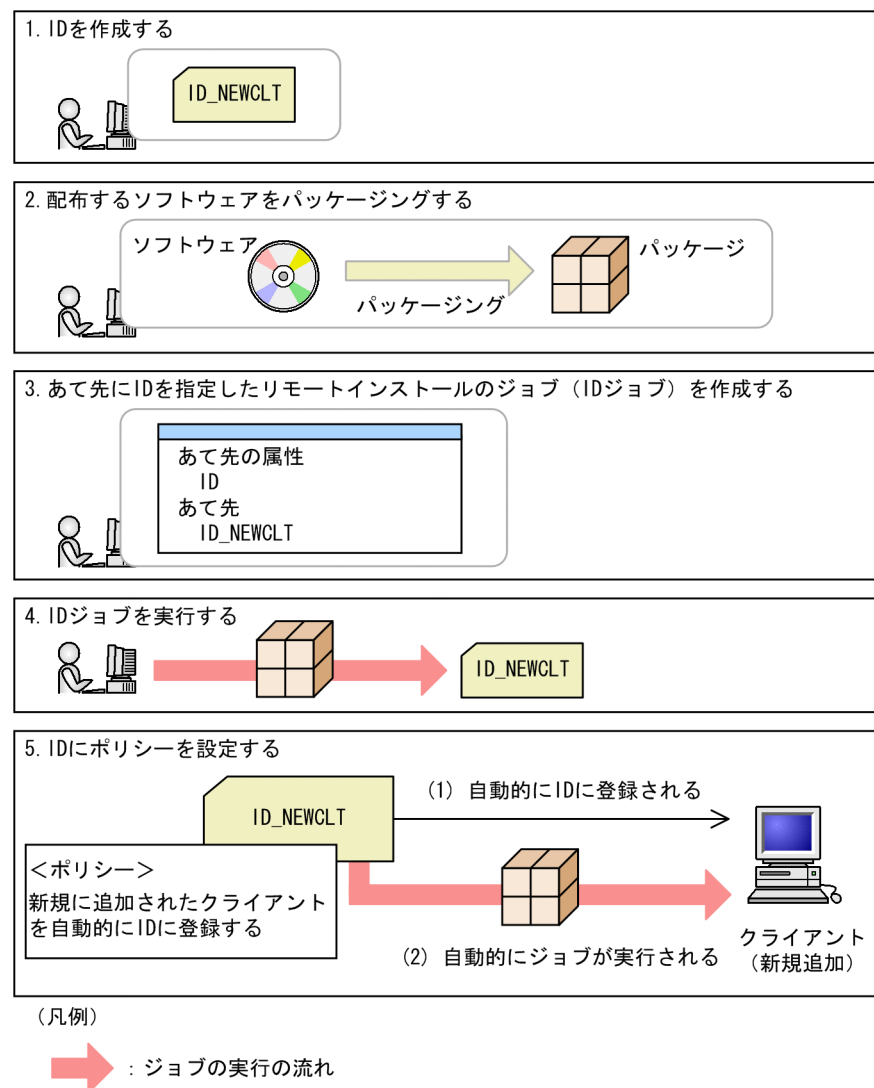
● 概要

ID に条件（ポリシー）を設定すると、JP1/NETM/DM が管理するシステムに新規に追加されたクライアントを自動的に ID に登録させることができます。

あらかじめ、ID に対してソフトウェア配布のジョブを実行しておくことで、新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布できます。これにより、ウィルス対策製品などのシステムの初期導入時に必要なソフトウェアを配布することで、セキュリティ対策に役立てることができます。

ID 「ID_NEWCLT」を作成して、新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する流れを次の図に示します。

図 4-12 新規に追加されたクライアントへ自動的にソフトウェアを配布する流れ



● 操作手順

1. ID を作成する。

4. 代表的な構築例および運用例

- ID の作成方法 → 構築「8.3.2 ID の作成」

2. 配布するソフトウェアをパッケージングする。

- パッケージングの手順 → 運用 1「2.1 パッケージングの方法」

3. あて先に ID を指定したリモートインストールのジョブ (ID ジョブ) を作成する。

- ジョブの作成手順 → 運用 1「2.3.1 リモートインストールの実行手順」
- ジョブ作成時のあて先の指定 → 運用 1「8.2.4 [あて先] パネルの設定」

4. ID ジョブを実行する。

5. ID にポリシーを設定する。

新規に追加されたクライアントが、自動的に ID に登録されるようになります。ID にクライアントが新規登録されると、次回、上位システムとの接続が発生したタイミングで、ID ジョブとして実行したジョブが自動的にクライアントに実行されます。

- ID へのポリシー設定手順 → 構築「9.4 ID の自動メンテナンス」

ジョブの実行状況を確認する

- 実行状況の表示 → 運用 1「8.4.3 [ジョブ実行状況] ウィンドウで表示される項目」
- 実行状況の確認方法 → 運用 1「8.4.5 ID ジョブの実行状況の表示方法」

失敗したジョブを再実行する

- 再実行の設定 → 運用 1「8.5.2(1)(b) ID ジョブを再実行する場合」
- ジョブの再実行方法 → 運用 1「8.5.2(2) エラージョブの再実行方法」

● 注意事項

- パッケージング時の注意事項 → 運用 1「2.1.5 パッケージング時の注意事項」
- ID を使用する場合の注意事項 → 構築「8.3.5 ID を使用する場合の注意事項」
- システム構成情報と ID を連携させる運用の注意事項 → 構築「8.4.3 システム構成情報と ID の連携時の注意事項」
- ID ジョブの実行状況確認時の注意事項 → 運用 1「8.4.5(4) ID ジョブの実行状況を確認するときの注意事項」
- クライアントを自動的に ID に追加する運用の注意事項 → 構築「9.4.2 ID の自動メンテナンス運用時の注意事項」

4.12 障害が発生したクライアントを配布管理システムから遠隔操作でメンテナンスする

クライアントに障害が発生した場合、自動的に障害の発生をサーバに通知（アラート通知）することができます。障害が発生したクライアントを、サーバから遠隔操作（リモートコントロール）することで、システム管理者が直接問題点を把握し、障害を回復できます。

ここでは、クライアントからサーバへ障害の発生を通知し、サーバ側で障害が発生したクライアントを確認する方法と、サーバからクライアントをリモートコントロールする方法を説明します。

4.12.1 障害の発生をサーバに通知する

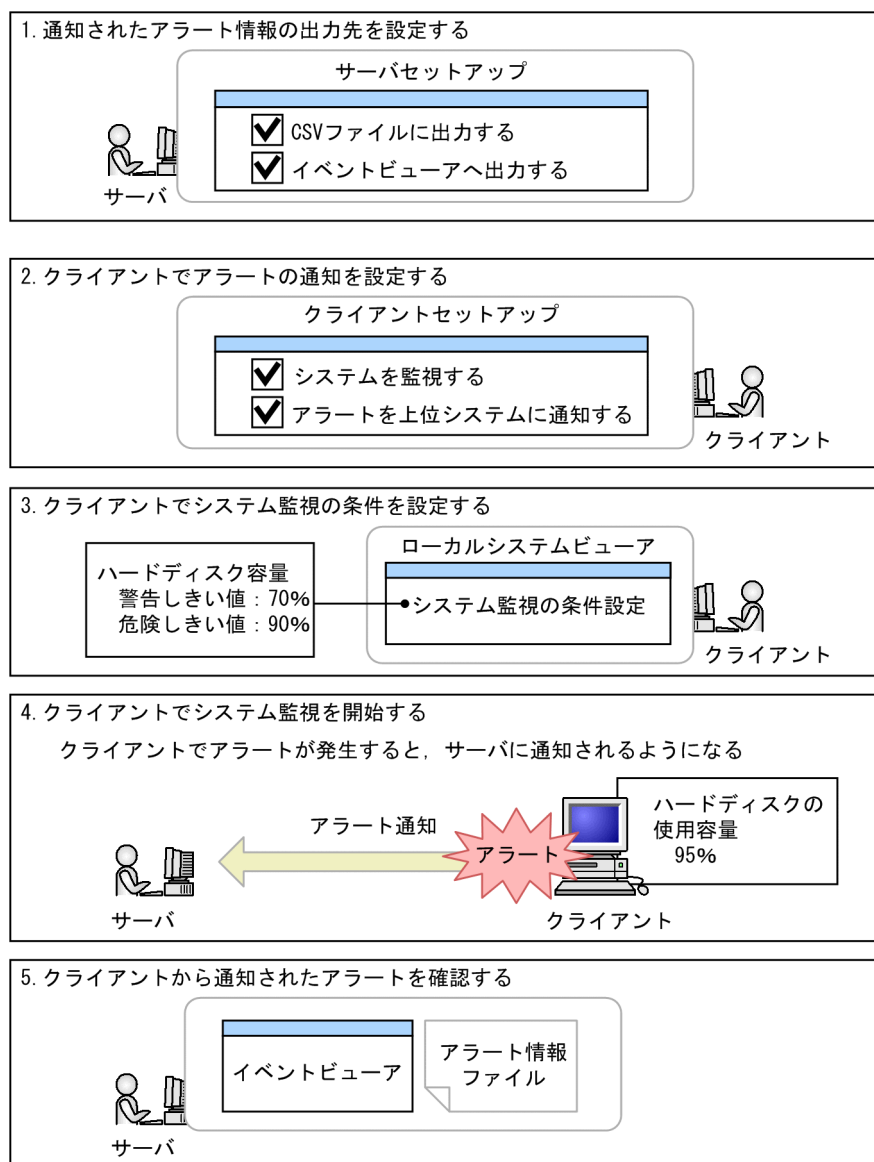
● 概要

クライアントで設定したシステム監視の条件に従って、クライアントからサーバへアラートが通知されます。サーバでは、出力されたアラート情報を基にアラートを通知したクライアントを確認します。

- アラート通知の概要 → 「1.2.5(3) クライアントのシステムの監視」

クライアントでの障害の発生をサーバに通知する流れを次の図に示します。

図 4-13 クライアントでの障害の発生をサーバに通知する流れ



● 操作手順

- 通知されたアラート情報の出力先を設定する。
 - サーバのセットアップ → 構築「4.2.13 [クライアントアラート] パネル」
 - アラートを中継する場合の設定 → 運用1「7.4.2 アラート情報の中継」
- クライアントでアラートの通知を設定する。
 - クライアントの設定方法 → 運用1「11.8.4(4) 上位システムへアラートを通知する」
 - クライアントのセットアップ → 構築「6.2.9 [システム監視] パネル」
- クライアントでシステム監視の条件を設定する。
 - システム監視の条件設定 → 運用1「11.8.2 システム監視の条件設定」
- クライアントでシステム監視を開始する。
 - システム監視の開始方法 → 運用1「11.8.1 システム監視の開始と停止」
- クライアントから通知されたアラートを確認する。

- ・ 通知されたアラートの確認方法 → 運用 1 「7.4.1 アラート情報の確認」

● 注意事項

- ・ アラート確認時の注意事項 → 運用 1 「7.4.1(1)(c) アラート情報ファイルの利用時の注意事項」

4.12.2 クライアントをリモートコントロールする

● 概要

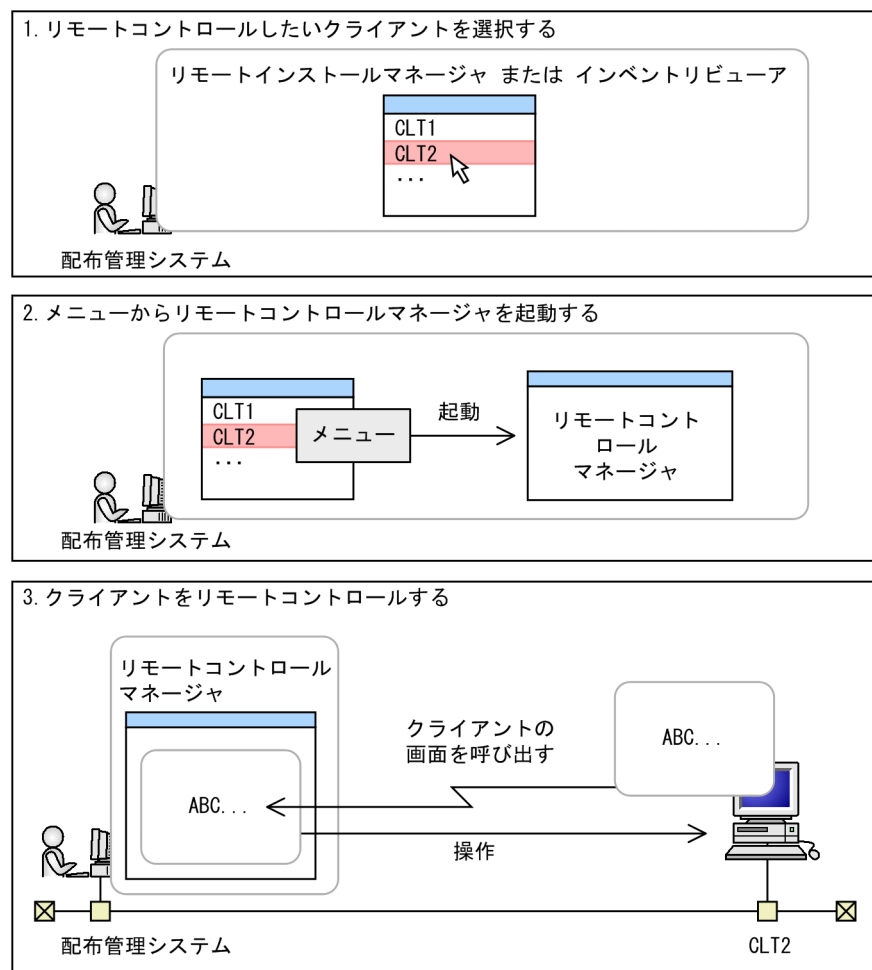
リモートインストールマネージャの [システム構成], [あて先] または [ディレクトリ情報] ウィンドウに表示されている JP1/NETM/DM のシステム構成から、クライアントを選択してリモートコントロールマネージャを起動することで、選択したクライアントをリモートコントロールします。

また、インベントリ情報の集計結果に表示されたクライアントを選択して、リモートコントロールマネージャを起動することもできます。

- ・ リモートコントロールの概要 → 「2.8 クライアントのリモートコントロール」

クライアントをリモートコントロールする流れを次の図に示します。

図 4-14 クライアントをリモートコントロールする流れ



● 前提条件

- ・ 必要なシステム構成 → 「1.3.6 リモートコントロール機能を使用する場合のシステム構成要素」

● 操作手順

JP1/NETM/DM のシステム構成を利用する場合

1. リモートインストールマネージャの [システム構成], [あて先] または [ディレクトリ情報] ウィンドウからリモートコントロールしたいクライアントを選択する。
2. [オプション] - [リモートコントロールマネージャの起動] からリモートコントロールマネージャを起動する。
3. クライアントをリモートコントロールする。
 - リモートコントロールマネージャの操作方法 → マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」

インベントリ情報の集計結果からクライアントをリモートコントロールする場合

1. インベントリ情報を集計する。
 - インベントリビューアの起動手順 → 運用 1「4.1.1 インベントリビューアの起動」
 - インベントリの集計手順 → 運用 1「4.2.1 集計手順」
2. 集計結果からリモートコントロールしたいクライアントを選択する。
3. メニューからリモートコントロールマネージャを起動する。
 - 集計結果からのリモートコントロールマネージャの起動手順 → 運用 1「4.6 リモートコントロール機能を利用する」
4. クライアントをリモートコントロールする。
 - リモートコントロールマネージャの操作方法 → マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」

5

JP1/NETM/DM システムの設計

JP1/NETM/DM のプログラムをインストールする前に、組織構成、マシンの台数や性能などを考慮し、システム全体の構成を検討します。
この章では、システム構成の設計基準やハードウェアに関する見積もりなど、JP1/NETM/DM をインストールする前に検討が必要な事項について説明します。

5.1 システム構成の設計

5.2 運用する環境に応じたシステム構成の設計

5.3 ハードウェアに関する見積もり

5.4 データベース容量の見積もり

5.1 システム構成の設計

JP1/NETM/DM は、数十台～数百台のクライアントで構成される小規模、中規模システムから、数千台以上のクライアントで構成される大規模システムまでをサポートしています。

ここでは、システムの規模や環境に応じたシステム構成の設計について説明します。

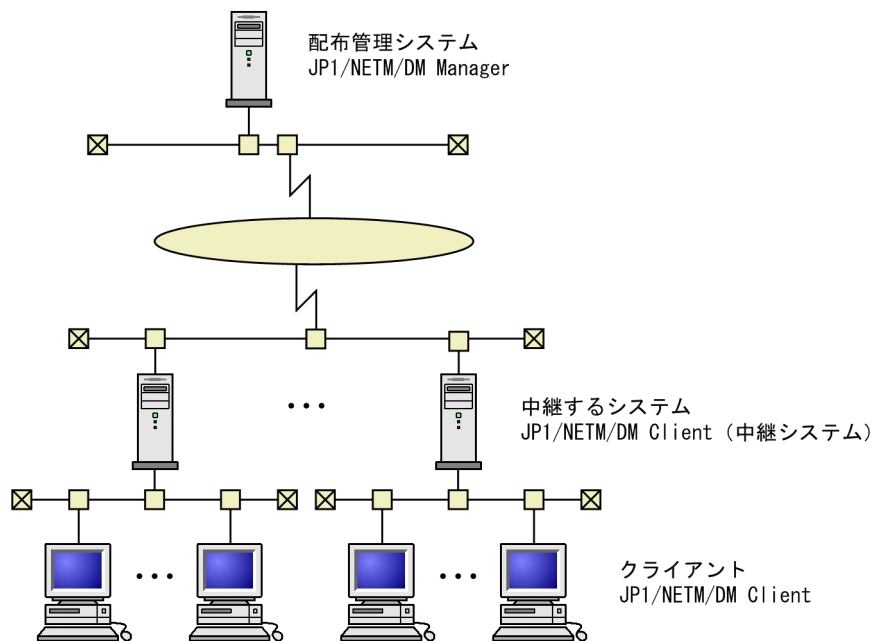
5.1.1 基本的なシステム構成の設計

ビルや事業所ごとに数十台～数百台のクライアントが LAN に接続されていて、各事業所間を WAN で結ぶようなネットワークでは、JP1/NETM/DM Manager でシステム全体の配布・資産管理を行い、各拠点は JP1/NETM/DM Client（中継システム）で中継をする多階層構成が一般的です。

JP1/NETM/DM Client（中継システム）は、中継するシステムとしてだけでなく、同一 LAN 内のクライアントに対する配布管理システムとしても使用できます。

JP1/NETM/DM の基本的なシステム構成を次の図に示します。

図 5-1 基本的なシステム構成例



なお、配布管理システムに直接接続できるクライアントの数は、ハードウェア環境にもよりますが、一般的に 200 台以内を推奨します。200 台を超えるクライアントを管理する場合は、運用方法やネットワーク構成を考慮して、中継システムの配置を検討してください。

中継システムの配置の検討についての詳細は、「5.1.4 中継するシステムを使用したシステム構成の検討」を参照してください。

5.1.2 大規模なシステム構成の設計

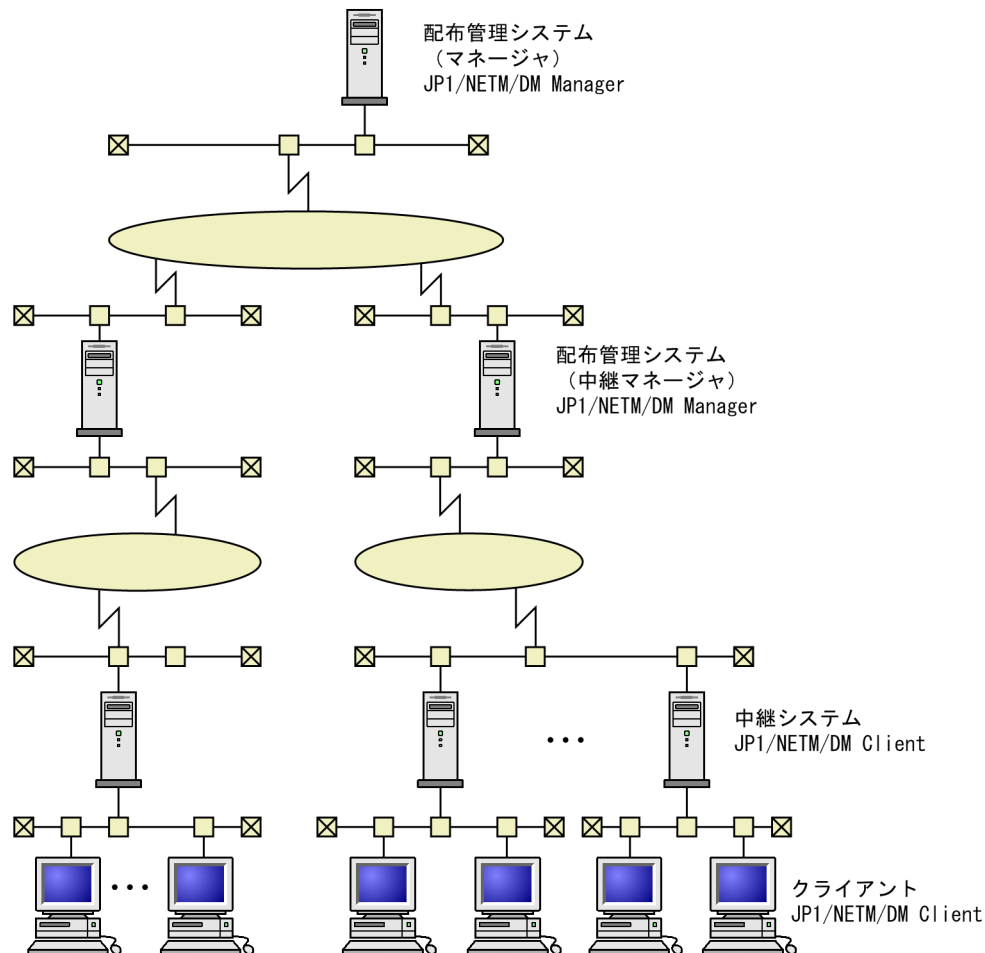
クライアントが数千台またはそれ以上の台数となるような、全国規模の大規模システムでは、1 台の JP1/NETM/DM Manager ですべての管理業務をカバーするのは大変な負担です。JP1/NETM/DM Client（中継システム）を部門ごとの配布管理システムとして使用することもできますが、一つ下の階層までしか

ジョブを実行できない、実行できるジョブの種類が少ない、などの制限があります。

このような場合は、JP1/NETM/DM Manager を階層構成にして運用することをお勧めします。全体を統括する JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）の配下に、中継機能を持つ JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）を配置して、部門ごとの運用を任せることで、全体を統括する配布管理システムの負担を大幅に軽減できます。

大規模ネットワークに JP1/NETM/DM を導入する場合のシステム構成例を次の図に示します。

図 5-2 大規模システムの構成



大規模な JP1/NETM/DM システムを運用する場合、基本的なシステム構成での運用に加え、次の内容について知っておく必要があります。

- 配布管理システムの階層化によるメリット
- 中継マネージャ配下のシステム構成情報の管理
- マネージャからのジョブの実行

それぞれについて説明します。

(1) 配布管理システムの階層化によるメリット

JP1/NETM/DM Manager を階層構成にした運用では、中継マネージャを頂点とする部門ごとのネットワークを、一つの JP1/NETM/DM システムとして扱うため、次のようなメリットがあります。

● 部門ごとに異なるノード識別キーを使用できる

JP1/NETM/DM では、各ホストを識別するための名称を、ホスト名または IP アドレスのどちらかに統一します。JP1/NETM/DM Manager を階層構成にすると、システム全体ではなく、中継マネージャごとに、どちらを使用するか選択できます。

● 部門ごとに独自の管理項目が持てる

JP1/NETM/DM には、システム管理者が独自の管理項目を作成して情報を取得できる機能があります。独自の管理項目として作成できるのは、レジストリ情報とユーザインベントリ情報です。この管理項目を、マネージャと中継マネージャとで別々に設定できます。大規模なネットワークでは、システム全体で管理したい情報と、部門ごとに管理したい情報が異なる場合があります。このような場合に、それぞれ、必要な情報を取得できます。

レジストリ情報の管理については、「2.2.1 システム情報の取得」を、ユーザインベントリ情報の管理については、「2.2.3 ユーザインベントリ情報の取得」を参照してください。

(2) 中継マネージャ配下のシステム構成情報の管理

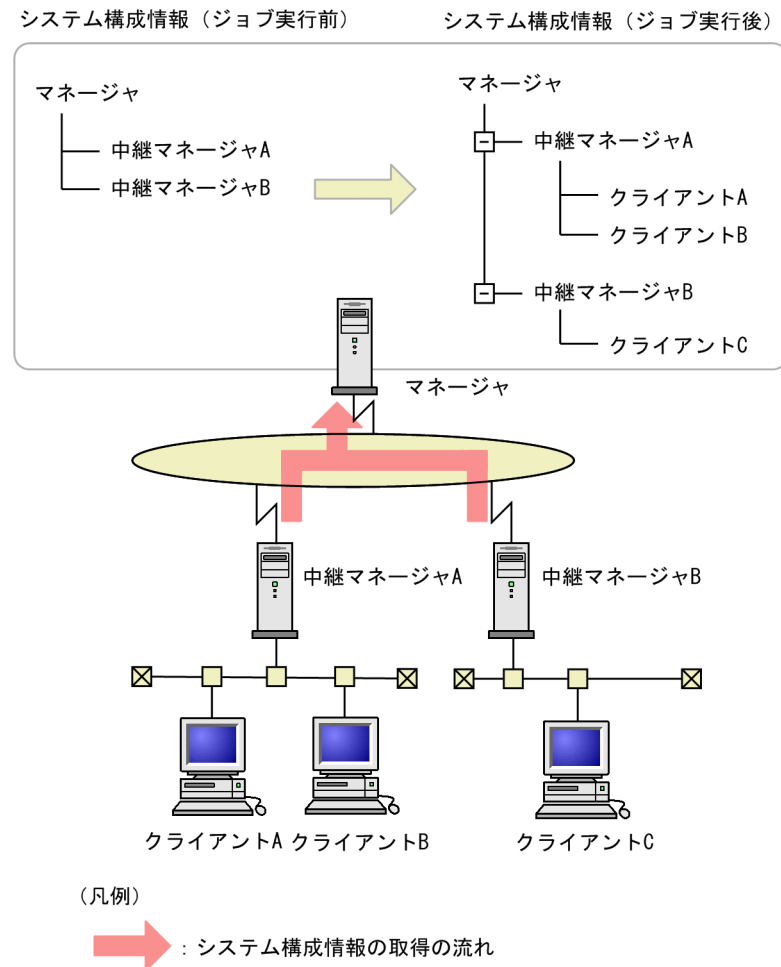
マネージャの配下に中継マネージャを置くと、マネージャからは、中継マネージャ配下のシステム構成情報に対する操作（中継システムやクライアントの追加、移動、削除など）はできません。中継マネージャ配下のシステム構成情報を操作できるのは中継マネージャだけです。

このため、JP1/NETM/DM Manager を階層化した大規模な JP1/NETM/DM システムを構築する場合は、初めに、拠点ごとに中継マネージャを頂点とする基本的な JP1/NETM/DM システム構成を構築し、各拠点の中継マネージャ上でシステム構成情報を作成しておきます。そのあと、マネージャを導入し、各拠点の配布管理システムを中継マネージャとして定義します。

マネージャ上で、各拠点の JP1/NETM/DM Manager を中継マネージャとして設定し終わったら、各中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得する必要があります。中継マネージャ配下のシステム構成情報を一括して取得するには、中継マネージャをあて先とした「システム構成情報の取得」ジョブを実行します。中継マネージャが管理するシステム構成情報が転送され、マネージャの「システム構成」ウィンドウに表示されます。なお、中継マネージャが多階層の場合、上位の中継マネージャから下位の中継マネージャ配下のシステム構成情報を取得するときは、下位の中継マネージャをあて先に指定します。

「システム構成情報の取得」ジョブを実行して、中継マネージャからシステム構成情報を取得する流れを次の図に示します。

図 5-3 中継マネージャからのシステム構成情報の取得



マネージャでいったんシステム構成情報を取得したら、あとはネットワーク内のすべての中継マネージャ、中継システム、およびクライアントを、通常のあて先として扱えます。また、マネージャで ID を作成する場合、ネットワーク内のすべての中継マネージャおよび中継システムを ID 管理中継として設定できます。

システム構成情報を取得したあと「システム構成」ウィンドウの情報を常に最新の状態にしておくには、マネージャおよび中継マネージャのセットアップで、システム構成を自動的に登録・反映するように設定してください。中継マネージャ配下のシステム構成情報が、自動的にマネージャに通知されます。

(3) マネージャからのジョブの実行

通常、配布管理システムからジョブのあて先として指定できるのは、あて先グループ、ID、および単体のクライアントの 3 種類です。しかし、JP1/NETM/DM Manager を階層構成にした場合、最上位のマネージャからは、この三つに加えて、「全あて先」を指定したジョブ（**全あて先ジョブ**）を実行できます。「全あて先」とは、中継マネージャ下のすべてのホストを意味します。特定の中継マネージャに対して全あて先ジョブを実行すると、ジョブを受け取った中継マネージャが、配下のすべてのクライアントに対してそのジョブを実行します。

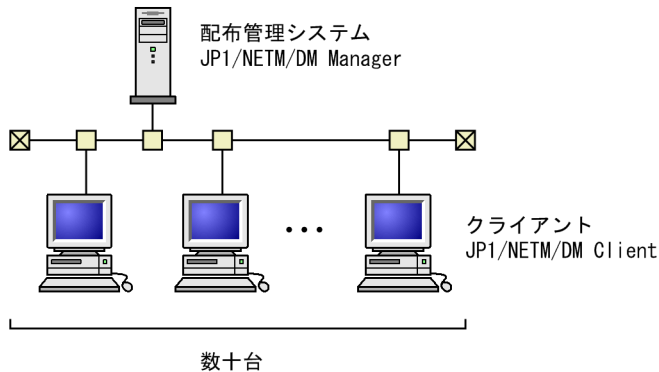
マネージャからは、全あて先ジョブの実行結果を、クライアントの台数（総数および実行結果ごとの台数）で確認できます。中継マネージャのセットアップで、全あて先ジョブのクライアント実行結果を記録する設定をしておけば、1 台 1 台のクライアントごとの実行状況も確認できます。

また、マネージャから全あて先ジョブを再実行すると、ジョブの実行状態が「実行待ち」または「エラー」のクライアントだけを、中継マネージャが自動的にピックアップして再実行します。

5.1.3 小規模なシステム構成の設計

数十台程度のクライアントが LAN に接続されているシステムでは、中継するシステムを使わないで、JP1/NETM/DM Manager だけでクライアントを管理できます。小規模システムでの JP1/NETM/DM の構成を次の図に示します。

図 5-4 小規模システムでの JP1/NETM/DM の構成



5.1.4 中継するシステムを使用したシステム構成の検討

JP1/NETM/DM システムには、配布管理システムの負荷やネットワークの負荷を軽減するために、中継するシステムがあります。中継するシステムを使用することで、多数のクライアントを階層構成で管理できます。また、直接、配布管理システムに接続するクライアントの数を減らしたり、ネットワークで扱われるデータ量を減らしたりすることができます。

なお、仮想化環境のクライアントは、ログインユーザ数に比例して取得する操作ログが増加します。そのため、配布管理システムに直接接続する運用をお勧めします。

(1) 中継するシステムの配置の目安

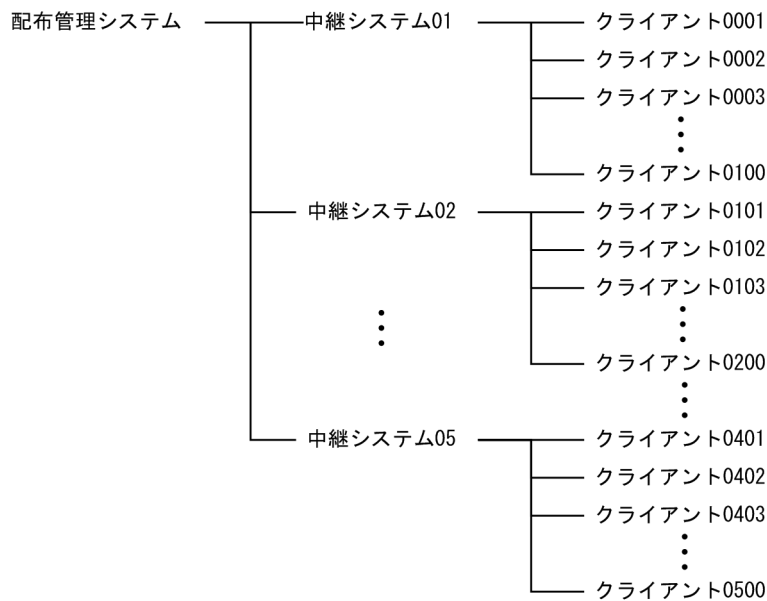
配布管理システムに直接接続できるマシンの数は、ハードウェア環境にもよりますが、一般的に 200 台以内を推奨します。200 台を超えるクライアントを管理する場合は、配布管理システムとクライアントの間に中継するシステムを配置することをお勧めします。

なお、中継システムで配布管理システムの機能を使用しない場合、直接接続できるマシンの数は、1,000 台以内を推奨します。

また、中継システムで配布管理システムの機能を使用する場合、直接接続できるクライアントの数は 200 台以内を推奨します。管理するクライアントの数が 200 台を超えるときは、中継マネージャの配置を検討してください。

例えば、500 台のクライアントを持つ中規模ネットワークに JP1/NETM/DM を導入し、配布管理システムの機能を使用してクライアントを管理する場合、次の図のようなシステム構成が考えられます。

図 5-5 中継するシステムの配置の目安



中継するシステムの階層を増やすと、さらに多くのクライアントを管理できるようになります。ただし、階層を増やし過ぎると、ソフトウェアの配布などの処理に時間が掛かることがあります。ハードウェア導入のコストやネットワーク性能なども考慮して、適切な階層を検討してください。

なお、配布管理システムのセットアップでは、「同時に接続できる下位システム数」を設定し、同時接続台数を絞り込むことができます。同様に、中継システムのセットアップでは、「同時に接続できるクライアント数」を設定して、クライアントの同時接続台数を絞り込むことができます。ネットワークの負荷状態、サーバの CPU 使用率などを基にチューニングしてください。

(2) 中継するシステムの適切な階層数

中継するシステムの階層を増やすと、非常に多くのクライアントを管理できるようになります。しかし、中継するシステムの階層を増やし過ぎると、中継するシステムの数だけハードウェアのコストが掛かります。これは、中継するシステムにはクライアントよりも高性能なハードウェアが要求されるためです。また、クライアントまでに多くの中継するシステムを経由すると、クライアントへのソフトウェアの配布が遅れることもあります。中継するシステムの階層は、ハードウェアの導入コストやネットワーク性能なども考慮して、適切な階層を検討する必要があります。

(3) 中継するシステムの階層の制限

中継するシステムは、次に示す制限内で設置してください。

- 7 階層まで
- 配布管理システム（システム最上位のホスト）の直下のホストから最下位のホストまでのホスト名を合計した長さが、255 バイト以内

次に、ホスト名の長さによる階層の制限について説明します。

配布管理システムでジョブを実行するとき、ジョブの対象となるクライアントを指定します。このとき、配布管理システムからクライアントまでの経路は、経由する中継するシステムのホスト名とクライアントのホスト名をつないだ形式のアドレスで管理されています。アドレスの形式は次のとおりです。

DNS を使用しない場合

ホスト名!ホスト名…

DNS を使用する場合

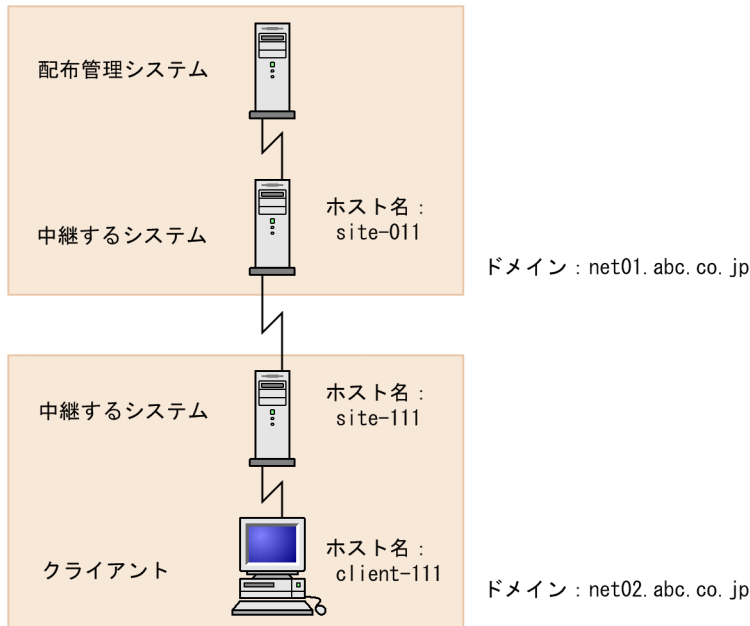
ホスト名.ドメイン名!ホスト名.ドメイン名…

各ホスト名は「!」で区切ります。また、DNS を使用する場合は各ホストを「ホスト名.ドメイン名」の形式で指定します。アドレスの長さは最大 255 バイトで、区切り文字の「!」および「.」もアドレスの長さに含まれます。また、ホスト名は 64 バイトまで指定できます。

中継するシステムは、この制限内で設置できます。そのため、極端に長いホスト名を使用している場合や、DNS でのドメイン名が長い場合には、中継するシステムの階層数が制限されます。

中継するシステムの階層例を次の図に示します。

図 5-6 中継するシステムの階層例



この階層例の場合、配布管理システムが管理するアドレスは次のようになります。

DNS を使用しない場合

- 中継するシステムのアドレス：site-111
site-011!site-111 (17 バイト)
- クライアントのアドレス：client-111
site-011!site-111!client-111 (28 バイト)

DNS を使用する場合

- 中継するシステムのアドレス：site-111
site-011.net01.abc.co.jp!site-111.net02.abc.co.jp (49 バイト)
- クライアントのアドレス：client-111
site-011.net01.abc.co.jp!site-111.net02.abc.co.jp!client-111.net02.abc.co.jp (76 バイト)

5.1.5 使用できるデータベース

配布管理システムでは、パッケージ、ジョブの実行結果、インベントリ情報など、さまざまな情報をリレーショナルデータベースで管理しています。

JP1/NETM/DM では、次に示すリレーショナルデータベースを使用できます。

● **Embedded RDB**

JP1/NETM/DM Manager が標準で提供する、組み込み型のリレーショナルデータベースです。

Embedded RDB を使用する場合、リレーショナルデータベース用のプログラムを別に用意する必要はありません。

● **Microsoft SQL Server**

Microsoft 社製のリレーショナルデータベースです。JP1/NETM/DM とは別にプログラムを用意する必要があります。

● **Oracle**

ORACLE 社製のリレーショナルデータベースです。JP1/NETM/DM とは別にプログラムを用意する必要があります。

なお、OS が Windows Server 2012、Windows Server 2008 R2 または Windows Server 2008 の場合、Oracle は使用できません。

これらのデータベースのどれを使用しても、JP1/NETM/DM の機能に差異はありません。環境に合わせて、使用するリレーショナルデータベースを選択してください。

(1) リレーショナルデータベースに必要なプログラム

Microsoft SQL Server または Oracle を使用するときは、次に示すプログラムが必要です。

Embedded RDB を使用する場合は、リレーショナルデータベースが組み込まれているので、プログラムを準備する必要はありません。

● **リレーショナルデータベースのサーバ**

データベースの情報を管理するサーバプログラムです。Microsoft SQL Server または Oracle が使用できます。

● **リレーショナルデータベースのクライアント機能**

データベースの情報にアクセスするためのクライアント機能です。

リレーショナルデータベースを使用したシステム構成や注意事項については、マニュアル「構築ガイド」の「7. リレーショナルデータベースを設定する」を参照してください。

(2) パッケージデータの格納先の選択

JP1/NETM/DM は管理情報をリレーショナルデータベースで管理していますが、配布するパッケージデータだけをファイルシステムに格納するようにできます。

パッケージデータの格納先は、JP1/NETM/DM Manager のインストール時に、[パッケージ格納方法の選択] ダイアログボックスで設定します。

格納先による違いは次のとおりです。目的に合った格納先を選択してください。

リレーショナルデータベースに格納した場合

JP1/NETM/DM の管理情報のバックアップが容易になります。

ファイルシステムに格納した場合

リレーショナルデータベースへ格納したときに比べ、リモートインストール時のパッケージ転送の性能が向上します。

5.1.6 バージョン間の互換性

JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client は、それぞれすべてのバージョンで互換性を持っています。したがって、例えば、特定のバージョンの JP1/NETM/DM Manager に、さまざまなバージョンの JP1/NETM/DM Client および JP1/NETM/DM SubManager を接続して使用できます。古いバージョンのプログラムでは、そのバージョンでサポートされている範囲の機能を使用できます。

なお、リモートコントロールマネージャとリモートコントロールエージェントのバージョン間の互換性については、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

5.1.7 システムの日時およびタイムゾーンの設定

JP1/NETM/DM システムでのシステムの日時およびタイムゾーンの設定について説明します。

(1) システムの日時の設定

ジョブなどの実行日時にずれが生じないように、JP1/NETM/DM のシステムを構成するすべてのコンピュータは、正確な日付および時刻を設定してください。日付と時刻の設定が実際の日時よりも進んでいたり、遅れていたりする場合、「システム構成情報の取得」ジョブ、「中継サーバからの結果通知保留」ジョブ、「中継サーバの結果通知保留の解除」ジョブの実行結果およびシステム構成情報の自動登録が配布管理システムに反映されないことがあります。

システム時刻の変更は、システム起動時またはシステム停止時に実施してください。処理中のジョブがある場合は、ジョブが完了してからシステム時刻を変更してください。なお、システム時刻を変更すると、次の不具合が生じることがあるので注意してください。

- 日時指定のジョブが、意図しない時間に実行される。
- システム時刻を進めた場合、日時指定のジョブが2度実行される場合がある。
また、システム時刻を遅らせた場合、遅らせる前の日時まで実行されない場合がある。
- ログの出力時刻がずれるため、障害要因を解析しにくくなる。

JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合は、システム時刻を遅らせたあとでジョブを作成すると、すでに登録されているジョブを上書きすることがあるため、ジョブは、遅らせた時間の経過を待って作成してください。以前実行したジョブが上書きされてしまった場合は、再度ジョブを実行してください。

(2) タイムゾーンに関する設定

[コントロールパネル] の「日付と時刻」で設定しているタイムゾーンと同じ設定値を、システム環境変数 TZ に指定しておく必要があります。タイムゾーンを日本語版 Windows 標準の「<GMT+09:00> 東京、大阪、札幌…」に設定している場合の指定方法を次に示します。

Windows NT の場合

[コントロールパネル] の「システム」を開き、システム環境変数に「TZ=JST-9」を設定したあと、再起動してください。

Windows Me または Windows 98 の場合

ファイル AUTOEXEC.BAT に「SET TZ=JST-9」を追加したあと、再起動してください。

JP1/NETM/DM では、クライアントから取得した情報に表示される日時は、クライアントのタイムゾーンでの日時が設定されています。そのため、クライアントのタイムゾーンが変更されると、変更後に取得した情報は異なる情報として認識されます。

また、クライアントでのジョブの実行日時も、クライアントのタイムゾーンに依存します。実行日時を

10：00 に指定したジョブを実行した場合は、各タイムゾーンでの 10：00 にジョブが実行されます。配布管理システムのタイムゾーンの 10：00 のタイミングで一斉に情報を収集したいといった場合は、タイムゾーンによる日時の差異を考慮して、実行日時を指定したジョブを実行する必要があります。

5.2 運用する環境に応じたシステム構成の設計

ここでは、JP1/NETM/DM システムを運用する環境に応じた、システム構成の設計について説明します。

5.2.1 Asset Information Manager Limited を使用する環境でのシステム構成

「Asset Information Manager Limited」は、配布管理システムとは別に専用のリレーショナルデータベースを使用します。

リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合、JP1/NETM/DM の「サーバ本体機能」と「Asset Information Manager Limited」を同じコンピュータにインストールすると、データベースを二つ作成するので、マシンリソースを大量に消費するおそれがあります。この場合、JP1/NETM/DM の「サーバ本体機能」とは別のコンピュータに「Asset Information Manager Limited」を配置する構成をお勧めします。

「Asset Information Manager Limited」のインストール手順については、マニュアル「構築ガイド」の「2.3 Asset Information Manager Limited をインストールする」を参照してください。

「Asset Information Manager Limited」を使用する環境での JP1/NETM/DM の構成を、使用するリレーショナルデータベースの種類ごとに、次の図に示します。

図 5-7 「Asset Information Manager Limited」を使用する環境での JP1/NETM/DM の構成（Embedded RDB の場合）

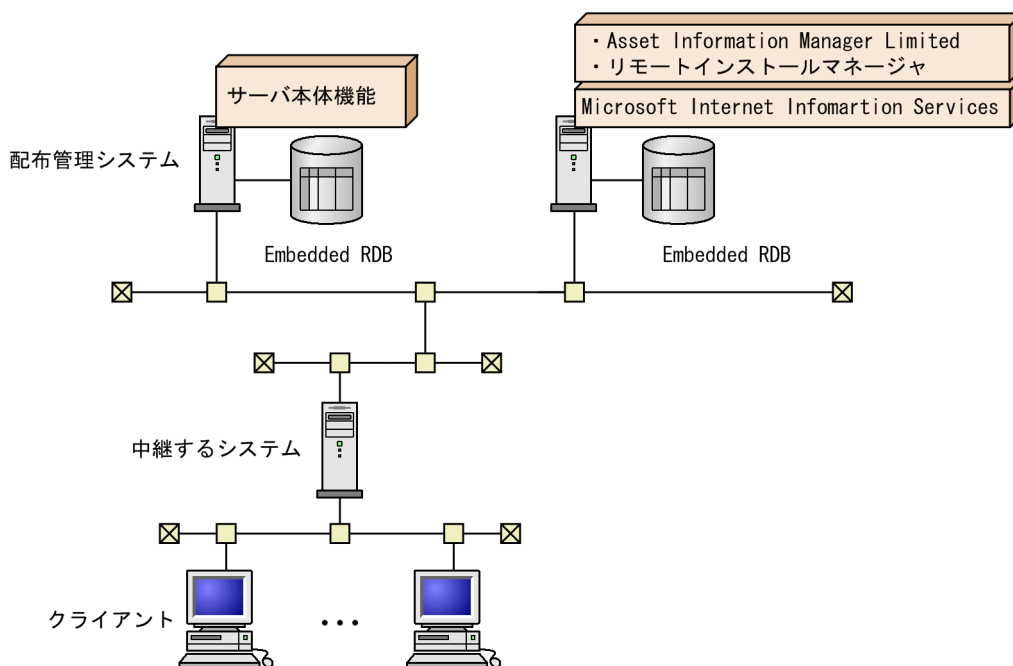
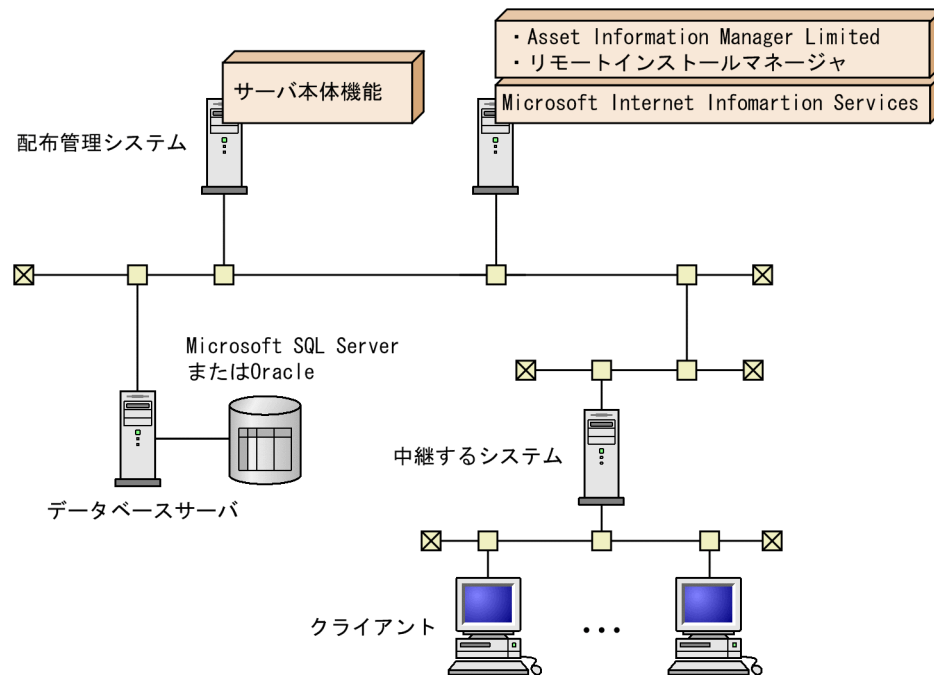


図 5-8 「Asset Information Manager Limited」を使用する環境での JP1/NETM/DM の構成 (Microsoft SQL Server または Oracle の場合)

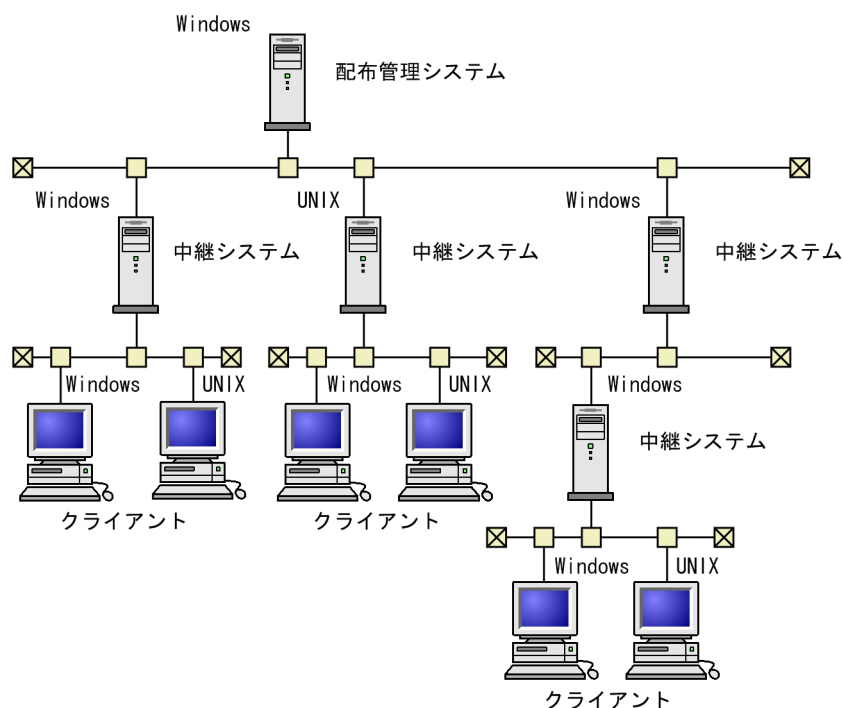


なお、JP1/NETM/Asset Information Manager がインストールされているコンピュータに、「Asset Information Manager Limited」はインストールできません。

5.2.2 UNIX システムが混在する環境でのシステム構成

UNIX システムが混在する環境での JP1/NETM/DM の構成を次の図に示します。

図 5-9 UNIX システムが混在する環境での JP1/NETM/DM の構成



UNIX 版の JP1/NETM/DM 製品には次の 3 種類があります。

JP1/NETM/DM Manager

配布管理システムの機能を提供します。配下に Windows 版の JP1/NETM/DM Client を接続して使用できます。

JP1/NETM/DM Client

中継システム、クライアント、およびパッケージの機能を提供します。パッケージの機能を使用して、配布するソフトウェアを Windows 版の配布管理システムに登録できます。

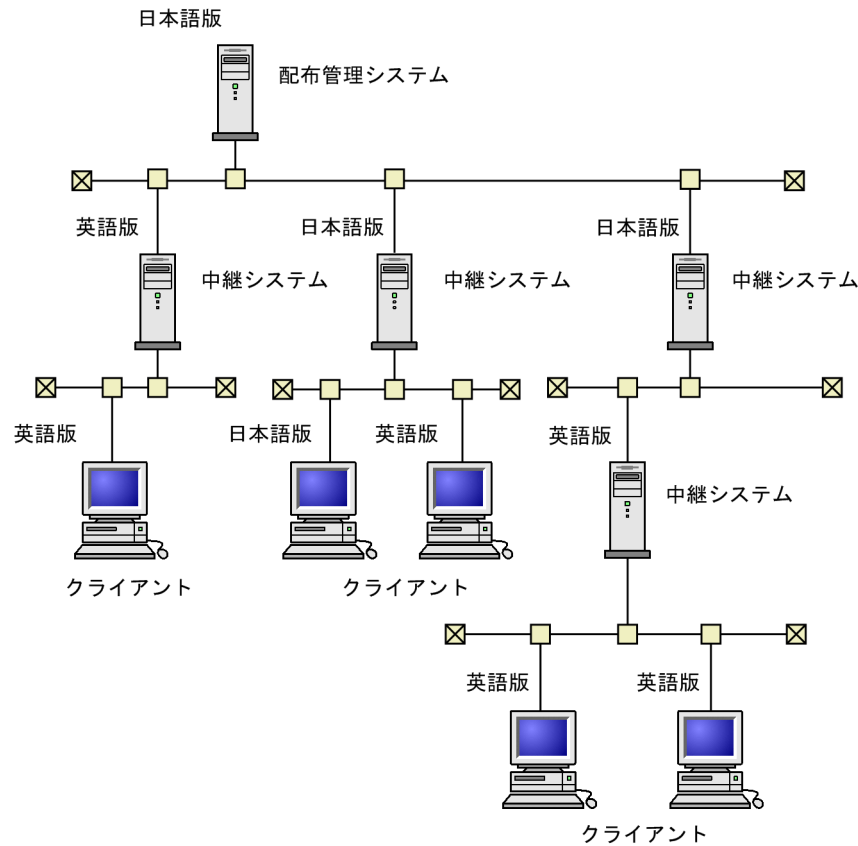
！ 注意事項

Windows 版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）の下位に、UNIX 版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）は配置できません。

5.2.3 英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境でのシステム構成

英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境での JP1/NETM/DM の構成を次の図に示します。

図 5-10 英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境での JP1/NETM/DM の構成



日本語版の JP1/NETM/DM の配下には、日本語版および英語版の JP1/NETM/DM を接続できます。

英語版の JP1/NETM/DM の配下には、日本語版の JP1/NETM/DM を接続できません。英語版の JP1/NETM/DM だけ接続できます。

英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境を構築する場合の注意事項を次に示します。

- JP1/NETM/DM Administrator Kit, JP1/NETM/DM Internet Gateway および JP1/NETM/DM HTTP Gateway は、連携する JP1/NETM/DM の言語と同一にしてください。
- 使用する Microsoft SQL Server, Oracle, Microsoft Internet Information Services および Microsoft Internet Explorer は、連携する JP1/NETM/DM の言語と同一にしてください。
- ユーザインベントリの項目名、パッケージ名、ジョブ名に 2 バイト文字が含まれている場合で、表示先や配布先の PC に対応したフォントがインストールされていないときは、文字化けが発生します。
- 日本語版の JP1/NETM/DM Manager の標準検索リストは、日本語版のソフトウェアを対象にしているため、標準検索リストのソフトウェアの検索結果を正しく得られない場合があります。
- 日本語版のクライアント用に作成した AIT ファイルおよびレコーダファイルは、英語版のクライアントでは使用できない場合があります。

5.2.4 インターネットを介して使用する場合のシステム構成

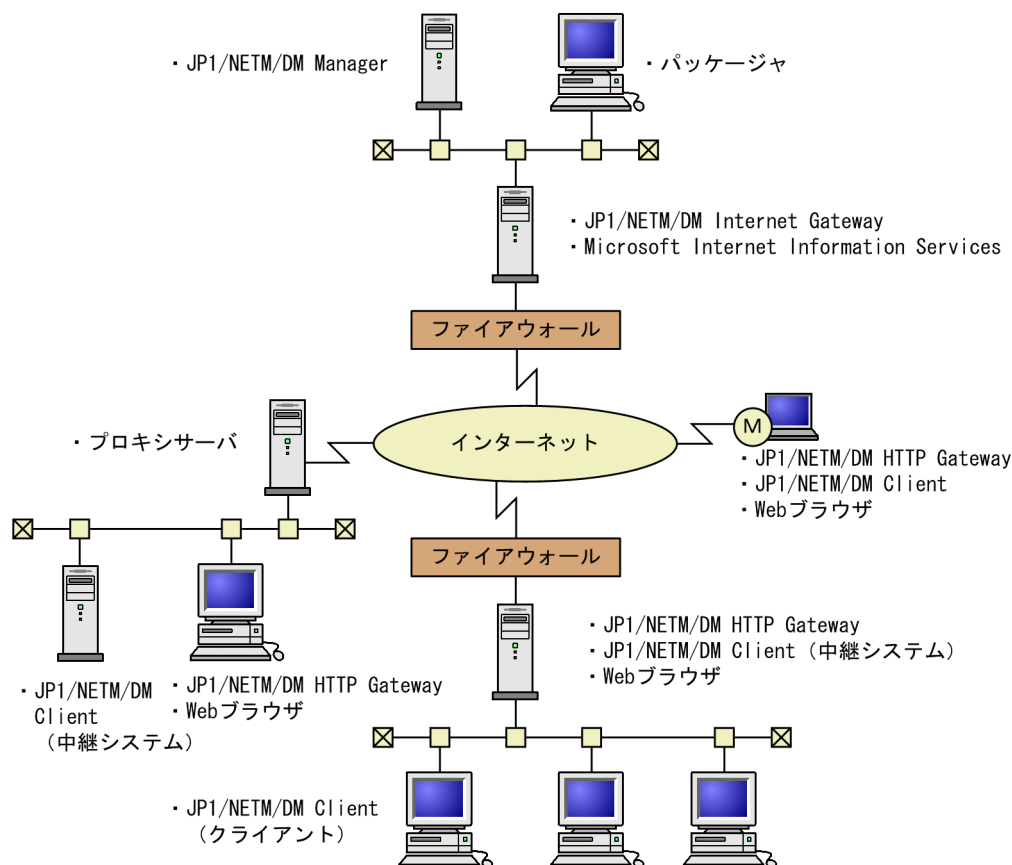
インターネットオプションを利用すると、インターネットを介したネットワーク環境への JP1/NETM/DM の導入が容易になります。インターネットオプションとは、JP1/NETM/DM Internet Gateway と JP1/

NETM/DM HTTP Gateway で構成される機能の名称です。

インターネットを介する JP1/NETM/DM のノード間に、JP1/NETM/DM Internet Gateway と JP1/NETM/DM HTTP Gateway を配置すると、その間の通信プロトコルが、JP1/NETM/DM 固有のプロトコルから HTTP に変換されます。そのため、Web が利用できる環境であれば、複雑な設定が不要になります。インターネットオプションについては、マニュアル「構築ガイド」の「付録 E インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入」を参照してください。

インターネットオプションを利用する場合のシステム構成を、次の図に示します。

図 5-11 インターネットオプションを利用する場合のシステム構成

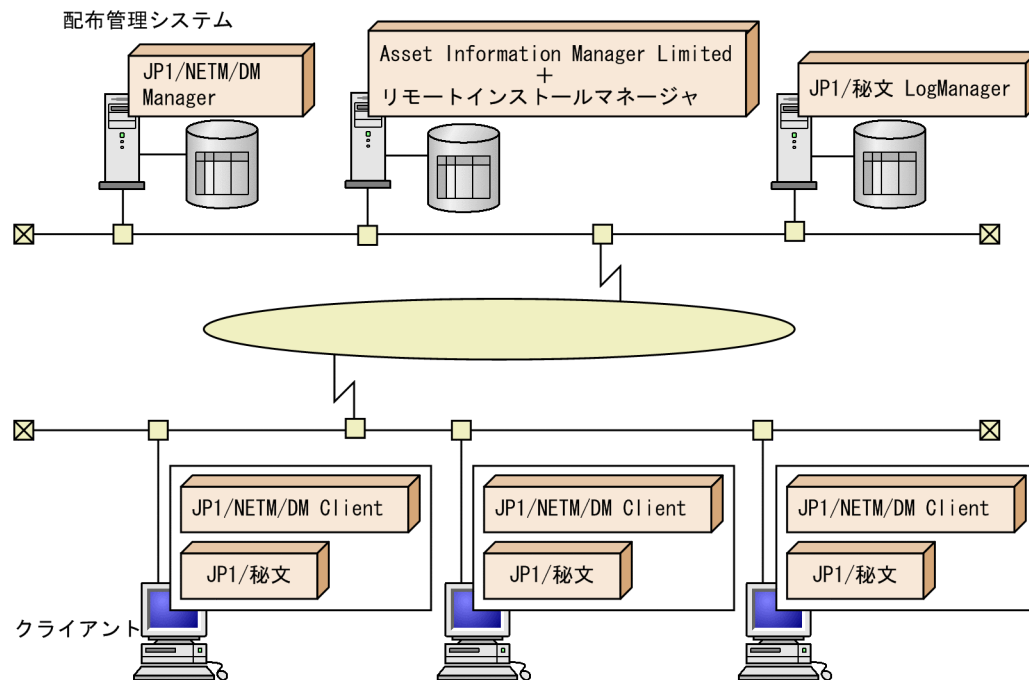


5.2.5 JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理する場合のシステム構成

JP1/NETM/DM と同じシステム内で、JP1/ 秘文 LogManager を利用してユーザ操作ログを取得している場合、JP1/NETM/DM の「操作ログ一覧」ウィンドウから、JP1/NETM/DM で取得した稼働情報とあわせて JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログも管理できます。

JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 5-12 JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理する場合のシステム構成



「操作ログ一覧」ウィンドウから JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理するには、JP1/NETM/DM Manager をインストールしたあと、「Asset Information Manager Limited」のセットアップで、接続する JP1/ 秘文 LogManager を設定する必要があります。インストール後の設定については、マニュアル「構築ガイド」の「10.1 Asset Information Manager Limited をセットアップする」を参照してください。

また、「操作ログ一覧」ウィンドウからの操作ログの管理の概要については、「2.6.2 操作ログの参照・追跡調査」を参照してください。

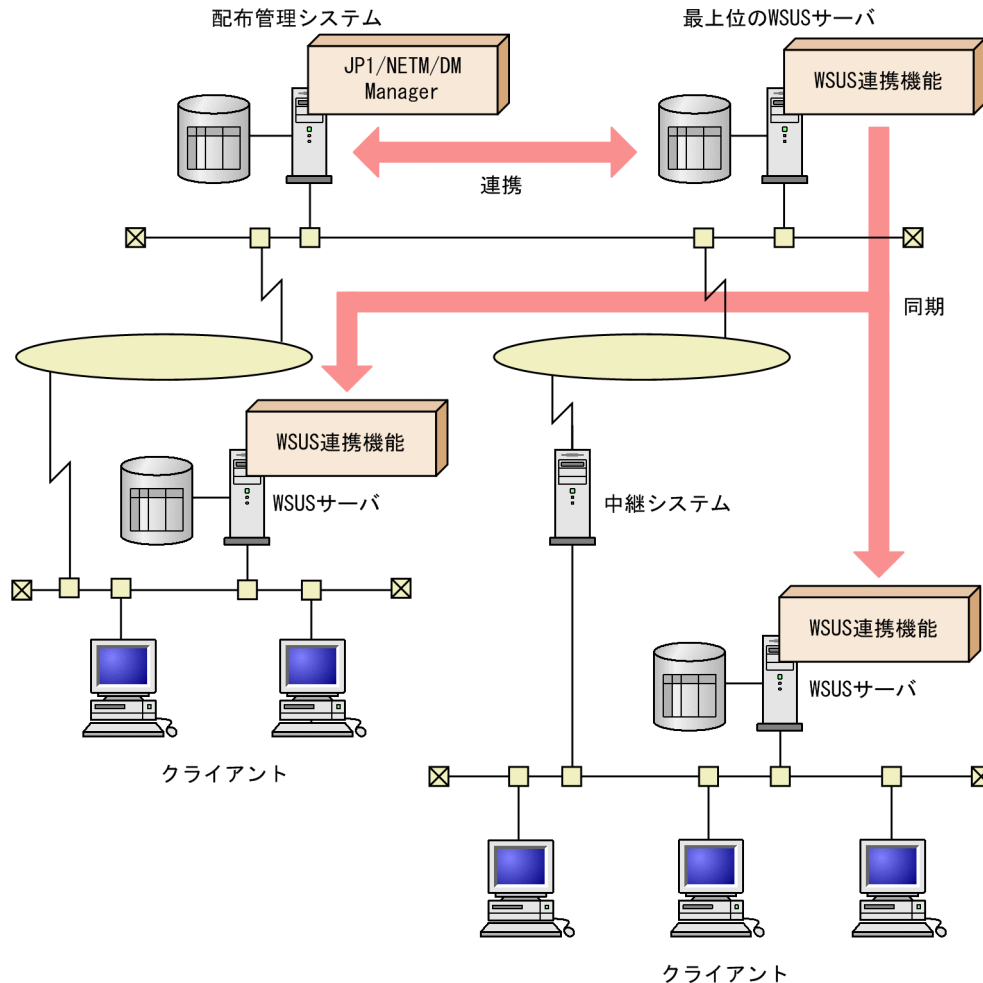
5.2.6 WSUS と連携する場合のシステム構成

JP1/NETM/DM が WSUS と連携するシステムでは、JP1/NETM/DM は一つの WSUS とだけ連携できます。そのため、複数の WSUS サーバが存在する環境では、任意の 1 台の WSUS サーバと接続してください。また、階層化されている WSUS サーバと接続する場合は、最上位の WSUS サーバと接続してください。JP1/NETM/DM と連携する WSUS サーバと下位の WSUS サーバとの同期は、JP1/NETM/DM が提供するコマンドで行います。

WSUS と連携する場合、システム内のすべての WSUS サーバに、JP1/NETM/DM のコンポーネント「WSUS 連携機能」をインストールする必要があります。「WSUS 連携機能」のインストール方法については、マニュアル「構築ガイド」の「2.4 WSUS サーバへ JP1/NETM/DM をインストールする」を参照してください。

WSUS と連携する場合の JP1/NETM/DM の構成を次の図に示します。

図 5-13 WSUS と連携する場合の JP1/NETM/DM の構成



なお、JP1/NETM/DM と WSUS は同じコンピュータにインストールすることもできます。この場合、JP1/NETM/DM と WSUS で異なるバージョンの Microsoft SQL Server を使用するときは、どちらかが使用する Microsoft SQL Server を別のコンピュータに構築する必要があります。

ただし、64 ビット版の OS に JP1/NETM/DM をインストールする場合、同じコンピュータに WSUS をインストールして使用できません。この場合、32 ビット版の OS のコンピュータに構築した WSUS を使用してください。

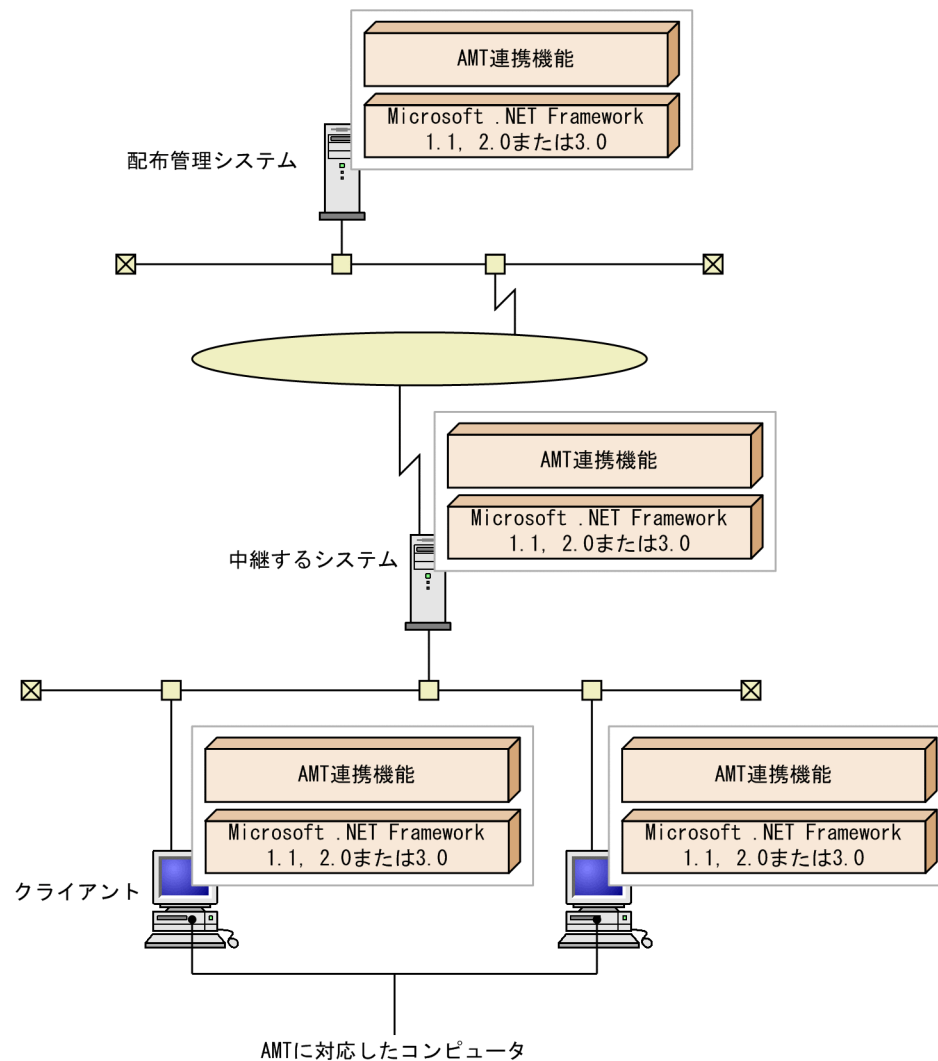
WSUS と連携する環境の構築完了後は、配布管理システムのサーバセットアップから接続する「WSUS 連携機能」の URL を指定する必要があります。URL の指定方法の詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.17 [WSUS 連携] パネル」を参照してください。

5.2.7 AMT を利用する場合のシステム構成

「AMT 連携機能」を使用するためには、Microsoft .NET Framework 1.1, 2.0, 3.0 または 3.5 がインストールされている必要があります。また、クライアントは、AMT に対応したコンピュータを使用している必要があります。

JP1/NETM/DM から AMT を利用する場合のシステム構成を次の図に示します。

図 5-14 AMT を利用する場合のシステム構成



なお、「AMT 連携機能」は、「サーバ本体機能」とは別に「リモートインストールマネージャ」と同じコンピュータにインストールすることもできます。

(1) JP1/NETM/DM をインストールする前に必要な設定

クライアントで「AMT 連携機能」をインストールする前に、AMT に対して設定が必要です。AMT の設定方法を次に示します。

1. AMT の機能をオンにする。
2. Provision モデルに「Small Business」を指定する。
3. AMT のネットワークの設定、その他の設定を実施する。

なお、AMT の Provision モデルに「Enterprise」を指定した運用はできません。

(2) 「AMT 連携機能」を使用したシステム構築時の注意事項

- JP1/NETM/DM をインストールするときに設定する AMT のユーザ情報（AMT 管理ユーザ）のユーザ名とパスワードは、システム内で一致させる必要があります。

- 運用キーはホスト名を使用してください。

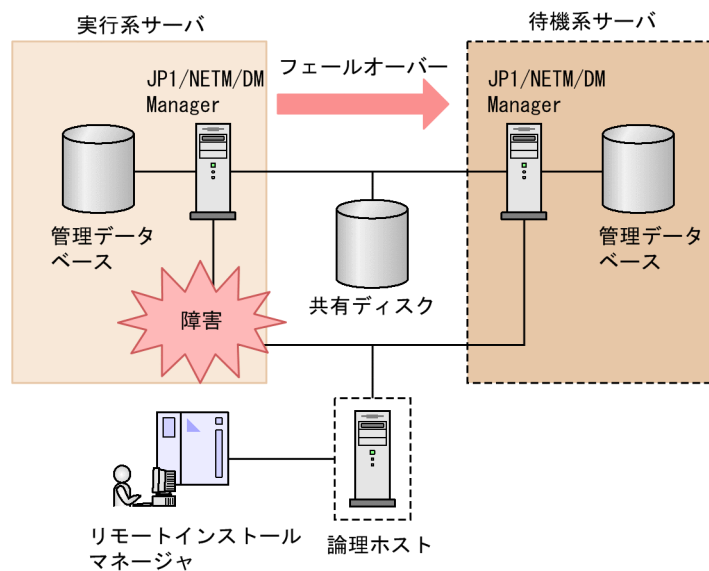
5.2.8 クラスタシステムへの JP1/NETM/DM の導入

Microsoft Cluster Service または Windows Server Failover Cluster を使用したクラスタシステムにも、JP1/NETM/DM を導入できます。クラスタシステムは、複数のサーバを連携させて一つのシステムとして運用することで、一つのシステムでトラブルが発生しても、ほかのサーバに業務を引き継いで続行させる（フェールオーバー）ため、システム全体の停止を防止することができます。クラスタシステムのフェールオーバー機能は、JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）だけで使用できます。

JP1/NETM/DM Manager ではクラスタシステムの運用形態のうち、アクティブ・スタンバイ構成に対応しています。アクティブ・スタンバイ構成は、2 ノード・クラスタシステムで、それぞれのサーバを実行系と待機系として設定します。

JP1/NETM/DM を導入したクラスタシステムの概要を次の図に示します。

図 5-15 JP1/NETM/DM を導入したクラスタシステムの概要



システムを構成する複数台の JP1/NETM/DM Manager の物理的なホスト名および IP アドレスとは別に、論理ホスト名または論理 IP アドレスを使用して論理マネージャに接続します。これによって、ほかのマシンはどちらのマネージャで処理を実行しているかを意識しないで接続することができます。

管理データベースにリレーショナルデータベースを使うと、Microsoft Cluster Service または Windows Server Failover Cluster の機能であるフェールオーバー機能を使うことができます。この場合、クラスタソフトが監視する項目を次に示します。

- 共有ディスク
- 論理 IP アドレス
- JP1/NETM/DM Manager のサービス「Remote Install Server」

なお、クラスタシステムの複数のサーバを論理ホストとしてでなく、それぞれの物理ホスト名または IP アドレスを使った構成として運用することもできます。

クラスタシステムの環境設定および構築手順については、マニュアル「構築ガイド」の「11.1 JP1/

「NETM/DM のクラスタシステムの構築」を参照してください。

(1) システム構成例

JP1/NETM/DM でのクラスタシステムの構成例を次に示します。

(a) JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の構成例

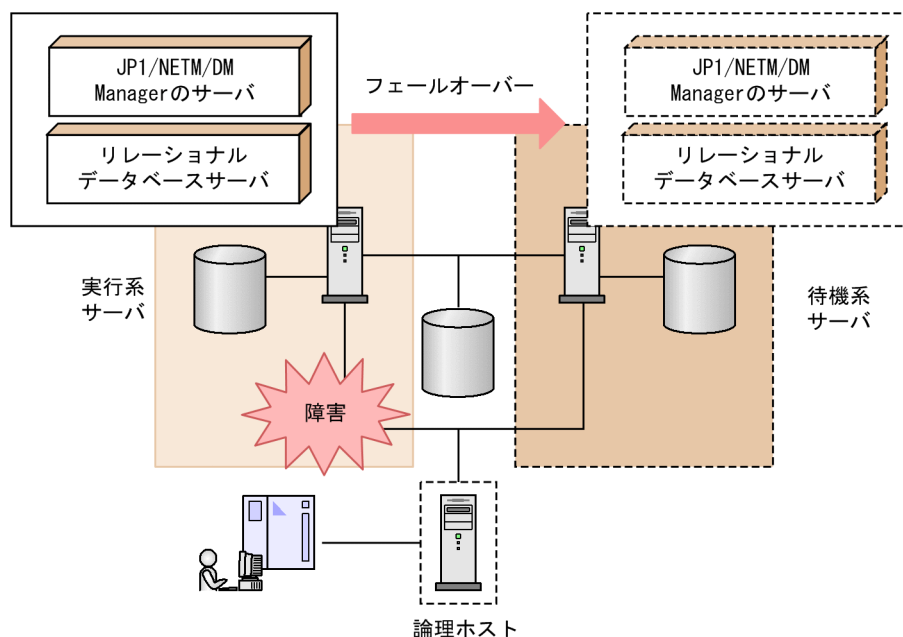
JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合のクラスタシステムの構成例を次に示します。システム構成は次の種類があります。

● JP1/NETM/DM Manager を 2 ノード・クラスタシステム構成にする場合

Microsoft Cluster Service または Windows Server Failover Cluster のクラスタ環境上で、JP1/NETM/DM Manager のサービスを、フェールオーバー機能を使用する設定にすると、ハードウェアのトラブルや JP1/NETM/DM Manager のサービスのトラブルが自動的に検出され、実行系サーバから待機系サーバへ自動的に切り替えられます。

リレーショナルデータベースサーバは、同一クラスタグループに設定することもできます。また、異なるクラスタグループに設定されているリレーショナルデータベースサーバを使用することもできます。フェールオーバー機能を使って JP1/NETM/DM Manager のサービスを監視させる場合のシステム構成例を次の図に示します。

図 5-16 フェールオーバー機能を使って JP1/NETM/DM Manager のサービスを監視させる場合のシステム構成例



この場合、次のプログラムのセットアップで、上位接続先の設定に、論理ホスト名を指定してください。

- JP1/NETM/DM Manager に接続するリモートインストールマネージャの接続先
- JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）
- JP1/NETM/DM Client（中継システム）
- JP1/NETM/DM Client（クライアント）

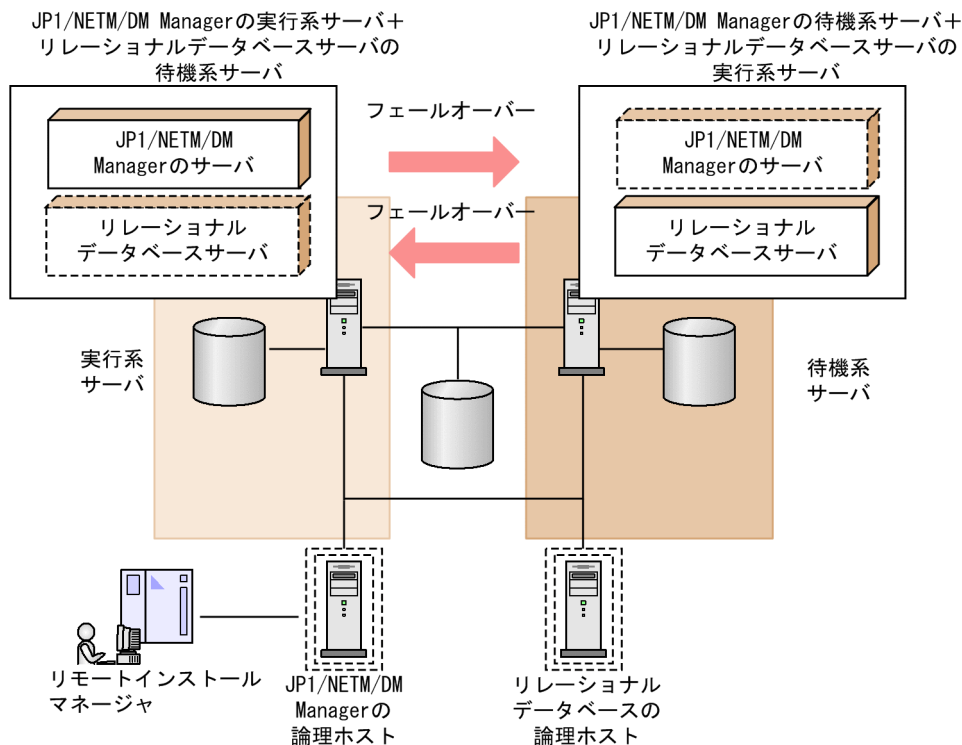
接続元のシステムでは、フェールオーバー時にいったんトラブルが発生しますが、リモートインストールマネージャおよび下位システムからの再接続によってトラブルを回避できます。

● JP1/NETM/DM Manager とリレーショナルデータベースサーバを 2 ノード・クラスタシステム構成にする場合

JP1/NETM/DM Manager とリレーショナルデータベースサーバをそれぞれ独立したサーバマシンにインストールして使用する場合、お互いのサーバマシンを待機系サーバとして設定することができます。この構成にすると、両方のサーバマシンに負荷分散しながら、トラブル発生時のフェールオーバーに対処できます。

2 サーバで JP1/NETM/DM Manager とリレーショナルデータベースサーバをお互いに監視させる場合のシステム構成例を次の図に示します。

図 5-17 サーバで JP1/NETM/DM Manager とリレーショナルデータベースサーバをお互いに監視させる場合のシステム構成例



この場合、セットアップ時に次のように設定します。

- JP1/NETM/DM Manager のセットアップで、リレーショナルデータベースサーバの接続先には、リレーショナルデータベースの論理ホストを設定する。
- JP1/NETM/DM Manager に接続する JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）、リモートインストールマネージャ、JP1/NETM/DM Client では、上位接続先に JP1/NETM/DM Manager の論理ホストを設定する。

● リレーショナルデータベースサーバを 2 ノード・クラスタシステム構成にする場合

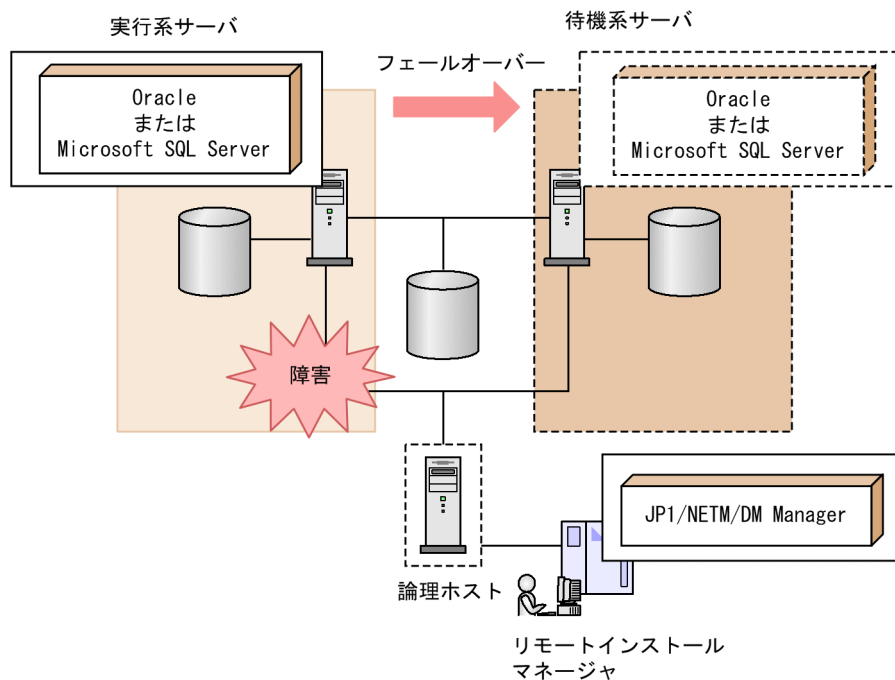
Microsoft Cluster Service または Windows Server Failover Cluster のクラスタ環境上に、Microsoft SQL Server または Oracle のフェールオーバー機能を使用した環境を構築すると、ハードウェアのトラブルやリレーショナルデータベースサーバのサービスのトラブルが自動的に検出され、実行系サーバから待機系サーバへ自動的に切り替えられます。

リレーショナルデータベースサーバを JP1/NETM/DM システム以外の業務と共用している場合、JP1/NETM/DM のトラブルによって、ほかの業務に影響を与えないメリットがあります。この構成にすると、Solaris 7 上のクラスタ構成の Oracle8i と連携することができます。

リレーショナルデータベースサーバを 2 ノード・クラスタシステム構成にする場合のシステム構成例を

次の図に示します。

図 5-18 リレーショナルデータベースサーバを 2 ノード・クラスタシステム構成にする場合のシステム構成例



この場合、JP1/NETM/DM Manager のセットアップで設定するリレーショナルデータベースサーバの接続先には、論理ホストを設定してください。

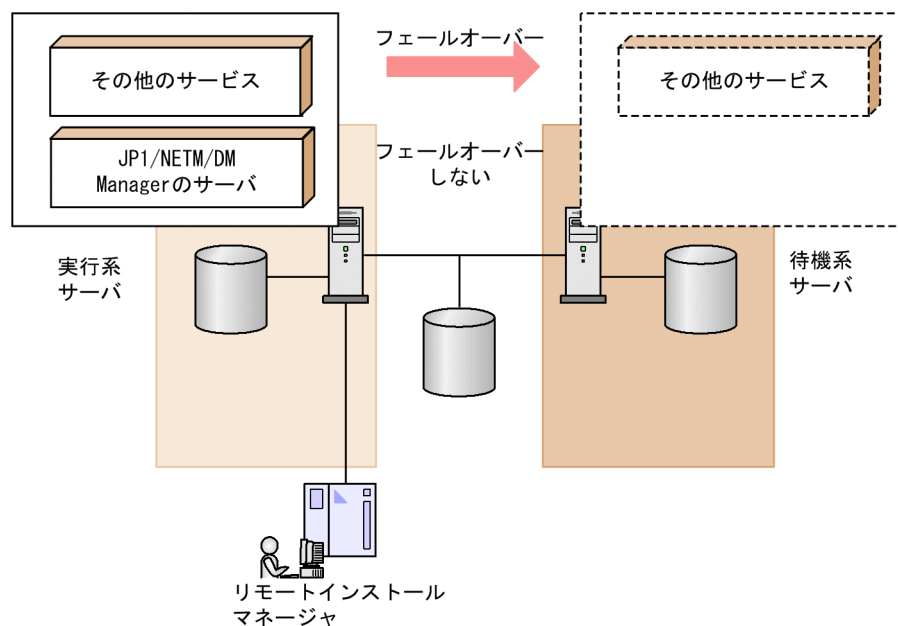
(b) JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の構成例

JP1/NETM/DM Manager をクラスタグループに登録しないで、実行系マシン・待機系マシンをそれぞれ別のシステムと考えてフェールオーバーさせない運用もできます。この場合、他プログラムが論理ホストを使用している場合でも、JP1/NETM/DM では論理ホストを使用しないで、それぞれの物理ホスト名・IP アドレスを使用して通信します。

JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合、中継マネージャ（JP1/NETM/DM Manager）、または JP1/NETM/DM Client を、クラスタシステムを構成する物理ホスト上にインストールして使用することもできます。

JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の構成例を次の図に示します。

図 5-19 JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の構成例



(2) JP1/NETM/DM でクラスタシステムに対応する機能一覧

JP1/NETM/DM の機能のクラスタシステムへの対応について、次の表に示します。

表 5-1 JP1/NETM/DM の機能のクラスタシステムへの対応

項目		使用の可否
対応クラスタ	Microsoft Cluster Service	○
	Windows Server Failover Cluster	○
対応クラスタシステム構成	アクティブ・スタンバイ構成	○
	アクティブ・アクティブ構成	×
運用キー	ホスト名運用	○
	IP アドレス運用	○
	ホスト識別子の使用	○
ネットワーク関連	複数 LAN 接続環境での運用	×
JP1/NETM/DM Manager のデータベース	Embedded RDB	○
	Microsoft SQL Server 7.0	○
	Microsoft SQL Server 2000	○
	Microsoft SQL Server 2005	○
	Microsoft SQL Server 2008	○
	Microsoft SQL Server 2012	○
	Oracle8i (Windows NT)	○
	Oracle8i (Solaris)	○
	Oracle9i (Windows NT)	○
JP1/NETM/DM Manager の機能	通常配布	○
	ID を使った配布	○

項目		使用の可否
	分割配布	○
	リモートコレクト	○
	インベントリ収集	○
	システム構成の自動登録	○
	JP1/IM へのイベント通知	○
	自動ダイヤリング	×
	JP1/Cm2 連携機能	△
	パッケージャ	△
	中継マネージャ	△
JP1/NETM/DM Client (中継システム)	中継システム	△
JP1/NETM/DM Client (クライアント)		△
Asset Information Manager Limited		○
リモートコントロールマネージャ		△
リモートコントロールエージェント		△

(凡例)

○：使用できる

×：使用できない

△：フェールオーバーさせない範囲で使用できる

5.3 ハードウェアに関する見積もり

JP1/NETM/DM を動作させるために必要な CPU の推奨値や、ディスクおよびメモリの所要量の算出方法について説明します。リモートコントロール機能に関するディスク占有量は、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

5.3.1 CPU 性能

JP1/NETM/DM の各コンポーネントを動作させるのに必要な CPU の性能を、次の表に示します。

表 5-2 JP1/NETM/DM で必要な CPU の性能

機能	最小	推奨
サーバ	1 ギガヘルツのプロセッサ	2 ギガヘルツ以上のプロセッサ
中継システム※	1 ギガヘルツのプロセッサ	2 ギガヘルツ以上のプロセッサ
クライアント※	300 メガヘルツのプロセッサ	1 ギガヘルツ以上のプロセッサ
Asset Information Manager Limited	700 メガヘルツのプロセッサ	クライアントが 5,000 台未満の場合 1.5 ギガヘルツ以上のプロセッサ クライアントが 5,000 台以上の場合 3 ギガヘルツ以上のデュアルプロセッサ
パッケージ	300 メガヘルツのプロセッサ	1 ギガヘルツ以上のプロセッサ
Automatic Installation Tool	300 メガヘルツのプロセッサ	1 ギガヘルツ以上のプロセッサ
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ	1 ギガヘルツのプロセッサ	2 ギガヘルツ以上のプロセッサ
JP1/Cm2 連携機能	1 ギガヘルツのプロセッサ	2 ギガヘルツ以上のプロセッサ

注※

仮想化環境で稼働監視する場合、必要な最小の CPU の性能が異なります。また、接続するユーザ数によっても異なります。

30 ユーザ以下の場合：3 ギガヘルツのデュアルコアのプロセッサ

60 ユーザ以下の場合：3 ギガヘルツのクアッドコアのプロセッサ

5.3.2 メモリ所要量

(1) 配布管理システムのメモリ所要量

JP1/NETM/DM Manager の配布管理システムのメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-3 JP1/NETM/DM Manager のメモリ所要量

機能	メモリ所要量 (単位：メガバイト)
JP1/NETM/DM サーバ	$34 + 0.020 \times a$ a：同時接続台数※ ²
JP1/NETM/DM サーバ (中継マネージャ) ※ ¹	$71 + 0.020 \times (a + 25)$ a：同時接続台数※ ²
リモートインストールマネージャ	$20 + 0.002 \times b$ b：表示データ数※ ³

機能	メモリ所要量 (単位: メガバイト)
インベントリビューア	$7.5 + 0.007 \times c$ c: インベントリ表示台数
リレーショナルデータベース (Embedded RDB を使用する場合)	$300 + (a \times 2) \times 10$ a: 同時接続台数 ^{※2}

注※ 1

仮想化環境で稼働監視する場合、最小のメモリ所要量が異なります。また、接続ユーザ数によっても異なります。

30 ユーザ以下の場合: 4 ギガバイト

60 ユーザ以下の場合: 8 ギガバイト

注※ 2

同時接続台数は「サーバセットアップ」ダイアログボックスの「サーバカスタマイズオプション」パネルの同時に接続できる下位システム数に指定した値になります。

注※ 3

表示データ数は、リモートインストールマネージャの各ウィンドウで表示する次のデータの総数です。

- 「システム構成」ウィンドウ:
中継マネージャ、中継システム、クライアント、システム情報やソフトウェアインベントリなどのインベントリ項目
- 「あて先」ウィンドウ:
ID、あて先グループ、クライアント、システム情報やソフトウェアインベントリなどのインベントリ項目
- 「ジョブ定義」ウィンドウ:
ジョブ定義
- 「パッケージ」ウィンドウ:
キャビネット、パッケージ
- 「ジョブ実行状況」ウィンドウ:
ジョブ、ジョブのあて先
- 「管理情報リスト」ウィンドウ:
検索リスト
- 「ディレクトリ情報」ウィンドウ:
組織単位 (OU)、グループ、コンピュータ、システム情報やソフトウェアインベントリなどのインベントリ項目

なお、同じウィンドウを複数表示する場合は、ウィンドウ数分加算してください。

(2) 中継システムのメモリ所要量

JP1/NETM/DM Client (中継システム) のメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-4 中継システムのメモリ所要量

機能	メモリ所要量 (単位: メガバイト)
中継システム ^{※1}	$28 + 0.018 \times (a + 8) + (b \times 0.001)$ a: 同時接続台数 ^{※2} b: 管理ファイルのキャッシュサイズ ^{※3}

注※ 1

仮想化環境で稼働監視する場合、最小のメモリ所要量が異なります。また、接続ユーザ数によっても

異なります。

30 ユーザ以下の場合：4 ギガバイト

60 ユーザ以下の場合：8 ギガバイト

注※ 2

同時接続台数は中継システムの基本設定の「中継システムカスタマイズオプション」パネルの同時に接続できるクライアント数に指定した値になります。

注※ 3

管理ファイルのキャッシュサイズは、次の計算式で算出してください。

管理ファイルのキャッシュサイズ（キロバイト）＝

中継システムに保管されている、上位システムまたはこの中継システムから実行されたジョブ数
 ×各ジョブのあて先数
 ×各ジョブのパッケージ数（リモートインストールのジョブの場合）
 ×1 キロバイト

(3) クライアントのメモリ所要量

クライアント機能のメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-5 クライアントのメモリ所要量

機能		メモリ所要量
クライアント※	常駐時	18 メガバイト
	パッケージのリモートインストール	24 メガバイト
	クライアントユーザによるインストール	28 メガバイト
スタートアップキット機能支援ツール		4 メガバイト

注※

仮想化環境で稼働監視する場合、最小のメモリ所要量が異なります。また、接続ユーザ数によっても異なります。

30 ユーザ以下の場合：4 ギガバイト

60 ユーザ以下の場合：8 ギガバイト

(4) 「Asset Information Manager Limited」のメモリ所要量

「Asset Information Manager Limited」のメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-6 「Asset Information Manager Limited」のメモリ所要量

機能	メモリ所要量
Asset Information Manager Limited	クライアントが 5,000 台未満の場合 1.0 ギガバイト以上 クライアントが 5,000 台以上の場合 1.5 ギガバイト以上

(5) パッケージのメモリ所要量

パッケージのメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-7 パッケージのメモリ所要量

機能	メモリ所要量
パッケージ	11 メガバイト

(6) Automatic Installation Tool のメモリ所要量

Automatic Installation Tool のメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-8 Automatic Installation Tool のメモリ所要量

機能	メモリ所要量
Automatic Installation Tool	4 メガバイト

(7) JP1/Cm2 連携機能のメモリ所要量

JP1/Cm2 連携機能のメモリ所要量を次の表に示します。

表 5-9 JP1/Cm2 連携機能のメモリ所要量

機能	メモリ所要量
JP1/Cm2 連携機能	7 メガバイト
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ	1 メガバイト

5.3.3 ディスク占有量

(1) JP1/NETM/DM Manager のディスク占有量

JP1/NETM/DM Manager のディスク占有量を表 5-10 および表 5-11 に示します。

表 5-10 JP1/NETM/DM Manager (マネージャ) のディスク占有量

機能	ディスク占有量
JP1/NETM/DM サーバ	Embedded RDB の場合 120 メガバイト＋データベース動作時の確保容量 データベース動作時に自動的に確保される容量は、データベース作成時に選択する規模によって異なります。 小規模：300 メガバイト 中規模：500 メガバイト 大規模：1,100 メガバイト
	Microsoft SQL Server または Oracle の場合 12 メガバイト
リモートインストールマネージャ	Embedded RDB の場合 24 メガバイト
	Microsoft SQL Server または Oracle の場合 22 メガバイト
Asset Information Manager Limited	Embedded RDB の場合 140 メガバイト＋データベース動作時の確保容量 データベース動作時に自動的に確保される容量は、データベースのサイズによって異なります。 100 メガバイト以下：300 メガバイト 101 ～ 500 メガバイト：1 ギガバイト 501 メガバイト以上：1 ギガバイト

5. JP1/NETM/DM システムの設計

機能		ディスク占有量
	Microsoft SQL Server または Oracle の場合	45 メガバイト
AMT 連携機能		1 メガバイト
WSUS 連携機能		1 メガバイト
JP1/Cm2 連携機能		9 メガバイト
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ		4 メガバイト
JP1/NETM/DM Manager が共通に使用する領域		36 メガバイト
パッケージからのパッケージング処理		1 キロバイト+パッケージのサイズ
パッケージの保管		パッケージ数 Σ (圧縮後のパッケージサイズ+2 キロバイト) (単位: キロバイト)
操作履歴の保管		「(3) 操作履歴の保管」を参照してください。
操作履歴の退避		クライアント数 $\times \Sigma$ (退避する圧縮後の操作履歴のサイズ) (単位: メガバイト)
リモートインストール		$1.0 \times \text{パッケージ数} \times \text{クライアント数} + \text{パッケージ数} \times 0.3$ (単位: キロバイト)

表 5-11 JP1/NETM/DM Manager (中継マネージャ) のディスク占有量

機能		ディスク占有量
JP1/NETM/DM サーバ	Embedded RDB の場合	142 メガバイト
	Microsoft SQL Server または Oracle の場合	34 メガバイト
リモートインストールマネージャ	Embedded RDB の場合	24 メガバイト
	Microsoft SQL Server または Oracle の場合	22 メガバイト
AMT 連携機能		1 メガバイト
WSUS 連携機能		1 メガバイト
JP1/Cm2 連携機能		9 メガバイト
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ		4 メガバイト
JP1/NETM/DM Manager が共通に使用する領域		43 メガバイト
パッケージからのパッケージング処理		1 キロバイト+パッケージのサイズ
パッケージの保管		パッケージ数 Σ (圧縮後のパッケージサイズ+2 キロバイト) (単位: キロバイト)
操作履歴の保管		「(3) 操作履歴の保管」を参照してください。
操作履歴の退避		クライアント数 $\times \Sigma$ (退避する圧縮後の操作履歴のサイズ) (単位: メガバイト)
リモートインストール		$1.0 \times \text{パッケージ数} \times \text{クライアント数} + \text{パッケージ数} \times 0.3$ (単位: キロバイト)
マネージャから配布されるパッケージの保管		パッケージ数 Σ (圧縮後のパッケージサイズ+2 キロバイト) (単位: キロバイト)
マネージャから配布されるパッケージの管理情報の保管		クライアント数 Σ (クライアント内パッケージ数 $\times 2$ キロバイト) (単位: キロバイト)

機能	ディスク占有量
パッケージのインストール	「(4) パッケージのインストール」を参照してください。

(2) JP1/NETM/DM Client のディスク占有量

JP1/NETM/DM Client のディスク占有量を表 5-12 および表 5-13 に示します。

表 5-12 JP1/NETM/DM Client (中継システム) のディスク占有量

機能	ディスク占有量
中継システム	30 メガバイト
リモートインストールマネージャ	4 メガバイト
JP1/NETM/DM Client が共通に使用する領域	39 メガバイト
AMT 連携機能	1 メガバイト
中継システムでのパッケージの保管	パッケージ数 Σ (圧縮後のパッケージサイズ + 2 キロバイト) (単位: キロバイト)
中継システムの管理情報の保管	クライアント数 Σ (クライアント内パッケージ数 $\times$ 2 キロバイト) (単位: キロバイト)
パッケージの配布処理	$1.0 \times \text{パッケージ数} \times \text{クライアント数} + \text{パッケージ数} \times 0.3$ (単位: キロバイト)
パッケージのインストール	「(4) パッケージのインストール」を参照してください。

表 5-13 JP1/NETM/DM Client (クライアント) のディスク占有量

機能		ディスク占有量
クライアント	クライアント本体	24 メガバイト
	パッケージセットアップマネージャ	2 メガバイト
	付加機能	5 メガバイト
	Visual Test 6.0 による配布機能※	2 メガバイト
	AMT 連携機能	1 メガバイト
クライアント管理情報の保管		クライアント内パッケージ数 $\times$ 1.0 (単位: キロバイト)
パッケージング情報の表示		パッケージングするパッケージの数 $\times$ 1.0 (単位: キロバイト)
パッケージのインストール		「(4) パッケージのインストール」を参照してください。
スタートアップキット機能支援ツール		3 メガバイト
オンラインヘルプ		6 メガバイト
JP1/NETM/DM Client が共通に使用する領域		11 メガバイト

注※

JP1/NETM/DM Client - Base にはありません。

(3) 操作履歴の保管

操作履歴を保管するために必要なディスク占有量の計算式を示します。取得する操作履歴の種類に応じて、容量を計算してください。

各項目の1日の操作履歴の容量

操作履歴として取得できる項目の、1日分の容量の計算式を次に示します。

- プロセスの起動 = 1日の想定イベント数 (a) $\times$ 335 = A
- プロセスの停止 = 1日の想定イベント数 (b) $\times$ 335 = B
- キャプションの変更 = 1日の想定イベント数 (c) $\times$ 590 = C
- アクティブウィンドウの変更 = 1日の想定イベント数 (d) $\times$ 590 = D
- マシンの起動 = 1日の想定イベント数 (e) $\times$ 15 = E
- マシンの停止 = 1日の想定イベント数 (f) $\times$ 15 = F
- ログオン = 1日の想定イベント数 (g) $\times$ 35 = G
- ログオフ = 1日の想定イベント数 (h) $\times$ 35 = H
- ファイル操作 = 1日の想定イベント数 (i) $\times$ 837 = I
- Web アクセス = 1日の想定イベント数 (j) $\times$ (621) = J
- 印刷操作 = 1日の想定イベント数 (k) $\times$ 890 = K
- 印刷抑止 = 1日の想定イベント数 (l) $\times$ 890 = L
- 印刷抑止解除 = 1日の想定イベント数 (m) $\times$ 147 = M
- 外部メディア操作 = 1日の想定イベント数 (n) $\times$ 150 = N
- USB 接続メディアの接続許可 = 1日の想定イベント数 (o) $\times$ 300 = O
- USB 接続メディアの接続抑止 = 1日の想定イベント数 (p) $\times$ 300 = P
- デバイスの接続 = 1日の想定イベント数 (q) $\times$ 350 = Q
- デバイスの切断 = 1日の想定イベント数 (r) $\times$ 350 = R
- デバイスの接続許可 = 1日の想定イベント数 (s) $\times$ 350 = S
- デバイスの接続抑止 = 1日の想定イベント数 (t) $\times$ 350 = T

操作履歴として取得しない項目は、イベント数に「0」を代入します。なお、単位はすべてバイトとします。

a～tには、対応する項目の1日の想定イベント数を代入します。A～Tは、各項目の1日当たりの操作履歴の容量になります。1日の想定イベント数は、クライアント PC で1日に発生する対象操作のイベント数です。Web アクセスの場合、フレーム分割された Web ページは複数ログが取得されるため、1回の Web アクセスであっても複数の履歴が取得されることがある点を考慮してください。Web アクセスは、1イベントの容量を最大値 (2,484 バイト) か、有効なログ容量 (621 バイト) のどちらで計算するか選択してください。

また、仮想化環境の操作履歴を取得する場合は、次に示す容量を追加してください。

1日の操作履歴の容量 $\times$ ログオンユーザ数

クライアント1台および JP1/NETM/DM Manager での操作履歴の容量

1日当たりの各項目の容量を基に、クライアント1台分の操作履歴の容量を、次のように求めます。

DAY は1日、WEEK は1週間、MONTH は1か月分の容量になります。

- クライアント1台の1日の容量 = $A + B + C + D + E + F + G + H + I + J + K + L + M + N + O + P + Q + R + S + T = \text{DAY}$
- クライアント1台の1週間 (5日) の容量 = $\text{DAY} \times 5 = \text{WEEK}$
- クライアント1台の1か月 (20日) の容量 = $\text{DAY} \times 20 = \text{MONTH}$

以上の計算式によって求めたクライアント1台分の操作履歴の容量を基に、JP1/NETM/DM Manager のディスク占有量を求めます。例えば、クライアントを X 台管理している場合の1か月の容量の計算式は次のようになります。

- クライアントを X 台管理している場合の1か月の容量 = $\text{MONTH} \times X$

(4) パッケージのインストール

インストールするパッケージ種別によって、必要なディスク容量が異なります。算出式に使用する値はクラスタサイズで切り上げてください。

● 日立プログラムプロダクトまたは他社ソフトウェアの場合

ディスク占有量（単位：バイト）＝

$$PCn \times 944 + \Sigma (\text{インストールスクリプトのサイズ} + \text{AIT ファイルまたはレコーダファイルのサイズ}) + \Sigma (RPSz) + \text{MAX} (PPSz) + \Sigma (APSz) + PCn \times 300$$

なお、インストールスクリプト、AIT ファイル、およびレコーダファイルのサイズは次のとおりです。

日立プログラムプロダクトの場合

インストールスクリプトのサイズは 2,700 バイト、AIT ファイルおよびレコーダファイルのサイズは 0 です。

他社ソフトウェアの場合（標準の AIT ファイルまたはレコーダファイルを使用するとき）

インストールスクリプトのサイズと、AIT ファイルまたはレコーダファイルのサイズの合計は、最大で 43 キロバイトです。

他社ソフトウェアの場合（ユーザが作成した AIT ファイルまたはレコーダファイルを使用するとき）

インストールスクリプトのサイズと、AIT ファイルまたはレコーダファイルのサイズの合計は、ユーザが作成したファイルの合計サイズになります。

● ユーザデータ、ユーザプログラムの場合

ディスク占有量（単位：バイト）＝

$$PCn \times (944 + 2500) + \Sigma (RPSz) + \text{MAX} (RPSz) + \Sigma (APSz) + PCn \times 300$$

● オプション機能が指定されたユーザデータ、ユーザプログラムの場合

ディスク占有量（単位：バイト）＝

$$PCn \times (944 + 2500) + \Sigma (RPSz) + \text{MAX} (RPSz) + \text{MAX} (\text{インストール先ディレクトリの容量}) + \Sigma (APSz) + PCn \times 300$$

● バックグラウンドインストールモードでかつ、通常インストールが指定されたユーザデータ、ユーザプログラムの場合

バックグラウンドインストールモードで、かつ通常インストールを指定した場合、リモートインストール時のクライアントでのディスク占有量が削減できます。

ディスク占有量（単位：バイト）＝

$$PCn \times (944 + 2500) + \text{MAX} (RPSz) + \Sigma (APSz) + PCn \times 300$$

（凡例）

PCn

同時にリモートインストールするパッケージ数

RPSz

パッケージのサイズ。次の式で算出してください。

$(\text{パッケージ対象のファイル数} + \text{ディレクトリ数}) \times 80 + \text{リモートインストールするプログラムプロダクトの媒体内でのサイズ}$

PPSz

リモートインストールするプログラムプロダクトの媒体内でのサイズ

APSz

インストール後のプログラムプロダクトのサイズ。バージョンアップ版を配布する場合は、旧バージョンとの差分のサイズになります。

$\Sigma ()$

合計値
MAX ()
最大値

(5) パッケージ

パッケージのディスク占有量を次の表に示します。

表 5-14 パッケージのディスク占有量

機能	ディスク占有量
パッケージ	7 メガバイト

(6) パッケージング

パッケージングに必要なディスク容量は、パッケージ種別によって異なります。算出式に使用する値はクラスタサイズで切り上げてください。

● ユーザデータまたはユーザプログラムのパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz$

● ユーザデータまたはユーザプログラムを暗号化または圧縮したパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz \times 2$

● FD の日立プログラムプロダクトまたは他社ソフトウェアのパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz + RDs$

● FD の日立プログラムプロダクトまたは他社ソフトウェアを暗号化または圧縮したパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz \times 2 + RDs$

● CD-ROM の日立プログラムプロダクトまたは他社ソフトウェアのパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz$

● CD-ROM の日立プログラムプロダクトまたは他社ソフトウェアを暗号化または圧縮したパッケージング

ディスク占有量 (単位: バイト) = $RPSz \times 2$

(凡例)

$RPSz$

(パッケージ対象のファイル数 + ディレクトリ数) $\times$ 80 + パッケージ対象のファイルサイズの合計

RDs

対象媒体のデータサイズ

(7) Automatic Installation Tool

Automatic Installation Tool のディスク占有量を次の表に示します。

表 5-15 Automatic Installation Tool のディスク占有量

機能	ディスク占有量
Automatic Installation Tool	6 メガバイト

(8) ユーザ環境に依存するファイルの有無

JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）にはユーザ環境に依存するファイルはありません。ただし、JP1/NETM/DM Manager のデータベース部分のファイルについては、「5.4 データベース容量の見積もり」を参照してください。

JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client のユーザ環境に依存するファイルには、次のファイルがあります。

上位システム管理ファイル

上位システム管理ファイルは、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥Master¥Db¥HOSTSYS に作成されます。一つの上位システム当たり 400 バイト必要です。上位システムを変更した場合、または上位システムから接続を受けた場合に追加されます。マルチポーリングの指定がある場合は、指定した上位システムの数分増加します。

インストールパッケージ情報管理ファイル

インストールパッケージ情報管理ファイル UPLISTD.BON は、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥Master¥Db¥ に作成されます。このファイルには、次の契機で、ソフトウェアの数だけ情報が追加されます。

- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアを検索」、「すべてのソフトウェアを検索」、および「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」でソフトウェアが発見されたとき
- 「パッケージのインストール」または「クライアントユーザによるインストール」ジョブでソフトウェアをインストールしたとき

一つのソフトウェア当たり 1 キロバイト必要です。

なお、JP1/NETM/DM でインストールしたソフトウェアで、同一のパッケージ識別 ID を持つパッケージは同じパッケージとして認識されます。したがって、バージョンを変更して複数回インストールした場合でも、パッケージ識別 ID が同じであれば、一つのソフトウェア情報しか存在しません。

ファイル検索情報管理ファイル

ファイル検索情報管理ファイル VIFLIST.BON は、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥Master¥Db¥ に作成されます。ファイル検索情報管理ファイルには、「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ファイルを検索」で検索されたファイルの数だけ情報が追加されます。一つのファイル当たり 300 バイト必要です。

Microsoft Office 製品情報管理ファイル

Microsoft Office 製品情報管理ファイル INFSCtx0.BON（x は内部的な管理番号）は、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥Master¥Db¥ に作成されます。このファイルには、「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「Microsoft Office 製品を検索」で検索されたソフトウェアの数だけ情報が追加されます。製品によって容量は異なりますが、一つのソフトウェア当たり約 300 バイト必要です。

ウィルス対策製品情報管理ファイル

ウィルス対策製品情報管理ファイル INFSCtx1.BON（x は内部的な管理番号）は、JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥Master¥Db¥ に作成されます。このファイルには、「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ウィルス対策製品を検索」で検索されたソフトウェアの数だけ情報が追加されます。製品によって容量は異なりますが、一つのソフトウェア当たり約 300 バイト必要です。

なお、JP1/NETM/Remote Control のユーザ環境に依存するファイルについては、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

5.4 データベース容量の見積もり

ここでは、JP1/NETM/DM システムで使用するデータベースの種類ごとに、データベース容量を見積もるための算出式について説明します。

5.4.1 Embedded RDB のデータベース容量の見積もり

Embedded RDB のデータベースに必要なディスク容量を見積もるための算出式を次に示します。算出結果に小数が含まれる場合は、小数点以下を切り上げてください。

なお、算出式中の「リモートインストール関連のジョブ」および「リモートコレクト関連のジョブ」は、次のジョブを意味します。

リモートインストール関連のジョブ

- 「パッケージのインストール」ジョブ
- 「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブ
- 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ

リモートコレクト関連のジョブ

- 「リモートコレクト」ジョブ
- 「中継までのリモートコレクト」ジョブ

(1) 作業表ファイル

次に示す容量のうち、最大になるものを作業表領域の容量として見積もってください。

- 基本機能で必要とする容量
- インベントリビューアで必要とする容量
- CSV 出力ユーティリティで必要とする容量
- 操作ログ一覧で必要とする容量

各容量の算出式を次に示します。

(a) 基本機能で必要とする容量

基本機能で必要とする容量（単位：バイト）＝

$$\begin{aligned} &[(\text{ジョブ当たりの平均クライアント数} \div 2) \times 4096 \times 2 \times 2] \\ &+ [(\text{ジョブ当たりの平均クライアント数} \div 3) \times 4096 \times 2 \times 2] \\ &+ [(\text{ジョブ当たりの平均クライアント数} \div 3) \times 4096 \times 2 \times 2] \end{aligned}$$

(b) インベントリビューアで必要とする容量

インベントリビューアで必要とする容量（単位：バイト）＝

$$((\text{取得するシステム情報数の平均値} + \text{ユーザインベントリ項目数} + \text{取得するレジストリ項目数}) \times \text{クライアント数} \div 4) \times 4096 \times 2 \times 9$$

(c) CSV 出力ユーティリティで必要とする容量

CSV 出力ユーティリティで必要とする容量は、次に示す算出式の結果のうち、最大になるものとしてください。

あて先属性（単位：バイト）＝

$$[(\text{あて先グループに属するクライアント数} \div 7) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

$$+ [(ID \text{ に属するクライアント数} \div 32) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

$$+ [(クライアント数 \div 51 \times 4096 \times 2 \times 2)]$$

$$\text{パッケージ属性 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{パッケージ数} \div 57) \times 4096 \times 2 \times 5$$

$$\text{ユーザ資産情報 (単位: バイト)} =$$

$$[(\text{ユーザインベントリ項目数} \div 255) \times 4096 \times 2 \times 5]$$

$$+ [(\text{ユーザインベントリ項目数} \div 11) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

$$\text{レジストリ情報 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{取得するレジストリ項目数} \times \text{クライアント数} \div 5) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{インストール済みパッケージ情報 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{取得するソフトウェア情報数の平均値} \times \text{クライアント数} \div 19) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{ジョブ実行状況 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{ジョブ当たりの平均クライアント数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数 (リモートインストール関連のジョブ以外の場合は1でカウント)} \div 6) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{ユーザ管理情報 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{ユーザインベントリ項目数} \times \text{クライアント数} \div 14) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{ソフトウェアインベントリ (単位: バイト)} =$$

$$(\text{ソフトウェアインベントリ辞書で管理するファイル数} \times \text{クライアント数} \div 12) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{パッケージ内容 (単位: バイト)} =$$

$$((\text{パッケージ数} + 1) \div 184) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{Microsoft Office 製品情報 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{管理する Microsoft Office 製品数} \times \text{クライアント数} \div 8) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{ウィルス対策製品情報 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{管理するウィルス対策製品数} \times \text{クライアント数} \div 19) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{起動抑止履歴 (単位: バイト)} =$$

$$[(\text{クライアント数} + \text{起動抑止履歴のあるクライアント数} \div 19) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

$$+ [(\text{クライアント数} + \text{起動抑止履歴のあるクライアント数} \div 56) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

(d) 操作ログ一覧で必要とする容量

操作ログ一覧で必要とする容量は、次に示す算出式の結果のうち、最大になるものとしてください。

$$\text{操作ログ一覧 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{稼働情報 (抑止履歴および操作履歴) の総数} \div 1) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{操作ログ詳細 (単位: バイト)} =$$

$$(\text{稼働情報 (抑止履歴および操作履歴) の総数} \div 1) \times 4096 \times 2 \times 2$$

$$\text{操作ログ集計で必要とする容量 (単位: バイト)} =$$

$$[(\text{稼働情報 (抑止履歴および操作履歴) の総数} \div 1) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

$$+ [(\text{稼働情報 (抑止履歴および操作履歴) の総数} \div 184) \times 4096 \times 2 \times 2]$$

(2) 常駐表ファイル

常駐表ファイル容量 (単位: バイト) =

$$\begin{aligned}
& (1048576 \times 2) \\
& + \{ [135 \times (\text{キャビネット数} + 2)] \\
& + [421 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数})] \\
& + [1028 \times (\text{リモートインストール関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数}) + (\text{リモートインストール関連のジョブ以外のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数})] \\
& + [972 \times (\text{ID 管理中継で管理されている, リモートインストール関連の ID ジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数} \times \text{ID 当たりの平均クライアント数}) + (\text{リモートインストール関連のジョブ以外の ID ジョブ数} \times \text{ID 当たりの平均クライアント数})] \\
& + [96 \times \text{ID 数}] \\
& + [654 \times (\text{ID 数} \times \text{ID 当たりの平均管理中継数} \times \text{ID 当たりの平均クライアント登録数})] \\
& + [360 \times (\text{クライアント数} \times \text{ソフトウェアインベントリの検索によって取得するファイル数の平均値})] \\
& + [488 \times (\text{クライアント数} \times \text{取得するシステム情報数の平均値})] \\
& + [600 \times (\text{ジョブ定義数} + \text{フォルダ数})] \\
& + [1256 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ定義数} \times \text{フォルダ数})] \\
& + [802 \times ((\text{ジョブ定義数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数}) + \text{フォルダ数})] \\
& + [1798 \times ((\text{リモートインストール関連のジョブ定義数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数}) + \text{フォルダ数})] \\
& + [348 \times (\text{「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数} + \text{フォルダ数})] \\
& + [206 \times (\text{「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ定義数} + \text{フォルダ数})] \\
& + [352 \times (\text{ジョブ数} + \text{フォルダ数})] \\
& + [406 \times (\text{ID 管理中継で管理されている ID ジョブ数} \times \text{ID ジョブで指定されている ID 数の合計})] \\
& + [114 \times (\text{リモートインストール関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数})] \\
& + [76 \times (\text{ソフトウェア検索リスト項目数} + 1)] \\
& + [234 \times (\text{Cm2 連携使用時の場合, システム構成にあるホスト数})] \\
& + [634 \times (\text{クライアント数} + \text{あて先グループ数})] \\
& + [122 \times \text{パッケージ数}] \\
& + [918 \times (\text{パッケージ数} + \text{キャビネット数})] \\
& + [148 \times \text{スケジュール指定して実行したジョブ数}] \\
& + [194 \times (\text{リモートインストール関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数}) + (\text{リモートインストール関連以外のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数})] \\
& + [346 \times \text{クライアント数} \times \text{ユーザインベントリ項目数}] \\
& + [768 \times \text{ユーザインベントリ項目数}] \\
& + [1204 \times (\text{クライアント数} \times \text{取得するソフトウェア情報数の平均値})] \\
& + [464 \times (\text{全あて先ジョブ数} \times \text{全あて先ジョブで指定した中継マネージャ数の合計})] \\
& + [610 \times \text{レジストリ情報取得対象ホスト数} \times \text{取得するレジストリ項目数}] \\
& + [358 \times \text{作成したレジストリ取得項目数}] \\
& + [1514 \times \text{システム構成にあるホスト数}] \\
& + [918 \times \text{ソフトウェアインベントリ辞書で管理するファイル数}] \\
& + [126 \times \text{ライセンス管理するファイル数}] \\
& + [406 \times \text{ソフトウェアインベントリ辞書で削除管理するファイル数}] \\
& + [1970 \times (\text{Microsoft Office 製品取得対象クライアント数} + \text{管理する Microsoft Office 製品数})]
\end{aligned}$$

+ [1950 × (ウィルス対策製品取得対象クライアント数+管理するウィルス対策製品数)]
 + [806 × あて先自動メンテナンスのポリシー数]
 + [2780 × ID 自動メンテナンスのポリシー数]
 + [1156 × システム構成情報の削除履歴数]
 + [452 × JP1/NETM/DM 未導入ホスト数]
 + [208 × ホスト探索の条件設定数]
 + [276 × ホスト探索設定で設定したコミュニティ数]
 + [440 × ホスト探索で見つかったホスト数]
 + [266 × 「メッセージの通知」ジョブのジョブ定義数]
 + [175 × ソフトウェア稼働監視ポリシー数]
 + [77 × (ソフトウェア稼働監視ポリシー数 × 7^{※1})]
 + [770 × 監視対象のプログラム数]
 + [473 × 稼働時間取得対象のプログラム数]
 + [176 × ソフトウェア稼働監視の許可情報数]
 + [556 × 10000^{※2}]
 + [254 × 「ソフトウェア稼働監視の制御」ジョブ定義数]
 + [342 × 稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数]
 + [138 × USB 接続メディアアクセス抑止除外条件数]
 + [939 × パッチ情報数]
 + [22 × 3]^{※3}
 + [14]^{※4}
 + [280]^{※5}
 + [64]
 + [2731 × (ドメイン数 + OU 数 + グループ数 + コンピュータ数 + ユーザ数)]
 + [2305 × ((OU 数 × OU から取得する項目数) + (グループ数 × グループから取得する項目数)
 + (コンピュータ数 × コンピュータから取得する項目数) + (ユーザ数 × ユーザから取得する項目
 数))]]
 + [2024 × (OU から取得する項目数 + グループから取得する項目数 + コンピュータから取得する項
 目数 + ユーザから取得する項目数)]
 + [3157 × ドメイン数]
 + [66 × グループに所属するメンバ数]
 + [165 × Web アクセスログのフィルタリング条件数]}

注※1 デバイス種別数

注※2 抑止履歴を保存する最大イベント数

注※3 システム構成情報、システム構成情報の削除履歴および未導入ホスト情報の最終更新日時の管理
数

注※4 ホスト探索結果の有効期間の設定

注※5 パッチ管理情報

(3) 索引ファイル

索引ファイル容量 (単位: バイト) =
 (1048576 × 2)
 + { [8 × (キャビネット数 + 2)]

- + [28 × (リモートコレクト関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
- + [672 × (リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数×ジョブ当たりの平均クライアント数) + (リモートインストール関連以外のジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
- + [368 × (ID 管理中継で管理されている, リモートインストール関連の ID ジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数× ID 当たりの平均クライアント数) + (リモートインストール関連のジョブ以外の ID ジョブ数× ID 当たりの平均クライアント数)]
- + [36 × ID 数]
- + [328 × (ID 数× ID 当たりの平均管理中継数× ID 当たりの平均クライアント登録数)]
- + [360 × (クライアント数×ソフトウェアインベントリの検索によって取得するファイル数の平均値)]
- + [280 × (クライアント数×取得するシステム情報数の平均値)]
- + [208 × (ジョブ定義数+フォルダ数)]
- + [208 × (リモートコレクト関連のジョブ定義数×フォルダ数)]
- + [172 × (ID 数× ID 当たりの平均管理中継数× ID 当たりの平均クライアント登録数)]
- + [548 × ((ジョブ定義数×ジョブ当たりの平均クライアント数) + フォルダ数)]
- + [276 × ((リモートインストール関連のジョブ定義数×ジョブ当たりの平均パッケージ数) + フォルダ数)]
- + [208 × (「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数+フォルダ数)]
- + [36 × (「ユーザインベントリ情報の取得」ジョブ定義数+フォルダ数)]
- + [272 × (ジョブ数+フォルダ数)]
- + [276 × (ID 管理中継で管理されている ID ジョブ数× ID ジョブで指定されている ID 数の合計)]
- + [28 × (リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数)]
- + [40 × (ソフトウェア検索リスト項目数+ 1)]
- + [76 × (Cm2 連携使用時の場合, システム構成にあるホスト数)]
- + [144 × (クライアント数+あて先グループ数)]
- + [8 × パッケージ数]
- + [72 × (パッケージ数+キャビネット数)]
- + [144 × スケジュール指定して実行したジョブ数]
- + [120 × (リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)] + [リモートインストール関連以外のジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数]
- + [136 × クライアント数×ユーザインベントリ項目数]
- + [136 × ユーザインベントリ項目数]
- + [116 × (クライアント数×取得するソフトウェア情報数の平均値)]
- + [320 × (合計全あて先ジョブ数×全あて先ジョブで指定した中継マネージャ数の合計)]
- + [328 × レジストリ情報取得対象ホスト数×取得するレジストリ項目数]
- + [260 × 作成したレジストリ取得項目数]
- + [168 × システム構成にあるホスト数]
- + [408 × ソフトウェアインベントリ辞書で管理するファイル数]
- + [108 × ライセンス管理するファイル数]
- + [296 × ソフトウェアインベントリ辞書で削除管理するファイル数]
- + [328 × (Microsoft Office 対策製品取得対象クライアント数+管理する Microsoft Office 製品数)]
- + [588 × (ウィルス対策製品取得対象クライアント数+管理するウィルス対策製品数)]
- + [12 × あて先自動メンテナンスのポリシー数]
- + [36 × ID 自動メンテナンスのポリシー数]

+ [72 × システム構成情報の削除履歴数]
 + [36 × JP1/NETM/DM 未導入ホスト数]
 + [20 × ホスト探索の条件設定数]
 + [12 × ホスト探索設定で設定したコミュニティ数]
 + [24 × ホスト探索で見つかったホスト数]
 + [208 × 「メッセージの通知」ジョブ定義数]
 + [68 × ソフトウェア稼働監視ポリシー数]
 + [72 × (ソフトウェア稼働監視ポリシー数 × 7^{※1})]
 + [76 × 監視対象のプログラム数]
 + [340 × 稼働時間取得対象のプログラム数]
 + [473 × 取得した稼働時間の情報数] ^{※2}
 + [348 × ソフトウェア稼働監視の許可情報数]
 + [68 × 10000^{※3}]
 + [208 × 「ソフトウェア稼働監視の制御」ジョブ定義数]
 + [336 × 稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数]
 + [160 × ソフトウェア稼働監視履歴の情報数] ^{※4}
 + [68 × USB 接続メディアアクセス抑止除外条件数]
 + [304 × (ドメイン数 + OU 数 + グループ数 + コンピュータ数 + ユーザ数)]
 + [36 × ((OU 数 × OU から取得する項目数) + (グループ数 × グループから取得する項目数) + (コンピュータ数 × コンピュータから取得する項目数) + (ユーザ数 × ユーザから取得する項目数))]
 + [12 × (OU から取得する項目数 + グループから取得する項目数 + コンピュータから取得する項目数 + ユーザから取得する項目数)]
 + [260 × ドメイン数]
 + [72 × グループに所属するメンバ数]
 + [68 × Web アクセスログのフィルタリング条件数]]

注※1 デバイス種別数

注※2 取得した稼働時間の情報数＝

220 × クライアント数 × 稼働時間取得対象のプログラム数

注※3 抑止履歴を保存する最大イベント数

注※4 ソフトウェア稼働監視履歴の情報数＝

ソフトウェアの稼働監視の対象となるクライアントの台数
 × 1 クライアント当たりの 1 日に取得する稼働情報量
 × 稼働情報の保存日数

(4) ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル

ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル容量 (単位: バイト) =

{32000

+ [ID 管理中継で管理されている, リモートインストール関連の ID ジョブ数 × ジョブ当たりの平均パッケージ数 × ID 当たりの平均クライアント数]
 + [8 × (リモートインストール関連のジョブ数 × ジョブ当たりの平均パッケージ数 × リモートインストール関連のジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + [リモートインストール関連以外のジョブ数 × ジョブ当たりの平均クライアント数]
 + [13 × («ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数 + フォルダ数)]

$$\begin{aligned}
 &+ [「リモートコレクト」ジョブ数 + 「中継までのリモートコレクト」ジョブ数 + 「中継サーバからのコレクトファイル収集」ジョブ数 + 「中継サーバのコレクトファイル削除」ジョブ数] \\
 &+ [(ソフトウェア検索リスト数 + 1)] \\
 &+ [スケジュールを指定して実行したジョブ数] \\
 &+ [8 \times (「メッセージの通知」ジョブ定義数)] \\
 &\times 8192
 \end{aligned}$$

(5) 資産情報関連バイナリオブジェクトファイル

$$\begin{aligned}
 &\text{資産情報関連バイナリオブジェクトファイル容量 (単位: バイト)} = \\
 &\{12800 \\
 &+ [7 \times (\text{パッケージ数})] \\
 &+ [28 \times (\text{ユーザインベントリ項目数})]\} \\
 &\times 8192
 \end{aligned}$$

(6) ソフトウェア稼働監視履歴ファイル

$$\begin{aligned}
 &\text{ソフトウェア稼働監視履歴ファイル容量 (単位: バイト)} = \\
 &4194304 \\
 &+ [1363 \times \text{ソフトウェア稼働監視履歴の情報数}] \times 1 \\
 &+ [80 \times \text{取得した稼働時間の情報数}] \times 2
 \end{aligned}$$

注※1 ソフトウェア稼働監視履歴の情報数＝
ソフトウェアの稼働監視の対象となるクライアントの台数
× 1 クライアント当たりの 1 日に取得する稼働情報量
× 稼働情報の保存日数

注※2 取得した稼働時間の情報数＝
220 × クライアント数 × 稼働時間取得対象のプログラム数

仮想化環境のクライアントの場合は、ログオンユーザ数に比例して取得する情報数が増加します。そのため、「クライアント数」には想定するログインユーザ数を加算してください。

なお、JP1/NETM/DM が提供する dcmmnrst コマンドを使用すると、セットアップで指定した保存日数を超えた稼働情報もデータベースに格納できます。「稼働情報の保存日数」は、dcmmnrst コマンドでデータベースに格納する稼働情報の日数も考慮して計算してください。

(7) 更新プログラム管理ファイル

$$\begin{aligned}
 &\text{更新プログラム管理ファイル容量 (単位: バイト)} = \\
 &[4024433 \times \text{ダウンロード済みのパッチ数※}] \\
 &+ [3403 \times \text{インストールスクリプト数}]
 \end{aligned}$$

注※ OS の Service Pack は除きます。

(8) 一時表ファイル

$$\begin{aligned}
 &\text{一時表ファイル容量 (単位: バイト)} = \\
 &713031680 \\
 &+ [(\text{常駐表ファイル容量} + \text{索引ファイル容量}) \times 0.6]
 \end{aligned}$$

(9) 08-00 以前と 08-02 以降の容量の差分について

08-00 以前のバージョンから 08-02 以降のバージョンへアップグレードする場合、データベースの構造が変更されているためデータベースの所要量が異なります。そのため、アップグレード時に容量の不足によるエラーが発生するおそれがあります。

この場合、データベースの所要量を見積もり直してからアップグレードを実行してください。データベースの容量は、アップグレード時に変更できます。

なお、ここで説明する算出式は、アップグレード後に 08-00 以前のバージョンで利用できる機能だけを使用する場合のものです。08-02 以降のバージョンでサポートされた機能を使用する場合は、追加機能のデータベース容量を算出する必要があるため、(1)～(8)の算出式を使用してください。

08-00 以前のバージョンでのデータベース容量を基にした、08-02 以降のバージョンに必要なデータベース容量の算出式を説明します。

(a) 常駐表ファイル

常駐表ファイル容量 (単位: バイト) =

$$\begin{aligned} & 08-00 \text{ 以前の常駐表ファイル容量} \\ & + [73 \times (\text{キャビネット数} + 2)] \\ & + [233 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数})] \\ & + [1008 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ定義数} \times \text{フォルダ数})] \\ & + [736 \times ((\text{リモートインストール関連のジョブ定義数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数}) + \text{フォルダ数})] \\ & + [746 \times (\text{パッケージ数} + \text{キャビネット数})] \\ & + [908 \times (\text{クライアント数} \times \text{取得するソフトウェア情報数の平均値})] \end{aligned}$$

(b) 索引ファイル

変更ありません。

(c) ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル

ジョブ関連バイナリオブジェクトファイル容量 (単位: バイト) =

$$\begin{aligned} & 08-00 \text{ 以前のジョブ関連バイナリオブジェクトファイル容量} \\ & - \{ [7 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数})] \\ & + [15 \times (\text{リモートコレクト関連のジョブ数} \times \text{フォルダ数})] \\ & + [20 \times ((\text{リモートインストール関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数}) + \text{フォルダ数})] \} \\ & \times 8192 \end{aligned}$$

(d) 資産情報関連バイナリオブジェクトファイル

資産情報関連バイナリオブジェクトファイル容量 (単位: バイト) =

$$\begin{aligned} & 08-00 \text{ 以前の資産情報関連バイナリオブジェクトファイル容量} \\ & - \{ [7 \times (\text{キャビネット数} + 2)] \\ & + [7 \times (\text{パッケージ数})] \\ & + [7 \times (\text{クライアント数} \times \text{クライアント当たりの平均ソフトウェア情報数})] \} \\ & \times 8192 \end{aligned}$$

(e) ソフトウェア稼働監視履歴ファイル

変更ありません。

(f) 一時表ファイル

変更ありません。

5.4.2 Microsoft SQL Server のデータベース容量の見積もり

Microsoft SQL Server のデータベースに必要なディスク容量を見積もるための算出式を次に示します。算出結果に小数が含まれる場合は、小数点以下を切り上げてください。

なお、算出式中の「リモートインストール関連のジョブ」は、次のジョブを意味します。

リモートインストール関連のジョブ

- 「パッケージのインストール」ジョブ
- 「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブ
- 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ

(1) データベースデバイス

データベースデバイス容量 (単位: バイト) =

$$\begin{aligned}
 & \{ (\text{キャビネット数} \times 1.021 + 1) \\
 & + ((\text{リモートインストール関連のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均パッケージ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数} \\
 & + \text{リモートインストール関連以外のジョブ数} \times \text{ジョブ当たりの平均クライアント数}) \\
 & \times 1.111 + 1000) \\
 & + (\text{ジョブ定義のあて先に指定されているホスト数} \times 0.083 + 1450) \\
 & + (\text{登録されたジョブ数} \times (\text{ジョブの経路となる配布管理システム直下のホスト数} + \text{ジョブの対象となる配布管理システム直下のホスト数}) \times 0.045 + 200) \\
 & + (\text{クライアント数} \times \text{取得するソフトウェア情報数の平均値} \times 1.1 + 1050) \\
 & + (\text{クライアント数} \times 0.254 + 32) \\
 & + (\text{ジョブ定義数} \times 0.067 + 2) \\
 & + ((\text{「リモートコレクト」ジョブ定義数} + \text{「中継までのリモートコレクト」ジョブ定義数}) \times 2.071 + 2) \\
 & + (\text{「パッケージのインストール」ジョブおよび「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブの対象となるパッケージ数} \times 0.25 + 2) \\
 & + (\text{「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数} \times 0.048 + 2) \\
 & + (\text{登録されたジョブ数} \times 0.1 + 2) \\
 & + ((\text{「パッケージのインストール」ジョブおよび「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブの対象となるパッケージ数} + \text{「リモートコレクト」ジョブおよび「中継までのリモートコレクト」ジョブの定義数}) \times 0.039 + 2) \\
 & + (\text{あて先グループ数} \times 0.1 + 3) \\
 & + (\text{保管パッケージ数} \times 1.094 + 4) \\
 & + (\text{スケジュール指定したジョブ数} \times 1.053 + 2) \\
 & + (\text{ID 数} \times 0.037 + 2) \\
 & + ((\text{ID に登録するクライアントの数} + \text{ID 管理中継の数}) \times 0.037 + 2) \\
 & + (2816 \times \text{ID 自動メンテナンスのポリシー数}) \\
 & + (\text{保管しているソフトウェア検索リストの数} \times 0.11 + 2) \\
 & + (\text{ソフトウェア検索リストのサイズの合計値} / 1800 + 6) \\
 & + ((0.111 \times \text{Cm2 連携使用時の場合, システム構成にあるホスト数}) + 36) \} \\
 & \times 2048 \\
 & + (\text{ソフトウェアインベントリ容量}^{\ast 1})
 \end{aligned}$$

- + (466 × クライアント数 × 取得するシステム情報数の平均値)
- + (328 × クライアント数 × ユーザインベントリ項目数)
- + (64963 × ユーザインベントリ項目数)
- + (580 × レジストリ情報取得対象ホスト数 × 取得するレジストリ項目数)
- + (332 × 作成したレジストリ取得項目数)
- + (1126 × システム構成情報の削除履歴数)
- + (420 × JP1/NETM/DM 未導入ホスト数)
- + (175 × ホスト探索の条件設定数)
- + (260 × ホスト探索設定でのコミュニティ名指定数 × ホスト探索の条件設定数)
- + (412 × ホスト探索で探索されるホスト数)
- + (144 × ソフトウェア稼働監視ポリシー数)
- + [336 × (ソフトウェア稼働監視ポリシー数 × 7^{※2})]
- + (733 × ポリシーごとの監視対象のプログラム数)
- + (364 × 稼働時間取得対象のプログラム数)
- + (331 × ソフトウェア稼働監視の許可情報数)
- + (140 × 稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数)
- + (160 × Web アクセスログのフィルタリング条件数)
- + (282 × USB 接続メディアアクセス抑止除外条件数)
- + (521 × 10000^{※3})
- + (939 × パッチ情報数)
- + (4024433 × ダウンロード済みのパッチ数^{※4})
- + (3403 × インストールスクリプト数)
- + 280^{※5}
- + 3
- + (4706 × (ドメイン数 + OU 数 + グループ数 + コンピュータ数 + ユーザ数))
- + (4287 × ((OU 数 × OU から取得する項目数) + (グループ数 × グループから取得する項目数) + (コンピュータ数 × コンピュータから取得する項目数) + (ユーザ数 × ユーザから取得する項目数)))
- + (4020 × (OU から取得する項目数 + グループから取得する項目数 + コンピュータから取得する項目数 + ユーザから取得する項目数))
- + (6319 × ドメイン数)
- + (64 × グループに所属するメンバ数)

注※1 ソフトウェアインベントリ容量

- = (ソフトウェアインベントリ辞書の容量)
- + (クライアントのソフトウェアインベントリを取得した場合の容量)
- + (ライセンス数テーブルの容量)
- + (削除ソフトウェア管理テーブルの容量)

注※2 デバイス種別数

注※3 抑止履歴を保存する最大イベント数

注※4 OS の Service Pack は除きます。

注※5 パッチ管理情報

次に、データ使用量の目安を示します。

(a) ソフトウェアインベントリ辞書の容量

887 × ソフトウェアインベントリの検索で取得される、各ホストのファイル数（単位：バイト）

（例）拡張子の「*.exe と *.dll」を収集した場合

1 クライアントの「*.exe と *.dll」の数を 1,000 個とする

$887 \times 1000 = 887000$ バイト（約 0.85 メガバイト）

(b) クライアントのソフトウェアインベントリを取得した場合の容量

1 テーブルのサイズ 342 バイト × 検索するあて先数 × 検索結果ファイル数

（例）あて先クライアント数 1,000 台すべてに 1,000 種類のファイルがあった場合

$342 \times 1000 \times 1000 = 342000000$ バイト（約 326 メガバイト）

(c) ライセンス数テーブルの容量

1 テーブルのサイズ 108 バイト × ライセンス管理したいファイル数

（例）1,000 種類のファイルのうち 100 種類のファイルをライセンス管理の対象にした場合

$108 \times 100 = 10800$ バイト（約 0.01 メガバイト）

(d) 削除ソフトウェア管理テーブルの容量

1 テーブルのサイズ 384 バイト × 削除管理するソフトウェア数

（例）ソフトウェアインベントリ辞書に追加されないソフトウェアが 100 個あった場合

$384 \times 100 = 38400$ バイト（約 0.04 メガバイト）

なお、ソフトウェアインベントリ辞書と削除ソフトウェア管理テーブルで、ソフトウェアが重複することはありません。

(2) トランザクションログデバイス

Microsoft SQL Server では、トランザクションログデバイスの容量として、リレーショナルデータベース全体の約 20% が推奨されています。

また、トランザクションログの自動拡張機能を設定することをお勧めします。自動拡張設定の方法は、マニュアル「Microsoft SQL Server」を参照してください。

トランザクションログの設定については、マニュアル「構築ガイド」の「7.3.2 Microsoft SQL Server の環境設定」「(8) トランザクションログの設定」を参照してください。

(3) ソフトウェアパッケージデータベースデバイス

ソフトウェアパッケージデータベースデバイス容量（単位：バイト）＝
（（保管パッケージサイズ / 1800（1 以下のときは、1 に切り上げ））
＋ 2 × 保管パッケージ数
＋ 2 × ジョブ定義登録時にインストール属性を変更したパッケージ数
＋ 2 × ジョブ登録時のパッケージ数
＋ 2 × リモートコレクトジョブ登録数）
× 2048

(4) ソフトウェア稼働監視履歴データベースデバイス

ソフトウェア稼働監視履歴データベースデバイス容量（単位：バイト）＝

$(1861^{※1} \times \text{ソフトウェア稼働監視履歴の情報数})^{※2}$
 $+ (80 \times \text{取得した稼働時間の情報数})^{※3}$

注※1

稼働履歴情報のサイズの最大値を指定する場合は、1861（バイト）を指定してください。平均的なソフトウェア稼働監視履歴のサイズを指定する場合、次に示す表の「1件のサイズ（バイト）×係数」列の項番1～6を合計した数値543（バイト）を指定してください。

項番	項目	1件のサイズ（バイト）	係数	1件のサイズ（バイト）×係数
1	プロセス起動	335	0.14	46.9
2	プロセス停止	335	0.14	46.9
3	キャプション変更	590	0.25	147.5
4	アクティブウィンドウの変更	590	0.25	147.5
5	ファイル操作	837	0.08	66.96
6	Web アクセスログ	621	0.14	86.94

係数についての詳細は、「2.5.10 稼働情報の保存日数の目安」を参照してください。

注※2 ソフトウェア稼働監視履歴の情報数＝

ソフトウェアの稼働監視の対象となるクライアントの台数
 $\times$ 1クライアント当たりの1日に取得する稼働監視履歴数
 $\times$ 稼働情報の保存日数

注※3 取得した稼働時間の情報数＝

$220 \times \text{クライアント数} \times \text{稼働時間取得対象のプログラム数}$

仮想化環境のクライアントの場合は、ログオンユーザ数に比例して取得する情報数が増加します。そのため、「クライアント数」には想定するログインユーザ数を加算してください。

なお、JP1/NETM/DMが提供する `dcmmmonrst` コマンドを使用すると、セットアップで指定した保存日数を超えた稼働情報もデータベースに格納できます。「稼働情報の保存日数」は、`dcmmmonrst` コマンドでデータベースに格納する稼働情報の日数も考慮して計算してください。

また、次のデータパーティションを使用して稼働監視履歴を格納する場合は、データベースマネージャで通常のリレーショナルデータベースを新規作成、またはアップグレードしたあとに、別途データパーティションを作成する必要があります。

- Microsoft SQL Server 2012 の機能であるデータパーティション
- Microsoft SQL Server 2008 の機能であるデータパーティション
- Microsoft SQL Server 2005 の機能であるデータパーティション

データパーティションの作成には、SQL Server Management Studio を使用します。詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「7.6 データパーティションを使用して稼働監視履歴を格納する」を参照してください。

(5) 一時データベース（tempdb）

次に示す一時データベース容量の各計算式の中で、最大の容量を tempdb の容量として見積もってください。なお、各機能を並行して実行する場合は、それぞれの一時データベース容量を足した値を tempdb の値にしてください。

- 基本機能で必要とする一時データベース容量
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 (1.14 × 登録するジョブの対象となるホストの総数
 + 1.17 × 登録するジョブの対象となるパッケージの総数
 + 3.20 × 登録するジョブの対象となるホストの総数 × 登録するジョブの対象となるパッケージの総数)
 × 2048
- インベントリビューアで必要とする一時データベース容量
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 466 バイト × 1 台当たりのシステム情報表示項目数 × インベントリ表示台数
 + 328 バイト × 1 台当たりのユーザインベントリ表示項目数 × インベントリ表示台数
 + 586 バイト × 1 台当たりのレジストリ情報表示項目数 × インベントリ表示台数
- CSV 出力ユーティリティで必要とする一時データベース容量
 - ・ あて先属性
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 500 バイト × あて先グループに属するホスト数
 + 1000 バイト × 全ホスト数
 + 70 バイト × ID に属するクライアント数
 - ・ パッケージ属性
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 950 バイト × 全パッケージ数
 - ・ ユーザ資産情報
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 70 バイト × ユーザインベントリ項目の自管理項目および共通管理項目数
 + 450 バイト × ユーザインベントリ項目の自管理項目および共通管理項目数 × 情報取得済みクライアント数
 - ・ レジストリ情報
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 550 バイト × レジストリ取得項目の自管理項目および共通管理項目数 × 情報取得済みクライアント数
 - ・ インストール済みパッケージ情報
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 400 バイト × 1 台当たりのインストールパッケージ数 × 情報取得済みクライアント数
 - ・ ジョブ実行状況
 一時データベース容量（単位：バイト）＝ジョブごとの容量[※]の総和
 注※
 ジョブごとの容量＝ 2250 バイト × 1 ジョブのあて先数 × 1 ジョブのパッケージ数（配布系ジョブ以外の場合は 1 でカウント）
 - ・ ユーザ管理情報
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 70 バイト × ユーザインベントリ項目の自管理項目および共通管理項目数
 + 70 バイト × 全クライアント数 + 1100 バイト
 - ・ システム情報
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 600 バイト × 1 台当たりのインベントリ項目数 × 情報取得済みクライアント数
 - ・ ソフトウェアインベントリ
 一時データベース容量（単位：バイト）＝
 1100 バイト × 管理対象としたソフトウェア数 × 情報取得済みクライアント数
 - ・ ライセンス情報

- 一時データベース容量 (単位: バイト) =
 150 バイト × ライセンス設定したソフトウェア数
 + 100 バイト × 管理対象としたソフトウェア数
- パッケージ内容
 一時データベース容量 (単位: バイト) =
 300 バイト × パッケージ種別が「ユーザプログラム, データ」であるすべてのパッケージのファイル
 総数

5.4.3 Oracle のデータベース容量の見積もり

Oracle のデータベースに必要なディスク容量を見積もるための算出式を次に示します。算出結果に小数が含まれる場合は、小数点以下を切り上げてください。

なお、算出式中の「リモートインストール関連のジョブ」および「リモートコレクト関連のジョブ」は、次のジョブを意味します。

リモートインストール関連のジョブ

- 「パッケージのインストール」ジョブ
- 「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブ
- 「クライアントユーザによるインストール」ジョブ

リモートコレクト関連のジョブ

- 「リモートコレクト」ジョブ
- 「中継までのリモートコレクト」ジョブ

(1) ユーザ表領域

- 初期サイズ = 全テーブルサイズの合計 + (全テーブルサイズの合計 × 20%)
- テーブルサイズ = 行サイズ × 行数
- 行サイズ = 行ヘッダ × (3 × UB1) + バイト長を含む列サイズ合計
 (UB1 とは Unsigned バイト用の変数で、値は V\$type_size から持ってくる)
- 行ヘッダ = 3 + 短列 + (3 × 長列)
 (短列: 255 バイト以下の列。長列: 256 バイト以上の列)

ユーザ表領域容量 (単位: バイト) =
 {[156 × (キャビネット数 + 2)]
 + [460 × (リモートコレクト関連のジョブ数 × ジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + [1729 × (リモートインストール関連のジョブ数 × ジョブ当たりの平均パッケージ数 × ジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + (リモートインストール関連以外のジョブ数 × ジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + [1708 × (ID 管理中継で管理されている, リモートインストール関連の ID ジョブ数 × ジョブ当たりの平均パッケージ数 × ID 当たりの平均クライアント数)]
 + (リモートインストール関連以外の ID ジョブ数 × ID 当たりの平均クライアント数)]
 + [96 × ID 数]
 + [202 × (ID 数 × ID 当たりの平均管理中継数 × ID 当たりの平均クライアント登録数)]
 + [763 × (クライアント数 × ソフトウェアインベントリの検索によって取得するファイル数の平均値)]
 + [496 × (クライアント数 × 取得するシステム情報数の平均値)]
 + [306 × (ジョブ数 + フォルダ数)]

- + [3265 × (リモートコレクト関連のジョブ数×フォルダ数)]
- + [337 × (ID ジョブ数×フォルダ数)]
- + [585 × ((ジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数) + フォルダ数)]
- + [2390 × ((リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数) + フォルダ数)]
- + [359 × (「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数+フォルダ数)]
- + [206 × (「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ定義数+フォルダ数)]
- + [355 × (ジョブ数+フォルダ数)]
- + [468 × (ID 管理中継で管理されている ID ジョブ数× ID ジョブで指定されている ID の合計)]
- + [2792 × ID 自動メンテナンスのポリシー数]
- + [1145 × (「リモートコレクト」ジョブ数+「中継までのリモートコレクト」ジョブ数+「中継サーバからのコレクトファイル収集」ジョブ数+「中継サーバのコレクトファイル削除」ジョブ数)]
- + [65622 × (ソフトウェア検索リストの項目数+ 1)]
- + [244 × Cm2 連携機能使用時に、システム構成にあるホスト数]
- + [583 × (クライアント数+あて先グループ数)]
- + [65669 × パッケージ数]
- + [979 × (パッケージ数+キャビネット数)]
- + [458 × スケジュール指定して実行したジョブ数]
- + [232 × (リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
- + [232 × (リモートインストール関連以外のジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
- + [1031 × クライアント数]
- + [56]
- + [1577 × (ID 数× ID 当たりの平均管理中継数× ID 当たりの平均クライアント登録数)]
- + [328 × クライアント数×ユーザインベントリ項目数]
- + [64962 × ユーザインベントリ項目数]
- + [370 × (クライアント数×取得するソフトウェア情報数の平均値)]
- + [438 × (全あて先ジョブ数×全あて先ジョブで指定した中継マネージャ数の合計)]
- + [273 × システム構成にある中継するシステム数]
- + [632 × ホスト数×取得するレジストリ項目数]
- + [378 × 作成済みレジストリ取得項目数]
- + [864 × システム構成にあるホスト数]
- + [ソフトウェアインベントリ容量※ 1]
- + [1141 × システム構成情報の削除履歴数]
- + [465 × JP1/NETM/DM 未導入ホスト数]
- + [260 × ホスト探索の条件設定数]
- + [286 × ホスト探索設定でのコミュニティ名指定数×ホスト探索の条件設定数]
- + [12]
- + [446 × ホスト探索で探索されるホスト数]
- + [237 × ソフトウェア稼働監視ポリシー数]
- + [361 × (ソフトウェア稼働監視ポリシー数× 7※ 2)]
- + [735 × 監視対象のプログラム数]
- + [370 × 稼働時間取得対象のプログラム数]
- + [337 × ソフトウェア稼働監視の許可情報数]
- + [340 × 稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数]
- + [419 × Web アクセスログのフィルタリング条件数]

+ $[397 \times \text{USB 接続メディアアクセス抑止除外条件数}]$
 + $[520 \times 10000^{\ast 3}]$
 + $[4713 \times (\text{ドメイン数} + \text{OU 数} + \text{グループ数} + \text{コンピュータ数} + \text{ユーザ数})]$
 + $[4287 \times ((\text{OU 数} \times \text{OU から取得する項目数}) + (\text{グループ数} \times \text{グループから取得する項目数})$
 + $(\text{コンピュータ数} \times \text{コンピュータから取得する項目数}) + (\text{ユーザ数} \times \text{ユーザから取得する項目数}))]$
 + $[4008 \times (\text{OU から取得する項目数} + \text{グループから取得する項目数} + \text{コンピュータから取得する項目数} + \text{ユーザから取得する項目数})]$
 + $[6319 \times \text{ドメイン数}]$
 + $[64 \times \text{グループに所属するメンバ数}]$

注 1 ※ ソフトウェアインベントリ容量

= (ソフトウェアインベントリ辞書の容量)
 + (クライアントのソフトウェアインベントリを取得した場合の容量)
 + (ライセンス数テーブルの容量)
 + (削除ソフトウェア管理テーブルの容量)

注 2 ※ デバイス種別数

注 3 ※ 抑止履歴を保存する最大イベント数

次に、データ使用量の目安を示します。

(a) ソフトウェアインベントリ辞書の容量

1 テーブルのサイズ 887 バイト $\times$ 検索結果ファイル数

(例) 拡張子の「*.exe と *.dll」を収集した場合

1 クライアントの「*.exe と *.dll」の数を 1,000 個とする
 $887 \times 1000 = 887000$ バイト (約 0.85 メガバイト)

(b) クライアントのソフトウェアインベントリを取得した場合の容量

1 テーブルのサイズ 342 バイト $\times$ 検索するあて先数 $\times$ 検索結果ファイル数

(例) あて先クライアント数 1,000 台すべてに 1,000 種類のファイルがあった場合

$342 \times 1000 \times 1000 = 342000000$ バイト (約 326 メガバイト)

(c) ライセンス数テーブルの容量

1 テーブルのサイズ 108 バイト $\times$ ライセンス管理したいファイル数

(例) 1,000 種類のファイルのうち 100 種類のファイルをライセンス管理の対象にした場合

$108 \times 100 = 10800$ バイト (約 0.01 メガバイト)

(d) 削除ソフトウェア管理テーブルの容量

1 テーブルのサイズ 384 バイト $\times$ 削除管理するソフトウェア数

(例) ソフトウェアインベントリ辞書に追加されないソフトウェアが 100 個あった場合

$384 \times 100 = 38400$ バイト (約 0.04 メガバイト)

なお、ソフトウェアインベントリ辞書と削除ソフトウェア管理テーブルで、ソフトウェアが重複することはありません。

(2) ロールバック表領域

通常、ユーザ表領域の 10% の大きさです。

(3) インデックス表領域

- 初期サイズ＝全インデックステーブルの合計
- インデックステーブル一つのサイズ＝項目当たりバイト数×項目数
- 項目当たりバイト数＝ヘッダサイズ＋インデックス 1 行のサイズ
- ヘッダサイズ＝3＋短列数＋（3×長列数）

（短列：128 バイト以下の列。長列：129 バイト以上の列）

インデックス表領域容量（単位：バイト）＝

{[36 × ID 数]
 + [112 × (ID 数×クライアント当たりの平均 ID 数)]
 + [73 × (クライアント数×取得するシステム情報数の平均値)]
 + [387 × (ジョブ数＋フォルダ数)]
 + [168 × (ID 数× ID 当たりの平均管理中継数× ID 当たりの平均クライアント登録数)]
 + [242 × ((ジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)＋フォルダ数)]
 + [168 × (「ソフトウェア情報の取得」ジョブ定義数＋フォルダ数)]
 + [168 × (「ユーザインベントリの取得」ジョブ定義数＋フォルダ数)]
 + [270 × (ID 管理中継で管理されている ID ジョブ数× ID ジョブで指定されている ID 数の合計)]
 + [40 × (ソフトウェア検索リスト項目数＋1)]
 + [76 × Cm2 連携機能使用時に、システム構成にあるホスト数]
 + [86 × (リモートインストール関連のジョブ数×ジョブ当たりの平均パッケージ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + (リモートインストール関連以外のジョブ数×ジョブ当たりの平均クライアント数)]
 + [36 × ID 自動メンテナンスのポリシー数]
 + [76 × クライアント数]
 + [133 × (「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ定義数×フォルダ数)]
 + [339 × (クライアント数×取得するソフトウェア情報数の平均値)]
 + [321 × (全あて先ジョブ数×全あて先ジョブで指定した中継マネージャ数の合計)]
 + [173 × システム構成にある中継するシステム数]
 + [330 × ホスト数×取得するレジストリ項目数]
 + [264 × 作成済みレジストリ取得項目数]
 + [297 × システム構成にあるホスト数]
 + [ソフトウェアインベントリ容量] ※1
 + [35 × JP1/NETM/DM 未導入ホスト数]
 + [14 × ホスト探索の条件設定数]
 + [14 × ホスト探索設定でのコミュニティ名指定数×ホスト探索の条件設定数]
 + [27 × ホスト探索で探索されるホスト数]
 + [68 × ソフトウェア稼働監視ポリシー数]
 + [101 × (ソフトウェア稼働監視ポリシー数×7 ※2)]
 + [75 × 監視対象のプログラム数]
 + [377 × 稼働時間取得対象のプログラム数]
 + [347 × ソフトウェア稼働監視の許可情報数]

+ [331 × 稼働監視ポリシーで設定したフィルタリングの条件数]
 + [68 × Web アクセスログのフィルタリング条件数]
 + [68 × USB 接続メディアアクセス抑止除外条件数]
 + [68 × 10000 ※³]
 + [88 × ソフトウェア稼働監視履歴の情報数] ※⁴
 + [109 × 取得した稼働時間の情報数] ※⁵
 + [305 × (ドメイン数 + OU 数 + グループ数 + コンピュータ数 + ユーザ数)]
 + [36 × ((OU 数 × OU から取得する項目数) + (グループ数 × グループから取得する項目数) + (コンピュータ数 × コンピュータから取得する項目数) + (ユーザ数 × ユーザから取得する項目数))] + [25 × (OU から取得する項目数 + グループから取得する項目数 + コンピュータから取得する項目数 + ユーザから取得する項目数)]
 + [38 × ドメイン数]
 + [69 × グループに所属するメンバ数]}

注※1 ソフトウェアインベントリ容量

= (ソフトウェアインベントリ辞書の容量)
 + (クライアントのソフトウェアインベントリを取得した場合の容量)
 + (削除ソフトウェア管理テーブルの容量)

 = (292 × 検索結果ファイル数)
 + (331 × 検索するあて先数 × 検索結果ファイル数)
 + (292 × 削除管理するソフトウェア数)

注※2 デバイス種別数

注※3 抑止履歴を保存する最大イベント数

注※4 ソフトウェア稼働監視履歴の情報数 =
 ソフトウェアの稼働監視の対象となるクライアントの台数
 × 1 クライアント当たりの 1 日に取得する稼働情報量
 × 稼働情報の保存日数

注※5 取得した稼働時間の情報数 =
 220 × クライアント数 × 稼働時間取得対象のプログラム数

(4) 一時表領域

通常、ユーザ表領域の 60% の大きさです。

(5) ソフトウェア稼働監視履歴表領域

ソフトウェア稼働監視履歴表領域 (単位: バイト) =
 [1861 × ソフトウェア稼働監視履歴の情報数] ※¹
 + [80 × 取得した稼働時間の情報数] ※²

注※1 ソフトウェア稼働監視履歴の情報数 =
 ソフトウェアの稼働監視の対象となるクライアントの台数
 × 1 クライアント当たりの 1 日に取得する稼働情報量
 × 稼働情報の保存日数

注※2 取得した稼働時間の情報数 =

220 × クライアント数 × 稼働時間取得対象のプログラム数

仮想化環境のクライアントの場合は、ログオンユーザ数に比例して取得する情報数が増加します。そのため、「クライアント数」には想定するログインユーザ数を加算してください。

なお、JP1/NETM/DM が提供する dcmmmonrst コマンドを使用すると、セットアップで指定した保存日数を超えた稼働情報もデータベースに格納できます。「稼働情報の保存日数」は、dcmmmonrst コマンドでデータベースに格納する稼働情報の日数も考慮して計算してください。

(6) 更新プログラム管理表領域

更新プログラム管理表領域（単位：バイト）＝
 [939 × パッチ情報数]
 + [4024433 × ダウンロード済みのパッチ数^{※1}]
 + [3403 × インストールスクリプト数]
 + 280^{※2}

注※1 OS の Service Pack は除きます。

注※2 パッチ管理情報

5.4.4 Asset Information Manager Limited のデータベース容量の見積もり

「Asset Information Manager Limited」のデータベースに必要なディスク容量を見積もるための算出式を次に示します。算出結果に小数が含まれる場合は、小数点以下を切り上げてください。

データベースの容量（単位：キロバイト）＝（Σ（使用する情報のサイズ × 登録数）＋ 30720）× 1.4 × 1.5

「Asset Information Manager Limited」で使用する情報と、各情報のサイズおよびデフォルトの登録数を次の表に示します。

使用する情報	サイズ（単位：キロバイト）	デフォルトの登録数
ハードウェア資産情報	51.7 ^{※1}	1,000
インストールソフトウェアリスト	0.4	200
パッチリスト	0.2	100
IP グループ情報	0.8	300
IP アドレス管理情報 ^{※2}	0.3	2,000
設置場所情報 ^{※3}	1.2	100
ユーザ管理情報 ^{※3}	0.8	1,000
部署情報	1.0	200
権限管理情報 ^{※3}	0.4	100
変更履歴	0.8	3,000
ソフトウェア変更履歴	0.4	2,000
操作ログ集計に使用する検索パターン数	—	15
操作ログ集計結果保持日数	—	7

(凡例) —: 値なし

注※ 1

ハードウェア資産情報のサイズは、次の情報が含まれることを想定した概算値です。1 件当たりのサイズを括弧で示します。

- ・ 1 件の資産情報 (2.7 キロバイト)
- ・ 1 件のハードウェア資産情報 (1.4 キロバイト)
- ・ 3 件のネットワーク情報 (0.6 キロバイト)
- ・ 20 件の移管履歴 (1.2 キロバイト)
- ・ 60 件のインストールソフトウェア情報 (0.3 キロバイト)
- ・ 10 件のパッチ情報 (0.1 キロバイト)
- ・ 1 件のウィルス定義情報 (0.5 キロバイト)
- ・ 1 件のコンポーネント情報 (0.3 キロバイト)
- ・ 1 件のインベントリ情報 (2.0 キロバイト)

注※ 2

IP アドレス管理情報は、IP グループ情報で登録したアドレスの範囲で利用できる IP アドレスの総数分必要になります。

注※ 3

操作ログを集計する場合の容量計算では、計算不要です。

操作ログを集計する場合、次のデータ量が必要になります。

操作ログ集計に必要なデータ量 (単位: キロバイト) =
(集計に使用する検索パターン数 × 集計結果保持日数 × 部署数) × 0.4

6

JP1/NETM/DM システムの環境設定

この章では、JP1/NETM/DM を運用するためのネットワーク環境の設定や、効率良く運用するための環境設定について説明します。

-
- 6.1 ネットワーク環境の検討
 - 6.2 マルチキャスト配布をするための設定
 - 6.3 クライアント制御を利用するための設定
 - 6.4 中継システムの動作環境について
 - 6.5 クライアントの動作環境について
 - 6.6 ダイアルアップ接続の設定
-

6.1 ネットワーク環境の検討

JP1/NETM/DM で使用するネットワーク環境について説明します。また、ファイアウォールを使用したシステムや複数 LAN 接続環境で、JP1/NETM/DM を使用する場合に必要な設定について説明します。

6.1.1 JP1/NETM/DM のネットワーク環境

JP1/NETM/DM システムでは、TCP/IP プロトコルだけを使用しています。そのため、Windows NT Server や NetWare などの特定のネットワーク OS に依存しません。複数のネットワーク OS やクライアント側の通信プログラム（TCP/IP プロトコルスタック）が混在する環境でも利用できます。

Windows で JP1/NETM/DM Client（クライアント）を使用する場合は、Windows にバンドルされている TCP/IP プロトコルスタックを使用してください。

ホスト名の管理には WINS または DNS のどちらでも利用できます。ただし、1 台のネームサーバですべてのクライアントが管理されるようなシステムはお勧めできません。このようなシステムは名前解決のための問い合わせが 1 台のネームサーバに集中し、システムの性能を著しく低下させる場合があります。このような場合は、hosts ファイルで名前を管理する方が、ネットワークの負荷を軽減できます。

6.1.2 ホストを識別する運用キーの決定

JP1/NETM/DM を使用するネットワークで、ホストを識別するキーを決定する必要があります。キーには次の 2 種類があります。

● ホスト識別子

ホスト識別子は、JP1/NETM/DM システム内で一意な値であり、各クライアントを識別するキー情報です。そのため、ホスト識別子は、次に説明するノード識別キーに比べて、ネットワーク構成の変化による影響を受けません。ホスト識別子は各クライアントのインストール時に生成され、クライアントのホスト識別子管理ファイルに保管されます。

● ノード識別キー

ノード識別キーには、ホスト名または IP アドレスが使用できます。どちらで管理するかはセットアップ時に選択します。両方を混在して使用することはできないので、JP1/NETM/DM の運用を開始する前に、どちらを使用するか決めておいてください。

使用するノード識別キーを運用の途中で変更することもできますが、変更の際に一部の情報を削除する必要があるため、お勧めしません。詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「4.2.8(2) キー項目を変更する場合の注意事項」を参照してください。

JP1/NETM/DM ホストを識別する運用キーの決定のため、次の項目を検討してください。

- ホスト識別子を使用するかどうか
- ノード識別キーとして、ホスト名と IP アドレスのどちらを使用するか

(1) ホスト識別子の使用の検討

次のようなシステムでは、ホスト識別子によるネットワーク管理をお勧めします。

- 複数のドメインを統合したシステム内に、同じホスト名や IP アドレスが存在する場合
- クライアントの移設など、ネットワーク構成が頻繁に変更される環境の場合

ホスト識別子を使用するかどうかは、マネージャのセットアップで「システム構成情報を自動反映する」

チェックボックスをオンにしておく必要があります。

(2) ノード識別キーの選択

JP1/NETM/DM を使用するネットワークで、ノード（ホスト）を管理するときに使用する名称を**ノード識別キー**と呼びます。ノード識別キーとして、ホスト名または IP アドレスが使用できます。

ホスト名と IP アドレスを混在して使用することはできないため、運用を開始する前に、どちらのノード識別キーを使用するかを決めておく必要があります。なお、配布管理システムを階層化したシステムでは、システム全体でノード識別キーを統一する必要はありません。中継マネージャが管理するシステム内でノード識別キーを統一してください。

(a) ホスト名で JP1/NETM/DM のノードを管理する場合

次に示すシステムでは、ホスト名を使用してノードを管理してください。

- ファイアウォールを設置しているシステム
- DHCP を使用しているシステム

ホスト名は、マニュアル「構築ガイド」の「8.1.2 JP1/NETM/DM でのホスト名の付け方」で示す規則に従って付けてください。

(b) IP アドレスで JP1/NETM/DM のノードを管理する場合

ネットワーク内のノードをホスト名で管理しにくいシステムでは、IP アドレスを使用してノードを管理できます。IP アドレスでノードを管理する場合、中継システムとクライアントは、hosts ファイルなど名称解決のための定義は不要ですが、中継マネージャは定義する必要があります。

6.1.3 ホスト識別子を使ったネットワーク管理

ノード識別キーに加えて、ホスト識別子でネットワークを管理できます。ホスト識別子の使用は、マネージャのセットアップで設定します。このマネージャ配下の中継システムおよびクライアントがホスト識別子で管理される対象になります。

(1) ホスト識別子を使用するメリット

ホスト識別子を使うと次のメリットがあります。

- システム内でホストを一意に管理できる情報であるため、複数のドメインで構成されたシステム内で同じホスト名のホストが存在しても、別ホストとして識別できます。
- ノード識別キーを使ったネットワーク管理では、クライアントを移設すると、ホスト名や IP アドレスが変更されるため、同一のクライアントとして認識されません。ホスト識別子を使うと、クライアントの移設前の資産情報を移設先で引き継ぐことができます。

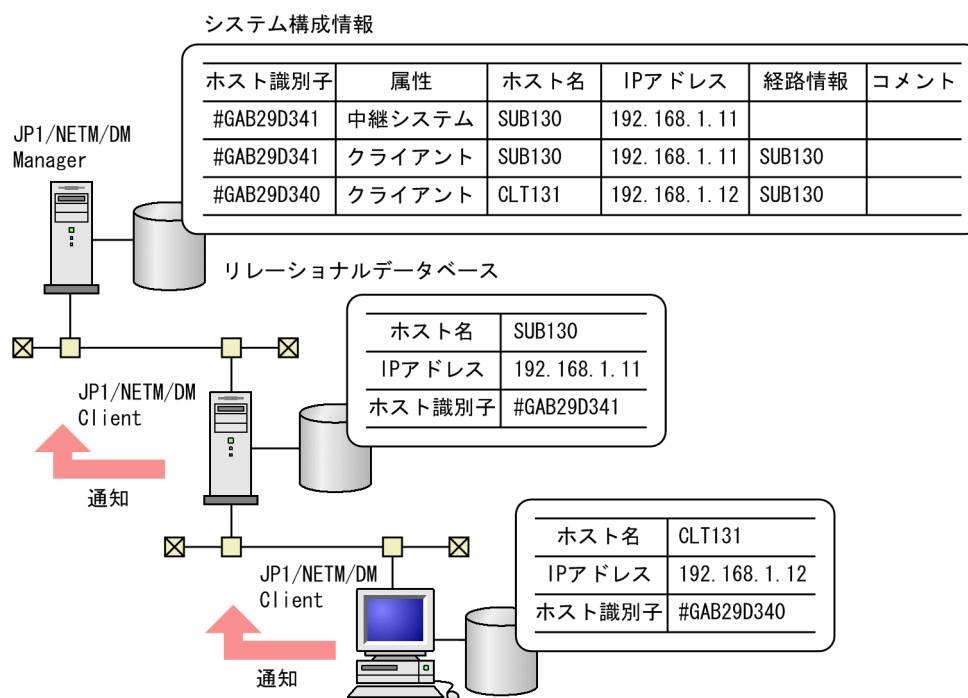
(2) ホスト識別子の登録方法

ホスト識別子は各クライアントのインストール時に生成されます。生成されたホスト識別子はホスト識別子管理ファイルに保管されます。クライアントの再インストール時にホスト識別子管理ファイルがある場合は、ホスト識別子は生成されません。

生成されたホスト識別子は、上位システムへ登録されます。登録を有効にするには、JP1/NETM/DM Manager のセットアップで、[運用キー] パネルの「ホスト識別子の使用」を「する」に設定します。

次の図に示すように、ホスト識別子が上位システムへ自動登録されます。

図 6-1 ホスト識別子の自動登録



(3) ホスト識別子の自動登録の契機

ホスト識別子が上位システムへ自動登録される契機を、システム構成情報の自動登録の設定別に次の表に示します。

表 6-1 ホスト識別子が上位システムへ自動登録される契機

システム構成情報の自動登録	自動登録の契機
する	- インストール時 - セットアップで接続サーバの変更時 - ホスト名、IP アドレス、またはホスト識別子の変更時 - セットアップ内容の登録実行時 - ホスト識別子が上位システムで未登録の場合に上位システムとの接続確立時
しない	上位システムとの接続確立時（上位システムにホスト識別子が未登録、またはホスト識別子の変更後）

(4) ホスト識別子を使用する場合の注意事項

配布管理システムを階層化したシステムで、ホスト識別子をサポートしていないバージョンの JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップして、ホスト識別子を使用する場合、上位の JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップしたあと、下位の JP1/NETM/DM Manager をバージョンアップする必要があります。

6.1.4 TCP/IP 環境の設定

JP1/NETM/DM をインストールする前に、TCP/IP の環境を整えておく必要があります。必要な作業は次の二つです。

- ホスト名と IP アドレスの定義

- ポート番号 (services) の定義

ノード識別キーとして IP アドレスを使用する場合、中継システムとクライアントはホスト名を定義する必要はありませんが、中継マネージャはホスト名を定義する必要があります。

ポート番号は、インストールする前に services ファイルで定義するほかに、セットアップ時にも定義できます。services ファイルの定義とセットアップ時の定義が異なる場合は、services ファイルの定義が優先されます。

(1) ホスト名と IP アドレスの定義

事前にユーザネットワークでホスト名と IP アドレスを定義しておく必要があります。

ノード識別キーとして、ホスト名を使用する場合、配布管理システムのウィンドウ（[システム構成] や [あて先] ウィンドウ）では、ユーザネットワークで定義したホスト名を使用します。配布管理システムのウィンドウでホスト名を変更したときは、ユーザネットワークのホスト名の定義も変更してください。

JP1/NETM/DM Manager では、クライアントを識別するために TCP/IP のホスト名を使っています。そのため、JP1/NETM/DM Manager を導入する PC で、クライアントのホスト名から IP アドレスを決定できなければなりません。

ホスト名と IP アドレスを定義したり、配布管理システムでクライアントのホスト名から IP アドレスを決定したりするには、次の三つの方法があります。

- DHCP と WINS を利用する。
- DNS を利用する。
- hosts ファイルを編集する。

次にそれぞれの方法について説明します。

(a) DHCP と WINS を利用する

DHCP を使うと動的にクライアントの IP アドレスが決定されるため、IP アドレスの割り当て、保守作業を軽減できます。ただし、JP1/NETM/DM システムでは、動的に変更される IP アドレスをノード識別キーとして利用できないため、DHCP を使う場合には、ノード識別キーとしてホスト名を使用してください。

また、WINS を使って各 PC のホスト名を管理することで、各 PC でホスト名の定義をする必要がなくなります。サブネットワークを移動した PC に DHCP によって新しい IP アドレスが動的に割り当てられた場合も、変更に応じて WINS データベースが自動的に更新されるため、手動で定義を変更する必要はありません。

クライアント PC がシャットダウンすると、WINS 上の情報が解放されるため、JP1/NETM/DM システムでは、クライアントのホスト名から IP アドレスを決定できなくなり、ジョブがエラーとなることがありますので、注意してください。DHCP および WINS の設定方法は、Windows のヘルプを参照してください。

(b) DNS を利用する

UNIX システムが混在する場合や、インターネットで接続されているホストを接続先にする場合は、DNS を使用します。接続先のクライアントがすべて Windows の場合は、標準で DNS クライアントをサポートしているので、DNS を利用できます。DNS で管理されるホスト名は、JP1/NETM/DM で定義すれば、ドメインを超えてリモートインストールなどのジョブを実行できます。

DNS の設定方法は、Windows のヘルプを参照してください。

DNS を使用する場合の注意事項を次に示します。

- DNS を利用する場合、TCP/IP プロトコルのネットワークソフトウェアを設定する必要があります。コンピュータが属するドメイン名と名前を管理するサーバの IP アドレスを指定してください。
- ホスト名から IP アドレスへの変換、および IP アドレスからホスト名への変換（逆引き）の両方ができるように設定してください。
- hosts ファイルと DNS を併用する場合、名前の解決に DNS を使用するホストの完全修飾ドメイン名（ホスト名のあとにピリオドとドメイン名を表記した名前）を、別のホスト名として hosts ファイルに記述しないでください。
- ネットワークプロバイダに直接接続されたりリモートホストなどは、割り当てられているホスト名が一時的な名称となっていることがあります。このようなホストについては、JP1/NETM/DM では管理できません。

(c) hosts ファイルを編集する

DHCP, WINS, DNS を利用しない場合は、ホストごとに接続先のホスト名を定義します。配布管理システムが動作しているホストでは、接続している中継するシステムまたはクライアントのホスト名と IP アドレスが定義されている必要があります。また、クライアントの動作しているホストでは、配布管理システムのホスト名とその IP アドレスが定義されている必要があります。

ホスト名と IP アドレスを定義するには、次のファイルを編集してください。

Windows NT の場合

Windows ディレクトリ ¥system32¥drivers¥etc¥hosts

(形式)

IP アドレス ホスト名 別名

(例)

192.0.0.1 hostA NetworkA-hostA

192.0.0.2 hostB NetworkA-hostB

Windows Me または Windows 98 の場合

Windows ディレクトリ ¥hosts

(形式)

Windows NT の場合と同様です。

(2) ポート番号 (services) の定義

各サービスのポート番号を設定することもできます。services ファイルが無かった場合は、セットアップでの設定が有効になります。

サービス名「netmdm」に対して、同じポート番号で TCP プロトコルを設定してください。また、サービス名「netmdmclt」に対して TCP プロトコルと UDP プロトコル、サービス名「netmdmw」に対して TCP プロトコルを設定してください。ポート番号の推奨値は、「netmdm」が 30000, 「netmdmclt」が 30002, 「netmdmw」が 30001 です。次のファイルを編集します。

Windows NT の場合

Windows ディレクトリ ¥system32¥drivers¥etc¥services

(形式)

サービス名 ポート番号/プロトコル名 [別名] ※

注※ 別名 ([] で囲まれた部分) は省略できます。

(例)

```
netmdm 30000/tcp
netmdmclt 30002/udp
netmdmclt 30002/tcp
netmdmw 30001/tcp
```

Windows Me または Windows 98 の場合

Windows ディレクトリ ¥services

(形式)

Windows NT の場合と同様です。

なお、その他のポート番号については、「付録 B.1 ポート番号」を参照してください。

(3) JP1/NETM/DM Client (クライアント) を使用する場合

JP1/NETM/DM Client (クライアント) を使用する場合は、次の項目を確認してください。

TCP/IP の確認

[コントロールパネル] - [ネットワーク] を選択して [ネットワークの設定] パネルで、「現在のネットワーク構成」に TCP/IP があることを確認してください。TCP/IP がない場合は、[ネットワークの設定] パネルの [追加] ボタンをクリックして、TCP/IP を追加してください。

次に [ネットワークの設定] パネルで「TCP/IP」を選択して、[プロパティ] ボタンをクリックしてください。[TCP/IP のプロパティ] ダイアログボックスが表示されますので、ネットワークに必要な設定がされていることを確認してください。

通信環境ファイルの設定

Windows ディレクトリ (デフォルトでは「windows」) 下に、hosts ファイルおよび services ファイルがあります。hosts ファイルには、接続先の上位ホスト名とその IP アドレスを定義してください。services ファイルには、クライアントと配布管理システムで同じサービス名を定義してください。

6.1.5 ファイアウォール環境での JP1/NETM/DM の運用

JP1/NETM/DM は、ファイアウォールを使用しているシステムでも、セキュリティのレベルを下げることなく運用できます。例えば、配布管理システムが設置された配布拠点と中継システムが設置された各部門のネットワークが、それぞれ、ファイアウォールで管理されていても、配布管理システムから中継システムへソフトウェアを配布できます。

ここでは、ファイアウォールを使用した環境で、JP1/NETM/DM を運用する方法について説明します。

なお、ファイアウォールで HTTP が使用できるように設定されている場合、インターネットオプションを使用すると、ここで説明しているファイアウォールの設定は不要になります。ただし「(5) ファイアウォールを使用した場合の注意事項」については、インターネットオプションを使用する場合にも注意してください。インターネットオプションについては、マニュアル「構築ガイド」の「付録 E インターネットオプションを使った JP1/NETM/DM の導入」を参照してください。

(1) 使用できるファイアウォール

JP1/NETM/DM で使用できるファイアウォールには、次の方式があります。

- パケットフィルタリング方式
- アプリケーションゲートウェイ方式

(a) パケットフィルタリング方式ファイアウォール

設定によってファイアウォールを通過するパケットを制限する、ファイアウォール実現方式の一つです。代表的な製品は、Firewall-1 です。

パケットフィルタリング方式のファイアウォールの場合は、該当するノードの IP アドレスとポート番号を設定することで、JP1/NETM/DM が使用できるようになります。

(b) アプリケーションゲートウェイ方式ファイアウォール

パケットの中継を禁止し、アプリケーションゲートウェイでアクセスを制御する、ファイアウォール実現方式の一つです。代表的な製品は、Gauntlet です。

アプリケーションゲートウェイ方式のファイアウォールの場合は、ゲートウェイでアプリケーションごとにアクセスを制御するので、JP1/NETM/DM をアクセス可能なアプリケーションに設定する必要があります。

Gauntlet の場合は、仮想プライベートネットワーク（VPN）機能を使用することによって、JP1/NETM/DM をアクセス可能なアプリケーションにします。

(2) NAT 機能について

NAT 機能とは、外部ネットワークから内部ネットワークのアドレスが見えないように、また内部ネットワークのアドレスが外部に漏れないようにするための機能です。

アドレス変換の方式には、次の 2 種類があります。

- 固定アドレス割り当て方式
- 動的アドレス割り当て方式

JP1/NETM/DM で使用できるのは、「固定アドレス割り当て方式（STATIC モード）」だけです。

(3) JP1/NETM/DM で使用するポート番号

ファイアウォール環境で JP1/NETM/DM を使用する場合、ファイアウォールにポート番号を設定する必要があります。

次に JP1/NETM/DM で使用するポート番号を示します。

表 6-2 JP1/NETM/DM で使用するポート番号

通信区間	ポート番号	プロトコル	発信側情報	着信側情報
マネージャ / 中継システム間	30002 (udp/tcp を選択※ ¹⁾)	udp	マネージャ：Ephemeral	中継システム：30002
			中継システム：Ephemeral	マネージャ：30002
		tcp	マネージャ：Ephemeral	中継システム：30002
			中継システム：30002	マネージャ：Ephemeral
	30000	tcp	マネージャ：30000	中継システム：Ephemeral
			中継システム：Ephemeral	マネージャ：30000

通信区間	ポート番号	プロトコル	発信側情報	着信側情報
中継システム / クライアント間	30002 (udp/tcp を選択※ ¹⁾)	udp	中継システム：Ephemeral	クライアント：30002
			クライアント：Ephemeral	中継システム：30002
		tcp	中継システム：Ephemeral	クライアント：30002
			クライアント：30002	中継システム：Ephemeral
	30001	tcp	中継システム：30001	クライアント：Ephemeral
			クライアント：Ephemeral	中継システム：30001
マネージャ / クライアント間	30002 (udp/tcp を選択※ ¹⁾)	udp	マネージャ：Ephemeral	クライアント：30002
			クライアント：Ephemeral	マネージャ：30002
		tcp	マネージャ：Ephemeral	クライアント：30002
			クライアント：30002	マネージャ：Ephemeral
	30000	tcp	マネージャ：30000	クライアント：Ephemeral
			クライアント：Ephemeral	マネージャ：30000
サーバ本体機能 / リモートインストールマネージャ間 ※ 2	30001	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：30001
	30000	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：30000

注 Ephemeral ポートは、通常 1024 ～ 5000 の中から TCP/IP の自動割り当て範囲内の空きポート番号となります。

注※ 1 JP1/NETM/DM Manager の設定によって udp または tcp のどちらかを選択します。

注※ 2 「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」を別の PC にインストールした場合が該当します。

(4) Embedded RDB を使用している場合に必要な設定

Embedded RDB を使用している場合に、「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」を別の PC にインストールしたとき、これらの通信には次の表に示すポートが使用されます。

表 6-3 「サーバ本体機能」と「リモートインストールマネージャ」間の通信で使用されるポート番号
(Embedded RDB を使用している場合)

通信区間	ポート番号	プロトコル	発信側情報	着信側情報
サーバ本体機能 / リモートインストールマネージャ間	30000	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：30000
	30001	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：30001
	30008	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：30008
	Ephemeral (データベースのクライアント接続)	tcp	リモートインストールマネージャ：Ephemeral	サーバ本体機能：Ephemeral
		tcp	サーバ本体機能：Ephemeral	リモートインストールマネージャ：Ephemeral

注 Ephemeral ポートは、通常 1024 ～ 5000 の中から TCP/IP の自動割り当て範囲内の空きポート番号となります。

ファイアウォールを挟んだ環境では、着信側にファイアウォールの通過を設定する必要があります。発信側でのポート設定は不要です。ファイアウォールの通過の設定方法を次に説明します。

(a) 「サーバ本体機能」をインストールした PC 側にファイアウォールがある場合の設定

「サーバ本体機能」をインストールした PC 側にファイアウォールがある場合、次に示すポートはファイアウォールを通過させる必要があります。

● サーバ本体機能とリモートインストールマネージャ間の通信用ポート

30000 と 30001 です。

● データベース接続用のポート

セットアップの [データベース環境] パネルで設定したポート番号です。デフォルトは 30008 です。

● データベースのクライアント接続用ポート

デフォルトでは OS が自動でポート番号を割り当てます。そのため、使用するポート番号を固定してから、ファイアウォールの通過を設定する必要があります。

データベースのクライアント接続用ポートのポート番号を固定する手順を次に示します。

1. [コントロールパネル] の [管理ツール] - [サービス] で、「Remote Install Server」サービスを停止する。
2. JP1/NETM/DM Manager のインストール先ディレクトリ %BIN に格納されている netmdb_stop.bat コマンドを実行してデータベースを停止する。
netmdb_stop.bat コマンドの終了時は、キー入力待ちの状態になります。キー入力なしでコマンドを終了させたい場合は、オプションに「/nopause」を指定してコマンドを実行してください。
3. JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ %NETMDB%conf に格納されている pdsys ファイルをテキストエディタで開く。
4. 「#set pd_service_port = 30009」の先頭の「#」を削除する。
デフォルトのポート番号は 30009 です。
使用するポート番号を変更する場合は、「30009」の部分を変更してください。
5. JP1/NETM/DM Manager のインストール先ディレクトリ %BIN に格納されている netmdb_start.bat を実行してデータベースを開始する。
netmdb_start.bat コマンドの終了時は、キー入力待ちの状態になります。キー入力なしでコマンドを終了させたい場合は、オプションに「/nopause」を指定してコマンドを実行してください。
6. [コントロールパネル] の [管理ツール] - [サービス] で、「Remote Install Server」サービスを開始する。

この設定をしたあと、JP1/NETM/DM が使用するポート番号は次のようになります。

通信区間	ポート番号	プロトコル	発信側情報	着信側情報
サーバ本体機能 / リモートインストールマネージャ間	Ephemeral (データベースのクライアント接続)	tcp	リモートインストールマネージャ: Ephemeral	サーバ本体機能: 30009 ※

注※ ポート番号に 30009 (デフォルト) を設定した場合。

(b) 「リモートインストールマネージャ」をインストールした PC 側にファイアウォールがある場合の設定

「リモートインストールマネージャ」をインストールした PC 側にファイアウォールがある場合、データベースのクライアントで使用される受信用ポートはファイアウォールを通過させる必要があります。

データベースのクライアントの受信用ポートは、デフォルトでは OS が自動でポート番号を割り当てます。なお、受信用ポートは 10 個以上使用されます。そのため、受信用ポートに使用されるポート番号の範囲

を固定して、ファイアウォールの通過を設定する必要があります。

受信用ポートに使用するポート番号の範囲を固定する手順を次に示します。

1. リモートインストールマネージャおよびその他の JP1/NETM/DM アプリケーションを停止する。
2. JP1/NETM/DM Manager のインストール先ディレクトリ ¥NETMDBCLT に格納されている HiRDB.ini をテキストエディタで開く。
「サーバ本体機能」もインストールされている場合、HiRDB.ini はインストール先ディレクトリ ¥NETMDB¥CONF¥emb に格納されています。
3. 「PDCLTRCVPORT=」に使用するポート番号の範囲を指定する。
PDCLTRCVPORT= のあとに、使用するポート番号の範囲を「ポート番号・ポート番号」の形式で指定します。
(例) 使用するポート番号の範囲に 10000 ～ 10500 を指定する場合
PDCLTRCVPORT=10000-10500
なお、PDCLTRCVPORT= のあとに何も指定しないか「0」を指定した場合、使用するポート番号の範囲は設定されません。デフォルトでは、使用するポート番号の範囲は設定されていません。
4. リモートインストールマネージャおよびその他の JP1/NETM/DM アプリケーションを起動する。

この設定をしたあと、JP1/NETM/DM が使用するポート番号は次のようになります。

通信区間	ポート番号	プロトコル	発信側情報	着信側情報
サーバ本体機能 / リモートインストールマネージャ間	Ephemeral (データベースのクライアント接続)	tcp	サーバ本体機能: Ephemeral	リモートインストールマネージャ: 10000 ～ 10500 ※

注※ ポート番号の範囲に 10000 ～ 10500 を設定した場合。

データベースのクライアントで使用するポート番号を固定する場合の注意事項を次に示します。

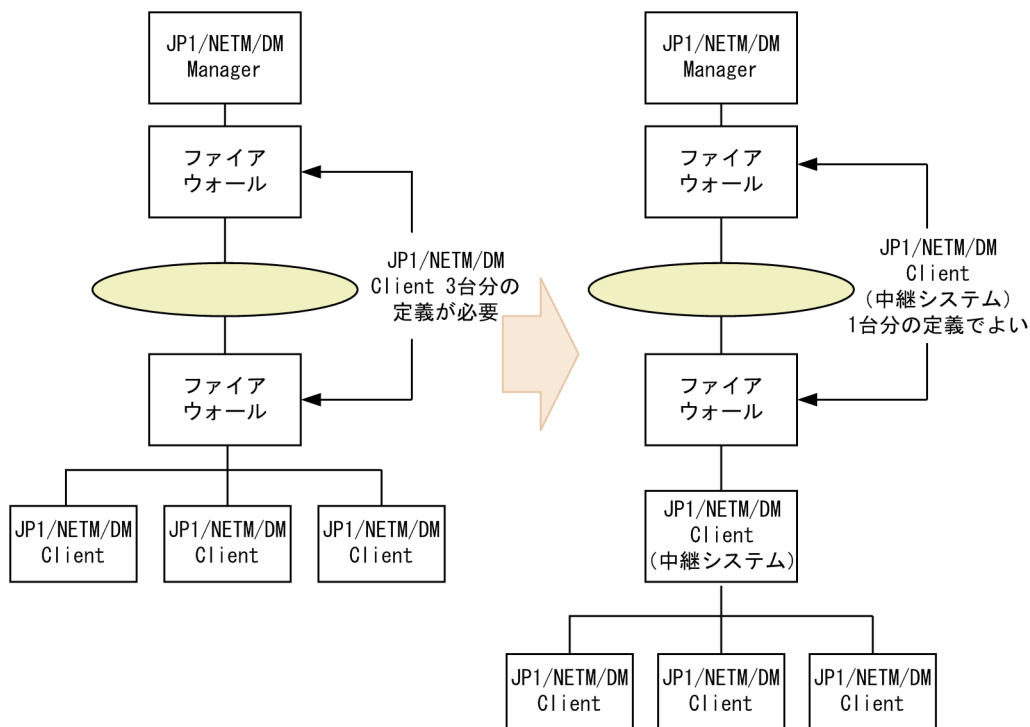
- 指定した範囲に空いているポート番号がない場合はエラーとなります。
データベースのクライアント以外のプログラムが使用するポート番号を含む範囲を指定した場合、ポート番号の割り当てが競合することがあります。使用できるポート番号が不足しないように、ポート番号の範囲を指定してください。
- 指定するポート番号の範囲は、OS が自動で割り当てるポート番号の範囲と重複しないようにしてください。なお、OS が自動で割り当てるポート番号の範囲は、OS ごとに異なります。
- 指定するポート番号の範囲は、実際に使用されるポート番号の数に対して 20% 程度の余裕を持たせてください。余裕がないと、空いているポート番号を探す処理で効率が低下します。
- データベースのクライアント以外のプログラムが使用しているポート番号は、データベースのクライアントでは使用できません。また、データベースのクライアントが使用しているポート番号は、データベースのクライアント以外のプログラムでは使用できません。
指定した範囲内のポート番号を固定して使用するプログラムがある場合、そのプログラムは起動できなくなることがあります。
- データベースのクライアント用にファイアウォールを通過できるよう設定されたポート番号が、データベースのクライアント以外のプログラムから不正に使用されないように、ファイアウォールの内側のプログラムを管理してください。

(5) ファイアウォールを使用した場合の注意事項

ファイアウォールを使用した場合の注意事項を次に示します。

- ファイアウォール内に中継システムを設置するとファイアウォールに定義するノードの数を減らすことができます。

図 6-2 ファイアウォール内に中継システムを設置する場合の構成例



- JP1/NETM/DM では運用キー（ノードを識別するキー情報）にホスト名、IP アドレス、ホスト識別子を使用します。JP1/NETM/DM では、運用キーに対して作成したジョブを引き当てます。このため NAT 機能を使用した場合は、アドレス変換されてしまうため、該当するクライアントに対してジョブが引き当てられなくなります。この現象は、JP1/NETM/DM Manager から見た JP1/NETM/DM Client（クライアント）の IP アドレスと実際の JP1/NETM/DM Client（クライアント）の IP アドレスが NAT 機能によって異なってしまうことに原因があります。したがって、NAT 機能を使用した環境では運用キーに IP アドレスを使用できません。
- JP1/NETM/DM のシステム構成の自動登録機能は、運用キーに関係なく、プロトコルに IP アドレスが付与されます。このためシステム構成の自動登録機能を使用するとプロトコルに付与された IP アドレスが外部に漏れるおそれがあります。ファイアウォールを使用する場合は、システム構成の自動登録機能は使用しない運用をお勧めします。
- IP アドレス運用では、プロトコルに IP アドレスが付与されます。このため、IP アドレス運用を使用するとプロトコルに付与された IP アドレスが外部に漏れるおそれがあります。したがってファイアウォールを使用する場合は、IP アドレス運用を使用しないことをお勧めします。

6.1.6 複数 LAN 接続環境での JP1/NETM/DM の運用

1 台の PC に NIC などの複数のネットワークアダプタが存在する **複数 LAN 接続環境**でも、JP1/NETM/DM を運用できます。

JP1/NETM/DM では、次の 2 種類の複数 LAN 接続環境での運用をサポートしています。

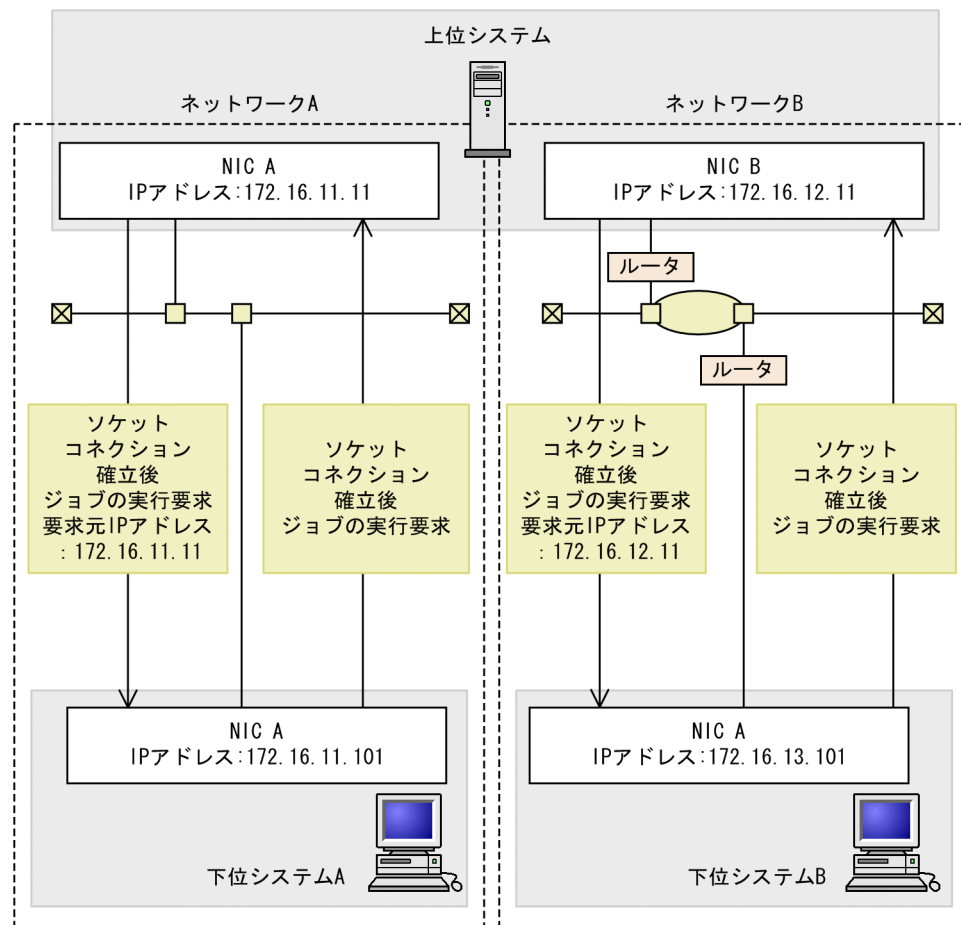
- 複数ネットワークに分かれている環境
- ネットワークが多重化されている環境

次にこれらの環境での JP1/NETM/DM の運用を説明します。

(1) 複数のネットワークに分かれている環境

複数のネットワークに分かれている環境の例を次に示します。

図 6-3 複数のネットワークに分かれている環境の例



複数のネットワークに分かれている環境でも、ジョブの実行要求に、要求元の上位システムの IP アドレスが格納されているため、クライアントは正しいあて先にジョブの受信要求を送信できます。

上位システムからのジョブの実行要求時

下位システムとソケットコネクションが確立できた自システムの IP アドレスを取得し、要求元 IP アドレスとして下位システムに通知します。

下位システムからのジョブの受信要求時

上位システムからのジョブの実行要求時に通知された要求元 IP アドレスに対してソケットコネクションを確立し、ジョブの受信を要求します。

ただし、このような環境で JP1/NETM/DM を運用するには、TCP プロトコルによる接続であることが必要です。次のとおり設定してください。

上位システム

JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のセットアップで、[通信関連] パネルの「TCP プロトコル」ラジオボタンを選択してください。

[通信関連] パネルの詳細については、JP1/NETM/DM Manager の場合はマニュアル「構築ガイド」の「4.2.2 [通信関連] パネル」を、JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合は、マニュアル「構築ガイド」の「5.2.2 [通信関連] パネル」を参照してください。

下位システム

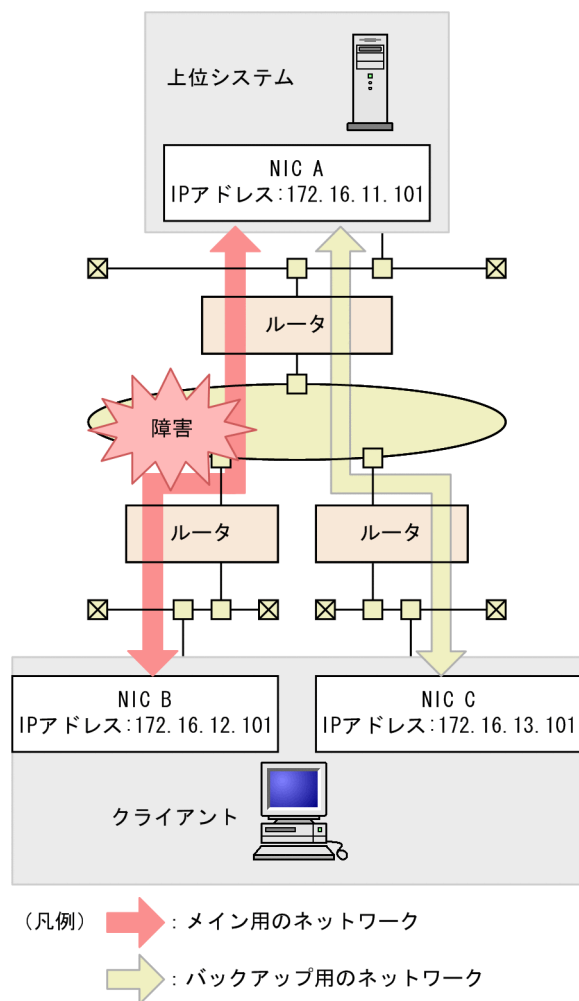
JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップで、[通信関連] パネルの「TCP プロトコル」チェックボックス、および「起動要求プロトコルで受信した IP アドレスで上位システムに接続する」チェックボックスをオンにしてください。

[通信関連] パネルの詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「6.2.6 [通信関連] パネル」を参照してください。

(2) ネットワークが多重化されている環境

ネットワークが多重化されている環境の例を次に示します。

図 6-4 ネットワークが多重化されている環境の例



ネットワークが多重化されている環境の場合、通常はメインのネットワークを使い、トラブルが発生した場合などには、バックアップのネットワークに切り替えて使うという運用が考えられます。また、JP1/

NETM/DM が使用する通信回線は、メインのネットワークだけに限定して使用するという運用も考えられます。

このような運用に対応するには、各 PC のクライアントのセットアップで、ネットワークアダプタの優先順位を設定する必要があります。セットアップの「通信関連」パネルの「複数のネットワークアダプタを設定する」を設定してください。設定方法の詳細については、マニュアル「構築ガイド」の「5.2.1 [接続先] パネル」を参照してください。

6.1.7 ネットワークに負荷を掛けない運用方法

JP1/NETM/DM では、配布するソフトウェアや、さまざまな管理情報を、ネットワークを経由して転送します。このため、より効率的な運用のためには、ネットワークの混み合う時間帯を避けてジョブを実行するなど、ネットワークにできるだけ負荷を掛けない工夫が必要です。JP1/NETM/DM には、セットアップ時にネットワークのトラフィックを調整したり、インストールするソフトウェアを分割して配布したりするなど、ネットワークの負荷を軽減するための幾つかの機能があります。この節では、ネットワークの負荷を小さくして効率良くソフトウェアを配布する方法を紹介します。なお、JP1/NETM/DM でのソフトウェアの配布を効果的に行うためには、配布管理システムだけでなく、クライアント側での設定や操作も必要です。クライアントでのユーザの作業については、マニュアル「運用ガイド 1」の「11. クライアントを操作する」を参照してください。

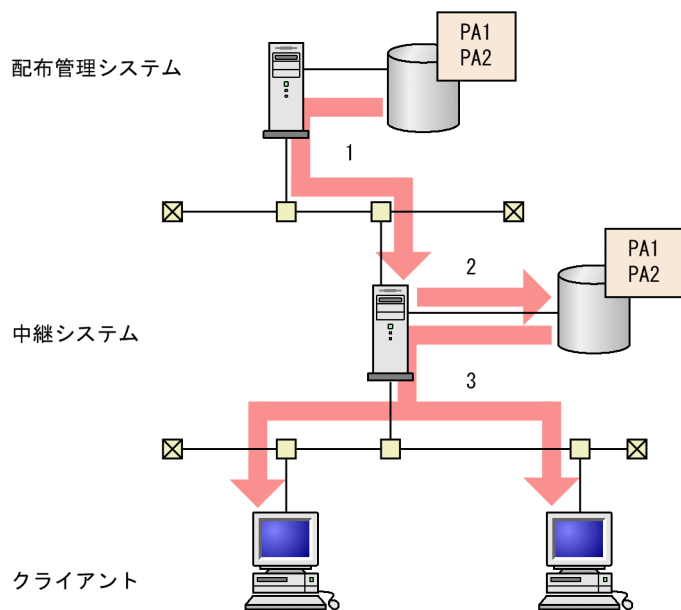
(1) 中継システムの利用

リモートインストール時に、効率的にパッケージを転送するためには、中継システムの役割を理解しておく必要があります。

中継システムは、配布管理システムに直接接続するクライアントの数を減らして負荷を分散させるだけでなく、パッケージのコピーを作成・保管することで、中継システム下のクライアントへ効率的にパッケージを転送します。また、「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブと「パッケージのインストール」ジョブを組み合わせ、2 段階に分けてパッケージを転送できます。

リモートインストール時の中継システムの動作を次の図に示します。

図 6-5 リモートインストール時の中継システムの動作



- 1: パッケージ「PA1」および「PA2」のリモートインストールを実行
- 2: パッケージ「PA1」および「PA2」のコピーを中継システムに作成し、保管
- 3: 中継システムに保管したパッケージをクライアントにインストール

「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブは、中継システムに保管されるため、保管されている間は同一のパッケージであれば配布管理システムから再配布されることはありません。パッケージの保管期限はパッケージング時に指定できます。

(2) 同時に接続するホストの台数の調整

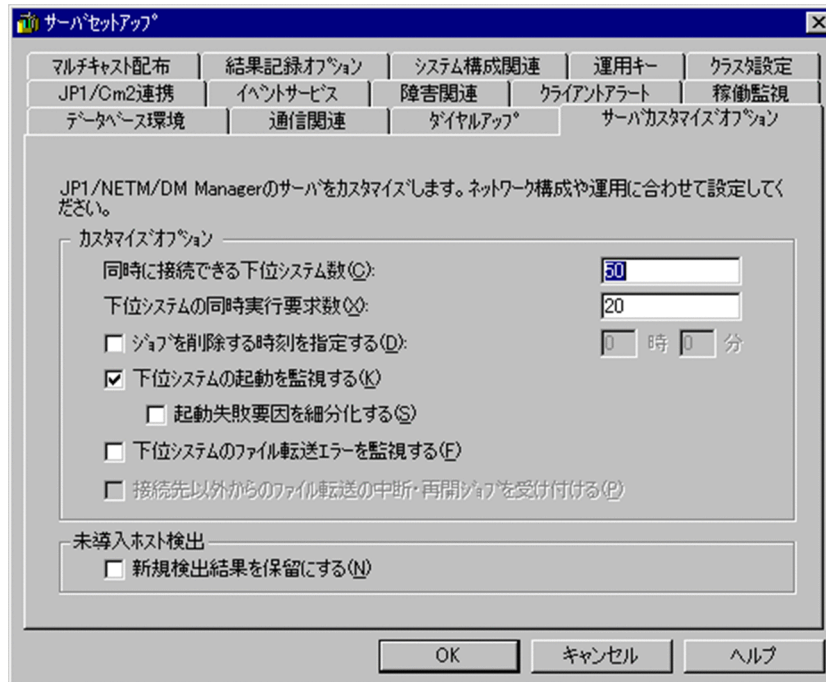
契約回線が少ない場合や、ネットワークに対するトラフィックを掛けられない場合などは、同時に接続するホストの台数をチューニングする必要があります。配布管理システムで、同時に接続するホストの台数を調整するには、次の二つの方法があります。

- セットアップ情報で調整する。
- ジョブ実行時にユーザの運用で調整する。

(a) セットアップ情報で調整する

配布管理システムでは、セットアップ情報で、ネットワークのトラフィックを制御できます。メニューから [セットアップ] を選択してセットアップ画面を起動し、[サーバカスタマイズオプション] パネルを表示してください。中継システムの配布管理システムの場合は、[中継システムカスタマイズオプション] パネルを表示してください。

図 6-6 【サーバカスタマイズオプション】 パネル



同時に接続するホストの台数を調整する項目は「下位システムの同時実行要求数」（中継システムの場合は「中継／クライアントの同時実行要求数」）です。

配布管理システムが、一度に多数のクライアントを対象としてジョブを実行すると、ネットワークの負荷が非常に大きくなります。そこで、「下位システムの同時実行要求数」を設定すると、同時に処理する下位ホストの数を制限できます。例えば、「下位システムの同時実行要求数」を 20 台に設定した場合、300 台のクライアントに対してリモートインストールを実行すると、内部的には、20 台ずつ 15 回に分けてジョブが実行されます。

(b) ユーザの運用で調整する

セットアップ時に、PC の性能、ネットワーク構成、動作環境などを考慮した値を設定しておくことで、ほとんどの場合十分な信頼性を得ることができます。しかし、配布するデータ量が大きい場合には、セットアップで流量を制御しても、ネットワークの負荷が高くなるおそれがあるので、最終的にはユーザの運用によって調整する必要があります。

● ジョブの対象クライアント数の調整

例えば、5 メガバイトのパッケージを 64Kbps の回線で送信する場合、回線効率を 60% とすると、約 18 分掛かります。これが、配布管理システムと中継システム、および中継システムとクライアントの間の接続回線上を並行して流れることになります。この数値を基に、接続回線の負荷を考慮して、一つのジョブで配布対象とするクライアント数を決定してください。

● 同時に接続する中継システム数の調整

配布管理システムに、同時に多数の中継システムが接続しないようにするためには、ジョブを分割して実行することをお勧めします。ユーザに負担を掛ける運用方法ですが、確実にネットワークの負荷を軽減できます。

まず、ネットワークのトラフィックなどを考慮して、配布管理システムに同時に接続する中継システムを決めます。次に、同時に接続する中継システム下のすべてのクライアントを一つのグループとして分類します。ジョブを実行するときは、これらのグループごとに一定の間隔（一つのジョブの処理に掛かる時間）

を空けたスケジュールで実行します。これによって、配布管理システムに、同時に多数の中継システムが接続することを防ぐことができます。

(3) スケジュール配布

リモートインストールのジョブを作成するとき、ジョブの実行日時を指定できます。これがパッケージの転送日時となります。ネットワークが比較的空いている夜間などを指定しておくと、効率良く転送できます。

また、中継システムまでのパッケージの転送と、中継システムからクライアントへの転送を別のジョブで実行すると、配布管理システム－中継システム間、中継システム－クライアント間のパッケージの転送時刻を、別々に設定できます。

転送するデータ量を減らすのではなく、転送時間を工夫することで、ネットワークに掛かる負荷を軽減できます。

なお、配布先の PC が省電力モードの状態のとき、JP1/NETM/DM Client（クライアント）は動作しないため、ソフトウェアの配布が実行されません。配布先の PC に省電力モード対応の PC がある場合、ジョブのスケジュールを指定するときは注意が必要です。

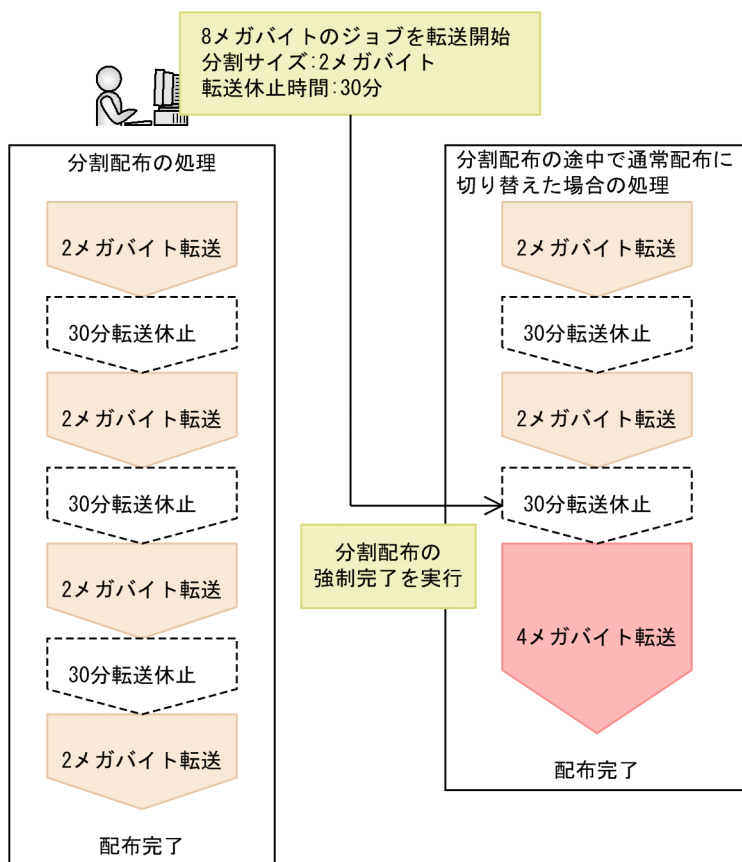
(4) パッケージの分割配布

クライアントにインストールするソフトウェアを一度に配布するのではなく、分割して配布する方法があります。これを**分割配布**と呼びます。分割配布を使用すると次のメリットがあります。

- 大容量のパッケージの配布時に、ネットワークの負荷を軽減して配布できる。
- 分割したパッケージの間には、インターバル（転送休止時間）を置くことができる。
- 配布する経路の途中に中継するシステム（中継マネージャや中継システム）がある場合は、パッケージの分割サイズやインターバルの時間を変更できる。
- 分割配布の途中で配布を完了したい場合は、分割配布の強制完了で未転送のパッケージを一括して転送（通常配布）し、配布を完了できる。

パッケージの分割配布を利用したソフトウェアの配布を次の図に示します。

図 6-7 パッケージの分割配布を利用したソフトウェアの配布



(5) ジョブのマルチキャスト配布

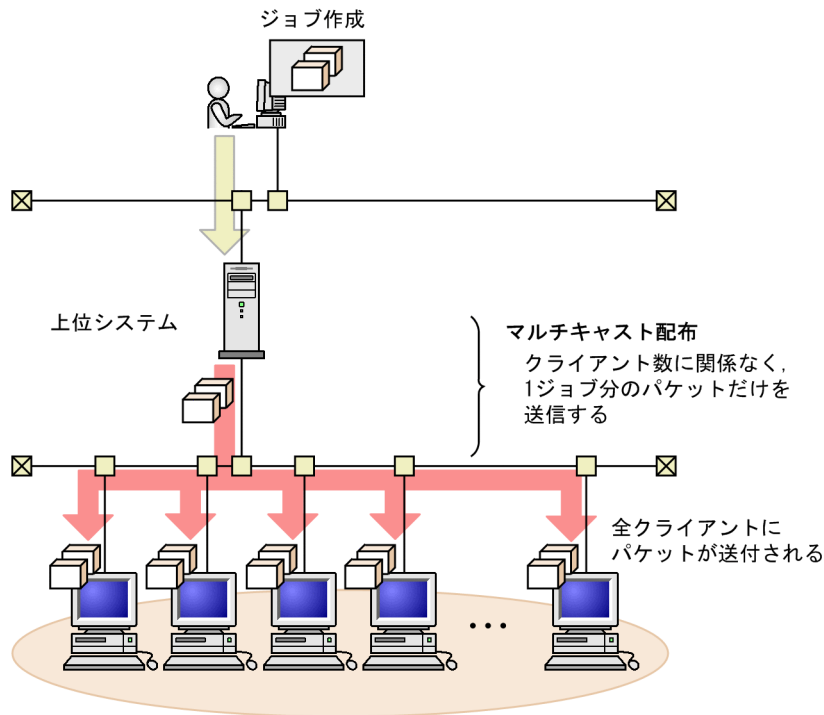
通常のソフトウェアの配布では、クライアント数が増加すると、上位システムから送信するパケット数も増加します。このパケットの送信量を削減するために、上位システムから1ジョブ分のパケットを送信するだけで、指定した多数のクライアントへソフトウェアを配布できる方法があります。これを、**マルチキャスト配布**と呼びます。

ソフトウェアの配布時に、マルチキャスト配布を指定すると、パケットの送信量が削減できます。そのため、配布時間を短縮したり、ネットワークの負荷を軽減したりできます。マルチキャスト配布は、次の場合に効果的です。

- 同時に多数のクライアントにソフトウェアを配布する場合
- 大容量のソフトウェアを配布する場合

マルチキャスト配布を利用したソフトウェアの配布を次の図に示します。マルチキャスト配布は、クライアントと、その接続先の上位システム間だけで有効です。

図 6-8 マルチキャスト配布を利用したソフトウェアの配布



マルチキャスト配布をするためのシステム構成と設定については、「6.2 マルチキャスト配布をするための設定」を参照してください。

(6) ジョブの中断と再開

リモートインストール、またはパッケージ転送中のホストに対して、一時的にジョブの実行を中断できます。例えば、業務停止中に実行する予定のジョブが業務開始までに完了しなかった場合に、実行中のジョブを中断し、業務終了後に再開できます。

また、ジョブの中断中に、特定のジョブだけを中断させないで配布することもできます。例えば、ウィルス定義ファイルを急いで配布したい場合に、ほかの配布ジョブを中断して、ウィルス定義ファイルを先に配布できます。

(a) ジョブの中断と再開の仕組み

ジョブを中断または再開するには、次の方法があります。

- 配布管理システムから中継するシステムに中断または再開を指示する。
- 配布管理システム自身に対して中断または再開を指示する。
- 配布管理システムで `dcmsusp` コマンドを実行する。

`dcmsusp` コマンドについては、マニュアル「運用ガイド 2」の「4.23 dcmsusp.exe (ファイル転送の中断と再開)」を参照してください。

なお、中断できるファイル転送の単位は、下位システムのセットアップで指定した「ファイル転送バッファサイズ」の値です。

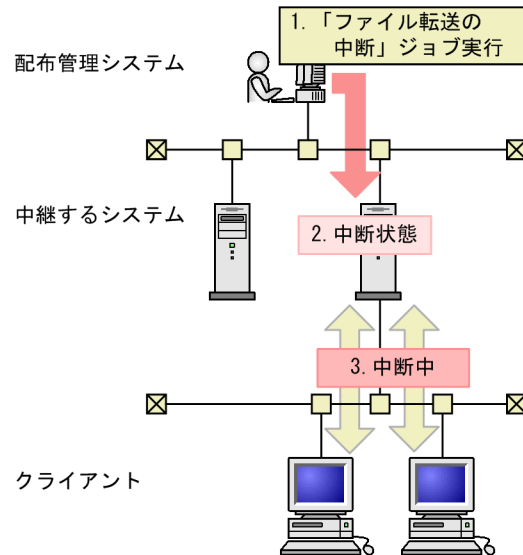
● 配布管理システムから中継するシステムに中断または再開を指示する

配布管理システムから「ファイル転送の中断」ジョブおよび「ファイル転送の再開」ジョブを実行して指示します。これらのジョブのあて先には、ジョブを中断したいホストが直接接続している上位システムを

指定します。

「ファイル転送の中断」ジョブ実行時のシステムの動作を次の図に示します。

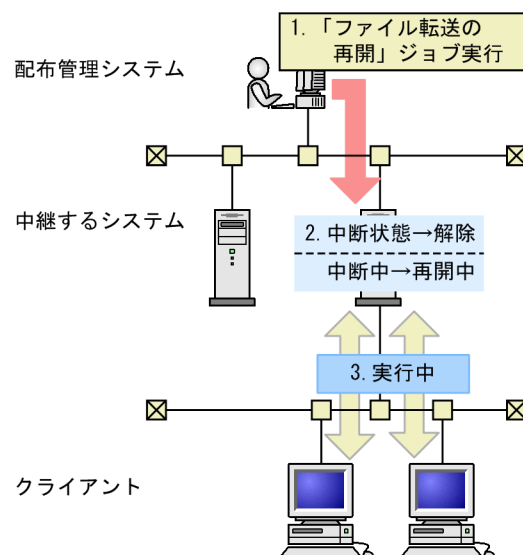
図 6-9 「ファイル転送の中断」ジョブ実行時のシステムの動作



1. 配布管理システムから中継するシステムに対して「ファイル転送の中断」ジョブを実行する。
2. 「ファイル転送の中断」ジョブのあて先の中継するシステムが「中断状態」になる。
3. 中断状態の中継するシステムと、その直下のシステムとの間のファイル転送が中断され、下位システムあてのジョブの実行状態が「中断中」になる。

「ファイル転送の再開」ジョブ実行時のシステムの動作を次の図に示します。

図 6-10 「ファイル転送の再開」ジョブ実行時のシステムの動作



1. 配布管理システムから中断状態の中継するシステムに対して「ファイル転送の再開」ジョブを実行する。
2. 「ファイル転送の再開」ジョブのあて先の中継するシステムで中断状態が解除され、下位システムあて

のジョブの実行状態が「再開中」になる。

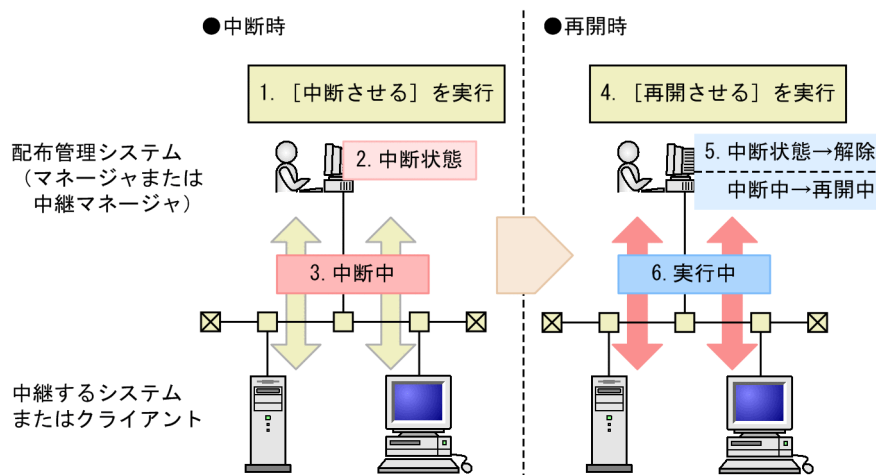
3. 中断されていたファイル転送が再開され、ジョブの実行状態が「実行中」に戻る。

● 配布管理システム自身に対して中断または再開を指示する

リモートインストールマネージャで、自システムに対して中断または再開を指示できます。リモートインストールマネージャから指示する場合は、[実行] メニューの [ファイル転送の中断 / 再開] から [中断させる] または [再開させる] を選択してください。

自システムに対する中断または再開時のシステムの動作を次の図に示します。

図 6-11 自システムに対する中断または再開時のシステムの動作



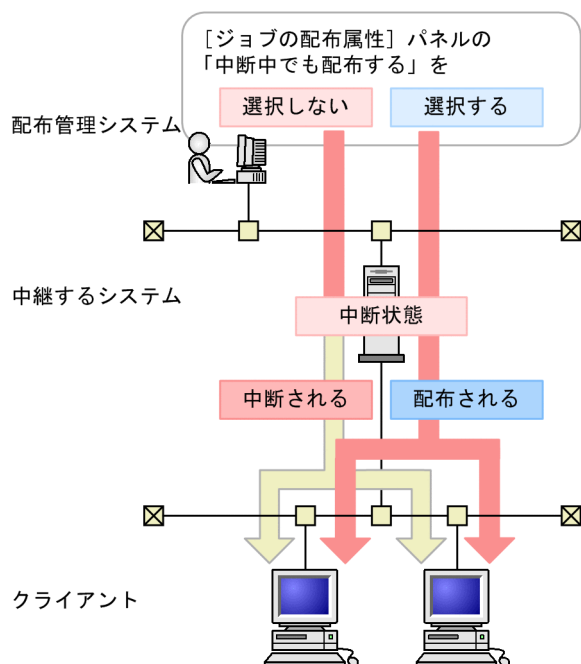
1. リモートインストールマネージャのメニューから [中断させる] を選択する。
2. 自システムが「中断状態」になる。
3. 自システムと直下のシステムとの間のファイル転送が中断され、下位システムあてのジョブの実行状態が「中断中」になる。
4. リモートインストールマネージャのメニューから [再開させる] を選択する。
5. 自システムの中断状態が解除され、下位システムあてのジョブの実行状態が「再開中」になる。
6. 中断されていたファイル転送が再開され、ジョブの実行状態が「実行中」に戻る。

(b) 中断中にジョブを配布する

あて先の直上のシステムが中断状態になっていても、ファイル転送を中断させないでジョブを配布できます。ジョブの作成時に、[ジョブの作成] ダイアログボックスの [ジョブの配布属性] パネルで、「中断中でも配布する」を選択してください。

中断中のジョブの配布を次の図に示します。

図 6-12 中断中のジョブの配布



ジョブの中断時には、システムが中断状態になった時点でその直下のシステムとのファイル転送が中断されますが、「中断中でも配布する」を選択すると、そのジョブのファイル転送が中断されなくなります。

(c) ジョブの中断と再開の適用範囲

ジョブの中断と再開の適用範囲を次に示します。

- 中断できるジョブは次の 3 種類です。
 - ・「パッケージのインストール」ジョブ
 - ・「中継システムまでのパッケージ転送」ジョブ
 - ・「クライアントユーザによるインストール」ジョブ
- ジョブが中断される範囲は、中断状態になった上位システムと、その直下の次に示すシステムとの間です。
 - ・ Windows 版 JP1/NETM/DM 06-72 以降
 - ・ UNIX 版 JP1/NETM/DM 07-00 以降

なお、中断状態になった上位システムと同一 PC 上にクライアントが存在する場合は、同一 PC 上のクライアントへのジョブも中断されます。

- 中断状態の上位システムの直下に、バージョンが 06-72 より前の下位システムが混在していた場合、古いバージョンの下位システムに対しては、ジョブが中断されません。
- 「ファイル転送の中断」および「ファイル転送の再開」ジョブは、JP1/NETM/DM Manager で作成します。
- 「ファイル転送の中断」および「ファイル転送の再開」ジョブは、次に示す表に対して有効です。

バージョン	Windows 版		UNIX 版
	JP1/NETM/DM Manager (中継マネージャ)	JP1/NETM/DM Client (中 継システム)	JP1/NETM/DM Client (中継 システム)
06-72	×	○	×※

バージョン	Windows 版		UNIX 版
	JP1/NETM/DM Manager (中継マネージャ)	JP1/NETM/DM Client (中 継システム)	JP1/NETM/DM Client (中継 システム)
07-00 以降	○	○	○

(凡例) ○：有効 ×：無効（エラーになる）

注※

「ファイル転送の再開」ジョブの場合、無視されますがエラーにはなりません。

- 配布管理システム自身に対する中断と再開の指示は、Windows 版 JP1/NETM/DM Manager 07-00 以降のリモートインストールマネージャで実施できます。

中断中でも配布するには、配布管理システム、中継するシステム、およびクライアントが、すべて JP1/NETM/DM 07-00 以降である必要があります。「中断中でも配布する」指定は、UNIX 版の JP1/NETM/DM SubManager 07-00 以降および UNIX 版の JP1/NETM/DM Client 07-00 以降に対しても有効です。

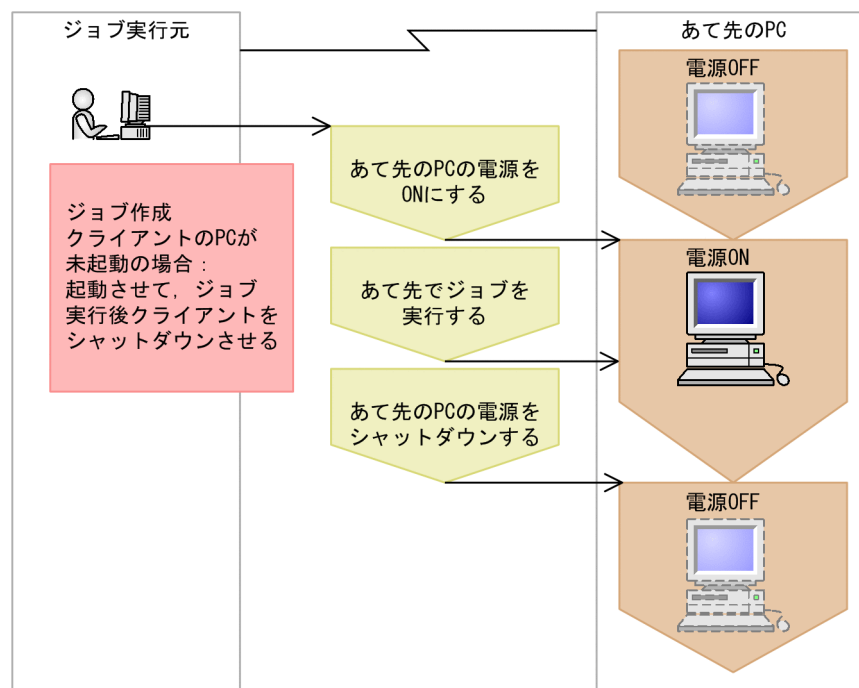
(7) クライアント制御の利用

ネットワーク経由で、手元の PC から離れた場所にある PC を起動したり、シャットダウンしたりする機能があります。この機能を**クライアント制御**と呼びます。この機能を使って、JP1/NETM/DM では、深夜や休日などの電源が入っていない状態の PC に対してソフトウェアをリモートインストールできます。

ただし、この機能を利用するには、PC が AMT または Wake on LAN に対応し、さらに自動シャットダウンに対応していることが必要です。

クライアント制御を利用したリモートインストールの概要を次の図に示します。

図 6-13 クライアント制御を利用したリモートインストール



クライアント制御を利用したリモートインストールの注意事項については、「6.3 クライアント制御を利用するための設定」を参照してください。

(8) オフラインインストールの利用

JP1/NETM/DM Client がインストールされたスタンドアロン PC (**オフラインマシン**) に対して、ネットワークを介さないでソフトウェアをインストール (**オフラインインストール**) できます。

オフラインインストールは、配布管理システムでインストールに必要なファイルを媒体に格納し、その媒体をオフラインマシンに搬送して実行します。

オフラインインストールの実行方法の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「7.7.1 オフラインインストール」を参照してください。

6.2 マルチキャスト配布をするための設定

ジョブ作成時に**マルチキャスト配布**を指定すると、通常の配布方式に比べてデータの送信量を削減できます。そのため、ネットワークの負荷を軽減でき、配布時間を短縮できます。

この節では、マルチキャスト配布の概要およびマルチキャスト配布をするためのシステム構成について説明します。また、実際にマルチキャスト配布をする方法や、マルチキャスト配布時の注意事項についても説明します。

6.2.1 ユニキャスト配布とマルチキャスト配布

JP1/NETM/DM のジョブの配布方式には、ユニキャスト配布とマルチキャスト配布の 2 種類があります。配布方式はジョブごとに設定できます。

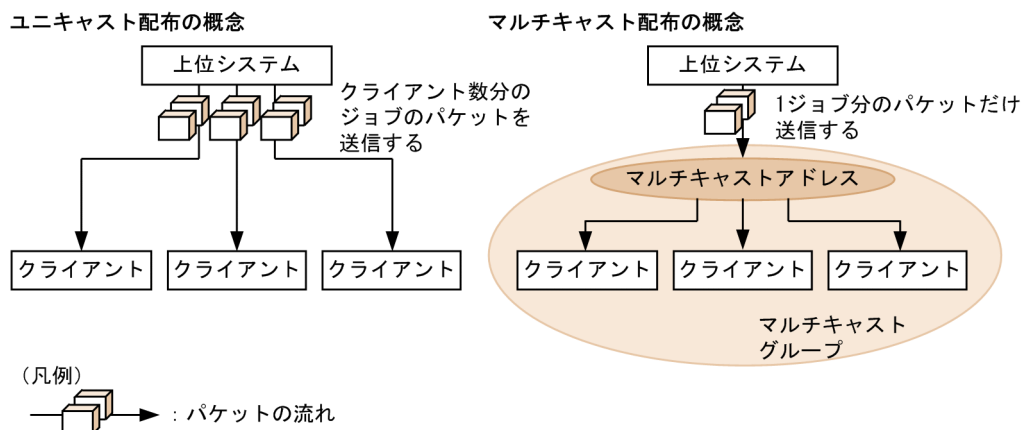
上位システムからクライアントへ 1 対 1 でジョブのパケットを送信する通常の方式を、**ユニキャスト配布**と呼びます。ユニキャスト配布では、上位システムは、送信先のクライアントごとにパケットを送信する必要があります。そのため、パケットの送信数は、クライアント数の増加に対応して増大します。

一方、**マルチキャスト配布**は、IP マルチキャストプロトコルを利用して、特定の多数のクライアントへパケットを送信する方式です。マルチキャスト配布では、上位システムは**マルチキャストグループ**と呼ばれる概念上のグループにパケットを送信します。パケットは、そのグループに所属している各クライアントに配信されます。クライアント数に関係なく、上位システムはマルチキャストグループだけにパケットを送信すればよいので、送信量を削減できます。

マルチキャストグループは、**マルチキャストアドレス**というグループ固有の IP アドレスを持っています。実際には、パケットはこのマルチキャストアドレスに対して送信されます。クライアント側では、セットアップでマルチキャストアドレスを設定し、マルチキャストグループにそのクライアントを登録しておきます。マルチキャストアドレスに対して送信されたパケットは、マルチキャストグループに登録されている全クライアントに配信されます。このとき、重複する経路は 1 パケットだけが流れるため、回線を圧迫することなく効率良く配布できます。

ユニキャスト配布とマルチキャスト配布の概念を、次の図に示します。

図 6-14 ユニキャスト配布とマルチキャスト配布の概念



(1) マルチキャスト配布の対象となるジョブ

JP1/NETM/DM では、「パッケージのインストール」ジョブだけがマルチキャスト配布の対象になります。次のようなジョブにマルチキャスト配布を適用すると、効果的に通信量を削減できます。

- あて先の数が多いジョブ
- 大容量のパッケージを配布するジョブ

ジョブのあて先が少ない場合や、パッケージの容量が小さい場合は、マルチキャスト配布するとかえって効率が悪くなります。その場合は、ジョブ作成時にユニキャスト配布を設定してください。

なお、ジョブ作成時に「マルチキャスト配布」を選択するか「ユニキャスト配布」を選択するかは、ジョブの配布方式の設定であって、ジョブのあて先の設定とは関係ありません。ジョブのあて先が個別のホスト、あて先グループ、ID の場合を問わず、指定したあて先にマルチキャスト方式で配布されます。指定したあて先の中にマルチキャストグループに登録されていないクライアントがあった場合は、そのクライアントにだけユニキャスト方式で配布されます。

(2) マルチキャスト配布が適用される経路

JP1/NETM/DM では、ジョブにマルチキャスト配布を指定すると、クライアントと直接接続する上位システムの間だけマルチキャスト配布方式でパケットが送信されます。ジョブを実行したシステムからクライアントが直接接続する上位システムまでの経路は、ユニキャスト配布になります。

6.2.2 マルチキャスト配布に必要なネットワーク環境と JP1/NETM/DM のバージョン

マルチキャスト配布する場合に必要なネットワーク環境と JP1/NETM/DM のバージョンについて説明します。

(1) ネットワーク環境

マルチキャスト配布するには、次のネットワーク環境が前提となります。

- クライアントが接続する上位システムからクライアントまでの間にルータを設置する場合は、IP マルチキャスト対応のルータを使用し、IP マルチキャストに関しての設定をする必要があります。経路上に IP マルチキャストに対応していないルータがある場合、その先のセグメントにはジョブはユニキャスト配布されます。

(2) JP1/NETM/DM のバージョン

マルチキャスト配布するには、JP1/NETM/DM のバージョンが次の条件を満たす必要があります。

- ジョブを作成する配布管理システム、クライアントの接続先の上位システム、およびクライアントが、すべて Windows 版 JP1/NETM/DM 06-71 以降である。
- 中継するシステム（中継マネージャまたは中継システム）が多階層になっている場合、クライアントの接続先の上位システムより上位に位置する中継するシステムが、次の製品のどれかである。
 - Windows 版 JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM SubManager 06-71 以降、または JP1/NETM/DM Client（中継システム）08-00 以降（マルチキャスト配布をサポートしているバージョン）
 - Windows 版 JP1/NETM/DM SubManager 06-00 ～ 06-53（マルチキャスト配布は未サポート）
 - UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager、または UNIX 版 JP1/NETM/DM Client（中継システム）09-00 以降

6.2.3 マルチキャスト配布をするためのシステム構成

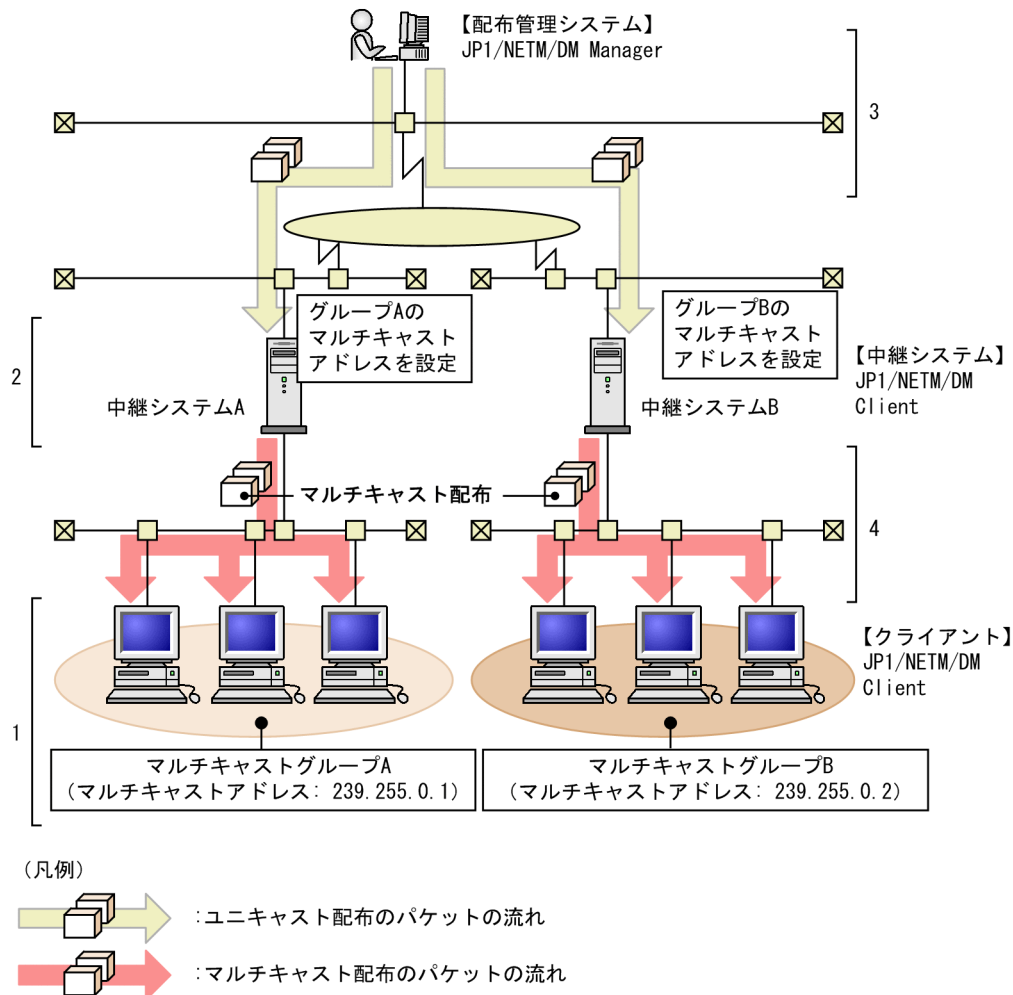
マルチキャスト配布を実現するために、どのようなシステム構成にしたらいかを説明します。また、シ

システム構成中にマルチキャスト配布をサポートしていないバージョンの JP1/NETM/DM 製品が混在した場合、ジョブがどのように配布されるかを説明します。

(1) マルチキャスト配布の標準的なシステム構成

マルチキャスト配布を実現するための標準的なシステム構成と、パケットの流れを次の図に示します。

図 6-15 標準的なマルチキャスト配布のシステム構成とパケットの流れ



配布管理システム、クライアントが接続する上位システム、およびクライアントは、すべて Windows 版 JP1/NETM/DM 06-71 以降である必要があります。

マルチキャストグループは、クライアントが接続する上位システム単位に作成します。そして、各マルチキャストグループには、それぞれ別のマルチキャストアドレスを割り当てます。図 6-15 の例を基に説明します。説明の番号は、図 6-15 中の番号と対応しています。1 と 2 はシステム構成の設定、3 と 4 はジョブの実行によるパケットの流れです。

1. 中継システム A に接続するクライアント群をマルチキャストグループ A、中継システム B に接続するクライアント群をマルチキャストグループ B とします。マルチキャストグループ A のクライアント群には 239.255.0.1 を、マルチキャストグループ B のクライアント群には 239.255.0.2 を、マルチキャストアドレスとして設定します。
2. 中継システム A にマルチキャストグループ A のマルチキャストアドレス (239.255.0.1) を、中継システム B にマルチキャストグループ B のマルチキャストアドレス (239.255.0.2) を設定します。

こうすることで、中継システム A はマルチキャストグループ A のクライアント群へ、中継システム B はマルチキャストグループ B のクライアント群へジョブをマルチキャスト配布できます。

3. 配布管理システムで、「マルチキャスト配布」を指定したジョブを作成し、実行します。
配布管理システムは、各中継システムに 1 ジョブ分ずつパケットを送信します。この例では、中継システムが二つ接続しているので、2 ジョブ分のパケットを送信します（ユニキャスト配布）。中継システム A および中継システム B までは、ユニキャスト配布されます。
4. 中継システム A および中継システム B は、クライアント数に関係なく、1 ジョブ分だけパケットを送信します。各クライアントまでの重複する経路上は、1 ジョブ分のパケットが流れます（マルチキャスト配布）。

同じ構成でジョブをユニキャスト配布した場合は、クライアントが接続する上位システムからは、あて先となるクライアント数だけジョブのパケットが流れます。そのため、4 の経路では、中継システム A および中継システム B からそれぞれ 3 倍のパケットが送信されます。

なお、配布管理システムに直接クライアントを接続している構成でも、ジョブをマルチキャスト配布できます。その場合、配布管理システムに、配布先のマルチキャストグループのマルチキャストアドレスを設定します。

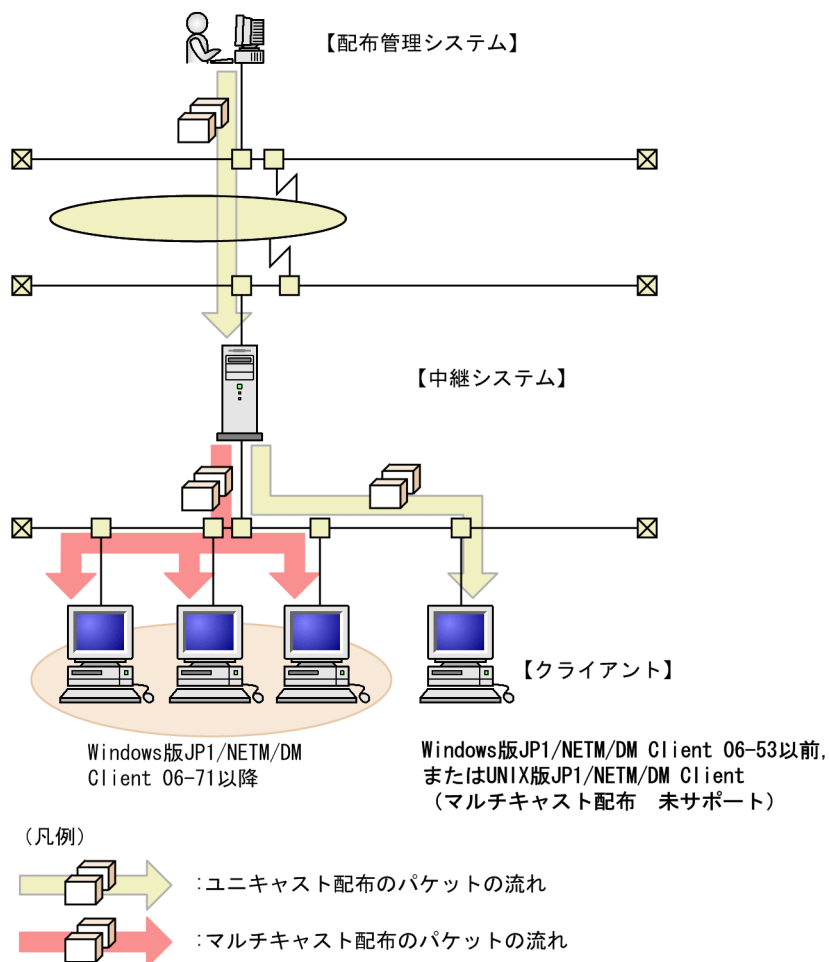
(2) マルチキャスト配布をサポートしていないバージョンが混在したシステム構成

マルチキャスト配布は、Windows 版 JP1/NETM/DM 06-71 以降で実行できます。ここでは、システム構成中に、マルチキャスト配布をサポートしていないバージョンの JP1/NETM/DM 製品（Windows 版 JP1/NETM/DM 06-53 以前または UNIX 版 JP1/NETM/DM）が混在した場合、ジョブがどのように配布されるかを説明します。

クライアントが接続する上位システムがマルチキャスト配布をサポートしていないバージョンの場合、そのシステムからクライアントへはマルチキャスト配布できません。配布管理システムからマルチキャスト配布を指定したジョブが送付されても、ユニキャスト配布されます。

クライアントがマルチキャスト配布をサポートしていないバージョンの場合、そのクライアントに対してはユニキャスト配布になります。システム構成中に、マルチキャスト配布をサポートしていないバージョンのクライアントが混在した場合の、パケットの流れを次の図に示します。

図 6-16 クライアントがマルチキャスト配布をサポートしていない場合



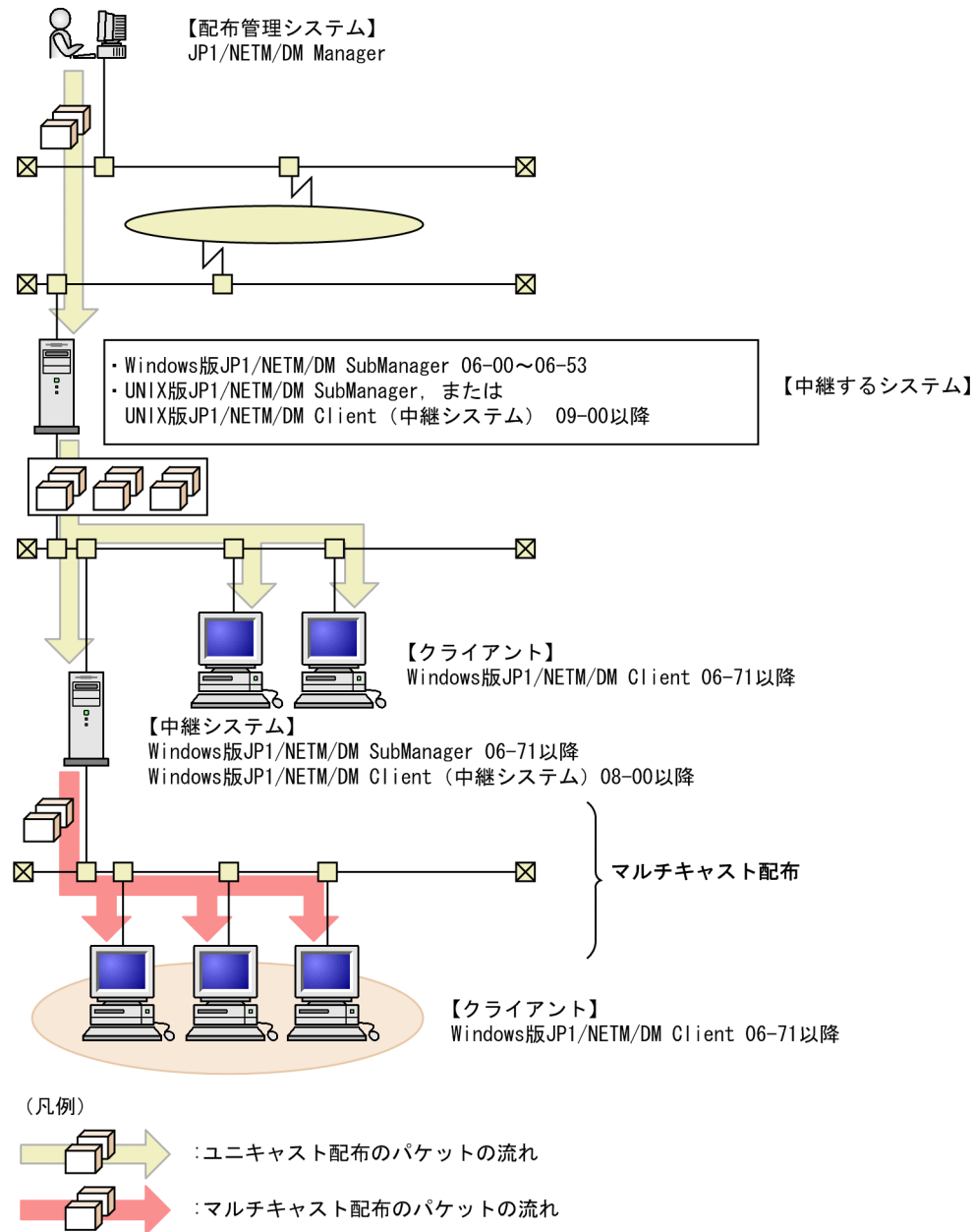
次に、中継するシステム（中継マネージャまたは中継システム）が多階層になっている環境で、配布管理システムから「マルチキャスト配布」を指定したジョブを送信した場合を説明します。

中継するシステムが多階層になっている場合、クライアントが接続する上位システムより上位に位置する中継するシステムがマルチキャスト配布をサポートしていなければ、その下位システムにはユニキャスト配布になります。ただし、クライアントが接続する上位システムよりも上位の中継するシステムが次のどちらかの場合、下層の中継システムとクライアント間ではマルチキャスト配布ができます。

- Windows 版 JP1/NETM/DM SubManager 06-00 ～ 06-53
- UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager, または UNIX 版 JP1/NETM/DM Client (中継システム) 09-00 以降

中継するシステムが多階層で、下層の中継システムとクライアント間だけがマルチキャスト配布になる場合を、次の図に示します。

図 6-17 中継するシステムが多階層の場合（下層の経路だけマルチキャスト配布）



6.2.4 マルチキャスト配布の実行方法

システム構成を決定したあと、次の手順でマルチキャスト配布を実行します。

1. マルチキャスト配布の送信側と受信側のセットアップで、マルチキャスト配布の設定をする。
2. 配布管理システムでジョブを作成するとき、配布方式に「マルチキャスト配布」を指定する。

次に各手順を説明します。

(1) セットアップ

クライアントが接続する上位システムのセットアップで、マルチキャスト配布の送信側の設定をします。また、クライアントのセットアップで、受信側の設定をします。次の各ダイアログボックスの「マルチ

キャスト配布] パネルで設定してください。

送信側の設定

- JP1/NETM/DM Manager の場合
[サーバセットアップ] ダイアログボックス (サーバのセットアップ)
- JP1/NETM/DM Client (中継システム) の場合
[中継システムセットアップ] ダイアログボックス (中継システムの基本設定)

受信側の設定

- JP1/NETM/DM Client (クライアント) の場合
[クライアントセットアップ] ダイアログボックス
- JP1/NETM/DM Client (中継システム) の場合
[詳細情報の設定] ダイアログボックス (中継システムの詳細設定)
- JP1/NETM/DM Manager の中継マネージャの場合
[詳細情報の設定] ダイアログボックス (中継マネージャの詳細設定)

これらのセットアップで、ポート番号とマルチキャストアドレスを設定します。送信側では、パケットサイズも指定します。送信側で設定したマルチキャストアドレスに対して、ジョブは配布されます。受信側では、設定したマルチキャストアドレスへ配布されたジョブを受信します。設定内容の詳細については、マニュアル「構築ガイド」を参照してください。なお、セットアップでマルチキャスト配布の設定をしても、ユニキャスト配布を指定したジョブはユニキャスト配布されます。

セットアップ時の注意事項

- クライアントの接続先の上位システムよりも上位のシステムでは、セットアップにマルチキャスト配布の設定をする必要はありません。例えば、マネージャ、中継システム、クライアントの順に接続している場合、マネージャのセットアップでは [マルチキャスト配布] パネルの設定は不要です。
- JP1/NETM/DM Client (中継システム) の [中継システムセットアップ] ダイアログボックスの [マルチキャスト配布] パネルの場合、送信用のポート番号の設定はありません。JP1/NETM/DM Client (中継システム) からマルチキャスト配布をする場合は、[詳細情報の設定] ダイアログボックスで設定されたマルチキャスト配布の受信用のポート番号が、送信にも適用されます。
- クライアントが接続する上位システムとクライアントの間に、IP マルチキャストに対応していないルータがある場合は、マルチキャスト配布はできなく、ユニキャスト配布になります。この場合、クライアントが接続する上位システムおよびクライアントのセットアップで、マルチキャスト配布の設定をしないでください。セットアップでマルチキャスト配布の設定をしていると、ユニキャスト配布に切り替わるまでに時間が掛かります。

(2) マルチキャスト配布を指定したジョブの作成

マルチキャスト配布は、ジョブ単位で指定できます。ジョブをマルチキャスト配布したい場合、[ジョブの作成] ダイアログボックスの [ジョブの配布属性] パネルで、「配布方式」に「マルチキャスト配布」を指定します。ジョブの作成の詳細については、マニュアル「運用ガイド 1」の「2.3 リモートインストールの実行」を参照してください。

6.2.5 マルチキャスト配布をする場合の注意事項

マルチキャスト配布をする場合、次の点に注意してください。

- ネットワーク内で、複数の中継するシステムに同一のマルチキャストアドレスを設定すると、それらに接続するクライアントには、複数の中継するシステムからジョブがマルチキャスト配布されます。ジョブの配布の重複を避けるため、中継するシステムごとに一意のマルチキャストアドレスを使用してください。

- クライアントとその上位システムのマルチキャストアドレスが異なる場合、ジョブにマルチキャスト配布を指定してもユニキャスト配布されます。例えば、トラブルによって中継システムがダウンした場合、一時的にマルチキャストアドレスの異なるほかの中継システムを経由してジョブを実行すると、ユニキャスト配布になります。
- 分割配布を指定したジョブは、マルチキャスト配布できません。
- マルチキャスト配布時にクライアントが未起動の場合、またはクライアント PC の電源が入っていない場合、クライアントが起動したあと、またはクライアント PC の電源が入ったあとにマルチキャスト配布されます。
- マルチキャスト配布時にクライアントが非常駐の場合、システム起動時のポーリングを設定していれば、システム起動時にマルチキャスト配布されます。ただし、非常駐のときに [ジョブ実行] アイコンを起動した場合は、ユニキャストで配布されます。
- クライアントがマルチキャスト配布されたジョブを完全に受信できなかった場合、受信できなかった部分以降のデータが自動的にユニキャスト配布されます。
- ジョブの作成時、「マルチキャスト配布」とクライアント制御の「クライアントを起動させる」は同時に指定しないでください。両方指定してジョブを実行すると、電源がオフのクライアント PC に対しては配布時間が長くなります。電源がオフのクライアント PC を起動してマルチキャスト配布したい場合は、次の方法で実行してください。
 1. 「システム情報の取得」ジョブなどを「クライアントを起動させる」を指定して実行し、クライアント PC の電源をオンにする。
 2. 「マルチキャスト配布」を指定したジョブを実行する。

6.3 クライアント制御を利用するための設定

クライアント制御を利用するために必要な設定と注意事項について説明します。

クライアント制御でクライアントの PC を起動する方法には、AMT を利用する方法と Wake on LAN を利用する方法の 2 とおりがあります。クライアント制御を実行するときは、クライアントの環境に合わせて自動的に起動方法が選択され、ジョブが実行されます。AMT と Wake on LAN の両方を利用できる場合は、AMT が利用されます。

6.3.1 AMT を利用する場合の設定

AMT を利用してクライアント制御を実行する場合の設定について説明します。

なお、クライアントでは、「AMT 連携機能」をインストールする前に、AMT に対して設定が必要です。AMT の設定については、「5.2.7(1) JP1/NETM/DM をインストールする前に必要な設定」を参照してください。

(1) AMT を利用してクライアント制御を実行する場合の設定

AMT を利用してクライアント制御を実行するためには、次に示す設定が必要です。

JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client (中継システム) の設定

インストール時の「AMT 連携機能の設定」ダイアログボックス、またはセットアップの「AMT 連携」パネルで AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードを設定します。

JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定

インストール時に「AMT 連携機能の設定」ダイアログボックスで、AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードを設定してください。セットアップからは設定できません。

なお、配布管理システムとクライアントで、AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードの設定を一致させる必要があります。

クライアントの AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードが配布管理システムと異なる場合、配布管理システムから AMT 設定ファイル (AMTSETUP ファイル) を配布して、クライアントの設定を変更できます。

AMT 設定ファイルを配布する手順を次に示します。

1. AMT 設定ファイルをパッケージングする。

AMT 設定ファイルは、JP1/NETM/DM Manager のインストール先ディレクトリ ¥DMAMT に格納されています。このフォルダごとパッケージングしてください。

また、インストール先は次のように設定します。

- ドライブ：なし
- ディレクトリ：%NETMDMP%

2. パッケージをクライアントに配布する。

配布が完了すると、クライアントの AMT 管理ユーザの設定が変更されます。

また、AMT を使用できる複数台のノート PC をクライアントとして無線 LAN 環境に導入する場合、dcmamtwc コマンドを使用すると、一括で無線 LAN への接続情報を設定できます。また、無線 LAN への接続情報の設定を変更する場合も、dcmamtwc.exe コマンドから一括で変更できて便利です。

(2) dcmamtwc.exe（無線 LAN の接続情報の設定）

無線 LAN への接続情報を設定する場合に使用する、dcmamtwc コマンドについて説明します。このコマンドはマネージャおよび中継システムから実行します。

機能

AMT を使用できるノート PC のクライアントに対して、無線 LAN への接続情報を設定します。

形式

```
dcmamtwc.exe /f CSV出力ユーティリティの出力ファイル名
               /n 無線LANのプロファイル名
               { [/r] |
                 [/w ON | OFF | Sx]
                 [/p 無線LANのプロファイルの優先順位]
                 [/i SSID] [/s WPA | RSN] [/e TKIP | CCMP] [/k 暗号化キー] }
```

引数

/f

無線 LAN への接続情報の設定を実行したいホストを指定します。ホストの指定は CSV 出力ユーティリティでシステム情報を出力したファイルを使用します。また、CSV 出力ユーティリティでシステム情報を出力したファイルと同じフォーマットのファイルも使用できます。

/n

無線 LAN のプロファイル名を半角 1 ～ 35 文字で指定します。

/r

すでに無線 LAN への接続情報の設定が存在する場合、既存の設定を削除する場合に指定します。なお、同時に /w、/p、/i、/s、/e、および /k を指定した場合は、ほかのオプションは無視され、/r だけが有効になります。

/w

無線 LAN の接続および切断を ON、OFF または Sx で指定します。

Sx を指定した場合、クライアントの PC が AMT 4.0 以降を搭載していると、スリープ状態または休止状態のときでも無線 LAN に接続できます。

/p

無線 LAN のプロファイルの優先順位を 0 ～ 255 で指定します。省略された場合は、「0」が指定されます。

/i

無線 LAN の SSID を指定します。このオプションが指定された場合、/s、/e および /k は必ず指定してください。

また、/r が指定された場合、または /w に OFF が指定された場合には無視されます。

/s

使用する通信方式を指定します。通信方式は、WPA または RSN のどちらかを選択します。このオプションが指定された場合、/e および /k は必ず指定してください。

また、/r が指定された場合、または /w に OFF が指定された場合には無視されます。

/e

使用する暗号方式を指定します。暗号方式は、TKIP または CCMP のどちらかを選択します。このオプションが指定された場合、/s および /k は必ず指定してください。

また、/r が指定された場合、または /w に OFF が指定された場合には無視されます。

/k

暗号キーの文字列を指定します。このオプションが指定された場合、/s および /e は必ず指定してください。

また、/r が指定された場合、または /w に OFF が指定された場合には無視されます。

リターンコード

dcmamtwc コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

コード	意味	対処
0	対象となるすべてのマシンに無線 LAN への接続情報の設定、設定削除、開始、または停止を実行した。	なし。
1	CSV 出力ユーティリティの出力ファイルを開けない、またはファイルの形式に誤りがある。	CSV 出力ユーティリティの出力ファイルのパスまたはファイルの形式を確認してください。
2	コマンドの引数に誤りがある。	コマンドの引数を確認してください。
12	その他のエラーが発生した。	システムエラーです。コマンドの実行環境を確認してください。
30	少なくとも 1 台のクライアントで、AMT の不揮発性メモリの初期設定に失敗した。	ログファイルを参照して、要因と対処を確認してください。 ※ - AMT 管理ユーザの設定が統一されていないおそれがあります。実行対象のクライアントに AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードが設定されているか確認してください。 - AMT の Provision モデルに「Small Business」が指定されているか確認してください。 - 対象 PC が AMT に対応していないか、ネットワーク上に存在しないおそれがあります。
31	対象となるすべてのマシンに無線 LAN への接続情報の設定、設定削除、開始、または停止に失敗した。	ログファイルを参照して、要因と対処を確認してください。 ※ - JP1/NETM/DM セットアップの AMT 連携に指定した AMT 管理ユーザ名とパスワードを再設定してください。 - すべてのマシンの AMT セットアップで Provision モデルとして Enterprise を選択しているおそれがあります。Small Business に変更してください。 - 対象 PC が AMT に対応していないか、ネットワーク上に存在しないおそれがあります。

注※ dcmamtwc コマンドのログについては、マニュアル「運用ガイド 2」の「6.3.1(5) AMT 連携機能のログを確認する」を参照してください。

注意事項

- /w に OFF を指定して無線 LAN を停止した場合、無線 LAN を再開するには、LAN 環境のマネージャまたは中継システムから /w に ON を指定した dcmamtwc コマンドを実行する必要があります。
- 無線 LAN への接続情報を初めて設定する場合は、LAN 環境のマネージャまたは中継システムから無線 LAN の接続情報を設定する必要があります。
- /r オプションを設定しない場合は、指定された無線 LAN のプロファイルを新たに追加します。すでに同じ無線 LAN のプロファイルが存在するときは、既存の無線 LAN のプロファイルが上書きされます。
- /w に OFF を指定して無線 LAN を停止した場合、コマンドの実行に成功した時点で、無線 LAN のネットワークが遮断されるため、クライアントが正常終了してもリターンコードは通知されません。リターンコードが通知されないため、マネージャは通信エラーと判断し、異常終了を示すリターンコードを通知します。

実行例

dcmamtwc コマンドを使用して無線 LAN の接続情報を設定する例を次に示します。

```
dcmamtwc.exe /f C:\temp¥input.csv /n AMTProfile /w ON /i AMTACCESSPOINT /s
WPA /e TKIP /k P@ssw0rd
```

(3) AMT を利用してクライアント制御を実行する場合の注意事項

AMT を利用してクライアント制御を実行する場合の注意事項を次に示します。

- LAN と無線 LAN が同一サブネットに接続されている環境では、AMT 連携機能は使用できません。
- 実行先のクライアントが AMT 連携機能を使用できる必要があります。AMT 連携機能を使用できるかどうかは、クライアントのシステム情報「AMT ファームウェアバージョン」の値で確認できます。AMT 連携機能を使用できる場合は、AMT のファームウェアバージョンが表示されます。使用できない場合は、「N/A」が表示されるか、項目が表示されません。
- OS および AMT の IP アドレスの割り当てに、DHCP を使用している必要があります。
- 実行先のクライアントが LAN 環境でバッテリー電源を使用している場合、または無線 LAN 環境の場合には、クライアントの電源が入っている必要があります。サスペンド状態、ハイバネーション状態、およびレジューム状態では AMT 連携機能を使用できません。
- AMT との接続に失敗した場合、Wake on LAN を利用したクライアント制御が再実行されます。

6.3.2 Wake on LAN を利用する場合の設定

セットアップで必要な設定を次に示します。

(1) 値の設定が必要な項目

クライアント制御を使って起動したあと、自動的にシャットダウンしたい場合は、クライアントに次の設定が必要です。

運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する

クライアントのセットアップの [ジョブオプション] パネルで、「運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する」をオンにしてください。

この項目は、JP1/NETM/DM Client (クライアント) のセットアップでだけ指定できます。中継マネージャや中継システムは常時起動しておく必要があるため、JP1/NETM/DM Manager および JP1/NETM/DM Client (中継システム) のクライアント機能のセットアップでは、この指定はできません。

(2) 値の設定に注意が必要な項目**下位システムの同時実行要求数**

クライアントを起動する側の上位システムのセットアップで、次の値を 0 にするとあて先の起動ができなくなります。

- マネージャおよび中継マネージャの場合、[サーバカスタマイズオプション] パネルの「下位システムの同時実行要求数」
- 中継システムの場合、[中継システムカスタマイズオプション] パネルの「中継 / クライアントの同時実行要求数」

システム構成の自動登録

JP1/NETM/DM のバージョンが 06-00 以降の場合は、「システム構成を自動登録する」の設定を有効にしてください。

(3) 推奨の値がある項目

ポーリングの設定

ポーリングの設定は「ポーリングする」を有効にすることをお勧めします。

(4) 注意事項

Wake on LAN を利用してクライアント制御を実行する場合の注意事項を次に示します。

(a) システム構成についての注意事項

ジョブの経路上にルータが設置されたシステム構成でクライアント制御を使うには、次のどちらかのネットワーク環境にしてください。セキュリティ上の安全性から、1 の環境での運用をお勧めします。

1. ルータごとに一つ以上の中継マネージャまたは中継システムを配置し、かつ常時起動されている状態にします。(推奨)
2. ルータに、ブロードキャスト指定のパケットを通過させるように設定します。
この場合、ルータごとに中継マネージャまたは中継システムを配置する必要はありません。ただし、あて先の IP アドレスがルータによってサブネット化された環境の場合、次の条件を満たす必要があります。
 - クライアント制御によって起動される PC にインストールされた JP1/NETM/DM のバージョンが 06-51 以降で、かつ WMI がインストールされている。
 - クライアント制御の使用前に、「システム情報の取得」ジョブを実行して、サブネットマスクの情報を取得しておく。
 - JP1/NETM/DM Client (中継システム) の [中継システムカスタマイズオプション] パネルで、「下位クライアントの資源情報を記録する」オプションをオンにしておく。

なお、ルータにブロードキャスト指定のパケットを通過させるように設定すると、サービス運用妨害 (DoS) 攻撃を受けるおそれがあります。このような状況を避けるには、1 の環境で運用してください。

(b) ハードウェアについての注意事項

クライアント制御を使用する場合のハードウェアについての注意事項を次に説明します。

- クライアント制御は各種設定や個々の機器の相性などに大きく左右される機能です。したがって、事前に提供するコマンドを使って、クライアント制御を使った PC の起動ができるかどうかを確認してください。提供するコマンドについて次に示します。

コマンド名

magicsnd.exe

コマンドの格納場所

JP1/NETM/DM のインストール先ディレクトリ ¥bin 下

使用方法

magicsnd -a MAC アドレス [-m サブネットマスク] IP アドレス

このコマンドは、MS-DOS プロンプトから実行してください。指定したあて先を起動するコマンドです。このコマンドで起動できない PC は、クライアント制御を使った起動はできません。

サブネットマスクの指定 ([] で囲まれた部分) は、あて先の IP アドレスがルータによってサブネット化された環境で、ルータにブロードキャスト指定のパケットを通過させるように設定している場合だけ必要です。

使用例

ルータごとに常時起動の中継システムを配置してある場合：

```
magicsnd -a 0000e2168066 172.17.11.145
```

IP アドレスがサブネット化され、ルータがブロードキャスト指定のパケットを通過させる環境の場合：

```
magicsnd -a 0000e2168066 -m 255.255.255.0 172.17.11.145
```

- BIOS の設定で Wake on LAN の項目がある場合は、「Enable」に設定してください。
- HUB や NIC などが LinkChange 機能をサポートしている場合、その機器の電源がオンになると Wake on LAN が「Enable」になっている PC が起動されてしまいます。このため、機器の電源は常にオンにしておくか、または LinkChange 機能を無効にしておく必要があります。
- LAN カードから出力される信号には、「RWU-High」、「RWU-Low」、および「PME」の 3 種類があります。マザーボードによって使用できる信号の種類が異なるため、その組み合わせによってジャンパーピンの設定を変える必要があります。組み合わせによるジャンパーピンの設定については、LAN カードメーカーのドキュメントを参照してください。

(c) 起動時の注意事項

クライアント制御を使用してクライアントを起動する場合の注意事項を次に示します。

- クライアント制御を使って複数のジョブを実行する場合、すべてのジョブにクライアントを起動させる指定をしても、一つのあて先に対して一度起動した場合は、同じあて先に対する次のジョブの起動要求は無視されます。
- バージョンが 06-00 より前の JP1/NETM/DM Client をインストールした PC に対してクライアント制御を使ってジョブを実行した場合、起動もシャットダウンもできません。
- 1 台の PC で複数のネットワークインターフェースカードを使用している環境では、クライアント制御を使って起動できないことがあります。
- JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）から「クライアントを起動させる」を設定してジョブを実行した場合、PC の起動時間に対して、JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）からの起動間隔が短過ぎるため、PC によっては起動時にハングアップしてしまう場合があります。この場合、JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）の、次に示すレジストリ値を PC の起動時間より大きな値に変更することで、回避してください。

レジストリキー

- OS が 32 ビット版の JP1/NETM/DM Manager の場合

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\HITACHI\NETM/DM
```

- OS が 64 ビット版の JP1/NETM/DM Manager の場合

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWAREWow6432Node\HITACHI\NETM/DM
```

- OS が 32 ビット版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\HITACHI\NETM/DM/P
```

- OS が 64 ビット版の JP1/NETM/DM Client（中継システム）の場合

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWAREWow6432Node\HITACHI\NETM/DM/P
```

名前

```
DeliveryExecSelectInterval
```

データ

最小値（秒）：30

最大値（秒）：9,999

デフォルト値（秒）：60

6.3.3 シャットダウン時の注意事項

クライアント制御を使用してクライアントをシャットダウンする場合の注意事項を次に示します。

- Windows NT のクライアントを自動的にシャットダウンしようとしても、シャットダウンしなかったり再起動したりすることがあります。これはハードウェアまたは Windows の環境が、自動シャットダウンに対応していないことが原因のおそれがあります。この場合は、ハードウェアが自動シャットダウンに対応しているかを確認してください。また、ハードウェアメーカーが提供している最新のアップデートプログラムを実行し、Windows とハードウェア仕様の整合性を取るようにしてください。ハードウェアが自動シャットダウンに対応していて、アップデートプログラムを実行しても現象が再現する場合は、ハードウェアメーカーおよび Microsoft 社が提供する情報を参照してください。
 - 中継マネージャおよび中継システムに対してシャットダウンする指定をしても無視されます。
 - UNIX クライアント、または 06-00 より前の Windows クライアントは自動的にシャットダウンできません。
 - Windows NT のクライアントでスクリーンセーバーが起動され、パスワードで保護されている場合、自動的にシャットダウンはできません。
 - シャットダウンを指定したジョブの受信時に編集集中のファイルが存在した場合、自動的にシャットダウンはできません。
 - シャットダウンを指定したジョブを上位システムから実行した場合、次に示すログオン状態のときは指定どおりの動作をしません。
 - ・ ログオン前のとき
 - ・ 一般ユーザとしてログオンし、セットアップの「一般ユーザ権限で使用する」がオフのとき

これらの状態では、クライアントセットアップで確認ダイアログボックスの表示時間が設定されている場合は、確認ダイアログボックスを表示しないでシャットダウンします。表示時間が「無制限」となっている場合は、シャットダウンできません。

なお、ここでの「ジョブを上位システムから実行」とは、クライアント側からパッケージセットアップマネージャまたは [ジョブ実行] アイコンを使用してジョブを実行する場合以外を示します。
 - シャットダウンを指定した「クライアントユーザによるインストール」ジョブがクライアントのパッケージセットアップマネージャから実行された場合、クライアントセットアップに確認ダイアログボックスの表示時間が設定されていても、「無制限」の場合と同様に、ユーザの入力があるまでシャットダウンしません。
 - Windows XP Mode 環境のクライアントは、自動的にシャットダウンできないことがあります。
- Windows XP Mode 環境でのクライアント制御については、マニュアル「構築ガイド」の「付録 C.2(2) ジョブを管理する際の注意事項」を参照してください。

6.4 中継システムの動作環境について

JP1/NETM/DM Client（中継システム）のポーリング環境について説明します。

6.4.1 中継システムのマルチポーリング環境

通常、中継システムの接続先となる上位システムは単一です。中継システムへの配布経路を複数設定するためには、上位システムを複数用意するマルチポーリング環境を作成します。マルチポーリング環境で運用すると、中継システムは、複数の上位システムから実行されたジョブを受信し、下位システムに中継することができます。

(1) マルチポーリング環境の設定

中継システムのセットアップ時に「上位システムの設定」ダイアログボックスから接続する複数の上位システムに優先順位を付けて設定します。このとき指定する上位システム名称は、上位システムが使用する運用キー（ホスト名または IP アドレス）を使って指定してください。指定できる上位システムは最大 8 個です。

中継システムのマルチポーリング環境でのポーリング方法は、マルチホストになります。ポーリング方法としてホットスタンバイを使用することはできません。

また、マルチポーリング環境で指定する上位システムの運用キーはホスト名または IP アドレスに統一しなければなりません。運用キーがホスト名の上位システムと運用キーが IP アドレスの上位システムを、接続先として混在させた場合、上位システムで実行したジョブが中継システムで滞り、配下の下位システムまで正しく実行されません。

(2) マルチポーリング環境での注意事項

- システム構成の自動登録機能を使用する場合、優先順位が 1 位の上位システムにだけシステム構成情報が通知されます。
- ID を使用した運用は、優先順位が 1 位の上位システムでしかできません。優先順位が 1 位以外の上位システムで作成した ID に、中継システムを ID 管理中継として追加しようとしても、「登録中」のままとなり追加できません。また ID への登録は、セットアップ時に「接続先」パネルで指定した「ID 登録先システム」で設定したシステムの ID にだけ登録できます。
- セットアップの「配布管理システムへ ID ジョブの結果通知を行う」オプションを使用している場合、ID ジョブの結果通知は、優先順位が 1 位の上位システムにだけ通知されます。
- セットアップの「接続先以外の定期実行ジョブを抑止する」オプションを使用している場合、優先順位が 1 位の上位システムにだけ、定期実行ジョブの結果が通知されます。

6.5 クライアントの動作環境について

ネットワーク環境や運用方法に合わせたクライアントの動作環境を設定する方法について説明します。

6.5.1 クライアントでのホスト識別子の保管

AMT に対応したコンピュータを使用している場合、クライアントで「AMT 連携機能」を使用しているときは、ホスト識別子を AMT の不揮発性メモリに保管しておくことができます。

ホスト識別子を保管しておくことで、ディスク障害の対処としてクライアントを再インストールしたときに、ホスト識別子が復元されます。これにより、上位システムから障害前と同じ資産として認識されます。

ここでは、AMT の不揮発性メモリにホスト識別子を保管するための設定について説明します。

(1) 設定方法

AMT の不揮発性メモリにホスト識別子を保管するには、ホスト識別子を格納するための不揮発性メモリの領域を初期設定する必要があります。領域を初期設定するには、上位システムから AMT に対応したコンピュータに対して、**dcmamtin コマンド**を実行します。コマンドの実行は、クライアントをインストールする前でも、インストールしたあとでもかまいません。

dcmamtin コマンドについては、「(2) dcmamtin.exe (AMT の不揮発性メモリの初期設定)」を参照してください。

領域の初期設定が完了すると、次のタイミングで AMT の不揮発性メモリにホスト識別子が保管されます。

クライアントが未インストールの場合

クライアントのインストール時に、生成されたホスト識別子が保管されます。

クライアントがインストール済みの場合

上位システムとの通信時に、生成済みのホスト識別子が格納されます。また、ホスト識別子が作成されていない場合は、ホスト識別子が作成されたタイミングで格納されます。

ホスト識別子が保管されると、クライアントを再インストールしたときに、保管されたホスト識別子が復元されます。ホスト識別子が復元されない場合は、マニュアル「運用ガイド 2」の「6.4.2(5) AMT 連携機能が正常に動作しない」を参照してください。

なお、クライアントの再インストール時に何らかの原因によって AMT の不揮発性メモリからホスト識別子を復元できなかった場合、クライアントでホスト識別子が新規に生成されます。この場合、クライアントのサービス起動時などのタイミングで、AMT の不揮発性メモリのホスト識別子が上書きされます。

(2) dcmamtin.exe (AMT の不揮発性メモリの初期設定)

dcmamtin コマンドについて説明します。このコマンドは、JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client (中継システム) の「AMT 連携機能」をインストールした環境で利用できます。

機能

クライアントの AMT の、不揮発性メモリ内のホスト識別子を保管するための領域を初期設定します。

形式

```
dcmamtin.exe    {/F システム構成情報ファイル |
                  /H ホスト名 | /I IPアドレス}
```

引数

/f

システム構成情報ファイルをフルパスで指定します。システム構成情報ファイルに記載されているクライアントに対してコマンドを実行します。

複数のクライアントに対して AMT の不揮発性メモリの初期設定を実行したいときに指定してください。

システム構成情報ファイルについては、マニュアル「構築ガイド」の「8.1.4(3) システム構成情報をファイルに出力する」を参照してください。

/H

クライアントのホスト名を半角 64 文字以内で指定します。

/I

クライアントの IP アドレスを指定します。

リターンコード

dcmamtin コマンド実行時のリターンコードを次の表に示します。

コード	意味	対処
0	すべての実行先で、AMT の不揮発性メモリの初期設定に成功した。	なし。
1	システム構成情報ファイルを開けない、またはファイルの形式が不正である。	システム構成情報ファイルのパス、および記述形式を確認してください。
2	コマンドの引数に誤りがある。	コマンドの引数を確認してください。
12	その他のエラーが発生した。	システムエラーです。コマンドの実行環境を確認してください。
30	少なくとも 1 台のクライアントで、AMT の不揮発性メモリの初期設定に失敗した。	ログファイルを参照して、要因と対処を確認してください。 [※] - AMT 管理ユーザの設定が統一されていないおそれがあります。実行対象のクライアントに AMT 管理ユーザのユーザ名とパスワードが設定されているか確認してください。 - AMT の Provision モデルに「Small Business」が指定されているか確認してください。 - 対象 PC が AMT に対応していないか、ネットワーク上に存在しないおそれがあります。
31	すべてのクライアントで、AMT の不揮発性メモリの初期設定に失敗した。	- ログファイルを参照して、要因と対処を確認してください。[※] - セットアップで指定した AMT 管理ユーザ名とパスワードが誤っているおそれがあります。再設定してください。 - AMT の Provision モデルに「Small Business」が指定されているか確認してください。 - 対象 PC が AMT に対応していないか、ネットワーク上に存在しないおそれがあります。

注※ dcmamtin コマンドのログについては、マニュアル「運用ガイド 2」の「6.3.1(5) AMT 連携機能のログを確認する」を参照してください。

実行例

dcmamtin コマンドで、AMT の不揮発性メモリを初期設定する例を次に示します。

```
dcmamtin.exe /f "D:¥Program Files¥Hitachi¥NETMDM¥DMPRM¥NETM.NDD"
```

6.5.2 クライアントのポーリング方法

クライアントは配布管理システムのジョブを受信して実行します。配布管理システムのジョブを受信でき

るのは、クライアントが起動されているときだけです。通信障害が発生したときやクライアントが起動されていないときは、上位システムからのジョブを受信できません。このような場合、自システムあてのジョブがあるかどうかをクライアントに監視させることができます。上位システムからのジョブを監視することを**ポーリング**といいます。

JP1/NETM/DM Client（クライアント）のセットアップでは、ポーリングのタイミングや実行間隔などを設定できます。ポーリング方法には、次の種類があります。クライアントの運用方法に合わせてポーリングの方法を選択してください。

- ポーリングしない。
- システム起動時に 1 回だけポーリングする。
- システム起動時から一定間隔でポーリングする。
- 1 日 1 回、設定した時刻にポーリングする（JP1/NETM/DM Client（クライアント）だけ）。
- 1 日 1 回、システム起動時にポーリングする（JP1/NETM/DM Client（クライアント）だけ）。

なお、ポーリング方法のデフォルト値は、JP1/NETM/DM Client（クライアント）インストール時に指定するネットワーク環境によって異なります。

WAN 環境を選択した場合は、デフォルト値として、システム起動時に 1 回だけポーリングするように設定されます。低速な WAN 環境のため、むだなデータの送受信を少なくしたい場合は、「ポーリングしない」を設定してください。

LAN 環境を選択した場合は、デフォルト値として、システム起動時から 30 分間隔でポーリングを行うように設定されます。ポーリングの間隔やタイミングは、ネットワークに負荷が掛からないように設定してください。

6.5.3 クライアントのマルチポーリング環境

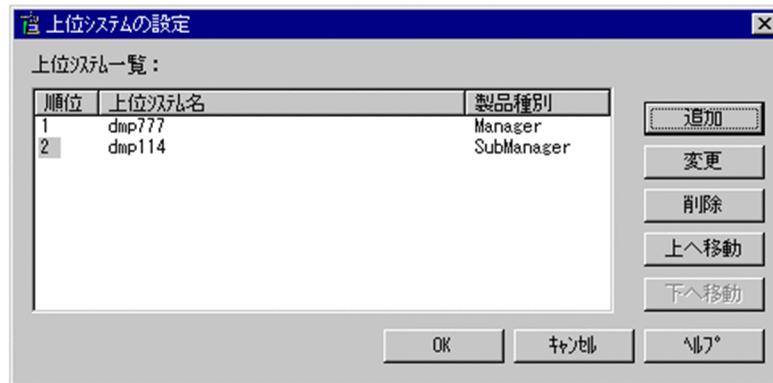
配布先の構成は、システム構成情報で定義されているため、クライアントへのジョブは、あらかじめ決められた経路で実行されます。また、クライアントから接続する中継システムも、システム構成情報で定義された一つの中継システムだけです。

配布経路を複数設定したり、クライアントから複数の中継システムへ接続したりする構成にする場合は、**マルチポーリング**の環境を作成します。クライアントが接続する中継システムは、接続時の優先順位を付けて設定できます。マルチポーリング環境で運用すれば、中継システムでトラブルが発生しても、別の中継システムを経由して目的のクライアントに対しジョブを実行できます。また、クライアントから中継システムに接続する場合、接続時の優先順位に従って、複数の中継システムに接続できます。

(1) マルチポーリング環境の設定

クライアントのセットアップ時に「上位システムの設定」ダイアログボックスで、接続する複数の上位システムに優先順位を付けて設定します。

図 6-18 「上位システムの設定」ダイアログボックス

**【追加】 ボタン**

接続先の上位システムを追加します。上位システムは最大 8 個まで設定できます。[上位システムの追加・変更] ダイアログボックスで、追加する上位システムの製品種別、ホスト名または IP アドレスを設定してください。

【変更】 ボタン

選択されている上位システムの情報を変更します。表示される [上位システムの追加・変更] ダイアログボックスで、製品種別、ホスト名または IP アドレスを変更してください。

【削除】 ボタン

上位システム一覧の中から選択されている上位システムを削除します。

【上へ移動】 ボタン

選択されている上位システムの優先順位を一つ上げます。

【下へ移動】 ボタン

選択されている上位システムの優先順位を一つ下げます。

設定が終了したら [OK] ボタンをクリックしてください。[接続先] パネルに戻ります。

(2) マルチポーリング環境でのポーリング方法の選択

クライアントは、自システムあてのジョブがあるかどうかを、上位の中継システムにポーリングすることで確認しています。中継システムとのポーリング方法は、クライアントのセットアップ時に、[クライアント常駐・ポーリング] パネルで設定します。ポーリング方法には次の二つがあります。

ホットスタンバイ

ホットスタンバイでは、ポーリング対象の中継システムは一つです。通常は、[上位システムの設定] ダイアログボックスで設定した、優先順位が 1 位の中継システムにポーリングします。この中継システムに接続できない場合は、優先順位が 2 位の中継システムにポーリングします。優先順位が 2 位の中継システムに接続できない場合は、接続できるまで優先順位が高い中継システムから順番にポーリングしていき、接続に成功した中継システムにポーリングし続けます。

マルチホスト

マルチホストでは、[上位システムの設定] ダイアログボックスで設定した複数の中継システムすべてにポーリングします。優先順位が 1 位の中継システムから順番にポーリングしていきます。

(3) マルチポーリング環境での注意事項

マルチポーリング環境で運用する場合の注意事項を次に示します。

- マルチポーリング環境で動作するクライアントの場合、ID は優先順位が 1 位の中継システムにだけ登録できます。
- ホットスタンバイで、優先順位が 1 位の中継システムのトラブルを回復した場合、クライアントをこの中継システムに再びポーリングさせる方法を次に示します。

クライアントが常駐の場合

接続中の中継システムを停止するか、または優先順位が 1 位の中継システムを経由してシステム情報の取得ジョブなどを実行してください。接続中の中継システムを停止した場合は、次のポーリング時にポーリング対象の中継システムが変更されます。ジョブを実行した場合は、実行後にポーリング対象の中継システムが変更されます。

クライアントが非常駐の場合

システム起動時のサーバへのポーリング形態を「優先順位に従う」にしてください。クライアントを再起動したあと、優先順位が 1 位の中継システムにポーリングされます。

- ホットスタンバイを使用する環境ですべての経路に対してジョブを実行する場合、クライアントが接続した中継システムの経路のジョブは実行されますが、それ以外の経路のジョブは「未実行」のステータスのまま中継システム上に残ります。そのため、中継システム上に残ったジョブと完了したジョブは、配布管理システムから定期的に削除してください。中継システム上にジョブが大量に残ったままになると、中継システムの性能が劣化するおそれがあります。
- マルチホストを使用する環境ですべての経路に対してジョブを実行する場合、クライアントがポーリングするたびに同じジョブを受信します。この場合、リモートインストールのジョブを実行するときは、ジョブのインストール条件での「同じパッケージがあったら上書き」チェックボックスをオフの状態にすることをお勧めします。チェックボックスがオンの場合、ジョブ実行時に毎回パッケージが転送されるのでネットワークに負荷が掛かるおそれがあります。チェックボックスがオフの場合、クライアントが一度受信したジョブは、その後はパッケージが転送されることなく正常終了します。なお、このときのジョブの保守コードは「900090009000」となります。

6.5.4 クライアントの接続先の自動変更

接続先を決定するための情報をクライアントに配布しておく、各クライアント PC の IP アドレスから適切な接続先の上位システムを判断して、自動的に設定できます。クライアント PC の IP アドレスが変更されると接続先も自動的に変更されるため、クライアント PC が移動した場合に便利です。ここでは、クライアントの接続先の自動変更について説明します。

この機能は、JP1/NETM/DM Client（クライアント）で使用できます。

(1) 接続する上位システムを自動的に設定・変更する

接続先の上位システムを自動的に設定・変更するには、あらかじめ**上位接続先情報ファイル**（dmhost.txt）を作成し、クライアントに配布します。配布後の特定のタイミングで、接続先が自動的に再設定されます。

(a) 上位接続先情報ファイルを作成する

上位接続先情報ファイルは、接続する上位システムを決定するためのファイルです。このファイルは、クライアント PC の IP アドレスの範囲と対応する接続先上位システムの組み合わせを定義しています。例えば、IP アドレス「172.16.22.1 ～ 172.16.22.255」のクライアント PC の接続先は東京支部の PC、IP アドレス「172.17.22.1 ～ 172.17.22.255」のクライアント PC の接続先は名古屋支部の PC、というように定義します。作成方法の詳細については、「(2) 上位接続先情報ファイル（dmhost.txt）の作成」を参照してください。

(b) 上位接続先情報ファイルをクライアントに配布する

作成した上位接続先情報ファイルを、各クライアント PC の次のディレクトリに格納します。

JP1/NETM/DMのインストール先ディレクトリ¥MASTER¥DB

「パッケージのインストール」ジョブを使用すると、一度に多数のクライアントに格納できます。上位接続先情報ファイル（dmhost.txt）を次の設定でパッケージして、配布してください。

【システム条件】 パネルの「インストール先ディレクトリ」の設定

ドライブ：「なし」

ディレクトリ：「%NETMDMP%¥MASTER¥DB」

なお、上位接続先情報ファイルは、JP1/NETM/DM Client・Delivery Feature がインストールされていない JP1/NETM/DM Client・Base へも配布できます。

クライアントが JP1/NETM/DM システムに接続していない場合は、手動で格納してもかまいません。

(c) 接続先が変更されるタイミング

上位接続先情報ファイルをクライアント PC に格納したあと、ポーリングを実行するかまたはクライアント PC の OS を再起動してください。上位接続先情報ファイルの内容に従って、クライアントが接続する上位システムが設定されます。

クライアントの接続先を自動変更するポーリングは次の 3 種類です。

・ システム起動時からのポーリング

クライアントセットアップの「クライアント常駐・ポーリング」パネルで「システム起動時からのポーリング」のチェックボックスをオンにしている場合

・ 時刻指定によるポーリング

クライアントセットアップの「クライアント常駐・ポーリング」パネルで「時刻指定によるポーリング」のチェックボックスをオンにしている場合

・ [ジョブ実行] アイコンの実行によるポーリング

「スタート」メニューから「ジョブ実行」アイコンを選択した場合

一度設定したあとでも、次の操作をしたあとにポーリングを実行するかまたは OS を再起動すると接続先が再設定されます。

- ・ クライアント PC の IP アドレス変更
- ・ 上位接続先情報ファイルの編集または上書き

クライアント PC を移動して IP アドレスを変更した場合、ポーリングを実行するかまたは OS を再起動するだけで適切な上位システムに接続先が変更されます。エンドユーザは接続先の変更を意識する必要はありません。

上位接続先情報ファイルによってクライアントの接続先の自動設定・変更が起きると、ログが PC ごとにインストール先フォルダ ¥LOG¥USER.LOG ファイルに取得されます。ログの詳細については、マニュアル「運用ガイド 2」の「6.4.1 ログファイルの確認」を参照してください。

なお、上位接続先情報ファイルによって接続先を自動設定したあとに、クライアントセットアップから手動で接続先を変更した場合、ポーリングを実行するかまたは OS を再起動しても手動で設定した接続先が有効になります。

(d) 接続先の自動変更と他機能との関係

上位接続先情報ファイルを使用した接続先の自動変更は、JP1/NETM/DM の他機能と併用できない場合が

あります。次の点に注意してください。

- 上位接続先情報ファイルを使用した接続先の自動変更は、「実行要求の送信による接続先の自動設定」と併用できません。そのため、クライアントセットアップの「接続先」パネルで「実行要求を送信した上位システムを接続先として自動設定する」のチェックボックスをオンにしている場合、上位接続先情報ファイルを格納しても動作しません。
- 上位接続先情報ファイルを使用した接続先の自動変更と「複数 LAN 接続」を併用する場合は、クライアントセットアップの「通信関連」パネルから表示される「ネットワークアダプタの設定」ダイアログボックスで、「クライアントの IP アドレスとして使用する」のチェックボックスをオンにしてください。
- 上位接続先情報ファイルは、マルチポーリング環境の PC には格納しないでください。クライアントセットアップの「接続先」パネルで「複数の上位システムへポーリングする」を設定している場合、上位接続先情報ファイルを格納すると、接続先の上位システムの優先順位が変更されてしまいます。
- 上位接続先情報ファイルによって接続先が変更された場合、新しい接続先はクライアントセットアップの「リモートコレクトオプション」パネルのリモートコレクト許可サーバー一覧には追加されません。
- 接続先に「*」または「?」を設定している場合、上位接続先情報ファイルを使用した接続先の自動変更はできません。ただし、上位接続先情報ファイルをクライアントに格納しておけば、接続先に「*」と「?」以外を指定した時点から自動変更できるようになります。
 プレインストール機能を使って JP1/NETM/DM Client をインストールする場合、上位接続先情報ファイルを格納した状態でハードディスクをコピーすれば、配布後の PC で任意の接続先を指定したとき、上位接続先情報ファイルに従って接続先が変更されます。
- レジストリへの書き込み権限がないユーザでログオンしている場合、クライアントセットアップの「権限」パネルの「一般ユーザ権限で使用する」チェックボックスがオフのときは、[ジョブ実行] アイコンを実行しても接続先の設定は変更されません。

(2) 上位接続先情報ファイル (dmhost.txt) の作成

上位接続先情報ファイルは、dmhost.txt という名称のテキストファイルです。作成方法を次に説明します。

(a) 上位接続先情報ファイルの形式

上位接続先情報ファイルには、クライアント PC の IP アドレスの範囲と対応する接続先の組み合わせを、1 行につき 1 件定義します。1 行の文字数は、半角で 255 文字以内です。各項目間は「,」（コンマ）で区切ってください。行の先頭に「;」（セミコロン）を付けると、その行はコメントと見なされます。

ファイルの形式を次に示します。

形式

最小の IP アドレス, 最大の IP アドレス, 接続先, 接続先の製品種別, 接続先のマルチキャストアドレス

説明

最小の IP アドレス (必ず指定)

クライアントの IP アドレスの範囲で最小の IP アドレスを指定します。半角数字を使用して「xxx.xxx.xxx.xxx」の形式で指定してください。

最大の IP アドレス (必ず指定)

クライアントの IP アドレスの範囲で最大の IP アドレスを指定します。半角数字を使用して「xxx.xxx.xxx.xxx」の形式で指定してください。

接続先 (必ず指定)

接続先のホスト名または IP アドレスを指定します。接続先のノード識別キーの設定がホスト名であればホスト名を、IP アドレスであれば IP アドレスを指定してください。ホスト名の場合、半角英数字 64 文字までを使用して指定してください。IP アドレスの場合、半角数字を使用して「xxx.xxx.xxx.xxx」の形式で指定してください。

接続先の製品種別（必ず指定）

接続先が JP1/NETM/DM Manager であれば「netmdm」を、JP1/NETM/DM Client（中継システム）であれば「netmdmw」を指定してください。

接続先のマルチキャストアドレス（省略可能）

クライアントにジョブをマルチキャスト配布したい場合、接続先に設定しているマルチキャストアドレスを指定します。半角数字を使用して「xxx.xxx.xxx.xxx」の形式で指定してください。マルチキャストアドレスとして使用できるアドレスの範囲は、「224.0.1.0 ～ 239.255.255.255」です。

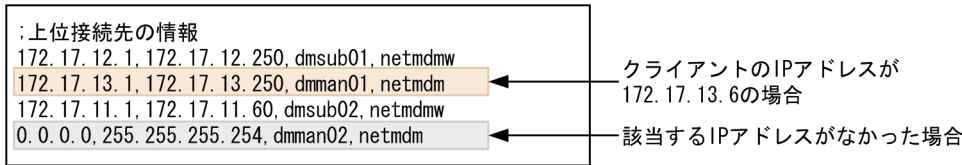
注意事項

- ・クライアントの IP アドレスが定義した範囲に含まれない場合、接続先の設定は変更されません。
- ・クライアントの IP アドレスがループバックアドレス（127.0.0.1）の場合、接続先の設定は変更されません。
- ・クライアントの IP アドレスの範囲が重複する複数の定義をした場合は、先に定義した行が有効となります。
- ・次の場合は、指定行の定義が無効になります。
 - ・1 ～ 4 番目の項目に省略があった場合
 - ・IP アドレスに無効な値を指定した場合
 - ・「接続先」に半角 65 文字以上の値を指定した場合
 - ・接続先の製品種別に「netmdm」および「netmdmw」以外を指定した場合
- ・「接続先のマルチキャストアドレス」の指定を省略した場合、または無効な値を指定した場合、マルチキャストアドレスの設定はできません。ただし、1 ～ 4 番目の項目で定義した、IP アドレスの範囲と対応する接続先の組み合わせは有効になります。
- ・1 行に六つ以上の項目を指定した場合、6 番目の項目以降は無視されます。
- ・1 行の文字数が 255 文字を超えた場合、256 文字目以降は無視されます。

(b) 上位接続先情報ファイルの作成例

上位接続先情報ファイルの作成例を次に示します。

図 6-19 上位接続先情報ファイルの作成例



クライアントの IP アドレスが「172.17.13.6」の場合、2 行目の「172.17.13.1 ～ 172.17.13.250」の範囲に該当するため、接続先の上位システムが「dmman01」に自動的に変更されます。

なお、上位接続先情報ファイルの最終行に、すべての IP アドレスを範囲とする「0.0.0.0 ～ 255.255.255.254」を定義しておくと、該当する IP アドレスがなかったクライアントの接続先の上位システムは、「dmman02」に変更されます。

(c) 上位接続先情報ファイルを配布したあとの注意事項

上位接続先情報ファイルをクライアントに配布して接続先を自動変更したあとで、接続先ホストの IP アドレスを変更するときは、それまで適用していた上位接続先情報ファイルをクライアントから削除してください。接続先の自動変更は、IP アドレスの変更を契機に動作します。

6.5.5 容量の少ない PC でクライアントを使用する場合

クライアントの PC では、常に JP1/NETM/DM Client（クライアント）が動作しています。JP1/NETM/DM Client が常に動作していると、JP1/NETM/DM Client を使用していないときでも、メモリや CPU を使用してしまいます。容量の少ない PC で JP1/NETM/DM Client を使用する場合、通常は JP1/NETM/DM Client を非常駐にしておき、必要なときだけ JP1/NETM/DM Client を動作させる方法が利用できます。

JP1/NETM/DM Client を非常駐にしているクライアントでの運用方法を次に示します。

- クライアント PC を起動すると、1 回だけポーリングが実行されます。自システムあてのジョブがあった場合は、ジョブが実行されます。ジョブの実行が終了すると、JP1/NETM/DM Client は非常駐になります。
- 配布管理システムからのジョブを受信したい場合は、[ジョブ実行] アイコンを起動します。自システムあてのジョブがあるかを確認し、あれば、そのジョブが実行されます。

6.5.6 上位システムを名前解決できない場合の接続設定

運用キーにホスト名を使用している環境では、検疫システムなどによって DNS サーバへの接続が遮断されると、クライアントが接続先の上位システムを名前解決できなくなる場合があります。このような場合に、上位システムからの実行要求情報を受信したタイミングで、通信プロトコル中の IP アドレスから接続先の上位システムを名前解決させることができます。これによって、クライアントが接続先の上位システムを名前解決できない環境でも、ジョブをポーリングしたり上位システムへイベントリ情報を通知したりできます。このときクライアントは、実行要求を発信した上位システムを接続先として認識します。

この機能を使用するには、クライアントのセットアップで次の設定をしてください。

- [クライアント常駐・ポーリング] パネルの「クライアントを常駐する」チェックボックスをオンにする。
- [通信関連] パネルの「起動要求プロトコルで受信した IP アドレスで上位システムに接続する」チェックボックスをオンにする。

この機能を使用すると、上位システムからの実行要求を受信したタイミングで、自動的にクライアントに**上位システムアドレス格納ファイル**が作成されます。上位システムアドレス格納ファイルには、上位システムの IP アドレスとホスト名の対応が記述されます。以降、クライアントはこのファイルに記述された内容を基に上位システムを名前解決して接続します。

なお、通常、上位システムアドレス格納ファイルの編集は不要です。ただし、上位システムを名前解決できない環境にホスト名運用のクライアントを新規に導入する場合は、あらかじめ上位システムアドレス格納ファイルを作成する必要があります。

上位システムを名前解決できない環境にホスト名運用のクライアントを新規に導入する場合の設定については、「(1) 上位システムを名前解決できない環境に新規にクライアントを導入する場合の設定」を参照してください。上位システムアドレス格納ファイルの形式については、「(2) 上位システムアドレス格納ファイルの形式」を参照してください。

注意事項

- 運用キーが IP アドレスの場合は設定不要です。
- 上位システムのバージョンが 06-71 より前の場合、チェックボックスをオンにしても正しく接続できません。
- 上位システムがクラスタシステムの場合、正しく接続できないことがあります。
- 実行要求情報の通信プロトコルが UDP の場合、上位システムが複数のネットワークアダプタを使用した環境では、正しく接続できないことがあります。

(1) 上位システムを名前解決できない環境に新規にクライアントを導入する場合の設定

上位システムを名前解決できない環境にホスト名運用のクライアントを新規に導入する場合、上位システムと接続できないためクライアントがあて先として認識されません。そこで、あらかじめ上位システムアドレス格納ファイルを作成し、次のどちらかの方法でクライアントに格納しておきます。

● クライアントのインストール後に上位システムアドレス格納ファイルを格納する

クライアントのインストール後に、次のフォルダへ上位システムアドレス格納ファイルを格納します。
JP1/NETM/DMのインストール先ディレクトリ¥MASTER¥DB

● JP1/NETM/DM Administrator Kit を利用して上位システムアドレス格納ファイルをコピーする

JP1/NETM/DM Administrator Kit のファイルコピー機能を使用します。インストールセット作成時に、[インストールセットの作成・編集] ダイアログボックスの [コピーファイル] パネルで次の設定をします。

設定項目	設定内容
コピー元ファイル	作成した上位システムアドレス格納ファイルを指定します。
コピー先ディレクトリ	「%NETMDMP%\MASTER¥DB」を指定します。

セットアップが完了したあと、クライアントを再起動すると、上位システムアドレス格納ファイルを基に上位システムと接続します。

(2) 上位システムアドレス格納ファイルの形式

上位システムアドレス格納ファイルには複数の接続先を記述できます。クライアントは、記述されているホスト名に対応した IP アドレスで、上位システムと接続します。

上位システムアドレス格納ファイルの形式を次に示します。

ファイル名

SERVERIP.ini

形式

[ホスト名]
IPaddress=IPアドレス
[#-filecheck]
key=Programcheck

説明

ホスト名

クライアントの接続先のホスト名を指定します。大文字、小文字は区別されません。同じホスト名が複数指定されている場合は、最初のホスト名が使用されます。

IP アドレス

ホスト名に対応する IP アドレスを指定します。

なお、ホスト名と IP アドレスの組み合わせは、一度に複数記述できます。

作成例

上位システムアドレス格納ファイルの作成例を次に示します。

```
[host001]
IPAddress=10.100.100.20
[host005]
IPAddress=10.100.100.15
[host007]
IPAddress=10.100.100.57
[#-filecheck]
key=Programcheck
```

上位システムアドレス格納ファイル作成時の注意事項を次に示します。

- IP アドレスによる接続がエラーとなった場合、エラーとなった部分のホスト名および IP アドレスの組み合わせは削除されます。
- 「[#-filecheck]」の部分を削除すると、上位システムアドレス格納ファイルが削除されます。
- 上位システムアドレス格納ファイルは半角英数字で記述してください。
- クライアントの OS が Windows 98 または Windows Me の場合、括弧内のホスト名の前後にスペースまたはタブを記述すると、不正なホスト名と認識されエラーになります。

6.6 ダイヤルアップ接続の設定

WAN 環境ではダイヤルアップ接続で、回線を接続してから JP1/NETM/DM の運用を開始しますが、JP1/NETM/DM システムの起動時に自動的にダイヤリングを実行し接続することができます。ダイヤルアップ接続は、次に示す接続をするときに使用できます。

- クライアントから、配布管理システムまたは中継システムへ接続する。
- 中継システムから配布管理システムに接続する。
- 配布管理システムから、中継システムに接続する。

配布管理システムからクライアントへ接続する、または中継システムからクライアントへ接続する場合は、ダイヤルアップ接続は使用できません。

また、配布管理システムを階層化したシステムでは、マネージャと中継マネージャ間でのダイヤルアップ接続はできません。

なお、リモートコントロール機能のダイヤリング接続については、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

6.6.1 前提条件

(1) 必要なアプリケーション

ダイヤルアップ接続を使用するには、次のアプリケーション（サービス）が必要です。なお、OS が Windows 8、Windows Server 2012、Windows 7、Windows Server 2008、Windows Vista、Windows Server 2003 または Windows XP の場合、アプリケーション（サービス）は不要です。

OS	アプリケーション（サービス）
Windows NT ServicePack3 以降	リモートアクセスサービス
Windows 2000	
Windows Me または Windows 98	ダイヤルアップネットワーク

リモートアクセスサービスまたはダイヤルアップネットワークで、接続先ホストの情報を設定しておく必要があります。

また、JP1/NETM/DM のインストールまたはセットアップで、ダイヤルアップ接続を使用するかどうかを設定します。また、ダイヤリング時のパスワード、ユーザ名などを設定します。

(2) ダイヤルアップ接続で利用できる機能

ダイヤルアップ接続で利用できる機能を、各コンポーネントに対応するプログラムメニュー別に次の表に示します。

表 6-4 ダイヤルアップ接続で利用できる機能

コンポーネント	サブコンポーネント	プログラムメニュー	使用の可否
サーバ※1	サーバ本体機能	—（基本機能）※2	○
		セットアップ	×
		CSV 出力ユーティリティ	×

コンポーネント	サブコンポーネント	プログラムメニュー	使用の可否
	リモートインストールマネージャ	リモートインストールマネージャ	×
		アンアーカイバ	×
		インベントリレビューア	×
	データベースマネージャ	データベースマネージャ	×
JP1/Cm2 連携機能	—	—	×
JP1/Cm2 連携ゲートウェイサーバ	—	—	×
中継システム※1	中継システム本体機能	—（基本機能）※2	○
		CSV 出力ユティリティ	×
		セットアップ	×
	リモートインストールマネージャ	リモートインストールマネージャ	×
		アンアーカイバ	×
クライアント	クライアント	—（基本機能）※2	○
		ローカルシステムビューア	×
		ID への登録	○
		クライアントマネージャ	×
		ジョブ実行	○
		ユーザ情報設定	×
		セットアップ	×
		サーバへの通知	○
	パッケージセットアップマネージャ	パッケージセットアップマネージャ	○
	付加機能	—	○
	Visual Test 6.0 による配布機能	—	×
パッケージ	—	ソフトウェアパッケージ	○
		パッケージユティリティ	×
Asset Information Manager Limited	—	—	×
Automatic Installation Tool	—	Automatic Installation Tool	×
スタートアップキット機能支援ツール	—	—	×

(凡例)

- ：ダイヤルアップ接続で利用できる
- ×
- ：サブコンポーネントまたはプログラムメニューが存在しない

注※1

中継マネージャまたは中継システムのクライアント機能でのダイヤルアップ接続については、「クライアント」コンポーネント欄を参照してください。

注※2

サーバ、中継システム、またはクライアントをインストールした環境で機能する、基本的な機能です。特定のプログラムメニューは存在しません。

(3) ダイアルアップ接続をする場合の注意事項

ダイアルアップ接続をする場合の注意事項を次に示します。

- 複数の中継システムに接続するクライアントからもダイアルアップ接続を使用できます。この場合、接続先の中継システムは、すべて同一ルータの LAN に設置されている必要があります。
- ダイアルアップ接続で中継システムを 2 階層以上接続すると、中継システムは動作できません。
- リモートアクセスサービスで接続先を電話帳に設定するとき、システムの電話帳を使用してください。
- 配布管理システムまたは中継システムで Windows XP, Windows 2000 Professional, または Windows NT Workstation を使用する場合、複数のクライアントまたは中継システムからダイアルアップ接続で同時に接続することはできません。
- JP1/NETM/DM 以外のアプリケーションがすでに同じ接続先にダイアルアップ接続していた場合、JP1/NETM/DM はその接続を利用します。この場合、JP1/NETM/DM の処理が終了しても接続は切断されません。先に接続したアプリケーションによって切断するか、OS の機能を利用してダイアルアップ接続のタイムアウトを設定することで切断してください。
- Microsoft Internet Explorer の [ツール] - [インターネットオプション] メニューから表示されるダイアログボックスの [接続] タブで、「ネットワーク接続が存在しないときには、ダイヤルする」オプションを選択している場合は、必ず OS の機能を利用してダイアルアップ接続のタイムアウトを設定してください。この設定によって、JP1/NETM/DM が未接続の状態でもユーザが意識しないうちに Microsoft Internet Explorer が自動ダイヤリングし、ダイアルアップ接続したままになることを防げます。
- 配布管理システムから中継システムにダイアルアップ接続中の場合、中継システムから配布管理システムへのダイアルアップ接続に失敗することがあります。このような場合に備えて、中継システム側のセットアップで「ソケットコネクション確立のリトライ回数」に 1 以上の値を設定してください。

6.6.2 ダイアルアップ接続するためのネットワークの設定

ダイアルアップ接続をするには、接続先の情報を設定します。また、接続先のシステムでもサーバ側としての設定やアクセス権限の設定が必要です。

OS ごとの接続先情報の設定について、次に説明します。また、サーバ側の設定やアクセス権限の設定についても説明します。

(1) Windows Server 2003 または Windows XP の場合

Windows Server 2003 または Windows XP での接続先情報の設定について次に示します。

なお、Windows Server 2003 または Windows XP をサーバとして使用する場合は、OS のリモートアクセス関連の設定で、サーバ側としての設定、およびアクセス権限の設定をしてください。

(a) 接続先の情報の設定

接続先の情報の設定方法を次に示します。

1. [スタート] - [コントロールパネル] から [ネットワーク接続] を選択する (Windows XP の場合は、[スタート] の [接続] から「全ての接続の表示」を選択する)。
[ネットワーク接続] フォルダが開きます。
2. [新しい接続ウィザード] アイコンをダブルクリックする。
「新しい接続ウィザード」が開始します。操作手順に従って、[次へ] ボタンをクリックしてください。
「ネットワーク接続の種類」を指定するダイアログボックスが表示されます。
3. 「職場のネットワークへ接続する」を選択する。

「ネットワーク接続の種類」として、「職場のネットワークへ接続する」を選択し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「ネットワーク接続」を指定するダイアログボックスが表示されます。

4. **[ダイヤルアップ接続]を選択する。**

「ネットワーク接続」として「ダイヤルアップ接続」を選択し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「接続名」を指定するダイアログボックスが表示されます。

5. **接続先のホスト名を指定する。**

「接続名」に接続先のホスト名を指定し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「ダイヤルする電話番号」を指定するダイアログボックスが表示されます。

6. **接続先の電話番号を入力する。**

接続先のコンピュータまたはネットワークの電話番号を指定し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「接続の利用範囲」を指定するダイアログボックスが表示されます。

7. **「すべてのユーザー」を選択する。**

作成している接続をすべてのユーザが利用できるように設定します。

8. **[次へ] ボタンをクリックする。**

「新しい接続ウィザード」の完了の確認ダイアログボックスが表示されます。

9. **[完了] ボタンをクリックする。**

設定が保存され、設定した接続先へのダイヤルアップ接続のダイアログボックスが表示されます。ユーザ名とパスワードを指定し、設定どおりダイヤルアップ接続できるか確認してください。

(2) Windows 2000 の場合

Windows 2000 での接続先情報の設定、サーバ側としての設定、およびアクセス権限の設定について次に示します。

(a) 接続先の情報の設定

接続先の情報の設定方法を次に示します。

1. **[スタート] メニューの [設定] を選択する。**

2. **[設定] の [ネットワークとダイヤルアップ接続] から、「新しい接続の作成」を選択する。**

「ネットワークの接続ウィザード」が開始します。操作手順に従って、[次へ] ボタンをクリックしてください。「ネットワーク接続の種類」を指定するダイアログボックスが表示されます。

3. **「プライベートネットワークにダイヤルアップ接続する」を選択する。**

「ネットワーク接続の種類」として、「プライベートネットワークにダイヤルアップ接続する」を選択し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「ダイヤルする電話番号」を指定するダイアログボックスが表示されます。

4. **接続先の電話番号を入力する。**

接続先のコンピュータまたはネットワークの電話番号を指定し、[次へ] ボタンをクリックしてください。「接続の利用範囲」を指定するダイアログボックスが表示されます。

5. **「すべてのユーザー」を選択する。**

作成している接続をすべてのユーザが利用できるように設定します。

6. **[次へ] ボタンをクリックする。**

作成中の接続の名称を指定するダイアログボックスが表示されます。

7. **「接続名」に接続先のホスト名を指定する。**

作成中の接続の名称として、接続先のホスト名を指定してください。

8. **[完了] ボタンをクリックする。**

設定が保存され、設定した接続先へのダイヤルアップ接続のダイアログボックスが表示されます。ユーザ名とパスワードを指定し、設定どおりダイヤルアップ接続できるか確認してください。

(b) サーバ側の設定

ダイヤルアップで接続される側では、サーバとしての設定が必要です。Windows 2000（Windows 2000 Professional 以外）をサーバとして使用する場合は、リモートアクセスサービスで、次に示すサーバの設定をしてください。

1. **【プログラム】－【管理ツール】から、【ルーティングとリモートアクセス】を選択する。**
「ルーティングとリモートアクセス」の管理コンソールが開きます。
2. **ツリー中のローカルコンピュータのアイコンを右クリックし、「ルーティングとリモートアクセスの構成と有効化」を選択する。**
「ルーティングとリモートアクセスサーバのセットアップウィザード」が開始します。手順に従って「リモートアクセスサーバ」を設定してください。リモートアクセスサーバの設定方法は、Windows のヘルプを参照してください。

なお、Windows 2000 Professional をサーバとして使用する場合は、OS のリモートアクセス関連の設定で、サーバとしての設定をしてください。

(c) リモートアクセス権限の設定

ダイヤルアップで接続される側では、接続してくるクライアントのログインを許可する設定が必要です。Windows 2000（Windows 2000 Professional 以外）をサーバとして使用する場合は、リモートアクセスサービスで、次に示すアクセス権限の設定をしてください。

1. **「ルーティングとリモートアクセスサービス」が起動しているか確認する。**
起動していない場合は、「ルーティングとリモートアクセス」の管理コンソールからローカルコンピュータのアイコンを右クリックし、[すべてのタスク]－[開始]を選択してください。
2. **【設定】の【ネットワークとダイヤルアップ接続】から、「着信接続」を選択する。**
[着信接続のプロパティ] ダイアログボックスが表示されます。
3. **「ユーザー」タブを選択する。**
4. **接続を許可するクライアントのユーザ名を選択し、[OK] ボタンをクリックする。**
選択したクライアントからのログインを許可します。

なお、Windows 2000 Professional をサーバとして使用する場合は、OS のリモートアクセス関連の設定で、アクセス権限の設定をしてください。

(3) Windows NT 4.0 の場合

Windows NT 4.0 での接続先情報の設定、サーバ側としての設定、およびアクセス権限の設定について次に示します。

(a) 接続先の情報の設定

Windows NT 4.0 の提供する電話帳に、接続先の情報を設定しておく必要があります。設定方法を次に示します。

新規に電話帳を作成する

電話帳を作成していないシステムでは、新規に電話帳を作成して、接続先の情報を設定します。

1. **【プログラム】の【アクセサリ】から、「ダイヤルアップネットワーク」を選択する。**
「電話帳は、[空です]」のメッセージが表示されたあと、[OK] ボタンをクリックすると「新しい電話帳のエントリウィザード」が表示されます。

2. 電話帳エントリの名前として、接続先のホスト名（ホスト名）を入力する。

[次へ] ボタンをクリックすると [サーバー] ダイアログボックスが表示されます。「電話帳エントリについてはよく知っているので、プロパティを直接編集したい」をチェックした場合は、[電話帳のエントリの編集] ダイアログボックスで設定できます。設定方法については、次の「既存の電話帳を編集する」を参照してください。

3. 「インターネットに接続する」をチェックする。

その他の項目は、ユーザの環境に合わせ設定してください。[次へ] ボタンをクリックすると [モデムまたはアダプタ] ダイアログボックスが表示されます。

4. デバイスの一覧から接続ポートを選択する。

[次へ] ボタンをクリックすると、[電話番号] ダイアログボックスが表示されます。

5. 接続先の電話番号を入力する。

[次へ] ボタンをクリックすると、[新しい電話帳のエントリウィザード] ダイアログボックスが表示されます。

6. [完了] ボタンをクリックする。

接続先を設定した電話帳が作成されます。

既存の電話帳を編集する

電話帳が作成されているシステムでは、既存の電話帳を編集して接続先の情報を設定できます。

1. [プログラム] の [アクセサリ] から、「ダイヤルアップネットワーク」を選択する。

[ダイヤルアップネットワーク] ダイアログボックスが表示されます。

2. [その他] から「エントリとモデムのプロパティの編集」を選択する。

[電話帳のエントリの編集] ダイアログボックスが表示されます。

3. [基本] タブで、接続先ホストのエントリ名（ホスト名）および電話番号を入力する。

4. [サーバー] タブで、「ネットワークプロトコル」の「TCP/IP」を選択する。

5. [OK] ボタンをクリックする。

接続先を設定した電話帳が作成されます。

(b) サーバ側の設定

ダイヤルアップで接続される側では、サーバとしての設定が必要です。Windows NT 4.0 をサーバとして使用する場合、リモートアクセスサービスで、次に示すサーバの設定をしてください。

1. [コントロールパネル] の [ネットワーク] - [リモートアクセスサービス] を選択する。

2. 「ネットワーク」を選択し、「TCP/IP」をチェックする。

3. 「TCP/IP」の構成ボタンをクリックし、「静的アドレスプールを使う」をチェックする

4. 「開始アドレス」、「終了アドレス」を設定する。

(c) リモートアクセス権限の設定

ダイヤルアップで接続される側では、接続してくるクライアントのログインを許可する設定が必要です。Windows NT 4.0 をサーバとして使用する場合、リモートアクセスサービスで、次に示すアクセス権限の設定をしてください。

1. [リモートアクセス管理] を起動する。

リモートアクセスサービスが起動しているか確認してください。起動していない場合は、メニューの [サーバ] - [リモートアクセスサービスの開始] を選択してください。

2. メニューの [ユーザ] - [リモートアクセス許可] を選択する。

3. 接続してくるクライアントのユーザ名を選択し、ログインを許可する。

接続してくるクライアントのユーザ名を選択して、「ユーザーに対してダイヤルインの許可を与える」をチェックしてください。

(4) Windows Me または Windows 98 の場合

Windows Me または Windows 98 からダイヤルアップで上位システムに接続する場合、ダイヤルアップネットワークで接続先の情報を設定します。

接続先の設定方法を次に示します。

Windows Me の場合

1. **【プログラム】 - 【アクセサリ】 - 【通信】 から、「ダイヤルアップネットワーク」を選択する。**
[ダイヤルアップネットワーク] ダイアログボックスが表示されます。
2. **【新しい接続】 ダイアログボックスで、「接続名」に接続先のホスト名を指定する。**
[新しい接続] ダイアログボックスの作成手順に従って電話番号などを設定してください。
3. **設定が完了したら【完了】 ボタンをクリックして終了する。**

Windows 98 の場合

1. **【プログラム】 - 【アクセサリ】 から【ダイヤルアップネットワーク】を選択する。**
[ダイヤルアップネットワーク] ダイアログボックスが表示されます。
2. **【新しい接続】 ダイアログボックスで、「接続先」に接続先のホスト名を指定する。**
[新しい接続] ダイアログボックスの作成手順に従って電話番号などを設定してください。
3. **設定が完了したら【完了】 ボタンをクリックして終了する。**

6.6.3 JP1/NETM/DM のインストール、セットアップで必要な設定

(1) JP1/NETM/DM Manager の場合

セットアップの [ダイヤルアップ] パネルで、「ダイヤルアップで接続する」のチェックボックスをオンにします。また、接続先にログインするときに使用する、接続先のユーザ ID、パスワード、およびドメイン名を設定します。

(2) JP1/NETM/DM Client の場合

インストールとセットアップの両方で設定できます。

インストール時に設定する場合は、[ネットワーク環境の設定] ダイアログボックスで、「ダイヤルアップ接続」のチェックボックスをオンにしてください。次に、[ダイヤルアップの設定] ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスで、接続先にログインするときに使用する、接続先のユーザ ID、パスワード、およびドメイン名を設定します。

セットアップ時に設定する場合は、[ダイヤルアップ] パネルで、「ダイヤルアップ接続」のチェックボックスをオンにしてください。次に、接続先にログインするときに使用する、接続先のユーザ ID、パスワード、およびドメイン名を設定します。

6.6.4 ダイヤルアップ接続の設定確認

ダイヤルアップ接続を使用する前に、Windows 付属のダイヤルアップ接続アプリケーションを使って手動で接続し、正しく接続できるか確認してください。

動作確認をするには、自ホスト、および接続先ホストへ ping を実行します。接続する側とされる側を交互に 5 回程度変更しながら、ping のレスポンスが確実にあること、および IP アドレスが変化しないことを

確認してください。

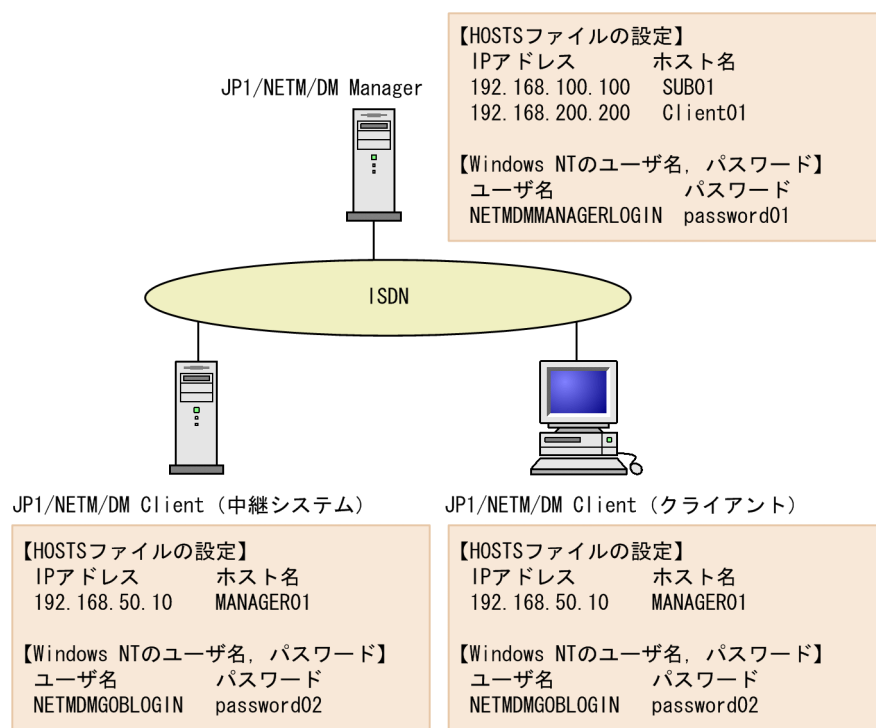
なお、IP アドレス運用をしている場合は、通常の TCP/IP の IP アドレスで、ping を実行してください。通常の TCP/IP で設定した IP アドレスを使用して、ping を実行してもレスポンスがない場合、IP アドレス運用でダイヤルアップ接続を使用できません。

6.6.5 ダイヤルアップ接続の設定例

次の図に示す構成で、ダイヤルアップ接続を行う場合の設定について説明します。この構成では、次に示す接続でダイヤルアップ接続を使用します。

- 配布管理システムから中継システムに接続する。
- 中継システムから配布管理システムに接続する。
- クライアントから配布管理システムに接続する。

図 6-20 ダイヤルアップ接続の構成例



(1) 電話帳の設定

「電話帳」の設定例を次の表に示します。

表 6-5 電話帳の設定例

設定項目	JP1/NETM/DM Manager での設定値	JP1/NETM/DM Client (中継システムまたはクライアント) での設定値
エントリ名	Sub01	Manager01
電話番号	JP1/NETM/DM Client (中継システム) の電話番号	JP1/NETM/DM Manager の電話番号

(2) リモートアクセスサービスのサーバ側の設定

各ホストの IP アドレス（開始アドレスおよび終了アドレス）の設定例を次の表に示します

表 6-6 リモートアクセスサービスのサーバの設定例

設定項目	JP1/NETM/DM Manager での設定値	JP1/NETM/DM Client（中継システム）での設定値	JP1/NETM/DM Client（クライアント）での設定値
開始アドレス	192.168.50.10	192.168.100.100	192.168.200.200
終了アドレス	192.168.50.13	192.168.100.101	192.168.200.201

JP1/NETM/DM Client の中継システムおよびクライアントに割り当てる、リモートアクセスサービスのクライアントの IP アドレスは、ネットワーク ID が異なるように設定してください。

また、JP1/NETM/DM Client の中継システムおよびクライアントで指定するリモートアクセスサービスのサーバの IP アドレスも、ネットワーク ID が異なるように設定してください。

(3) リモートアクセス権限の設定

接続してくるクライアントのユーザ名を選択して、「ユーザーに対してダイアルインの許可を与える」をチェックしてください。リモートアクセス権限の設定例を次の表に示します。

表 6-7 リモートアクセス権限の設定例

設定項目	JP1/NETM/DM Manager での設定値	JP1/NETM/DM Client（中継システム）での設定値
ログインの許可を与えるユーザ名	JP1/NETM/DM Client（中継システムまたはクライアント）のユーザ名	JP1/NETM/DM Manager のユーザ名

(4) JP1/NETM/DM のインストール、セットアップでの設定

JP1/NETM/DM のインストールまたはセットアップでは、次の表のように設定します。

表 6-8 JP1/NETM/DM のインストール、セットアップでの設定例

設定項目	JP1/NETM/DM Manager での設定値	JP1/NETM/DM Client（中継システムおよびクライアント）での設定値
ユーザ名	NETMDMJOBLOGIN	NETMDMMANAGERLOGIN
パスワード	password02	password01
ドメイン名	JP1/NETM/DM Client（中継システム）のドメイン名	JP1/NETM/DM Manager のドメイン名

各ホストでの Windows NT のユーザ名、およびパスワードは、接続先の設定値と同一にしてください。

付録

付録 A プロセス一覧

付録 B ポート番号一覧

付録 C リレーショナルデータベースの構造

付録 D 機能差異

付録 E 各バージョンの変更内容

付録 F 用語解説

付録 A プロセス一覧

JP1/NETM/DM の常駐プロセスを次に示します。プロセスを監視する場合は、この情報を参考にしてください。

なお、JP1/NETM/Remote Control のプロセスについては、マニュアル「JP1/NETM/Remote Control」を参照してください。

付録 A.1 JP1/NETM/DM Manager のプロセス

JP1/NETM/DM Manager 使用時に常駐するプロセスを、次の表に示します。プロセス名のあとの（ ）内の数値は、同時に実行できるプロセス数です。

表 A-1 JP1/NETM/DM Manager のプロセス

プロセス名	機能	対象 OS	常駐する条件
schserv(1)	スケジュールされたジョブを監視するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
srvmain(1)	ジョブおよびインベントリ全般を管理するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmdryctl(1)	ホスト探索を制御するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpadm(1)	サービスから自動起動されるメインプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpsited(1)	中継システム機能のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	中継マネージャの場合
dmpwtcp(1)	起動要求を受信するためのプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	中継マネージャの場合
dmpicron(1)	スケジュール用のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	中継マネージャの場合
dmpsetup(1)	GUI インストール用のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	次に示す条件が重なる場合 - 中継マネージャである - JP1/NETM/DM Manager をインストールしたユーザでログオンしている
alertsrv(1)	システム監視を自動起動するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	次に示す条件が重なる場合 - 中継マネージャである - セットアップで「システムを監視する」を選択している
inetinfo(1)	Microsoft Internet Information Services のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	「Asset Information Manager Limited」が稼働している

(凡例) —：必ず常駐する

付録 A.2 JP1/NETM/DM Client のプロセス

JP1/NETM/DM Client 使用時に常駐するプロセスについて説明します。

(1) 中継システムのプロセス

JP1/NETM/DM Client (中継システム) 使用時に常駐するプロセスを、次の表に示します。プロセス名の

あとの（）内の数値は、同時に実行できるプロセス数です。

表 A-2 JP1/NETM/DM Client（中継システム）のプロセス

プロセス名	機能	対象 OS	常駐する条件
schserv(1)	スケジュールされたジョブを監視するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
srvmain(1)	ジョブおよびインベントリ全般を管理するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpsite(1)	中継システム機能のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpwtcp(1)	起動要求を受信するためのプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpicron(1)	スケジュール用のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpserv(1)	サービスから自動起動されるメインプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	—
dmpsetup(1)	GUI インストール用のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	JP1/NETM/DM Client（中継システム）をインストールしたユーザでログオンしている
dmpusers(1)	パッケージセットアップマネージャを一般ユーザ権限で使用する際の機能を拡張するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	セットアップで「一般ユーザ権限で使用する」を選択している
alertsrv(1)	システム監視を自動起動するプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	セットアップで「システムを監視する」を選択している

（凡例）—：必ず常駐する

(2) クライアントのプロセス

JP1/NETM/DM Client（クライアント）使用時に常駐するプロセスを、次の表に示します。プロセス名のあとの（）内の数値は、同時に実行できるプロセス数です。

表 A-3 JP1/NETM/DM Client（クライアント）のプロセス

プロセス名	機能	対象 OS	常駐する条件
dmpwtcp(1)	起動要求を受信するためのプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している
dmpicron(1)	スケジュール用のプロセスです。	製品がサポートしている全 OS	セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している
dmpserv(1)	サービスから自動起動されるメインプロセスです。	- Windows 8 - Windows Server 2012 - Windows 7 - Windows Server 2008 - Windows Vista - Windows Server 2003 - Windows XP - Windows 2000 - Windows NT 4.0	セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している
dmpstrup(1)	自動起動されるメインプロセスです。	- Windows Me - Windows 98	セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している

プロセス名	機能	対象 OS	常駐する条件
dmpsetup(1)	GUI インストール用のプロセスです。	- Windows Server 2003 - Windows XP - Windows 2000 - Windows NT 4.0	次に示す条件の組み合わせのどちらかについて、全条件を満たした場合 条件の組み合わせ 1 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している - セットアップで「一般ユーザ権限で使用する」を選択していない - JP1/NETM/DM Client をインストールしたユーザでログオンしている 条件の組み合わせ 2 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している - セットアップで「一般ユーザ権限で使用する」を選択している - Administrator 権限を持つユーザでログオンしている
dmpusers(1)	パッケージセットアップマネージャまたは「ジョブ実行」アイコンを使用するときに、一般ユーザ権限で利用できる機能を拡張するプロセスです。	- Windows 8 - Windows Server 2012 - Windows 7 - Windows Server 2008 - Windows Vista - Windows Server 2003 - Windows XP - Windows 2000 - Windows NT 4.0	次に示す条件の組み合わせのどちらかについて、全条件を満たした場合 条件の組み合わせ 1 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している - セットアップで「一般ユーザ権限で使用する」を選択している 条件の組み合わせ 2 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択していない - セットアップで「一般ユーザ権限で使用する」を選択している - セットアップで「非常駐でジョブ実行またはパッケージセットアップマネージャを使用する」を選択している
alertsrv(1)	システム監視を自動起動するプロセスです。	- Windows 8 - Windows Server 2012 - Windows 7 - Windows Server 2008 - Windows Vista - Windows Server 2003 - Windows XP - Windows 2000 - Windows NT 4.0	次に示す条件が重なる場合 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している - セットアップで「システムを監視する」を選択している
artsrv9x(1)	システム監視を自動起動するプロセスです。	- Windows Me - Windows 98	次に示す条件が重なる場合 - セットアップで「クライアントを常駐する」を選択している - セットアップで「システムを監視する」を選択している

付録 B ポート番号一覧

JP1/NETM/DM で使用するポート番号およびファイアウォールの通過方向を説明します。

付録 B.1 ポート番号

JP1/NETM/DM で使用するポート番号を次の表に示します。

各ポート番号は、製品の提供時にデフォルトとして設定されています。各サービス名に対して、同じポート番号で次に示すプロトコルを設定してください。

表 B-1 JP1/NETM/DM で使用するポート番号

ポート番号	プロトコル	サービス名	説明
30000	TCP	netmdm	JP1/NETM/DM サーバ
30001	TCP	netmdmw	中継サーバ
30002	TCP および UDP	netmdmclt	中継 / クライアント起動要求
30008	TCP	なし	データベース接続 (Embedded RDB)
30010	TCP	なし	データベース接続 (Asset Information Manager Limited の Embedded RDB)
20049	TCP	なし	JP1/Cm2 連携機能
22296	UDP	netmdmipmclt	マルチキャスト配布
22294	UDP	netmdmipm	マルチキャスト配布の再送要求
22295	TCP	netmdmgw	JP1/NETM/DM HTTP Gateway

付録 B.2 ファイアウォールの通過方向

ファイアウォールの通過方向を次の表に示します。

表 B-2 ファイアウォールの通過方向

設定が必要なプログラム名	ポート番号 / プロトコル	サービス名	ファイアウォールの通過方向
JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client	30000/tcp	netmdm	- JP1/NETM/DM Manager (上位マネージャ) <- JP1/NETM/DM Manager (下位マネージャ) - JP1/NETM/DM Manager <- JP1/NETM/DM Client (中継システム) - JP1/NETM/DM Manager <- JP1/NETM/DM Client (クライアント)
JP1/NETM/DM Client	30001/tcp	netmdmw	- JP1/NETM/DM Client (上位中継システム) <- JP1/NETM/DM Client (下位中継システム) - JP1/NETM/DM Client (中継システム) <- JP1/NETM/DM Client (クライアント)

設定が必要なプログラム名	ポート番号 / プロトコル	サービス名	ファイアウォールの通過方向
JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client	30002/tcp	netmdmclt	- JP1/NETM/DM Manager (上位マネージャ) -> JP1/NETM/DM Manager (下位マネージャ) - JP1/NETM/DM Manager -> JP1/NETM/DM Client (中継システム) - JP1/NETM/DM Manager -> JP1/NETM/DM Client (クライアント) - JP1/NETM/DM Client (上位中継システム) -> JP1/NETM/DM Client (下位中継システム) - JP1/NETM/DM Client (中継システム) -> JP1/NETM/DM Client (クライアント)
JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client	30002/udp	netmdmclt	- JP1/NETM/DM Manager (上位マネージャ) -> JP1/NETM/DM Manager (下位マネージャ) - JP1/NETM/DM Manager -> JP1/NETM/DM Client (中継システム) - JP1/NETM/DM Manager -> JP1/NETM/DM Client (クライアント) - JP1/NETM/DM Client (上位中継システム) -> JP1/NETM/DM Client (下位中継システム) - JP1/NETM/DM Client (中継システム) -> JP1/NETM/DM Client (クライアント)
JP1/NETM/DM Manager (JP1/Cm2 連携機能)	20049/tcp	なし	Cm2/NNM と JP1/Cm2 連携機能がインストールされた PC <-> JP1/NETM/DM NNM ゲートウェイサーバ
JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client	22296/udp	netmdmip mclt	- JP1/NETM/DM Manager -> JP1/NETM/DM Client (クライアント) - JP1/NETM/DM Client (中継システム) -> JP1/NETM/DM Client (クライアント)
JP1/NETM/DM Manager, JP1/NETM/DM Client	22294/udp	netmdmip m	- JP1/NETM/DM Client (クライアント) -> JP1/NETM/DM Manager - JP1/NETM/DM Client (クライアント) -> JP1/NETM/DM Client (中継システム)

(凡例)

<-: 右項から左項へ方向を表す。

->: 左項から右項へ方向を表す。

<->: 左項から右項、および右項から左項への両方向を表す。

注

22295/tcp (netmdmgw) は、中継マネージャまたは中継システムと HTTP Gateway を同一マシンにインストールした場合だけ、中継マネージャまたは中継システムと HTTP Gateway の通信に使用されるポートです。

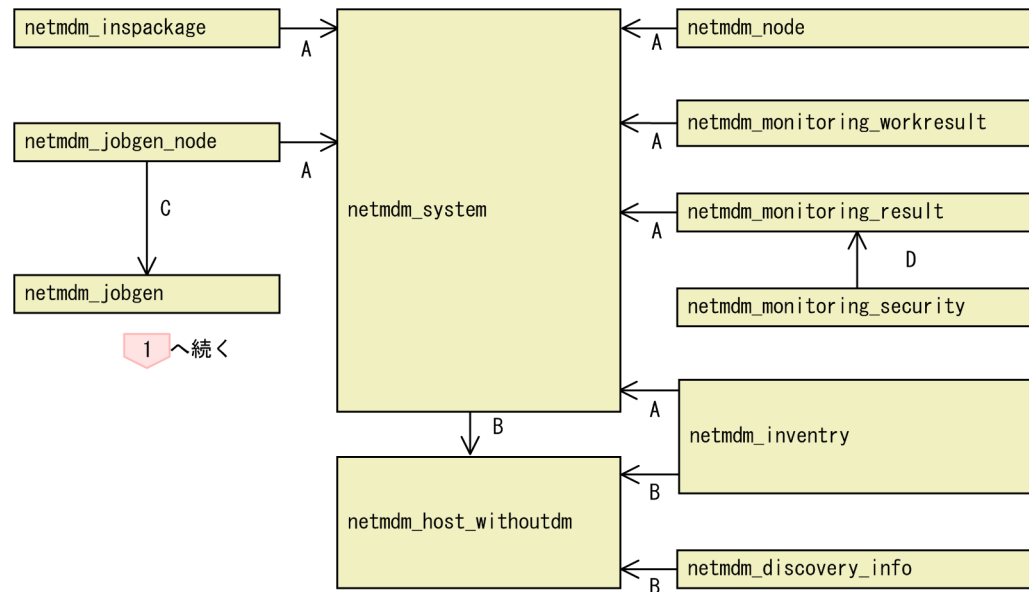
付録 C リレーショナルデータベースの構造

JP1/NETM/DM Manager で使用する，リレーショナルデータベースの構造について説明します。

付録 C.1 リレーショナルデータベースのテーブルの関連

リレーショナルデータベースのテーブルの関連を，図 C-1 ～図 C-5 に示します。

図 C-1 リレーショナルデータベースのテーブルの関連 (1/5)



(凡例)

——> : 関連するテーブル

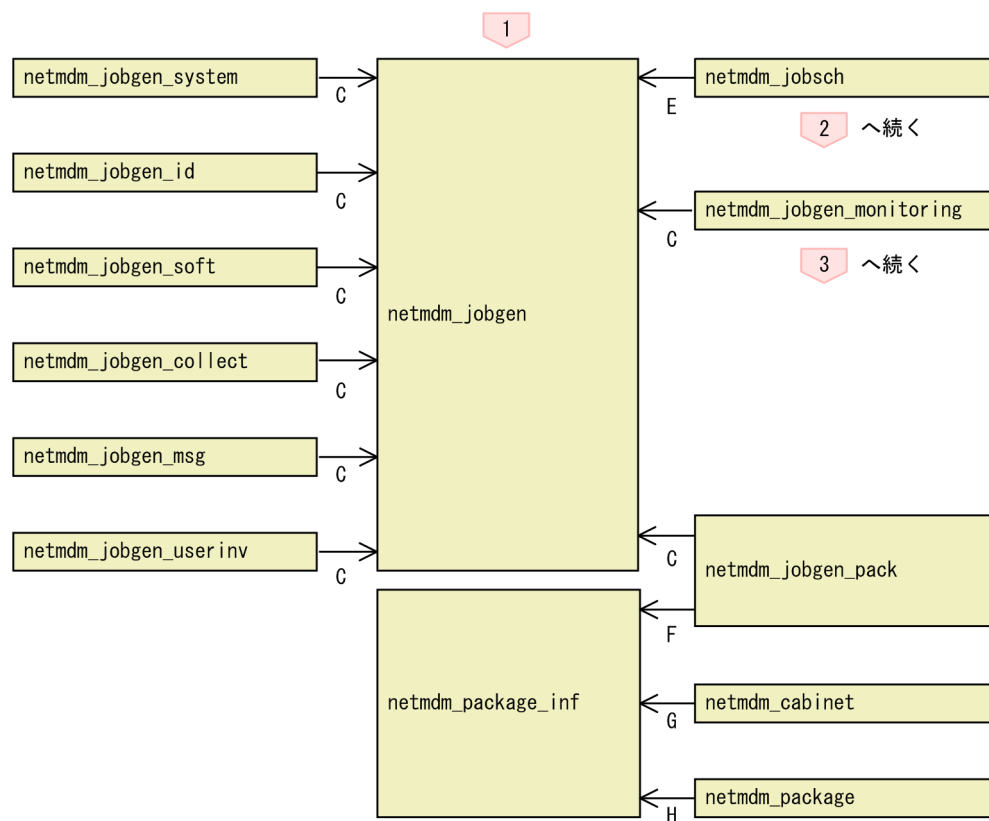
A : dm_nodenameに関連

B : dm_macaddressに関連

C : dm_folder1, dm_folder2, dm_folder3, dm_folder4, dm_jobgennameに関連

D : netmdm_monitoring_resultのすべての項目に関連

図 C-2 リレーショナルデータベースのテーブルの関連 (2/5)



(凡例)

→ : 関連するテーブル

C: dm_folder1, dm_folder2, dm_folder3, dm_folder4, dm_jobgennameに関連

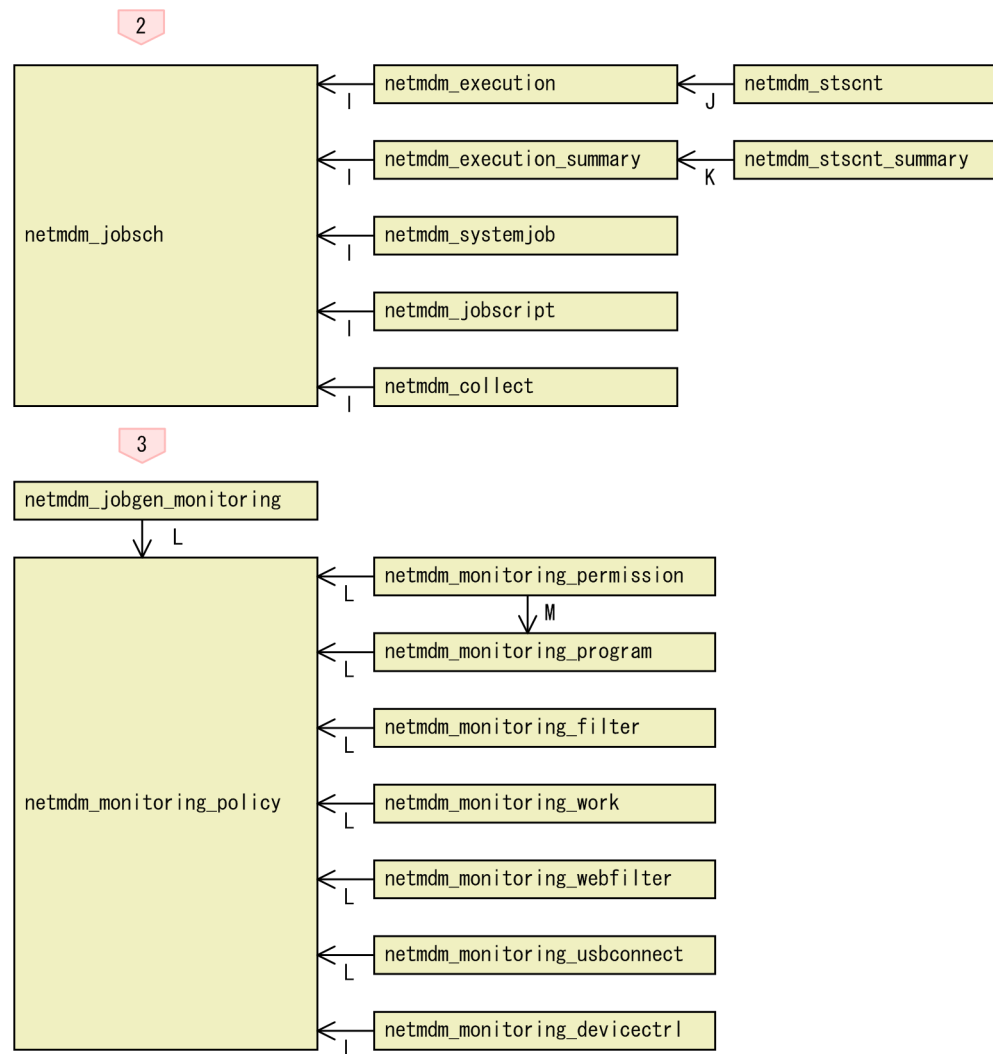
E: dm_jobgennameに関連

F: dm_cabinetid, dm_packageid, dm_version, dm_generationに関連

G: dm_dmtype, dm_cabinetidに関連

H: dm_packagefilenameに関連

図 C-3 リレーショナルデータベースのテーブルの関連 (3/5)



(凡例)

→ : 関連するテーブル

I: dm_jobnoに関連

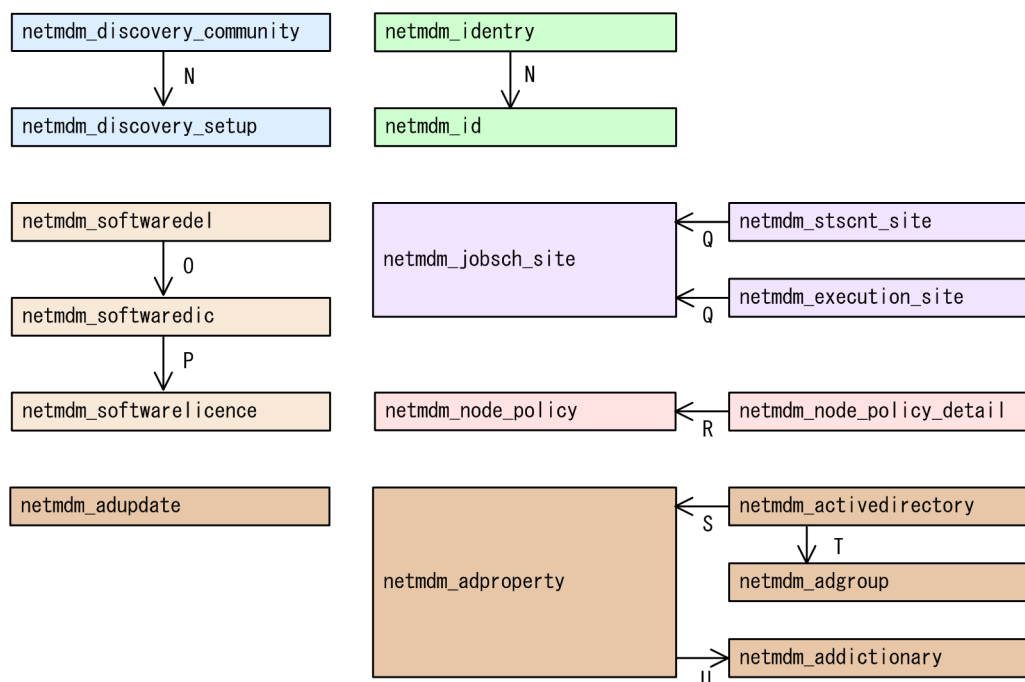
J: dm_jobno, dm_sitenameに関連

K: dm_jobno, dm_primarykeyに関連

L: dm_policynameに関連

M: dm_policyname, dm_sepnumberに関連

図 C-4 リレーショナルデータベースのテーブルの関連 (4/5)

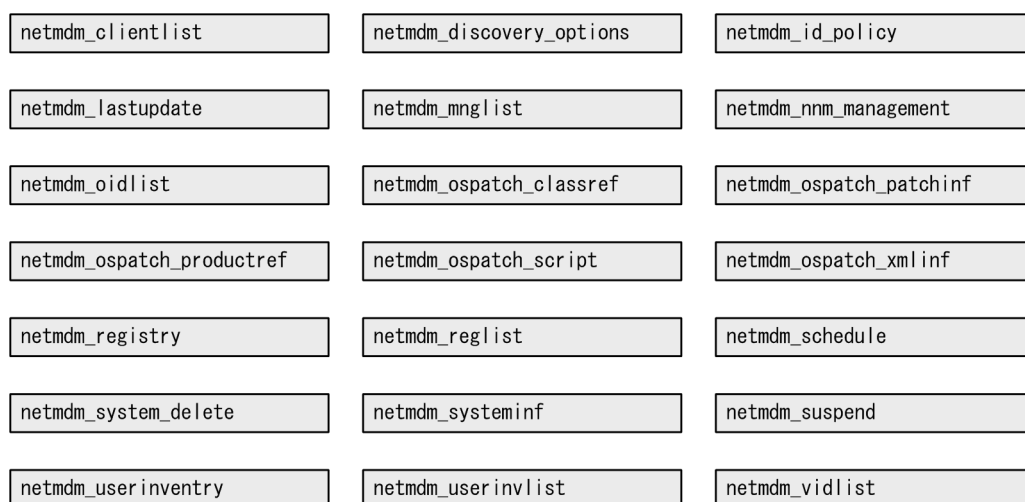


(凡例)

——> : 関連するテーブル

N : dm_setup_keyに関連
 0 : dm_ppname, dm_sversionに関連
 P : dm_filename, dm_createdate, dm_filesizeに関連
 Q : dm_jobnoに関連
 R : dm_infotype, dm_numberに関連
 S : dm_adguidとdm_linkadguidが関連
 T : dm_adguidに関連, また, dm_adguidとdm_groupguidが関連
 U : dm_propertynameとdm_propertynameが関連

図 C-5 リレーショナルデータベースのテーブルの関連 (5/5)



付録 C.2 リレーショナルデータベースのテーブルの一覧

リレーショナルデータベースのテーブルの一覧を, 次の表にアルファベット順に示します。

表 C-1 リレーショナルデータベースのテーブル一覧

テーブル名	概要	参照先
netmdm_activedirectory	ドメイン、コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループの情報を格納します。	付録 C.3
netmdm_addictionary	Active Directory の管理するドメイン、コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループの、プロパティの属性名と表示名との対応を管理します。	付録 C.4
netmdm_adgroup	グループと所属するメンバーの関係を管理します。	付録 C.5
netmdm_adproperty	コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループのプロパティ情報を格納します。	付録 C.6
netmdm_adupdate	Active Directory との連携時に更新した最新のフラグ情報を格納します。	付録 C.7
netmdm_cabinet	パッケージのキャビネットの情報を格納します。	付録 C.8
netmdm_clientlist	ファイル名で検索したソフトウェアインベントリの、クライアント単位の検索結果リストを格納します。	付録 C.9
netmdm_collect	リモートコレクト、および中継までのリモートコレクトジョブの情報を格納します。	付録 C.10
netmdm_discovery_community	ホスト探索設定で指定したコミュニティ名を格納します。	付録 C.11
netmdm_discovery_info	ホスト探索によって探索されたホストの情報を格納します。	付録 C.12
netmdm_discovery_options	ホスト探索のオプション設定を格納します。	付録 C.13
netmdm_discovery_setup	ホスト探索設定の情報を格納します。	付録 C.14
netmdm_execution	ジョブの実行対象となるホストごとの、パッケージ単位の実行状況を格納します。	付録 C.15
netmdm_execution_site	中継システムで実行した ID ジョブの対象となるホストごとの、パッケージ単位の実行状況を格納します。	付録 C.16
netmdm_execution_summary	マネージャで実行した全あて先ジョブの情報を、ジョブ単位に格納します。	付録 C.17
netmdm_host_withoutdm	JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報を格納します。	付録 C.18
netmdm_id	JP1/NETM/DM が運用している ID を格納します。	付録 C.19
netmdm_id_policy	ID を自動的にメンテナンスする条件（ポリシー）を格納します。	付録 C.20
netmdm_identry	ID にエントリされているクライアントを格納します。	付録 C.21
netmdm_inspackage	クライアントごとのパッケージのインストール状態を格納します。	付録 C.22
netmdm_inventry	クライアントごとのシステム情報を格納します。	付録 C.23
netmdm_jobgen	ジョブ定義情報を格納します。	付録 C.24
netmdm_jobgen_collect	ジョブで指定したリモートコレクトに関する情報を格納します。	付録 C.25
netmdm_jobgen_id	ID グループおよび ID エントリ処理用のジョブ定義情報を格納します。	付録 C.26
netmdm_jobgen_monitoring	ジョブで指定したソフトウェアの稼働監視に関する情報を格納します。	付録 C.27
netmdm_jobgen_msg	ジョブ定義情報のうち、クライアントに通知するメッセージの情報を格納します。	付録 C.28
netmdm_jobgen_node	ジョブ定義情報のうち、ジョブの実行対象となるホストの情報を格納します。	付録 C.29
netmdm_jobgen_pack	ジョブ定義情報のうち、ジョブで指定したパッケージの情報を格納します。	付録 C.30

テーブル名	概要	参照先
netmdm_jobgen_soft	ジョブ定義情報のうち、ソフトウェア検索のジョブ情報を格納します。	付録 C.31
netmdm_jobgen_system	システム構成情報と ID を連携させるための情報を格納します。	付録 C.32
netmdm_jobgen_userinv	ジョブ定義情報のうち、ユーザインベントリ情報のジョブ情報を格納します。	付録 C.33
netmdm_jobsch	ジョブの実行状況のヘッダ情報を格納します。	付録 C.34
netmdm_jobsch_site	中継システムで実行した ID ジョブの実行状況のヘッダ情報を格納します。	付録 C.35
netmdm_jobscript	リモートインストール時のジョブのスクリプトファイルを格納します。	付録 C.36
netmdm_lastupdate	テーブルの最終更新日時を格納するテーブルです。	付録 C.37
netmdm_mnglist	ソフトウェア情報の取得ジョブで使用する検索リストを格納します。	付録 C.38
netmdm_monitoring_devicectrl	デバイスごとの抑止・動作の設定情報を格納します。	付録 C.39
netmdm_monitoring_filter	ソフトウェアの稼働監視の、履歴取得時のフィルタリング情報を格納します。	付録 C.40
netmdm_monitoring_permission	ソフトウェアの稼働監視の、許可条件を格納します。	付録 C.41
netmdm_monitoring_policy	ソフトウェアの稼働監視の、稼働監視ポリシーを格納します。	付録 C.42
netmdm_monitoring_program	ソフトウェアの稼働監視の、監視対象プログラムの情報を格納します。	付録 C.43
netmdm_monitoring_result	ソフトウェアの稼働監視の、抑止履歴を格納します。	付録 C.44
netmdm_monitoring_security	[操作ログ一覧] ウィンドウで管理する抑止履歴および操作履歴を格納します。	付録 C.45
netmdm_monitoring_usbconnect	アクセス抑止から除外する USB メモリ情報を管理します。	付録 C.46
netmdm_monitoring_webfilter	Web アクセスログのフィルタリング設定を管理します。	付録 C.47
netmdm_monitoring_work	稼働時間取得の対象となるプログラムの情報を格納します。	付録 C.48
netmdm_monitoring_workresult	ソフトウェアの稼働監視で取得した、ソフトウェアの稼働時間の情報を格納します。	付録 C.49
netmdm_nnm_management	JP1/Cm2 連携機能の情報を格納します。	付録 C.50
netmdm_node	あて先の情報を格納します。	付録 C.51
netmdm_node_policy	あて先グループおよび ID を自動的にメンテナンスする条件（ポリシー）を格納します。	付録 C.52
netmdm_node_policy_detail	機能拡張用の予備エリアです。	—
netmdm_oidlist	「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「Microsoft Office 製品を検索」で取得したソフトウェア情報を格納します。	付録 C.53
netmdm_ospatch_classref	パッチのクラスの情報を格納します。	付録 C.54
netmdm_ospatch_patchinf	パッチの情報および取得したパッチのデータを格納します。	付録 C.55
netmdm_ospatch_productref	パッチが対象とするプログラムの情報を格納します。	付録 C.56
netmdm_ospatch_script	パッチをインストールするためのスクリプトファイルを格納します。	付録 C.57
netmdm_ospatch_xmllinf	パッチ情報ファイルのバージョンを格納します。	付録 C.58
netmdm_package	パッケージおよびインストールスクリプトの本体を格納します。	付録 C.59
netmdm_package_inf	パッケージの属性情報を格納します。	付録 C.60

テーブル名	概要	参照先
netmdm_registry	クライアントのレジストリ情報を格納します。	付録 C.61
netmdm_reglist	レジストリ取得項目を格納します。	付録 C.62
netmdm_schedule	登録されたジョブのスケジュールを格納します。	付録 C.63
netmdm_softwaredel	ソフトウェアインベントリ辞書から削除したソフトウェアを格納します。	付録 C.64
netmdm_softwaredic	クライアントでのソフトウェアインベントリの検索結果を格納します。	付録 C.65
netmdm_softwarelicence	ソフトウェアのライセンス数を格納します。	付録 C.66
netmdm_stscent	ジョブの実行状況を、ジョブの対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納します。	付録 C.67
netmdm_stscent_site	中継システムで実行した ID ジョブの実行状況を、対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納します。	付録 C.68
netmdm_stscent_summary	マネージャから実行した全あて先ジョブの実行状況を、対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納します。	付録 C.69
netmdm_suspend	中断状態かどうかを格納します。	付録 C.70
netmdm_system	システム構成の情報を格納します。	付録 C.71
netmdm_system_delete	システム構成情報の削除履歴を格納します。	付録 C.72
netmdm_systeminf	データベースのフォーマットを格納します。	付録 C.73
netmdm_systemjob	JP1/NETM/DM のシステム情報を格納します。	付録 C.74
netmdm_userinventory	ユーザインベントリ情報を格納します。	付録 C.75
netmdm_userinvlist	ユーザインベントリ項目リストを格納します。	付録 C.76
netmdm_vidlist	「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ウィルス対策製品を検索」で取得したソフトウェア情報を格納します。	付録 C.77

(凡例) — : 該当なし

各テーブルの詳細について、以降で説明します。

なお、以降のテーブルの説明では、表中の項目について次のように示しています。

- 「サイズ」列に示している数値の単位はバイトです。
- 「キー NO」のある項目は、並び替えのキー（基準となる項目）を示します。数字が小さいほど、優先順位の高いキーになります。テーブル内のレコードは、キーに従って昇順に並べ替えられます。

付録 C.3 netmdm_activedirectory

ドメイン、コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_adname	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ドメイン名、コンピュータ名、ユーザ名、組織単位名、およびグループ名	2

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_adtype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	Active Directory から取得した情報種別 • 0x00000000：ドメイン名 • 0x00000001：コンピュータ名 • 0x00000002：ユーザ名 • 0x00000003：組織単位名 • 0x00000004：グループ名	3
dm_adguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	Active Directory でこのオブジェクトに設定されている ID	1
dm_upperadguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	このオブジェクトが所属しているオブジェクトの ID 最上位であるドメインは NULL	—
dm_manageradguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	このオブジェクトがコンピュータで管理者が設定されていた場合の管理者の ID	—
dm_usrlinkadguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	このオブジェクトがコンピュータの場合、ユーザとの引き当てキーとなるユーザの ID	—
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	netmdm_system との引き当てができた場合の運用キー 引き当たらなかったら NULL	—
dm_hierarchicalinf	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	このオブジェクトの階層情報	—
dm_keyvalue	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	このオブジェクトの引き当てキーの値	—
dm_host	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	取得元ホストの情報 ホスト名または IP アドレス	—
dm_gettype	NUMBER	1	tinyint	1	SMALLINT	—	OU 指定でオブジェクト情報が取得されているかを示すフラグ 0：OU 指定で取得されている 1：OU 指定で取得されていない	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.4 netmdm_addictionary

Active Directory の管理するドメイン、コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループの、プロパティの属性名と表示名との対応を管理するテーブルです。

このテーブルの dm_propertyname と netmdm_adproperty の dm_propertyname を引き当てます。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_propertyname	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	プロパティの属性名	—
dm_displayname	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	プロパティの表示名	—
dm_adtype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	プロパティ情報の種別 0x00000000：ドメイン名 0x00000001：コンピュータ名 0x00000002：ユーザ名 0x00000003：組織単位名 0x00000004：グループ名	1
dm_displayno	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	プロパティの表示順 マップテーブルの記載順	2

(凡例) —：該当なし

付録 C.5 netmdm_adgroup

グループと所属するメンバーの関係を管理するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_groupguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	該当するオブジェクトが所属しているグループの ID	1
dm_adguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	該当するオブジェクトの ID	2

付録 C.6 netmdm_adproperty

コンピュータ、ユーザ、組織単位、およびグループのプロパティ情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_propertyname	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	プロパティの属性名	—
dm_propertyvalue	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	プロパティの属性値	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_linkadguid	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	このプロパティがどのオブジェクトのプロパティかを示す ID	1
dm_host	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	取得元ホストの情報 ホスト名または IP アドレス	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.7 netmdm_adupdate

Active Directory と連携した際に更新した、最新のフラグ情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_updateflg_ou	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	Active Directory ごとに管理する OU の更新フラグ	—
dm_updateflg_com	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	Active Directory ごとに管理するコンピュータの更新フラグ	—
dm_updateflg_usr	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	Active Directory ごとに管理するユーザの更新フラグ	—
dm_host	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	取得元ホストの情報 ホスト名または IP アドレス	1
dm_invocationid	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	Active Directory ごとに管理するチェックフラグ	—
dm_ckey	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	コンピュータ引き当てキー	—
dm_ukey	VARCHAR2	2,000	varchar	2,000	MVARCHAR	2,000	ユーザ引き当てキー	—
dm_updateflg_grp	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	Active Directory ごとに管理するグループの更新フラグ	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.8 netmdm_cabinet

パッケージのキャビネットの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	1
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	キャビネット識別 ID • スペース：パッケージのタイプごとの管理レコード • その他：キャビネット識別 ID	2
dm_cabinetname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	キャビネット名	—
dm_systeminf	BLOB	—	image	—	BINARY	96	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.9 netmdm_clientlist

ファイル名で検索したソフトウェアインベントリの、クライアント単位の検索結果リストを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ppno	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	JP1/NETM/DM 内部情報 (PP 番号)	2
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	クライアント名称	1
dm_serchdate	CHAR	19	char	19	CHAR	19	対象ソフトウェア検索日時	—
dm_pathname	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	対象ソフトウェアパス	3

(凡例) —：該当なし

付録 C.10 netmdm_collect

リモートコレクト、および中継までのリモートコレクトジョブの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ名	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1
dm_mngfilename	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	リモートコレクト管理ファイル名	2
dm_mngnumber	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	リモートコレクト管理番号	—
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	リモートコレクトの対象となる、クライアントのホスト名	—
dm_servpath	BLOB	—	image	—	BINARY	260	リモートコレクトしたファイルの格納ファイル名	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.11 netmdm_discovery_community

ホスト探索設定で指定したコミュニティ名を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_setup_key	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ホスト探索設定を識別するキー情報	1
dm_cmnty_name	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	コミュニティ名	—
dm_order_key	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	コミュニティ名の順序	2

(凡例) —：該当なし

付録 C.12 netmdm_discovery_info

ホスト探索によって探索されたホストの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_mac_address	VARCHAR2	12	varchar	12	VARCHAR	12	MAC アドレスを 16 進数の小文字で区切り文字なしで格納	1
dm_ip_address	VARCHAR2	15	varchar	15	VARCHAR	15	IP アドレスを 10 進数の「.」（ドット）区切りで格納	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ip_addr_num	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	dm_ip_address を数値で格納	—
dm_subnet_mask	VARCHAR2	15	varchar	15	VARCHAR	15	サブネットマスク	—
dm_nwaddr	VARCHAR2	15	varchar	15	VARCHAR	15	ネットワークアドレス	—
dm_nodetype	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	ノードの種別 • 0：コンピュータ • 1：ルータ • 2：ブリッジ • 3：リピータ • 4：プリンタ • 5：RMON	—
dm_hostname	VARCHAR2	80	varchar	80	MVARCHAR	80	ホスト名	—
dm_description	VARCHAR2	256	varchar	256	MVARCHAR	256	説明	—
dm_last_dsry_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	最終探索日時	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.13 netmdm_discovery_options

ホスト探索のオプション設定を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
netmdm_discovery_options.dm_validity integer	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	探索結果の有効期間	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.14 netmdm_discovery_setup

ホスト探索設定の情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_setup_key	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	探索設定を識別するキー情報	1
dm_mgmt_name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	名称	—
dm_from_ip	VARCHAR2	15	varchar	15	VARCHAR	15	ホスト探索の開始 IP アドレス	—
dm_from_ip_num	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	dm_from_ip を数値で格納	—
dm_to_ip	VARCHAR2	15	varchar	15	VARCHAR	15	ホスト探索の終了 IP アドレス	—
dm_to_ip_num	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	dm_to_ip を数値で格納	—
dm_schedule	NUMBER	1	tinyint	1	SMALLINT	—	0：即時実行 1：スケジュール実行	—
dm_schdl_period	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	- NULL：即時実行 0：毎日 1：毎週 2：毎月	—
dm_schdl_hour	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	スケジュール実行で設定した時間（時）	—
dm_schdl_min	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	スケジュール実行で設定した時間（分）	—
dm_schdl_day	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	dm_schdl_period が「毎週」の場合 1：日曜日 2：月曜日 3：火曜日 4：水曜日 5：木曜日 6：金曜日 7：土曜日 dm_schdl_period が「毎月」の場合はスケジュール実行日	—
dm_exec_status	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ホスト探索のステータス 0：完了 1：キャンセル 2：エラー 3：実行中 4：未実行	—
dm_total_count	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	—	IP アドレス範囲のアドレス総数	—
dm_exec_count	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	—	ホスト探索を実行した IP アドレスの総数	—
dm_start_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ホスト探索を開始した日時	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_end_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ホスト探索を終了した日時	—
dm_lock	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	ホスト探索設定の内部ロック情報およびオプション情報 ・ 0：ロックしていない ・ ホスト名取得する ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認しない ・ 1：ロック中 ・ ホスト名取得する ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認しない ・ 2：ロックしていない ・ ホスト名取得する ・ ルータから情報取得する ・ 起動確認しない ・ 3：ロックしていない ・ ホスト名取得しない ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認しない ・ 4：ロックしていない ・ ホスト名取得しない ・ ルータから情報取得する ・ 起動確認しない ・ 5：ロックしていない ・ ホスト名取得しない ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認する ・ 6：ロックしていない ・ ホスト名取得する ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認する ・ 7：ロック中 ・ ホスト名取得する ・ ルータから情報取得する ・ 起動確認しない ・ 8：ロック中 ・ ホスト名取得しない ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認しない ・ 9：ロック中 ・ ホスト名取得しない ・ ルータから情報取得する ・ 起動確認しない ・ 10：ロック中 ・ ホスト名取得しない ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認する ・ 11：ロック中 ・ ホスト名取得する ・ 全端末から情報取得する ・ 起動確認する	—
dm_next_exec_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	次回のホスト探索の実行予定日時 即時実行の場合は NULL を格納	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.15 netmdm_execution

ジョブの実行対象となるホストごとの、パッケージ単位の実行状況を格納するテーブルです。「システム情報の取得」など、パッケージを使用しないジョブについては、ホストごとに1レコードを生成します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	—
dm_jobkind	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別コード ・ A：中継サーバからのコレクトファイル収集 ・ C：中継システムのパッケージ一括削除 ・ D：パッケージのインストール ・ E：削除中の通知 ・ F：ファイル転送の再開 ・ G：リモートコレクト ・ H：中継サーバからの結果通知保留 ・ I：ソフトウェア情報の取得 ・ J：クライアントユーザによるインストール ・ K：中継サーバのコレクトファイル削除 ・ L：ID 操作 ・ M：中継システムまでのパッケージ転送 ・ N：システム構成情報の取得 ・ O：システム構成編集 ・ P：ファイル転送の中断 ・ S：中継までのリモートコレクト ・ T：中継サーバの結果通知の保留解除 ・ U：ユーザーインベントリ情報の転送 ・ V：システム情報の取得 ・ Y：レジストリ取得項目の転送 ・ 1：メッセージの通知 ・ 8：ソフトウェア稼働監視の制御 ・ 9：ソフトウェア稼働情報の取得	—
dm_jobtype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別サブコード ・ D：毎日実行 ・ F：強制インストール ・ M：毎月実行 ・ U：ユーザ組み込み ・ W：毎週実行 ・ スペース：サブコード指定なし	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_clientname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	dm_nodename 列に格納された あて先の最下位システム（クライアント）の名称	2
dm_primarykey	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	プライマリキー（ジョブの詳細 ごとに付けられた番号）	1
dm_sitename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	dm_nodename 列に格納された あて先の最上位システムの名称	—
dm_status	CHAR	6	char	6	CHAR	6	ステータスコード	—
dm_installdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストール完了日付	—
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	—
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	パッケージが格納されている キャビネットの ID	—
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	—
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	—
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	—
dm_deliverytime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	パッケージの転送日時	—
dm_installtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストール日時	—
dm_packagename	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	パッケージ名	—
dm_deletetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	削除日時	—
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブの実行日時	—
dm_systeminf	BLOB	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager の管理 情報	—
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	—
dm_userstatus	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	ユーザステータス（16 進表示）	—
dm_detailstatus	VARCHAR2	28	varchar	28	MVARCHAR	28	保守情報	—
dm_execday	VARCHAR2	2	varchar	2	MVARCHAR	2	定期実行ジョブの実行日	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_execweek	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	定期実行のジョブの実行曜日 0x01：日曜日 0x02：月曜日 0x04：火曜日 0x08：水曜日 0x10：木曜日 0x20：金曜日 0x40：土曜日	—
dm_executing	VARCHAR2	1	varchar	1	MVARCHAR	1	ジョブの実行タイミング - B：システム起動時 - E：システム稼働中 - S：システム停止時	—
dm_nodename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	運用キー（ホスト識別子またはノード識別キー）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_attrflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	属性フラグ 0x00：自システムのジョブ 0x01：他システムからの転送ジョブ	—
dm_userinfoption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	ユーザインベントリ取得オプション 0x00：システム情報とユーザインベントリ情報の取得 0x01：ユーザインベントリ情報だけの取得	—
dm_managename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	所属マネージャ名称	—
dm_orgprimekey	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	全あて先ジョブ用プライマリキー	—
dm_nodename2	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_woloption	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	クライアント制御と配布方式 0x01：あて先を起動する 0x02：あて先をシャットダウンする 0x04：マルチキャスト配布する 0x08：中断中でも配布する 0x40：ソフトウェア稼働情報をアーカイブしない	—
dm_splitsize	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	分割サイズ	—
dm_transsize	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	転送サイズ	—
dm_transinterval	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	転送休止時間	—
dm_downlevel	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	階層レベル	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.16 netmdm_execution_site

中継システムで実行した ID ジョブ（パッケージのインストールとクライアントユーザによるインストール）の対象となるホストごとの、パッケージ単位の実行状況を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	—
dm_jobkind	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブの種別コード • D：パッケージのインストール • J：クライアントユーザによるインストール	—
dm_jobtype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブの種別サブコード • F：強制インストール • U：ユーザ組み込み • スペース：サブコード指定なし	—
dm_clientname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	dm_nodename 列に格納されたあて先の最下位システム（クライアント）の名称	—
dm_primarykey	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	プライマリキー（ジョブの詳細ごとに付けられた番号）	1
dm_sitename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	dm_nodename 列に格納されたあて先の最上位システムの名称	—
dm_status	CHAR	6	char	6	CHAR	6	ステータスコード	—
dm_installdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストール完了日付	—
dm_dmtype	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C：WS（UNIX） • D：PC（Windows）	—
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	パッケージが格納されているキャビネットの ID	—
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	—
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	—
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	—
dm_deliverytime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	配布日時	—
dm_installtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストール日時	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_packagename	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	パッケージ名	—
dm_deletetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	削除日時	—
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブの実行日時	—
dm_systeminf	BLOB	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	—
dm_userstatus	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	ユーザステータス (16 進表示)	—
dm_detailstatus	VARCHAR2	28	varchar	28	MVARCHAR	28	保守情報	—
dm_execday	VARCHAR2	2	varchar	2	MVARCHAR	2	定期実行ジョブの場合の実行日	—
dm_execweek	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	定期実行ジョブの実行曜日 • 0x01：日曜日 • 0x02：月曜日 • 0x04：火曜日 • 0x08：水曜日 • 0x10：木曜日 • 0x20：金曜日 • 0x40：土曜日	—
dm_exectiming	VARCHAR2	1	varchar	1	MVARCHAR	1	ジョブの実行タイミング • B：システム起動中 • E：システム稼働中 • S：システム停止中	—
dm_nodename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	運用キー（ホスト識別子またはノード識別キー）で構成されたあて先の経路情報	2
dm_nodename2	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.17 netmdm_execution_summary

マネージャで実行した全あて先ジョブの情報を、ジョブ単位に格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	—
dm_nodename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	あて先名（経路含む）	1
dm_primarykey	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	プライマリキー（ジョブの詳細ごとに付けられた番号）	2
dm_status	CHAR	6	char	6	MCHAR	6	ステータスコード	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.18 netmdm_host_withoutdm

検出された JP1/NETM/DM 未導入ホストの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_macaddress	VARCHAR2	12	varchar	12	MVARCHAR	12	MAC アドレスを 16 進数の小文字で区切り文字なしで格納	1
dm_targetflag	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	ノードを検出対象とするかどうかのフラグ 0：検出の対象とする 1：検出の対象外とする 2：保留 9：撤去	—
dm_name	VARCHAR2	80	varchar	80	MVARCHAR	80	ノード名称（通常はホスト名）	—
dm_description	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノードの説明	—
dm_ipaddress	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	IP アドレス	—
dm_subnet	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	サブネットマスク	—
dm_nwaddr	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	ネットワークアドレス	—
dm_finddate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ノードを最初に検出した日時	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_lastupdatetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ノードの最終更新日時	—
dm_nodetype	NUMBER	2	tinyint	1	SMALLINT	—	ノードの種別 • 0：コンピュータ • 1：ルータ • 2：ブリッジ • 3：リピータ • 4：プリンタ • 5：RMON	—
dm_ip_addr_num	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	dm_ipaddress を数値形式で格納	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.19 netmdm_id

JP1/NETM/DM が運用している ID を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_genno	RAW	1	binary	1	BINARY	1	世代番号 • 0x01：旧インターフェース作成 ID • 0x02：新インターフェース作成 ID	—
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	1
dm_password	RAW	32	binary	32	BINARY	32	暗号化パスワード	—
dm_procflag	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	処理フラグ • 0x0000：有効 ID • 0x0001：ID 削除中	—
dm_attrflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	属性フラグ • 0x00：自システムで作成した ID • 0x01：上位の配布管理システムから作成した ID	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.20 netmdm_id_policy

ID を自動的にメンテナンスする条件（ポリシー）を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_infotype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ポリシー種別 • 8: ユーザインベントリ項目による ID 登録	—
dm_nodeattrrange	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	グルーピング対象のノード属性 • 0: すべてのノード種別 • 1: クライアントだけ	—
dm_condition1_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 1 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition1_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 1, 2 間の論理演算子	—
dm_condition2_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 2 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition2_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 2, 3 間の論理演算子	—
dm_condition3_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 3 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition3_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 3, 4 間の論理演算子	—
dm_condition4_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 4 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition4_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 4, 5 間の論理演算子	—
dm_condition5_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 5 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition5_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 5, 6 間の論理演算子	—
dm_condition6_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 6 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition6_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 6, 7 間の論理演算子	—
dm_condition7_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 7 (ユーザインベントリ項目) の文字列データ	—
dm_condition7_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 7, 8 間の論理演算子	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_condition8_string	VAR CHAR 2	64	varchar	64	MVAR CHAR	64	条件 8（ユーザインベントリ項目）の文字列データ	—
dm_condition8_logical	VAR CHAR 2	10	varchar	10	MVAR CHAR	10	条件 8, 9 間の論理演算子	—
dm_condition9_string	VAR CHAR 2	64	varchar	64	MVAR CHAR	64	条件 9（ユーザインベントリ項目）の文字列データ	—
dm_condition9_logical	VAR CHAR 2	10	varchar	10	MVAR CHAR	10	条件 9, 10 間の論理演算子	—
dm_condition10_string	VAR CHAR 2	64	varchar	64	MVAR CHAR	64	条件 10（ユーザインベントリ項目）の文字列データ	—
dm_condition1_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 1（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition2_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 2（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition3_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 3（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition4_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 4（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition5_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 5（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition6_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 6（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition7_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 7（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition8_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 8（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition9_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 9（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_condition10_value	VAR CHAR 2	200	varchar	200	MVAR CHAR	200	条件 10（ユーザインベントリ項目）の選択値	—
dm_idname	VAR CHAR 2	32	varchar	32	MVAR CHAR	32	登録先の ID 名	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.21 netmdm_identry

ID にエントリされているクライアントを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	1
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称	2
dm_attributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ノード属性 1：下位の中継システムが管理しているクライアント 2：配布管理システムが管理しているクライアント 3：ID を管理している下位の中継システム	3
dm_procflag	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	処理フラグ 0x0000：有効 ID 0x0001：ID 削除中 0x0002：ID 登録中	—
dm_sitename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	- dm_attributes が 1 のとき：dm_nodename のクライアントの上位の ID 管理中継 - dm_attributes が 1 以外るとき：NULL	—
dm_nodename2	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称（小文字に変換していない値）	—
dm_sitename2	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	- ノード属性が 1 のとき：ID 管理中継の名称（小文字に変換していない値）だけ有効 - その他：NULL	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.22 netmdm_inspackage

クライアントごとのパッケージのインストール状態を格納するテーブルです。このテーブルによって、クライアントごとに、どのようなパッケージがインストールされているかを検索できます。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	3
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	パッケージが格納されているキャビネットのキャビネット識別 ID	—
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	2
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	クライアントのホスト識別子 (ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー)	1
dm_newversion	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	—
dm_newgeneration	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	—
dm_newdeliverydate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	パッケージの転送日	—
dm_newinstalldate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	パッケージのインストール日	—
dm_oldversion	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	旧バージョンのパッケージ	—
dm_oldgeneration	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	旧バージョンのパッケージの世代番号	—
dm_olddeliverydate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	旧バージョンのパッケージの転送日	—
dm_oldinstalldate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	旧バージョンのパッケージのインストール日	—
dm_inststatus	CHAR	6	char	6	MCHAR	6	ステータスコード (ジョブの保守コードを左から 6 けた分格納)	—
dm_installdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストール日時またはソフトウェア検索日時	—
dm_packagename	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	パッケージ名	—
dm_capacity	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	パッケージの容量	—
dm_systeminf	BLOB	—	image	—	BINARY	960	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_userstatus	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	ユーザステータス (16 進表示)	—
dm_drivetype	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	ドライブのタイプ • 0: ローカルドライブ • 1: ネットワークドライブ	—

(凡例) —: 該当なし

付録 C.23 netmdm_inventory

クライアントごとのシステム情報を格納するテーブルです。一つのクライアントの詳細なシステム情報 (CPU 種別や空きハードディスク容量など) を 1 レコードずつ分割して管理します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	クライアントのホスト名	1
dm_sysinfname	RAW	2	binary	1	SMALLINT	—	システム情報のタイプ	2
dm_exkind	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	システム情報の拡張タイプ	3
dm_systeminf	VARCHAR2	200	varchar	200	MVARCHAR	200	システム情報の値	—
dm_subinf	VARCHAR2	200	varchar	200	MVARCHAR	200	システム情報のサブ情報	—

(凡例) —: 該当なし

システム情報ごとの各列に設定される値を次に示します。

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
CPU タイプ	0x01	1: Intel x86/Pentium 2: COMPAQ Alpha または HP Alpha 3: MIPS R Series 4: Motorola PowerPC 6: AMD 7: Cyrix 8: IDT - A: RISE - B: Hitachi SH - C: Transmeta - D: ARM - E: Intel IPF - F: AMD64 - G: Intel EM64T 9: その他	この表の後ろにある「● CPU タイプ」を参照してください。
コプロセッサ	0x02	0x00	1: あり 0: なし
実メモリ容量	0x03	0x00	メガバイト単位の値を 10 進表記文字で設定
マシン種別 (UNIX だけ)	0x04	0x00	UNIX のマシン種別を設定
CPU クロック数	0x05	0x00	CPU のクロック数をメガヘルツの単位で設定
マシン情報	0x06	0x01: 製造元	PC の製造元を設定
		0x02: モデル	PC のモデルを設定
プロセッサ数	0x07	0x00	プロセッサの数を設定
WMI	0x08	0x00	WMI バージョンを文字列で設定 (利用できない場合は "N/A" が設定される)
CPU 外部クロック数	0x09	0x01	CPU の外部クロック数をメガヘルツの単位で設定
OS	0x10	- W: WS 系 - P: PC 系	この表の後ろにある「● OS」を参照してください
OS バージョン	0x12	1: Windows 2: Windows NT 3: Windows 95 4: Windows 98 5: Windows 2000 6: Windows CE 7: Windows Me 8: Windows XP 9: その他 - A: Windows CE .NET - B: Windows Server 2003 - C: Windows Vista - D: Windows Server 2008 - E: Windows 7 - F: Windows Server 2008 R2 - G: Windows 8 - H: Windows Server 2012	<i>vvrr</i> <i>vv</i>: バージョン <i>rr</i>: リビジョン

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
OS ビルド番号 /OS パッチ情報	0x13	0x00	Windows の場合 OS ビルド番号 UNIX の場合 OS パッチ情報
OS ライセンス情報 (UNIX だけ)	0x14	0x00	• S : 2 ユーザライセンス • E : 8 ユーザライセンス • B : 16 ユーザライセンス • U : 無制限のユーザライセンス
UNIX の OS バージョン	0x15	0x39	UNIX の OS バージョンを設定
所有者名	0x16	0x00	所有者名を設定
会社名	0x17	0x00	会社名を設定
OS サブバージョン	0x18	0x00	文字列で OS 種別 +OS バージョンに (サービスパック) を付加する例 : 「Windows NT4.0 (Service Pack 1)」
コンピュータ名	0x19	0x00	コンピュータ名

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
OS 情報	0x1A	0x00 : OS ファミリー名	文字列で OS 種別を設定 • Microsoft Windows (Windows 95, 98, または Windows Me の場合) • Microsoft Windows NT Workstation • Microsoft Windows NT Server • Microsoft Windows NT Enterprise Server • Microsoft Windows 2000 Professional • Microsoft Windows 2000 Server • Microsoft Windows 2000 Advanced Server • Microsoft Windows 2000 Datacenter Server • Microsoft Windows XP Home Edition • Microsoft Windows XP Professional • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003, Standard Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003, Enterprise Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003, Datacenter Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003, Web Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003 Standard x64 Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003 Enterprise x64 Edition • Microsoft(R) Windows(R) Server 2003 Datacenter x64 Edition • MicrosoftR Windows Vista? Business^{※ 1} • MicrosoftR Windows Vista? Enterprise^{※ 1} • MicrosoftR Windows Vista? Ultimate^{※ 1} • MicrosoftR Windows Vista? Business x64 Edition^{※ 1} • MicrosoftR Windows Vista? Enterprise x64 Edition^{※ 1} • MicrosoftR Windows Vista? Ultimate x64 Edition^{※ 1} • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Standard • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Standard x64 Edition • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Enterprise • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Enterprise x64 Edition • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Datacenter • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Datacenter x64 Edition • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Standard without Hyper-V • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Standard without Hyper-V x64 Edition • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Enterprise without Hyper-V • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Enterprise without Hyper-V x64 Edition • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Datacenter without Hyper-V • MicrosoftR Windows ServerR 2008 Datacenter without Hyper-V x64 Edition

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
			• Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard • Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise • Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter • Microsoft Windows 7 Professional • Microsoft Windows 7 Professional x64 Edition • Microsoft Windows 7 Enterprise • Microsoft Windows 7 Enterprise x64 Edition • Microsoft Windows 7 Ultimate • Microsoft Windows 7 Ultimate x64 Edition • Microsoft Windows 8 • Microsoft Windows 8 x64 Edition • Microsoft Windows 8 Pro • Microsoft Windows 8 Pro x64 Edition • Microsoft Windows 8 Enterprise • Microsoft Windows 8 Enterprise x64 Edition • Microsoft Windows Server 2012 Standard • Microsoft Windows Server 2012 Datacenter
		0x01：ドメイン種別	ドメイン種別をコードで設定 • 0：スタンドアロンワークステーション • 1：メンバワークステーション • 2：スタンドアロンサーバ • 3：メンバサーバ • 4：バックアップドメインコントローラ • 5：プライマリドメインコントローラ
		0x02：詳細 OS 種別	下記以外の OS の場合、エントリ種別 0x10 で設定された OS 種別コード値を 10 進表記した 5 バイト文字列で設定 • 00258：Windows NT Workstation • 00514：Windows NT Server • 01538：Windows NT Enterprise Server • 00777：Windows 2000 Professional • 00521：Windows 2000 Server • 01033：Windows 2000 Advanced Server • 01289：Windows 2000 Datacenter Server • 00780：Windows XP Professional • 01804：Windows XP Home Edition • 02062：Microsoft Windows Server 2003, Standard Edition • 02318：Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition • 02574：Microsoft Windows Server 2003, Datacenter Edition • 02830：Microsoft Windows Server 2003, Web Edition

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
			• 03086 : Microsoft Windows Server 2003, Standard x64 Edition • 03342 : Microsoft Windows Server 2003, Enterprise x64 Edition • 03598 : Microsoft Windows Server 2003, Datacenter x64 Edition • 04111 : Windows Vista Business • 07183 : Windows Vista Business x64 Edition • 04367 : Windows Vista Enterprise • 03343 : Windows Vista Enterprise x64 Edition • 04623 : Windows Vista Ultimate • 07439 : Windows Vista Ultimate x64 Edition • 04880 : Microsoft Windows Server 2008 Standard • 03088 : Microsoft Windows Server 2008 Standard x64 Edition • 04368 : Microsoft Windows Server 2008 Enterprise • 03344 : Microsoft Windows Server 2008 Enterprise x64 Edition • 05392 : Microsoft Windows Server 2008 Datacenter • 03600 : Microsoft Windows Server 2008 Datacenter x64 Edition • 05648 : Microsoft Windows Server 2008 Standard without Hyper-V • 06416 : Microsoft Windows Server 2008 Standard without Hyper-V x64 Edition • 05904 : Microsoft Windows Server 2008 Enterprise without Hyper-V • 06672 : Microsoft Windows Server 2008 Enterprise without Hyper-V x64 Edition • 06160 : Microsoft Windows Server 2008 Datacenter without Hyper-V • 06928 : Microsoft Windows Server 2008 Datacenter without Hyper-V x64 Edition • 04882 : Microsoft Windows Server 2008 R2 Standard • 04370 : Microsoft Windows Server 2008 R2 Enterprise • 05394 : Microsoft Windows Server 2008 R2 Datacenter • 00785 : Windows 7 Professional • 05137 : Windows 7 Professional x64 Edition • 04369 : Windows 7 Enterprise • 03345 : Windows 7 Enterprise x64 Edition • 04625 : Windows 7 Ultimate • 07441 : Windows 7 Ultimate x64 Edition • 07699 : Windows 8 • 04371 : Windows 8 Enterprise • 07955 : Windows 8 Pro • 08211 : Windows 8 x64 Edition • 03347 : Windows 8 Enterprise x64 Edition • 08467 : Windows 8 Pro x64 Edition • 05396 : Windows Server 2012 Datacenter • 04884 : Windows Server 2012 Standard
		0x03 : コンピュータの説明	コンピュータの説明を文字列で設定

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
		0x04：ドメイン/ワークグループ	ドメイン/ワークグループを文字列で設定
		0x05：ログオンユーザ名	ログオンユーザ名を文字列で設定
		0x06：ユーザフルネーム	ユーザフルネームを文字列で設定
		0x07：ユーザの説明	ユーザの説明を文字列で設定
		0x08：現在のタイムゾーン	タイムゾーンを数値で設定
		0x09：マシン UUID	マシン UUID を文字列で設定
		0x0A：マシンシリアルナンバー	マシンシリアルを文字列で設定
		0x0B：ブートデバイス	ブートデバイスを文字列で設定
		0x0D：OS インストール日時	インストールの日付を文字列で設定
		0x0E：最終起動日時	最後の起動日時を文字列で設定
		0x10：ロケール	ロケールを UINT で設定
		0x11：OS の言語	OS の言語を UINT で設定
		0x12：Windows ディレクトリ	Windows ディレクトリを文字列で設定
		0x13：システムディレクトリ	システムディレクトリを文字列で設定
		0x14：OS シリアルナンバー	OS シリアルナンバーを文字列で設定
		0x15：インターネットエクスプローラバージョン	インターネットエクスプローラのバージョンを文字列で設定
		0x16：Windows Installer	Windows Installer のバージョンを文字列で設定（インストールされていない場合は "N/A" が設定される）
		0x17：MBSA	クライアントのインストール先ディレクトリ ¥CLIENT¥MBSA に格納されている、MBSA のコマンドラインインターフェース（mbsaccli.exe ファイル）の製品バージョンを文字列で設定 格納されていない場合は次の文字列を設定 - WUA がインストールされている "N/A (The Windows Update Agent is available)" - WUA がインストールされていない "N/A"
		0x18：Windows Update Agent	WUA のバージョンを文字列で設定（インストールされていない場合は "N/A" が設定される）
		0x19：WSUS コンピュータ ID	WSUS コンピュータ ID を文字列で設定
IE パッチ情報	0x1B	0x01：全体情報 0x02～0xFF：分割情報（セミコロンで分割）	IE パッチ情報を文字列で設定（レジストリがなかった場合、または値が空白だった場合は、0x01 および 0x02 に "N/A" が設定される）

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
クライアントバージョン	0x21	• 0 : NETM/DM/P • 1 : NETM/DM/W • 2 : NETM/DM/W-CT • 3 : NETM/DM/W-MM EX • 4 : Remote Installation Client • 5 : NETM/DM SubManager Version 3.0 • 6 : NETM/DM Client Version 3.0 • 7 : NETM/DM/W Version 3.0 • 8 : JP1/NETM/DM SubManager • 9 : JP1/NETM/DM Client • A : JP1/NETM/DM/W • B : JP1/NETM/DM Manager • C : UNIX 版 JP1/NETM/DM SubManager • D : UNIX 版 JP1/NETM/DM Client • E : JP1/NETM/DM Client Light Edition • F : JP1/NETM/DM Client FLORA Edition • H : JP1/NETM/DM Client - Base • I : JP1/NETM/DM Client ※ 2	<i>vvrrss</i> • <i>vv</i> : バージョン • <i>rr</i> : リビジョン • <i>ss</i> : 限定コード
ドライブの種類	0x2F	A ～ Z ドライブ	ドライブの種類を以下の文字列で設定 • リムーバブルハードディスク • ネットワークディスク • CD-ROM

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
空きハードディスク容量	0x31	A ～ Z ドライブ UNIX 版 V5 以前の場合 • 0x31：UNIX ルートパーティション通番 • 0x01 ～ 0x2F：UNIX ルートパーティション以外のパーティション通番 UNIX 版 V6 以降，UNIX パーティション識別番号の場合 • 0x01：UNIX ルートパーティション通番 • 0x02 ～ 0x2F：UNIX ルートパーティション以外のパーティション通番 Windows CE（ペルソナ，DT-5000）の場合 • 0x01：オブジェクトストア • 0x02：メモリカード • 0x03：メモリカード 2 Windows CE（NPD-20JWL）の場合 • 0x01：オブジェクトストア • 0x02：MMC_SDCard（マルチメディアカードまたは SD カード） • 0x03：メモリカード（PC カードまたは CF カード）	メガバイト単位の値を 10 進表記文字で設定
利用可能ユーザメモリ容量	0x32	0x00	メガバイト単位の値を 10 進表記文字で設定
利用可能システムリソース容量	0x33	0x00	キロバイト単位の値を 10 進表記文字で設定
UNIX スペシャルファイル名	0x34	0x01 ～ 0x400x31 の拡張情報に対応	スペシャルファイル名を設定
UNIX マウントパス名	0x35	0x01 ～ 0x400x31 の拡張情報に対応	スペシャルファイル名を設定
メモリの容量	0x36	0x00：物理メモリの空き容量	物理メモリの空き容量をメガバイト単位で設定
		0x01：仮想メモリの空き容量	仮想メモリの空き容量をメガバイト単位で設定
		0x02：仮想メモリの全容量	仮想メモリの全容量をメガバイト単位で設定
		0x03：ページファイルの容量	ページファイルの容量をメガバイト単位で設定
メモリスロットの容量	0x37	• 0x00：単数 • 0x01 ～：複数	メモリスロットの容量をメガバイト単位で設定
バス種別	0x40	0x00：プライマリバス種別	プライマリバスを文字列で設定

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
		0x01：セカンダリバス種別	セカンダリバスを文字列で設定
BIOS	0x41	0x00：BIOS 製造元	BIOS 製造元を文字列で設定
		0x01：BIOS リリース日時	BIOS リリース日時を文字列で設定
		0x02：BIOS バージョン	BIOS バージョンを文字列で設定
		0x03：BIOS バージョン (SMBIOS)	SMBIOS の BIOS バージョンを文字列で設定
		0x04：AMT ファームウェアバージョン	AMT のファームウェアバージョンを文字列で設定
キーボード	0x42	0x00：単数 0x01～：複数	キーボードを文字列で設定
マウス	0x43	0x00：単数 0x01～：複数	マウスを文字列で設定
マウスのボタン数	0x44	0x00：単数 0x01～：複数	マウスのボタン数を UCHAR で設定
全ディスク容量	0x51	A～Z ドライブ	メガバイト単位の値を 10 進表記文字で設定
ファイルシステム	0x52	A～Z ドライブ UNIX の場合は区画番号 (0x01～0x2F)	ファイルシステムを文字列で設定
ハードディスクのインターフェース	0x53	0x00：単数 0x01～：複数	ハードディスクのインターフェースを文字列で設定
ハードディスクのパーティション数	0x54	0x00：単数 0x01～：複数	ハードディスクのパーティション数を UINT で設定
ハードディスクの容量	0x55	0x00：単数 0x01～：複数	ハードディスクの容量をメガバイト単位で設定
ハードディスクのモデル	0x56	0x00：単数 0x01～：複数	ハードディスクのモデルを文字列で設定
CD-ROM ドライブ	0x57	0x00：単数 0x01～：複数	CD-ROM ドライブの名称を文字列で設定
BitLocker による暗号化情報	0x58	A～Z ドライブ	BitLocker の設定情報 0000000000：無効 0000000001：有効 0000000002：不明 0000000003：有効（ロック中）
JP1/ 秘文 IC および秘文 IC による暗号化情報	0x59	A～Z ドライブ	JP1/ 秘文 IC および秘文 IC の設定情報 0000000000：無効 0000000001：有効
秘文 FDE による暗号化情報	0x5A	A～Z ドライブ	秘文 FDE の設定情報 0000000000：無効 0000000001：有効
ビデオドライバ	0x61	0x00	ビデオドライバ名を設定
ビデオチップ	0x62	0x00	ビデオチップ名を設定
VRAM 容量	0x63	0x00	メガバイト単位の値を 10 進表記文字で設定

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
画面情報	0x64	0x00	$xx \times yy$ cc 色 • xx : 横サイズ • yy : 縦サイズ • cc : 発色数
モニタ種別	0x65	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	モニタ種別を文字列で設定
サウンドカード製造元	0x66	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	サウンドカード製造元を文字列で設定
サウンドカード製品名	0x67	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	サウンドカード製品名を文字列で設定
MAC アドレス	0x81	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	MAC アドレスを 16 進表記文字で設定
ネットワークアダプタ	0x82	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	ネットワークアダプタを設定
デフォルトルータアドレス	0x83	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	デフォルトルータアドレスを文字列で設定
サブネットマスク	0x84	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	サブネットマスクを文字列で設定
IP アドレス	0x85	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	IP アドレスを文字列で設定 複数の場合はスペースで連結
プライマリ DNS サーバアドレス	0x86	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プライマリ DNS サーバを文字列で設定
セカンダリ DNS サーバアドレス	0x87	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	セカンダリ DNS サーバを文字列で設定
DHCP	0x88	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	DHCP の有効 / 無効を通知 • 0 : 無効 • 1 : 有効
DHCP サーバアドレス	0x89	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	DHCP サーバアドレスを文字列で設定
DHCP リース期限日時	0x8A	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	DHCP リース期限日時を文字列で設定
DHCP リース取得日時	0x8B	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	DHCP リース取得日時を文字列で設定
WINS サーバアドレス	0x8C	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	WINS サーバを文字列で設定 複数の場合はスペースで連結
プリンタ名	0x90	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プリンタ名を文字列で設定
プリンタ共有名	0x91	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プリンタ共有名を文字列で設定
プリンタサーバ名	0x92	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プリンタサーバ名を文字列で設定
プリンタ用紙サイズ	0x93	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プリンタ用紙サイズを文字列で設定
プリンタドライバ	0x94	• 0x00 : 単数 • 0x01 ~ : 複数	プリンタドライバを文字列で設定

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
プリンタポート	0x95	0x00：単数 0x01～：複数	プリンタポートを文字列で設定
プリンタ種別	0x96	0x00：単数 0x01～：複数	プリンタ種別を文字列で設定
セキュリティ関連	0xA0	0x01：Guest アカウント	Guest アカウントの有効 / 無効 0：無効 1：有効 2：Guest アカウントなし
		0x02：脆弱なパスワード	脆弱なパスワードが設定されているアカウントを文字列で設定 脆弱なパスワードがなかった場合は次の文字列を設定 @None
		0x03：無期限のパスワード	無期限パスワードが設定されているアカウントを文字列で設定 無期限パスワードがなかった場合は次の文字列を設定 @None
		0x04：自動ログオンの設定	自動ログオンの設定の有無 0：設定なし 1：設定あり
		0x05：共有フォルダ	共有フォルダの有無 0：共有フォルダなし 1：共有フォルダあり
		0x06：匿名接続の制限	匿名接続による制限の有無 0：制限なし 1：制限あり
		0x07：スクリーンセーバー	スクリーンセーバーの設定の有無 0：無効 1：有効
		0x08：スクリーンセーバー パスワードの保護機能	スクリーンセーバーのパスワード保護機能の有効 / 無効 0：無効 1：有効
		0x09：パワーオンパスワード	パワーオンパスワードの設定の有無 0：設定なし 1：設定あり 2：未実装 3：不明
		0x0A：Windows ファイアウォールの設定	Windows ファイアウォールの設定の有効 / 無効 0：無効 1：有効（例外を許可する） 2：有効（例外を許可しない）
		0x0B：Windows 自動更新	Windows 自動更新の有効 / 無効 0：無効 1：有効
		0x0C：不要なサービス	稼働している不要なサービスの有無 0：稼働なし 1：稼働あり

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
	0xA1	ローカルアカウント名 • 0x00：単数 • 0x01～：複数	ローカルアカウント名を設定
	0xA2	Windows パスワードを更新してからの日数 • 0x00：単数 • 0x01～：複数	Windows パスワードを更新してからの経過日数を設定
ディストリビューション	0xA3	0x00	Linux のディストリビューション名を設定
セキュリティ関連	0xA5	0x01：モニタの電源を切る (AC)	モニタの電源 (AC) を切る時間 (秒単位) を文字列で設定 • 0：設定なし • 1～2147483647：電源を切る時間 (秒) • N/A：不明
		0x02：モニタの電源を切る (DC)	モニタの電源 (DC) を切る時間 (秒単位) を文字列で設定 • 0：設定なし • 1～2147483647：電源を切る時間 (秒) • N/A：不明
		0x03：プロセッサ調整 (AC)	プロセッサの電源管理状態 (プロセッサ調整 (AC)) を文字列で設定 • N/A：不明 • NONE：常に最大のパフォーマンス状態で動作 • CONSTANT：常に最小のパフォーマンス状態で動作 • DEGRADE：ロック調整停止機能使用 • ADAPTIVE：CPU の状態に基づいて選択
		0x04：プロセッサ調整 (DC)	プロセッサの電源管理状態 (プロセッサ調整 (DC)) を文字列で設定 • N/A：不明 • NONE：常に最大のパフォーマンス状態で動作 • CONSTANT：常に最小のパフォーマンス状態で動作 • DEGRADE：ロック調整停止機能使用 • ADAPTIVE：CPU の状態に基づいて選択
		0x05：ハードディスクの電源を切る (AC)	ハードディスクの電源 (AC) を切る時間 (秒単位) を文字列で設定 • 0：設定なし • 1～2147483647：電源を切る時間 (秒) • N/A：不明
		0x06：ハードディスクの電源を切る (DC)	ハードディスクの電源 (DC) を切る時間 (秒単位) を文字列で設定 • 0：設定なし • 1～2147483647：電源を切る時間 (秒) • N/A：不明
		0x07：システムスタンバイ / スリープ (AC)	コンピュータがシステムスタンバイまたはスリープ状態 (AC) になるまでの時間 (秒単位) を文字列で設定 • 0：設定なし • 1～2147483647：経過時間 (秒) • N/A：不明

システム情報	dm_sysinfname	dm_exkind	dm_systeminf
		0x08：システムスタンバイ / スリープ (DC)	コンピュータがシステムスタンバイまたはスリープ状態 (DC) になるまでの時間 (秒単位) を文字列で設定 0：設定なし 1 ～ 2147483647：経過時間 (秒) - N/A：不明
		0x09：システム休止状態 (AC)	コンピュータが休止状態 (AC) になるまでの時間 (秒単位) を文字列で設定 0：設定なし 1 ～ 2147483647：経過時間 (秒) - N/A：不明
		0x0A：システム休止状態 (DC)	コンピュータが休止状態 (DC) になるまでの時間 (秒単位) を文字列で設定 0：設定なし 1 ～ 2147483647：経過時間 (秒) - N/A：不明

注※ 1

JIS コード第 3 水準および第 4 水準の文字は、「?」に置き換えられます。

注※ 2

バンドル版の JP1/NETM/DM Client です。

● CPU タイプ

コード	説明	コード	説明
646	Intel 80286	902	Intel 80386
1158	Intel 80486	1414	Intel Pentium シリーズまたは互換 CPU
4097	Alpha	8193	MIPS R2000 系
12289	PowerPC	20481	PA-RISC
24577	SPARC	28672	Intel Pentium シリーズ
28673	Intel Pentium	28674	Intel Pentium MMX
28675	Intel Pentium Pro	28676	Intel Pentium II
28677	Intel Pentium II Xeon	28678	Intel Pentium III
28679	Intel Pentium III Xeon	28680	Intel Celeron
28681	Intel Pentium 4	28682	Pentium III-S
28683	Mobile Intel Celeron	28684	Mobile Intel Pentium 4
28685	Intel Xeon	28686	Intel Xeon MP
28687	Mobile Intel Pentium III-M	28688	Intel Genuine
28689	Mobile Genuine Intel	28690	Intel Celeron M
28691	Intel Pentium M	28692	Intel Pentium D
28693	Intel Celeron D	28694	Intel Core2
28695	Intel Core	28696	Intel Core i7
28697	Intel Atom	28698	Intel Pentium Dual
28699	Intel Core i3	28700	Intel Core i5
32768	Intel Pentium 互換 CPU	33025	AMD K6

コード	説明	コード	説明
33026	AMD K6-2	33027	AMD K6-2 3D Now!
33028	AMD K6-III	33029	AMD Athlon
33030	AMD Duron	33031	AMD Athlon MP
33032	AMD Athlon XP	33033	Mobile AMD Athlon 4
33034	Mobile AMD Duron	33035	AMD Duron MP
33036	Mobile AMD Athlon XP-M	33037	AMD Sempron
33038	Mobile AMD Sempron	33039	AMD Turion
33281	Cyrix MediaGX	33282	Cyrix MII
33283	Cyrix MediaGXm	33537	IDT WinChip
33793	RISE mP6	34049	Transmeta Crusoe Processor TM5600
36864	Windows CE 用 CPU	37120	Windows CE 用 CPU (Hitachi)
37121	Hitachi SH-3	37122	Hitachi SH-4
37376	Windows CE 用 CPU (MIPS 系)	37377	MIPS R3000 系
37378	MIPS R4000 系	37632	Windows CE 用 CPU (ARM 系)
37633	ARM720	40960	Intel IPF CPU
40961	Intel Itanium	40962	Intel Itanium 2
45056	AMD64 互換 CPU	45057	AMD Opteron
45058	AMD Athlon 64	45059	AMD Athlon 64 FX
45060	Mobile AMD Athlon 64	45061	AMD Athlon 64 X2
45062	AMD Turion 64	45063	AMD Athlon II
45064	AMD Turion II	45065	AMD Phenom
45066	AMD Phenom II	45067	AMD V Series
45068	AMD FX	45069	AMD A Series
45070	AMD C Series	45071	AMD E Series
45311	AMD	—	—

(凡例) — : 該当なし

● OS

コード	説明	コード	説明
1	MS-DOS+Windows	2	Windows NT
3	OS/2	4	Windows 95
5	SCO ODT	6	Solaris PC
7	NEXTSTEP	8	Windows 98
9	Windows 2000	10	Windows CE
11	Windows Me	12	Windows XP
13	Windows CE .NET	14	Windows Server 2003
15	Windows Vista	16	Windows Server 2008
17	Windows 7	18	Windows Server 2008 R2
19	Windows 8	20	Windows Server 2012

コード	説明	コード	説明
130	HI-UX/WE2	131	HP-UX
132	Solaris	134	HP Tru64 UNIX
135	AIX	137	NEWS-OS
144	UX/4800	145	Linux
146	MP-RAS	147	IRIX

付録 C.24 netmdm_jobgen

ジョブ定義情報を格納するテーブルです。作成したジョブに 1 対 1 に対応し、ジョブのヘッダ情報を格納します。netmdm_jobgen_node および netmdm_jobgen_pack に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層（未使用時は NULL）	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層（未使用時は NULL）	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層（未使用時は NULL）	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層（未使用時は NULL）	4
dm_kind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	行種別 1：フォルダ情報行 2：ジョブ定義情報行 5：ID ジョブ定義情報行	—
dm_jobgenname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobgenattributes	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別コード ・ A：中継サーバからのコレクトファイル収集 ・ C：中継システムのパッケージ一括削除 ・ D：パッケージのインストール ・ E：削除中の通知 ・ F：ファイル転送の再開 ・ G：リモートコレクト ・ H：中継サーバからの結果通知保留 ・ I：ソフトウェア情報の取得 ・ J：クライアントユーザによるインストール ・ K：中継サーバのコレクトファイル削除 ・ L：ID 操作 ・ M：中継システムまでのパッケージ転送 ・ N：システム構成情報の取得 ・ O：システム構成編集 ・ P：ファイル転送の中断 ・ S：中継までのリモートコレクト ・ T：中継サーバの結果通知の保留解除 ・ U：ユーザインベントリ情報の転送 ・ V：システム情報の取得 ・ Y：レジストリ取得項目の転送 ・ 1：メッセージの通知 ・ 8：ソフトウェア稼働監視の制御 ・ 9：ソフトウェア稼働情報の取得	—
dm_jobtype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別サブコード ・ F：強制インストール ・ スペース：強制インストール以外	—
dm_createtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ定義作成日時	—
dm_updatetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ定義最終更新日時	—
dm_systeminf	RAW	20	binary	20	BINARY	20	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_workday	VARCHAR2	6	varchar	6	MVARCHAR	6	クライアントでの実行日 "YYMMDD" 実行時間および実行間隔を毎月実行に指定したときに有効	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_worktime	VARCHAR2	6	varchar	6	MVARCHAR	6	クライアントでの実行時間 "hhmmss" 実行時間および実行間隔を設定したときに有効	—
dm_execday	VARCHAR2	2	varchar	2	MVARCHAR	2	クライアントでの実行日 "DD" 実行間隔を毎月実行に設定したときに有効	—
dm_execweek	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	クライアントでの実行曜日 実行間隔を設定したときに有効 0x01：日曜日 0x02：月曜日 0x04：火曜日 0x08：水曜日 0x10：木曜日 0x20：金曜日 0x40：土曜日	—
dm_execetime	VARCHAR2	1	varchar	1	MVARCHAR	1	クライアントでの実行タイミング - B：システム起動時 - E：システム稼働中 - S：システム停止時	—
dm_attrflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	属性フラグ 0x00：自システムのジョブ 0x01：他システムからの転送ジョブ	—
dm_userinfooption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	ユーザインベントリ取得オプション 0x00：システム情報とユーザインベントリ情報の取得 0x01：ユーザインベントリ情報だけの取得	—
dm_userinfooption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	ユーザインベントリ取得の即時通知オプション 0x00：ジョブ実行時に通知する 0x01：即時に通知する 0x02：変更がある場合だけ通知する	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_reginfoption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	レジストリ情報およびシステム情報取得オプション JP1/NETM/DM 06-52 以前の場合 0x00：レジストリ情報は差分，システム情報はすべての情報を取得 0x01：レジストリ情報，システム情報共にすべての情報を取得 JP1/NETM/DM 06-71 以降の場合 0x02：レジストリ情報は差分，システム情報はすべての情報を取得 0x03：レジストリ情報，システム情報共にすべての情報を取得 0x06：レジストリ情報，システム情報共に差分の情報を取得 0x07：レジストリ情報はすべて，システム情報は差分の情報を取得	—
dm_woloption	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	クライアント制御と配布方式 0x01：あて先を起動する 0x02：あて先をシャットダウンする 0x04：マルチキャスト配布する 0x08：中断中でも配布する 0x40：ソフトウェア稼働情報をアーカイブしない	—
dm_splitsize	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	分割サイズ	—
dm_transinterval	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	転送休止時間	—
dm_schoption	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	スケジュール情報設定種別 設定値は次の数値の組み合わせ - NULL：スケジュール指定しない 1：ジョブ登録日時指定 2：ジョブ実行日時設定 4：ジョブ実行期限指定	—
dm_entrytime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ登録日時	—
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ実行日時	—
dm_timeout	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ実行期限	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.25 netmdm_jobgen_collect

リモートコレクトや中継までのリモートコレクトジョブの定義で、ジョブで指定したリモートコレクトに関する情報を格納するテーブルです。netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層（未使用時は NULL）	1
dm_folder2	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層（未使用時は NULL）	2
dm_folder3	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層（未使用時は NULL）	3
dm_folder4	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層（未使用時は NULL）	4
dm_jobgennam e	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ名	5
dm_dirname	BLOB	—	image	—	BINA RY	260	収集ファイル格納ディレクトリ名	—
dm_scriptfile	LON G RAW	—	image	—	BLOB	—	ジョブスクリプトファイル実体	—
dm_systeminf	BLOB	—	image	—	BINA RY	784	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—

（凡例） —：該当なし

付録 C.26 netmdm_jobgen_id

ID グループおよび ID エントリ処理用のジョブ定義情報を管理するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder_1	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	フォルダ 1 階層	1
dm_folder_2	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	フォルダ 2 階層	2
dm_folder_3	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	フォルダ 3 階層	3
dm_folder_4	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	フォルダ 4 階層	4
dm_jobgennam e	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ジョブ名	5
dm_idname	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVAR CHAR	32	ID 名称	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_password	RAW	32	binary	32	BINARY	32	暗号化パスワード	—
dm_request	CHAR	1	char	1	CHAR	1	要求種別 • F: ID グループ追加 • G: ID グループ削除 • W: パスワード変更 • R: エントリ追加 • E: エントリ削除	—
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称	—
dm_option	RAW	1	binary	1	BINARY	1	JP1/NETM/DM 内部情報	—

(凡例) —: 該当なし

付録 C.27 netmdm_jobgen_monitoring

「ソフトウェア稼働監視の制御」ジョブの定義で、ジョブで指定したソフトウェアの稼働監視に関する情報を格納します。netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層 (未使用時は NULL)	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層 (未使用時は NULL)	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層 (未使用時は NULL)	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層 (未使用時は NULL)	4
dm_jobgenname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ポリシー名	—
dm_permanent	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	稼働監視するプロセスを常駐させるかどうか • 0x00: 常駐 • 0x01: 非常駐	—

(凡例) —: 該当なし

付録 C.28 netmdm_jobgen_msg

ジョブ定義情報のうち、クライアントに通知するメッセージの情報を格納するテーブルです。

netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層（未使用時は NULL）	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層（未使用時は NULL）	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層（未使用時は NULL）	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層（未使用時は NULL）	4
dm_jobgenname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_level	CHAR	1	char	1	CHAR	1	メッセージのアイコン ・ I：情報 ・ N：注意 ・ W：警告	—
dm_title	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	メッセージのタイトル	—
dm_message	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	メッセージの本文	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.29 netmdm_jobgen_node

ジョブ定義情報のうち、ジョブの実行対象となるホストの情報を格納するテーブルです。ジョブ作成時に指定したホストに、1 対 1 に対応します。netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層（未使用時は NULL）	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層（未使用時は NULL）	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層（未使用時は NULL）	3

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層（未使用時は NULL）	4
dm_jobgennam e	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_clientname	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	ジョブの実行対象となる中継システムまたはクライアント、ID、あて先グループの名称※	—
dm_nodeattrib utes	NUMBER	15	int	4	INTEGER	—	dm_nodename の属性 • 0x00000000：[あて先] ウィンドウで指定したあて先グループ • 0x00000001：[あて先] ウィンドウで指定したクライアント • 0x00000002：[あて先] ウィンドウで指定した中継システム • 0x00000004：[あて先] ウィンドウで指定した ID • 0x01000001：[システム構成] ウィンドウで指定したクライアント • 0x01000002：[システム構成] ウィンドウで指定した中継システム • 0x80000000：任意に指定したホスト	7
dm_systeminf	RAW	17	binary	17	BINARY	17	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_nodename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	運用キー（ホスト識別子またはノード識別キー）で構成されたあて先の経路情報	6
dm_descriptor	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_nodename 2	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—

（凡例）—：該当なし

注※

格納内容があて先グループ名の場合、バージョンによって次のようにデータが異なります。

- JP1/NETM/DM 06-00 以前：最上層から末端までの経路を含むあて先グループ名
- JP1/NETM/DM 06-01 以降：末端のあて先グループ名

付録 C.30 netmdm_jobgen_pack

ジョブ定義情報のうち、ジョブで指定したパッケージの情報を格納するテーブルです。パッケージを指定するジョブ以外では使用されません。ジョブ作成時に指定したパッケージに、1 対 1 に対応します。

netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層	4
dm_jobgennam e	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	6
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	パッケージが格納されているキャビネットのキャビネット識別 ID	7
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	8
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	9
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	10
dm_jobtype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別サブコード • F : 強制インストール • スペース : サブコード指定なし	—
dm_attrinf	BLOB	—	image	—	BINARY	784	パッケージ属性	—
dm_scriptfile	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	ジョブスクリプトファイル実体	—
dm_systeminf	RAW	255	binary	255	BINARY	255	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_nodename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	運用キー（ホスト識別子またはノード識別キー）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_nodename 2	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_installatio nturn	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	パッケージのインストール順序	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.31 netmdm_jobgen_soft

ジョブ定義情報のうち、ソフトウェア検索のジョブ情報を格納するテーブルです。netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層 (未使用時は NULL)	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層 (未使用時は NULL)	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層 (未使用時は NULL)	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層 (未使用時は NULL)	4
dm_jobgenna me	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_refersoftware	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	検索対象ソフトウェア • 0: ソフトウェア情報の取得以外のジョブ • 1: NETM/DM Manager でインストールしたソフトウェアを検索 • 2: すべてのソフトウェアを検索 • 3: ファイルを検索 • 4: アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索 • 5: Microsoft Office 製品を検索 • 6: ウィルス対策製品を検索	—
dm_referdrive kind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	検索対象ドライブ • 0: ソフトウェア情報の取得以外のジョブ • 1: 全固定ドライブ • 2: 全固定ドライブ + ネットワークドライブ • 3: ドライブ指定	—
dm_referdrive name	VARCHAR2	70	varchar	70	MVARCHAR	70	ドライブ指定ソフトウェア情報の取得のジョブで、検索対象ドライブをドライブ指定にしたときだけ設定 複数のドライブ名が指定されたときは、「;」で区切って設定	—
dm_systeminf	RAW	24	binary	24	BINARY	24	JP1/NETM/DM Manager のシステム情報	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_listname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	検索リスト名称	—
dm_listkind	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	検索リスト種別 0：標準検索リスト，またはクライアントに存在する検索リスト 1：標準検索リストとユーザ指定検索リスト 2：検索リストなし 3：ユーザ指定検索リスト	—
dm_conditionfile	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	ファイル検索定義情報格納ファイル名称	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.32 netmdm_jobgen_system

システム構成情報と ID を連携させるための情報を格納するテーブルです。netmdm_jobgen に関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層	4
dm_jobgenna me	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_request	CHAR	1	char	1	MCHAR	1	要求コード D：システム構成からの削除	—
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	編集対象ホスト名	—
dm_timestam p	DATE	—	datetime	8	TIME STAMP	—	システム構成ファイルのタイムスタンプ	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.33 netmdm_jobgen_userinv

ジョブ定義情報のうち、ユーザインベントリ情報のジョブ情報を格納するテーブルです。netmdm_jobgenに関連します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 1 階層	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層	3
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層	4
dm_jobgenna me	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ名	5
dm_filename	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	転送ファイル名	—
dm_option	RAW	1	binary	1	BINARY	1	転送オプション • 0x01：情報設定要求をする • 0x02：パッケージセットアップマネージャの起動を抑止する • 0x04：全項目を入力必須にする • 0x08：キャンセルを無効にする	—
dm_sendoption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	通知オプション • 0：ユーザが保存または保存と通知を決定する • 1：保存する • 2：保存と通知を行う	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.34 netmdm_jobsch

ジョブの実行状況のヘッダ情報を格納するテーブルです。各ジョブの実行状態を管理する netmdm_execution の完了状態を集計します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder1	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ定義フォルダ 1 階層 (未使用時は NULL)	1
dm_folder2	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 2 階層 (未使用時は NULL)	2
dm_folder3	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 3 階層 (未使用時は NULL)	3

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder4	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ジョブ定義フォルダ 4 階層（未使用時は NULL）	4
dm_kind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	行種別 • 0：フォルダ情報行 • 1：ジョブ情報行 • 5：ID ジョブ情報行	—
dm_jobname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ名	5
dm_jobkind	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブ種別コード • A：中継サーバからのコレクトファイル収集 • C：中継システムのパッケージ一括削除 • D：パッケージのインストール • E：削除中の通知 • F：ファイル転送の再開 • G：リモートコレクト • H：中継サーバからの結果通知保留 • I：ソフトウェア情報の取得 • J：クライアントユーザによるインストール • K：中継サーバのコレクトファイル削除 • L：ID 操作 • M：中継システムまでのパッケージ転送 • N：システム構成情報の取得 • O：システム構成情報の編集 • P：ファイル転送の中断 • S：中継までのリモートコレクト • T：中継サーバの結果通知の保留解除 • U：ユーザインベントリ情報の転送 • V：システム情報の取得 • Y：レジストリ取得項目の転送 • 1：メッセージの通知 • 8：ソフトウェア稼働監視の制御 • 9：ソフトウェア稼働情報の取得	6
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	7
dm_createdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ登録指示日時	—
dm_totalcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	全実行処理数	—
dm_entrytime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ登録日時	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ 型	サイズ	データ 型	サイズ	データ 型	サイズ		
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ実行日時	—
dm_timeout	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブタイムアウト日時	—
dm_nnm_status	RAW	1	binary	1	BINARY	1	JP1/Cm2 ステータス • 0x00：警戒域以外 • 0x01：警戒域	—
dm_attrflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	属性フラグ • 0x00：自システムのジョブ • 0x01：他システムからの転送 ジョブ	—
dm_userinfoption	RAW	1	binary	1	BINARY	1	ユーザインベントリ取得オプション • 0x00：システム情報とユーザインベントリ情報の取得 • 0x01：ユーザインベントリ情報だけの取得	—
dm_woloption	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	クライアント制御と配布方式 • 0x01：あて先を起動する • 0x02：あて先をシャットダウンする • 0x04：マルチキャスト配布する • 0x08：中断中でも配布する • 0x40：ソフトウェア稼働情報をアーカイブしない	—
dm_splitsize	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	分割サイズ	—
dm_transinterval	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	転送休止時間	—
dm_synchroflag	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	同期削除中フラグ • 0x00：ジョブの同期削除中以外 • 0x01：ジョブの同期削除中	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.35 netmdm_jobsch_site

中継システムで実行した ID ジョブ（パッケージのインストールとクライアントユーザによるインストール）の実行状況のヘッダ情報を格納するテーブルです。各ジョブの実行状態を管理する netmdm_exexecution_site の完了状態を集計します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_folder	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ定義フォルダ 1 階層（中継システムのホスト名）	1
dm_kind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	行種別 • 0：フォルダ情報行 • 1：ジョブ情報行	—
dm_jobname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ定義名（中継システムでジョブに対して割り当てた番号）	2
dm_jobkind	CHAR	1	char	1	CHAR	1	ジョブの種別コード • D：パッケージのインストール • J：クライアントユーザによるインストール	3
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	4
dm_createdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ登録指示日時	—
dm_totalcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	全実行処理数	—
dm_entrytime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ登録日時	—
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブ実行日時	—
dm_timeout	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ジョブタイムアウト日時	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.36 netmdm_jobscript

リモートインストール時のジョブのスクリプトファイルを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ジョブ名	—
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1
dm_mngfilename	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	スクリプトファイルの管理ファイル名	2
dm_scriptfile	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	インストールスクリプト本体	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.37 netmdm_lastupdate

テーブルの最終更新日時を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_tabletype	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	テーブル種別 • 1 : netmdm_system • 2 : netmdm_system_delete • 3 : netmdm_host_withoutdm	—
dm_lastupdate_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	テーブルの最終更新日時	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.38 netmdm_mnglist

ソフトウェア情報の取得ジョブで使用する検索リストを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_listname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	リストファイル名	1
dm_listkind	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	リスト種別 • 0 : 標準検索リスト • 1 : ユーザ指定検索リスト	2
dm_create_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	作成日付	—
dm_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	更新日付	—
dm_list	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	リスト実体	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.39 netmdm_monitoring_devicectrl

デバイスごとの抑止・動作の設定情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	関連するポリシー名	1
dm_deviceype	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	デバイス種別 0x01：USB ストレージデバイス 0x02：内蔵 CD/DVD ドライブ 0x03：内蔵 FD ドライブ 0x04：IEEE1394 接続デバイス 0x05：内蔵 SD カード 0x06：Bluetooth デバイス 0x07：イメージングデバイス	2
dm_operationconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	デバイス操作の動作が OR 値で設定される 0x00：設定なし 0x01：接続履歴を取得する 0x02：切断履歴を取得する 0x04：使用を抑止する	—
dm_detailconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	デバイス操作の動作の詳細が OR 値で設定される 0x00：設定なし 0x01：抑止履歴を取得する 0x02：許可履歴を取得する 0x04：アラートする 0x08：抑止中メッセージを表示する	—
dm_restmessage	VARCHAR2	2,048	varchar	2,048	MVARCHAR	2,048	クライアント PC に表示する抑止中メッセージを指定する	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.40 netmdm_monitoring_filter

ソフトウェアの稼働監視の、履歴取得時のフィルタリング情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	関連するポリシー名	—
dm_type	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	フィルタリングを適用する対象が OR 値で設定される 0x01：使用履歴 0x02：操作履歴 0x04：ファイル操作履歴	—
dm_extype	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	フィルタリング種別 0x01：プロセス名 0x02：実行アカウント 0x03：拡張子	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_value	VARCHAR2	255	varchar	255	VARCHAR	255	フィルタリング情報 dm_extype で指定した種別に対するフィルタリング情報（プロセス名，実行アカウント，拡張子）	—
dm_actiontype	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	フィルタリング条件でログを取得するかどうか 0x00：ログを取得する 0x01：ログを取得しない	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.41 netmdm_monitoring_permission

ソフトウェアの稼働監視の，許可条件を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	関連するポリシー名	—
dm_seqnumber	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ポリシーごとの，監視対象プログラムに対応するプログラムの通し番号	—
dm_type	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	許可条件の種別 1：ユーザ種別 4：時間	—
dm_extype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	許可条件の拡張種別 種別が 1（ユーザ種別）の場合 1：ユーザアカウント 2：ユーザグループ 種別が 4（時間）の場合，拡張種別には 0 が設定される	—
dm_value	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	許可する範囲および値 種別が 4（時間）で範囲指定をした場合，次の形式で格納される "hh:mm" - "hh:mm"	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.42 netmdm_monitoring_policy

ソフトウェアの稼働監視の，稼働監視ポリシーを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ポリシー名	1
dm_permanent	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	稼働監視するプロセスを起動するか停止するか • 0x00：起動 • 0x01：停止	—
dm_monitoringconf	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	操作履歴を監視するかどうか • 0x00：監視する • 0x01：監視しない	—
dm_eventtype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	操作履歴を監視するイベントの種別が OR 値で設定される • 0x00000000：監視イベントなし • 0x00000001：プロセス起動 • 0x00000002：プロセス停止 • 0x00000004：ウィンドウのキャプションの変更 • 0x00000008：アクティブウィンドウの変更 • 0x00000010：PC の起動または停止 • 0x00000020：ログオンまたはログオフ	—
dm_loglevel	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ログに出力するメッセージのレベル • 0：出力しない • 1～10：Error だけ出力 • 11～20：Error, Information を出力 • 21～30：Error, Information, Warning を出力 • 30～：Error, Information, Warning, trace を出力	—
dm_maxdisplaytime	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	停止予告ダイアログの表示時間 (単位：秒)	—
dm_sendconf	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	結果情報を通知するかどうか • 0x00：通知する • 0x01：通知しない	—
dm_sendbase time	VARCHAR2	5	varchar	5	VARCHAR	5	結果情報を通知する基準となる時間 (hh:mm の 24 時間形式) 結果情報を通知する場合に有効になる	—
dm_sendlimit	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	結果通知基準時間から、結果通知を開始するまでのずれの最大値 (単位：秒) 結果情報を通知する場合に有効になる	—
dm_sendinterval	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	結果情報を通知する時間間隔 (単位：秒) 結果情報を通知する場合に有効になる	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_sendoption	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	即時通知するかどうか 結果情報を通知する場合に有効になる • 0x00：即時通知する • 0x01：即時通知しない	—
dm_maxfiles	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	結果を保管するファイルの最大サイズ（単位：バイト）	—
dm_modifieddatetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ポリシーを編集した日時	—
dm_eventtype2	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ファイル操作で監視するイベントの種別が OR 値で設定される • 0x00000000：監視イベントなし • 0x00000001：ファイル/フォルダコピー • 0x00000002：ファイル/フォルダ移動 • 0x00000004：ファイル/フォルダリネーム • 0x00000008：ファイル/フォルダ削除 • 0x00000010：ファイル/フォルダ作成 • 0x00000020：ファイルオープン	—
dm_actiontype	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	監視対象プログラム以外のプログラムの起動可否 • 0x00：許可する • 0x01：抑止する 監視対象プログラムが設定されていない場合は、0x00 が設定される	—
dm_metering	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	稼働時間の監視の有無 • 0x00：監視する • 0x01：監視しない 稼働監視の対象となるプログラムが設定されていない場合は 0x01 が設定される	—
dm_boundarytime	CHAR	5	char	5	VARCHAR	5	稼働時間の監視の境界時間が <i>hh:mm</i> の形式で設定される	—
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	ポリシーのバージョン	—
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	ポリシーの世代番号	—
dm_extmediaconfig	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	外部メディア操作履歴を取得するかどうか • 0x00：取得する • 0x01：取得しない	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_usbconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	USB 接続メディアへのアクセスを許可するかどうか • 0x00：許可する • 0x01：書き込み読み出し両方抑止する • 0x02：書き込みだけを抑止する	—
dm_cddvdconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	内蔵 CD/DVD ドライブを介した書き込みを許可するかどうか • 0x00：許可する • 0x01：抑止する	—
dm_fdconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	内蔵 FD ドライブへのアクセスを許可するかどうか • 0x00：許可する • 0x01：抑止する	—
dm_ieeeconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	IEEE 1394 接続メディアのアクセスを許可するかどうか • 0x00：許可する • 0x01：抑止する	—
dm_sdconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	内蔵 SD カードスロットを介したアクセスを許可するかどうか • 0x00：許可する • 0x01：抑止する	—
dm_weblogconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	Web アクセスログ取得のオン/オフ • 0x00：オン • 0x01：オフ	—
dm_webfilteringconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	Web アクセスログのフィルタリングのオン/オフ、およびフィルタリングの方法 • 0x00：フィルタリングしない • 0x01：フィルタリング条件だけのログを取得する • 0x02：フィルタリング条件以外のログを取得する	—
dm_printinglogconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	印刷操作の履歴取得のオン/オフ • 0x00：オン • 0x01：オフ	—
dm_printingconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	印刷抑止のオン/オフ • 0x00：オン • 0x01：オフ	—
dm_printingpassconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	印刷抑止を解除するためのパスワードを設定するかどうか • 0x00：オン • 0x01：オフ	—
dm_printingpassword	VARCHAR2	30	varchar	30	MVARCHAR	30	印刷抑止を解除するためのパスワードを平文で格納する 0 ～ 30 バイト	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_usbconnectconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	USB 接続メディアをアクセス抑止の対象から除外するかどうか • 0x00：除外する • 0x01：除外しない	—
dm_warningmessconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	クライアント PC に USB 接続メディアへの操作抑止中メッセージを表示するかどうか • 0x00：表示する • 0x01：表示しない	—
dm_restmessconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	クライアント PC に表示する USB 接続メディアへの操作抑止中メッセージとして、デフォルトメッセージではなく任意のメッセージを指定するかどうか • 0x00：表示する • 0x01：表示しない	—
dm_restmessage	VARCHAR2	2,048	varchar	2,048	MVARCHAR	2,048	クライアント PC に表示する USB 接続メディアへの操作抑止中メッセージを格納する	—
dm_mergepolicy	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_printingtype	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	ネットワーク共有プリンタ環境で「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」をインストールしていないクライアントが存在するかどうか • 0x00：存在する • 0x01：存在しない	—
dm_usbhistoryconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	取得する USB 接続メディアの接続履歴 • 0x01：接続許可履歴を取得する • 0x02：接続抑止履歴を取得する	—
dm_devicewriteconf	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	デバイスの書き込みを抑止するかどうか • 0x00：書き込みを抑止しない（オフ） • 0x01：書き込みを抑止する（オン）	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.43 netmdm_monitoring_program

ソフトウェアの稼働監視の、監視対象プログラムの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ポリシー名	1
dm_seqnumber	NUMBER	10	Int	4	INTEGER	—	ポリシーごとの、監視対象プログラムに対応する通し番号	2
dm_filename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	監視対象プログラムのファイル名	—
dm_originalfilename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	監視対象プログラムの正式ファイル名	—
dm_fileversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	監視対象プログラムのファイルバージョン	—
dm_filelanguage	CHAR	2	char	2	VARCHAR	2	監視対象プログラムのファイルの言語 指定しない場合は NULL	—
dm_productname	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	監視対象プログラムが含まれるソフトウェアの名称	—
dm_productversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	監視対象プログラムの製品バージョン	—
dm_productlanguage	CHAR	2	char	2	VARCHAR	2	監視対象プログラムの製品の言語 指定しない場合は NULL	—
dm_actiontype	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	起動抑止するかどうか • 0x00：起動を許可する • 0x01：起動を抑止する • 0x02：許可条件を参照	—
dm_filetype	CHAR	1	char	1	VARCHAR	1	監視対象がファイル名指定かパス名指定かの情報 • 0x00：ファイル名指定 • 0x01：パス名指定 dm_filename にパス名を指定した場合は、0x01 が指定される	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.44 netmdm_monitoring_result

ソフトウェアの起動を抑止した履歴を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称	—
dm_productname	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	起動された製品の名称	—
dm_productversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	起動された製品のバージョン	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_productlanguage	CHAR	2	char	2	VARCHAR	2	起動された製品の言語 (言語が不明の場合は NULL)	—
dm_filename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	使用されたファイル名	—
dm_fileversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ファイルのバージョン	—
dm_filelanguage	CHAR	2	char	2	VARCHAR	2	ファイルの言語 言語不明の場合は NULL	—
dm_logonuser	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	ログオンユーザ	—
dm_execaccount	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	プログラムの実行アカウント	—
dm_startdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	プログラムの起動抑止日時	—
dm_hostname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト名※	—
dm_ipaddresses	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	IP アドレス※	—
dm_flag	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	netmdm_monitoring_security テーブルに格納されているかどうか • NULL：未格納 • 1：格納済み	—

(凡例) —：該当なし

注※

バージョンが 07-53 以前の配布管理システムで取得した抑止履歴の場合、配布管理システムのバージョンを 08-00 にバージョンアップしたときは、NULL となります。

付録 C.45 netmdm_monitoring_security

[操作ログ一覧] ウィンドウで管理する抑止履歴および操作履歴を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称	—
dm_hostname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト名	—
dm_ipaddresses	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	IP アドレス	—
dm_startdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	イベントの開始時刻	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_enddate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	イベントの終了時刻	—
dm_eventtype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	イベント種別 • 0x00000001：プロセス起動 • 0x00000002：プロセス停止 • 0x00000003：キャプション変更 • 0x00000004：アクティブウィンドウ変更 • 0x00000005：PC 起動 • 0x00000006：PC 停止 • 0x00000007：ログオン • 0x00000008：ログオフ • 0x00010010：ファイルコピー • 0x00010011：ファイル移動 • 0x00010012：ファイルリネーム • 0x00010013：ファイル削除 • 0x00010014：ファイル作成 • 0x00010015：ファイルオープン • 0x00020010：フォルダコピー • 0x00020011：フォルダ移動 • 0x00020012：フォルダリネーム • 0x00020013：フォルダ削除 • 0x00020014：フォルダ作成 • 0x00030001：印刷 • 0x00030002：印刷抑止 • 0x00030003：印刷抑止解除 • 0x00040001：Web アクセス • 0x00050001：外部メディア接続 • 0x00050002：外部メディア切断（取り外し） • 0x00060001：USB 接続許可 • 0x00060002：USB 接続抑止 • 0x01000000：抑止履歴	—
dm_filename	VARCHAR2	520	varchar	520	MVARCHAR	520	操作前のファイル名またはフォルダ名 (ファイル名またはフォルダ名の半角英字は小文字化され、フルパスが格納される フォルダの場合、末尾は「¥」)	—
dm_filenameew	VARCHAR2	520	varchar	520	MVARCHAR	520	操作後のファイル名またはフォルダ名 (ファイル名またはフォルダ名の半角英字は小文字化され、フルパスが格納される フォルダの場合、末尾は「¥」)	—
dm_productname	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	使用された製品の名称	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_productversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	製品のバージョン	—
dm_productlanguage	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	製品の言語 (言語が不明の場合は NULL)	—
dm_fileversion	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ファイルのバージョン	—
dm_filelanguage	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ファイルの言語 (言語が不明の場合は NULL)	—
dm_logonuser	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	ログオンユーザ	—
dm_execaccount	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	プログラムの実行アカウント	—
dm_caption	VARCHAR2	520	varchar	520	MVARCHAR	520	ウィンドウのキャプション	—
dm_processname	VARCHAR2	520	varchar	520	MVARCHAR	520	次の情報が格納される - ソフトウェアの操作履歴の場合 イベントが発生したプロセス名 - ファイルの操作履歴の場合 ファイルを操作したプロセス名 - ソフトウェアの起動抑止の場合 起動を抑止されたプログラム名	—
dm_drivetypeold	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	操作前のドライブ種別 0: その他 1: Local disk 2: Network drive 3: Removable 4: CDROM 5: RAMDISK	—
dm_drivetynew	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	操作後のドライブ種別 0: その他 1: Local disk 2: Network drive 3: Removable 4: CDROM 5: RAMDISK	—
dm_documentname	VARCHAR2	260	varchar	260	MVARCHAR	260	印刷・印刷抑止の対象となったドキュメント名称	—
dm_printername	VARCHAR2	484	varchar	484	MVARCHAR	484	印刷に使用したプリンタ名称	—
dm_printingresult	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	印刷抑止解除の結果 0x00: 成功 0x01: 失敗	—
dm_url	VARCHAR2	2,083	varchar	2,083	MVARCHAR	2,083	アクセスした Web ページの URL	—
dm_drivetype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	接続または切断（取り出し）された外部メディアのドライブ種別 0x0000: その他 0x0001: Local disk 0x0003: Removable 0x0004: CDROM	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_drivename	CHAR	2	char	2	CHAR	2	接続または切断（取り出し）された外部メディアのドライブ名「ドライブレター:」の 2 文字で表す	—
dm_usbconnectname	VARCHAR2	1024	varchar	1024	MVARCHAR	1024	接続を許可または抑止されたデバイスの接続名	—
dm_usbdrive	VARCHAR2	2048	varchar	2048	MVARCHAR	2048	接続を許可または抑止されたデバイスのデバイスインスタンス ID（ディスクドライブ）	—
dm_usbcontroller	VARCHAR2	2048	varchar	2048	MVARCHAR	2048	接続を許可または抑止されたデバイスのデバイスインスタンス ID（USB コントローラ）	—
dm_usballowedcondition	VARCHAR2	2069	varchar	2069	MVARCHAR	2069	デバイスの接続を許可した条件	—
dm_deviceype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	接続、切断、接続を許可、または接続を抑止されたデバイスの種別 • 0x0000：不明 • 0x0001：USB ストレージデバイス • 0x0002：内蔵 CD/DVD ドライブ • 0x0003：内蔵 FD ドライブ • 0x0004：IEEE1394 接続デバイス • 0x0005：内蔵 SD カード • 0x0006：Bluetooth デバイス • 0x0007：イメージングデバイス	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.46 netmdm_monitoring_usbconnect

アクセス抑止の除外対象である USB 接続メディアから読み込んだ情報を管理するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ポリシー名	—
dm_conditiontype	NUMBER	3	tinyint	1	SMALLINT	—	除外対象のデバイスの条件種別を表す ID • 0x00：接続名の完全一致比較	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
							• 0x01：デバイスインスタンス ID の完全一致比較 • 0x02：デバイスインスタンス ID の前方一致比較 • 0x03：デバイスインスタンス ID の後方一致比較 • 0x04：デバイスインスタンス ID の中間一致比較 • 0x05：デバイスインスタンス ID の前方 AND 後方一致比較 • 0x06：デバイスインスタンス ID (USB コントローラ) の完全一致比較 • 0x07：デバイスインスタンス ID (USB コントローラ) の前方一致比較 • 0x08：デバイスインスタンス ID (USB コントローラ) の後方一致比較 • 0x09：デバイスインスタンス ID (USB コントローラ) の中間一致比較 • 0x0A：デバイスインスタンス ID (USB コントローラ) の前方 AND 後方一致比較 • 0x0B：Bluetooth 接続名の完全一致比較 • 0x0C：Bluetooth 種別デバイスインスタンス ID の完全一致比較 • 0x0D：Bluetooth 種別デバイスインスタンス ID の前方一致比較 • 0x0E：Bluetooth 種別デバイスインスタンス ID の後方一致比較 • 0x0F：Bluetooth 種別デバイスインスタンス ID の中間一致比較 • 0x10：Bluetooth 種別デバイスインスタンス ID の前方 AND 後方一致比較	

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
							• 0x11: Bluetooth コントローラデバイスインスタンス ID の完全一致比較 • 0x12: Bluetooth コントローラデバイスインスタンス ID の前方一致比較 • 0x13: Bluetooth コントローラデバイスインスタンス ID の後方一致比較 • 0x14: Bluetooth コントローラデバイスインスタンス ID の中間一致比較 • 0x15: Bluetooth コントローラデバイスインスタンス ID の前方 AND 後方一致比較 • 0x16: イメージングデバイス 接続名の完全一致比較 • 0x17: イメージングデバイス 種別デバイスインスタンス ID の完全一致比較 • 0x18: イメージングデバイス 種別デバイスインスタンス ID の前方一致比較 • 0x19: イメージングデバイス 種別デバイスインスタンス ID の後方一致比較 • 0x1A: イメージングデバイス 種別デバイスインスタンス ID の中間一致比較 • 0x1B: イメージングデバイス 種別デバイスインスタンス ID の前方 & 後方一致比較	

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
							0x1C: イメージングデバイスコントローラデバイスインスタンスIDの完全一致比較 0x1D: イメージングデバイスコントローラデバイスインスタンスIDの前方一致比較 0x1E: イメージングデバイスコントローラデバイスインスタンスIDの後方一致比較 0x1F: イメージングデバイスコントローラデバイスインスタンスIDの中間一致比較 0x20: イメージングデバイスコントローラデバイスインスタンスIDの前方 & 後方一致比較	
dm_condition	VARC HAR2	2,048	varchar	2,048	MVARC HAR	2,048	USB 接続メディア抑止除外条件	—
dm_comment	VARC HAR2	64	varchar	64	MVARC HAR	64	USB 接続メディア抑止除外条件のコメント	—

(凡例) —: 該当なし

付録 C.47 netmdm_monitoring_webfilter

Web アクセスログのフィルタリング設定を管理するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARC HAR2	64	varchar	64	MVARC HAR	64	ポリシー名	1
dm_filtername	VARC HAR2	64	varchar	64	MVARC HAR	64	フィルタリング条件の種別の登録名	2
dm_filtertype	NUMBE R	3	tinyint	1	SMALL INT	—	フィルタリング条件の種別 0x00: URL 0x01: タイトル	—
dm_filtercondition	VARC HAR2	260	varchar	260	MVARC HAR	260	フィルタリング条件	—

(凡例) —: 該当なし

付録 C.48 netmdm_monitoring_work

稼働時間取得の対象となるプログラムの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_policyname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ポリシー名	—
dm_software name	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	稼働時間を取得する対象となるソフトウェア名	—
dm_software version	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ソフトウェアのバージョン (指定なしの場合は NULL)	—
dm_program name	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェアを構成するプログラム名	—
dm_program version	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	プログラムのバージョン (指定なしの場合は NULL)	—
dm_program language	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	0x0000：ニュートラル その他：各言語種別 NULL：言語を指定しない	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.49 netmdm_monitoring_workresult

ソフトウェアの稼働監視で取得した、ソフトウェアの稼働時間の情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト名	1
dm_getdate	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	稼働時間の取得日	2
dm_software name	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ソフトウェア名	3
dm_software version	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ソフトウェアのバージョン	4
dm_software time	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ソフトウェアの稼働時間	5
dm_termwork time	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	マシンの稼働時間	6

(凡例) —：該当なし

付録 C.50 netmdm_nnm_management

JP1/Cm2 連携機能の情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_entryname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	JP1/Cm2 への登録名称（ホスト名または IP アドレス）	1
dm_entryattributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	JP1/Cm2 への登録属性 • 1：クライアント • 2：中継システム • 8：中継マネージャ	2
dm_hostname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	システム構成上の名称（ホスト名または IP アドレス）	—
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	未使用	—
dm_primarykey	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	未使用	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.51 netmdm_node

あて先の情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト名またはあて先グループ名（小文字に変換した値）	—
dm_nodeattributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	dm_nodename の属性 • 0x00000000：あて先グループ名 • 0x00000001：ホスト名（クライアント） • 0x00000002：ホスト名（中継システム）	—
dm_nodepath1	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の最上位のグループ名（最上位のグループの場合は ¥ だけ）	—
dm_nodepath2	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 2 番目のグループ名（未使用時はスペース）	—
dm_nodepath3	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 3 番目のグループ名（未使用時はスペース）	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodepath4	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 4 番目のグループ名（未使用時はスペース）	—
dm_nodepath5	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 5 番目のグループ名（未使用時はスペース）	—
dm_nodepath6	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 6 番目のグループ名（未使用時はスペース）	—
dm_comment	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	コメント	—
dm_systeminfo	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_nodeaname2	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト名またはあて先グループ名（小文字に変換していない値）	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.52 netmdm_node_policy

あて先グループを自動的にメンテナンスする条件（ポリシー）を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_infotype	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ポリシー種別 • 1：IP アドレスグルーピング • 2：新規作成ホストグルーピング • 3：OS 種別グルーピング • 4：ユーザーインベントリグルーピング • 5：ポリシー複合条件 • 6：新規作成ホスト ID 登録	1
dm_number	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	種別ごとの管理番号	2
dm_status	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	動作ステータス • 0：動作中 • 1：停止中 • 2：複合条件下だけで動作中	—
dm_nodeattrrange	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	グルーピング対象のノード属性 • 0：すべてのノード種別 • 1：クライアントだけ	—
dm_condition1_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 1 の文字列データ	—
dm_condition1_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 1 の数値データ	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_conditio n1_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 1, 2 間の論理演算子	—
dm_conditio n2_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 2 の文字列データ	—
dm_conditio n2_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 2 の数値データ	—
dm_conditio n2_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 2, 3 間の論理演算子	—
dm_conditio n3_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 3 の文字列データ	—
dm_conditio n3_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 3 の数値データ	—
dm_conditio n3_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 3, 4 間の論理演算子	—
dm_conditio n4_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 4 の文字列データ	—
dm_conditio n4_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 4 の数値データ	—
dm_conditio n4_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 4, 5 間の論理演算子	—
dm_conditio n5_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 5 の文字列データ	—
dm_conditio n5_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 5 の数値データ	—
dm_conditio n5_logical	VARCHAR2	10	varchar	10	MVARCHAR	10	条件 5, 6 間の論理演算子	—
dm_conditio n6_string	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	条件 6 の文字列データ	—
dm_conditio n6_integer	NUMBER	10	numeric	10	DECIMAL	10	条件 6 の数値データ	—
dm_groupname	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	登録先のあて先グループパス /ID 名	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.53 netmdm_oidlist

「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「Microsoft Office 製品を検索」で取得したソフトウェア情報を格納するテーブルです。[システム構成] および [あて先] ウィンドウの [ソフトウェアインベントリ] パネルには、「親ソフトウェア識別 ID」が NULL のソフトウェア情報だけが表示されます。「親ソフトウェア識別 ID」が NULL でない場合は、Microsoft Office 製品のコンポーネントと見なされ、表示されません。

なお、製品によっては取得できない情報もあります。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_nodename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ノード名称	—
dm_displayname	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェア名称（表示用）	—
dm_name	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェア名称	—
dm_version	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェアバージョン	—
dm_displayversion	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェアバージョン（表示用）	—
dm_language	CHAR	2	char	2	VARCHAR	2	言語	—
dm_publisher	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	会社名	—
dm_productid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	プロダクト ID	—
dm_regcompany	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	登録会社名	—
dm_regowner	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	登録所有者名	—
dm_installfolder	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	パス	—
dm_filename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ファイル名	—
dm_softwareid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェア識別 ID	—
dm_parentssoftwareid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	親ソフトウェア識別 ID	—
dm_installdate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	インストール日付	—
dm_searchdate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	検索日時	—
dm_size	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	サイズ	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_targetos	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_accesses	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_attributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_installs	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_installsi	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_softwareelementstate	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_caption	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_softwareelementid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_othertargetos	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_lastusedate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_status	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.54 netmdm_ospatch_classref

パッチのクラスの情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_classificationcode	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	クラスの内部コード	—
dm_classificationname	VARCHAR2	200	varchar	200	MVARCHAR	200	クラス	—
dm_displaysatus	NUMBER	1	int	4	INTEGER	—	「更新プログラム一覧」での表示設定の選択状態を示す 0：表示しない 1：表示する	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_autodownloadstatus	NUMBER	1	int	4	INTEGER	—	自動取得の設定の選択状態を示す 0：ダウンロードしない 1：ダウンロードする	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.55 netmdm_ospatch_patchinf

パッチの情報および取得したパッチのデータを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_patchid	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	パッチ識別 ID	—
dm_title	VARCHAR2	800	varchar	800	MVARCHAR	800	タイトル	—
dm_description	VARCHAR2	1,500	varchar	1,500	MVARCHAR	1,500	説明	—
dm_classification	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	クラス	—
dm_products	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	製品 (製品が複数ある場合、各製品の数値ビットによる XOR をとって格納される)	—
dm_release date	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	リリース日	—
dm_details	VARCHAR2	2,083	varchar	2,083	MVARCHAR	2,083	詳細情報	—
dm_kbarticle	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	サポート技術情報番号	—
dm_msrenumber	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	セキュリティ番号	—
dm_msrscore severity	VARCHAR2	15	varchar	15	MVARCHAR	15	セキュリティ深刻度	—
dm_updateid	VARCHAR2	36	varchar	36	MVARCHAR	36	更新プログラム ID	—
dm_updateurl	VARCHAR2	1,024	varchar	1,024	MVARCHAR	1,024	パッチのダウンロード URL	—
dm_language	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	サポートされる言語	—
dm_ospatch filename	VARCHAR2	260	varchar	260	MVARCHAR	260	パッチの実行ファイル名	—
dm_scripturl	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	スクリプトファイルの URL	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ospatch status	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	OS パッチの取得状態 0x0000：パッチおよびスクリプトが未取得 0x0001：パッチだけ取得済み 0x0002：スクリプトだけ取得済み 0x0004：パッチおよびスクリプトを取得済み 0x0010：パッケージング済み	—
dm_ospatch file1	BLOB	—	image	—	—	—	パッチデータ (一つのパッチが 100 メガバイトを超える場合、100 メガバイトごとに分割されて格納される)	—
dm_ospatch file2	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file3	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file4	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file5	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file6	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file7	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file8	BLOB	—	image	—	—	—		—
dm_ospatch file	—	—	—	—	BLOB	—	パッチデータ (最大 1,840 メガバイト)	—
dm_patchsize	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	パッチのサイズ	—
dm_cabinet name	VARCHAR2	83	varchar	83	MVARCHAR	83	格納先キャビネットの名称、パッケージ名	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.56 netmdm_ospatch_productref

パッチが対象とするプログラムの情報を格納します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_product code	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	プログラムの内部コード	—
dm_product name	VARCHAR2	200	varchar	200	MVARCHAR	200	プログラムの名称	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_displays_tatus	NUMBER	1	int	—	INTEGER	—	「更新プログラム一覧」での表示設定の選択状態を示す 0：表示しない 1：表示する	—
dm_autodownloadstatus	NUMBER	1	int	—	INTEGER	—	自動取得の設定の選択状態を示す 0：取得しない 1：取得する	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.57 netmdm_ospatch_script

パッチをインストールするためのスクリプトファイルを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_scripturl	VARCHAR	128	varchar	128	MVARCHAR	128	スクリプトファイルの URL	—
dm_scriptfile	LONGRAW	—	image	—	BLOB	—	スクリプトファイル	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.58 netmdm_ospatch_xmlinf

パッチ情報ファイルのバージョンを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_xmlversion	VARCHAR2	12	varchar	12	MVARCHAR	12	パッチ情報ファイルのバージョン	—
dm_xmlrevision	VARCHAR2	12	varchar	12	MVARCHAR	12	パッチ情報ファイルのリビジョン	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.59 netmdm_package

パッケージおよびインストールスクリプトの本体を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	—
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	キャビネット識別 ID	—
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	—
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	—
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	—
dm_packagefilename	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	パッケージの管理ファイル名	1
dm_scriptfilename	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	スクリプトファイルの管理ファイル名	—
dm_package	BLOB	—	image	—	BLOB	—	パッケージ本体	—
dm_scriptfile	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	インストールスクリプト本体	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.60 netmdm_package_inf

パッケージの属性情報を格納するテーブルです。netmdm_package と 1 対 1 に対応するレコードを持ちます。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_dmttype	CHAR	1	char	1	CHAR	1	パッケージングをしたパッケージのタイプ • C : WS (UNIX) • D : PC (Windows)	1
dm_cabinetid	CHAR	2	char	2	MCHAR	2	キャビネット識別 ID	2
dm_packageid	VARCHAR2	44	varchar	44	MVARCHAR	44	パッケージ識別 ID	3
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	パッケージのバージョン	4
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	パッケージの世代番号	5
dm_packagefilename	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	パッケージ名	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_capacity	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	パッケージサイズ	—
dm_packagefilename	CHAR	8	char	8	MCHAR	8	パッケージ管理ファイル名	—
dm_recovery	NUMBER	1	bit	1	SMALLINT	—	障害時のリストアの有無 • 1：リストアあり • 0：リストアなし	—
dm_compress	NUMBER	1	bit	1	SMALLINT	—	パッケージの圧縮 • 1：圧縮 • 0：非圧縮	—
dm_datacode	NUMBER	1	bit	1	SMALLINT	—	パッケージデータのコード • 1：暗号化コード • 0：非暗号コード	—
dm_systeminfo	BLOB	—	image	—	BINARY	784	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.61 netmdm_registry

クライアントのレジストリ情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node_name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホストの名称（ホスト名、IP アドレス、またはホスト識別子）	1
dm_regpath	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	レジストリパス	2
dm_regstatus	RAW	1	binary	1	BINARY	1	レジストリの状態 • 0x00：データ未取得 • 0x01：正常に取得 • 0x02：対象レジストリパスが存在しない • 0x03：データが存在しない • 0x04：データが最大値を超えている	—
dm_regtype	RAW	1	binary	1	BINARY	1	レジストリの属性 • 0x01：文字列 • 0x02：DWORD • 0x03：バイナリ	—
dm_value	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	レジストリデータ	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_oskind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	あて先の OS 種別 • 0x02 : Windows NT 4.0 • 0x04 : Windows 2000 • 0x08 : Windows XP • 0x10 : Windows 95 • 0x20 : Windows 98 • 0x40 : Windows Me • 0x80 : Windows Server 2003 • 0x100 : Windows Vista • 0x200 : Windows Server 2008 • 0x400 : Windows 7 • 0x800 : Windows Server 2008 R2 • 0x1000 : Windows 8 • 0x2000 : Windows Server 2012	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.62 netmdm_reglist

レジストリ取得項目を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_itemname	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	項目名称	—
dm_priority	NUMBER	3	int	4	INTEGER	—	表示順	—
dm_regpath	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	レジストリパス	1
dm_oskind1	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	上位設定 OS 種別 • 0x02 : Windows NT 4.0 • 0x04 : Windows 2000 • 0x08 : Windows XP • 0x10 : Windows 95 • 0x20 : Windows 98 • 0x40 : Windows Me • 0x80 : Windows Server 2003 • 0x100 : Windows Vista • 0x200 : Windows Server 2008 • 0x400 : Windows 7 • 0x800 : Windows Server 2008 R2 • 0x1000 : Windows 8 • 0x2000 : Windows Server 2012 • 0xffff : すべての OS	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_oskind2	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	自設定 OS 種別 • 0x02 : Windows NT 4.0 • 0x04 : Windows 2000 • 0x08 : Windows XP • 0x10 : Windows 95 • 0x20 : Windows 98 • 0x40 : Windows Me • 0x80 : Windows Server 2003 • 0x100 : Windows Vista • 0x200 : Windows Server 2008 • 0x400 : Windows 7 • 0x800 : Windows Server 2008 R2 • 0x1000 : Windows 8 • 0x2000 : Windows Server 2012 • 0xffff : すべての OS	—
dm_attrflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	項目属性 • 0x00 : 自管理項目 • 0x01 : 上位管理項目 • 0x02 : 共通管理項目	—

(凡例) — : 該当なし

付録 C.63 netmdm_schedule

登録されたジョブのスケジュールを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	スケジュールジョブ名	—
dm_jobnum	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	スケジュールジョブ番号※ • JsXXXXXXXXXXXXXXXX : ジョブ登録スケジュール • JrXXXXXXXXXXXXXXXX : クライアントジョブ削除スケジュール • JdXXXXXXXXXXXXXXXX : ジョブ削除スケジュール • JgXXXXXXXXXXXXXXXX : ジョブ定義削除スケジュール • JeXXXXXXXXXXXXXXXX : ジョブ実行スケジュール	1
dm_eventtime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	スケジュール実行日時	—
dm_limittime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	スケジュール実行期限	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_executetime	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	スケジュール登録日時	—
dm_sysminf	BLOB	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—

(凡例) —：該当なし XXXXXXXXXXXXX：ジョブ番号

注※

ID ジョブの場合は先頭が J ではなく I となります。

付録 C.64 netmdm_softwaredeI

ソフトウェアインベントリ辞書から削除したソフトウェアを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ppname	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ソフトウェア名称	—
dm_filename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	対象ソフトウェアを構成するファイル名称	1
dm_create date	CHAR	19	char	19	CHAR	19	対象ソフトウェアの作成日時	2
dm_filesize	VARCHAR2	10	varchar	10	VARCHAR	10	対象ソフトウェアのファイルサイズ	3
dm_version	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	対象ソフトウェアのバージョン	—
dm_sysmtime	CHAR	19	char	19	CHAR	19	作成日付 (UTC)	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.65 netmdm_softwaredic

クライアントでのソフトウェアインベントリの検索結果を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ppname	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	ソフトウェア名称	—
dm_filename	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	対象ソフトウェアを構成するファイル名称	1

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_create date	CHAR	19	char	19	CHAR	19	対象ソフトウェアの作成日時	2
dm_filesiz e	VARC HAR2	10	varch ar	10	VARC HAR	10	対象ソフトウェアのファイルサイズ	3
dm_compa ny	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	対象ソフトウェアの会社名	—
dm_langua ge	CHAR	2	char	2	VARC HAR	2	対象ソフトウェアの言語識別子	—
dm_charid	CHAR	2	char	2	MCH AR	2	(未使用)	—
dm_sversi on	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	対象ソフトウェアのバージョン	—
dm_produc tname	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	対象ソフトウェアの製品名	—
dm_serchd ate	CHAR	19	char	19	CHAR	19	対象ソフトウェアの検索日付	—
dm_pflg1	CHAR	1	char	1	MCH AR	1	オプションフラグ 1 (レコードのステータス) • NULL：初期状態 • 0x01：表示 • 0x02：非表示	—
dm_pflg2	CHAR	1	char	1	MCH AR	1	オプションフラグ 2	—
dm_ppno	NUM BER	10	int	4	INTE GER	—	JP1/NETM/DM 内部情報 (PP 番号)	—
dm_pahtn ame	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	対象ソフトウェアパス	—
dm_fversio n	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	ファイルバージョン	—
dm_comm ent	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	コメント	—
dm_syste mtime	CHAR	19	char	19	CHAR	19	作成日付 (UTC)	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.66 netmdm_softwarelicence

ソフトウェアのライセンス数を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_ppna me	VARC HAR2	50	varch ar	50	MVAR CHAR	50	ソフトウェア名称	1

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_version	VARCHAR2	50	varchar	50	MVARCHAR	50	バージョン	2
dm_license	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ライセンス数	—
dm_warning	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	警告値	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.67 netmdm_stscnt

ジョブの実行状況を、ジョブの対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1
dm_sitename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	拠点ホスト名	2
dm_waitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	実行待ち数	—
dm_logonwaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ログオン待ち数	—
dm_completioncount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	完了数	—
dm_executioncount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	実行中の数	—
dm_instwaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール待ち数	—
dm_insterrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストールエラー数	—
dm_othererrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	その他のエラー数	—
dm_refusecount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール拒否数	—
dm_totalcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	全実行処理数	—
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	3
dm_pendingcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	通信エラー数	—
dm_transmittingcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ID 管理中継あてのジョブのうち、あて先に届いてない数	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.68 netmdm_stsct_site

中継システムで実行した ID ジョブ（パッケージのインストールとクライアントユーザによるインストール）の実行状況を、対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1
dm_sitename	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	拠点ホスト名	2
dm_waitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	実行待ち数	—
dm_logonwaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ログオン待ち数	—
dm_completetecount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	完了数	—
dm_execount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	実行中の数	—
dm_inswaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール待ち数	—
dm_insererrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストールエラー数	—
dm_othererrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	その他のエラー数	—
dm_refusecount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール拒否数	—
dm_totalcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	全実行処理数	—
dm_idname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	ID 名称	3
dm_pendingcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	通信エラー数	—
dm_transmittingcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ID 管理中継あてのジョブのうち、あて先に届いてない数	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.69 netmdm_stsct_summary

マネージャから実行した全あて先ジョブの実行状況を、対象となるホストおよびパッケージの組み合わせで格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1
dm_primarykey	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	プライマリキー（ジョブの詳細ごとに付けられた番号）	2
dm_logonwaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ログオン待ち数	—
dm_completioncount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	完了数	—
dm_instwaitcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール待ち数	—
dm_insterrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストールエラー数	—
dm_othererrorcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	その他のエラー数	—
dm_refusecount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	インストール拒否数	—
dm_totalcount	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	全実行処理数	—
dm_managername	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	所属マネージャ名称	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.70 netmdm_suspend

中断状態かどうかを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_suspend	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	中断状態かどうか 0：中断状態ではない 1：中断状態	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.71 netmdm_system

システム構成の情報を格納するテーブルです。クライアントおよび中継システムごとに一つのレコードを持ち、ジョブの実行時の経路を管理します。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node name	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	ホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー）	1
dm_node attribute s	NUM BER	10	int	4	INTE GER	—	dm_nodename の属性 • 0x00000001：クライアント • 0x00000002：中継システム • 0x00000008：中継マネージャ	2
dm_node path1	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の最上位のホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） ただし、マネージャ直下のホストの場合は ¥ だけ	—
dm_node path2	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、2 階層目の中継するシステムのホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） 該当する中継するシステムがない場合は NULL	—
dm_node path3	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、3 階層目の中継するシステムのホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） 該当する中継するシステムがない場合は NULL	—
dm_node path4	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、4 階層目の中継するシステムのホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） 該当する中継するシステムがない場合は NULL	—
dm_node path5	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、5 階層目の中継するシステムのホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） 該当する中継するシステムがない場合は NULL	—
dm_node path6	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVAR CHAR	65	先頭に ¥ が付加された、6 階層目の中継するシステムのホスト識別子（ホスト識別子を使用していない場合はノード識別キー） 該当する中継するシステムがない場合は NULL	—
dm_com ment	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	コメント	—
dm_syste minf	RAW	255	varbin ary	136	BINA RY	136	JP1/NETM/DM Manager の管理情報	—
dm_host name	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	ホスト名称	—
dm_ipad dress	VARC HAR2	15	varch ar	15	MVAR CHAR	15	IP アドレス	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_commonname	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	クライアント識別名称	—
dm_connectkind	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	PPP 接続 • 0x00000000：使用しない • 0x00000001：使用する	—
dm_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	システム構成更新日時	—
dm_uinventory_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ユーザインベントリ情報転送日時	—
dm_uinventory_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ユーザインベントリ情報最終更新日時	—
dm_systemkey	RAW	1	binary	1	SMALLINT	1	ノード識別キー • 0x00：ホスト名 • 0x01：IP アドレス	—
dm_managername	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	所属マネージャ名称	—
dm_holdflag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	通知ファイル保留情報フラグ • 0x00：保留しない • 0x01：保留する	—
dm_hostid	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ホスト識別子	—
dm_nodepathview	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_registration_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	レジストリ取得項目転送日時	—
dm_registration_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	レジストリ取得項目最終更新日時	—
dm_inventory_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	システム情報最終更新日時	—
dm_install_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	インストールパッケージ情報最終更新日時	—
dm_software_inventory_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ソフトウェアインベントリ情報最終更新日時	—
dm_node_name2	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	クライアントまたは中継システムのホスト名（小文字に変換していない値）	—
dm_macaddress	VARCHAR2	12	varchar	12	MVARCHAR	12	MAC アドレス	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_create_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	クライアントまたは中継システムの作成日時	—
dm_transfer_flag	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ファイル転送中断フラグ • 0x00：中断状態ではない • 0x01：中断状態である	—
dm_last_updated_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	各インベントリ情報（システム構成情報、システム情報、インストールパッケージ情報、ソフトウェア情報）の最終更新日時	—
dm_monitor_update_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	稼働監視情報最終更新日時	—
dm_monitor_policy	VARCHAR2	85	varchar	85	MVARCHAR	85	稼働監視ポリシー情報	—
dm_version	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	ポリシーのバージョン	—
dm_generation	VARCHAR2	4	varchar	4	MVARCHAR	4	ポリシーの世代番号	—

（凡例）—：該当なし

付録 C.72 netmdm_system_delete

システム構成情報の削除履歴を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node_name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	運用キー（ホスト識別子またはノード識別キー）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_node_attributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	dm_nodename の属性 • 0x00000001：クライアント • 0x00000002：中継システム • 0x00000008：中継マネージャ	—
dm_node_path1	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の最上位のホスト名 • 最上位のホストの場合：¥ だけ • 未使用時：スペース	—
dm_node_path2	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 2 番目のホスト名（未使用時はスペース）	—
dm_node_path3	VARCHAR2	65	varchar	65	MVARCHAR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 3 番目のホスト名（未使用時はスペース）	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node path4	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVA RCH AR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 4 番目のホスト名（未使用時はスペース）	—
dm_node path5	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVA RCH AR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 5 番目のホスト名（未使用時はスペース）	—
dm_node path6	VARC HAR2	65	varch ar	65	MVA RCH AR	65	先頭に ¥ が付加された、あて先の経路上の上位から 6 番目のホスト名（未使用時はスペース）	—
dm_com ment	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVA RCH AR	64	コメント	—
dm_host name	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVA RCH AR	64	ホスト名称	—
dm_ipad dress	VARC HAR2	15	varch ar	15	MVA RCH AR	15	IP アドレス	—
dm_com monnam e	VARC HAR2	32	varch ar	32	MVA RCH AR	32	クライアント識別名称	—
dm_conn ectkind	NUM BER	10	int	4	INTE GER	—	PPP 接続 • 0x00000000：使用しない • 0x00000001：使用する	—
dm_upda tetime	DATE	—	dateti me	8	TIME STAMP	—	システム構成情報更新日時	—
dm_syste mkey	RAW	1	binar y	1	SMAL LINT	—	ノード識別キー • 0x00：ホスト名 • 0x01：IP アドレス	—
dm_man agernam e	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVA RCH AR	64	所属マネージャ名称	—
dm_holdf lag	RAW	1	binar y	1	BINA RY	1	通知ファイル保留情報フラグ • 0x00：保留しない • 0x01：保留する	—
dm_hosti d	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVA RCH AR	64	ホスト識別子	—
dm_node pathview	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVA RCH AR	255	ノード識別キー（ホスト名または IP アドレス）で構成されたあて先の経路情報	—
dm_node name2	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVA RCH AR	64	クライアントまたは中継システムのホスト名（小文字に変換していない値）	—
dm_maca ddress	VARC HAR2	12	varch ar	12	MVA RCH AR	12	MAC アドレス	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_create_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	クライアントまたは中継システムの作成日時	—
dm_delete_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	クライアントまたは中継システムの削除日時	—
dm_delete_factor	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	削除要因 0x00：管理者による削除 0x01：アンインストール結果受信による削除 0x02：上位マネージャの指示による削除	—
dm_trans_holdflag	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ファイル転送中断フラグ 0x00：中断状態ではない 0x01：中断状態である	—
dm_lastupdate_time	DATE	—	datetime	8	TIMESTAMP	—	ノード別の削除日時を把握するための最終更新日時	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.73 netmdm_systeminf

データベースのフォーマットを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_netm_inf	VARCHAR2	32	varchar	32	MVARCHAR	32	データベースを作成した製品のバージョン	—
dm_dbversion	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	フォーマットバージョン	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.74 netmdm_systemjob

JP1/NETM/DM のシステム情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_jobno	CHAR	16	char	16	MCHAR	16	ジョブに対して自動的に割り当てられた番号	1

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_requestfile	LONG RAW	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager 管理情報, または「メッセージの通知」ジョブで指定したメッセージのデータ	—
dm_resultfile	BLOB	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager 管理情報	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.75 netmdm_userinventory

ユーザインベントリ情報を格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	クライアントのホスト名	1
dm_item name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ユーザインベントリ項目名	2
dm_systeminf	VARCHAR2	200	varchar	200	MVARCHAR	200	ユーザインベントリ情報	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.76 netmdm_userinvlist

ユーザインベントリ項目リストを格納するテーブルです。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_item name	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	項目名	1
dm_item label	VARCHAR2	64	varchar	64	MVARCHAR	64	ラベル名	—
dm_priority	NUMBER	3	int	4	INTEGER	—	表示順	—
dm_item comment	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	コメント	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_item values	BLOB	—	image	—	BLOB	—	選択項目値 選択項目が複数ある場合は「,」で区切って設定する 選択項目がない場合は半角スペースを格納する	—
dm_syst eminf	BLOB	—	image	—	BLOB	—	JP1/NETM/DM Manager 管理情報	—
dm_attrf lag	RAW	1	binary	1	BINARY	1	項目属性フラグ • 0x00：自管理項目 • 0x01：上位管理項目 • 0x02：共通管理項目	—
dm_item type	VARCHAR2	8	varchar	8	MVARCHAR	8	項目タイプ • NULL（設定値なし）：テキスト入力 • SELECT：選択 • INSERT：追加可の選択	—
dmtextt ypes	VARCHAR2	128	varchar	128	MVARCHAR	128	文字タイプ 設定項目が複数ある場合は「+」で区切る • NULL（設定値なし）：設定不可 • FREE：フリー • 1LARGE：半角大文字英字 • 1SMALL：半角小文字英字 • 1NUMBER：半角数字 • PERIOD：半角ピリオド • HYPHEN：半角ハイフン • AT：半角アットマーク • PLUS：半角プラス • KANA：半角カタカナ • 1SPACE：文中の半角スペース • 1OTHERS：その他（半角） • 2LARGE：全角大文字英字 • 2SMALL：全角小文字英字 • 2NUMBER：全角数字 • 2SPACE：全角スペース • 2OTHERS：その他（全角）	—
dm_item option	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	入力オプション • NECESSARY-INP：必須 • FREE-INP：任意	—
dm_upp eritemop	VARCHAR2	16	varchar	16	MVARCHAR	16	上位マネージャの入力オプション • NECESSARY-INP：必須 • FREE-INP：任意 上位設定項目または共通管理項目の場合に、上位マネージャで指定されたこの項目に対する入力オプションの設定 自管理項目の場合は常に "FREE-INP" となる	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_lowe ritemop	VARC HAR2	16	varch ar	16	MVAR CHAR	16	下位マネージャの入力オプション • NECESSARY-INP：必須 • FREE-INP：任意 自管理項目または共通管理項目の場合に、自マネージャで指定したこの項目に対する入力オプションの設定 上位設定項目の場合は常に "FREE-INP" となる 最終的に、上記 dm_upperitemop の値とマージされた結果が dm_itemoption に格納される	—
dm_upperitemname	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	上位項目名称 階層化された項目の場合、上位の項目名称を設定する 階層化された項目でなければ、NULL となる	—
dm_lowe ritemname	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	下位項目名称 階層化された項目の場合、下位の項目名称を設定する 階層化された項目でなければ、NULL となる	—

(凡例) —：該当なし

付録 C.77 netmdm_vidlist

「ソフトウェア情報の取得」ジョブの「ウィルス対策製品を検索」で取得したソフトウェア情報を格納するテーブルです。

なお、製品によっては取得できない情報もあります。

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_node name	VARC HAR2	64	varch ar	64	MVAR CHAR	64	ノード名称	—
dm_disp layname	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	ソフトウェア名称（表示用）	—
dm_viru sversion	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	ウィルス定義ファイルバージョン	—
dm_na me	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	ソフトウェア名称	—
dm_vers ion	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	ソフトウェアバージョン	—
dm_lang uage	CHAR	2	char	2	VARC HAR	2	言語	—
dm_pub lisher	VARC HAR2	255	varch ar	255	MVAR CHAR	255	会社名	—

列名	Oracle		Microsoft SQL Server		Embedded RDB		説明	キー NO
	データ型	サイズ	データ型	サイズ	データ型	サイズ		
dm_regecompany	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	登録会社名	—
dm_regoowner	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	登録所有者名	—
dm_installfolder	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	パス	—
dm_enginversion	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ウィルス検出エンジンバージョン	—
dm_softwareid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	ソフトウェア識別 ID	—
dm_installdate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	インストール日付	—
dm_searchdate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	検索日時	—
dm_size	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	サイズ	—
dm_permanent	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	ウィルス検出の常駐／非常駐設定	—
dm_productid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_targetos	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_accesses	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_attributes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_installstate	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_installsizes	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_softwareelementstate	NUMBER	10	int	4	INTEGER	—	(未使用)	—
dm_capture	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_softwareelementid	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_others	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_lastusedate	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—
dm_status	VARCHAR2	255	varchar	255	MVARCHAR	255	(未使用)	—

(凡例) ー：該当なし

付録 D 機能差異

次に示す JP1/NETM/DM の機能差異について説明します。

- JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異
- JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異
- Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の用語差異，機能差異，および設定項目の対応

付録 D.1 JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異

JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）には，次に示す機能差異があります。システム構成の設計時やシステム運用時には，これらの機能差異に注意してください。

なお，JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）のそれぞれで，インストールできるコンポーネントについては，マニュアル「構築ガイド」の「1.1.2 コンポーネントの構成」を，実行できるジョブについては，「2.9.2 作成できるジョブの種類」を，実行できるコマンドについては，マニュアル「運用ガイド 2」の「4.2.1 コマンドの種類」を参照してください。

(1) システム構成の設計時に注意する機能差異

- UNIX 版 JP1/NETM/DM Manager の下位に，Windows 版 JP1/NETM/DM Client（中継システム）は配置できますが，Windows 版 JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）は配置できません。
- クラスタシステムでのフェールオーバー機能は，JP1/NETM/DM Manager（マネージャ）だけで使用できます。JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client（中継システム）では使用できません。
- JP1/NETM/DM Manager では，中継するシステムを経由してジョブを実行できます。JP1/NETM/DM Client（中継システム）では，一つ下の階層までしかジョブを実行できません。
- JP1/NETM/DM Client（中継システム）では，複数の上位システムへポーリングできますが，JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）ではできません。

(2) システム運用時に注意する機能差異

- 次に示す機能は，JP1/NETM/DM Manager だけで使用できます。これらの機能は，JP1/NETM/DM Client（中継システム）では使用できません。
 - ・ サーバとは別の PC への，リモートインストールマネージャのインストール
 - ・ JP1/NETM/DM Manager を使用するユーザの制限（セキュリティの強化）
 - ・ [システム構成] ウィンドウ，[管理情報リスト] および [ディレクトリ情報] ウィンドウの表示
 - ・ [あて先] ウィンドウでの検索
 - ・ [ジョブ実行状況] ウィンドウでの並べ替え
 - ・ [ジョブ実行状況] ウィンドウで表示するジョブを限定する機能（[ジョブの種類]の指定）メニュー）
 - ・ ジョブの中断と再開の指示
 - ・ レジストリ情報の取得
 - ・ ソフトウェアインベントリの取得
 - ・ 「Microsoft Office 製品を検索」または「ウィルス対策製品を検索」を指定したソフトウェア情報の取得

- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブでの、「アプリケーションの追加と削除」または「プログラムの追加と削除」に登録されているソフトウェアの検索
 - ソフトウェア検索リストによるソフトウェア情報の取得
 - パッチの取得
 - パッチ情報の検出
 - オフラインインストール用のインストール媒体の準備
 - ユーザインベントリの取得
 - ディレクトリ情報の取得
 - オフラインマシンからのインベントリ情報と稼働情報の取得
 - WSUS と連携した更新プログラムの管理
 - ソフトウェアの稼働状況の監視
 - クライアントへのメッセージ通知
 - 削除中のジョブの表示
 - 配下の中継するシステムで作成したジョブの、実行状況の表示
 - ID 管理中継の表示
 - インベントリビューアを使用したインベントリ情報の管理
 - ソフトウェア検索リストを利用した、表示するソフトウェアの絞り込み
 - リモートインストールマネージャのウィンドウの右枠に表示されているすべての情報の選択、または選択状態の切り替え
 - リモートインストールマネージャでの、パッケージの詳細な属性の確認
 - あて先グループ、および ID の自動メンテナンス
 - システム構成情報に重複して登録されているホストの検索
 - JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出
 - CSV 形式ファイルへ出力する際の出力範囲の設定
 - 監査ログの出力
 - JP1/Base と連携したユーザ管理
 - JP1/IM からの管理
 - バージョン 8 以前の JP1/Cm2 またはバージョン 7.5 以前の HP NNM からの管理
 - クラスタシステムへの導入
- 全あて先ジョブは、最上位の JP1/NETM/DM Manager からだけ実行できます。JP1/NETM/DM Manager（中継マネージャ）および JP1/NETM/DM Client（中継システム）からは、全あて先ジョブを実行できません。

付録 D.2 JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異

JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base には、インストールできるコンポーネント、中継システムから実行できるジョブ、および受信できるジョブに機能差異があります。システム構成の設計時やシステム運用時には、これらの機能差異に注意してください。

JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base のそれぞれでインストールできるコンポーネントについては、マニュアル「構築ガイド」の「1.1.2 コンポーネントの構成」を参照してください。

中継システムから実行できるジョブ、および受信できるジョブの機能差異を次の表に示します。

表 D-1 中継システムで実行できるジョブの差異

ジョブ種別	JP1/NETM/DM Client - Base での差異
パッケージのインストール	日立プログラムプロダクトだけ配布できます。 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に他社ソフトウェアやユーザデータを配布できるようになります。
リモートコレクト	JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、実行できるようになります。
クライアントユーザによるインストール	日立プログラムプロダクトだけ配布できます。 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に他社プログラムやユーザデータを配布できるようになります。
システム情報の取得	○
ソフトウェア情報の取得	○

(凡例) ○：機能差異はありません。JP1/NETM/DM Client と同様に実行できます。

表 D-2 受信できるジョブの差異

ジョブ種別	JP1/NETM/DM Client - Base での差異	
	中継システム	クライアント
パッケージのインストール	日立プログラムプロダクトが配布される場合だけ受信できます。 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に他社プログラムやユーザデータを受信できるようになります。	
中継システムまでのパッケージ転送	○	—
中継システムのパッケージ一括削除	○	—
リモートコレクト	JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に受信できるようになります。	
中継までのリモートコレクト	JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に受信できるようになります。	
中継サーバからのコレクトファイル収集	○	—
中継サーバのコレクトファイル削除	○	—
クライアントユーザによるインストール	日立プログラムプロダクトが配布される場合だけ受信できます。 JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature をインストールすることで、JP1/NETM/DM Client と同様に他社プログラムやユーザデータを受信できるようになります。	
システム情報の取得	○	○
ソフトウェア情報の取得	○	○
ユーザインベントリ情報の取得	○	○
レジストリ取得項目の転送	○	○
ユーザインベントリ情報の転送	○	○
システム構成情報の取得	○	—
中継サーバからの結果通知保留	○	—

ジョブ種別	JP1/NETM/DM Client - Base での差異	
	中継システム	クライアント
中継サーバの結果通知の保留解除	○	—
ファイル転送の中断	○	—
ファイル転送の再開	○	—
メッセージの通知	○	○
ソフトウェア稼働監視の制御	○	○
ソフトウェア稼働情報の取得	ソフトウェアの操作履歴だけを取得できます。 JP1/NETM/DM Client - Operation Log Feature をインストールすることで、ファイル操作、Web アクセス、印刷操作および外部メディア操作の履歴も取得できるようになります。	

(凡例)

○：機能差異はありません。JP1/NETM/DM Client と同様に受信できます。

—：クライアントでは受信できないジョブです。

付録 D.3 Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の用語差異および機能差異

(1) UNIX 版 JP1/NETM/DM との用語差異

Windows 版と UNIX 版では一部の用語が異なります。UNIX 版の JP1/NETM/DM を使うときは、次のように用語を読み替えてください。

Windows 版の用語	UNIX 版の用語
ID	グループ id
インストール	組み込み※
キャビネット	資源グループ
ジョブ	指令
パッケージャ	資源登録システム
リモートインストール	パッケージ配布（ソフトウェア配布）
リモートコレクト	ファイル収集

注※

UNIX では、インストールからセットアップまでを「組み込み」と称します。

(2) UNIX 版 JP1/NETM/DM との機能差異

Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の機能差異を次に示します。それぞれの配布管理システムからクライアントへの操作のサポート状況を示しています。

表 D-3 リモートインストール (ソフトウェアの配布)

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
配布管理システム主導によるインストール	○	○	○	○
クライアントユーザによるインストール	○	○	○	○
JP1/NETM/DM Client (クライアント) の配布	○	○	○	○
JP1/NETM/DM Client (中継システム) の配布	○	○	○	○
システム条件によるインストール抑止	○	—	○	—
ソフトウェア条件によるインストール抑止	○	—	○	—
配布スケジュール	○	○	○	○
インストール日時指定	○	○	○	○
インストールタイミング指定	○※ 1	○※ 2	○※ 1	○※ 2
インストール後のクライアントマシンの自動再起動	○	○	○	○
処理中ダイアログの表示 (パッケージの設定)	○	—	—	—
処理中ダイアログの表示 (クライアントセットアップの設定)	○	—	○	—
リモートインストールと連携した外部プログラム起動	○ (配布前後, エラー時)	○ (配布前後)	○ (配布前後, エラー時)	○ (配布前後)
パッケージの自動インストール	○	○	○	○
レコーダファイルを使ったインストール	○	—	○	—
AIT ファイルを使ったインストール	○	—	○	—
あて先グループを指定したインストール	○	○	○	○
ID を指定したインストール	○	○	○※ 3	○※ 3
分割配布	○	○※ 4	○	○
マルチキャスト配布	○	—	—	—
ジョブの中断と再開	○	○	○	○
中断中のジョブ配布	○	○	○	○
クライアント制御によるリモート起動とシャットダウン	○※ 5	○※ 6	—	—
オフラインインストール	○	—	—	—
ディレクトリ情報の取得	○	—	—	—

(凡例) ○: サポートあり —: サポートなし

注※ 1

システム起動時インストール, 通常インストール

注※ 2

システム起動時インストール，通常インストール，システム停止時インストール

注※ 3

UNIX 版 JP1/NETM/DM のグループ id に登録されている配布先システムの情報は，中継システムが管理しています。このため，配布管理システムに直接接続している配布先システムをグループ id に登録することはできません。

注※ 4

クライアントがエンド WS の場合だけ分割配布できます。

注※ 5

クライアント制御によるリモート起動は，中継システムを経由する場合，中継システムが UNIX，Windows に関係なく使用できます。

注※ 6

クライアントのバージョンが 08-10 以降の場合，リモート起動だけを使用できます。中継システムの場合は，Windows，UNIX に関係なく使用できます。

表 D-4 パッケージング

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
パッケージデータの圧縮	○	○	○	○
パッケージデータの暗号化	○※	○※	○※	○※
パッケージの自動削除	—	—	○	○
配布管理システム間のパッケージ複写	—	—	○	○

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※

JP1/NETM/DM Encryption Option が必要です。

表 D-5 インベントリ情報の管理

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
定期的なインベントリ情報の取得	○	○	—	—
取得タイミングの指定	○※ 1	○※ 2	—	—
更新されたインベントリ情報の自動通知	○	○※ 3	—	—
システム情報の管理	○	○	○	○
レジストリ情報の管理	○	—	—	—
ソフトウェア情報の管理	○	○	○	○
ユーザインベントリ情報の管理	○	○	○	○
他社ソフトウェア情報の取得	○	○	○	○
ソフトウェア検索リストによるソフトウェア情報の取得	○	○	—	—
ファイル検索	○	—	—	—
「Microsoft Office 製品を検索」を指定したソフトウェア情報の取得	○	—	—	—

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
「ウイルス対策製品を検索」を指定したソフトウェア情報の取得	○	○※ 4	—	—
パッチ情報の取得	○	○	○	○
ソフトウェアのライセンス管理	○	—	—	—
ソフトウェアの世代管理	○	○	○	○
オフラインマシンの管理	○	—	—	—
管理情報の CSV 形式ファイル出力	○	○	○※ 5	○※ 5

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※ 1

システム起動時実行, システム稼働中実行

注※ 2

システム起動時実行, システム稼働中実行, システム停止時実行

注※ 3

クライアントのバージョンが 09-00 以降の場合だけ通知できます。

注※ 4

クライアントの適用 OS が Linux で, バージョンが 07-50 以降の場合に取得できます。

注※ 5

JP1/NETM/DM Web・Console が必要です。

表 D-6 リモートコレクト (ファイルの収集)

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
リモートコレクト	○	○	○	○
収集パス名※ 1	○	○	○	○
収集タイミングの指定	○※ 2	○※ 2	○※ 2	○※ 3
リモートコレクトと連携した外部プログラム起動	○	○ (収集前後)	○	○ (収集前後)
ジョブの中断と再開 (一括収集)	—	—	○	○
クライアント制御によるリモート起動とシャットダウン	○※ 4	○※ 5	—	—
収集ファイルの圧縮	○	○	○	○
収集ファイルの暗号化	—	—	○※ 6	○※ 6
収集資源の配布	—	—	○	○

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※ 1

指定できる収集パス名の最大文字数を次に示します。

- ・ Windows クライアント：半角 256 文字
- ・ UNIX クライアント：半角 63 文字

注※ 2

クライアント起動時，クライアント稼働中

注※ 3

クライアント起動時，クライアント稼働中，クライアント停止時

注※ 4

クライアント制御によるリモート起動は，中継システムを経由する場合，中継システムが UNIX，Windows に関係なく使用できます。

注※ 5

クライアントのバージョンが 08-10 以降の場合，リモート起動だけを使用できます。中継システムの場合は，Windows，UNIX に関係なく使用できます。

注※ 6

JP1/NETM/DM Encryption Option が必要です。

表 D-7 ソフトウェアの稼働状況の監視

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
ソフトウェアの稼働状況の監視	○※	—	—	—
「Asset Information Manager Limited」での稼働情報の管理	○	—	—	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※

中継システムを経由する場合，中継システムが UNIX，Windows に関係なく使用できます。ただし，バージョンが 07-50 以降である必要があります。

表 D-8 リモートコントロール

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
クライアントのリモートコントロール	○	—	—	—
リモートコントロール機能を利用したファイル転送	○	—	—	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

表 D-9 連携機能

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
JP1/Base 連携	○	—	—	—
JP1/AJS2 - SO 連携	—	—	○	○
JP1/Cm2 連携	○	○	—	—
JP1/IM のイベント連携	○	○	○	○
秘文連携機能	○	—	—	—

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
EUR 連携	○	—	—	—
JP1/NETM/Audit - Manager からの 監査ログ管理	○	—	—	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

表 D-10 システム構成

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
配布管理システムの階層化	○	○	—	—
マルチ NETM/DM 機能	—	—	—	○※ 1
リレーショナルデータベースへの対応	○ (Embedded RDB, Microsoft SQL Server, Oracle)	○ (Embedded RDB, Microsoft SQL Server, Oracle)	○ (HiRDB, Oracle)	○ (HiRDB, Oracle)
クラスタシステムでの運用※ 2	○	○	○	○
複数 LAN 接続対応	○	○	○	○
複数上位システムへの対応	○	○	○	○
自動ダイヤリング	○	—	○	—
上位システムに通知する IP アドレス の優先順位設定	○	○	○	○

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※ 1

管理ファイルとしてリレーショナルデータベースが必要です。

注※ 2

JP1/NETM/DM Manager をクラスタ化できます。

表 D-11 システム構成情報の管理

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
システム構成情報の自動生成	○	○	○	○
システム構成情報の削除履歴管理	○	○	—	—
システム構成情報と ID 連携	○	○	—	—
ホスト識別子による管理	○	○	—	—
ホスト検索機能	○	○	—	—
JP1/NETM/DM 未導入ホストの検出	○	○	—	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

表 D-12 クライアントの管理

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
パッチの取得	○	—	—	—
パッチ情報の検出	○※ 1	—	—	—
WSUS と連携した更新プログラムの管理	○	—	—	—
上位システムへのアラート通知	○	—	—	—
クライアントへのメッセージ通知	○※ 2	○※ 3	—	—
AMT を利用したクライアント制御	○	—	—	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※ 1

中継システムを経由する場合、中継システムが UNIX, Windows に関係なく使用できます。

注※ 2

中継システムを経由する場合、中継システムが UNIX, Windows に関係なく使用できます。ただしバージョンが 07-50 以降である必要があります。

注※ 3

クライアントの適用 OS が Linux で、バージョンが 09-00 以降の場合に、テキスト形式のメッセージだけ通知できます。

表 D-13 クライアントの機能

項目	Windows の配布管理システム		UNIX の配布管理システム	
	Windows クライアント	UNIX クライアント	Windows クライアント	UNIX クライアント
クライアントの非常駐	○	○	○	○
クライアントユーザによるジョブの保留・キャンセル	○	—	○	—
ローカルシステムビューアとシステム監視	○※	—	○※	—

(凡例) ○：サポートあり —：サポートなし

注※

クライアントでローカルに使用する機能のため、上位システムからの操作はありません。

付録 D.4 Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の設定項目の対応

ここでは、Windows 版 JP1/NETM/DM の [セットアップ] ダイアログボックスの設定項目と、UNIX 版 JP1/NETM/DM で指定する属性名の対応について説明します。

(1) JP1/NETM/DM Client (中継システム) の設定項目の対応

Windows 版 JP1/NETM/DM Client (中継システム) の設定項目と UNIX 版 JP1/NETM/DM で指定する属性名の対応を、[セットアップ] ダイアログボックスのパネルごとに示します。

(a) 基本設定との対応

次に示すパネルについては、UNIX 版 JP1/NETM/DM と対応した設定項目はありません。

- [ダイヤルアップ] パネル
- [マルチキャスト配布] パネル
- [システム構成関連] パネル
- [運用キー] パネル
- [クライアントアラート] パネル
- [AMT 連携] パネル

表 D-14 【接続先】パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
上位システム	JP1/NETM/DM Manager	ConnectionKind (設定値に HOST を指定)
	JP1/NETM/DM Client (中継システム) または JP1/NETM/DM SubManager	ConnectionKind (設定値に MASTER を指定)
	複数の上位システムへポーリングする	—
	中継システムと同一マシン上の HTTP Gateway を使用して接続する	—
	ホスト名又は IP アドレス	ManagingHost
ID 登録先	JP1/NETM/DM Manager	—※
	JP1/NETM/DM Client (中継システム) または JP1/NETM/DM SubManager	—※
	ホスト名又は IP アドレス	ManagingHost

(凡例) —: 該当なし

注※ UNIX 版 JP1/NETM/DM では常に中継システムが設定される。

表 D-15 【通信関連】パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
起動プロトコル	TCP プロトコル	ClientActionProtocol (設定値に TCP を指定)
	UDP プロトコル	ClientActionProtocol (設定値に UDP を指定)
インターバル転送をする	インターバル転送をする	—※
	連続転送バッファ数	FileTransferSleepInterval
	転送休止時間	FileTransferSleepTime

(凡例) —: 該当なし

注※ 「FileTransferSleepInterval」および「FileTransferSleepTime」を設定していると有効になる。

表 D-16 【中継システムカスタマイズオプション】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
同時に接続できるクライアント数		MaxConnectClients
中継 / クライアントの同時実行要求数		MaxExecuteClients
管理ファイルのキャッシュ上限サイズ		—
下位クライアントの資源情報を記録する	下位クライアントの資源情報を記録する	—
	システム情報	—
	インストールパッケージ情報	—
ID ジョブのクライアントの実行結果を記録する		IDCommandDetailInf（設定値に YES を指定）
下位システムの起動を監視する		- OS が HP-UX 以外の場合： /NETMRDS/rdsprm/.cltstsud - OS が HP-UX の場合： /var/opt/NETMDMW/rdsprm/.cltstsud
起動失敗要因を細分化する		- OS が HP-UX 以外の場合： /NETMRDS/rdsprm/.cltstsud - OS が HP-UX の場合： /var/opt/NETMDMW/rdsprm/.cltstsud
下位システムのファイル転送エラーを監視する		InformLineDown（設定値に YES を指定）
接続先以外からファイル転送の中断・再開ジョブを受け付ける		— ※

（凡例） —：該当なし

注※ UNIX 版 JP1/NETM/DM では常に有効になる。

表 D-17 【上位通知】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
サーバ通知ファイルの送信タイミング	即時送信	SEND_RESULT=IMMEDIATE
	定期送信	— ※
上位システムに対する、ジョブの受信とサーバ通知ファイルの送信を並行実行する		ParallelTransfer（設定値に YES を指定）
下位システムへのパッケージの分割配布の実行状況を上位システムに通知する		—

（凡例） —：該当なし

注※ SEND_RESULT=IMMEDIATE を省略した場合に定期送信となる。

表 D-18 【イベントサービス】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
イベントサービス機能を使用する		AutoAction（設定値に YES を指定）
通知するイベント	サーバダウンイベント	—
	クライアントアラームイベント	—

（凡例） —：該当なし

表 D-19 [リモートインストールマネージャ] パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目	属性名
配布管理システムへインストール状況通知を行う	HighEndManagementHost
配布管理システムへ ID ジョブの結果通知を行う	—

(凡例) —: 該当なし

(b) 詳細設定との対応

Windows 版 JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定項目と UNIX 版 JP1/NETM/DM で指定する属性名の対応を次に示します。

JP1/NETM/DM Client (中継システム) の詳細設定との対応は、JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定項目の対応と同じです。JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定項目の対応については、「(2) JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定項目の対応」を参照してください。

(2) JP1/NETM/DM Client (クライアント) の設定項目の対応

次に示すパネルについては、UNIX 版 JP1/NETM/DM と対応した設定項目はありません。

- [処理中ダイアログ] パネル
- [通知ダイアログ] パネル
- [ダイアルアップ] パネル
- [システム監視] パネル
- [リモートコレクトオプション] パネル
- [マルチキャスト配布] パネル
- [スタートアップ関連] パネル
- [セットアップの保護] パネル
- [権限] パネル

表 D-20 [接続先] パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目	属性名
接続先	JP1/NETM/DM Manager
	WorkstationType (設定値に END を指定)
	JP1/NETM/DM Client (中継システム) または JP1/NETM/DM SubManager
	WorkstationType (設定値に CLIENT を指定)
	ホスト名または IP アドレス
	ManagingHost
実行要求を送信した上位システムを接続先に自動設定する	—
複数の上位システムへポーリングする	—
システム構成を自動登録する	(動作環境設定用ファイルで設定) SYSCNS=YES
インベントリ情報も通知する	INVENTORY_UPLOAD (設定値に YES を指定)

(凡例) —: 該当なし

表 D-21 [クライアント常駐・ポーリング] パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目	属性名
クライアントを常駐する	(システムファイルで設定)

設定項目		属性名
ポーリングする		エンド WS の場合 - OS が HP-UX 以外 /NETMRDS/rdsprm/.rdsmaauto - OS が HP-UX /var/opt/NETMDMW/rdsprm/.rdsmaauto クライアントの場合 WatchTimeofOrders（設定値に MANUAL 以外を指定）
ポーリングのタイミング	システム起動時からのポーリング	—
	システム起動時だけ	WatchTimeofOrders（設定値に 0 を指定）
	システム起動時から一定間隔	WatchTimeofOrders（設定値に 1 ～ 1280 を指定）
	起動時ポーリングのタイミング	—
	システム起動からポーリングするまでの時間間隔	—
	待機してからポーリングを開始する	—
	起動時ポーリングは時刻指定によるポーリング	—
複数の上位システムへのポーリング形態	ホットスタンバイ	—
	マルチホスト	—

（凡例）—：該当なし

表 D-22 【通信関連】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
ポート番号	JP1/NETM/DM Manager[netmdm]	(/etc/services ファイルで設定) netmdm ポート番号/tcp
	JP1/NETM/DM Client（中継システム）または JP1/NETM/DM SubManager[netmdmw]	(/etc/services ファイルで設定) netmdmw ポート番号/tcp
	クライアント起動要求 [netmdmclt]	(/etc/services ファイルで設定) netmdmclt ポート番号/tcp netmdmclt ポート番号/udp
上位システムからの起動要求プロトコル	TCP プロトコル	— ※ 1
	UDP プロトコル	— ※ 1
	起動要求プロトコルで受信した IP アドレスで上位システムに接続する	— ※ 2
ファイル転送バッファサイズ		TransferDataSize

設定項目	属性名
通信ソフトからの応答待ち時間	ReceiveWaitTime
複数のネットワークアダプタを設定する	(IFCONFIG ファイルで設定)

(凡例) —：該当なし

注※ 1 UNIX 版 JP1/NETM/DM では常に有効になる。

注※ 2 配布管理システムの運用キーが IP アドレスの場合に有効になる。

表 D-23 【ネットワークアダプタの設定】ダイアログボックスの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目		属性名
使用するネットワークアダプタの優先順位を設定する		(HP-UX 以外の場合 /NETMRDS/rdsprm/IFCONFIG ファイルで設定, HP-UX の場合 /etc/opt/NETMDMW/rdsprm/IFCONFIG ファイルで設定)
ネットワークアダプター一覧	ネットワークアダプタ	—
	MAC アドレス	—
	IP アドレス	—
	サブネットマスク	—
クライアントの IP アドレスとして使用する		—

(凡例) —：該当なし

表 D-24 【通信リトライ】パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目			属性名
ソケットコネクション	ソケットコネクション確立のリトライ回数		• RetryCount • ServerRetryCount
	ソケットコネクション確立のリトライ間隔（秒単位）		• RetryInterval • ServerRetryInterval
通信エラー	通信エラー発生時のリトライ回数		DeliveryRetryCount
	通信エラー発生時のリトライ間隔（秒単位）		DeliveryRetryInterval
上位システムへの送信通知ファイル	上位システムに送信していない通知ファイルをリトライ送信する		—
	リトライ回数	無制限	—
		指定する	—
	リトライ間隔		—

(凡例) —：該当なし

表 D-25 【障害関連】パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目			属性名
ログ情報	ログ世代管理数		—
	ログエントリ数	MAIN ログエントリ数	MaxEntryofMessage
		USER ログエントリ数	—
		COMPO ログエントリ数	—
		FUNC ログエントリ数	—

設定項目			属性名
		LONG ログエントリ数	—
イベントビューアへ出力するメッセージ種別	エラーメッセージを出力		SystemLogOutputLevel (設定値に 1 を指定)
	エラーメッセージ, 警告メッセージを出力		SystemLogOutputLevel (設定値に 2 を指定)
	エラーメッセージ, 警告メッセージ, 情報メッセージを出力		SystemLogOutputLevel (設定値に 3 を指定)

(凡例) —: 該当なし

表 D-26 【ジョブオプションパネル】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目			属性名
ジョブ保留機能	ジョブを保留する	ジョブを保留する	—
		ダイアログ表示時間（秒単位）	—
運用管理者からのシャットダウンまたは再起動許可	運用管理者の指示でコンピュータをシャットダウンまたは再起動する		—
	確認ダイアログの表示時間	無制限	—
		指定する	—
ダイナミックインベントリを通知する			—
接続先以外の定期実行ジョブを抑止する			REGULARJOB_NOSERVER_NOEXEC=NO
ジョブのインストール/収集待ち通知を抑止する			—
日立プログラムプロダクトを「アプリケーションの追加と削除」ソフトウェアとしても扱う			—
ソフトウェア検索時パッケージ識別 ID の重複を抑止する			—

(凡例) —: 該当なし

表 D-27 【インストールオプション】 パネルの設定項目と UNIX 版での属性名

設定項目			属性名
インストール・収集	インストール・収集リトライ回数		DeliveryRetryCount
	インストール・収集リトライ間隔		DeliveryRetryInterval
パッケージの分割配布	分割配布する	分割配布する	—※
		分割サイズ	—※
		転送休止時間	—※
ダウンロード時にサイズチェックする			—
以前の接続先システムに対応するパッケージ情報を削除する			—
パッケージのインストールエラー時にインストール履歴を保管する			—
日立 PP インストールワークディレクトリをインストール時に作成・削除する			—

設定項目	属性名
インストールシールドからの応答待ち時間	—

(凡例) —：該当なし

注※ 上位システムの設定内容に応じて有効になる。

付録 E 各バージョンの変更内容

(1) 09-50 の変更内容

- 「Automatic Installation Tool」がインストールされている JP1/NETM/DM Client（中継システム）に、JP1/NETM/DM Client（中継システム）をリモートインストールした場合、「Automatic Installation Tool」を除くコンポーネントが更新されるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できる Microsoft Office 製品を追加した。また、Microsoft Office 製品の情報を詳細化した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 仮想化環境で稼働監視する場合に同時にログオンするユーザ数のサポート上限を、60 ユーザに変更した。これに伴い、ハードウェアに関する見積もりを変更した。
- ソフトウェアの起動が抑止された場合に、アラートとして JP1 イベントを通知できるようにした。
- 印刷が抑止された場合に、アラートとして JP1 イベントを通知できるようにした。
- サーバセットアップの次のパネルの内容を変更した。
 - ・[稼働監視] パネル
 - ・[AIM 関連] パネル
- 「Asset Information Manager Limited」でインベントリ情報を管理する場合、ユーザに分掌を割り当てることで、一人のユーザが複数の部署の情報を管理できるようにした。
- データベースが Embedded RDB の場合、リレーショナルデータベースのテーブル netmdm_ospatch_patchinf に、最大 1,840 メガバイトのパッチデータを格納できるようにした。
- コマンドに引数 /LC を設定することで、Windows からログオフしても、コマンド処理が継続されるようにした。
- CSV 出力ユーティリティまたは CSV 出力コマンド（dcmcsvu.exe）で、Unicode の CSV 形式ファイルを出力できるようにした。
- 更新プログラム管理ファイルの最小値を 130 メガバイトに変更した。
- クライアントセットアップの [障害関連] パネルでメッセージをイベントビューアに出力するかどうかを選択できるようにした。
- 次のログファイルが出力されるようにした。
 - ・DPTExpt.log
 - ・DPTInpt.log
- Embedded RDB をアップグレードする場合に、更新プログラム管理機能で取得したパッチを移行するかどうか選択できるようにした。
- DPTInpt.exe（データベースへのパッチ格納）を追加し、Embedded RDB に更新プログラム管理機能で取得したパッチを移行できるようにした。
- 稼働監視結果のバックアップ機能を追加した。これに伴い、dmTRUtil.exe コマンドでバックアップファイルを CSV 形式ファイルに出力できるようにした。
- クライアントセットアップのリモート設定に、次に示すクライアントセットアップ項目を追加した。
 - ・ホスト名または IP アドレス
 - ・製品種別
 - ・システム変更時にインベントリ情報を上位システムへ通知する

- イベント ID 「2021」 のメッセージを追加した。
- イベント ID が 7009 の JP1/NETM/DM Client (クライアント) のイベントログメッセージを出力しないようにした。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0123-E」を追加した。
- 秘文連携機能の「インストール済み秘文製品の詳細情報の取得」および「秘文製品の内部ログの収集」について、64 ビット版の Windows 7 でも使用できるようにした。

(2) 09-12 の変更内容

- システム情報「スクリーンセーバー パスワードの保護機能」について、「スクリーンセーバー」の指定が「無効」の場合でも、取得できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- クライアントにインストールされている Microsoft Office 2010 の情報を、ソフトウェア情報として取得できるようにした。
- システム情報として暗号化情報を取得できる JP1/ 秘文 IC, 秘文 IC, および秘文 FDE のバージョンに 09-10 を追加した。
- 次に示すデバイスに対して使用を抑止できるようにした。また、接続履歴、切断履歴、接続許可履歴、および接続抑止履歴を取得できるようにした。
 - Bluetooth デバイス
 - イメージングデバイス
- 次に示すデバイスに対して書き込みだけを抑止できるようにした。また、接続抑止履歴を取得できるようにした。
 - 内蔵 CD/DVD ドライブ
 - 内蔵 FD ドライブ
 - IEEE1394 接続デバイス
 - 内蔵 SD カード
- Windows XP Mode 環境での JP1/NETM/DM Client (クライアント) の運用をサポートした。
- 次に示すデバイスに対して使用を抑止している場合、デバイスがクライアント PC に接続されたときに、操作が抑止されていることを示すメッセージをクライアント PC に表示できるようにした。また、アラートとして JP1 イベントを JP1/IM に通知できるようにした。
 - 内蔵 CD/DVD ドライブ
 - 内蔵 FD ドライブ
 - IEEE1394 接続デバイス
 - 内蔵 SD カード
 - Bluetooth デバイス
 - イメージングデバイス
- サーバセットアップの次のパネルの内容を変更した。
 - [稼働監視] パネル
 - [AIM 関連] パネル
- Microsoft SQL Server 2008, または Microsoft SQL Server 2005 の機能であるデータパーティションを使用して稼働監視履歴を格納できるようにした。
- Microsoft SQL Server および Oracle のデータベースに必要なディスク容量を見積もるための算出式を変更した。

- リレーショナルデータベーステーブルの「netmdm_ospatch_patchinf」について、次の列のサイズを変更した。
 - dm_title
 - dm_kbarticle
- クライアントセットアップの [ジョブオプション] パネルに「ソフトウェア検索時パッケージ識別 ID の重複を抑止する」チェックボックスを追加し、パッケージ識別 ID の重複を抑止できるようにした。
- INVENTORY.LOG を FUNC ログに移動することで、ログエントリ数を変更した。
- Asset Information Manager Limited で Active Directory と連携して、ログイン認証できるようにした。また、Active Directory のユーザ情報を取得できるようにした。
- 7 けたの数値のホットフィックス番号に対応した。
- CSV 出力ユーティリティまたは dcmcsvu コマンドで CSV 形式ファイルに出力できる項目として、次を追加した。
 - レジストリパス（レジストリ取得項目テンプレート）
 - ソフトウェア識別 ID（Microsoft Office 製品テンプレート）
 - ソフトウェア識別 ID（ウィルス対策製品テンプレート）
- リモートインストールを利用して、JP1/NETM/DM Client（クライアント）のクライアントセットアップでの設定内容を変更できるようにした。
- クライアントで操作履歴が消失した場合に、アラートとして JP1 イベントを通知できるようにした。
- イベント ID「16031」のメッセージを追加した。
- 次の ID のメッセージを、監査をお勧めするイベントログメッセージの要因と対処に追加した。
 - 16023
 - 16024
 - 16031
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0055-W」を追加した。
- 秘文連携機能を使用できる秘文製品のバージョンとして、09-10 を追加した。
これに伴い、クライアントの OS が 64 ビット版の Windows 7 の場合の注意事項を追加した。

(3) 09-10 の変更内容

- 次を示すインベントリ情報（システム情報）を収集できるようにした。
 - JP1/ 秘文 IC および秘文 IC によるドライブ（ハードディスク）暗号化情報
 - 秘文 FDE によるドライブ（ハードディスク）暗号化情報
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 仮想化環境の稼働状況を監視できるようにした。
- USB 接続メディアへのアクセス抑止で、抑止対象からの除外条件を設定している場合に、次の履歴を取得できるようにした。
 - 接続許可履歴
 - 接続抑止履歴
- 操作が抑止されている USB 接続メディアがクライアント PC に接続された場合に、アラートとして JP1 イベントを通知できるようにした。
- 取得できるシステム情報の CPU 種別を追加した。

- UNIX 版 JP1/NETM/DM との設定項目の対応について、説明を追加した。
- JP1/NETM/DM Manager のセットアップの説明に、次の内容の説明を移動した。
 - ・ OS 名を表示するためのレジストリの設定
- レジストリを設定することで、Windows からログオフしても、コマンド処理が継続されるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」の「サーバセットアップ」ダイアログボックスについて、「JP1/NETM/DM 連携」の設定に「取り込み対象」を追加した。これによって、すべての機器からインベントリ情報を取り込む選択や、ホスト識別子があるインベントリ情報だけを取り込む選択のほかに、システム情報があるインベントリ情報を取り込む選択ができるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」の「サーバセットアップ」ダイアログボックスについて、「JP1/NETM/DM 連携」の設定に「インベントリ取り込み方式」を追加した。これによって、インベントリ情報の取り込み方式として「マルチスレッド方式」を選択できるようになった。
- 「Asset Information Manager Limited」の「サーバセットアップ」ダイアログボックスについて、「JP1/NETM/DM 連携」の設定に「インベントリ取り込み多重度」を追加した。これによって、マルチスレッド方式でインベントリ情報を取り込む場合の多重度を設定できるようになった。
- 配布管理システムの起動と停止について、説明を追加した。また同個所に、次の内容の説明を移動した。
 - ・ リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合はシステム停止手順
- システムのメンテナンスとして実施する作業について、説明を追加した。また同個所に、次の内容の説明を移動した。
 - ・ クラスタシステム環境での、JP1/NETM/DM Manager の設定変更の方法
 - ・ データベースの各種メンテナンス作業を実施するタイミング
 - ・ システムのバックアップと復元の手順
- ID 管理中継からの自動通知が遅延した場合の対処を追加した。
- クラスタシステム環境でのバージョンアップ方法およびデータの移行方法について、説明を追加した。
- ターミナルサーバ上の Citrix XenApp（公開デスクトップ）での JP1/NETM/DM Client（クライアント）の操作をサポートした。
- リモートインストール先が UNIX 版 JP1/NETM/DM Client の場合に、アクセス権設定ファイルを作成することで、インストール先ディレクトリと同様のアクセス権および所有者をインストール後のファイルに引き継げるようにした。
- リモートインストールマネージャでソフトウェア情報の表示名が短縮されるホットフィックスに、「Security Update for Microsoft Office system 2007」を追加した。また、ホットフィックス番号として認識される頭文字に、「kb」を追加した。
- USB 接続メディアの抑止に対する除外条件をデバイスインスタンス ID で設定する場合に、次の機能を追加した。
 - ・ 除外条件として、USB コントローラでのデバイスインスタンス ID を設定できるようにした。
 - ・ 設定した条件文字列との比較方法を選択できるようにした。
- オフラインインストールの場合に設定できない環境変数や無効になる項目について、説明を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0010-I」および「KDSF0020-I」の内容を変更した。

(4) 09-01 の変更内容

- 適用 OS に Windows 7 および Windows Server 2008 R2 を追加した。

- Linux のディストリビューションのインベントリ情報を収集できるようにした。
- BitLocker のインベントリ情報を収集できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- Active Directory からディレクトリ情報として取得できる情報に、グループを追加した。また、ディレクトリ情報を取得するコマンド (dcmadsync.exe) に引数 /d を追加して、取得済みのディレクトリ情報を削除できるようにした。
- OS が Windows Vista または Windows Server 2008 の場合に、ネットワーク共有プリンタを使用する環境で印刷履歴の取得および印刷抑止の機能を利用できるようにした。
- ディレクトリ情報とシステム構成情報の関係について、説明を追加した。
- JP1/NETM/DM の各製品およびコンポーネントを動作させるのに必要な CPU 性能の最小値および推奨値を変更した。
- 配布管理システムのメモリ所要量について、リレーショナルデータベースに Embedded RDB を使用する場合の説明を追加した。
- [上位通知] パネルで、上位システムへ稼働監視履歴を中継する場合、上位システムに通知される情報を選択できるようにした。
- ポート番号 / プロトコルが「30002/udp」の場合のファイアウォールの通過方向を変更した。
- 「収集パス名」として使用できる文字数の上限を半角 63 文字から半角 256 文字に変更した。
- 稼働情報をデータベースへ格納するコマンド (dcmmonrst.exe) に引数 /n を追加して、格納処理の状況を確認できるようにした。また、格納処理の状況を確認するためのログファイル「MONRST.LOG」を追加した。
- 「Asset Information Manager Limited」の [サーバセットアップ] ダイアログボックスについて、次の項目を追加した。
 - ・「基本情報」の設定に「変更履歴情報管理」を追加して、タスク「履歴情報の削除」の実行時に、管理対象とする機器の初回の変更履歴を管理するかどうかを選択できるようにした。
 - ・「JP1/NETM/DM 連携」の設定に「JP1/NETM/CSC 通知件数」を追加して、JP1/NETM/DM のインベントリ情報の取り込み時に JP1/NETM/Client Security Control に通知するタイミングを設定できるようにした。
- 資産情報として管理できる情報に、「DM システム構成更新日付」、「DM レジストリ更新日付」を追加した。
- [インストールパッケージ] パネルおよび [ソフトウェアインベントリ] パネルに表示されるホットフィックスの表示方法を変更した。
- [ソフトウェア稼働情報] ウィンドウについて、退避した操作履歴が 56 万件を超えるクライアントについてはソフトウェアの操作履歴が表示されない旨の注意事項を追加した。
- dcmstdiv.exe を追加して、オフラインマシン情報の入力をコマンドで実行できるようにした。
- WMI 情報を採取できるようにした。
- 次に示すイベント ID のメッセージを追加した。
 - ・ 1081
 - ・ 1082
 - ・ 1083
 - ・ 1084

- 1085
- 1086
- 11029

- 秘文連携機能を利用できる秘文製品のバージョンに 08-02, 09-00 を追加した。

(5) 09-00 の変更内容

- リモートインストールマネージャの [システム構成] ウィンドウ, [あて先] ウィンドウ, および [ディレクトリ情報] ウィンドウの, [属性] パネルに表示される次の情報を, ソフトウェア稼働監視の制御ジョブを実行したタイミングで更新するようにした。
 - 適用済みソフトウェア稼働監視ポリシー
 - 適用済みソフトウェア稼働監視ポリシーバージョン
- リレーショナルデータベースのプログラムに Microsoft SQL Server 2008 を使用できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 特定の USB 接続メディアを抑止対象から除外できるようにした。また, 抑止中の USB 接続メディアがクライアント PC に接続された場合, 抑止中であることを示すメッセージを表示できるようにした。
- 稼働情報を自動で格納していない場合, 引数 /x を指定して dcmmonrst コマンドを実行することで稼働情報をデータベースに格納できるようにした。
- 日立統合 CD-ROM に格納された統合形名 (複数の製品で構成された形名) 製品をパッケージングできるようにした。
- Embedded RDB がイベントログに出力するメッセージのうち, 運用上必要のないものについては出力を抑止できるようにした。
- システム構成情報からホストを削除する場合, ID からホストを削除できるようにした。
- JP1/NETM/DM Manager のリモートインストールマネージャで, あて先グループまたはホストをファイルから追加できるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」の [サーバセットアップ] ダイアログボックスについて, 次の項目を変更した。
 - 「セッション情報」の設定「無通信監視時間」で指定できる値の最小値を 5 分に変更した。
 - 「基本情報」の設定に「保有機器検索画面の機器状態」を追加して, 保有機器集計画面および保有機器一覧画面で表示される検索条件「機器状態」に表示する機器の状態を選択できるようにした。
- タスクスケジューラを利用してパッチを自動取得する場合, 次に示す機能を使用できるようにした。
 - パッケージング後に更新プログラムを削除する
 - パッケージングしたことのある更新プログラムをダウンロードしない
- 「Asset Information Manager Limited」の一括変更画面の検索条件に, 「ユーザ名」, 「ホスト名」および「IP アドレス」を指定できるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」の管理クラス「VariousInfo」に含まれる項目に「Text_Title (ダイアログタイトル表示情報)」を追加し, 操作画面の画面名を変更できるようにした。
- 保守コード「3000AF008300」のイベントログメッセージに要因と対処を追加した。
- リレーショナルデータベースに Microsoft SQL Server または Oracle を使用している場合に, パッケージファイルおよび操作履歴ファイルをバックアップするコマンド, および復元するコマンドを追加した。
 - netmfile_backup.bat

- netmfile_restore.bat

(6) 08-52 の変更内容

- 次を示すインベントリ情報を取得できるようにした。
 - ハードディスクの電源を切る (AC)
 - ハードディスクの電源を切る (DC)
 - システムスタンバイ / スリープ (AC)
 - システムスタンバイ / スリープ (DC)
 - システム休止状態 (AC)
 - システム休止状態 (DC)
- また、省電力設定にしていないクライアントを対策する運用例と、クライアントをシャットダウンさせる運用例を追加した。
- オフラインマシンに対して、媒体を利用して稼働監視機能を使えるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 中継システムで管理するジョブ数が増えた場合でも、ジョブ処理のスループットの低下を回避できるように、中継システムのセットアップで管理ファイルのキャッシュ上限サイズを指定できるようにした。
- 64 ビットバージョン JP1/NETM/DM Client の名称を 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client に変更した。
- JP1/NETM/DM Client のインストールに失敗した場合、自動的に再インストールするようにした。また、再インストールに失敗した場合に実行する InstallShield 環境削除ツールの格納場所を掲載した。
- クラスタシステム環境の JP1/NETM/DM Manager を上書きインストールおよび再インストールする場合の手順を追加した。
- 中継システムで ID ジョブがデフォルトで再実行できるように、中継システムのセットアップの「ID ジョブのクライアントの実行結果を記録する」チェックボックスの状態に関係なく、ジョブの実行結果を記録するようにした。
- JP1/NETM/DM Manager のデータベースに Embedded RDB を使用する場合、作業表領域のサイズを自動で増やせるようにした。
- Embedded RDB を使用して「Asset Information Manager Limited」のデータベースを作成する際、データベースのサイズを自動拡張できるようにした。
- jamdbexport.bat を実行することで、「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップを CSV 形式で取得できるようにした。
- Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースのバックアップファイルを取得する、jamemb_backup.bat の説明を追加した。
- Embedded RDB 環境で「Asset Information Manager Limited」のデータベースの再編成を実行する、jamemb_reorganization.bat の説明を追加した。
- リモートインストールマネージャでソフトウェア情報の表示名が短縮されるホットフィックスに、次の種類を追加した。
 - Windows XP Application Compatibility Update
 - Internet Explorer 7 ホットフィックス
 - Internet Explorer 7 セキュリティ更新
 - Step by Step Interactive Training
- 検索パターンを使用して操作ログを全件出力する jamTakeOperationLog.bat について、オプションで、

「部署」、「ユーザ名」および「設置場所」の情報を CSV 形式ファイルに出力できるようにした。

- 次に示すイベント ID のイベントログメッセージを追加した。
 - 8060
 - 8061
 - 8064
 - 8065
 - 8066
 - 8067
 - 8068
 - 8069

(7) 08-51 の変更内容

- JP1/NETM/DM Manager の一部のコンポーネントを、Windows Vista で利用できるようにした。
- 次に示すインベントリ情報を取得できるようにした。
 - モニタの電源を切る (AC)
 - モニタの電源を切る (DC)
 - プロセッサ調整 (AC)
 - プロセッサ調整 (DC)
- ディレクトリ情報から取得する情報の詳細および取得する際の引き当て方法を明記した。
- 「Asset Information Manager Limited」のカレンダーで、前月および翌月の月をボタンから表示できるようにした。
- コマンドのパラメタファイルで使用する JOB_DESTINATION_ID タグで、ジョブの実行対象となる ID 管理中継を指定できるようにした。

(8) 08-50 の変更内容

- Active Directory の情報を配布管理システムに取り込んで、ジョブのあて先に指定したり、インベントリレビューから参照したりできるようにした。
- ソフトウェアの稼働情報として、Web アクセスログ、印刷操作および外部メディア操作の履歴を取得できるようにした。また、印刷操作および外部メディア操作を抑止できるようにした。
- AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合に、クライアントの BIOS をリモートコントロールできるようにした。また、配布管理システムにセットされた FD から、クライアントに対して診断プログラムを実行できるようにした。
- 適用 OS に Windows Server 2008 を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- マネージャと中継マネージャで、下位システムから通知された稼働情報を保存するかどうかを選択できるようにした。また、中継マネージャに通知された稼働情報を、上位システムに通知するかどうかを選択できるようにした。
- 稼働監視ポリシーをファイルに出力できるようにした。また、出力したファイルを読み込んで、稼働監視ポリシーを追加できるようにした。
- OS が 64 ビット版の Windows Vista のクライアントに対して稼働監視機能を使えるようにした。
- WSUS 3.0 と連携できるようにした。また、階層化構成の WSUS と連携する場合に、最上位の WSUS

と下位の WSUS の同期, および下位の WSUS コンピュータグループへのクライアント登録を実行できるようにした。

- Windows のリモートデスクトップでの操作をサポートした。
- ソフトウェアインベントリ情報の更新日時を協定世界時 (UTC) で管理できるようにした。
- Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client を中継システムとしても運用できるようにした。

(9) 08-12 の変更内容

- OS が Windows Vista のクライアントに対して秘文連携機能を使えるようにした。また, 秘文連携機能を利用できる秘文製品のバージョンに 07-80, 08-01 を追加した。

(10) 08-11 の変更内容

- WUA 3.0 を利用して, クライアントのパッチ情報を取得できるようにした。
- 「Asset Information Manager Limited」から, 業務目的に合わせてインベントリ情報を集計できるようにした。
- Microsoft .NET Framework 3.0 に対応し, 無線 LAN 環境のクライアントに対して「AMT 連携機能」を使用できるようにした。
- 取得できるシステム情報に, セキュリティ関連の項目を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また, 各ウィルス対策製品で常駐 / 非常駐が判定される機能を記載した。
- ソフトウェア情報の取得時に, 日立プログラムプロダクトの情報を「アプリケーションの追加と削除のソフトウェアを検索」で取得できるようにした。
- OS が Windows Vista のクライアントから, ファイル操作の操作履歴を取得できるようにした。
- 操作履歴の格納先および退避先のディレクトリに, ネットワークドライブを使用できるようにした。
- 秘文で取得した操作ログを, [操作ログ一覧] ウィンドウで管理できない旨を削除した。
- パッチを取得する機能で使用するデータベースの領域を, データベースマネージャで作成できるようにした。また, パッチを取得できるプログラムの種類に, Windows Mail を追加した。
- Embedded RDB の, データベースの領域サイズのデフォルト値, 最小値および最大値を変更した。また, データベースマネージャで, Embedded RDB の作業表領域のサイズを指定できるようにした。
- Embedded RDB のデータベース見積もり式に, 稼働監視履歴の計算式を追加した。
- Microsoft SQL Server のデータベース見積もり式に, レジストリ取得項目の計算式を追加した。
- 対象製品にバンドル版の JP1/NETM/DM Client を追加した。
- インストール完了時に Readme を表示するチェックボックスを削除した。
- ログの世代管理数およびエントリ数を設定できないログファイルを記載した。
- 次に示す Embedded RDB 用のコマンドで, リターンコードが出力されるようにした。
 - netmdb_backup.bat
 - netmdb_reload.bat
 - netmdb_reorganization.bat
 - netmdb_unload.bat

- JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出する機能で、VPN 環境などの探索経路上に SNMP に応答しないルータがある場合にも、ホストを探索できるようにした。
 - 「Asset Information Manager Limited」のバックアップ手順を記載した。
 - ソフトウェア情報の取得時に、[アプリケーションの追加と削除] または [プログラムの追加と削除] に登録されているソフトウェアについては、インストール日時を取得できるようにした。
 - テキスト入力ユーザインベントリ項目の場合に、「I」を入力できるようにした。
 - あて先グループの自動メンテナンスを使用して、ユーザインベントリ情報を基にあて先グループを作成する場合に、あて先グループ名として使用できる文字数の上限を、半角で 32 文字（全角 16 文字）に修正した。
 - JP1/NETM/DM にトラブルが発生した場合に、コマンドでトラブル情報を取得できるようにした。
 - 次に示すイベント ID のイベントログメッセージを追加した。
 - 11026
 - 11027
 - 11028
 - 16029
 - 16030
- また、監視をお勧めするイベントログメッセージに、イベント ID 「16030」のイベントログメッセージを追加した。
- メッセージ ID 「KDSF0098-W」の対処方法を変更した。

(11) 08-10 の変更内容

- JP1/Base と連携して、JP1/NETM/DM を使用するユーザを管理できる機能を追加した。
- ソフトウェアの稼働状況の監視機能で、クライアントでのソフトウェアの稼働時間を取得できるようにした。また、取得した稼働時間を [ソフトウェア稼働状況] ウィンドウで集計する機能を追加した。
- [ファイル操作トレース] ウィンドウで、操作ログを追跡調査できるようにした。
- Microsoft 社から提供される更新プログラムや Service Pack などのパッチを取得できる機能を追加した。
- クライアントへ HTML 形式のメッセージを通知する機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Manager の操作を監査ログとして出力できる機能を追加した。
- [操作ログ集計] ウィンドウで、部署ごとに操作ログを集計できるようにした。
- Windows Vista に対応した次のプログラムを対象製品に追加した。
 - JP1/NETM/DM Client
 - JP1/NETM/DM Client - Base
 - JP1/NETM/DM Client - Delivery Feature
 - JP1/NETM/DM Client - Remote Control Feature
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- 稼働監視ポリシーにバージョンおよび世代番号を付けて、どのバージョンの稼働監視ポリシーが適用されているかがわかるようにした。
- 中継システムに直接接続できるクライアント数の説明を変更した。
- データベース容量を見積もるための算出式の説明を、計算対象が明確になるように改善した。

- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0096-W」の内容を変更した。
- AIT ファイル作成時に、パッケージ情報ツールから PP 識別情報ファイルを生成できるようにした。
- AIT ファイル編集時のメッセージ「AITG123-E」「AITG124-E」「AITG125-E」を追加した。

(12) 08-02 の変更内容

- AMT に対応したコンピュータをクライアントとして使用している場合に、次の機能を利用できるようにした。
 - ・ AMT の電源制御の機能を利用したクライアントの制御
 - ・ AMT 不揮発性メモリへのホスト識別子の保管
- 秘文連携機能でサポートする秘文についての説明を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- [操作ログ一覧] ウィンドウから JP1/ 秘文の操作ログを参照できる対象製品として、JP1/ 秘文 CG Pro を追加した。
- あて先グループおよび ID の自動メンテナンスのポリシー情報が記述されたテキスト形式ファイルの入出力できるようにした。
- ID の自動メンテナンスのポリシー種別に、ユーザインベントリ項目を追加した。
- 「Asset Information Manager Limited」のセットアップおよびデータベースの作成方法を変更した。
- Embedded RDB の一部のデータベース項目についてデータ型を変更し、作成されるデータベース容量を削減した。
- 運用キーにホスト名を使用したクライアントが接続先の上位システムを名前解決できない場合に、受信した実行要求情報の IP アドレスを基に上位システムを名前解決して接続できる機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Client をリモートインストールするときに、インストール中のダイアログを表示しないようにする設定を追加した。

(13) 08-00 の変更内容

- リレーショナルデータベースのプログラムに Microsoft SQL Server 2005 を使用できるようにした。
- JP1/NETM/DM Manager が標準提供するリレーショナルデータベースとして、「Embedded RDB」を使用できるようにした。また、簡易データベースを未サポートとした。
- [検索] ダイアログボックスで、ホスト名または IP アドレスをキーにホストを検索できるようにした。
- あて先グループの自動メンテナンス機能で、クライアントの OS のサブバージョンごとにグルーピングできるようにした。
- ソフトウェアの稼働監視機能で、指定したソフトウェアおよびパスの起動を許可するか抑止するかを選択できるようにした。また、指定した項目以外のすべてのソフトウェアの起動を許可するか抑止するかを選択できるようにした。
- ソフトウェアの稼働監視機能で、ファイル操作時の履歴を取得できるようにした。
- クライアントの稼働情報を [操作ログ一覧] ウィンドウで参照できるようにした。
- WUA 2.0 を使用して適用済みパッチ情報を取得できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また、英語版のクライアントが混在する場合、英語版の Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品の情報も同時に取得できるようにした。

- 秘文連携機能を使って JP1/ 秘文または秘文をリモートインストールしたり、インストール済みの JP1/ 秘文または秘文の詳細情報を取得したりできるようにした。
- [あて先の追加] ダイアログボックス, [パッケージの追加] ダイアログボックス, および [ジョブの保存] ダイアログボックスのサイズを変更できるようにした。
- ユーザインベントリ項目の選択項目の上限を, 255 個から合計サイズ 51,254 バイトへ変更した。また, 階層化されたユーザインベントリ項目の場合は, 上位の項目と合わせて 102,509 バイトの上限も追加した。
- パッケージの分割配布で, 中継システムから下位のシステムへの実行状況を上位システムで確認できるようにした。
- クライアントの接続先を自動で変更するタイミングに, ポーリング時を追加した。
- JP1/NETM/Client Security Control との連携時にクライアントセキュリティ管理を設定する機能を追加した。
- Web ブラウザからの JP1/NETM/DM の管理機能, および Web ブラウザからのクライアントインストール機能を未サポートとした。
- 差分情報の配布機能を未サポートとした。

(14) 07-53 の変更内容

- WUA 2.0 を使用して未適用パッチ情報を取得できるようにした。
- WSUS と連携して, 更新プログラムを管理できるようにした。
- 適用 OS に Windows Server 2003 (x64) を追加した。
- インストール先ディレクトリおよびワークディレクトリに「(」および「)」を指定できるようにした。
- システム構成情報に重複して登録されているホストを検索して, 更新日時が古いホストを削除できるようにした。
- クライアントがポーリングを開始するタイミングを遅延させるオプションを追加した。
- ファイアウォール環境で JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition を使用する設定についての説明を追加した。
- 取得できるシステム情報の CPU 種別を追加した。
- ソフトウェア情報の取得時に, 標準検索リストを使用するかどうかを選択できるようにした。
- UNIX のクライアントにパッケージを配布した場合で, 外部プログラムを起動させたときに, 外部プログラムの終了コードをサーバで参照できるようにした。
- JP1/NETM/DM からセキュリティ PC に, セキュリティ PC 用のアップデートデータをインストールできるようにした。
- 情報を取得できるウィルス対策製品を追加した。
- [ジョブの作成] ダイアログボックスの [オプション] パネルの「検索除外ディレクトリ」, および [コレクトファイル] パネルの「収集パス名」に指定できる環境変数の説明を追加した。
- リモートインストールマネージャでソフトウェア情報として表示されるときに, 形式が変換されるホットフィックスの名称を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0060-I」「KDSF0090-I」の内容を変更した。
- クライアントの基本ログメッセージに「KDSF0097-I」「KDSF0098-W」「KDSF0099-E」を追加した。

- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client Light Edition を追加した。

(15) 07-52 の変更内容

- リモートインストールマネージャの [ジョブ実行状況] ウィンドウに、JP1/NETM/CSC から実行した「メッセージの通知」ジョブを格納するフォルダを作成するようにした。
- ホスト探索時にホスト名を取得するかどうかを選択できるようにした。また、ホストの情報を取得する範囲を選択できるようにした。
- オフラインマシンから Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品のインベントリ情報を取得できるようにした。
- 抑止履歴および操作履歴のバックアップを取得する方法についての説明を追加した。
- イベント ID 「19003」のイベントログメッセージを追加した。

(16) 07-50 の変更内容

- JP1/NETM/Client Security Control と連携して、システムのセキュリティ対策を強化できるようにした。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブで、コンピュータに適用されていないパッチの情報を取得できるようにした。それに伴って、コンピュータに適用されていないパッチの情報をリモートインストールマネージャで表示できるようにした。
また、保守コード「3000EF300000」のイベントログメッセージを追加した。
- クライアントのソフトウェアの稼働状況を監視して、ソフトウェアの起動を抑止したり、操作履歴を取得したりできるようにした。それに伴って、抑止履歴および操作履歴をリモートインストールマネージャで表示できるようにした。
また、イベント ID 「16016」～「16020」のメッセージを追加した。
- 管理者からクライアントへ、メッセージを通知できるようにした。
- クライアントで更新されたインベントリ情報が、自動的に上位システムへ通知されるようにした。
- ID にポリシーを設定することで、新規に追加されたクライアントを自動的に ID へ登録できる、ID の自動メンテナンス機能を追加した。
- JP1/NETM/DM Manager Embedded RDB Edition を追加した。
- ネットワーク上に存在するホストを探索して、JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出できるようにした。
- JP1/NETM/Asset Information Manager がインベントリ情報の更新を監視するための情報を、データベースのテーブルに追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。また、適用 OS が Linux でバージョンが 07-50 以降のクライアントから、ウィルス対策製品の情報を取得できるようにした。
- リモートインストールマネージャで、ソフトウェア情報として表示されるホットフィックスの形式を改善した。
- 監視をお勧めするイベントログメッセージの要因と対処を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0103-I」を追加した。
- クライアントの基本ログメッセージ「KDSF0060-I」「KDSF0092-E」の内容を変更した。
- JP1/NETM/DM が提供する AIT ファイルを追加した。

(17) 07-11 の変更内容

- JP1/NETM/DM Client がインストールされている PC に、ネットワークを介さないでソフトウェアをインストールできるようにした。
- インストールセットを使用して JP1/NETM/DM Client を上書きインストールできるようになったため、インストールセットを使用する場合と Web ブラウザからインストールする場合の違いを示す表から、上書きインストールについての記述を削除した。
また、JP1/NETM/DM Client のセットアップ情報の設定方法に、インストールセットを使用して上書きインストールする場合の記述を追加した。
- ネットワーク内に存在するホストの情報が記述された CSV 形式ファイルを読み込むことで、JP1/NETM/DM がインストールされていないホスト（JP1/NETM/DM 未導入ホスト）を検出できるようにした。
- 取得できるシステム情報の CPU タイプに、7 種類の CPU を追加した。
- ターミナルサービス環境での JP1/NETM/DM の運用方法についての説明を追加した。
- JP1/NETM/DM のクラスタシステムの OS として、Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition が対応していることを追加した。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブで、コンピュータに適用されているパッチの情報を取得できるようにした。
また、リモートインストールマネージャおよびパッケージセットアップマネージャで、取得したパッチの情報を表示できるようにした。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- ユーザインベントリ項目の作成時に、コメント欄に指定できない半角記号を「;」（セミコロン）だけにした。
- 「ユーザインベントリ情報の転送」ジョブ作成時に、クライアントでユーザインベントリを設定するダイアログボックスのキャンセルの可否、およびクライアントでユーザインベントリを設定したあとの動作を設定できるようにした。
- 取得した Microsoft Office 製品およびウィルス対策製品の情報を、CSV 形式ファイルに出力できるようにした。
- AIT ファイルを作成および使用する場合の注意事項を追加した。
- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client の機能についての説明を追加した。
- JP1/NETM/DM が提供する AIT ファイルを追加した。

(18) 07-10 の変更内容

- JP1/NETM/Asset Information Manager の操作画面から、ソフトウェアの配布および配布状況の確認ができることを追加した。
- 「クライアント Web インストール」および「スタートアップキット機能支援ツール」がインストールされた PC に対しては、JP1/NETM/DM Client をインストールできないようにした。
- Administrator 権限を持たないユーザがログインしている JP1/NETM/DM SubManager でもリモートインストールができるようにした。
- パッケージを上書きインストールしようとしてエラーが発生した場合に、上書きされる側のインストール済みパッケージの情報を保管できるようにした。

- ネットワークアダプタの優先順位の設定に従って、クライアントの IP アドレスを上位システムに通知できるようにした。
- システム構成に含まれていないホストのインベントリ情報を削除できるようにした。
- 取得できるシステム情報に、Intel IPF シリーズの「Intel IPF CPU」および「Intel Itanium 2」を追加した。
- 取得できるシステム情報に、Windows Installer のバージョン情報「Windows Installer」を追加した。また、インベントリビューアで「Windows Installer」を集計できるようにした。
- JP1/NETM/DM のクラスタシステムの OS として、Microsoft Windows Server 2003, Enterprise Edition を追加した。
- リモートインストールマネージャから、登録したツールを起動できるようにした。
- Windows Installer を使用してインストールするプログラムをサイレントインストールできるようにした。
- UNIX 版 JP1/NETM/DM Client 07-10 以降に対して、パッケージのインストール後に、クライアントマシンを自動的に再起動するかどうか指定できるようにした。
- [ジョブ定義] ウィンドウで、[F5] キーを押して選択したジョブを実行したとき、確認ダイアログボックスが表示されるようにした。
- CPU クロック数の取得方式を変更した。
- ソフトウェア情報として取得できる Microsoft Office 製品を追加した。
- ソフトウェア情報として取得できるウィルス対策製品を追加した。
- リモートインストールマネージャで、ソフトウェア情報として表示されるホットフィックスの形式を改善した。
- インベントリビューアで、「OS の言語」を集計できるようにした。
- 次のコマンドを JP1/NETM/DM SubManager で実行できるようにした。
dcmcoll.exe, dcminst.exe, dcmjbrm.exe, dcmjexe.exe, dcmpkrm.exe, dcmmrgen.exe,
dcmrtry.exe, dcmstat.exe, dcmstsw.exe
- 保守コード「300097140000」および「30009F070000」のイベントログメッセージの要因と対処を変更した。
- 監視をお勧めするイベントログメッセージの要因と対処を記載した。
- JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM SubManager の機能差異についての記述を追加した。
- Windows Installer のモジュールを配布するための AIT ファイルを提供した。

(19) 07-00 の変更内容

- Windows 95 を JP1/NETM/DM Client の適用 OS 外とした。ただし、07-00 より前のバージョンの JP1/NETM/DM Client もバージョン 07-00 の上位システムに接続できるため、OS が Windows 95 の場合の説明をマニュアルに記載している。
- 「ソフトウェア情報の取得」ジョブの検索対象ソフトウェアに、「Microsoft Office 製品を検索」と「ウィルス対策製品を検索」が追加された。また、これらの製品名、ウィルス定義ファイルのバージョン、およびウィルス対策製品の常駐設定別に、ホストの台数を集計できるようにした。
- ソフトウェアのインストーラに自動応答するスクリプトファイル、AIT ファイルが作成できるように

なった。AIT ファイルは、配布するソフトウェアとともにパッケージングしてリモートインストールすると、ソフトウェアを自動インストールできる。

- 差分情報の取得および差分情報のパッケージングは、07-00 以降の JP1/NETM/DM では未サポートとした（なお、07-00 より前のバージョンの JP1/NETM/DM で作成した差分パッケージを使用することはできる）。
- クライアントの情報をローカルシステムビューアで確認できるようにした。
- クライアントのシステム監視をして、異常発生時にアラートをローカル PC や上位システムへ通知できるようにした。
- クライアントから通知されたアラートを、上位システムのアラート情報ファイル、イベントビューア、JP1/IM で確認できるようにした。
- クライアントセットアップのデフォルト値を変更した。
- [リモートインストール クライアント] アイコンおよび [リモートインストール ログオンマネージャ] アイコンを、Windows の [スタートアップ] グループに作成しないようにした。
- [NETM_DM_P スタートアップ] フォルダの作成を選択できるようにした。
- 接続先が未定の場合も、「？」を設定することで JP1/NETM/DM Client が動作するようにした。
- ジョブの中断と再開について、以下のことをできるようにした。
 - ・ ファイル転送の中断ジョブおよびファイル転送の再開ジョブのあて先に、中継マネージャを指定できるようにした。
 - ・ JP1/NETM/DM Manager のリモートインストールマネージャで、自システムとその下位システムとのファイル転送を中断および再開できるようにした。
 - ・ UNIX 版の下位システムとの間で中断および再開できるようにした。
 - ・ ファイル転送を中断および再開する dcmsusp コマンドを追加した。
- [ジョブの配布属性] パネルで、ファイル転送が中断中でもジョブを配布するかどうか設定できるようにした。
- クライアントが非常駐の場合でも、一般ユーザ権限でログオンしたときに、クライアントでインストールできなかったパッケージをインストールできるようにした。
- JP1/NETM/DM の Version 7i へのアップグレードと同時にリレーショナルデータベースをアップグレードする場合の手順を追加した。
- ソフトウェア検索リストにバージョンを設定しない場合で、検索対象ファイルのバージョンリソースからバージョンを取得できなかったときは、バージョンに「0000」が設定されるようにした。
- ソフトウェア検索リストを使用した検索時に、サイズが 0 バイトのファイルも検索できるようにした。
- [ジョブ実行状況] ウィンドウからインベントリビューアを起動し、あて先の詳細情報を表示できるようにした。
- [システム構成] および [あて先] ウィンドウから集計を実行したとき、ホストおよびあて先グループの選択状態が、インベントリビューアの [対象選択] ウィンドウに反映されるようにした。また、[システム構成] および [あて先] ウィンドウから、テンプレートを指定して集計を実行できるようにした。
- [JP1/NETM/DM アンアーカイバ]、[JP1/NETM/DM パッケージャ]、および [Package Setup Manager] ウィンドウのフォントを設定できるようにした。
- Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client を、Windows CE .NET 4.1 で利用できるようにした。

付録 F 用語解説

(数字)

64 ビット版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで、OS が Windows Server 2003 (IPF) のコンピュータを、クライアントとして管理するために必要なプログラムです。

64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent

OS が Windows Server 2003 (IPF) のコンピュータを使用する場合に、リモートコントロールされる側にインストールするプログラムです。JP1 Version 7i の JP1/NETM/DM Client のリモートコントロールエージェントと同等の機能を持っています。

(英字)

AIT ファイル

専用のインストーラなどを使用して対話形式でソフトウェアをインストールするときの手順を記録したファイルで、Automatic Installation Tool を使用して作成します。JP1/NETM/DM では、一部の他社ソフトウェア用の AIT ファイルを提供しています。また、ユーザが AIT ファイルを作成することもできます。

Asset Information Manager Limited

JP1/NETM/DM で取得したインベントリ情報および操作ログを、目的に合わせて集計、検索できる GUI を提供するコンポーネントです。

「Asset Information Manager Limited」をインストールすることで、リモートインストールマネージャからソフトウェアの稼働情報を管理するウィンドウを起動することもできます。

JP1/NETM/Client Security Control と連携する場合の、クライアントセキュリティ管理用の GUI も提供します。

Embedded RDB

JP1/NETM/DM Manager が提供する、組み込み型のリレーショナルデータベースです。JP1/NETM/DM Manager のインストール時に Embedded RDB を使用するかどうか選択できます。

ID

複数のクライアントあてにリモートインストールをするために、クライアントをグルーピングする方法の一つです。ID に所属するクライアントは、クライアントまたは配布管理システムで登録します。

ID 管理中継

ID ジョブおよび ID に属するクライアントを管理中継マネージャまたは中継システムです。ID ジョブが実行されると、ID 管理中継は ID ジョブを自システムに保管し、この ID に属するクライアントに対してジョブを実行します。

ID ジョブ

あて先に ID を指定して実行するジョブです。

InstallShield 環境削除ツール

インストール環境を初期化するツールです。JP1/NETM/DM Client のインストール中にエラーが発生しインストールが中止された場合、再インストールする前に実行します。

JP1/AJS

JP1/AJS は、業務を自動的に運用するためのプログラムです。処理を順序付けて定期的に行ったり、特定の事象が発生したときに処理を開始したりできます。

JP1/Base

JP1/IM の基盤機能を提供するプログラムです。

JP1 イベントの送受信や、ユーザの管理、起動の制御などをします。また、JP1/IM システムのエージェントとしての役割も持ちます。

JP1/Base は、JP1/IM・Manager の前提プログラムです。

JP1/Cm2 または HP NNM

ネットワークの障害管理、構成管理および性能管理を実現するプログラムの総称です。JP1/Cm2 連携機能を使用すれば、バージョン 8 以前の JP1/Cm2/NNM またはバージョン 7.5 以前の HP NNM の監視画面から、JP1/NETM/DM のインベントリ情報やジョブの実行状況を管理できます。

JP1/IM

JP1/IM は、分散システムを集中的に監視するためのプログラムです。分散システム内での業務の実行状況や障害などの情報は、JP1 イベントとして、JP1/IM に送られます。JP1/IM は、JP1 イベントを登録、管理し、システム管理者の端末に表示します。

JP1/NetInsight II -PortDiscovery

ネットワークに接続している機器の情報を収集し、ネットワークの構成の一覧を作成するプログラムです。ネットワークに接続されている機器の種別や IP アドレスなどの情報を一覧形式で確認できます。また、定期的にネットワークの構成情報を収集したり、不正な接続を監視したりすることもできます。

JP1/NETM/Asset Information Manager

ネットワーク装置を含めたハードウェア情報、ソフトウェア情報、契約情報などをデータベースに一元管理することで、資産の導入、ソフトウェアのライセンス管理、機器の保守などに伴う IT 資産管理業務の合理化および管理コストの低減を支援するプログラムです。

JP1/NETM/Audit - Manager

内部統制の有効性を評価するために必要な証跡記録を一元管理し、内部統制の報告書作成や監査業務を支援するプログラムです。ユーザ情報やシステム構成の変更などの証跡記録を利用して、業務の正当性を確認したり、リソースへの操作やアクセス状況を監査したりできます。

JP1/NETM/DM システム

JP1/NETM/DM がインストールされたホストで構成されるネットワーク全体のことです。

JP1/NETM/DM 未導入ホスト

JP1/NETM/DM がインストールされていないホストです。

JP1/ 秘文 CG Pro

Microsoft Office 文書を暗号化して専用の USB メモリに格納し、持ち出した Microsoft Office 文書を USB メモリにインストールされた専用ツールでしか閲覧・編集できないようにする製品です。JP1/ 秘文 CG Pro を使用することで、外部に持ち出した USB メモリからの情報流出を防止できます。JP1/ 秘文と連携して操作ログを取得する場合、管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/ 秘文 IC

データを暗号化する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合、管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/ 秘文 IF

データを外部媒体に格納して持ち出すことを禁止（または許可）する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合、管理対象のクライアントにインストールします。

JP1/ 秘文 IS

ファイルサーバと連携して、ファイルサーバ上の共有機密フォルダに対するアクセスを制御する製品です。JP1/ 秘文の操作ログを取得する場合、管理対象のクライアントにインストールします。

JP1 イベント

システム内で何らかの事象が発生した際に、その事象に関して JP1/Base に通知される情報です。

JP1 ユーザ

JP1/Base と連携してユーザ管理をする場合に、JP1/NETM/DM のユーザ認証に使用するアカウントの名称です。JP1/Base がインストールされた認証サーバで設定します。JP1 ユーザは、JP1/IM や JP1/AJS でのユーザ認証にも使用されています。

Microsoft SQL Server

Windows NT 上で動作する、Microsoft 社のリレーショナルデータベース管理システムです。JP1/NETM/DM の情報を管理するリレーショナルデータベース管理システムとして、Microsoft SQL Server が使用できます。

RD エリア

Embedded RDB で表およびインデックスを格納する論理的なエリアです。

SQL

リレーショナルデータベース用の言語の一種です。構造化照会言語とも呼ばれます。

Visual Test

Windows 環境で動作するアプリケーションプログラムのデバッグ作業を支援するプログラムです。

Wake on LAN

Wake on LAN は LAN で接続されたネットワーク上のマシンに対して、ネットワーク経由でほかのマシンからリモートで起動するための規格です。

Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで、OS が Windows 8, Windows Server 2012, Windows 7, Windows Server 2008 および Windows Vista のコンピュータを、クライアントとして管理するために必要なプログラムです。中継システムとしても使用できます。

Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client

JP1/NETM/DM システムで、OS が Windows CE の PDA を、クライアントとして管理するために必要なプログラムです。

(ア行)

アーカイブ

複数のファイルを一つにまとめることです。

あて先グループ

複数のクライアントあてにリモートインストールするためにクライアントをグルーピングする方法の一つです。業務や組織ごとなど配布目的に合わせ、配布管理システムからホストをグルーピングします。

アプリケーションゲートウェイ方式

ファイアウォール実現方式の一つです。パケットの中継を禁止して、アプリケーションゲートウェイでアクセスを制御します。外部から内部にアクセスする場合には、ゲートウェイのログインとパスワードを入力させ、内部に直接アクセスできないようにします。

アラート通知

「アラート」とは、プログラムから表示されるメッセージの一つです。ユーザの操作によって、何らかの問題や重大なエラーが発生するおそれのある場合、ユーザに対して注意を促したり警告を与えたりするために表示されます。JP1/NETM/DM では、クライアントのシステム監視中にハードウェアの異常などを検知した場合に、ポップアップメッ

セージなどでユーザに通知することを「アラート通知」と呼びます。

アンアーカイバ

リモートコレクト時に、アーカイブされたファイルや、圧縮されたファイルを元の形式に復元するためのプログラムです。

インストールスクリプト

インストール処理の手順を記述したスクリプトで、クライアントで実行します。パッケージを作成するときに、自動的に生成されます。ユーザ独自のインストールスクリプトを作成してユーザ固有の処理をすることもできます。

インストールソフトウェア情報

「Asset Information Manager Limited」で、各機器にインストールされているソフトウェアを管理するための情報です。

インストールソフトウェア情報は、配布管理システムで管理しているインベントリ情報などを「Asset Information Manager Limited」のデータベースに取り込んで利用するための情報です。

そのため、ソフトウェアの名称およびバージョンは、JP1/NETM/DM など、情報の取り込み先で管理されている内容となります。

インストールソフトウェアリスト

「Asset Information Manager Limited」で、各機器にインストールされているソフトウェアの名称を管理するための情報です。また、インストールソフトウェアに対する各種設定を管理するためにも使用します。

インストールタイミング

パッケージをクライアントにインストールするタイミングです。クライアントの起動時にインストールする「システム起動時インストール」、またはパッケージがクライアントに転送された時点でインストールする「通常インストール」を選択できます。

インストールモード

クライアントでのパッケージのインストール方法です。インストーラを使用する「GUI インストールモード」、インストーラを使用しないでファイルのコピーだけでインストールする「バックグラウンドインストールモード」の 2 種類があります。

インベントリ情報

クライアントでのハードウェアの使用状況やインストールされているソフトウェアの種類など、クライアントの管理に必要な情報です。インベントリ情報は、配布管理システムからジョブを実行して取得します。

インベントリビューア

クライアントから取得したインベントリ情報の表示や集計ができるウィンドウで、多様なレポート機能を持っています。JP1/NETM/DM Manager で使用できます。

オフラインインストール

インストール媒体を使用することで、ネットワークを介さずにソフトウェアをインストールする機能です。

オフラインフォルダ

オフラインマシンから取得したインベントリ情報および稼働情報を管理するフォルダです。[システム構成] ウィンドウおよび [あて先] ウィンドウに、「{OFFLINE}」という名称で表示されます。

オフラインマシン

JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない、Windows のクライアントです。例えば、次のような PC です。

- スタンドアロンで使用していて、JP1/NETM/DM Client (クライアント) をインストールしている PC
- ネットワーク内で JP1/NETM/DM Client (クライアント) をインストールしているが、JP1/NETM/DM のシステム構成情報に登録していない PC

なお、オフラインマシンからもインベントリ情報と稼働情報を取得できます。また、オフラインマシンにソフトウェアをインストールすることもできます。

オフラインマシン情報

オフラインマシンから取得したインベントリ情報と稼働情報のことです。

(力行)

外部メディア操作

稼働監視対象の一つです。USB 接続メディア、内蔵 CD/DVD ドライブ、内蔵 FD ドライブ、IEEE 1394 接続メディア、および内蔵 SD カードスロットを介した書き込みまたは読み出しを、外部メディア操作として抑止します。なお、バージョンが 08-50 から 09-10 までのクライアントが対象です。

また、これらの外部メディアの接続および切断（取り外し）を、外部メディア操作の履歴として取得します。ただし、内蔵 FD ドライブの操作は履歴取得の対象外となります。

稼働監視ポリシー

ソフトウェアの稼働状況を監視する場合に設定する条件です。起動を抑止するソフトウェアや、履歴を取得する操作を設定します。

監査ログ

JP1 製品が共通で出力するログです。「だれが」、「いつ」、「どのような操作を実行したか」を示します。出力された監査ログは JP1/NETM/Audit - Manager で管理され、システムの内部統制の評価と監査に利用されます。

キャビネット

配布管理システムにあるパッケージを保管するための領域です。

業務フィルター

「Asset Information Manager Limited」で、ユーザ権限に応じて、操作画面から実行できる処理を制限する機能です。各操作画面の構成要素（ボタン、検索条件、編集項目など）を、ユーザ権限に応じて変更します。

クライアント

JP1/NETM/DM Client（クライアント）がインストールされたマシン、または JP1/NETM/DM Manager または JP1/NETM/DM Client（中継システム）のクライアント機能がインストールされたマシンのことです。配布管理システムから直接、または中継するシステムを介してリモートインストールされるソフトウェアを受信し、自システムにインストールしたり、インストール結果を配布管理システムへ通知したりできます。

クライアント制御

ネットワーク経由で、手元の PC から離れた場所にある PC を起動したり、シャットダウンしたりする機能です。この機能を使って、JP1/NETM/DM では、深夜や休日などの電源が入っていない状態の PC に対してソフトウェアをリモートインストールできます。クライアント制御を利用するには、PC が AMT または Wake on LAN に対応し、さらに自動シャットダウンに対応していることが必要です。

検索パターン

[操作ログ一覧] ウィンドウで操作ログを検索するための検索条件を保存したものです。主な検索目的に使用する検索パターンは、デフォルトで登録されています。また、デフォルトで登録されている検索パターンを編集したり、新規に登録したりすることもできます。

更新プログラム

Microsoft Update で提供される、OS や Microsoft Office 製品などの更新プログラムです。JP1/NETM/DM で適用情報を収集できる「パッチ」も、更新プログラムに含まれます。

コレクトスクリプト

クライアントが実行するリモートコレクト処理の手順を記述したスクリプトです。Windows の上位システムからリモートコレクトする場合は、ジョブ作成時に自動的に作成されます。UNIX の上位システムからリモートコレクトする場合は、クライアント側のユーザが独自にコレクトスクリプトを作成することによって、ユーザ固有の処理をさせることができます。

コレクトファイル

クライアントからリモートコレクトで収集したファイルです。

(サ行)

削除ソフトウェア管理テーブル

ソフトウェアインベントリ辞書から削除したソフトウェアの情報が登録される内部テーブルです。「ファイルを検索」を指定して「ソフトウェア情報の取得」ジョブを実行した場合、各ホストから通知されるソフトウェア情報が削除ソフトウェア管理テーブルに登録されているときは、ソフトウェアインベントリ辞書には追加されません。また、各ホストのソフトウェアインベントリ情報にも追加されません。

資源登録システム

リモートインストールするソフトウェアを配布管理システムに登録するプログラムです。Windows の JP1/NETM/DM システムのパッケージに相当します。UNIX の JP1/NETM/DM の用語です。

資産情報

「Asset Information Manager Limited」で、ハードウェアおよびソフトウェアを管理するための情報です。

システム監視

あらかじめ設定した条件に従って、クライアントが特定のハードウェアの状態を監視する機能です。システム監視中は、ローカルシステムビューアの「システム監視の状態」パネルに監視対象の状態が表示されます。また、監視対象に異常が発生した場合は、アラートメッセージやアイコンの変化によってユーザにアラートを通知します。クライアントが上位システムに接続している場合は、上位システムへアラートを通知することもできます。

【システム監視】アイコン

タスクバーの通知領域に表示されるアイコンです。アイコンの状態から、システム監視機能の状態とアラート通知の有無が確認できます。また、「システム監視」アイコンをダブルクリックすると、ローカルシステムビューアを起動できます。
「システム監視」アイコンを表示するには、クライアントセットアップの「システム監視」パネルで、「システム監視アイコンをタスクバーの通知領域に表示する」を選択します。

システム情報

JP1/NETM/DM システムを構成するホストのハードウェアの情報です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

自動メンテナンスポリシーファイル

あて先グループおよび ID の自動メンテナンスのポリシーが記述されたテキスト形式ファイルです。

集計

JP1/NETM/DM Manager で管理している情報の種類ごとに、該当するホストの数を表示する機能です。リレーショナルデータベースで情報を管理しているときに使用できます。

上位システムアドレス格納ファイル

ホスト名と IP アドレスの対応が記述された設定ファイルです。ホスト名運用のクライアントが上位システムを名前解決できないときに、上位システムの IP アドレスを認識するために使用されます。

ジョブ

JP1/NETM/DM の機能の実行単位です。ジョブには次の 21 種類があります。

- パッケージのインストール
- 中継システムまでのパッケージ転送
- 中継システムのパッケージ一括削除
- リモートコレクト
- 中継までのリモートコレクト
- 中継サーバからのコレクトファイル収集

- 中継サーバのコレクトファイル削除
- クライアントユーザによるインストール
- システム構成情報の取得
- システム情報の取得
- ソフトウェア情報の取得
- ユーザインベントリ情報の転送
- ユーザインベントリ情報の取得
- レジストリ取得項目の転送
- 中継サーバからの結果通知保留
- 中継サーバの結果通知の保留解除
- ファイル転送の中断
- ファイル転送の再開
- メッセージの通知
- ソフトウェア稼働監視の制御
- ソフトウェア稼働情報の取得

セキュリティ PC

ハードディスクや FD などの外部記憶装置を持たない、最低限の機能だけを備えた PC です。エージェントに接続してアプリケーションソフトやファイルをリモートコントロールできます。セキュリティ PC 用のアップデートデータは、JP1/NETM/DM を使ってリモートインストールできます。

全あて先

あて先の種類の一つです。マネージャから中継マネージャ配下のホストすべてに対してジョブを実行するときに指定します。

操作履歴

クライアントで操作されるソフトウェアおよびファイルの情報です。操作履歴には、次の種類があります。

- プロセスの起動
- プロセスの停止
- キャプションの変更
- アクティブウィンドウの変更
- マシンの起動 / 停止
- ログオン / ログオフ
- ファイル操作
- Web アクセス
- 印刷操作
- 外部メディア操作
- デバイス操作

操作ログ

JP1/NETM/DM で取得した抑止履歴、操作履歴、および JP1/ 秘文 LogManager のデータベースに格納されているユーザ操作ログを、[操作ログ一覧] ウィンドウで確認する際、表示される情報をまとめて操作ログと呼びます。

[操作ログ一覧] ウィンドウ

配布管理システムで取得したクライアントの稼働情報のうち、ソフトウェアの起動や印刷操作の抑止履歴、およびソフトウェアやファイルの操作履歴を、さまざまな条件で抽出し、参照できる画面です。

ソフトウェアインベントリ辞書

JP1/NETM/DM で管理するソフトウェアを設定する辞書です。「ファイルの検索」で取得したソフトウェアの中から、管理対象とするソフトウェアを選択できます。また、インベントリビューアでライセンスを管理する場合に必要な、ライセンス情報を設定できます。

ソフトウェア検索リスト

ソフトウェア情報の取得に使用するリストです。JP1/NETM/DM が標準提供する「標準検索リスト」と、ユーザが任意に編集できる「ユーザ指定検索リスト」があります。

ソフトウェア情報

JP1/NETM/DM システムを構成するホストにインストールされているソフトウェアの情報です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

(タ行)

ターミナルサーバ

このマニュアルでは、次に示すサーバを「ターミナルサーバ」と呼んでいます。

- OS が Windows Server 2012, Windows Server 2008 R2 で、「リモート デスクトップ サービス」の「リモート デスクトップ セッション ホスト 役割 サービス」がインストールされているサーバ
- OS が Windows Server 2008 または Windows Server 2003 で、「ターミナル サービス」の「ターミナル サーバー 役割 サービス」がインストールされているサーバ
- OS が Windows 2000 Server で、「ターミナル サービス」が「アプリケーション サーバー モード」でインストールされているサーバ

中継システム

配布管理システムとクライアントの間で、リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継する JP1/NETM/DM Client のことです。

中継するシステム

配布管理システムとクライアントの間で、リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継するプログラムの総称です。

中継マネージャ

配布管理システムを階層化したシステムで、最上位の配布管理システム（マネージャ）の配下に位置する JP1/NETM/DM Manager のことです。配布管理システムとクライアントの間で、リモートインストールやインベントリ情報の収集などのジョブを中継できます。

重複ホスト

ホスト識別子を使用して運用している場合に、ホスト識別子が再生成されたためにシステム構成情報に重複して登録された、同一のホストのことです。

ディレクトリ情報

Active Directory から取得するユーザ情報やコンピュータ情報のことです。取得したディレクトリ情報は、ジョブのあとに先に指定したり、インベントリビューアでクライアントの情報を参照するために使用したりできます。

データベースマネージャ

データベースマネージャには、JP1/NETM/DM Manager 用と「Asset Information Manager Limited」コンポーネント用の 2 種類があります。

JP1/NETM/DM Manager 用のデータベースマネージャは、JP1/NETM/DM Manager のコンポーネントの一つで、JP1/NETM/DM で使用するリレーショナルデータベースを作成したり、メンテナンスをしたりできます。

「Asset Information Manager Limited」コンポーネント用のデータベースマネージャは、「Asset Information Manager Limited」のサブコンポーネントで、「Asset Information Manager Limited」のリレーショナルデータベースを作成したり、メンテナンスをしたりできます。

デバイス操作

稼働監視対象の一つです。USB ストレージデバイス、内蔵 CD/DVD ドライブ、内蔵 FD ドライブ、IEEE 1394 接続デバイス、内蔵 SD カード、Bluetooth デバイス、およびイメージングデバイスを介した書き込みまたは読み出しを、デバイス操作として抑止します。なお、バージョンが 09-12 以降のクライアントが対象です。

また、これらのデバイスの接続および切断（取り外し）を、デバイス操作の履歴として取得します。

ドメイン

ネットワーク内のホストおよびユーザを管理する単位です。

(ナ行)

認証サーバ

JP1/Base を使用した、JP1 ユーザのアクセス権限を管理するサーバです。一つのユーザ認証圏に 1 台設置する必要があります。このサーバを利用して JP1 ユーザを一括で管理します。JP1/Base と連携して JP1/NETM/DM のユーザを管理する場合、JP1 ユーザをこのサーバに登録する必要があります。

ネットワーク構成情報ファイル

ネットワークに接続されているホストの IP アドレス、MAC アドレス、サブネットマスクなどの情報を記述した CSV 形式ファイルです。

ネットワーク情報

「Asset Information Manager Limited」で、各機器のネットワーク上の位置を管理するための情報です。ネットワーク情報は、「IP アドレス」、「MAC アドレス」、「ノード名」、「コンピュータ名」などを表します。

(ハ行)

配布管理システム

リモートインストールするソフトウェアを保管し、リモートインストールの実行を指示するプログラムです。リモートインストールの状況や結果、各ホストにインストールしてあるソフトウェアなどを確認できます。

パケットフィルタリング方式

ファイアウォールを通過するパケットを制限する、ファイアウォール実現方式の一つです。内部から外部へのアクセスは許可して、外部から内部へのアクセスは禁止するといった運用ができます。また、インターネットにアクセスする端末を限定できます。

パッケージ

リモートインストールをするソフトウェアの単位です。パッケージは、配布管理システムのキャビネットに保管されます。

パッケージ種別

パッケージの種類を示します。「ユーザプログラム、データ」、「日立プログラムプロダクト」、および「他社ソフトウェア」の 3 種類があります。

パッケージセットアップマネージャ

配布管理システム、または中継システムから受け取ったソフトウェアを、クライアント側で任意に選択してインストールするための機能です。インストールを拒否したり、インストール先のディレクトリを変更したりできます。

パッケージャ

リモートインストールするソフトウェアを配布管理システムに登録するプログラムです。

パッケージング

パッケージャを使用して、パッケージを作成することです。

パッチ情報ファイル

Microsoft 社のサーバからパッチを取得するための情報が記載されたファイルです。JP1/NETM/DM でパッチを取得する場合に必要です。パッチ情報ファイルは、JP1/NETM/DM が日立 Web サーバに接続して取得します。Microsoft 社からのパッチの提供状況に応じて更新されます。

日立 Web サーバ

Microsoft 社からパッチを取得するために必要な、パッチ情報ファイルを提供するサーバです。日立 Web サーバは、弊社サポートサービスが提供しています。日立 Web サーバへの接続には、弊社サポートサービスの契約による認証情報が必要です。

秘文連携機能

AIT ファイルを使用して、インストール済み JP1/ 秘文および秘文の詳細情報を取得したり、JP1/ 秘文および秘文のインストール可否をチェックしたりする機能です。また、JP1/ 秘文および秘文関連のログも収集できます。

ファイアウォール

インターネットと内部システムの境界に設置して、外部からの不正なアクセスが内部システムへ侵入することを防ぐものです。

複数 LAN 接続

複数の LAN で構成されたシステムに対応する JP1 の機能です。この機能を使うと、複数の LAN に接続されたホスト上で、JP1 の通信に使う LAN を設定できます。システムやほかのアプリケーションとは別に JP1 独自に通信設定できるので、多様なネットワーク構成や運用方法に柔軟に対応できます。なお、複数の LAN に接続したホストを、マルチホームホストや複数 NIC のホストと呼ぶこともあります。

JP1/NETM/DM では、次の複数 LAN 接続の環境での運用をサポートしています。

- 複数のネットワークに分かれている環境
- ネットワークが多重化されている環境

部署情報

「Asset Information Manager Limited」で、資産管理システムを利用する部門など、組織を管理するための情報です。部署情報は、「部署名」、「部署コード」、「原価コード」などを表します。

分割配布

ネットワークに負荷を掛けないためにユーザが指定したサイズで分割して転送し、かつ転送と転送の間にインターバル（転送休止時間）を置きながら配布する方法です。サイズは、セットアップ時とジョブの作成時、さらにパッケージの転送途中の中継地点でも指定できます。大容量のパッケージを配布する場合に有効です。

分掌

「Asset Information Manager Limited」で、部署の業務として、ほかの部署を管理するための情報です。分掌は部署ごとに複数設定できます。分掌をユーザに割り当てることで、そのユーザは分掌に設定された部署（分掌部署）の情報も管理できます。

分掌情報

「Asset Information Manager Limited」で、分掌に設定されている部署の情報です。

変更履歴

「Asset Information Manager Limited」で、機器のメモリサイズやディスク容量の変更を管理するための情報です。CPU、メモリ、ディスクが物理的に不当に変更されていないかどうかを確認できます。変更履歴は、「変更日付」、「ディスク容量」、「メモリサイズ」、「CPU」などを表します。

ホスト

JP1/NETM/DM での操作の対象となる、ネットワークを構成する PC または WS です。

ホスト識別子

システム内でホストを一意に識別できるキーです。ネットワーク構成に左右されないため、システム管理者がホストを管理する負担を軽減できます。ホスト識別子を利用するにはリレーショナルデータベースが必要です。

ホスト探索

指定したネットワークの範囲内に存在するホストを探索する機能です。JP1/NETM/DM 未導入ホストを検出するときに実行します。

ポリシー

システム構成情報の自動反映機能によって新規にシステム構成に追加されたホストを、自動的にあて先グループまたは ID に振り分けるために、あらかじめ設定しておく条件です。

(マ行)

マネージャ

配布管理システムを階層化しているシステムで、システムの最上位に位置する JP1/NETM/DM Manager のことです。

マルチキャストアドレス

各マルチキャストグループに固有の IP アドレスです。マルチキャスト配布の送信側と受信側のセットアップで設定します。

マルチキャストグループ

マルチキャスト配布をするとき、ジョブの配布先となる概念上のグループです。マルチキャストアドレスというグループ固有の IP アドレスを持っています。上位システムがマルチキャストグループにジョブのパケットを送信すると、そのグループに所属している各クライアントに、パケットが配信されます。

マルチキャスト配布

ジョブの配布方式の一つです。IP マルチキャストプロトコルを利用して、上位システムから特定多数のクライアントへパケットを送信します。クライアントの数に関係なく、上位システムはマルチキャストグループ 1 か所だけにジョブのパケットを送信すればよいため、通信量を削減できます。

未適用パッチ情報

クライアントに適用されていないパッチの情報です。JP1/NETM/DM では、次の情報を未適用パッチ情報として扱います。

- Microsoft Update によって提供されるセキュリティに関する更新プログラムのうち、クライアントに適用されていない更新プログラムの情報
- MBSA の mbsacli.exe コマンドを実行したスキャン結果のうち、最新のパッチが見つからなかった情報（スキャン結果で「NOT Found」と表示される情報）

(ヤ行)

ユーザインベントリ項目

ユーザインベントリ情報の入力項目です。配布管理システムで作成したユーザインベントリ項目は、ジョブを実行してクライアントに配布します。

ユーザインベントリ情報

クライアント独自の情報（氏名や PC の製造番号など）です。配布管理システムからジョブを実行して取得します。

ユニキャスト配布

ジョブの配布方式の一つです。上位システムからクライアントへ 1 対 1 でパケットを送信します。上位システムは、送信先のクライアントごとにジョブのパケットを送信する必要があるため、パケットの送信数は、クライアント数の増加に対応して増大します。

抑止履歴

クライアントで、ソフトウェアの起動、および印刷が抑止された履歴です。

(ラ行)

リモートインストール

パッケージングされたソフトウェアを、配布管理システムからクライアントシステムに転送し、インストールする機能です。

リモートインストールマネージャ

配布管理システムの GUI 部分のプログラムです。

リモートコレクト

クライアントにあるファイルを、配布管理システムに収集する機能です。配布管理システムから指示します。

リモートコントロール

配布管理システムから、クライアントを遠隔操作する機能です。

リモートコントロールエージェント

リモートコントロールで、リモートコントロールマネージャから遠隔操作される側の PC で実行させるプログラムです。

リモートコントロールマネージャ

リモートコントロールで、リモートコントロールエージェントの遠隔操作を指示する側のプログラムです。

リモートデスクトップ

このマニュアルでは、次に示す機能を「リモートデスクトップ」と呼んでいます。

- Windows 8, Windows Server 2012, Windows Server 2008, Windows Server 2003, Windows 7, Windows Vista, または Windows XP の「管理用リモート デスクトップ」または「リモート デスクトップ」
- Windows 2000 Server の「ターミナル サービス」

リレーショナルデータベース

JP1/NETM/DM Manager の情報の管理に使用するデータベースです。Embedded RDB, Microsoft SQL Server, または Oracle を使用できます。

レコーダファイル

専用のインストーラなどを使用して対話形式でソフトウェアをインストールするときの手順を記録したファイルです。JP1/NETM/DM では、一部の他社ソフトウェア用のレコーダファイルを提供しています。また、ユーザがレコーダファイルを作成することもできます。

ローカルシステムビューア

クライアントのハードウェアやソフトウェアに関する情報が参照できるウィンドウで、システム監視の状態、アラート履歴、システム情報、およびインストールされたソフトウェアが表示されます。これらの情報は、クライアントが上位システムと接続していなくても閲覧できるため、クライアントユーザによるローカルなシステム管理に利用できます。

索引

数字

- 64 ビット版 JP1/NETM/DM Client〔用語解説〕 567
- 64 ビット版 JP1/NETM/Remote Control Agent〔用語解説〕 567

A

- AIT ファイル〔用語解説〕 567
- AIT ファイルの設定 40
- AMT を利用したクライアントの制御〔機能概要〕 20
- AMT を利用したクライアントの制御〔機能詳細〕 210
- AMT を利用する場合のシステム構成 328
- AMT を利用する場合の設定〔クライアント制御〕 400
- Asset Information Manager Limited〔用語解説〕 567
- Asset Information Manager Limited のデータベース容量の見積もり 364
- Asset Information Manager Limited を使用する環境でのシステム構成 322

C

- CPU 性能 336
- CSV 形式ファイルへの出力 239
- CSV 出力ユティリティ 239

D

- DHCP 371
- dmhost.txt 412
- DNS 371

E

- Embedded RDB 319
- Embedded RDB〔用語解説〕 567
- Embedded RDB のデータベース容量の見積もり 346
- EUR と連携したインベントリ管理帳票の作成 239

G

- Groupmax Integrated Desktop の分割パッケージング機能 40
- GUI インストールモード 39

H

- hosts ファイル 372
- HP NNM からの JP1/NETM/DM 管理 260

I

- ID〔作成できるグループの種類〕 228
- ID〔ジョブの実行〕 218
- ID〔用語解説〕 567
- ID 管理中継〔用語解説〕 567
- ID ジョブ〔用語解説〕 567
- ID の自動メンテナンス 235
- InstallShield 環境削除ツール〔用語解説〕 567
- IP アドレスで JP1/NETM/DM のノードを管理する 369

J

- JP1/AJS〔用語解説〕 567
- JP1/AJS と連携したジョブの自動実行 262
- JP1/Base〔用語解説〕 568
- JP1/Base と連携した JP1/NETM/DM のユーザ管理 256
- JP1/Cm2 からの JP1/NETM/DM 管理 260
- JP1/Cm2 または HP NNM〔用語解説〕 568
- JP1/IM〔用語解説〕 568
- JP1/IM からの JP1/NETM/DM の管理 259
- JP1/NetInsight II -PortDiscovery〔用語解説〕 568
- JP1/NETM/Asset Information Manager〔用語解説〕 568
- JP1/NETM/Asset Information Manager からのソフトウェア適用管理 257
- JP1/NETM/Audit - Manager〔用語解説〕 568
- JP1/NETM/Audit - Manager からの監査ログの管理 264
- JP1/NETM/Client Security Control と連携したセキュリティ管理 258
- JP1/NETM/DM Client と JP1/NETM/DM Client - Base の機能差異 535
- JP1/NETM/DM Client のプロセス 430
- JP1/NETM/DM Manager と JP1/NETM/DM Client（中継システム）の機能差異 534
- JP1/NETM/DM Manager のプロセス 430
- JP1/NETM/DM がインストールされていないホストの検出 237
- JP1/NETM/DM システム〔用語解説〕 568
- JP1/NETM/DM システムの環境設定 367

JP1/NETM/DM システムの設計 311
 JP1/NETM/DM とは 1
 JP1/NETM/DM のインストール、セットアップで必要な設定 425
 JP1/NETM/DM の運用を開始する 277
 JP1/NETM/DM の機能 35
 JP1/NETM/DM の機能の紹介 3
 JP1/NETM/DM のシステム構成要素 23
 JP1/NETM/DM の特長 2
 [JP1/NETM/DM 保留・キャンセル] ダイアログボックス 243
 JP1/NETM/DM 未導入ホスト 237
 JP1/NETM/DM 未導入ホスト〔用語解説〕 568
 [JP1/NETM/DM ユーザ情報設定] ダイアログボックスからの通知 248
 JP1/NETM/DM をインストールする 271
 JP1/NETM/DM をセットアップする 272
 JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせない場合の構成例 333
 JP1/NETM/DM をフェールオーバーさせる場合の構成例 331
 JP1/ 秘文 CG Pro〔用語解説〕 568
 JP1/ 秘文 IC〔用語解説〕 568
 JP1/ 秘文 IF〔用語解説〕 568
 JP1/ 秘文 IS〔用語解説〕 568
 JP1/ 秘文 LogManager で取得したユーザ操作ログを管理する場合のシステム構成 326
 JP1 イベント〔用語解説〕 569
 JP1 ユーザ〔用語解説〕 569

M

Microsoft SQL Server 319
 Microsoft SQL Server〔用語解説〕 569
 Microsoft SQL Server のデータベース容量の見積もり 354

N

NAT 機能 374

O

Oracle 319
 Oracle のデータベース容量の見積もり 359

R

RD エリア〔用語解説〕 569

S

SQL〔用語解説〕 569

T

TCP/IP 環境の設定 370
 TCP/IP の確認 373

U

UNIX システムが混在する環境でのシステム構成 323
 UNIX のクライアントから取得できるシステム情報 61
 UNIX 版 JP1/NETM/DM との機能差異 537
 UNIX 版 JP1/NETM/DM との用語差異 537

V

Visual Test〔用語解説〕 569

W

Wake on LAN〔用語解説〕 569
 Wake on LAN を利用する場合の設定〔クライアント制御〕 403
 Windows 8・Windows Server 2012・Windows 7・Windows Server 2008・Windows Vista 版 JP1/NETM/DM Client〔用語解説〕 569
 Windows CE 版 JP1/NETM/DM Client〔用語解説〕 569
 Windows のクライアントから取得できるシステム情報 46
 Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の設定項目の対応 543
 Windows 版 JP1/NETM/DM と UNIX 版 JP1/NETM/DM の用語差異および機能差異 537
 WINS 371
 WSUS と連携した更新プログラムの管理〔機能概要〕 18
 WSUS と連携した更新プログラムの管理〔機能詳細〕 205
 WSUS と連携するための準備 207
 WSUS と連携する場合のシステム構成 327

あ

アーカイブ〔用語解説〕 569
 アイコン作成 40
 アクティブ・スタンバイ構成 330
 あて先グループ〔作成できるグループの種類〕 228
 あて先グループ〔ジョブの実行〕 217

あて先グループ〔用語解説〕 569
 あて先グループの自動メンテナンス 233
 あて先のグルーピング方法 229
 あて先の検索 232
 アプリケーションゲートウェイ方式〔用語解説〕 569
 アプリケーションゲートウェイ方式ファイアウォール 374
 アラート通知〔用語解説〕 569
 アラート通知の概要 253
 アンアーカイバ 144
 アンアーカイバ〔用語解説〕 570

い

一時データベース 357
 一時表領域 363
 印刷 239
 印刷の抑止 152
 インストールスクリプト〔用語解説〕 570
 インストールソフトウェア情報〔用語解説〕 570
 インストールソフトウェアリスト〔用語解説〕 570
 インストールタイミング〔用語解説〕 570
 インストールプロセスがハングアップした場合の対処 254
 インストール方法 39
 インストールモード〔用語解説〕 570
 インターネットオプション 325
 インターネットを介して使用する場合のシステム構成 325
 インデックス表領域 362
 インベントリ情報〔用語解説〕 570
 インベントリ情報の管理〔機能概要〕 8
 インベントリ情報の管理〔機能詳細〕 138
 インベントリ情報の集計 138
 インベントリ情報の出力 140
 インベントリ情報の取得 46
 インベントリ情報の取得方法 130
 インベントリ情報の表示 138
 インベントリ情報の利用方法〔機能概要〕 11
 インベントリ情報の利用方法〔詳細〕 135
 インベントリ情報を管理する場合のシステム構成要素 29
 インベントリ情報を管理する場合の注意事項 137
 インベントリビューア〔用語解説〕 570

え

英語版の JP1/NETM/DM が混在する環境でのシステム構成 324

お

オプション 39
 オフラインインストール 8
 オフラインインストール〔用語解説〕 570
 オフラインインストールの利用 391
 オフラインフォルダ〔インベントリ情報の取得〕 135
 オフラインフォルダ〔システム構成要素〕 30
 オフラインフォルダ〔用語解説〕 570
 オフラインマシン〔インベントリ情報の取得〕 134
 オフラインマシン〔システム構成要素〕 30
 オフラインマシン〔用語解説〕 570
 オフラインマシン情報〔用語解説〕 571

か

外部プログラム 40
 外部メディア操作〔用語解説〕 571
 外部メディア操作の抑止〔稼働状況の監視〕 155
 各バージョンの変更内容 551
 稼働監視ポリシー 146
 稼働監視ポリシー〔用語解説〕 571
 稼働状況を監視するための前提条件 148
 稼働情報管理の運用例 197
 稼働情報の保存日数の目安 186
 監査ログ〔用語解説〕 571
 監視対象プログラム 151
 管理者から通知されたメッセージの表示 245
 管理者権限がないと取得できないシステム情報 65
 管理情報の出力 239

き

起動時の注意事項〔クライアント制御〕 405
 機能差異 534
 基本的なシステム構成の設計 312
 基本的なシステム構成要素 23
 キャビネット〔用語解説〕 571
 キャビネットの管理 44
 業務フィルター〔用語解説〕 571
 業務目的に合わせたインベントリ情報の集計 240
 許可条件 151

く

組み込み 537
 クライアント 23
 クライアント〔用語解説〕 571
 クライアントが起動できない 254
 クライアントがマルチキャスト配布をサポートしていない場合 396
 クライアントからのインベントリ情報の通知 247

クライアント側でのリモートコレクトの実行制限 144

クライアント制御〔用語解説〕 571

クライアント制御の利用 390

クライアント制御を利用するための設定 400

クライアントでのホスト識別子の保管 408

クライアントに適用するパッチの取得 200

クライアントの管理〔機能概要〕 15

クライアントの管理〔機能詳細〕 200

クライアントの起動に時間が掛かる 254

クライアントの機能 242

クライアントのグルーピング 227

クライアントのシステム監視 207

クライアントの情報の表示 251

クライアントの接続先の自動変更 412

クライアントの動作環境について 408

クライアントのパッチ情報の検出 203

クライアントのプロセス 431

クライアントのポーリング方法 409

クライアントのマルチポーリング環境 410

クライアントのリモートコントロール〔機能概要〕 20

クライアントのリモートコントロール〔機能詳細〕 212

クライアントへのメッセージ通知〔機能概要〕 19

クライアントへのメッセージ通知〔機能詳細〕 208

クライアントユーザによるインストール 41

クライアントユーザによるインストール〔ジョブ〕 215

クライアントユーザの都合に合わせたインストール 41

クライアントを使用する場合の注意 253

クラスタシステムに対応する機能一覧 334

クラスタシステムの構成例 331

クラスタシステムへの JP1/NETM/DM の導入 330

グルーピングしたホストへのジョブ実行 217

グループ id 537

け

検索パターン〔用語解説〕 571

こ

更新されたインベントリ情報の自動通知 248

更新プログラム〔用語解説〕 571

更新プログラム管理表領域 364

構築例および運用例の種類 280

効率良く配布するための機能 5

コレクトスクリプト〔用語解説〕 571

コレクトファイル〔用語解説〕 572

さ

作業の流れ 268

削除ソフトウェア管理テーブル〔用語解説〕 572

作成できるジョブの種類 214

し

資源グループ 537

資源登録システム 537

資源登録システム〔用語解説〕 572

資産情報〔用語解説〕 572

システム監視 252

システム監視〔用語解説〕 572

[システム監視] アイコン 252

[システム監視] アイコン〔用語解説〕 572

システム監視機能 18

システム起動時インストール 39

システム構成情報 227

システム構成情報とディレクトリ情報の関係 230

システム構成情報の管理 227

システム構成情報の削除履歴の管理 236

システム構成情報の作成 227

システム構成情報の自動メンテナンス 232

システム構成情報の手動メンテナンス 232

システム構成情報の取得〔ジョブ〕 215

システム構成情報のメンテナンス 232

システム構成情報を作成する 274

システム構成についての注意事項〔クライアント制御〕 404

システム構成の自動登録時の通知 251

システム構成の設計 312

システム構成を設計する 269

システム条件 38

システム情報 9

システム情報〔用語解説〕 572

システム情報の取得 46

システム情報の取得〔ジョブ〕 215

システムの日時およびタイムゾーンの設定 320

実行結果を確認したあとの対処 225

実行されたジョブの流れ 221

自動メンテナンスポリシーファイル〔用語解説〕 572

シャットダウン時の注意事項〔クライアント制御〕 406

集計〔用語解説〕 572

集計結果からのホストのグルーピング 140

集計結果のグラフ表示 139

収集したファイルの復元 144

収集ファイル 142

取得できるインベントリ情報の種類 9

取得できるシステム情報 46

取得できるソフトウェア情報 65
 取得できるレジストリ情報 64
 上位システムアドレス格納ファイル〔用語解説〕 572
 上位システムアドレス格納ファイルの形式 417
 上位システムを名前解決できない環境に新規にクライアントを導入する場合の設定 417
 上位システムを名前解決できない場合の接続設定〔クライアント〕 416
 上位接続先情報ファイル 412
 上位接続先情報ファイル (dmhost.txt) の作成 414
 上位接続先情報ファイルの形式 414
 上位接続先情報ファイルの作成例 415
 上位接続先情報ファイルを作成する 412
 上位接続先情報ファイルを配布したあとの注意事項 416
 小規模なシステム構成の設計 316
 使用できるデータベース 318
 使用できるファイアウォール 373
 ジョブ〔用語解説〕 572
 ジョブとは 214
 ジョブのあて先をグルーピングする 275
 ジョブの管理 214
 ジョブの実行順序 224
 ジョブの実行状況の確認 225
 ジョブの実行タイミングのコントロール 243
 ジョブの実行と保存 217
 ジョブの実行によるインベントリ情報の通知 244
 ジョブの実行例 222
 ジョブの詳細設定 216
 ジョブの対象クライアント数の調整 383
 ジョブの中断と再開 386
 ジョブの中断と再開の仕組み 386
 ジョブの中断と再開の適用範囲 389
 ジョブの保留・キャンセル機能 243
 ジョブの保留とキャンセル機能を使用する 243
 指令 537

す

スケジュール 39
 スケジュール配布 384
 スタンドアロン PC からのインベントリ情報の取得〔機能概要〕 13
 スタンドアロン PC からのインベントリ情報の取得〔機能詳細〕 134
 スタンドアロン PC の稼働状況の監視 188
 スタンドアロン PC へのソフトウェアのインストール〔機能概要〕 8
 スタンドアロン PC へのソフトウェアのインストール〔機能詳細〕 42

せ

セキュリティ PC〔用語解説〕 573
 接続先が変更されるタイミング 413
 接続先の自動変更 412
 接続先の自動変更と他機能との関係 413
 接続する上位システムを自動的に設定・変更する 412
 セットアップ〔マルチキャスト配布〕 397
 セットアップ情報設定 40
 全あて先 220
 全あて先〔用語解説〕 573

そ

操作履歴〔用語解説〕 573
 操作履歴および抑止履歴の取得 168
 操作ログ〔用語解説〕 573
 [操作ログ一覧]ウィンドウ〔用語解説〕 573
 操作ログの参照・追跡調査 192
 操作ログの集計 195
 操作ログを管理するための準備 190
 ソフトウェアインベントリ辞書〔用語解説〕 573
 ソフトウェア稼働監視の制御〔ジョブ〕 216
 ソフトウェア稼働監視履歴表領域 363
 ソフトウェア稼働情報の取得〔ジョブ〕 216
 ソフトウェア検索リスト〔用語解説〕 573
 ソフトウェア条件 39
 ソフトウェア情報 9
 ソフトウェア情報〔用語解説〕 574
 ソフトウェア情報の検索方法 65
 ソフトウェア情報の取得 65
 ソフトウェア情報の取得〔ジョブ〕 215
 ソフトウェアの稼働監視の流れ 146
 ソフトウェアの稼働時間の取得 184
 ソフトウェアの稼働状況の監視〔機能概要〕 14
 ソフトウェアの稼働状況の監視〔機能詳細〕 146
 ソフトウェアの稼働状況の監視機能の概要 14
 ソフトウェアの稼働状況の参照 196
 ソフトウェアの稼働状況を管理する場合のシステム構成要素 31
 ソフトウェアの稼働情報の管理 190
 ソフトウェアの起動抑止 150
 ソフトウェアの配布〔機能概要〕 3
 ソフトウェアの配布〔機能詳細〕 36
 ソフトウェアの配布機能の概要 3
 ソフトウェアパッケージデータベースデバイス 356
 ソフトウェアを配布する場合のシステム構成要素 29

た

ターミナルサーバ〔用語解説〕 574
大規模システムでの稼働状況の監視 187
大規模なシステム構成の設計 312
代表的な構築例および運用例 279
ダイヤルアップ接続するためのネットワークの設定 421
ダイヤルアップ接続で利用できる機能 419
ダイヤルアップ接続の設定 419
ダイヤルアップ接続の設定確認 425
ダイヤルアップ接続の設定例 426
ダイヤルアップ接続をする場合の注意事項 421
他社ソフトウェア 38
他社ソフトウェアインストール時の注意事項 253
他プログラムとの連携〔機能概要〕 21
他プログラムとの連携〔機能詳細〕 256

ち

中継サーバからの結果通知保留〔ジョブ〕 216
中継サーバからのコレクトファイル収集 143
中継サーバからのコレクトファイル収集〔ジョブ〕 215
中継サーバの結果通知の保留解除〔ジョブ〕 216
中継サーバのコレクトファイル削除 144
中継サーバのコレクトファイル削除〔ジョブ〕 215
中継システム 27
中継システム〔用語解説〕 574
中継システム上のパッケージの削除 44
中継システムの動作環境について 407
中継システムのパッケージ一括削除〔ジョブ〕 215
中継システムのプロセス 430
中継システムのマルチポーリング環境 407
中継システムの利用 381
中継システムまでのパッケージ転送 41
中継システムまでのパッケージ転送〔ジョブ〕 215
中継するシステム 23
中継するシステム〔用語解説〕 574
中継するシステムが多階層の場合（下層の経路だけマルチキャスト配布） 397
中継するシステムの階層の制限 317
中継するシステムの配置の目安 316
中継するシステムを使用したシステム構成の検討 316
中継までのリモートコレクト 143
中継までのリモートコレクト〔ジョブ〕 215
中継マネージャ 26
中継マネージャ〔用語解説〕 574
重複ホスト 232
重複ホスト〔用語解説〕 574

つ

通常インストール 39
通信環境ファイルの設定 373

て

ディスク占有量 339
ディレクトリ情報 129
ディレクトリ情報〔インベントリ情報の種類〕 10
ディレクトリ情報〔作成できるグループの種類〕 228
ディレクトリ情報〔取得できるディレクトリ情報の種類〕 129
ディレクトリ情報〔ジョブの実行〕 219
ディレクトリ情報〔用語解説〕 574
ディレクトリ情報の自動メンテナンス 236
ディレクトリ情報の取得 129
ディレクトリ情報の利用方法 129
データベースデバイス 354
データベースマネージャ〔用語解説〕 574
データベース容量の見積もり 346
デバイス操作〔用語解説〕 574
デバイス操作の抑止〔稼働状況の監視〕 160
テンプレートを利用した表示・集計 139

と

同時に接続する中継システム数の調整 383
同時に接続するホストの台数の調整 382
導入から運用開始までの流れ 267
ドメイン〔用語解説〕 574
トランザクションログデバイス 356

に

任意のタイミングでジョブを実行する 244
認証サーバ〔用語解説〕 575

ね

ネットワーク環境 368
ネットワーク構成情報ファイル 238
ネットワーク構成情報ファイル〔用語解説〕 575
ネットワーク情報〔用語解説〕 575
ネットワークに負荷を掛けない運用方法 381

の

ノード識別キー 368

は

バージョン間の互換性 320

ハードウェアに関する見積もり 336
 ハードウェアについての注意事項〔クライアント制御〕 404
 ハードウェアの異常の通知 252
 配布管理システム 23
 配布管理システム〔用語解説〕 575
 配布されたソフトウェアのインストール 242
 配布できるソフトウェアの種類 37
 パケットフィルタリング方式〔用語解説〕 575
 パケットフィルタリング方式ファイアウォール 374
 パスワードロック時の注意事項 254
 バックグラウンドインストールモード 39
 パッケージ〔用語解説〕 575
 パッケージ種別 37
 パッケージ種別〔用語解説〕 575
 パッケージセットアップマネージャ〔用語解説〕 575
 パッケージセットアップマネージャからの通知 248
 パッケージのインストール 41
 パッケージのインストール〔ジョブ〕 215
 パッケージの管理 44
 パッケージの分割配布 384
 パッケージャ〔用語解説〕 575
 パッケージャユティリティ 40
 パッケージング〔用語解説〕 575
 パッケージング時に設定できるインストール条件 38
 パッチ 16
 パッチ情報ファイル 16
 パッチ情報ファイル〔用語解説〕 575
 パッチの適用状況の管理 16

ひ

日立 Web サーバ〔用語解説〕 575
 日立プログラムプロダクト 37
 秘文連携機能〔用語解説〕 576
 秘文連携機能を使用した JP1/ 秘文および秘文の管理 262
 表示されるメッセージの確認 245

ふ

ファイアウォール〔用語解説〕 576
 ファイアウォール環境での JP1/NETM/DM の運用 373
 ファイアウォールの通過方向 433
 ファイアウォールを使用した場合の注意事項 378
 ファイル属性 39
 ファイル転送の再開〔ジョブ〕 216
 「ファイル転送の再開」ジョブ 386
 ファイル転送の中断〔ジョブ〕 216
 「ファイル転送の中断」ジョブ 386

ファイルの収集〔機能概要〕 13
 ファイルの収集〔機能詳細〕 142
 ファイルの収集機能の概要 13
 フォルダ 217
 複数 LAN 接続〔用語解説〕 576
 複数 LAN 接続環境での JP1/NETM/DM の運用 378
 複数パッケージを計画的に実行する方法 224
 部署情報〔用語解説〕 576
 不正操作の通知〔稼働状況の監視〕 165
 プロセス一覧 430
 分割配布〔用語解説〕 576
 分割配布の場合の注意事項 254
 分掌〔用語解説〕 576
 分掌情報〔用語解説〕 576

へ

変更履歴〔用語解説〕 576

ほ

ポート番号 (services) の定義 372
 ポート番号一覧 433
 ポート番号の推奨値 372
 ホスト〔用語解説〕 576
 ホスト識別子 368
 ホスト識別子〔用語解説〕 576
 ホスト識別子が上位システムへ自動登録される契機 370
 ホスト識別子の自動登録 370
 ホスト識別子の登録方法 369
 ホスト識別子を使用する場合の注意事項 370
 ホスト識別子を使用するメリット 369
 ホスト識別子を使ったネットワーク管理 369
 ホスト探索 237
 ホスト探索〔用語解説〕 576
 ホスト名で JP1/NETM/DM のノードを管理する 369
 ホスト名と IP アドレスの定義 371
 ホスト名の管理 368
 ホストを識別する運用キーの決定 368
 ホットスタンバイ 411
 ポリシー 233
 ポリシー〔用語解説〕 576
 ポリシーの一括反映 234

ま

マネージャ 26
 マネージャ〔用語解説〕 577
 マネージャからのジョブの実行 315
 マルチキャストアドレス 392

マルチキャストアドレス〔用語解説〕 577
 マルチキャストグループ 392
 マルチキャストグループ〔用語解説〕 577
 マルチキャスト配布〔機能概要〕 385
 マルチキャスト配布〔設定方法〕 392
 マルチキャスト配布〔用語解説〕 577
 マルチキャスト配布が適用される経路 393
 マルチキャスト配布に必要なネットワーク環境と
 JP1/NETM/DM のバージョン 393
 マルチキャスト配布の実行方法 397
 マルチキャスト配布の対象となるジョブ 392
 マルチキャスト配布の標準的なシステム構成 394
 マルチキャスト配布をサポートしていないバージョン
 が混在したシステム構成 395
 マルチキャスト配布を指定したジョブの作成 398
 マルチキャスト配布をするためのシステム構成 393
 マルチキャスト配布をするための設定 392
 マルチキャスト配布をする場合の注意事項 398
 マルチポーリング 410
 マルチポーリング環境での注意事項〔クライアント〕
 411
 マルチポーリング環境での注意事項〔中継システム〕
 407
 マルチポーリング環境でのポーリング方法の選択 411
 マルチポーリング環境の設定〔クライアント〕 410
 マルチポーリング環境の設定〔中継システム〕 407
 マルチホスト 411

み

未適用パッチ情報〔用語解説〕 577

め

メッセージの通知〔ジョブ〕 216
 メッセージの表示に関する注意事項 247
 メモリ所要量 336

ゆ

ユーザインベントリ項目〔用語解説〕 577
 ユーザインベントリ情報 10
 ユーザインベントリ情報〔用語解説〕 577
 ユーザインベントリ情報の取得 127
 ユーザインベントリ情報の取得〔ジョブ〕 215
 ユーザインベントリ情報の転送〔ジョブ〕 215
 ユーザ表領域 359
 ユーザプログラム、データ 38
 ユニキャスト配布 392
 ユニキャスト配布〔用語解説〕 577
 ユニキャスト配布とマルチキャスト配布 392

ユニキャスト配布とマルチキャスト配布の概念 392

よ

用語解説 567
 容量の少ない PC でクライアントを使用する場合 416
 抑止対象となるデバイス 160
 抑止できる操作 160
 抑止履歴〔用語解説〕 577

り

リモートインストール 36
 リモートインストール〔用語解説〕 577
 リモートインストール時の中継システムの動作 382
 リモートインストールの作業の流れ 36
 リモートインストールマネージャ〔用語解説〕 577
 リモートインストールを実行するジョブ種別 41
 リモートコレクト〔機能概要〕 13
 リモートコレクト〔機能詳細〕 142
 リモートコレクト〔ジョブ〕 143, 215
 リモートコレクト〔用語解説〕 578
 リモートコレクトの作業の流れ 142
 リモートコレクトを実行するジョブ種別 142
 リモートコントロール 20
 リモートコントロール〔用語解説〕 578
 リモートコントロールエージェント 32
 リモートコントロールエージェント〔用語解説〕 578
 リモートコントロール機能を使用する場合のシステム
 構成要素 32
 リモートコントロールの動作環境 32
 リモートコントロールマネージャ 32
 リモートコントロールマネージャ〔用語解説〕 578
 リモートコントロールマネージャの起動方法 212
 リモートコントロールマネージャの機能 213
 リモートデスクトップ〔用語解説〕 578
 リレーショナルデータベース〔用語解説〕 578
 リレーショナルデータベースに必要なプログラム
 319
 リレーショナルデータベースを設定する 273

れ

レコーダファイル〔用語解説〕 578
 レコーダファイル設定 40
 レジストリ取得項目の転送〔ジョブ〕 215

ろ

ローカルシステムビューア〔用語解説〕 578
 ロールバック表領域 362